

住職のつぶやき 虹の彼方に



夢

夢と言えば、ヨーロッパでは、フロイトやユングを思い出します。日本では、余り知られていませんが、今から830年ほど前に生まれ、60歳で没した、京都高山寺の明恵房高弁上人に、師こそ、ご自身の見た夢を克明に記した人であり、『夢記』という著述があります。

時代によって持つ意味は変わるものの、《夢》も大きく意味合いが変わった言葉です。

古来より、禅宗では、人が亡くなると、床の間や枕もとに、「夢」という字を掲げたものでした。

人生の軌跡を夢として把握したのです。人の生そのものが、《夢》であったなら、生そのものの《事実》は何処にあるのだろうか？

輝いている時

夢中（ゆめのなか）

芝浜

江戸っ子

亀住町（平成14年7月1日）

モンセ・ワトキンス～夢のゆくえ～（平成14年1月3日）

新牌開眼

英霊（平成17年5月23日）

目覚め

よわい「齡」

また始めたらよい

三大聖樹（平成19年4月17日）

滅度（平成19年9月18日）

安住の地（平成20年11月15日）

心眼（平成22年3月1日）

輝いている時

平成12年5月15日、それはK子さん（無情への帰依ーK子さん）の亡くなった日です。そして平成13年5月15日、K子さんの本が、ご主人と多くの方々の協力によって出来上がりました。

その真新しい本の表紙には、『皆さんお元気ですか』とK子さんの字で題名が記され、K子さんが出した葉書の絵が乗せられています。大きくK子さんの左手で、一生懸命何かを掴んでいる淡彩の日本画です。右手で筆を使いながら、葉書一杯に描いたものです。そして言葉が添えられています。

『つかまえていないとにげだす自分。』

京都大徳寺の塔中寺院で、高校生の小僧生活をする一人息子に送ったものだと思います。受け取った息子さんは、きっと、捕まえる自分と、捕まえられる自分に、母の鋭い問いかけが、十分に伝わったと思いますし、胸に迫るものがあります。”しっかり修行をするのですよ”の絵手紙でした。

ページをめくって、何て素直な表現なのだろうと感心する絵手紙が沢山あります。

例えば、可愛らしい立ち姿の仏様が描かれ、

『仏のそばにしながら信仰が今だわからぬ自分。なんと罪深いことか』と、添え書きがありました。そして、その次のページには、

『仏が背をさすってくれるのでもなし、乾いた喉をいやしてくれるのでもなし。今、私に、そっと肩をおしてくれる麻由良が仏なり。どうぞ、おたっしゃで』と、娘が母親の肩を揉む絵手紙。説明したらしかられ、K子さんに、「余計なこと言わなさんな！」と怒られそうです。罪深く思う仏と、仏が仏の肩を揉みほぐす光景の絵手紙。

『なんも悪いことしてへんのに、なんでうちばかりこんなめに合うのやら、神仏などこの世にいるものかと思う。しかしここ一番とゆう時、心の奥底からこぼれるように「あなた（神仏）様の御心のままに」とさげんでいる自分に気づかされます。自分でもどうしようも出来ないならせめて我が身を神仏にゆだねるしかないのですから、おばあちゃん、がんばって下さい。』

二人の汚れない合掌童子の廻りに、薄墨で書かれた文章です。K子さんの大きく影響を受けた、病床のお祖母ちゃんに宛てた絵手紙に、K子さんの素朴で、屈託のない心を思います。

全部を紹介できませんが、京都にいる息子に、K子さんはこんな絵手紙を出しています。

『アンタが元気であることが、お母さんの力です。暑いですが体に気をつけて下さい。和尚様に合掌』

七夕の笹に、母の思いを沢山ぶら下げた絵手紙に、息子はどう受け取ったのだろうか。母親の全身全霊を傾けてぶつける言葉を強く感じます。こういう言葉が発せられる母の心は、何のとらわ

れもなく、カラッとして何もない大きな心そのものを思います。母親の子どもへの心とは、美しさそのものだと気がつきます。

お母さんにとって、一人一人の家族が元気であることが、お母さんの力なのですが、家族一人一人にとっても、母親が元気であることが、家族一人一人の力なのでしょう。

今、お母さんが居なくなって一年が経ちました。

どの家族にとっても大切な人が失われた時、それを現実的に補うということは出来ません。だからこそ、体に風が吹き抜け、心が空っぽになり、虚しく、癒されないのです。

私の母が亡くなったのは、昨年それは平成12年12月13日でした。

少しずつ母の残した書き物やメモを整理しなければと思ったのが翌年の3月、実際には4月、先ず日記のみ整理してみました。

その赤裸々な日記を発見し、母の亡くしたものの大きさと苦悶に、情けなくも初めて気がつき、心配りがたりなかったことを悔い、取り返すことの出来ない時間を作ってしまったことを知りました。

父の納骨が終わって、母は、『主人もとうとうつめたいお墓の中に入ってしまった。もうお終いです。』と記します。

この言葉は、12月31日の日記に書かれた、

『とうとう最後の日がきてしまった。明日から新年。私の心の中はあまり感激は無い。お父さんが居てくれたら。去年の今日は、どの様にしていたのか全然思ひだせない。この記念すべき年よ、さようなら。だんだんお父さんと離れて行く。』の内容にいたって、大切なものを亡くした母の心の辛さ、悲しみ、痛みを、更に理解させてくれました。

母は、遠くに逝ってしまった父を思い、慕い、途方にくれながらも必死に自分の道を模索し、立ち直ろうともがくのですが、父が居ないことに必死に耐えている。自分に耐えられないことも含めて、父がどんどん遠ざかることにも耐えられずに、耐えています。

少しでも側にいたい、元に戻りたい、8月12日以前にいたい、その年の内にいたいと。

そして、少しずつではありますが、自分のために、時間を使うことを覚え、歩き出しもします。

11月21日の日記は、そのことの証明でもあります。

『百箇日も過ぎました。私の心の中では未だ思ひが切れません。どうして貴男だけが居ないのかしら、私の住む世界とは異なった土地へ行ってしまいました。今日は指の注射です。とても痛いんです。自分の為にこの手をなおします。』

この章を読んでいて、母に告げたいことがありました。それは、父のことを遠くに行ってしまった嘆く母に、「実際にどんどん遠くに行ってしまうのはアナタなのです。」と。もちろん解っていることなのですが、発言することによって、その時間を互いに共有することが出来たならなど、遅ればせながら気が付いた、馬鹿息子でもありました。

父は8月12日に戻れば、ベッドの上で点滴を受けているはずですが。時が刻まれるということが、生きていくということです。そのことが遠ざかるのです。今そこに居たのにそこから時間

距離が遠ざかってしまいます。地球の自転を止めることも出来ないし、宇宙の渦をかき混ぜることも出来ない人間の宿命でもあります。そのこと故に、その一刻一刻に時の焦点が当たっていて、輝いているということでもあると思うのです。

人にとって、一番見えないものは、自分が時を刻んで、動いているということなのでしょう。そのことを、母は次の言葉で日記に残していました。

『何ともなく暮らしていた日が輝いて居たとは知りませんでした。三原山の爆発のニュースで、昨日から大変です。今日も一日、どうにか過ごしてゆかねばなりません。みんな夢です。夢の中の出来事です。』

母の残した言葉で、11月23日に記した、心に残る言葉です。

現実には、貴男がどんなことになっても、元気であることが、私の力ですと言う時、その時の重みは、較べるものもなく輝いています。ただ普段問題なのは、私達は気が付いていないと言うことなのでしょう。

私は、亡くなった母の言葉を読み、K子さんの絵手紙を見て、人間の純粹性を知ります。それは、とても美しいことであると同時に、人が輝いている時なのだと思います。残念なことに、その時、本人は気づいていないのでしょうか。

残された文章を読み、亡くなった人は嘘は付かないと、妙に感服している私だったのです。

夢中（ゆめのなか）

長く住職の務めをしていると、様々な事件に出くわします。

35歳という年齢の彼の、ある秋が終ろうとして、ちょうど冷たい木枯らしが吹いた夜の出来事でした。彼は、オートバイが大好きで、今日も9時に彼が勤める上野のオート売店のシャッターを閉め、いつもの通り京葉道路に出て江戸川の自宅に、オートバイで向う途中のことだったのです。家に着く300メートル手前の、京葉道路の交差点を渡った所に、白いワンボックスカーが停車していたのです。その車に彼が気付いたかどうかは知る由がないのですが、少なくとも、午後11時過ぎ、彼はその白いワンボックスカーの後部に、ブレーキもかけずに突っ込んだのでした。

上野からだ、普通の道路だと30分もあれば帰って来れる時間ですが、1時間30分の空白があるのですが、後で付き合っていた恋人に、その時間のことを聞いたのですが、その穴は埋められません。いずれ解かることがあるかもしれませんが、彼の命の時間が止まったことを、解決することはできません。

しかし、遺族にとっては、妙に引っかかることでもあります。遺族にとっては、朝、彼が出勤する「行ってきます」の言葉が、残響のように、耳に木霊（こだま）して、棺の中に眠る彼が、今すぐにでも「ただいま」と言って、起き上がるのではないかと、思ってしまうのです。それはすぐ側に居る予感のような、空間が歪んで、彼がそこに座っていたりと、一瞬先の現実を想像し、期待して、ただ棺を見つめては、起こりえない期待する現実を、待っているかのようでした。線香の火を灯すことは、待つことの意味があり、荼毘にされるまで、何本も何本も、一日中、遺族である、彼の弟と母は、線香をとぼしました。

衝突の後、彼は救急車でB都立病院に運ばれました。彼の死亡時間は0時過ぎでした。彼が亡くなったという私への訃報は、都立病院のBの治療室で、検死が終って翌日の午前9時に、弟から電話の一報で知らされました。弟と老いた母が、目を真っ赤にして、呆然と立ち尽くす姿を想像いたしました。

「どうしたの」と、まず驚き、事故か突然の病気かと、咄嗟に判断いたしました。確か彼は、年齢も若かったはずだと、次から次に、記憶が蘇って、繋ぎ合わせて、第一報の弟さんの「母と二人になってしまいました」の言葉が、妙に響いていました。弟のすぐ近くに、息をしない冷たくなった兄がいるのではないかと、「今、まだ三人でいるでしょう」と、それを、「二人」と言わせる事実の大きさに、言葉が出ませんでした。そして、二人と言わせる、受け入れの早さに、そんなものかと推し測りながらも、いや、その前の段階が省いてあると気がついたのでした。

第一報の電話の向こうの母親の顔が眼に浮かび、いたたまれない思いが伝わってくるようでした

。私には、どうしても兄の若さきり記憶に無く、亡くなるということが、事実として伝わってこないのです。人は、年老いて亡くなることだけではないと理解していても、現実には、年齢の若さを維持して亡くなることには、抵抗があります。まして、母親、兄弟、知人、恋人にとっては、言い尽くせることでないことは、百も承知のことです。出切ることなら、その場に居ることを遠慮したいものです。他人とはいえ、僧侶として側に居なければならない重圧は、責務の辛さであり、それが私の立場なのです。いつも悲しい場面に居なければならない、立ち会わなければならない立場こそ、僧侶として在るための現代の条件だと思います。

その立場を、自分から、現実のものにするために、そして遺族と共に歩くために、枕経にうかがうことは必要なことであり、翌日、兄と対面いたしました。兄の、傷つき、痛ましい顔に接して、手を合わせ読経し、夢でないことを知りました。そして、家族には、夢であることを願いました。

事実が記憶に刻まれ、過去の事実として、思い出になります。しかし、未だ現実の事実でなくても、記憶に刻まれることがあります。記憶に刻まれたという事実は変わらぬもの、現実の事実かどうかは、過去の思い出ということだけでは、わからないのです。

邯鄲之夢（かんたんの）、そして邯鄲之枕という故事が中国にあります。

盧生という青年が、邯鄲の旅館で、道士の枕を借りて寝ているうちに、栄枯盛衰の50年の夢をみたが、目が覚めてみると、それは、粟飯がまだ炊きあがらないほどの短い時間であった故事であり、人間の盛衰の儚さにたとえる。一炊の夢ともいいます。『唐、沈既濟、枕中記』

そして、芭蕉葉之夢という故事も、中国のものでした。

昔、焚き木取りが捕らえた鹿に芭蕉の葉をかけて隠しておいたところ、その場所を忘れ、人に持ち帰られてしまった。そこで焚き木取りは鹿を捕らえたのは夢だったと思って家に帰るが、その夜、隠した場所やその鹿を持ち帰った人の夢を見て、その人を探し出し、鹿の所有をめぐる争った、という寓話から出た語で、人生の得失が夢のように儚い喩え。『列子、周穆王』

（大修館書店の大漢語林より）

あくまでこれは物語です。邯鄲之夢の場合、盧生は郷里から、都の官吏登用試験を目指して旅をしていました。その度の途中の、とある旅籠でのことでした。彼は、居合わせた道士の枕を借りたのです。すると、ぐっすり寝込んでしまいました。身体は寝込んでいるものの、彼の旅は先に進みます。その先の彼の栄枯盛衰、挫折と成功、喜びと怒り、人の50年間にありとあらゆる体験したのです。夢から覚めた盧生は、自己の栄誉や栄華を極めたり、その時代の若者の目指す文化を経験し、彼は、もと来た道を辿り始めるのです。この夢と現実が織り成す事実は、夢の続きで、自分の目標の否定と修正が、行われたことは間違いがありません。

更に、芭蕉葉之夢の場合は、普通に言われることは、事実の忘却ということでした。焚き木取り

にとっては、事実が事実として成り立っていない以上、この事実はなかったことではないでしょうか。そうすると、夢で見たことは、事実の裏づけではなく、夢の中の体験こそ、事実の体験として、目覚めて、確認した時、過去の事実が、今の事実と結びついて、今、感慨を生ずることができるのではないのでしょうか。

あくまで物語なのですが、こう較べてみると、単なる物語ではすまないことを含んでいます。人生の夢を、事実として下すことも、現実の人生を夢と下すことも、時には必要なことであると思うのです。

そして、その通りに、夢だ事実だと下したとしても、そこから現在が始まるのも事実です。夢が夢でなくなり、現実が夢であることも、同じ事実のような気がいたします。

さて、兄に枕経を献じた、私は、悲しみに交わる前に、怒りました。怒る相手は兄であり、親不孝そのものを行じた兄の行為です。人が生きているという事は、ほんの少しの時間の接点の危うさであることは、こういったことがあるということが、その証明です。気付かないことですが、現実にはそれだけが絶対といえる事実と違いないことも確かなことです。絶対の事実を共有することが出来ないという事実が、死であり、悲しみであり、悔しさであり、儚さであり、私たちの表現であり、遺族ということの証明なのだと思います。

それは、例えば、母にとっては、子供を亡くすという、自らの根拠を失うことであり、積み上げてきた過去の蓄積が崩れ、未来が喪失することだと思います。

昔の人は、このことを指して、一言、《夢》と言ったのではないのでしょうか。事実でなければ、痛みは現実のものではないみたいに。

いつも葬儀は、私にとって、突然に居なくなる人の旅立ちへの、最後の手伝いです。そして私の、戸惑いでもあります。何故なら、いつも、予期しないことで、一つとして同じ内容はないからです。

その予期しないことに遭遇して、真剣に考えてこそ、死者とより出会うことができ、私たちとの、今の事実を確認できることが大切なことです。現実には、今の事実以外は、目に見えぬものですが、そこに、夢や思い出、希望や願いを見ることが出来たら、メッセージが伝えられると思うのです。

兄にとって、この事件は、「いずれは来るもの」とも考えたことがなかったことです。兄は、ただひたすらに、兄にとっては心地よいオートバイのエンジン音に包まれ、エンジンの振動に揺られて、アスファルト道路の上を、ひたすら走りつづけて、多分、今も走りつづけているはずなのです。それが夢とは知らずに。

葬儀とは、走る兄にブレーキをかけ、無理やりサドルから降ろして、葬儀に参列した遺族や仲間、挨拶し、手を振って去って行くために、用意したステージでもあります。

そうしないと、兄の愛する、母や弟が、立ち止まって考え、別れることが出来ないではありません

せんか。

どんな登場の仕方が分からない、確実に訪れるであろう死。思い出さない限りは、どんな人でも、日常生活の中に埋没し、折込済みと表現されるものであると、葬儀において、説得しなければならぬのだと思います。それを、『したたかさ』と言い、『一途な生の中に』とも現します。それは今を生きている、豊かに潤いのある姿でもあります。

10年、20年…経って、母や弟がこの事件を思い出して、すべてが夢であったと回想したとき、痛みが消えるときなのかもしれない。それには、兄より、多くの恵みがもたらされ、兄が残された家族を守っていることを、知ることはもちろんのことです。

芝浜

魚屋の熊五郎が、昨夜もふんだんに酒を飲み、翌朝早く、女房に起こされて、夜明け前に天秤棒を肩に、出かけて行った。女房は、亭主が出かけた後、片づけものをしていたが、なかなか夜は明けない。

そこに、熊さん、あわてて、草鞋を脱ぐのも忘れて、帰ってくるやいなや、

「ばかに、早く起こしやがって、後から誰かつけてきやしないか、早く戸締まりをしないか！」と、女房に。

女房は、「お前さんが、明日からお酒を断つっていうから、あたしも遅くならないようにと、つい、早く起こしまして、すまなかったねー」

熊五郎は女房に、財布を拾ったことを話した。

長屋を出た熊五郎は、問屋もまだ開いてはいないし、そこで、浜にでて、夜が明けるのを待とうとするが、眠くてしょうがない。浜に出て、顔を洗って、戻ろうとすると、足に引っかかるものがある。見ると、皮の財布ではないか。ずっしりと重いので、「これは天から授かったものにちがいない」と、懐に入れ、仕入れもしないで、すっとなで帰ってきた」のだと。

女房は、財布の中身を数えると、50両の大金に、「これは、拾ったもんなんだね」と、「いったい、このお金をどうしようっていうつもりだい」と、亭主に問いただした。

「どうもこうもあったもんじゃねえやい。おめえにも、長いこと世話をかけた。これからは贅沢をして、楽にしてあげるぜ。友達を呼んで、一杯やろうって！」

すると、女房は「お前さん、この財布は、私が預かるよ。あんたは、疲れてるだろうから、いいからひと眠りおし」と、寝かせてしまった。

朝が、早かったものだから、熊さんはぐっすりと寝込んでしまい、女房にゆり起こされた。

「お前さん！夜が明けたよ」と、熊さんは「あーっ、よく寝たもんだ。湯に行つて来るから、手ぬぐいを貸してくんな」。女房は、「あいよー」っと、湯屋に送り出した。

熊さんは、湯からでると、あっちこっち立ち回り、酒の肴をかって来ると、「今、けえったよ」。

女房は、買い出しの支度をして、「さあ、行ってらっしゃい」と、送りだそうとしたが、熊さん。

「冗談じゃない。今日は、とんでもない日だ。こんな日は、友達を呼んで、一杯やろうに決まっているもんだ」と、そこに、友達がやってきて、「さあ、上がってくんねい」。車座になって、皆で、飲むは飲むは、空瓶が転がり、友達は酔っぱらって帰り、熊さんも横になって、高いびきとなってしまった。ようやく宵闇が迫って、熊さんは起きだして、女房に、更に酒をねだろうと

するのです。

女房は、「お前さんに、聞きたいことがあるんだよ」と、今日の出来事の説明を求めたのでした。

風呂から出て、酒の肴を買い、友達を呼んで、お祝い事と称して、よくも飲んで食べたりしたもんだよと、そのお代はどこから出るんだいと、畳みかけるのでした。熊五郎だって、芝浜で拾ってきた、50両という大金の入った財布を、お前に預けたじゃないかと、何を寝ぼけたこと言っ

てんない。承知しねえぞと、威張りきる。
「何を寝ぼけたこと、言ってんじゃないよ。お前さん、頭は大丈夫かい？冗談言っちゃいけないよ。お前さんから預かったものなんかありゃしないよ」と、女房。

「この唐変木のコンコンチキめ。冗談じゃねえや」と言う熊五郎に畳みかけるように、女房は、「やだねー。何を言っているやら。夢じゃないのかねえ」。

熊五郎は、女房に、そう言われると、言い返すことが出来なく、すっかりしょぼくれ、ほとほと自分に愛想をつかして、「今日の始末だけは何とかしてくれ。すまねえ。すまねえ。この上は、生涯酒を断つ。とんでもねえことをしたもんだ。明日からは、酒を断って、一生懸命かせぐから、勘弁してくれ。すまなかった」と。

女房は、しおれる熊五郎に「いいんだよ。いいんだよ。わかってくれれば。そうしてくれるなら、わたしや、どんなに嬉しいか。お前さんが好きなお酒を生涯断つのは、私も辛い。そのかわり3年、我慢しておくれ。そうしたら、どうにかなると思うから。ありがとうね。お前さん」と、それからは、早寝早起きで、必死になって働きました。そうすると、安くて、生きが良くて、うまいとなれば、評判が上がり、益々商いの方も繁盛し、夫婦仲もよくと、あっと言う間に3年がたった大晦日。

この頃の大晦日は、掛け売りの集金やら、一年の締めですから、それに、翌日は元日と、餅が届き、門松は立って、晴れ着を用意して、その晩は、家族水入らずで、一杯やりながら年越しそばを食べ、一年の無事を感謝し、明くる年の無事を願うと、そこに除夜の鐘でも鳴ってみれば、言うことがないでしょう。熊さん一家もご多分に漏れず、熊さんが外回りをしている間に、畳替えをして、障子を張り替え、大晦日を迎えたのでした。

女房、「お前さんが、よく働いてくれるものだから、借金取りも、今年は来ないし、家も小綺麗にすることが出来るし、これも皆お前さんのお陰だよ。あたしゃどんなに嬉しいか。感謝してるよ、お前さん。今夜、お前さんが一生懸命働いた他に、あたしも、貯めたお金があるのさ。数えてみようかい」と、熊五郎の前に、竹筒に入った、2分金をぶちまけると、熊五郎は「こいつは驚いた。お前が稼いだのかね」と。

女房は、「お前さん、忘れちゃったのかい。3年前に、お前さんが芝浜で拾ったお金だよ！」

熊五郎、「ちきしょう。そうだったのかい。やっぱり。こいつあ、夢じゃねえだろうね」

女房は、3年前のことを話しはじめた。お金を見たとき、嬉しかったこと。しかし、熊五郎を心配してみると、ただ飲んで食って働かないで、お金を拾ったことが知れたら、お上からどんな

仕打ちがあるかと考えたこと。酔った熊五郎を寝かせて、大家さんに相談したら、拾ったものを使ってしまうのは良くないと言われ、お上に届けて、この話は無かったことに、いっそ夢にしまったこと。そうしたら、この間のことだけれど、お前さんが留守の時、お上から呼び出しがあって、このお金は落とし主がないからと、下げ渡されたこと。しかし、すぐにお前さんにこのことを話したら、また元に戻ってしまうんじゃないかと、今日まで黙っていたんだと。

「すまなかったね。今夜という今夜は、あたしゃ嬉しかったよ。お前さんは、本当にまっとうな人間になったんだね。今まで、夢に騙していたこと、どうか堪忍しておくれ。このお金は、お上から頂いたもんだ、もう一晩で使おうが、誰に何言われるものではない、どうか、受け取っておくれ」と、涙ながらに話す女房。

「うーん。そうかえ。そうだったのかえ。お前が言うとおりの、あん時、このお金があったら、俺のことだ、ぱっぱと使っちゃっただろう。そうしたら、お上に知れて、俺はどうなったやら。ああ、ありがてえ。お前に、夢にされたお陰で、俺は稼ぐ気になった。世の中に、かかあほど有り難いものはねえなあ。かかあ大明神……」と、熊五郎。

女房は、今日が約束の3年目であり、改めて、酒をすすめた。

熊五郎「そうかい。あんまりいい心持ちなんで、それじゃ一杯やろうかえ」

女房「そうしてくれるかえ。一本つけようかね」

女房が、台所に立とうとすると、熊五郎。

「ちょっと、待ちねえ。酒はやめとこう」

女房「なんだい。お前さん、どうしてだね」

熊五郎「うーん。ここで酒を飲んだら、また夢になるといけねえ」

この年の始めに、現三木助の自殺の知らせが飛び込んできた。今の三木助の落語は聞いたことはないが、父、桂三木助の落語は、好きな落語家の一人だ。特に”芝浜”は、好きで、テープを何度も聞いた。

三木助の語り方が、人情の機微を巧みに表現する様は、絶品といって良い。もちろん、三木助の語りの他ではあるが、何故この話に興味を引かれるかという点、この話の、夢というテーマである。ふとしたことから、なんとたくましい庶民の知恵ではないかと、そして、考えれば、この過去と未来と現在と、存在というテーマを扱っているのではないかと、発見し驚いたのです。

この世は、夢と現実の織りなす葛藤に似ている。特に、過去の事実を、現在において夢とする設定は、未来を開くすべとなつて、この芝浜は成り立っている。夢としなければ、現実が成り立たないと決断することは、斬新に見えて、古い。戦国武将の辞世の句は、過去の事実を夢と見て、絶対の今を現出させるのです。

この発想は仏教の生き方であり、前後裁断、前三三後三三と、時を止める禅語に共通するのです。

過去の事実を夢と見るということは、今の現実を生きる知恵であり、記憶やしがらみを両断して

、今をよりよく生きさせる。

そう言えば、我々の祖先は、人が死ぬと、枕元に《夢》という字を飾ったものだ。今、我々が語る《夢》は、希望や願望であり、未だ手にすることが出来ないものであり、夢とは、かなわないこと、「夢のようなことを言わないの」と、現実離れしたものの代名詞でもあるのです。そのくせ、世間には《夢》が反乱し、人口の一人一人に多くの《夢》があるのだから、この国には、かなわないものがあふれていることになる。それも、潤いであることは確かなことであると思うが、もう一つ、事実を夢と見ることによって、現実をありのままに見ることも、時に必要なことだと思います。

芝浜の魅力は、自己の過去を断ち切り、今を、強く生きる知恵であることを、若き三木助師匠に捧げます。

江戸っ子

深川というところは、同じ江戸でも神田、日本橋、浜町、八丁堀とは違って、隅田川を越さなければならなかったせいか、ちょっと違う。何故かしら、大川（隅田川）を越えることに、コンプレックスというか、誇り・プライドみたいなものがあるのだ。ここで生まれたわけではない私にさえ、30年以上暮らすとあるのは、不思議だ。

だから、そのぶん、深川に対する思いこみは強いことは人一倍確かだ。深川に暮らす人だったら、この郷土に生きているという実感は強いと思うのは、私だけだろうか。とにかく、この川（大川）が江戸っ子を強烈に意識させるといったら、「ずいぶんと古くさいねえーえ」と、言われるかもしれないのを承知で書いていることでもある。つまりは、同じ江戸っ子でも、この川を挟んで、中央区側と深川では違うのだ。

池波正太郎も、無頼漢が巣くう地と書くし、辰巳芸者も足袋は履いていないやら、調べればたくさん出てくるに違いないが、手っ取り早く、富岡八幡宮の大祭に表れる。

この祭りの御輿の担ぎかたは、「ワッショイ、コラサ」と、徹底して御輿を運ぶ。この”運ぶこと”が、浅草、神田の「ソイヤ、セイヤ」の担ぎ方の違いになって表れる。浅草、神田は、天を突き担ぐ。だから一向に前に進まない。深川の御輿も天を突くことはあるが、『天を差す』と言い、永代橋、清洲橋の渡御にこの担ぎ方をするのだが、この時は、御輿を差しながら走る。

永代橋崩落の事件のせいか知らないが、橋の前後は、御輿をもみながら、差したと思ったら、一気に橋を駆け抜けてゆくから、いさぎよい。もっとも、いさぎよいと深川っ子は真にそう思うが、他から見ればそんなことはないかもしれない。これも、思い入れの馬鹿な表現なのだ。橋の床下は、大川が結構早く流れて、神輿を突き上げる手は天を指し仰ぎ、脚は川を指すといったら、考え過ぎじゃないのと笑われるかもしれない。永代橋が縦に揺れて、担ぎ手に伝わってくるのも、小気味がいいものだ。

戦後すぐの祭りの写真を見ていたら、けっこう裸の担ぎ手が見えたので、羨ましく思えた。それは、今は言わないが、「昔、深川の祭りは、裸祭り」と、言われていたからだ。

ご存じの通り、半纏も揃えられなかった貧しい深川っ子達への配慮なのだ。そのくせ御大尽たちは、縮緬の半纏を作ったという。貧しい漁師などの子供達は、みんな裸でこの祭りに、参加を許されたからだ。

川向こうの祭りの今は、半纏の粋を競うところがあるが、深川は町内半纏以外は許されない。その柄も、神田、浅草は柄を競うが、深川は町会の大紋がものを言う。

私が住む深川二丁目北町会も、『深二北』の大紋で、祭りに参加する。四〇〇世帯ちょっとの世帯で、この五日か三日の祭りに、一千万円の寄付を集めて、あっという間に使ってしまう。四〇〇人からの担ぎ手を集めて、たった一日の連合渡御のためである。

各町の五〇基の御輿の連合の熱気は、明け方から日が暮れても盛んだ。

江戸っ子というと、すぐ『宵越しの銭は持たない』という言葉が浮かんできますが、深川の祭りもそんな良き伝統を持っているのです。

さらに、町会に関わりをもって見渡せば、三代にわたっての深川っ子というのは、ごく少ないことに気がつきます。雑多な人間の移動、交差によって成り立っているのでしょう。

参考に、平川秀雄氏の『巷談永代』をお読み下さい。

さて、禅で語る言葉に、『坐って半畳、寝て一畳』があります。禅堂で暮らす禅僧の生活は、今でも坐って半畳、寝て一畳の生活をしています。ただ少しの贅沢は、後ろに障子一枚の灯りに、書き物が出来る程度の棚が付きます。そして前には、その畳の縁には太い敷居があります。禅堂の床の瓦敷からまたいで畳の上の座布団に着座いたしますが、その縁は、単縁（たんぶち）といい、黒々と磨かれています。けっして素足で触れることはいたしません。何故なら、寝るときに、剃った頭を直に触れて、枕になる縁でもあるからです。裸電球一つの暗い禅堂の単縁に、柏布団にくるまれて、雲水の頭が並ぶ姿は、妙に美しく、絵になるものでもあります。

その禅から多くの知識を得て、興味深い小説家に、ミヒャエル・エンデがいる。エンデと言えば、『もも』『はてしない物語』とか、次元を含んだ童話や小説・エッセイがあり、禅の問答を含んだ興味深い作品もある。

その彼の思想の発展したものに、地域貨幣がある。そしてその驚く発想は、貨幣がある一定の期間を過ぎれば、一割、二割と減価してゆくということに、とてもユニークな考え方で面白い。その貨幣をつかんだ人は、蓄積することを無意味として、使いきることを前提にした貨幣なのだ。流通を目的とした貨幣であり、エンデは国家というより、ある地域のみ限定する物々交換券に近い。そして、肝心なことは、その地域にのみ流通する豊かな文化がなければ成り立たないことだ。

私は、この貨幣のことを知ったとき、江戸っ子の『宵越しの銭は持たねえ』を、思い出した。身一つ、無一文に怖い物はない。それこそ戸締まりしなくても、鍵を掛けなくても心配はいらない。そういえば、修行道場の禅堂にも鍵は無く、心張り棒もないし、障子の向こうは外だし、障子戸に鍵はいらない。

金は天下の回り物を現実に回す江戸っ子の、この言葉の意味は、果てしなく当時の状況を示唆してくれていると言えないだろうか。この言葉の背景には、信頼が裏打ちされた世界があり、精神的にも豊かで潤いのある心情を持つ人々が多数を占めていたといえないだろうか。今日切りで生きるといったら褒めすぎであろうか。しかも貧しさの中である。

富とは、人々を怠惰にして、人と人の絆を分断してゆくものなのだろう。

江戸っ子の魂に、触れた気がしてならない。

亀住町（かめずみちょう）（平成13年7月1日）

赤ちゃんのぐっすりと眠る寝顔をみると、不思議と安らぐものです。人の一生の時間を、赤ちゃんからお年寄りまでの直線として描いた時、一般的に、人は年を取れば取るほど、睡眠時間が短くなり、朝早く目を覚ますようです。そう言えば、早朝暗いうちに目が覚め、布団の中でラジオを聞いていると話していたのを覚えています。当たり前なことなのですが、子供にとって、未来は限りあるくらいにあり、その為、よく眠ることによって体力・知力等を蓄え備えます。年を取るということは、未来が少なくなっていくことになります。すると、時間を有意義に使おうと、自分の睡眠時間を減らして、少ない未来と一日の24時間を目一杯に使うかのようなのです。その点では、長寿とは、一日の時間を目一杯使おうとする人間の姿とも言えるのではないのでしょうか。

しかし、病にぐっすりと眠るお年寄りの姿を見ていると、不思議に、子供の姿を思い浮かべることがあります。このことを考えてみると、子供帰りというのか、人の行為と時間とがぴったりと合わさって蕩々と過ぎてゆく大きな川を、今度は想像します。子供の頃、この川はまだ上流で早く流れていましたが、今は、やがて海に注ぐかのように流れて、人と時とが一体となっているかのようなのです。無数の星を散りばめた、天の川に似て。

亀住町30番地は昭和初期の陽岳寺の番地でした。その後、戦後ですけれど、いつか、冬木町二丁目を名乗っていたそうです。その時の番地は冬木町二丁目一番地の一だったそうです。

陽岳寺が亀住町の頃、明治小学校より北側は、万年町（まんねんちょう）と聞きました。

『鶴は千年、亀は万年』と、亀の町会だったのだと、なかなか洒落て名前を付けたものだと、感心したものです。

明治期前から、この町会名前だったことから、この辺り一帯に、何か亀伝説でもありはしないかと探してみたけれど、歴史は途絶えて、何も伝わっていません。でも、何処かで、不思議な亀に出くわした子どもの話は聞かないか？亀の背中に乗って消えてしまった青年の話は聞かないか？いつの日か、知らない白髪の年寄りがふっと現れたという話は聞かないか？何処か交差点の角とか、軒下の茂みの中にじっとすまして遠くを見ている亀に出くわした人はいないだろうか？たかだか人間の二千年の歴史に、何万年の亀伝説を語るなんて、その二千年の中の、数十年の私なんて、亀にとっては、くしゃみした時間かもしれない。

鳥は空を高く飛び、眼下の大きな視界を自分のものといたします。コウノトリの仕事は子を授けながらも、真に授けたものは幸福であり、それは授かった人間の意識でもあります。

子供を授かったことは千年の栄えであり、幸せなのです。また1000年は10の3乗だから、鳥にとっては、3次元の自由とも考えられます。10,000年は10の4乗だから、4次元を自由にすると書いていた人がいました。面白い発想です。

亀こそは、時空を越えて、幸福を運ぶ存在です。ただし、時空を越える幸福は、単なる幸だけではありません。浦島太郎の伝説はそのことを示します。亀こそ、ほんの一瞬が数年、数十年、数百年……の時の重みを担った動物ではないだろうか。ミヒャエルエンデの『もも』も、時間を自由に行き来した亀がいたからこそ、この作品が成り立つ条件でした。

他にも、亀の言い伝えはたくさんあります。千歳の亀は人と話すといい、その歳で毛が生え、五千歳の亀は神亀といい、一万歳の亀は霊亀という。そして、千歳の亀の甲羅を火であぶり白でついて服用すれば、千年の寿命を持つと言うが、あやめれば何やらあたりがありそうな。小さな頃の記憶では、世界は大きな亀の上に乗っていたような記憶があります。

しかし、実際は地を這いつくばって生きているではないですか。しかも地面から数ミリ数センチの視界による俯瞰です。以前草亀を飼って居たとき、器から長く首を出して、外を見ていたことを思い浮かべます。視界を広げようとしていたのだろうか？

さて、亀が地を這いつくばって生きているそのことは、人もたいして変わるものではありません。

一年間に一週間、蜻蛉が成虫の姿をして世を謳歌します。その時、蜻蛉の何十倍何百倍と生きている人間に出くわしたし、人間に話ることが出来る蜻蛉がいたとして、蜻蛉の生まれる前の父や母、祖母や祖父の先祖について、語ってくれとせがまれたとき、人間の口から出る言葉に、糾問する蜻蛉にとって満足する答えは得られるだろうか。また、蜻蛉の未来を尋ねられたとき、一週間の命を話したとしたら、蜻蛉は、その一週間でどう思うだろうか。一週間の単位を知っているものの、80年の単位を知らない人間にとって、その期間を這いつくばって勝手次第に生きていることすら知らないで生きている人間にとって、蜻蛉の命をかえりみて、語る人間はいないと思う。命ではないのだと思う。

そのたかだか何十年の人間の命を、グリム童話は面白く語っています。

「神様が世界を創り、生き物たちの寿命を考えた。ロバには30年の命を上げた。しかし、ロバは背中に重い荷物をのせての30年は辛すぎる、そこで神様は、18年引いて、12年としたそうです。犬にも、年老いて餌を食べるにも、歯がなくなって、ただヨダレを垂らして唸っているのはかわいそうと、12年引いて、18年としました。猿も道化となって30年は長すぎると、10年削って、20年としたのです。人間だけが、長生きがしたいというので、30年にロバの辛抱の18年、年老いて横たわる犬の12年、そして、最後は猿の10年を足し70歳としました」と、しかし、85歳を過ぎる寿命は、更に、15年を生き物から差し引くとすると、この生き物は何ものか。私の子供は、すぐに猫と答えた。子供の感性は直感的だ。

人が、天寿を全うすることは、誰でもが全うすることなのですが、長寿こそ、この上ない人にとって、この物語は、人が自分の寿命と思うところの寿命は、実は、ロバ、犬、猿、猫から足された時間なのだと教えます。それは、大切な命であることの喩えです。さらに、人は植物・動物の

命を得て生きます。

母親父親が、自分の子の危険に、とっさに反応するように、かって、使命感に、責任感にどれだけの人たちが自らの命をなくしたかを考えてみると、今の時代、他人の命を物質であると思うところに、命がかえって軽んぜられていると、このグリム童話から教わっているのではないかと思います。

先日、6月10日のことだが、101歳の長寿で亡くなられたお年寄りの女性の葬儀をしました。85歳にまだ15年も足すことになります。こんな年齢の方は、正直全く初めてのことであり、ご長男が80歳では、普通の一般的な家庭の葬儀とは、事情が違うことに気が付くと、ひょっとして、このことが、時空を越えた違いなのではないかと思ったのです。蜻蛉のごとき私と考えたとき、人にとっての時空を越えるということは、ほんの数十年、数年のことなのだと、全く身近にあって計り知れないこと、それこそが時空を越えて、異次元の世界なのではないかと、不思議に思いました。

そう言えば、この方のご主人の名前は亀吉だったことを思い出して、可笑しく思いました。その葬儀の中で私が思ったことです。

《耳が不自由になり、視力がなくなり、自分自身の姿形が見えなくなったときの手探りの状態とは、恐らく、自分自身の手や足、口、目までもがおぼつかない世界だと思えます。百歳近くになって、年齢を数える意味はあるのだろうかと考えます。多分、百年という期間の止めどない時間も、刻一刻の時間であり、人と違う差はないものの、圧倒的に違うのか。今、感動しています。耳を澄ますこともなく、白濁した視界か或いは闇の世界で、流れる時間は、きっと、さまざまな風が体を吹き抜けていくかに似て、その風こそ、貴女を運ぶもののように、貴女は身を任せて、そして、風に吹かれた貴女は、「少し眠る時間ですよ」「お食事の時間ですよ」と揺り動かされて気づく、今の時間でした。そんなゆったりとした時間を過ごしていたのでしょうか。ここ数年続いたと言います。それが本当の年老いて枯れるという幸福の姿のことなのではないでしょうか、多くの人は、そこまでいたりしません。まったく想像のできない世界です。》

長寿とは、時空を越えると言ったものの、亀の動きがゆっくりと見えるように、ゆっくりとした時間の流れの中の今を表現するものだと思ったのです。赤ちゃんのぐっすりと眠る寝顔をみると、不思議と安らぐものです。考えてみると、赤ちゃんからお年寄りまでの直線を描いたとして、一般的に、人は年を取れば取るほど、睡眠時間が短くなり、朝早く目を覚ますようです。そう言えば、早朝暗いうちに目が覚め、布団の中でラジオを聞いていると話していたのを覚えています。当たり前のことなのですが、子供にとって、未来は限りあるくらいにあり、その為、よく眠ることによって体力・知力等を蓄え備えます。すると、年を取るということは、未来が少なくなっていくことになります。すると、時間を有意義に使おうと、自分の睡眠時間を減らして、少ない未来と一日の24時間を目一杯に使うかのようなのです。

その点では、長寿とは、一日の時間を目一杯使おうとする人間の姿とも言えるのではないのでしょうか。しかし、病にぐっすりと眠るお年寄りの姿を見ていると、不思議に、子供の姿を思い浮か

べることがあります。すると、未来がたくさんあるように思えるのですが、しかし、よく考えてみると、子供帰りというのか、人の行為と時間とがぴったりと合わさって蕩々と過ぎてゆく大きな川を想像します。子供の頃、この川はまだ上流で早く流れていましたが、今は、やがて海に注ぐかのように流れて、人と時とが一体となっているかのようです。

モンセ・ワトキンス～夢のゆくえ～（平成14年1月3日）

外資系生命保険のテレビコマーシャルは、「知らなかった！と、ここまで保証してくれたとは！知らなかった、比べてみると、こんなに安かった！」と、流れる。

そう、やはり世界の中の、日本は辺境なのなのだろうか。情報の選択の、何が耳を、目をこらさなければ、聞こえない、見えないに、トップニュースが、ゴシップでは、“知らなかった”というより、“知るよしもないし”、“知るべき頭の働きもない”のが、私の普段でもあります。

経済が悪いといっても、塀の中で、好きな本と格闘する私にとっては、新聞か、お茶の時間にみるテレビしかニュースの取得は限られています。それでも次々とわき起こる事件は、入っては消えてゆくのみ、塀の外のことではかかないと思うことでもあります。もっとも、世界が繋がっているかぎり、どんなことでも、“関係ない”ということはありませんと承知のことの、やはり、“あまり関係ない”ことの事件は、お茶の間のテレビの向こうの出来事なのです。

そうした事件の中で、この年の前半より、南アメリカのアルゼンチンに、何やら経済破綻の情報が流れました。このことは世界経済に信用不安を投げかけると、特にアメリカの経済に大きく打撃を与えると、アメリカは、IMFを動かしてもいた。日本での情報は、アルゼンチン、ペルー、ボリビア、チリ、コロンビアの情報は皆目流れてこないことから、日本に於ける失われた10年と同じほど、これらの国では、経済の破綻による貧困と、暴力と、麻薬とが蔓延していたなどは知らなかったことでもあります。そういえば、ペルーの藤森前大統領のことなど、最近はずっとニュースにならないことを思い出しました。きっとペルーでは、忘れることのできないことであるのでしょう。どう問題なのかすら知らない私達に、こうしたこと背景を知らぬ私達の生活に、やがて根を張る問題が含まれて、10年後、15年後変化して行く世界が在るのかわからず、今手を打てる問題に、“知らなかった”ということが、日本は多すぎるような気が致します。

ただ距離が遙か彼方にあると言うだけでなく、日本に近い国の貧困問題は、結局、日本にかかわってくるのだと、強く思います。

平成13年の暮れも押し迫った頃、井戸光子氏より、一冊の本を戴きました。

題名は『虹のゆくえ』で、著者はモンセ・ワトキンスであり、翻訳者は彼女でした。そして、大晦日、寺の用事も一段落して、ブックカバーの青い空に雲が目についた。中心に、白黒の客船の写真、“河内丸”だという。『夢のゆくえ』という空に、海の色を意識したのか、表紙には『19世紀末、太平洋を越えて、はるか中南米の地に渡った日本人たちがいた。百年後のいま、その子孫たちは、「黄金の国＝ジパング」をめざして、還流してきた。在日15年、日本社会と文化に通暁した、スペイン人ジャーナリストが、一世紀に渡る移民の夢の「いま」を語るドキュメンタリー。』とあった。（モンセ・ワトキンスと井戸光子氏のことは、[『モンセ・ワトキンスをごぞんじですか？』](#)井戸光子氏著をご参照下さい）

この本は、今から、百年前、二ヶ月かけて多くの日本人が、河内丸という客船で、国が広いという南アメリカの貧しい国々へ、夢を描いた移民のドキュメンタリーであり、100年後の二世三世日系人たちの、日本の失われた10年の空間への還流問題に焦点を当てた優れた本です。奴隷制度が廃止された国の、外国人労働者の移民は、ひと財産を夢見るには、あまりにも背景が悪い。過酷と困難の中に、夢を託すことは想像を絶する100年でもあったに違いない。それが今も続いているからこそ、数千人の日系移民の子孫が、30万人となって還流して、この社会に根ざそうとしている。日系人と言われ、この国に生まれた彼等の子ども達は、もはや故国には帰れない。ではと、受け入れる環境を考えてみれば、お粗末なかぎりだ。そのお粗末な環境で育った子ども達も、この国の未来を背負う子ども達と考えると、一人一人何ができるのかと、やはり考えねばならないことです。

この問題を読んで、それにも増して、多くの中国、台湾、フィリピン、タイの人々の出稼ぎ海外移住問題は、いったい何十万人なのか、何百万人の問題となって、今あるのだと類推できる。皆、どこかに貧困問題があることから、日本に渡っては、経済問題、犯罪問題となり、コロニーを形成するにあたって二世問題が教育文化問題となる。

平成13年の暮れに報道された、青森県の住宅供給公社での多額横領事件で、5億円のペルー送金が問題になったのも、そう言えば、ペルー人女性だったのを思い出しますが、何故青森なのだろうかと考えてみれば、地方都市と南アメリカの国々との関係も、根は南アメリカの貧困問題であり、日本の根は地方都市での働き手の日本人がたりないということです。この女性は、ペルーに広大な敷地に豪勢な家を建てていたではないか。

日本にとって、100年前の日本の貧困問題が、100年後の貧困問題になるとは、時間もグローバル化するような、私達の祖先の知らずに播いた種が、100年後に咲いた花をどう觀賞するか、どう刈り入れるかが問われている。

『夢のゆくえ』 モンセ・ワトキンス氏著 井戸光子氏訳 抜粋ノート

在日日系人の家庭では～

つまり親たちの場合には、最終的に日本に定住すると決めてはいても、心はいつも祖国を向いている。反対に子ども達は、祖国への思いは親より数段少ないか、全くない場合もあるし、国へ帰るといことも考えていない。

例えば、十年間日本で暮らしてきた親が突然、ペルーへ買えると言い出したとします。その子供は、おそらく親が日本に来たときの数倍の苦労をペルーですることになるでしょう。それは、なぜか？日本は閉鎖的な社会だといわれますが、見方をかえれば、誰とも関係を持たずに生きていける国なのだということです。ところが、ペルーではそうはいかない。家族や友達とのつながりを重要視する国だからです…。在日ペルー人はコミュニケーションのない日常生活に慣れてしまっています。例えばスーパーでの買い物に言葉は不要でしょうか？ポケットに金さえ入っていれば何でもできるわけです。

日系人がいじめにあっているということを考えると、この問題は将来、深刻化する可能性がありますよ。

子ども達にとっては、スペイン語で考えるよりも、日本語でものを考える方がよほど楽なのだということがよくわかる。

一日中働いて夜遅くに疲れきって帰る親たち、したがって親の監視の目が届かない若者たち。このような日系人の若者の、日本人に対する態度に変化がうかがえると、警鐘を鳴らす声もある。

小さいころから学校で同級生から虐待されたため、日本人に恨みを抱いており、侮辱されることを許さないし、敵対関係をはらんだ社会にしようと意図的に行動しているように見える者もいる。

また地方では、一家そろって生活する家族が増えてくると、「誰のものでもない」国で成長する青少年が増えてくる。これらの青少年は日本にも出身国にも適応しない。前述したように、社会から疎外された日系人青少年の犯罪組織が生まれてくるのではないかという懸念は、もはや遠い将来のことではない。気にとめようとする者がいないし、また遅くならないうちに手を打とうという者もないが、それは私達の目の前で確実に生じつつあるのだ。

1999年五月に発表された警察庁の報告書によると、1998年の犯罪調査では、検挙者の国籍のトップは中国、次いでベトナム、そして第3位にブラジルだった。外国人が引き起こした犯罪31,700件のうち、ブラジル人が摘発された事件は3,278件で、検挙者は536人にのぼった。この数字は前年の2倍である。

日系人社会がだんだん大きくなるのを間近で見ている人たちは皆、彼らのあいだで精神障害とアルコール依存症が増えていると指摘する。

ざっと問題を拾ってみても、日本人社会が彼らにしてきた残酷な仕打ちは目に余る。1991年以降、日本で生まれた子ども達は2万人に達していて、これに、親たちが呼び寄せた子ども達が加わると言う。問題は、時と共に、つぎの芽を吹くんで、現在も進行中なのだ。

私は思うのだが、本来、仏教は、貧困とカースト制度という枠の中から、その枠を打破しようと生まれてきた。その仏教の中の大衆部と言われる優れた大乘仏教は、東方の国に移ったものの、肝心なときには作用していない。いじめや虐待、戦争を嫌い非戦非暴力を説き、他を受け入れるという仏教の優れた善さを、日本人がもう一度目を向けて欲しいと思う。

ワトキンスの日本社会への提言を、願いを、聞いてみよう。

『日本社会が望もうが望むまいが、いずれにしても、もはやグローバル化の波から日本が身を守るすべはない。資本の流れもモノの流れも、ますます自由になり、労働者が国境を越えて移動することもますます活発になるからだ。世界第二位の経済大国であり、輸出大国である日本は、他国に投資し、製品を全世界に輸出して、このグローバル化の原因をつくりだした国のひとつでもある。グローバル化の有益な部分だけは利用するが、自国にこの波が押し寄せると抵抗する、それは許されない。

将来に向けては、日本側もラテンアメリカ側も、長い目で良い関係をつくりだすことが必要である。日本においては、国籍や居住権、入国管理や外国人登録など、数々の差別を改革し、公正な社会をつくるには、裁判や刑罰システムの整備とともに、医療サービスや年金制度も外国人に適用されるべきである。外国人労働者に対する理解と寛容、日系人労働者を尊重する態度が求められる。彼らに対してはまだ、恵まれなかった過去を思い出させる「貧乏人の同胞」という偏見がまかり通っているからだ。またラテンアメリカ側では、彼ら自身が抱えている問題をまず解

決し、日本人との共生の道を探ることが必要だ。共生こそが、両者に利益をもたらす道である。

』

新牌開眼

人が産まれて、名前を付す作業は、これからの人生に様々な意味を持ちます。このとき、誕生する前の名前はどうかだったのだろうかとは、人は考えもしません。ですが、人が亡くなった後の戒名という名前を付したあとはどうでしょうか。「この次に産まれてきたときは、私は、絶対、玉の輿になるのだ」と言った若い女の子がいました。「また、次の時代に、一緒になればいいね」と言った、若い夫婦がいました。その時、自分は、死ななければ、そして、さ迷わなければ産まれてくるとは意識しない。

生前のうかがい知れない名前を前にして、生まれた後の名前に慣れ親しみ、そして、亡くなった後の名前から、その次の名前は、誰かに託すいがないことを気づくのです。この連続の中に、人は命を繋いでいると考えることが出来れば、人は、願いや祈りの中に、旅立った者と送った者の、安らぎを見つけることができます。

このことに気づけば、この連続の中に、人は命を繋いでいると考えることが出来ます。

人はいったい幾つのお名前を持って生まれてくるのだろうかとも思います。

人は、多くの名前を刻まれて、刻まれて誕生してくるのではと、そして死んで逝くのではと、このことは、名前とは、人が命を繋いでいることの意識そのものかも知れないと、この作業の務めを知り、やたらな名前を付すことはできないものだと感じます。

名前や法名は、それこそ長い時間の中の、ほんの一時の名前です。それ故にこそ、かけがえのない名前や法名でもあります。

人が亡くなって、自然に帰るも、仏や神になるも、一時のモノではないでしょうか。この世界が続くかぎり、授かった命は、やがて去ってゆく。そうわかってはいるからこそ、せめて一時、変わらぬものの名前を通しての命を、大切なモノとして、慈しんで惜しむからこそ、名前があるのだと考えています。

私たちは、もし生まれ変わったら……と、亡くなって父や母の元へと、また幼くして亡くなった者が集う処にと、祖先の集い憩う処にと、神の御許にと、生前に言うのですが、この世界が生き生きとして続くかぎり、すべてはいっときの中から発する人の願いや希望のような気がいたします。だからこそ、この生き生きとして続く世界に、変化する名前が在ることが、とても新鮮にして、嬉しいことなのだと思うのです。

また、名前や戒名・法号とか洗礼名は、その世界や教義のあり方を模索することでもあるのでしょうか。そして、名前を付すことを、人がおこなっているかぎりは、付す人の世界観やモノの見方となり、時代を表現することです。そして、そのことが同時に、この世界をどう生きて行くかとなり、掟や規範、戒律に発展することとなります。名前や法号・戒名を授かるとは、戒律、

逝き方の規範を持つことでもあるのです。

仏教の戒律は、キリスト教やイスラムより絶対のものではありません。人が社会の仲で暮らすことのうちの、一つ一つの疑問に、真摯に釈尊が当時の社会情勢に鑑みて応えたものです。

その戒律を、考えてみて思うことは、嘘をついてはいけない、盗んではいけない、人を傷つけてはいけないとありますが、一つに集約すれば、『自分に対して、いつも素直であり続けたい』と言うことが、他の律を網羅しているのではないかと思うようになりました。

人が社会で、理解できないことを理解しようと学ぶことも、行為も、そのことによって、社会・法則・ことわりの道を模索することとすれば、今、生きている場所や生きる方向を考える糧です。そこで、いつも自分に対して正直であり続けたいと思うことは、人の本心ではないでしょうか。

ですが、そうは思っても、現実はそのとおりに行かないものです。でも、「いつも正直であり続けたい」と、このことに関してなら、自分や他者に対して、優しく、厳しくと、人は告白や慚愧の思いを、涙を流して、悔い改めることができるはずだと思いました。

そして、この『いつも正直であり続けたいとする自分』というものをどうとらえ考えたらよいかということ、ここにこそ禅宗の真価があるのだと、私は考えます。

こころは保（たも）ちがたく、かるくたちさわぎ、意（おもい）のままに、従いゆくなり。

このこころを、ととのうるは善（よ）し。

かくととのえられし心は、たのしみをぞもたらす。

底深き淵の、澄みて、静かなるごとく、心あるものは、道をききて、こころ、安泰（やすらか）なり。

かって、抑鬱症の自殺願望を持った女性の、自殺しなかった理由を、人から聞いたことがありました。

「このわたしが死んでも、わたしの名前は消えません。名前が消えない以上、わたしの存在はなくなりません。それでは無理をして自殺する意味がありませんから。」の言葉でした。このとき強く、深く名前というものを意識致しました。この女性が、自身の存在の末梢を退ける理由として、名前を考えたことは、そして洞察したことに、驚いたのです。

わたし達自身は、普段、名前や他者の中のわたしと名前のつながりなど考えもしないことです。もし名前がなかったら、まわりのものから区別され、独立することを失ってしまいます。また、人の名前だけでなく、わたしの祖父や父、祖母や母という名称からくる、息子や娘、孫や甥・姪、友達という名前が無かったとしたら、関係そのものを失うことを意味し、現実が混乱し、生活の結び付きを無くすことに等しいことでしょう。

これは、存在するもの、存在したものの根拠を失うことに等しくなります。現実には、わたし達は、名前が付されたときから、世界に向き合う者は、名前ではなくわたし自身なのですが、他者から見た名前のわたしを、世界は区別するようです。二重構造みたいです。

名前は消えない。自分がいなくなったとしても、それで、すべてが消せるものではありません。わたしが生きるとは、縁起構造（関係）によって生きるのであり、わたしがいなくなったとしても、わたしの縁を及ぼした他者からの縁は、消えるどころか、生き続けるからです。この縁が変化して生きつづけるとするなら、わたしの最後まで、その縁を、育てて見届けることこそ、必要なことです。わたしの存在は、抹消できるかも知れませんが、わたしというものが、縁により、綾になって広がっているかぎり、わたしの心は、その綾であり、綾が抹消されなければ、わたしの名前が取り残される限りは、この世界に生きつづけるともいえるでしょう

わたしの経験も、わたしの過去も、わたしの未来も、わたしも、すべては、綾の中の縁とも言え、すべては汝＝他者の関係において世界は成り立っています。西田幾多郎によれば、わたしを対照的に限定するものは、一般的自己でもなければ、自然でもなく、それは『歴史という如きもの』でなければならないと言います。

陽岳寺の法事回向の文面の言葉です。

『それゆえに、世界はつねにわたし自身と一緒にあるならば、一粒の砂も、一輪の花も、わたしも、世界全体を背景にもたなければ、存在しなくなることに気がつきます。そして、一粒の砂も、一輪の花も、わたしも、今ここにあることは、その背景の、家や道路、学校やあらゆる生活の中の古びたモノも、かけがえのないものとして、じぶん自身に意味を与える歴史であり、それは、世界にたった一人のわたしが、常にわたしであることを現してくれているモノでもあるのです。また同時に、このことは、その背景の意味や思いを変えてみれば、尽きない豊かさを含んで、人は、実りある途中に有るともいえるのです。人の尊厳とはこのことを言うのではないかと、だからこそ、何人も、この尊厳を傷つけることをしてはいけないことなのです。』

今の自分の置かれた現状に、苦しみ、悩み、現状をわたし自身の考えや見方で変えられず、次の世には、変わって生まれ変わりたいと思うことがあります。「今度、生まれ変わったら、玉の輿に乗るんだ」と言った19歳の若い女の子の位牌を前にして、「きっと、そうなるよ」と、願い、祈り続ける意外に選択肢はありません。わたしとは、他性により、構成されるものとするなら、苦しみ悩みも他性によりもたらされます。この子の心に、結果として、手を貸せずに残された遺族にとって、それでは、この子が生まれ変わるまで、どこまで、どう拘わればよいのか。そして、生まれ変わったことを確認することができないならば、どうすればよいのでしょうか。

白隠禅師は、坐禅和讃の中で、「当所すなわち蓮華国、この身すなわち仏なり」と結びます。今ここに生きるわたしが暮らすここが、蓮華国という浄土や極楽であれば、わたしたちが次の世に産まれる次の世は、当所という、今この場所のはずです。わたしの身体が、この世界から抹消され、わたしの死後、新に、新しい名前が、戒名として祀られます。そして、この世を生きてきた、残された者の過去の証として、それは、過去を引き継がない未来を開ける、生活の中の、特別な場所に移されます。この特別な場所は、願いや祈り、感謝や歓喜、畏敬や尊さの場所であると同時に、未来への扉でもあると考えることができます。この場所によって、繋がっていると。

そのわたしの存在が、再び、三度と誕生したとき、その時々わたしの生は、その時々のご両親に託す意外に方法はありません。こう気づいたとき、わたしそのものも、その時々両親と

なり、授かった託された命を、精一杯育むことが必要なのだと気がつきます。ここに、届かぬ願い・祈りが、聞こえぬ願い・祈りを聴くことの立場が、どう拘わればよいのか、どうすればよいのかの扉が、現れます。

戒名は、自分がいなくなった世に、次の世を予感させるものでもあるのでしょうか。それは、生まれ変わることを意識してという意味だからでもあります。そんな、連続する関係の中に生きるわたしたちの、生活の中で、位牌や、墓石を拝む意味は、届かない願いを繰り返すことの連続のうちにあります。仏壇のなかに、いくつもの位牌が立ち並ぶとするなら、それは、いくつもの名前を持ち、産まれて来て、死んで行くという、道の交差点です。そして、その届かない願いを、聴かなければならない存在であると確信したとき、感謝や歓喜、畏敬や尊さとなって、祈り願うわたしの心が充たされるのではないかと思うのです。届かない願いを繰り返すことのうちに、聞こえない願いを聞くこと、このことが、わたし達の行為に現れるとするなら、それは、わたし以外の、今を生きるものを、良く育み、保つという無心の行為の中に厳然として現れていると考えられます。

わたし達の、産まれれば、縁が、広がり、死ねば、また縁が広がる、こう考えてみれば、仏壇の中の、祀られた位牌の奥、お寺の領域、そこは、象徴としての、わたしたちの未来への開かれた扉です。人間の自由な発想が、届かない願いに束縛されない、自由な未来を生み出すと言えるからです。

「もう一度生まれてくるかいないほどに、一回でわたしがそれほど多くをなせるというのか」と、エンデが言う言葉には、千金の値があります。

19歳の自死した遺骨と戒名を前にして、何度でも、生まれ変わって、おもうがままに、生きつづけること、ただただ、願い祈るばかりです。

英霊（えいれい）（平成17年5月23日）

古事記を読めば、神々の誕生と死の躍動感に踊らされるでしょう。これらは昔の話ではなく、その延長の今も、神々は神様は誕生しているともいえるのではないかと……ふと思います。

神様が、今でも誕生するなんて、おかしな話しだと思いかも知れませんが、これは本当の話なのです。今もどんどん誕生しているなら、きっと、忘れられてしまったり、死んでしまったり、どこかに消えてしまった神様も、きっと、いるに違いありません。まるで、人間みたいにです。

神々の神話は、人の尽くせぬ思いが、やがて死霊・生き霊となり、人々に恐れられ、神として祀（まつ）りあげることになりました。人は神様のたたりを恐れ、封印し、祀（まつ）ることで、たたりを鎮（しず）めることをしたのです。神社のこんもりとした森、これは、鎮守（ちんじゅ）の森ですが、その領域は、封印された神々が眠る場所です。

しかし、考えてみれば、こうして鎮守の森に祀られる神様は、ずいぶんと恵まれている神様かも知れません。反面、逆に考えれば、縛られ、押さえつけられた悲しい神様となるのかもしれない。

いかに人間が悪さや悪戯（いたづら）をしても、年齢を加えて行けば、反省もし、人に良いことをしようとするものです。考えてみれば、祀られた神様は、年齢を加えても一向に止まらない悪さや悪戯の持ち主とも言えます。

祀ることで、鎮めることでしか、平和が訪れることがなければ、祭礼は天変地異への恐れや、戦火や暴挙に被災することの無事への祈りとなります。「何もなければ良いのだが」と、だからこそ、祭りの字の示偏は、月（肉片）という供え物を、手で捧げて、足で出かけて、お供えする人の姿なのだと思うのです。

多くの怨霊（おんれい）は、祀られないでいることが多いことでしょう。取り返しのつかない出来事に、すまないと、謝る気持が起きずに、よこしまな心が芽生えたり、人を強く、うらやんだり、ねたんだりするそんな人間は、悪霊（あくれい）や怨霊として、しばしば、いたづらや悪さをすると言ってもよいでしょう。

これは、人間の思いや願いが、死んでからも、わたし達の世界に留まるという意味からです。この留まるという思いは、わたし達が気づかずに、自然と口からでる言葉に現れたりします。それは、わたし達の世界が、私たちの心の世界を含んでいることによってなおさらです。これは、わたし達のことを人間というように、人と人との間というように、人が支え合っていると書くように、世界とは、人の意志や感情の交差する世界だからです。人の意志や感情の行為のうえに出来上がったもの、それが世界だからです。

神様はどこにも宿ることが出来るといったら、不思議な気がするでしょう。神社やお寺で引いたおみくじを、木々の枝にゆわくのも、誰もが同じことをしているからではなく、先人の知恵から引き継いだ、そこに神々が取り付くという意味です。

神主さんが、白い御幣（ごへい）でお祓（はら）いをするのも、その御幣に神様をくっつける

ことです。だからこそ、その御幣を祀ったりするのです。神様に、側にいて見守ってほしいからです。

この時の神様は、もちろん、良い神様です。良い神様は何処にでもいます。祀る必要のない神様といってもよいでしょうか。その良い神様は、井戸、水道、屋根や梁、柱、床の間、玄関や裏口、門、道や道路の角、境界の四隅や、河や海、沼や池、田畑や山という自然、人が住む里のあちこちの東西南北、それに地、火、水、風に適した場所の、あらゆる所にいます。お箸や、食器、椅子や机、鉛筆や筆、紙やお人形、お裁縫の針や料理の包丁、そして、食べ物まで、神様や仏様はどこにもいるのです。

これらは、安全と恐れから、感謝に願い、また、物や食べ物を大切なものであることを、粗末にしてはいけないことだと、昔の人が伝えて残そうとしたものかも知れませんが、現実にもそうして拝んできたことなのでしょう。

また、家や地域の出入口にいる神様は、わたし達の生活を見守り、外からの侵入者を防ぐ役割を果たしています。不思議なことは、この神様達は、けっして神社や祠などに閉じ込めて置くべき神様ではないことです、現実のわたし達の生活に密接にかかわっているからです。密接にかかわっているからこそ、忘れるのではなく、くり返し語らなければなりません。

こうして神様というと、わたし達の願いや祈りを聞き届けてくれと思うかも知れませんが、実のところは、神様や仏様にもいろんな神様や仏様が居て、聞く耳は持っているのですが、聞き届けてくれるかはわからないのです。神様によっては、その願いを自分のために利用する怖い神様もいるのです。

鎮守の森を持つ、ただ鎮まってくれればよいという神様、鎮まってくれるからこそ、わたし達に平安が届けられるのです。平安であれば、感謝すること必要なことです。その神様も、元は、頭が良くて、綺麗だったり、荒くれ者だったり、何か一つのことにとたけていたり、女性であったりと千差万別です。

その千差万別を一つにした神様、それを、英霊というのだと思います。祀られてしまった良い神様のような気がします。本来、この英霊達の一人一人は、わたし達のすぐ近くにいたはずで、すぐ近くで、わたし達の行く末を見守ってくれる神様や仏様なはずで。

わたし達のすぐ近くの彼方に散っていった、わたし達と血が繋がる人たちの思いだからです。わたし達の家族という絆で結ばれた英霊の、一つにできない思いを、英霊という無名の呼び名で、一つにまとめ上げた集団としての神様です。

この神様は、英雄を強いられたかわいそうな神様ともいえます。鎮めればよいのか、しかし、考えてみると鎮める以前にたたりを起こさない、心がけない神様でもあります。

それを、慰めればよいのか、それならば、その前に先の大戦は大きな過ちであったと、この責任を追求することこそ、この英霊にたいして名誉を回復させことなのでしょう。敗戦と言わずに、今も、終戦と言いつけ、うそで固めた仕打ちは、この英霊に対して最も失礼なことではないかと思うのです。慰めなければならぬ神様なんて聞いたことがありません。

この意味から、縛られ方が違って、いまだに、英霊として祀りあげることで、浮かばれない神様として見ると、どうも、鎮める相手は国家という意味のような気がいたします。

英霊は、明治維新7,751柱、西南戦争6,971柱、日清戦争13,619柱、台湾征討1,130柱、北清事

変1,256柱、日露戦争88,429柱、第一次世界大戦4,850柱、済南事変185柱、満洲事変17,176柱、支那事変191,243柱、大東亜戦争2,133,885柱となり、合計2,466,495柱です。今も減ることはなく、増え続けています。また本当に理由が分からないのですが、巻き添えになった多くの満州や沖縄などの一般人とは隔離されています。しかも散らした命の尊さも含めれば、尊い命に、どれだけの差があるのでしょうか？

尊い命が散ったわけですが、散らした意思是、鎮められたのでしょうか？

尊い命が散った異国で、その国の人々の子孫の気持ちは慰められたのでしょうか？

この国の散った命に寄り添う家族や親族の思いは、鎮めることで慰められたのでしょうか？

彼ら散っていた命に対して、誓いはないのでしょうか？

その誓いは、なぜ不戦の誓いなのでしょうか、なぜ非戦の誓いなのでしょうか？

争いの真相である人間の意志は、突き止められたのでしょうか？

明治憲法下の国家物語と、現行憲法の国民物語に、一線は引かれているのでしょうか？

過去現在未来、正しい戦争とはあったのでしょうか？あるのでしょうか？

それでは、国を守ることはどんな意味があるのでしょうか？

ただ柱の数を、積み重ねることで、何を言おうとしているのでしょうか？

生き残った兵士達が、幾年も口を閉ざして語れない戦闘体験は辛すぎます……。

個人としての尊厳に対して意思を持たせない祀り方に、もうこれ以上祀らせないという、引き継がない確乎とした意志を持つことで、英霊は、祀られた意味が消えて、解き放たれると思うのです。それは家々に帰すということです。もともと、仏教やキリスト教でも、弔うことができるのです。

英霊は、神々に祀られたが故に、今も、我々に、たたる神々とも言えます。祀られていることで、英霊だけは、今でも、大きく成長する意思を含むように見えてしかたありません。

アジアには、古くから、我々の生活する何処にでも、善悪を問わず、多様な神々が混然とし生きています。これは、多様な文化を受け入れることのできる文化圏を意味します。このことを英霊という名で否定する意思是、危険な意思といわざるを得ません。

人それぞれの尽くせぬ思いが、忘れられたら、鎮めることもできない怨霊、死霊、鬼神、幽鬼、幽魂となり、さ迷うこととなるでしょう。一つに祀らなければ、それぞれの家庭で、それぞれの見守る祖先の一人となったのにと、残念に思う8月の熱い季節が今年もめぐってきます。

アジアには、古くから、我々の生活する何処にでも、善悪を問わず、多様な神々が混然とし生きています。これは、多様な文化を受け入れることのできる文化圏を意味します。このことを英霊という名で否定する意思是、危険な意思といわざるを得ません。

人それぞれの尽くせぬ思いが、忘れられたら、鎮めることもできない怨霊、死霊、鬼神、幽鬼、幽魂となり、さ迷うこととなるでしょう。一つに祀らなければ、それぞれの家庭で、それぞれの見守る祖先の一人となったのにと残念に思います。

目覚め

わたし達が誕生したとき、この世に私は産まれたのだと、その確認するすべを持たないことと、また、亡くなったと確認するすべを持たないことの、わたし達の魂や霊魂はどう拘わっていると考えればよいのでしょうか。「今日は赤ちゃん！」と言うことはあっても、誕生して「今日は、ママ！」とは言いません。同じように、生ある内に、自身の肉体の別れを告げることはできないのです。

人の生と死の確認に関して、私は、始まりも終わりもない世界を持つと言ったことがあります。それでは、始まりもなく終わりもない世界の内の、日常、眠ることと、目を醒ますことはどうでしょうか。目を醒ましたときに、特別の状況を除いて、当たり前のように目を醒まし、当たり前のように活動に入る私は、その時、眠るとき、明日の目覚めはないと確信することはないのです。目覚めはないと確信しても、そのことを裏付けるものを、持つことはできません。そこに私の霊魂や魂の問題は、どう拘わっているのでしょうか。それとも、私の魂や霊魂の存在は在るのでしょうか。

仏教は、この世界から五蘊（うん）という、色という肉体、受という感覚、想という知覚、行という意思、識という意識で構成されたものが人間なのだと言います。これは一瞬たりとも滞らずに変わり続けるということです。変わり続けることを意識した瞬間に、以前の私ではないと意識したとしても、その私は、すでに変容の中のしるしとなっているのです。

それでは、花が枯れたとき、その花の聖霊は、どこに居るのでしょうか。死んだのでしょうか。私たちが言う、土に帰るという言葉には、変化という意味が隠されています。それは、何処から来て何処に帰って行くのかという意味でもあります。

“何処にも帰らないし、何処からも来なかった”、ただ条件が整ったとき、顕れるのではないか。この条件こそ、総てのものを含んで、ただ一つの命として私を顕そうとしているものです。何も無いところからは、来ようとしても来られないし、何も無いところには帰えりようもないことから、むしろ、豊潤な大地や海、生物や動物、空や星々の間の命の中から、時を隔てて、次々と顕れては消えるものなのではないかと、そんな思いが致します。

それを永遠の命と呼ぶなら、顕れることを生といい、消えてゆくことが死と言うでしょう。生も死も、永遠の命の作用とするなら、生を撰ぶことは、死も撰んでいることになります。そして、死も生も、永遠の命の霊性であるとわかるのです。生は五蘊が集まることであり、死は、その五蘊が欠けることです。

こう考えてくると、私という意識は、時間と存在の狭間に、縁として顕れる、五蘊（うん）ではないかと。それは、色という肉体、受という感覚、想という知覚、行という意思、識という意識で構成されたものです。

それでは、私が、事実を受け入れることとはどのような意味を持つのでしょうか。意識は、いつでも、今・ここです。過去の問題や未来の不確かさの中に居るときでもです。眠っているときも

、時間を忘れて行為に集中するとき、変容そのものの中に、わたし達は、自分の存在を委ねているのではないのでしょうか。

禅では、山が動くといい、海深くを歩くといい、風になるといいます。ゴーンと撞く鐘そのものに、或いは、大きな檜の木になるといいます。この時、わたし達は“生まれ変わるという”行為の真っ只中に居て、目覚めているのではないか。

わたし達にとって、一番大切な命という問題に、誕生したことを受け入れたという認識は無いのですから。それは、訪れることの不確かなものを受け入れる能力を持ち合わせていないのです。むしろ、わき起こる雲の中に、光りとなり、風となり、熱となって、無数の水の中に、流れとなって、真っ白く我が身を投ずることです。

その圧倒される白く輝きの中で、自己の存在のあるかなきかの、はかない揺籃（ようらん）に定着させるために、風となって、我が身を完全に没入させることです。それが、祖霊たちや、仏、神々との出会いでもあると思うのです。

よわい「齡」

お年寄りの葬儀のとき、私は、しばしば、亡くなられたその人を偲んで、こう語ります。

『人って、支え合って生きるものですが、夫婦の日常の生活は、意識しなければ、共にしっかりしようなどとは、普段、視線に入りもしないし、思わないものです。それは、季節が、人の意識に寄り添うがごとく、いつも一緒にあるに似ています。季節の花々の違いのように、人は咲かないものなののでしょうか。

年毎に、年齢を重ねて咲く、今年の花にたとえて見たいものです。散る桜を前に、もっと咲きたかったと、貴方の声が響きますが、あなたは、今も散る枯木の花ではなく、咲かしているではありませんか。散らしているのは、家族の心です。

病を抱え、傷ついた人間を、自然の老木にたとえて……、若木に比して人を圧倒する姿は、本来、人も年をとればとるほど老齡の枯木に似ている姿なのですが、異なって見えるのは、人の思いのなせることなのでしょう。人が年を重ねた末の、悲哀や年輪を偲ばせた変形した姿・形のたくましさ、もっと見つめてもらいたい。

そして、老いて浮かべる仕草や声の張りを、いつまでも、心に留めて欲しい。老いて、倒れて、散っていった命を含めて、いつまでも、家族と呼んで欲しい。残された家族の行く末を、散っていった命に託せる家族であって欲しい。残されたものの、ほとぼしる若さのなかで、家族の老いを、思いだしてもらいたい。

ヘルマンヘッセの、「人は年を重ねるほど、若くなる」という言葉の意味を、現実を意識できるようにになりたいと、貴方の死から受け取りたい。

あっという間の過去は目に見えず、若い人と年を重ねた人も、同じなのですが、十年二十年と較べて、貴方の歩みは確実に違う重みを、枯木のくるおしい姿を見て、若さや勢いを見て、なおさらに持つのです。

思い起こせば、貴方が歩いた、そのよわいの年月は、それぞれに、春には一斉に咲き誇る桜の姿であり、花の散ったあとの一斉若葉の繁るさまであり、雨に打たれて生き生きとして、陽光に踊り輝き、秋には葉の色を変えて散る家族の姿の記憶であります。そして、四季折々のこの街の祭りと催すものの記憶でもあります。

人が許容や受容と言う意味を解りかけて来たとき、四季それぞれの姿は、同時に次の季節の予感を当来する姿でもあり、人それぞれの記憶を積み重ねた季節でもあります。

そして（季節が春であれば）、やっと、この寒々とした季節の終わりを迎えての風の中、あの夏の暑さが、そして、寒かった冬の与えてくれたものとするなら、今を歩きながら、私たちが語らう着実な今は、去っていった過去によって表現されていることを知るのです。

記憶のなかの事実には、懐かしさが似合います。必死になって築いてきたものは、崩されないよ

うに、倒れないように、流されないようにと、前を見つめて歩いた記憶だからです。』

高齢社会という呼び名は、本来ならば、高齢社会は長寿が満喫できる社会になり、子ども達や青年期壮年期の大人たちから見てもそうでしょうが、それぞれの年代の自分たちから見れば、遙かな時間を経過したその社会の輝く宝を、数多く持つ社会ともいえるでしょう。それは一時一時の貴重な時間を費やした結晶の現れであり、過去何世代にわたり、未来に対しても何世代も先を見通す知恵に支えられた社会ともいえるのではないかと思います。

少子社会といえ、それこそかけがえのない命を、大事に育むことが最も尊ばれる社会といえることでしょう。こう考えてみれば、今の日本こそ、日本の歴史上、最も輝いている時代であると言えるのではないかと思います。

先日、地元の工務店の社長が、「和尚、これ、だれか欲しいひとはいませんかねエ〜」と。見ると、会社の前の路傍に、盆栽が数鉢、置いてありました。盆栽の持ち主が亡くなって、遺族が家を改築したらしく、面倒が見られなくなり、いらなくなって引き取った盆栽だそうでした。

私は「社長ねエ〜。盆栽というのは、厳密に言うと、本来、絶対自分のものにならないものです。300年、500年かけて育てていくモノで、自分が育てられる期間は、せいぜい20年、30年、40年という期間でしょう。これって、預かっているという意味だと思うのです。自分が育てて愛（め）でるのは、せいぜいそれだけの時間で、後は、次のひとに託さなければという気持ちが生まれてこなければ、盆栽の命を粗末にするだけです。何10年、100年経ったモノを、自分の代で枯らせますか？次の世代が大切に育てることで生きてきた命なのだと思いますよ。こうした覚悟が生じてこなければ、育てられません」と言ってみました。

古ぼけた齢を重ねた茶碗や壺、軸物をお宝と称して、金額に換算することを、テレビでおもしろ可笑しく放送しています。壊れていたり、まがい物、名前がないモノ、偽物だったらいくら古くても見向きもされません。しかし、40年、50年前のオモチャのお宝と称されるモノを見ては、新に作られていくお宝もたくさんあるのだと知ります。が、テレビの画面の中では、すべてがお金に換算されてゆくことにためらいが生じます。このよわいを重ねたものも、盆栽と同じように、自分のモノではなく、世代を越えて渡すものです。そのものにとっては一時の間に過ぎません。

そう言いながらも、この盆栽が高齢社会のお年寄りのように、ふと見えたモノですから、人間も育てられ育つことから、お年寄りが育てるもの、それこそ、若い人にとっては手の届かない、人間の心なのだと気づいたのでした。

誰にとっても明日が未知なる日であるように、年を重ねたよわいも、つねに未知なるものです。それは、繰り返してくるものでもなく、身体のきしみや痛み、思うようにならない筋肉、おぼつかない動きに沿って日々新たに生じてくるものです。それを、深川や下町の古老はうまいことをいったものです。じっと今の自分を見つめて「意気地がなくなった」と。

かって物語に出てきた長老、年寄り、古株、賢人、落語に出てくるご隠居さんは、今、何処にいらっしゃるのでしょうか？そう言えば、寺の世界では今でも、書状の宛名には、誰々老和尚、老丈室、

老大師と付します。老という字は、敬うという意味がありますが、敬われる対象であるかは、じぶん自身にはわかりません。年齢に固執する人は、自分を見ない。

さて、前文に記した、「ヘルマンヘッセの、人は年を重ねるほど、若くなる」という言葉は、ヘッセの「成熟するにつれて人はますます若くなる」という「成熟」を「年齢を重ねる」という言葉に書き換えたものです。何故かといえば、老齡の枯木に喩えたかったからです。また、どうして植物と同じように、人間の中に、威厳を持ち、枝を一杯に広げ、空高く聳え、幹の肌は荒々しくと、人は見ないのだろうかとの思いです。

「死に対して、私は昔と同じ関係を持っている。私は死を憎まない。そして死を恐れていない。

私が妻と息子たちに次いで誰と、そして何と最も好んでつきあっているかを一度調べてみれば、それは死者だけであること、あらゆる世紀の、音楽家の、詩人の、画家の、死者であることがわかるだろう。彼らの本質はその作品の中に濃縮されている生きつづけている。それは私にとって、たいいていの同時代の人よりもはるかに現代的で、現実的である。

そして私が生前知っていた、愛したそして「失った」死者たち、私の両親ときょうだいたち、若い頃の友人たちの場合も同様なのである—彼らは、生きていた当時と同様に今日もなお私と私の生活に属している。私は彼らの思い、彼らを夢に見、彼らをともに私の日常生活の一部と見なす。

このような死との関係は、それゆえ妄想でも美しい幻想でもなく、現実的なもので、私の生活に属している。私は無常についての悲しみをよく知っている。

それを私はあらゆる枯れてゆく花をみるときに感じるができる。しかし、それは絶望をもたぬ悲しみである。」（《人は成熟するにつれて若くなる—ヘルマン・ヘッセ》V・ミヒェルス編／岡田朝雄訳／草思社刊／1995年）

また始めたらよい

それは、私が生まれる以前、地球は、初め、水に覆われていました。……そう、地球の鼓動を聞きながら、私は、水の中に命を与えられていたといえるでしょう。そこには、かぐわしい香りと色彩にあふれていましたが、まだ世界が混沌といわれていたときのことです。まだ私は生まれていなかったし、多分、時間や場所の概念もなかったはずです。それは、私と名づける前の私の状態といえるのでしょう。

混沌には、水も空も大地も、ともにあったし、多くの命として、今を生きていたはずだ。

その混沌とした世界から、私が産まれるには、混沌自身が苦悩を持たなければ、意識としての私は生まれるわけがない。

そして混沌自身が苦悩を持つためには、出会いと夢、葛藤と忍耐、希望と誓い、安らぎと揺らぎ、祈りや願いという慈愛がなければならぬでしょう。

区別と差別が生じて、形有るものが芽生えるけれども、それは混沌とした世界がなくなったというわけではないのです。

混沌自身の苦悩は、私が新しい今、ここを手に入れても、ずっと、ずっと、私の今、ここがなくなるまで、続くのです。

私が生まれることが、混沌には、苦悩であったとも言えるかもしれない。何故なら、生まれた私は、混沌を忘れるから……。

そして、私が生まれでたとき空と大地と水が与えられたのでした。ちょうど、私の父と母が与えられたように……。

初めに、お釈迦様は、諸行無常といました。

ものみな、移ろいゆくことを定めとして、立ち止まることを許されない。そして、それゆえにこそ、存在するものの根柢があるとしたら、誕生も消滅も継続も、時の法則そのもの。

総てのものが存在しうるのは、この変わりゆくことにおいてあり、このことがなくては、世界の何ものも存在しえない。一切のものの可能性とは、このあらゆるものの変りゆくことにおいてあり、これこそが、一時性の正体なのだ。

もしこの一時性がなかったら、変わることもなく、あらゆる命在るものの姿形は止まってしまいます。この瞬間という一時性は、広がることも長さを保つこともないが、無限の可能性を秘めた点でもあります。

だからこそ、釈尊は、一切は一時的であるということに徹することが、私の教えだ言ったのです。それは、何ものにも執着するな、この世の総てから超然とすることを学べと。

産まれてきてたとき、すでに亡くなっていた運命の君こそ、このことがよく解っていたはずです。それは、未だ自分が誕生していないから……。

お釈迦様は、次に、縁起の話をされました。

この世界のすべての何もかもが、一つに繋がっていると話されたのでした。

そして、総てのものが一つに繋がっていたとしたら、その繋がっているものに名前があるのは、命を繋いでいることの意識そのものかも知れないと、気づきます。繋がるのが意識といえとすれば、それは、名前がなく、すべてがこんとんとしてある状態、それこそが、母の体内で形成されようとしていた命の営みそのものような気がいたします。

生まれ出るまえは、命そのものと言ってよいとしたら、生まれ出たあとのものは、人間や動物、木々や草花、山や河や海、空も、含まれて、すべては一つに繋がったもの、それこそが、命の営みといえるもの、生まれる前も、生きているときも、死んだあとも、すべては、その命の営みの中のことだ。

生まれでなかった君にしてみたら、きっと、この地球上のすべての人は君自身だし、今、誕生しようとしている命の萌えでようする芽も君だし、すでに亡くなっていった大勢の人も君自身といえるでしょう。

その次に、お釈迦様は、諸法無我といって、この世界の有り様を語りました。

君自身は命の営みそのもの。君に教えて語ることなんて、何一つない。まして、思い煩うことなんて君自身にはあり得なかったはずだから。

思い煩い、じぶん自身への哀しみを通して、あり得るとしたら、君の誕生を望みえなかった、また、今か今かと待ち望んでいた、君のママやパパ、お祖父ちゃんやお祖母ちゃん、それに、君にとっては、これから年月を隔てて生まれ出ようとしているだろう妹や弟かもしれない。

人間の世界って、自分という心を持つゆえに、自分が寂しいと思えば寂しいし、哀しいと思えば寂しいし、面白いと思えば面白い。そうやって、悲しみや寂しさ、面白さや楽しさで繋がっている世界でもあるからです。

それは、世界は物語に満ちているということです。

諸法無我は、そんな人間の世界を、混沌の世界から見なおしてみようことをすすめます。すると、移ろいゆくものが見えてきます。

混沌の苦悩は、悲しみのままに、辛さのままに、疲れ果てたままに、嘆きのままに覆われる勇気を与えます。そのままに、たたずむことが、明日をかえると。

陽はまた昇り、季節はめぐるように、「また始めたらよい」と、力強く、心地よい響きが、君に届かないものか。届きさえすれば……。

そして、君は、朝という字が十月十日と書くように、朝が来るたびに生まれ、夕べに眠ることをおぼえるでしょう。

そして、君は、陽が昇ると、君を取り巻くすべてが、命あることに気づくはず。

「さ、君となって、また始めるがよい。」

きっと、君は、目が醒めると、私となって、生まれることができるでしょう。

変わることが現実に生きる世界にあっては、死でさえも、不変のものとして、真実とは言いがたいものです。

変わり続ける世界に大きな力となって、「また始めたらよい」の言葉は、変容のしるしから投げかけられた言葉でもあり、そのことを、たしかに君は知っているはずです。

さて、この祈りは中身は、悩みや感謝とするなら、ヘルマン・ヘッセが、『放浪』のなかで、しるす言葉が光ります。

「祈りは歌のように神聖で、救いとなる。祈りは信頼であり、確認である。ほんとうに祈るものは、願いはしない。ただ自分の境遇と苦しみを語るだけである。小さい子どもが歌うように、悩みと感謝を口ずさむのである。」

転身への祈り、それは、徹底できぬ自身への、素直さへの回帰という意味でもあります。

じぶん自身の計らいの中の、気づきは、人を変えるものです。この変えられた自分を希うことを、この祈りの本意と、考えました。

三大聖樹（平成19年4月17日）

釈尊の物語として、三つの樹木が登場いたします。その場面は、誕生、成道、そして涅槃です。この三大聖樹、無憂樹、菩提樹、沙羅双樹を考えて気づいたことがありました。釈尊誕生は、摩耶夫人がルンビニ園にて、緑葉高木の鮮やかな赤い色の花ををつけた、無憂樹（むゆうじゅ）の下でのことでした。無憂樹は、別名、阿輪迦樹（あしゅかじゅ）ともいい、アシュカの意味は、憂いのないこと、恐れがないことです。

釈尊が誕生したことが、憂いのないことなのか、すべての赤ちゃん誕生のことだったのか。やはりこれは母親から赤ちゃん誕生の物語の、満ち足りた母と子の絆を語っているもののように思えます。産むまえの葛藤や痛みという心の積み重ねがあったゆえにこそ、この心が余計にクローズアップされるのだとも思います。しかし、その後になんて、いくら母親とはいっても、この心持ちを維持し続けることは難しいことでもあるのでしょうか。産んだあとの、この心の達成感や至福の思い、穏やかさは、母と子の絆の誕生を象徴するものと考えなければならないと思います。この無憂樹の木の下で生まれた釈尊の、七歩歩いて「天上天下、唯我独尊」と天を指し、地を指したという故事は、天を指し地を指し示すことで、六歩の歩みの困難さを形容しているように思えます。恐れなく進めの指針こそ、「オギャー」という叫びに、誕生するものすべての宣言として、仏教は、人の歩みのすべてに、「天上天下唯我為尊」と表現したのだと思います。

あらためて今の私たちの状況は、この「オギャー」が、深い人間性誕生の叫びとして聞こえないのではないかと思います。自分の命は尊いものとしても、同じ命を授かったわたし以外の赤ちゃんは遠い存在に思えます。「自分は、この世界の産声が聞こえているか」と、母と子の絆、世界の誕生として、産声を聞かなければならないことを、強く意味しているのだとも思います。そうでなければ、生まれた赤ちゃんの「天上天下唯我為尊」の叫びと、母親の憂いのないことが繋がっていることが想像できないからです。

そして釈尊の歩いた七歩のうち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天が六歩であり、七歩目ばかりが際だって問題とされています。しかし、「天上天下唯我為尊」は、あまねく六歩それぞれの歩みに、かぶさっていることを気づくということ、今はただ願うばかりです。

釈尊の、最初の一步から数えて三十五年にわたる遍歴の六歩こそ、無憂樹に導かれた歩みだったと考えてみました。憂いのない、恐れなくして進んだ道として……。これは釈尊誕生、四月八日のことでした。仏教の始まりは、四門出遊（しもんしゅつゆう）の故事からです。四門出遊とは、釈尊が、気づきから出家をこころざし、思索や瞑想、そして目覚めに到る動機を与えたものです。母を幼くして亡くしたものの、すべてを与えられて王宮内に過ごす釈尊の疑問を象徴と

する故事です。

それは、王宮の閉ざされた東門・南門・西門・北門からかいま見た外の世界、そこに釈尊を突き動かす動機があったからです。そこから見たものは、他者の老・病・死の世界です。その他の老病死が、釈尊には、老いねばならぬ我が身となり、病むであろう我が身となり、また、現実の死者の姿と悲しむ親しいものの姿を前にして釈尊自身を襲う死の影が、「青春の高ぶりはことごとく断たれた」と述懐したことで、うかがい知ることができます。

この身をおそう老・病・死の影が、釈尊を、生の思索へと導き、やがて苦の発見となって、釈尊を病ませたのだと思います。その時の思いは、「人は生老病死のあり方の中にあり、傷つき痛みのなかにあり、愁（なげ）きのなかにある。かかる者が、その原因を知ることができれば、それはより高きあり方であり、優れた生き方となって身を覆うであろう。それが、求むることであり、それが聖なる求めというものである」です。そこから、「大いなる放棄を決意することになったのでしょうか。これは、啓示でもなく、選ばれたものでもない、現実をじっと深く見すえたものの宿命なのでしょう。そして、釈尊二十九歳にして、仏教は始まったのではないかと思いを馳せます。

釈尊の出家から三十五歳までの歩みは、数多く仏典に飾られています。実際には思索と瞑想の試みであり、肉体を酷使する遍歴ともいえる旅だったとも思います。旅からとどまれば木陰や緑陰花々の中の散策と瞑想を繰り返し、時々、質問や糾弾など問いの矢をうけたこととも思います。

そして、ブッダガヤにて、心身ともに疲れ果てた釈尊の身体を癒したのは、少女の差し出したミルク粥でした。現在の臨済宗・曹洞宗の専門道場の朝食を粥座（しゆくざ）いって、お粥を頂ますが、この故事を受け継いでいることが推察できます。

身体の回復が釈尊を、菩提樹の木陰に座らせ、瞑想にと誘い、悟りを得たのでした。釈尊三十五歳、十二月八日、明け方のことでした。この菩提樹の別名は、ヒッパラジュといい、畢鉢羅樹と書きます。道樹、覚樹ともいい、クワ科の常緑高木だそうです。これ以降の旅は、釈尊の歩みそのものが、菩提樹のように葉を茂らせ、人々のうえに緑陰として枝を広げます。

ここから幼名シッダルタは、釈尊となって、ブッダと呼ばれます。語り得ないものを手にしたブッダの、更に確かなものにするために、そして伝えるための釈尊の歩みは、ここから、憂いもない、恐れもない確かな一歩となったようです。これからの歩みも遍歴の旅です。その足元は、人々の歩みにそって共に歩む地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天道の道でもあります。しかし、今は、菩提樹の茂る葉が頭上を覆っています。

このことがいかに大事であるかと気がついたのですが、釈尊の歩いた道は、荒涼とした砂漠や

、岩がごろごろとした場所ではなかったことです。これは、水もなく、新鮮な食べるものがない場所で、いかに生きて行くか、勝ち取ろうとする闘争心ではなかったということです。そして、もっとも見落としてならないことは、目に見えない神や、神の王国という物語の世界をつくらなかったということでしょう。

自然と人々の生活のなかでの、事実を見つめて、人の暮らしの内に生きる智慧を思索したことだったと思うのです。ここに、文明が発達すればするほど、仏教の考え方を必要とする理由があるのだとも思います。人の自己が芽生えて、他者を分離し、「こちら」と「あちら」をおぼえ、「今から」と「今まで」を知り、「みずから」と「おのずから」の差が不明になったともいえないでしょうか。これは、「おのずから（自然に）」という形の自発性に、「みずから(意志)」の働きを「あるべきよう」と置き換えてみることのいかにむずかしいことか、釈尊を確かなものとして描くことができる人にとっては、今もここに歩んでいるといえさせるものです。

菩提樹の木は、昼も夜も、雨の日も、穏やかな日も、照りつける暑さの日も、ただただ腕を広げて、四十五年の歩みのうち、人々を覆っていたのだと思います。やがて時が過ぎ、釈尊最後の地に向かわせます。その日は、釈尊八十歳、二月十五日のことでした。

釈尊の言葉に、蘆（あし）の例（たと）えがあります。蘆の群生する水辺に立ち、「この蘆の群生は、一本の蘆だけでは立つことができない。蘆が寄り添い、支え合うことによって生きているのだ」という教えです。釈尊入滅の、その場所はクシナーラ、ウパヴァッタヴァの沙羅の林でした。釈尊が横たわった場所の、四方に二本ずつあったという沙羅の木、釈迦が入滅すると白色に変じたと云われています。沙羅は、インド原産の常緑高木で、小さな淡黄色の花をつけ、香りがあります。日本ではなぜか、夏つばきのことをいうのですが、これはツバキ科で、初夏から白色の五弁花をつけます。

今考えてみると、釈尊の死は、人として避けることができない生老病死という輪廻の中に息を引き取ったという意味になるのでしょうか。私には、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・解脱の七歩は、人のあり方であり、死に方ではなく、亡くなったという事実がとても大きな意味を持つものと思えるのです。天に召されたのでもなく、地に落とされたのでもなく、生老病死という時間をかけて思索し、忽然として沙羅双樹のもとで息を引き取ったという、そのことにです。

人は木々の下に安らぎを求めらるのでしょうか？植物のイメージは人の争いとは遠く離れたものがあります。無憂樹に導かれ、菩提樹という知恵を得て、そして沙羅の群生林のうちに息を引き取った釈尊の言わんとしたことは、“人は、それぞれ自身の世界を持つのですが、その世界観をいがみ合うことに苦心するのではなく、独りでは生きて行くことが出来ない”ことを考えさせると言うことではなかったかと思うのです。蘆は自覚しなくても、あるべきように、寄り添って生きるのですが、人は、自覚しなければ今生きている世界を保ち得ないと、三本の聖樹は、私たちへの教えとして、私たちの歩みに今も聳えていることがうかがえます。三大聖樹、無憂樹、菩

提樹、沙羅双樹は、私たちへの釈尊からのメッセージです。

滅度（平成19年9月18日）

滅度（めつど）（平成19年9月18日）

多くのお年寄りの人達の死に接して、やはり、病院にてベッドの上で亡くなることがとても多いことです。

M氏との出逢いは、おそらく私が住職になって、すぐに始まったのではないかと思います。彼岸や祖先の命日に、いつも、お寺の玄関の縁に腰掛けては、お話しして行きました。親戚と待ち合わせしてです。いつもベレー帽をかぶって、優しい人となりを感じていました。しかし、その奥さんの姿を見たこともなかったことに気がついたのは、昭和57年6月にお母さんが亡くなったときです。

自宅にて葬儀が執り行われたとき、今でも憶えていることは、妻であるSさんが、奥の部屋にいるものの、挨拶に現れなかったことでした。その時、精神障害とうかがったものの、私がお会いしたのは、そのSさんが亡くなった時だったのです。

それは、平成17年のことですので、実に、23年が経っていました。

Sさんの葬儀が終わって、M氏の笑みが、肩の荷を降ろして、やっと、自分だけを見つめればよい時間を持ったことがうかがえました。

平成19年9月17日、Mさんが、一人病院にて亡くなりました。お子さんも、親戚も付き合いがないのか、家の近くの親切な人達だけで葬儀が行われました。

その婦人から訃報をいただいたとき、「夫婦とも老いて、とうとう私が、M氏の人生の締めくくりとして、立ち会い、最後を全うするのに、安らかなのかしら」と云っていた言葉が印象に残りました。これでいいのだろうか、これでいいのだには、八十八年かけて歩んだM氏が、最後に選んだことに対する婦人の波紋でもあります。

四十二章経というお経に、釈尊の言葉、「人の命は吐いて吸う、短い間にしかない」があります。これは、言葉としては理解できるものの、事実として理解できない吾々のために説かれたものです。きっと、今、事実としてかみしめているのはM氏であり、M氏の姿から、浮かぶメッセージでもあります。

そのM氏が亡くなる2日前、毎日来てくれる20年来の付き合いというご近所の婦人に、「毎日来なくていいんですよ」と、これは、申し訳ないと気遣うのことなのか、それとも、自分の生に覚悟が尽いた果ての言葉だったのか、肺炎に、酸素マスクを口にして病臥することとは、息を吐いて吸う事の繰り返しのうちに時間があり、その儚い時間の中に、走馬燈のように過去の思い出が数多く思い出されていたのだと思いました。

一呼吸の時間の刹那に、どれだけの長さを含んで、目蓋を閉じているのだろうかと思います。その一呼吸を、健康にして、時間に追い立てられる吾々には、普段、意識することはできません。

それこそ到りついた過去の積み重ねたものは、そんな吐く息吸う息の、繰り返しのうちに、あるような気がいたします。

M氏の戒名に、どんなに良い字を選んでも、どんなにか考えて意味を付したとしても、この戒名を仏壇にかかげて、M氏の両親が、そしてその両親もしてきたように、毎日、線香の香を手向ける人はいないと思うと、寂しいと思います。

しかし、M氏は、そのことを含めて、考えてみれば、後半の人生をかけて、ゆっくりと時間をかけて、身に染みこませてきたのだと考えてみました。奥さんが亡くなられたときも、戒名はいらないと言われたことに、現れているとも思いました。それでも、電話口で話しをして、戒名を受けていただき、自宅から奥さんの葬儀まで出しました。

いつの頃だったか、M氏が、「結婚する前から、妻Sは、かわいそうな境遇で、私は、最後まで面倒を見てやりたいと思っています」と言われたことがありました。

M氏の生きがいのように、妻の身体の病体と、M氏の加齢との競いに、M氏は、遺言を書きたいと、この件で、お寺のことは記さなければならないとも言い、私は、お寺のことは、お寺にまかすことで、M氏の不安は解消されるように願っておりますと告げました。そして、「最後に、骨を拾うから、とにかく、今の生活を大切に」と。それに対して、「私は仏教が好きで、今でも、勉強している。後悔しないよう、悔いのないよう、まっとうしたい」と。

これは禅宗に伝わる《五燈会元（ごとうえげん）》という本に書かれていることです。

それは、釈尊が亡くならろうとした時のことです。釈尊は鹿野園のクシナ城に至り、付き随った人々に、「今私は、身体の中に異変が起きて背中が痛む、とても旅を続けることはできない、とうとう私も多くの人々と同じように、涅槃に入らなければならない」と言い。キレンガという川のほとり、そこは沙羅の木々が群生する、双樹の下（もと）で、右脇を下にして足を累（かさ）ねて、亡くなった話しです。

しかし、伝えられたところによると、再び立ち、何故か、母の為に説法したと伝えられています。その言葉は、世には無常の偈と言われており、それは「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。生滅滅し已わって、寂滅を楽と為す」です。

M氏も、眠る姿となって、語っている内容は、この無常の偈を、M氏が親しくして亡くなっていった人に対して、「我もまた、諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。生滅滅し已わって、寂滅を楽と為す」と、その姿から、聞こえてくるようです。

その言葉を発する少し前、釈尊は、迦葉尊者に西天一祖として法を伝えたのですが、側に控えていた阿難尊者には、こう告げています。

「法の本法は無法なり、無法の法も亦た法なり。今無法を付する時、法法何ぞ曾て法ならん」と。

《 釈尊の伝えた法の根元は無法への気づきであり、それが法といえるものであると。今、その無法への気づきを伝えるが、無法への気づきは、それを伝えても、それがどうして法であろうか 》と、阿難に対して、問いを残しております。

寂滅を楽と為す、楽の内容を、無法の気づきの境界とする、もう一度、法が見えてくるのでしょうか、その法と無法とは表裏一体、裏と表のような気がいたします。

その法のままに生きることを、仏道と言うものの、本来、人の歩む道に、あの道もこの道もあるものではありません。大空を飛ぶ鳥の姿の後にも先にも、紅葉した落ちる葉の、風に、光にく

るくると舞う姿の、これは今の姿であるものの、どこにも道はありません。

そのどこにも道はないところを道とよび、言い、意味を見出そうとするものは、人間の心なのでしょう。

その道がなければ歩めないのは人間であり、鳥や魚やけものは、道なき道を跡（あと）なき道とするものの、人間は、道なき未来を選択肢と言い、道なき跡を結果と生涯とあえて言うものです。

本来、後先なき道の歩む人の、幻の道を見出しての喜びや、惜しいと悔やんで、取り返しのつかないことをしてしまったとする一喜一憂、それは落葉に譬えれば、表をだし裏を見せて落ちる葉の姿を形容するかのようです。

本来、葉っぱや人の行為に、裏も表もないはずの、敢えて明暗をつけ価値や運不運として、人は生きてゆくのだと思います。その道は、来し方去ってゆくという隔たりだけでなく、すべての数える時間も年齢も、人にとっては、人生という膨大な時間が生じるようです。

過去、日本人は、人の生きた道を、夢としました。夢の道とすることで、道突き放して、その道に縛られない本来の一葉を、自己の姿として見てもらいたく思います。枝から地に落ちる時間の中に、他の一葉と比べようもない長い時間と距離があるはずなのです。

それを発見するのも自分ですし、脚色できるのも自分です。芭蕉や西行が放つ夢の言葉もそこにあると言えばよいのでしょうか。

裏を見せ表を見せて散る一葉の、裏や表は、自己が認めるものではなく、他が認める裏や表ですが、裏や表は、人に譬えれば行為です。

さて、釈尊が、迦葉尊者に対して伝えた法を、迦葉から次の阿難尊者に渡す布石としたあと、釈尊は、いよいよ、荼毘にふされます。

棺が燃え火が盛んになるも、まだもとの如しと。そして付き随ってきたお弟子さんたちが、釈尊を讃えて叫びます、「総ての人のわき起こる諸もろの盛んなる炎こそ、その火で能く焼きつくさんをことを願う。請う釈尊、三昧の火、金色に耀く身を荼毘したまえ」と。すると、棺は、火三昧をおこし、多くの灰を降らせたと言います。

「我もまた、諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。生滅、滅し已わって、寂滅を樂と為す」。

我れ灰となって土となる。この我れは、母や父の残したもの、その父や母もすでに灰となり、我れもまた灰となる。我れを精神とし、土は物体とすると、精神と物体が一如となり、その先に進むかのようです。

◎禅宗は、普段当たりまえのことに真理を見、当たり前でないことに、人の思いの介在を見つめます。僧堂では、” 自己を無くせ”、” 成りきれと” 言われたものです。

安住の地(平成20年11月15日)

《岸は海にささやく、「おまえの波が賢明に言おうとしている事を、私あてに書きなさい」、海は泡で何度も何度も書く、そして、湧きかえる絶望とともに、書いた文字を拭い去る。》タゴール

それは、平成14年の秋の彼岸だったと思う。ある檀家さんに連れられて訪ねてきたのは、その檀家の叔父さんのSだった。訪問した理由は、「鳩ヶ谷のお寺の墓を、この寺に移したいという」といことだった。鳩ヶ谷のお寺さんが、Sさんの家は、「子がないし、承継者もないのでいずれ無縁にします」と、面と向かっていうのです。

そのSさんの奥さんが亡くなって、平成9年の7月で、その時は、奥さんの実家の墓がその寺にあるので、近くて良いしとその墓所を購入したのだという。実家の墓は広かったが、そこその広さの墓所手に入れ、墓石を建てて納骨したのは、5年前のことだ。

Sさんも80歳を過ぎて、体力に自身がなくなり、急に不安で不安でしかたがないという。陽岳寺なら、甥っ子もいるし、ずっとついで詣りをしてもらえるから、是非分けて欲しいということだった。

私は、「でも、奥さんが亡くなって葬られたとき、実家の父母が眠るその墓地を、貴方が承知で選んだはずではなかったのでは？」と聞くと。「それはそうだが、こっちの方が親戚が多いので」という。

年老いて、背が曲がるようになって、「無縁はいずれ整理する」と、その鳩ヶ谷の寺の主は、よく言えたもんだと驚き、宗派はと聞くと、真言宗という。

いずれ整理するといわれた墓には、入れないのが人情だ。

何で、奥さんが亡くなったとき相談してくれなかったのと、今更だが、聞いてみても、どっちにしる、そんな願い事に、困惑しながら、困ってしまう。この寺でなければならぬ条件は、その叔父さんの実家の墓があるからなのだ。では、鳩ヶ谷の寺には、奥さんの実家があるじゃないのですかと聞くと、「家内は6人兄弟で、男もいるけれど、家内を除いて、誰もその墓の後見をしようとしません」という。一方的にそんなことを言われても、確かめようもないし、第一、その家内の実家の人達を私は知らない。それに奥さんも知らない。

少し考えさせて下さいと、断りたい気持ちを胸に、なんでこんな気持ちにさせる坊さんがいるだよと、腹を立てながら、こっちに振らないでと思ったのです。

《そよ風が蓮にささやく、「おまえの秘密は何?」「それはわたしそのもの」、蓮は答える、「盗んでごらん、私は消えてしまうから!」》タゴール

よくお墓を得ることは、安心を得ることでもありますとか、死後の安住の地を得ることはなどと、うたい文句のお墓の宣伝が入ってきます。

私は言いたいです。死後の安住の地は、土地という場所ではないんですよ。あなたが生きてあかひは、あなたの縁が結ぶモノにあるんですよ。家族や友人、あなたが親切にした多くの人たちの生き様に託されるんですよ。あなたの生き様には、託すお寺さんがはいていますかと。その後、何度か、そのお年寄りの親戚と話しがありました。

「どうしても、墓が欲しいと！」

幸いに一番小さな墓所が空いていたので、引き受けたのです。正直、話しを聞かなければ、こうはならなかったのに！と思ったものでした。

決まってから、そして数日が経ちました。さらに相談があると、何とかしてくれと……。

そして、平成15年の春彼岸のことだった。「妻の実家の墓の後見がないことに、鳩ヶ谷の寺は、三十七回忌に永代供養をしてあげるからと、300万円をよこせと言うので、耐えられなく、そのお墓も更地に戻りたいので、遺骨と、土を少し、一緒に納骨してくれ」と頼まれたのです。その必死な一途な様子に、困ってしまいます。

「それは、家が違うでしょう」と、空しい言葉と想いながらもつい口にしてしまったのです。結局、一つのお墓に受け入れることで、そのお年寄りの心が安心できるならと、「いいですよ……」と。

「永代供養はどうしましょうか」との問いに、「あなたがお参りされるわけですから、必要のないことです」と、すべては終わった。私は先がないのでと、平成14年度から15万円の護寺会費を納めたのです。

そして、鳩ヶ谷のお墓二つの墓所のお寺から改葬を許され、整理することが決まって、陽岳寺の墓所に石塔を建てたのです。小さなお墓だったので、立てに5つの遺骨を納骨したのが、平成15年の8月2日のことでした。

強い意志だったと思うのです。体の中から絞り出すように声を発して、この大拳を成し遂げたのでした。

《空は月を捕らえるために罫をしかけたりはしない。月を縛っているのは、彼女自身の自由だ。空に満ちる光は、草にたまる露のしずくの中に、おのがいやはての姿を探す。》タゴール

その年の9月彼岸に、過去帳を新しく書き換えました。やがて、Sさんの身体に変化が現れ始めました。「今、調子があまり良くないですよ。腎臓が悪いのです。」と、声はずいぶん弱っていたことを思い出します。

そして平成16年の2月に、甥っ子が亡くなったことがあったが、体調がすぐれなく出席できなかった記憶があります。温かくなれば元気になれるでしょうと思ったものでした。

思い出したように、墓参に顔を出すことはあったのですが、その数はめっきりと少なく、やがて平成18年頃からは便りだけになった気がします。

平成19年の暮れの便りに、クビ頸椎に癌ができて手術することを決断したことを聞く。手や腕にしびれがあり、それが段々とひどくなるようだと、本人はそれが辛いらしい。医者は、高齢でもあることだし、そのほかに、腹部にも癌があるので躊躇している。だけれども、そのクビの頸椎の癌さえ取れば、少しは楽になるとSさんは思っている。しかし、その癌の切除は、完全に取れるか、切ってみなければ分からないという。それでもSさんは切りたいという、優に86才を超えても、人は生きたい望みをもつ。

平成20年10月終わり、Sさんは亡くなった。親戚が決めた通夜葬儀の段取りに、私の日程の都合が悪く、最後を確かめることはできなかった。

《死んだ木の葉が大地に化して自らを喪うとき、彼らは森の命に参加している。》タゴール

築いたものが朽ちかけ、無くなろうとすることに、人の思いは死してなお強い。そう思う心に、受容し受け入れることを、どうしたら刻み込むことができるのだろうか。

親しかった人の心の暖かさをもてあそび、親切に尽くしてくれた人の心の芽を折り、今までの好意という行為にさざ波を与えたもの、それは、人が亡くなろうとする潔さ以前の心であり、遺言書にこんな効果があるとは、考えることもなかった。

「それでは、人が傷つきますと、何で、生前に話をしてくれないのか」と、四十九日後に、受け容れなければならない私も困ります。

ふと、人の気持ちがよく変わることを、徐々に、目の当たりにする。変わらなくなったことが、人の死か、そんなことを思いながら、S氏のやせた姿を思い出す。でも変わっていいのだと、変わらなかつたら余計に悩むこともあるから……。

《初めての太陽が、新しい存在の出現にあたって、たずねた「おまえは誰か?」、返事はなかった。年また年は過ぎ去り、最後の太陽が、静かな夕暮れ、西の海の岸辺で、最後の問いをなげかけた、「おまえは誰か?」、答えはなかった。》タゴール

本当の安住の地とは、安住の地を求めてさまようのではなく、生前に接した人の、すがすがしい思い出の中に住みながらも、やがて、忘れられるということかもしれない。

心眼（しんがん）（平成22年3月1日）

涅槃經の獅子吼菩薩品に、象を仏性にたとえて、目の見えない者を一切の無明の衆生にたとえている話があります。

《たとえば王がいて、一人の大臣に、「汝、一頭の象を引いて、目の見えない多くの者に示しなさい」と告げたでしょう。

大臣は王の命令を聞き、目の見えない多くの者を召し出して、象に触れさすだろう。

すると、この者たちは、象をなでて、牙に触れた者は、象は大根のようだといいた。耳に触れた者は、象は大きなザルのようなものだといいた。頭に触れた者は、象は石のようだといいた。鼻に触れた者は、象は杵（きね）のようだといいた。足に触れた者は、象は木の臼（うす）のようだといいた。背に触れた者は、象は牀（ゆか）のようだといいた。お腹に触れた者は、象は大きな甕（かめ）のようだといいた。尾に触れた者は、象は太い縄のようだといいた。

象の全体について説く者はなかったというが、しかし、これは説かなかったということではない。このように部分部分は象という全体ではないが、これらを、離れて更に象というモノがあるのではない。》と經典には書いてあります。

この物語が、禅宗の語録にあります。

問う、「衆盲の象を摸し、各々異端を説く、と。如何なるか是れ真象。」

多くの目の見ない者が、象の体をなでて、めいめい異なった部分について語った、といいますが、本物の象とは、いったい、どんなものですか」と問いました。

師云く、「仮なし。自（も）と是れ知らざるなり」と。

師は、「仮などというものは何もない。みんな真だ。牙は象の牙、耳は象の耳だ。一つ一つが真の法身片々である。それをお前が知らないだけだ」と。

禅は、「目がなかったなら、どうして見ることができるか。これは、目だけではなく、耳がなかったら、どう聴けるか。口がなかったならば、どう伝えることができるだろうか。目もなく、耳もなく、鼻も舌も身体も心もなかったら、どのように見、聞き、嗅ぎ、味わい、触れ、思うことができるか」、と。

このお話が、落語になると、心眼という落語になります。

円朝全集13巻にあるこの『心眼』は、横浜にいた圓丸という目の見えない弟子が、兄弟喧嘩をしたことから思いついて作られたものです。芝居にもなり、明治44年2月7日に、初演がおこなわれたそうです。

この作者の三遊亭円朝の戒名は、三遊亭無舌居士といひます。舌がなくして話す。京都は嵐山の臨濟宗天竜寺、滴水禅師に参禅し落語の奥義を会得したとき、この居士名をいただいたもの

です。

そして、奥義を会得したときに詠まれた歌が、「閻王に舌を抜かれて是からは、心のままに偽（うそ）も云はるる」、です。

円朝は、こうして、眼なくして見、耳なくして聞き、口なくして話すことができるようになり、作られた作品が、この『心眼』でした。

『心眼』の出だしは、「さてこれは、心眼ともうす心の眼というお話でございますが、物の色を目で見ましても、ただ赤いのでは紅梅かボケの花かバラか牡丹か分かりませんが、ハハア、早咲きの牡丹であるなど心で受けませんと、五色も見分けがつきませんから、心眼と外題いたしました」とあります。

このお話の登場人物は、大坂町の盲目梅喜（ばいき）という針医者とお竹という良くできた女房に、芸者の小春、弟の松之助、近江屋の金兵衛です。

《江戸浅草に住む盲人の梅喜は下手な針医者であるがために、仕事がない。そこで、横浜の懇意な人が横浜に来るようと呼んでくれたのです。弟の松之助と横浜に出稼ぎに行ったのですが、下手はどこに行こうとも下手で、一年か半年はいるつもりが、三日で、帰ってきてしまいました。しかも歩いてです。

長屋に帰ってみると、女房のお竹に、このいきさつをすべて話しました。

「すべては目が見えない俺の手間がかかって、馬鹿にされ、情けなく、口惜しくって、腹が立って。お竹や、これというの俺の目が悪いばかりだ。口惜しい、どうにかして、せめてこの眼の片方でもいいから開けてくれ」と、お竹に願ったのです。

もとより、梅喜思のお竹は、茅場町のお薬師さまに信心をして、三七、二十一日断食して、夜中参りをしようと決めたのです。そして、満願の日、梅喜は、疲れ果てお薬師さまの賽銭箱のそばに寝てしまいました。

朝になり、近江屋の金兵衛さんが、お薬師さまにお参りしたとき、寝ている梅喜を見つけます。梅喜は目が開いて、視界が開けてみると、すべては、初めて見るモノばかりで、それこそ、金兵衛さんも初めて見る人となっていることに驚くのです。

金兵衛さんと二人して、帰りの、目が見えなかった時の世界と、目が開いて見える世界は、まるで二つの世界があるようでした。見える世界は、華やかで、大きなモノと小さなモノ、川や橋や海、それに人の器量までもがさまざま、器量の善し悪しは撫でたって分からないことです。

梅喜は、帰りしな浅草の観音さまにお参りします。観音さまのお堂の隅に、人だかりがする場所があります。そこには大きな姿見がありました。金兵衛に呼ばれて、その鏡の中を覗いてみると、そこには、いい男の梅喜がこちらを覗いていました。

梅喜は、歩きながら思いました。「私はこの位の器量を持っていながら、家内は、金兵衛さんが言うことには、鎧橋のうえを渡っていた下女より悪いという」と。

その人混みから、梅喜は金兵衛さんとはぐれてしまいます。そこにたまたま芸者の小春に出会います。芳町の小春姐さんは、もともと、梅喜の下手な治療を受けながらも、惜しいくら

い実にいい男だと、目が開いていたらと、岡惚れしていました。

そこで出会った小春は、お腹もへっていたので、二人して釣り堀の料理屋へ……。

その頃、お竹は、眼がさめてみると、自分の目が見えないことに、「これは、お薬師さまが、願いを聞き届けてくれ、亭主の目が開いた」と、喜んでいた。そこに、梅喜を見失った金兵衛さんが知らせに来てくれ、いきさつを聞かされたのでした。お竹は、梅喜の杖をたよりに、浅草を捜し捜し、その茶店にたどりつき、梅喜と小春の部屋のふすまを開けます。

お竹、「何だとエー」。梅喜、「どこの人だエー」。お竹、「お前の女房のお竹だよ」。梅喜、「これはどうも」。お竹「何だとエー、今、聞いていれば、あいつの顔はこんなだとか、あんなだとかでいけないから、小春姐さんと夫婦になろうなんて、お前さん、そんなことが言えたりかねエー」。……………。

お竹は、そんな梅喜にあきれて、「死んでやルー」と、止めようとする梅喜ともども、庭の池にドブーンと。

「しっかりおしよー梅喜さん、起きよー」と揺り動かされて起きた、梅喜は、「ああ……夢かア、おや、目が見えないって者てのは、妙なもんだなア、寝ているうちにはいろいろのものが見えたが、眼がさめたら何も見えない。『心眼』というお話でございました。》

目だけで見ると思うと、なんと浅はかな、見るモノと見られるモノと、二つになった途端に、狂い始めてわからなくなる人間の、夢と現実を織り交ぜるこの心眼。

円朝が悟ったとき詠んだ、「閻王に舌を抜かれて是からは、心のままに偽（うそ）も云はるる」の歌。心のままに偽も云はるるは、人の思いという煩惱妄想も、そのまま、口なくして話すと、それは真となって、耳なくして聞く人の心を打ちます。

目なくして見る梅喜と目が開けての梅喜、どちらが、人として真か。

円朝は、確かな目で見える現実を、不確かな目なくして見る世界にこそ、たしかな現実があると、心眼で示します。こうして、私たちに、それでも、どちらが現実かと考えるようにと……。

円朝の辞世の句は、「目を閉じて聞き定めけり露の音」となっている。しか墓碑には、「聾（みみし）ひて聞き定めけり露の音」とある。これは、後に西宮の南天棒老師が、「聾ひて」では、理屈に読めるので、ということらしい。

目閉じては、心無くしてと読める。心空っぽこそ、心眼の極意。

とかくこの世は

とかくこの世は…… 巡礼 Jyunrei ……

人の一生は、巡礼の旅路なり

日ごと遍路は、遠き道あり、近き道あり。往く道もあり、もどり道あり。

巡礼の旅路は、巡り廻る道。そして、巡り廻る旅路は、回帰と再生の繰り返し。

回帰は、人の振り返りなら、再生は旅立ちか。

振り返りは、じぶん自身を問うことなら、旅立ちは、今的一步を歩むこと。

白装束は、死に装束。杖は墓標の今日の旅路なり。

（法事において、焼香に行くことは回帰として、席に戻ることは、再生として。

立ち止まることなく巡り廻る旅路に、人生を任せることも巡礼の旅路なり。 ）

祈り（平成17年11月29日）

品位（平成18年1月20日）

ニャンニーシズ（平成18年3月1日）

鍵（平成18年4月25日）

チベット（平成20年5月1日）

祈り（平成17年11月29日）

祈り（平成17年11月29日）

大事をなそうとして 力を与えて欲しいと仏や神々に求めたのに

慎み深く柔順であるようにと 弱さを授かった。

より偉大なことが出来るように 健康を求めたのに

より良きことができるようにと 病弱を与えられた。

幸せになろうとして 富を求めたのに

賢明であるようにと 貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして 権力を求めたのに

仏や神々の前にひざまづくようにと 弱さを授かった。

人生を享楽しようと あらゆるものを求めたのに

あらゆることを喜べるようにと 生命を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが 願いはすべて聞きとどけられた。

仏や神々の意に添わぬ者であるにかかわらず 心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた

私はあらゆる人の中でもっとも豊かに祝福されたのだ。

この詩の作者はわかりません。ある患者の祈りとします。そして、祈る対象は、大いなるものとして、仏や神々に書き換えました。

この詩から、禅の言葉、“放てば手に満ちあふれている “ことの自覚が導かれます。

今、自分が持っているものに対して、それゆえ求めていることを、仏や神々に放てば、彼の求めている心そのものを、そのまますくい取ってくれたことになるでしょう。聞き届けてくれたことになるのでしょうか。

求めた私の心は何処に行ったのでしょうか？授かったものは、普段私が持っていたものです。私は、弱かったから、くじける存在だったから、力を求めたのに、弱さを授かった。授かった弱さと、授かるまえの弱さは、同じものなのでしょうか？

弱さと強さという対立する世界のなかにいた自分に気づいたとき、今のままの自分が授かった命だったとの、これは気づきです。

また、求めるまえの弱さは、現実の私の目の前の闇です。それは、私自身が創造する闇です。その闇を、怖いと見るか、美しいと見るかも、私が創造していると言えるでしょう。与えられた私であると自覚したとき、新しい自己が目覚めます。そして自覚が浮かび上がってまいります。

仏や神々の意に添わぬ者としてこそ、赤裸々な自分を、仏や神々のまえに晒すことではないのでしょうか。そして、じぶん自身の心が空っぽになったとき、与えられ充たされる状況が出現し、喜びが湧くのでしょうか。この故に、授かる私が現れるのだと思います。

仏教が無我を主張している理由は、あまりにも、私という自己にかかわる悲惨な現実、不幸な事件、多くの葛藤と揺らぎがあり、移りゆくことの負の面が、人生には多くあるものだと、釈尊の観察かも知れません。

この私は、過去未来を含んで、多くの記憶の集まりであり、情報の交信の集まりであり、力の集まりであり、願いの集まりです。

もう一度、実体なきものとして、そして私となるために、だからこそ、生かされて、助けられ支えられ、語り尽くせぬ多くのしるしから、この祈りや願いを放つ機会を通して、確かなものを私の心に迎え入れたいと思います。

生かされていることの自覚は、同時に生きていくことを支えるものとして、この世界を、過去未来を含めた、この生かされているものの重々無尽の集合体として見えるかと、問いを發します。

鳥がいるから 空がある

空があるから 風船がある

風船があるから 子どもが走ってる

子どもが走ってるから 笑いがある

笑いがあるから 哀しみがある 祈りがある ひざまずく地面がある

水が流れていて 昨日と今日がある

黄色い鳥がいるから すべての色と形と動き 世界がある

と、谷川俊太郎の詩集『魂のみなもとへ』の詩となります。

私とは、私たちとは、そして世界とは、あらゆるものが交差して繋がっていることを現しています。

そして、このことは、私たちが自由自在に結びつける自由な存在のあかしであることをも示しています。

私が命を吹き込むわけですから、この繋がりの広さと奥行きは、私の命の吹き込み方にもより、大きくなり、小さくもなり、せつなくもなり、喜びともなります。

これは、自由な世界を形づくる私が、私を対象化することで、その繋がりを変化させるからです。ものに命を吹き込む達人として、谷川俊太郎は、世界を、紙面に産みつけます。

私たちは、その世界で、私一人の道であるかのように、山あり谷ありと、喜びがあり、悲しみがありと、歩むのです。

さて、陽岳寺護寺会の催すご祈祷は、“無事や平常であること”をテーマと考えます。

何があっても無事を祈ることです。無事の基本は、変わり続けることの中に、何事にも変化しない自身の心の姿の自覚です。

そのために、このご祈祷最初のお努めは、先ずは、何事も受け入れられる心構えとして、無心となることが強いられます。これは、ひとえにじぶん自身に偽りのないようにと、素直さをいつまでも持てるようにとの意味です。これを懺悔と言います。

懺悔について、故人は、「懺悔の味わいは、人生の味わいである。」と記しています。

しかし、その懺悔も、人生において、苦渋や自責、許されることのない罪、知らずに傷を付けていた事実の認識、叱責や出生において、苦悩や後悔がなければ懺悔も成り立たないことでもあります。原罪を持たぬ我々は、生活の中の、忙しさの中に、過ぎ去ることで、忘却という世界の中

に生きているかのようです。

祈禱とは、人の祈りを昇華させるものであると思うのですが、祈りがなければ、ご祈禱は成り立たないものです。その祈りの中身が、悩みや感謝とするなら、ヘルマン・ヘッセが、『放浪』のなかで、しるす言葉が光ります。

「祈りは歌のように神聖で、救いとなる。祈りは信頼であり、確認である。ほんとうに祈るものは、願いはしない。ただ自分の境遇と苦しみを語るだけである。小さい子どもが歌うように、悩みと感謝を口ずさむのである。」

祈りとは、消滅と生成に間に渡された変容の記しに我が身を投ずることであり、その遙か彼方からの光を、あるかなきかの自己の存在の、はかない揺れ動く私に定着させるために、その変容に記しの中に我が身を完全に没入させることです。

消滅と誕生の間に揺れ動く私の命は、祈りという行為により、揺籃する心から転身します。全てはこのことが尊いのでしょう。

じぶん自身の計らいの中の、気づきは、人を変えるものです。この変えられた自分を希うことを、このご祈禱の本意と、考えました。

そして、過ぎゆく年の、来る年の、そして今日ただ今の無事や、平常であることを願い、祈りしたいと思います。

無事や平常は、逆に、この世間の日常ゆえに、対するものとして考えられます。日常を否定するのではなく、日常の生活のなかで、平常が現れなくてはならないのです。

転身への祈り、それは、徹底できぬ自身への、素直さへの回帰という意味でもあります。

(この文章は平成17年11月29日陽岳寺で厳修された、“ご祈禱会と法話会”の案内へのお知らせに同封されたものです)

品位（ひんい）（平成18年1月20日）

回向（えこう）といえば、その回向を振り向ける相手により、数多くあるのですが、相手が和尚であれば、回向の最後は、「品位を増崇(ぞうそう)せんことを」で結ぶのです。それは、朝課の歴代和尚の回向の項にも登場いたします。その時は「増崇品位」として。ズンスンヒンニ〜と音読みするのです。

暮れから正月にかけて、お寺に籠（こ）もることで、もっぱら空いた時間は読書に精を出すのが毎年の習いになっています。

今年も、山本一力の貯まっていた数冊の本に、高村薫の『新リア王』『晴子情歌』に専念いたしました。あれ小説ばかりじゃないのと思われるかも知れませんが、仏教書は普段読んでいるということですか？でも小説を、かく下に見ているということでは、決してありませんから。小説は、書く人の、虚構の世界なのですが、シェークスピア、ドストエフスキー、サルトル、カミュ……等偉大なものは、虚構によってこそ表現されるものでもあり、その時代の深さや浅瀬を表現するからこそ、我々は読みふけるのだと思います。

さて『新リア王』は、圧倒的な迫力で読むものを魅了します。80年代という時代に生きた政治家の主人公と、その不肖の息子、禅僧彰之との対話でしたが、この本を読みたかったのは、禅僧彰之が臨済宗と親戚関係にある曹洞宗の僧侶だったからでもあり、彰之が父に何を話すのか、彰之の苦悩や生き方が父にどう影響するのかという興味もありました。そして読み終え、今度は、母晴子の息子彰之への手紙を通して語られる、『晴子情歌』でした。

晴子の手紙の中で、祖母富子の夫、康夫感を述べる前半の場面で、「品位」という言葉が、目につきました。

「どちらにしろ、本来は生きることと一つであるべき人間の品位が、なほも教養や理想と同義語だった富子の中で、康夫がいつどのやうにして望ましい男性像になっていったか、たぶんリアリズムの目よりも浪漫的な情緒のほうが似合ふ話しただだらうと私は思ふのですが、はて。」生きることと、人間の品位とは、そうか同じものなのだと、高村薫は小説のなかで諭します。歴代和尚に手向ける「増崇品位」ズンスンヒンニ〜！としての回向は、和尚が遷化することからはじまります。

遷化とは移り変わりであり、この世に留まる我々が、目に見えない遷化した和尚の逝く果てでの教化活動を応援する句なのです。「品位を増せ！」と、香を手向け、偈を唱えますが、呪文のように、幾度となく唱えたでしょうか。

晴子情歌を読みながら、ふと、本来は生きることと一つであるべき人間の品位となれば、何も和尚だけの問題でなく、道元禅師が言う「自己を諦（あきら）めるは仏家一大事の因縁」でなく

ても、キリスト教であれイスラム教であれ、これは、人として当たり前のことではないかとも思っています。

人が悩むのも苦しむのも、楽しむのも笑うのも、救われることを願うことも、すべては他者と自己の交わりの中での、自己のことですから……。

この文章を書いている正月の、窓のそとを、大きな声で「信ずるものは救われる」と街宣カーが叫びながら、通り過ぎます。これはこれで、何か正月の風景となっていることを思います。そして、「信ずるものは救われる！神は降りたもう……！」のいかがわしいガナリ声に、反応して、「それでは信じないものは救われないのか、そんな片寄った、ちっぽけな神様しか持ちえない集団など、世の中を惑わすだけだ」などと、浮かびます。

何処かで聞いた、インドの昔話で、子猿の母ザルにしがみつき歩く姿と、子猫の母ネコに首根っこをくわえられて歩く姿に、同じ母親を信ずる姿にも、見るだけでは違いは解らなく、しがみついている自己と、まかせきった自己に、自分はどちらだと、自力か他力かと、古くさい論争が頭に浮かびます。何ですか、単なる手が使えるだけの話なのに……ですって？そうなんですけれど、もしかして、何億、何十億年前の記憶が作用しているのかも知れませんから。

信ずることによって神は存在するのか、神が存在するから信じるのか、対象の神はどこ吹く風のように、やがて、世界は神々の代理人たちが、テロとして諍い、結果として巻き込まれるのは何も罪がない人、神の子たちです。

私たちのゴッドと私たちのアラームは、どちらが正しいのだと、神がいわないならば、我々が存在を示すしかない。そんな神々もいれば、2000年の鎮（しず）めの静寂の中に暮らす日本の神々もいるのです。

高村薫は2002年7月のオール読物の『晴子情歌』の書評に、「阪神大震災を体験して、わたくし自身根底から変わりました。キリスト教では死は神に召されるということだけけれど、六六〇〇もの震災の死者のことを思うと、キリスト教的な考え方では死を受け入れられない。この理不尽を納得させる方法として、仏教に行き着いたんです。それで僧侶を主人公にしました。」と、記していました。

「本来は生きることと一つであるべき人間の品位とは」と問いかけ、ズンスンヒンニ〜！ズンスンヒンニ〜！と繰り返す内に、これは、遷化した和尚たちの、私たちへ語りかける言霊ではないかと気づきくのです。

本来あるべき人間の品位が、ブレーキのきかなくなった欲望という名の電車となり、知らずに悪が身に覆った果てに輪廻することは、生きることの意味が、歪みずれることです。

ちなみに、輪廻とは、“流される”が語源といわれるそうですが、“主体性がなくなる”という意味にとってもよいのではないのでしょうか。

生き活きと生きることこそ、人間の品位なのだと考えます。

黒澤明監督の「生きる」という映画の冒頭は、男がひとり映ります。そしてナレーション。

「これが、この物語の主人公である。しかし、いまこの男について語るのは退屈なだけである。なぜなら、暇をつぶしているだけだ。彼には生きた時間がない。つまり彼は生きていないからである。」

臨濟宗には14の本山があります。京都には7ヶ寺、妙心寺・大徳寺・相国寺・東福寺・南禅寺・建仁寺そして天竜寺です。その京都の嵐山天竜寺の峨山（がさん）老師の逸話です。それは明治の時代のことでしたが、あるとき一人の信者さんに、峨山老師がたずねました。

「おまえさんが自分の母親と子どもと一緒に大きな川の土手を散歩しているとす。その時、突然、二人が足をすべらせて川の中に落ち込んでしまった。どちらも溺れそうになっている。さあどちらを先に助ける？自分を産んで育ててくれた大事な母親を先に助けるべきか？目に入れても痛くない可愛いわが子を先に救いあげるのか」。

その信者さんは、あれこれと考えるのですが、答えが出ずに老師を見つめました。峨山老師が答えました。

「まず飛び込め。そして自分に近い者から助ける。たとえどちらか一人しか助けられなかったとしても、人倫にもとめることはない。何も悔いることもない」。

生き活きと生きるとは、何もむずかしいことではなく、峨山老師にいわせれば、流れの(輪廻)中に飛び込んで必死に、無心に、ただただ泳ぐ姿であることを教わります。そこに、人間の品位が現れるとするなら、このことの評価はじぶん自身にはないことにも気づきます。

まずは生き活きと生きる、そこに禅があるのでしょうか。峨山老師は、「何も悔いることはない」と断じます。きっと二人とも助けることが出来ないこともあるはずですが、それでも「悔いることはない」と、これは禅の恐ろしさです。ここまで生き活きと生きること、それを成りきるというのでしょうが、頭で理解できるのですが、受け入れられない私の未熟さが、ズンスンヒンニ～！ズンスンヒンニ～！と繰り返すのです。

ニャンニーシズ（平成18年3月1日）

『ニャーンキ、シズ、フジセウカーン。

ジョウライフズー、ダイヒエンモンブカイジンシュウー、スシズヒンブーンニー。

ガサンチクオショウーダイゼンズー、シンジーズンスンヒーンニー。

ジーホーサンシーイシーシブ、シソンプサモコサー、モコホジャホロミー。』

上記を漢字にすると下記のようになります。

『仰冀真慈、俯垂昭鑑

上来諷誦、大悲円満無礙神呪、所集殊勲奉為。雅山直和尚大禪師、真慈、増崇品位。

十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。』

この回向（えこう）を漢訳致しますと、下記のようになります。

「仰（あお）ぎ、冀（こいねが）わくば、真慈（しんじ）、俯（ふ）して昭鑑（しょうかん）を垂（た）れたまえ。上来（じょうらい）、大悲円満無礙神呪を諷誦（ふじゆ）す。

集むる所の殊勲（しゅくん）は、雅山直和尚大禪師、真慈の為に奉（ささ）げ、品位を増崇（ぞうそう）したてまつる。十方三世一切諸仏、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。」

祖師回向（そしえこう）と言いまして、言い伝えられたものであります。これは、お寺の開山和尚とか、再興を果たした和尚の徳を讃える回向ではなく、普通の歴代の和尚に捧げる回向です。

発音は、中国の呉音ないしは、宋音と言われておりますが、正しく発音しているつもりでも、意味が呪文のように、果たして先住や歴代に通じているのか、私の中で、意味なく巡るかのようです。きっと、この疑問は、確かに伝わることの、さらに、ことばとして、私のなかに伝わらないことのジレンマとして、過去の伝統の色褪せてとして、感じていることなのだろう。

私たちの普段の言葉は、共通な言語の環境がなければ意思が通じないことではあります。もう一つ、言葉自身が語っているものがあります。それは関係です。ことばである限り、その発する場において、その関係が意味を持つものだと思うのです。

意味不明の言葉の羅列も、この言葉としての土壌が整っている環境では、十分に意思をもって発せられる、届くものです。

よく「遺憾に思う」ということばが多くの人々の口から発せられますが、そのことばを耳にする私は、意思は通じるものの、生の感情が遠ざけられて、無味なことばとして“遺憾”の中身が伝わってこないのです。それは、われわれの普段に使用することばとして、“遺憾”ということばはなく、異質な特別なことばであることと同じです。

それは、この“遺憾”ということばが、儀式の終わりを無理やりにもたらすことばとして使用されるかのように、この遺憾ということばを聴く私たちにとっては、終わったものとして、自身の中に共通な場を持っていないかのように思えるのです。そのことを承知しながら話すことばに、あいまいさが残ってしまうからです。

同じように、この“真慈”ということばも、ジョウライフズーも、そのことばがいつもの通り

に空中に漂っては消えていくことに、これはことばだろうか、発する人の意思は、これはどんな意味として考えればよいのだろうかと戸惑います。

「自己意識は他者にたいして即自かつ対自的に存在するかぎり、また、そのことをとおして、即自かつ対自的に存在する。つまり、自己意識は承認されたものとしてしか存在しないのである。」

上記は、ヘーゲルの精神現象学の一文です。

自己意識の他者を通して成立する過程こそ、自己の存在そのものであるとする理論、それは、私とは、他者を認めるとき、あるいは、他者に話しかけるとき、自己が相対することから、意識するかにかかわらず、相即的に他者と自己の関係が成立するといえます。

これは、釈迦の縁起論“拋って成りたつ”という事実の見通しと違いません。父は子に対して、夫は妻に対して存在することとし、夫の根拠は妻にあり、父の根拠は子にあるとするモノの見方は、他者を通して成立する過程こそ自己意識の関係性であり、それを、自己意識は承認されたものとしてしか存在しないと、ヘーゲルも考えました。

この過程にあるものは、仏教的に考えてみれば、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の六識の認識作用であり、逆に、自己や他者の存在を規定する手段ともいえるでしょう。

この関係の只中に在るものがことばです。ことば自身は、意思の伝達や表現するものですが、それだけではなく、ことばそれ自身が関係性を現しているものといえるからです。

また同時に、関係性において、ことばは在るともいえると思うのです。

この『ニヤーンキ、シンズ、フジセウカーン』は、はたしてことばだろうか？という疑問がわきおこります。浪々と堂内に木霊する『ニヤーンキ、シンズ、フジセウカーン』は、鐘の音によって区切られ、どこに目指そうとしているのか。それは、この堂内だけの木霊なのか。

共通な言語関係の途絶えた世界、それはことばだけでは意思が通じないことで、まして、生の感情は生起しない。それでいて、多くの衆僧の読経は、胸に響く、これはことばなのか？荘厳な音楽なのか

験（げん）を担ぐマジナイも含めて、自己自身と他者との関係、それは多くの死者を含めてでしょうが、共通なものがなければ、お互いの関係の内に流れません。

そのお互いの関係性は、釈尊が見通したとおりに、常に変化しているとすれば、この『ニヤーンキ、シンズ、フジセウカーン』こそ、変わらないことで、お互いの関係に流れないものとして、意味が通じないモノとして在るのではないかと思ったりもします。

ヘーゲルには自己意識にかんして「われわれであるような我、我であるようなわれわれ」という言葉がありますが、この言葉は、子どもに接するとき、父や母に接するとき、親しい知り合いに接するとき、子どもは、親は、知り合いは、そして私へと、他者のなかでの私から、私のなかの他者を強く意識させる言葉でもあります。

しかし、家族から見れば死者は、亡くなったときから、いつも“我であるようなわれわれ”だと思ふのです。もっとも、われわれであるような我として、死者を考えたこともない自分に気づきます。

この関係を考えることは、自分にとっては、じぶん自身の関係の中での存在を考えるとすることもあり、だからこそ、この関係を含めて、心というのだとも思うのです。

トルストイの『人生論』に次の言葉があります。

「お前は、みながお前のために生きることを望んでいるのか、みんなが自分よりお前を愛するようになってもらいたいのか。お前のその望みがかなえられる状態は、一つだけある。それは、あらゆる存在が自分よりも他を愛するようになる時だけだとしたら、お前も、一個の生ある存在として、自分自身よりも他の存在を愛さなければいけない。

この条件のもとでのみ、人間の幸福と生命は可能となり、この条件のもとでのみ、人間の生命を毒してきたものが消滅する。存在同士の闘争も、苦痛の切なさも、死の恐怖も消滅するのである。

他の存在の幸福のうちに自分の生命を認めさえすれば、死の恐怖も永久に消え去ってくれる。」

あらためて深く思うことは、『シンズーズンズンヒンニー』という、真慈という名の、総てを捧げ尽くした信（まこと）こそ人間の幸福であることを貫くことに、仏教は、明らかにして、あるがままの姿を示していると思うのです。

巡り来たった、今日この時、真慈を尽くした、亡くなってもっとも親しい者に、謹んでお経を念誦して、追悼のための盛儀を厳修することです。じぶん自身の中にあるからこそ、もっとも親しむ他者が、優れて築き上げた気高さは、偏に、自分のすべてを滅ぼして、ただ人のためだけに、ただ相手の中にだけ生きようとすることに心がけたこととなり、それは、親しき者に接する人の目や耳や鼻や口や皮膚ですべてを受け止め、他者の胸で呼吸し、他者の頭で考え、他者の心で感じることを、修めたからです。

このことによって初めて人間は、他人の幸福を引き寄せて自分自身のものにすることができます。今日、集う殊勲は、この真慈を捧げ、共に、この気品に包まれることを。

ジーホーサンシーイシーシブ、シソンプサモコサー、モコホジャホロミー。

鍵（かぎ）（平成18年4月25日）

一つの鍵が 手にはいると たちまち扉はひらかれる
固く閉ざされた内部の隅々まで 明暗くっきり見渡せて
人の性格も 謎めいた行動も 物と物との関係も 複雑にからまりあった事件も
なぜ なにゆえ かく在ったか どうなろうとしていたか どうなろうとしているか
あっけないほど すとん と胸に落ちる
ちっぽけだが それなくしてはひらかなない黄金の鍵
人がそれを見つけ出し きれいに解明してみせてくれたとき ああ と呻（うめ）く
私も行ったのだ その鍵のありかの近くまで
もっと落ちついて ゆっくり佇（たたず）んでいたら 探し出せたにちがいない
鍵にすれば 出会いを求めて 身をよじっていたのかも知れないのに
木の枝に無造作にぶらさがり 土の奥深くで燐光を発し 虫くいの文献 聞き流した語尾に内包
され 海の底で腐食せず 渡り鳥の指標になってきらめき 束になって空中を ちゃりりんと飛
んでいたり
生きいそぎ 死にいそぐひとびとの群れ 見る人が見たら この世はまだ あまたの鍵のひびき
あい ふかぶかとした息づかいで 燦然と輝いてみえるだろう 《茨木のり子》

茨木のり子といえば、『生前の死亡通知』で、この世をおさらばすることになりましたと、平成18年2月17日、79歳で忽然と去っていったことは、いまだ、記憶のなかにハッキリとあります。

この詩の“鍵”を、ヘミングウェイの『シッダルタ』だったか、“さとり”と言い換えてみると、何とまあア、私にとっては、違和感のない詩になります。彼女には、わるいことですが、“気づきや目覚め”と変えてみても、意外と意味が通じることに気づきます。しかしどちらにしても、鍵の向こうの世界を対象にするかぎり、鍵や悟りは、目的ではありません。

彼女は、この詩のように、燦然と輝いている世界を、あえて、見ないで、旅立って行ったのでしょうか。きっと、多くの人々と同じように、その足並みのなかに今も彼女の足音が聞こえるようです。その足並みの音から、チャリンという響きあいをなびかせて……。

鍵は、他者に対して、心を閉ざすとき現れるとするなら、鍵は、どこにでもあるもの、些細なもの、ちっぽけなものです。しかし、探し出そうとして、それがすぐ近くにあってしても、手にすることはできないものとして、まるで、人間を見透かして生きるみたいでもあります。しかも、それなくしては世界がひらかなない、黄金の鍵。

彼女は、燦然と輝く世界を夢見ながら、その世界の鍵を探そうと語る世界は、鍵が焦点にあって、世界ではありません。鍵を持っていない人から見たら、生きいそぎ死にいそぐ人々の息は、ため息やあえぐ息だけではなく、きっと、ゆっくりと佇み、談笑し、会話に熱中する息も含まれているはずで。それらの息づかいは、見る人から見れば、ふかぶかとした息づかいに、すべてが

活き活きと見えるのでしょうか。

かすかな希望は、かぎ自身が出会いを求めていることから、探すことをしなければ、かぎみずから飛び込んで、手の中におさまっているのかも知れません。

長谷川宏氏は、近代出版発行『茨木のり子 思索の淵にて 一詩と哲学のデュオ』にて、天国の鍵として、茨木のり子とデュエットしています。

『鍵はそんな確固たる存在としてそこにある。鍵から、暗闇に包まれた小さな暗闇へ、そしてその向こうにある箱や部屋へ、さらには箱や部屋におさめられた宝物へと、想像の糸が確実に通じていて、心をときめかせる。鍵は、存在そのものが象徴的だ。さて、ローマのサン・ピエトロ寺院のシスティーナ礼拝堂といえば、なんととってもミケランジェロの天井画が圧巻だが、見ものはそれだけではない。首を上にも曲げないでも見ることでできる壁画に、これはと思える一点、「ペテロに鍵を渡すキリスト」の絵がある。

ラファエロの師ペルジーノの描いたフレスコ画だ。「マタイによる福音書」の「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」を図像化したもので、鍵という象徴性が見事に表現された絵だ。

』

これは、イエスからペテロに、今、天国の黄金の鍵が渡されようとする絵だそうですが、今から、2千年前に、そんな鍵の発想があったということが驚きます。これは、金属の鍵としてです。釈迦は、迦葉の成長を、微笑んで許しました。知るものは、渡さないし、言いもしない、それでいて渡っているものです。

古来、日本の多くの庶民は、鍵を手にした生活はしていなかったのだらうと思うのです。蔵などはめったになかったし、庶民の部屋をくざるとすれば障子だけで、外界とのしきりは木戸と心張り棒の暮らしは、鍵など必要のない世界だったのではないかと……。

きっと、開けなければならぬものなど、考えたこともなかったのではないか。お天気に鍵はないのはもちろんのこと、畑や山、漁に出ることに鍵は必要なく、おそらく運命の扉を開けることなど考えもしない。そのことは、扉を開けて外にでて、きっと、家を護ってくれている人がいて、天気が悪ければ、家にいて、洗濯もできないし、まして漁にはでられない。浦島太郎の玉手箱だって、鍵はなかった。

もう一度、彼女の『鍵』を読み直してみると、確かにあると思ったのでしょうか。そして、すぐ近くまでいったのですが、どうもあるらしいと意識の中に思っているものの、鍵が、確かにあると確信してはいません。問いはあるけれども、答えはない、それが鍵となる。

鍵は、守るべき物ができてこそ生まれたものであるといえ、禅は、じぶん自身が、木の枝にぶらさがり、土をたがやし、虫くい文献にみいり、聞き流した語尾にとらわれず、一人静かに部屋にいようと、一步を踏み出すこと、そこに チャリリンと揺れる自身を見出します。

禅は、問いそのものではなく、問いを発するそのモノ自身を問います。しいて鍵というなら、問いを発した心そのものといってもよいのでしょうか。

南獄懐讓（なんがくえじょう）という禅師のことです。

禅宗で中国から六番目の祖師、恵能（えのう）禅師に南獄が訪ねたときの故事です。

「そなた、これまで何処にいたか」

「嵩山（すうざん・達磨がいたところ）より、まいりました」

「何ものが、やってきたのだ」

「これとか、それとか、あれとか言えば、すでに違ってしまうでしょう」

答えの鍵を探そうとすれば、迷いの中に、南嶽懷讓禅師は、「言えば違ってしまう」と答えています。

何処にも行かない、何処にも去らない、そのままの自己、そのままを示した答えだと禅師は示します。

禅は、おまえさんそのものが、鍵穴の向こうにいるじゃないかと、扉の向こうに立っていることを気づかせます。そして、問いであるとともに、問うモノそのものが答え、言うモノは知らず、知っているモノは言わぬ。

晴れた日の空に浮かんで流される雲を見ていると、雲は流されていくことに、全身に陽を浴びながら消えていくことに、何の恐れもなく、こだわりもなく、これがあるがままの燦然とした姿なのだと気がつきます。雲は、知っているのか、知らないのか、人間の思いをこえているかのようです。

苦しんでいるものに、悲しんでいるものに、かたわらにいて、何も言うなと肩に手を添える姿、燦然と輝いて見えるのは、私だけでしょうか。どうやら、生きいそぎ、死にいそぐ世界に、見つめるだけではなく、ふかぶかとした息づかいが必要と思うのですが。

チベット（平成20年5月1日）

地球のいただきに7,000年という年月をへて暮らしてきた民族が揺れている。揺れているどころか、そこに文化を継承して住めないのだ。地球のいただきという神秘の扉の中に暮らすからこそ、伝わって生きてきた神秘が途絶えようとするあえぎのような気がする。

多くのいただきの民族が山から追われて、地平に暮らすことを考えてみただけで、ぞっとする。あれから50年が過ぎているからでもあります。

赤茶色の衣を着たラマ僧たちの敬虔さ、そして、チベットの人たちの聖地への旅姿を見るにつけ、それは、遙か彼方に向かって五体投地を繰り返しながら何ヶ月かけて旅をする人たちの姿に、圧倒されるからです。

チベットの創世記は、水中の山脈が隆起したことから始まります。そして、この物語は、水が引き4,000メートル級の高原が誕生したことから始まり、今に至っています。

サンスクリット語で、雪の住みかというヒマラヤが誕生し、その雪の国に最初住みついたものたちは、野蛮な聖霊や動物といった物の怪たちと、彼らの伝説にあります。

その雪の国に、やがて人々が誕生するわけですが、その人々の子孫は、観音菩薩にさかのぼります。それは、観音菩薩の化身としての1匹の雄猿と、ターラ菩薩の化身である鬼女です。この二人は、ヤルルン溪谷（古代王朝発祥の地）にて結婚し、6人の子供を産みました。その子供たちこそ、チベット民族のさきがけです。この古事により、チベットという名は、慈悲の菩薩、観音菩薩の地という名前が付されたということです。

人類の起源が類人猿ということに驚きはしないものの、鬼は想像がつきません。しかし、鬼は、類人猿よりも精神面や容姿において人間に近い存在といわれていることに、彼らの創造性豊かな感性を感じます。

そのチベット人による王国が誕生したのは、紀元前127年のことです。そして、やがてチベットは、チベット人により統一されるのですが、7世紀に入ってからでした。その頃の宗教は、ボン教という教えであり、栄えていたということです。

チベットに、インドから仏教が広がるのは、8世紀です。またたく間にチベットに広がったのですが、ボン教にその広がる下地があったからです。

幾多の変遷をたどって、仏教は、人々の信仰を築きあげます。13世紀にはいると、チベットはモンゴル帝国により統治されるのですが、チベット仏教は皮肉にもモンゴル人の心を改宗させてしまいます。モンゴルにチベット仏教が伝わったのはこうした理由によるものです。

そして14世紀の後半、チベット仏教は教理と実践による一大体系となり、宗教国家として現代に至っているといえるでしょう。

仏教には三宝という仏・法・僧がありますが、チベット仏教は、それに、生き仏が加わり、四宝という特色があります。今、ダライ・ラマとパンチョン・ラマという言葉がニュースに伝わ

ておりますが、ラマとは活き仏のことです。そして、その特色は、小乗、大乘、密教（タントラ）を体系にまとめあげて、実践の指針を提示していることです。

チベット仏教ゲルグ派の高僧ゲシェー・ロサン・ケンラブ師の法話が、<http://www.tibethouse.jp/culture/shine.html>にあります。師は、ダラムサラのネチュン僧院で教えていて、2002年の夏に来日いたしました。

《私たちは他の存在を味方・敵・無関心な相手の三つに分別します。このような分別を行うのも自分自身へのとてつもない執着心があり、なんとしても自分を守りたいと思っているからです。自分の味方である存在は慈しみ、自分の敵である存在には怒りをおぼえる。さらに愛着も怒りも覚えない無関心な相手というものがいる。怒り・貪（むさぼ）り・無知の三煩悩（さんぼんのう）はこれらのものが基盤となって生じるのです。

ですから他者を味方・敵・無関心な相手の三つに分別してはいけません。そもそもそう分別する理由さえないので。敵も味方も真髓（しんずい）を欠いています。今あなたが敵だと思いこんでいた相手が、将来味方に変じたり、味方だと思っていた相手が敵に変じたりすることもあるわけですから。また今、大したことのない相手だと思っていた存在が、将来あなたにとって、とても有益な相手になることもあります。こうした事実はわざわざ経典にあたる必要もありません。そのことについて思い巡らしてみれば、そうとわかるはず。一時たりとも離れ離れになっているに忍びない愛しい相手が、いつしかその名前を聞くだけでもむかつくような相手になっている。反対に、最初はなんて嫌な相手だろうと嫌悪していた相手が、いつのまにか限りなく愛しい相手になっている…。

私は別に敵も味方も存在しないと言っているわけではありません。敵も味方も存在します。ただ、敵であるから憎（にく）む、味方であるから愛するという態度を捨てて、どうしてあるものが敵と感ぜられ、あるものが味方と感ぜられるのか、その理由を理解し、敵味方を分別するような態度を捨てなさいと言っているのです。》

ダライ・ラマ14世が、「自己保存のための他者に対しての大切に思う思いやりは限界がある。しかし、智慧にてその思いやりを普遍的なものにすれば、その思いやりを敵に捧げることは可能だ」という言葉は、ゲシェー・ロサン・ケンラブ師の言葉と同意です。

チベット仏教をアメリカやヨーロッパに一躍有名にしたのは、『死者の書』です。《チベット「死者の書」の世界（中沢新一著 角川ソフィア文庫）より》

それはチベットの山々のはるか彼方のこと。一人の村人が、今、死を迎え、最後の儀式と作法をのぞんでいる。家族は、親しいラマ僧を、その男の臨終によんだ。

ラマ僧は、お寺にはいり、読み書きや呪文の教えを受けた十歳になるかならない小坊主を連れて、山を越え、谷を渡り、死者になろうとする家へいそぎました。

その家に着くと、そこで、すぐさま、死に逝く者に添って、観察し、導くのでした。

帰路、ラマ僧は、この小坊主にも、そろそろ、教えの扉を開いてよい頃だと思えます。それは、人の死を目の当たりにし、この小坊主とラマ僧との信頼がなした故にです。

ラマ僧は、小坊主に説きます。

「心（生命存在）とは、それぞれの生命組織の中で活動している状態のことをいう。ミミズはミミズという生命組織をとおして、自分の世界を生きているし、犬は犬、餓鬼は餓鬼、人は人の生命の条件にしたがって自分の世界をつくり、それを生きることになる。それぞれの生命体が、自分のまわりにつくりだしている世界というものは、その生き物にとってだけ意味をもつ世界だ。心はその中をいきながら、自分は根源に達していると感じることができない。だから、途中（バルド）なのだ。」

数日後、このラマ僧と小坊主は、火葬にした、あの死者のいなくなった家に行きます。そして、死者の意識に向かって経を唱え、祈り、さとし、力を与え解脱、そして再生へと向かう死者の意識を、輪廻から観音菩薩の慈悲に導くのです。

この菩薩の慈悲への導きは、死者の意識が持つ幻影や記憶を遮断するためです。なぜなら、人の意識は途中にあるために、意味を解体しなければならないからです。

なぜ解体しなければならないか、それは、意識は貪（むさぼ）り・怒り・愚かさを含んで、死してなお、再生に向かう途中に影響を及ぼすからです。

ラマ僧は小坊主に言う。「有機体でできたこの身体はかならず滅びる。でも、生命はそれぞれの生命の死を超えて、流れ続ける。心の流れが、とだえないから、生命には再生があるから、人は世界に対して、本当に優しくなれるのだ。」

「この世界にある生きもので、一度たりともお前のお父さんやお母さんでなかったものはない。この牛をごらん。今は牛だが、過去の生ではお前のお母さんだったことがある。そのとき、お前に優しくしてくれたはずだ。」

「さあ、観音菩薩による救いの力を待とう」と小坊主に呼びかけるのですが、死者の意識の力にけるものであります。そのかけは、死者の意識が、死ぬことが、単なる苦しみではないのと同じように、生まれてくることは、喜びでだけではないからです。だからこそ、生と死のむこうにある、心の本質を知ることが求められます。小坊主がすこしずつ解りかけてくると、ラマ僧は、昔、インド人からおぼえた言葉を、小坊主に教えます。

誕生のときには、あなたが泣き

全世界は喜びに沸く。

死ぬときには、全世界が泣き

あなたは喜びにあふれる。

かくのごとく、生きることだ。

死者の書は、最期にいたって、この言葉で結ばれています。生きる指針として人間賛歌の言葉でもあります。この言葉ゆえに、ラマ僧は、死はすべてを奪うものではなく、ほんとうの豊かさをあたえてくれる機会だというのです。

諸法

世界には様々な法があるかもしれない。また、それが人が創った限りは、矛盾があり、顛倒があり、違背があります。

仏教は、世界自身が語り、世界自身が在らしめた法です。世界が一つに認識された時、仏教の名前は亡くなるかもしれないが、世界がある限り、仏教の智慧は輝いている。

四十四の問い～ミヒャエル・エンデ

未だ全問に答えていませんが、気長に答えることとします。

もし、貴方が別な答えを出そうとするなら、私にメールを下さい。

貴方の答えを掲載いたします。『虹の彼方に』管理人

エンデ自身がこの問いを出してより、これに答えた人は数多くいただろうと思う。しかし私はそれを読んだこともないので、知りようもない。答えたとしても誰も意味はないかもしれない。

だけど、答えようとする事から、エンデに親しく接するような気がする。

1、あなたがこのような本を編むとしたら、なにを基準にしてえらびますか？

《普通こう言った文章に接するとき、問い自体の新鮮さや、共感に賛同します。何もいちいち答えると言うのではなく、問い自体に、答えが含まれているものです。》

2、あなたの人生を変えた本や、本のくだけがありますか？

《この本に関して言えば、東洋では省みることをしなくなった、東洋の英知によって思考されていると思うのです。》

3、人生の問題に直面していて、ぴったりのときに、ちょうどぴったりの本を手に入れ、ぴったりのページを開き、まさにぴったりの答えを得たとすれば、それは偶然だと思いますか？

《人生の問題に直面していて、ぜんぜん外れた本を手に入れ、はずれたページを開き、まさにはずれた答えを得たとすれば、それは偶然だとおもいますか？》

4、天使や悪魔や奇跡について聖書は語りますが、それでは聖書はファンタジー文学に属するのでしょうか？

《答えは問いの中にあるという意味がよく分かる。蛇足は、記録するという事を、何故記録しなければならないかと考えてみて、伝えるということも、目的や真意を考えてみると、ファンタジー文学は、聖書になり、日本書紀にもなるということか？》

5、トルストイが書くモスクワ、フォンターネが語るベルリン、モーパッサンが描くパリ、これらの都市は現実にあるのか、あるいはそもそもかつてあったのでしょうか？

《よく私が問うことがあるのです。それは「世界は幾つあるの？貴方にとって世界とはどんな意味があるのですか？」また「具体的とは、現実とは？」です。》

6、ゲーテが親しく呼びかけた月（おんみはふたたび茂みと谷をみたし……）（「月に寄す」）と、あの二人の宇宙飛行士が歩きまわった、泥や埃から成る塊は同じ一つの天体でしょうか？
《この世の中で、” 一体” 同じ” と言うことはあるのだろうか？そのことの意味を考えたとき、” 同じ” という意味が解るのでしょう。》

7、戦争の残虐さからなにも学ばず、自分も変わることなく戦争を体験した者に、戦争の残虐さ

の叙述がなにかを教えたり、そればかりかその者を変えることができるでしょうか？

《最近行われた戦争を見る限りは、地域的限定の民族的なものようです。民族を成り立たしめるものに、宗教があるようですが、宗教も、数や地域の占有を追及すると、資本主義の考え方と何ら変わるものではありません。人が何かを学ぶことはあるのだろうか？歴史は繰り返すの格言は、正しいのだろうか？》

8、千人の苦しみは、一人の苦しみよりも大きいのでしょうか？

《苦しみ自体個人的なものである限り、苦しみは千差万別です。千人の苦しみは、一人の苦しみです。》

9、一平方キロメートルの赤い面は、一平方メートルの同じ色の面よりももっと赤いのでしょうか？

《一平方メートルが、1000個集まったものが、一平方キロメートル。一個の赤い面が、千個集まると、真赤っか。》

10、人の意識の外にある世界”自体”を想像するには、少なくとも一人の人間が必要ではないのでしょうか。つまりそのような世界を想像する人間が？

《それでは、世界を考えてみましょうと言った瞬間、私は、世界の外に弾かれていた。》

11、現実に対してわたしたちがもつ観念が変われば、現実も変わるのでしょうか？

《よく言うのですが、鏡は現実を映すといいます。私たちの眼も、現実を映しているのですが、見るという。》

12、それを表す言葉がまだない、そのようなものを考えることができますか？

《聖書は、始めに言葉ありと言った。禅は、父母未生以前の貴方の生命は？と問います。いつも問題は、言葉の無い世界のことなのです。》

13、言葉がまだ話せず、したがってまだ考えることもできないとされる幼児が、言葉に意味があるとわかるのはどうしてでしょうか？

《伝えると言う意思を持つことは、伝えられる情報を持つことでもあります。》

14、「すでに」とか「さっき」という語の意味を説明できますか？

《エンデのこの問いの鋭さは、説明という言葉を使うことです。迷宮に誘い、迷宮から誘うということ

15、詩を”理解した”というとき、それはどのようなことでしょうか？

《このごろ思うことですが、僧侶は詩人でもあると思うのです。何故なら、僧侶自身こそ、”語り部”なのです。》

16、百年、二百年後の人たちが、わたしたちがもつ世界観に、信じられぬと首をふることは考えられることでしょうか？

《私は、現代から遡って、過去の時代には、禅やお茶、武道が登場したことじたいが信じられない現代なのです。》

17、すべては無意味だと、人に説きつづけてやまないニヒリストを駆り立てるものは、何なのでしょうか？

《大嘘つきのコンコンチキ

18、上手にキリスト像を描く画家は、その画家自身が一種のキリストであるべきだと期待するのは正しいでしょうか？

《誰もキリストを見たわけではなく、聖書の解釈によって、迫真のキリスト、痛々しいキリストと

19、恐ろしい拷問死を、美しい絵、美しい音楽、美しい詩歌で表現するとき、なにがそれを正当化するのでしょうか？

《

20、美は客観的事実なのでしょうか、それとも主観的体験なのでしょうか、それともこのように問うこと自体が、そもそもまちがっているのでしょうか？

《

21、両の手を打ち合わせたとき、片方の手はどのような音を発するのでしょうか？

《白隠禅師隻手の音声です。エンデ自身が何処で、この公案を仕入れてきたのか分かりませんが、エンデの作品には全編に渡って禅のテーマがあふれています。”あるがまま”こそ、禅そのものだからです。》

22、磁針が常に北を指すようにする力は針にあるのでしょうか、それとも地球にあるのでしょうか？

《私が立つことを出来るのは、地球に重力があるからこそできるのでしょうか？それでは、もし私が立つことを、重力より自由になりたいが為なのだと考えた時、私が寝たきりになってしまったとしたら、それは重力のせいなのだろうか。重力に捕まってしまったということでしょうか。寝たきりも、立つことも共に重力があってこそ寝たきりであり、立つことであるとするれば、私は足で地球を持ち上げ、背中に地球を乗せることは私の重力こそ、地球の重力です。》

23、おおぜいの人が同じ本を読むとき、本当にみんな同じものを読むのでしょうか？

《

24、読者と本のあいだに生じることは、どこで起こるのでしょうか？

《

25、精神なくして精神を否定できるのでしょうか？

《できないんじゃ、ない？……？》

26、長編小説を書くことはもうできないと、長編小説なみの分量の本を書くのはどうしてなのでしょう？

《

27、”予知の語り手”ではないと主張する作家たちが書く物語を、だれが考えだすのでしょうか？

《

28、詩的虚構と嘘のちがいは何なのでしょうか？

《良心 》

29、芸術は省略にあるとすれば、最高の芸術とはなにもしないことではないのでしょうか？

《禅というイメージは、禅と言ったとき、語っていないものを、あなたは見る事が出来ますか？》

30、そもそも読者に詩人を理解する義務があるのでしょうか、あるいは詩人に読者が理解できるように書く義務があるのでしょうか？

《

31、「本」という語をモルス符合、ゴシック文字、点字、そして中国の表意文字（漢字）で見るとき、そしてこれらの文字を知らないとき、まったく異なるものだと思わざるをえないのではないですか？

《

32、小説でカフカが言わんとすることが、評論家はその小説を解釈して述べることであるとすれば、なぜカフカはそれをはじめから書かなかったのでしょうか？

《

33、本に登場する人物は、その本が読まれないとき、なにをしているのでしょうか？

《

34、美しさを願うとは、うわべを美しくすることを願うことでしょうか？

《

35、平均的人間というものに出会ったことがありますか？

《ありません。平均年齢という年齢にも出会ったことはありません。》

36、ドイツ、イギリス、フランス、スペイン、イタリアの全文学が二十六のアルファベットから成っていることは、実に不思議なことではありませんか？

《

37、カバラが教えるように、神が二十二の文字と十の数字でこの世界を造ったとは考えられるのでしょうか？

《

38、重力を克服するダンスは重力なしにありうるのでしょうか？

《私たちが、立って歩くということは、重力があることによって成り立っています。寝ると言う行為は、疲れを癒すということですから、その疲れは重力が原因であるようです。》

39、思考とは脳のなかの電気化学的プロセスにほかならないという考えは、脳のなかのどのような電気化学的プロセスが考えたのでしょうか？

《

40、現実が”実際に作用すること”と関連があるとすれば、夢はどのような現実を持つのでしょうか？

《

41、人を病や健やかにする本があるのでしょうか？

《

42、だれもが人生で妖精から三つの願いがかなえられるのを、あなたも見たことがありますか？

《

43、むずかしいこと、それとも楽なこと、むずかしいのはどちらだと思いますか？

《信心銘よりの出題みたいに思えるないようです。あえて、素直に、むずかしいことです。》

44、本当に問いは四十四問だったか、数えなおしてみますか、それともわたしの言葉をそのまま信じますか？

《数えなおした瞬間、エンデの罨にはまり、そのまま信じることは、貴方をなくす。》

さき行く輩

禅の優れて、馴染むところは、過去の多くの祖師方、それら総ては人間であるということです。

これって、とても大事なことであるのです。もちろん私には及ぶべくもない優れた方々ですが、皆違った個性を発揮して、実に生き生きとして、歴史を闊歩する姿は、とても人間を感じるのです。

皆、禅で共通するのです。

禅は、人を縛らない、その人そのものの個性を、超出させるのです。

達磨さん、普化和尚、臨濟和尚、馬祖和尚、大梅和尚、良寛さん、沢庵禅師、一休さん、道元禅師、そうとは思いませんか？

祖師年譜

菩提達磨 ?-536 (鼻祖)	太祖慧可 487-593 (二祖)	大医道信 580-651 (四祖)
鑑智僧伽 ?-606 (三祖)	牛頭法融 594-657	大滿弘忍 601-674 (五祖)
神秀 606-706	南嶽懷讓 677-744	大鑑惠能 638-713 (六祖)
青原行思 673-741	馬祖道一 709-788	永嘉玄覺 675-713
南陽慧忠 ?-775	杓居士 ?-808	荷沢神会 670-758
西川黄三郎 ?-?	丹霞天然 739-824	大珠慧海 ?-?
麻谷山宝徹 ?-?	五洩靈默 748-818	百丈懷海 749-814
石頭希遷 700-791	南泉普願 748-834	烏力道林 -824
石鞏慧藏 ?-?	イ山靈祐 771-853	大梅法常 752-839
西藏智藏 735-814	鎮州普化 -860	汾州無業 759-820
葉山惟儼 744-827	徑山鑑宗 -866	五洩靈默 747-818
主峰宗密 780-841	睦州道蹤 780-877	雲巖曇晟 780-841
黄檗希運 ?-860	長慶大安 793-883	臨濟義玄 815-866
德山宣鑑 782-865	石霜慶諸 807-888	夾山善会 805-881
洞山良价 807-869	趙州從シ 778-897	雲巖全ツ 828-887
仰山慧寂 807-883	紫胡利蹤 800-880	章敬懷惲 757-818
興化存獎 830-888	雲居道膺 828-902	香巖智閑 ?-898
塩官齊安 ?-842	疎山匡仁 837-909	九峰道詮 930-985
曹山本寂 840-901	投子大同 819-914	玄沙師備 -908
雪峰義存 822-908	長慶慧稜 854-932	大隋法真 834-919
布袋 -916	法眼文益 885-958	雲門文イ 864-949
保福從展 ?-928	歸宗道詮 -985	靈樹如敏 ?-920
歸宗策真 ?-979	德山縁密 ?-?	洞山守初 910-990
智門師寛 ?-?	風穴延沼 896-973	香林澄遠 908-987
天台德韶 891-972	首山省念 926-993	鏡清道7 868-937
南院慧キ ヲ 860-930	法灯泰欽 ?-974	同安道丕 ?-?
報慈蔵ヲ ?-?	梁山縁観 ?-?	龍牙居遁 835-923
同安観志 ?-?	雲峰文悦 998-1062	永明延寿 904-975
大陽警玄 943-1027	雪ヲヨウ重頭 980-	浮山法遠 991-1067
石霜楚円 986-	投子義青 1032-1083	楊岐方会 992-
白雲守端 1025-1072	大慧宗コウ 1089	黄竜慧南 1002-1069
汾陽善昭 947-1024	大イ慕テツ ?-1095	兜率從悦 1044-1091
黄龍祖心 1025-1100	真丈克文 1025-1102	芙蓉道楷 1043-1118
五祖法演 ?-1104	圓悟克勤 1063-1135	丹霞子淳 1064-1117
長蘆清了 1088-1151	宏智正覚 1091-1157	雪峰慧空 1096-1158
天堂宗玉 1091-1162	雪ヲヨウ智鑑 1105-1192	天堂如浄 1162-1227

ダルマ

その年の正月、目無しの朱のダルマに、墨で片目を入れ祈願したことがある方はご承知のことと思いますが、あの目なしの起き上がりの朱達磨、禅宗では鼻祖（ビリ）といいます。べつに鼻が大きかったからこの名を言うわけではありませんが、独特の顔と姿、色といいギョロツとにらむ目は怖さより、愛きょうさをかもちだし、選挙や入学シーズンのよき庶民の風物詩となっています。禅宗のことを、別名佛心宗ともいいますが、不立文字、教外別伝の禅宗としましては、お釈迦様の正法＝佛心を初めて中国の大陸に伝えたお方という意味で、鼻祖と云います。朝のお勤めでは祖師回向（ソウコウ）として、初祖菩提達磨圓覺大師大和尚（シブツダモクガクイサウイコウ）と唱え、初祖（ソ）と言います。中国禅宗の基礎を開いたという伝承により、現在の日本の各派臨済宗においてもそう呼ばれるています。

達磨は中国でいったい何をしていたのでしょうか。黙々と坐っておりましたそうです。それも壁のように。伝灯録、碧巖録にも武帝との問答等いくつかありますが、ただ中国嵩山少林寺の壁だけが無言に知るということでしょうか。

ダルマは紀元六世紀のはじめ、飄々として北魏の都洛陽にやって来たそうだ。なんとそのときの年齢は百五十才に近かったという。

《洛陽伽藍記》には『西域の沙門ボダイ・ダルマなるものがいた。パルチアからきた外国僧である。はるか辺りよりわが中国にきて、永寧寺の塔の承露盤が、金色の太陽をうけて雲のうえにかがやき、屋根の宝鐸が風にゆられて、高らかなひびきを空の彼方に送るのをみると、かれは思わず口に呪文をとねえる。

「これはまったく人間わざでない」。かれはまたみずからつぶやく、「わしは百五十歳のこの歳まで、さまざまの国をわたり歩いて、訪ねぬところはもうないのに、こんな美しい寺が地上にあることを知らなかった。仏の国を訪ね尽くしても、これほどのことはあるまいな」。口に「南無」と唱えて、合掌すること連日であった』とある。

かって洛陽は、一千四百ちかくの仏教寺院が藁をつらね、なかでも永寧寺は北魏の国力を尽くして建立されたとあるから、さぞや壮大にして華美であったろう。そして九層の塔が焼失したとき、塔は三カ月間燃えつづけ地中の塔心は一年もくすぶり続けたという。達磨を驚かせた絢爛の洛陽も北魏末に灰燼と化したそうだ。

達磨の語録が新しく発見されたのは、そんなに昔の話ではなく、比較的新しく六十年ぐらいさかのぼる。鈴木大拙の研究による。いま《二入四行論》のなかから達磨の伝記を読んでみる。達磨の伝記のなかで最古のものだ。

(弟子曇林の序) 「法師は西域の南インドの出身で、大バラモン国王の三番目の子であった。それは知性があり、なにを聞いてもすぐに理解した。志しをかねてから大いなる真理の道を極めることにおき、ために俗じんの服をぬぎ、悟りの種としての修行者となった。心を大いなる静けさにひそめ、世の中を見通し、内外の学問をきわめ、その徳は高く世の人を越えた。外国の仏教の衰えを悲しみ、ついにとおく海山を越えて中国は漢中を通り魏の国に至った。素直なところの人々はみな帰依したが、形にとらわれたりする人は、やがて非難をしはじめた。道育(ドウイク)と恵可(ケ)という者がいた。この二人の修行僧だけは若かったが志しが高く、師に会えることを喜びとして、数年のあいだ仕えた。二人は師の言うことを良くまもり、身につけた。師も弟子たちの誠意に感じ真理の玄奥を伝えた。

このように安心(アンジン)し、
このように発行(ホツギョウ)し、
このように物に順(シタガ)い、
このように方便(ホフベン)する。

これが大いなる心のおちつける方法であり、ひとびとにくれぐれも違えないように。このように安心とは壁のようにしずかに心をおちつけることであり、発行とは四つの実践行であり、物に順うとは世俗の規則を守って世の非難をあびないことであり、方便するとは物や心の束縛をはなれて執着しない努力をいうのである。以上は法師の言うところを略して述べたもので詳細は後文にある」と記されている。

この伝記は後に続く『二つの立場四つの実践』の序文である、二つの立場とは大いなる真理へいたる方法で、

一つは経典を読破して知識・理解によるいたり方、 もう一つは実践的ないたり方でそれには四つの方法がある。

第一は、苦しみ等にであったとき、この苦悩はみな前世の罪業からのものでありと反省し、前世のうらみや憎しみを契機としてそれらに報いる実践の方法。

第二に、生きとし生けるものはすべて自我がなく、因縁によって左右されているのだからと、縁にまかせる実践の方法。

第三は、ものを求めぬ実践の方法で、世のひとびとはつねに迷っていて、それはあたかも火のついた家のように危なく、肉体がある限りみな苦しい。何人かそのようなところに安住できようか。

第四は、物はあるべくして有るのであり、存在そのものには、物惜しみの心やむさぼりの念がなく本質的に清浄であるという原理を体得して、あるべきように生きる実践。達磨の説いたこれらは、あたかも達磨の生き方であり、それは水の高きところから低いところに流れるに似て、流れの中の岩も石も逆らわず通り抜けて流れ、ときに石を岩を押し流し、長い年月に力強く削る力に比すことができる。

禅の語録である祖道集にはかなりの達磨に関する述部がある。それによると中国梁（リョウ）の普通八年、三年間をへて海をわたって九月二十一日、広州の港に着く。時の皇帝武帝は達磨の言葉を理解できずに、達磨を去らしめてくやしがる。同年十月十九日、達磨が北魏に入国。ここに神光という四十を越えた男が、達磨にいくども弟子入りを願うがかなえられず、少林寺にて雪の中、法を求めるため自らの臂（ヒジ）を切り落とし坐っている達磨にその臂をさしだす。神光は、その強い切望によりようやく弟子入りがかなえられ、名を恵可と改める。

恵可は達磨に「どうか師よ私の心をおちつかせてください」と問う。

師は言う「心をもってきなさい。君の心を落ちつかせよう」。

恵可は苦汁にみちて「心を探すに見つかりません」と叫ぶ。

そのとき達磨は言う。「おまえの心をおちつかせたよ」と。恵可は言下に大悟した。

以来、恵可は達磨に九年間昼夜を離れず仕えたとある。達磨は恵可に

「わしはこの国に来て六回も毒を盛られて殺されかけたが、そのつど毒をつまみ出した。だが今度はもうつまみ出すまい。君という法を伝える男をえたから」と言い、弟子をひきつれ禹門（ウヅム）の千聖寺（センショウジ）に行き三日間滞在し、入滅する。

後魏の第八主孝明帝の太和十九年（五三六）、世寿百五十歳。熊耳山（クヅガシ）に葬られた。三年がたって魏の国使の宋雲（ソウウン）が西域に行った帰り、手に片方の靴をもった達磨に出会い、

「君の国の天子が崩御されたぞ」と告げられたという。宋雲が魏に帰り着いてみると、はたしてその通りなので、後魏第九主孝荘帝に奏して墓を開くと、片方の靴だけがあった。この靴は少林寺に収めて供養したとある。

ところは日本、大和の片岡、王子町王子の道端にぼろの衣をまとったすごみのある異形の僧らしい男が倒れていた。そして男の体からは何ともいえぬ香りがたちこめ、その香りはあたり一面を包んでいた。その男の姿は汚くみすぼらしかったが、どこことなく気品があふれていた。推古天皇二十一年（六一二）十二月一日のことだった。

聖徳太子はその日、供の者をつれ王子町王子を通られた。ちょうど道端に異形の男が倒れているのを目にして、ただ人と思えなく、太子は心ひかれて名を尋ねられたという。異形の男は口をかたく閉ざし太子を見上げていたという。そこで太子は男に次の歌を詠んだ。

しなてるや片岡山に飯に飢ゑてふせる旅人あはれおやなし

異形の男は返歌を献じた。

いかるがや富の小川の絶えばこそわが大君の御名を忘れめ

太子は男の衣をぬがせ、太子みずからの上ぎぬを着せ与えて帰宮されたのだが、男はその翌日に死んでしまった。

太子は家人を差し向け手厚く葬らせた。ところが、棺の中に異形の男の遺体はなく、ただ太子の与えた上ぎぬだけが残っていた。

それを聞いた里人は、これは達磨大師の化身にちがいないと、棺を埋葬してその上に達磨塚を築き寺を建て、太子自ら刻んだ達磨大師の像を安置したという。達磨寺の伝説である。

この伝説は、達磨が日本に渡ったという証據であるとともに、事実としたい。なぜなら、現在日本国中いたるところに朱や白の起き上がり達磨が、毎年無数に誕生して私達に親しまれているからだ。

だがもしかして私達のもっとすぐ近くに、本当にこの異形の男がいるかもしれない。私達が真剣に願い見ようとすれば。友達や知人が困難にあって、颯爽と立ち上がろうとするその姿そのものが、実はダルマだったりして。

慧可

禅は中国で、その真価を発揮する。それは遥か西域を越えて達磨が東土に伝えたことを称して、達磨を鼻祖と言う。西天より数えて二十九代目の祖師であり、中国では第一祖となり、その法を慧可が伝えられたことにより、慧可は二祖と呼ばれる。禅の法系はここより始まるといっているのだろう。

不思議なことは、東洋の連綿と続くこの純粹性の系列は、家名や伝統、最近では企業の系列と、時代により悪役になったり善役になったりと変化する。変化する限りは、評価の判断は避けるべきだが、禅はその正統性を意義あるものにすることは確かだ。しかしそうとばかりはいえないことも、歴史的に見るとたくさん有ることは確かなのだが。

正統性とは、今を生きるものの寄る辺に他ならないのではないか、そんな気がする。正統性を大事にしつつ、その正統性を逆に生きた、歴史に現れない祖師たちも大事な人達だ。

二祖は中国可南省の人で、性は姬氏、父は寂といったらしい。家は貧しかったのか、裕福だったのか知り様もないが、父と母は、子供が欲しくて、神に授かりを願う睦まじい両親だったのだろう。

後魏光文帝の永宜15年(487年)正月1日夜、光明と共に母は子を授かり、『光光』と命名されたという。15歳で五経を覚え、30歳で竜門の香山寺宝情禅師を師し、禅定を修めたという。その年東京の永和寺で具足戒を受けたという。その後、香山寺で40歳の時、夜更けに神人が現れ、南方に行けとのお告げがあり、『神光』と名を改め、南方で達磨に相見することになる。

やがて、達磨の真理の印を受ける。そして袈裟を伝えられた。達磨は言う。

「私が入滅して、200年経つと、この袈裟は伝える必要がない。教えが広がるからだ。道を明かにする人は多いが、道を行ずる人は少ない。理を説く人は多いが、理に通ずる人は少ない」以後、慧可大師は法を広めることになる。

天平年中(559)、14歳ぐらいの一人の居士に会う。

居士。「私は、心が病んで苦しんでいます。どうか私に懺悔させてください」

慧可。「君の罪を持ってきなさい」

居士。「罪を探しても見つかりません」

慧可。「私は今、君に懺悔させ終わった。君は今、仏・法・僧の三宝に帰依いたしなさい」

居士。「この世で何が仏であり、何が法であるか」

慧可。「心が仏であり、心が法である。法と仏には差別がない。君はわかるか」

居士。「今はじめてわかりました。罪の実体は、内にも外にもありません。私の心がそうであるように、法と仏に何の差もありません」

慧可はこの居士に、剃髪し具足戒を授け、名を僧サンと付けた。『三祖僧サン』の誕生である。

慧可が初めて達磨に師事したときは、少林寺の雪降る夜であった。太和10年12月9日とある。自らの肘を切断して、己の覚悟・決心を達磨に提示したとある。受け入れた達磨に、慧可は言う。

慧可。「心を落ち着かせてください」

達磨。「心を持ってきなさい」

慧可。「心を探しても、何処にも見つかりません」

達磨。「探せても、それがお前の心であろうか。」

慧可。「今初めて知りました。一切諸法はもとより空寂であることを。悟りは遠くないことを。菩薩は念を動かさないで、根源的な智慧の海に至り、念を動かさないで、涅槃の岸に登られる」（筑摩書房祖堂集より）

この時、慧可は40歳を過ぎていたという。洛陽で長期にわたり荘子・老子の学問を積んでいたというから、道についてはかなりの知識を持っていたと思われる。その心の中に達磨は無造作に手を突っ込み、蓄え積もった知識を、何の役にも立たぬものとほっぽりだしてみせた。

この話と酷似するものが、我が国の江戸時代に、盤珪禅師の話のもあります。

現代人にとって、身辺を徹底して、自己を問うことはあるのだろうか。

自己破産や恋愛問題、身体的差別、老後の心配、家族関係、人間関係と悩みは古代より多く満ち溢れている。そしてより良い解決は、問題をクリアーすることに躊躇して、しかしながら、その問題の真っ只中にある躊躇する自己を、問題にすることを忘れていたような気がするのです。

当然、罪という言葉は死後に均しくなっていはしないか、誰もが自分を正統化し、間違いは他のせいにする。まして懺悔となるとなおさら遠いもののような気がします。懺悔とは、過去を悔い改める意味を持つが、実は自分自身の存在そのものが罪であり、そのことを懺悔することこそ必要なのではないか。そのために諸経典はあり、宗教がある。現代は、罰を恐れない時代というより、罰そのものの発想が希薄になっているように思えて仕方ない。

私は判断がつかない。私は困ってしまう。そのことに悩む。しかしその悩む私の実体は、何処にあるのだろうと、問いかけた時、その実体は容易に捕まえることのできない私であったと見極めた時、この問いかけは、問いかける本人をも巻き込んで、不可得と徹した時、法華経に言う諸法実相の世界が現前する。

もとより実体のない私が、もがく私であるわけなのだが、肝心なことはそのことを問う私こそ

、癒す私自身であり、その私も実体のないことを知ることにはかならない。そしてその実体のない私は、六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）により、他人と比較し、競う私なのです。

五洩靈黙和尚

浙江省金華県に五洩（せつ）山がある。ここに住山した事により、この名前が付けられたようである。

馬祖をあぶりだそうとして、いろいろの僧侶を記してきたが、五洩和尚は、出家の縁は馬祖であるが、大悟は違った。こういう和尚もいたのだ。

五洩和尚の諱は靈黙であり、浙江省紹興県は越州に生まれた。性は宣。
747年生まれの彼は、得度しない前、30歳ぐらいだと思うのだが、都へ官吏の試験を受けに行く途中、現代で言うなら少し年を取り過ぎているようにみえるが、洪州開元寺に立ち寄った。そして、馬祖にあうことになる。

馬祖「秀才よ。何処に行こうろしているのか」

五洩「官吏になりたくて、都へ、選官の試験を受けに行きます」

馬祖「秀才よ、遠いなあ」

五洩「和尚のところにも、選ぶ場所がありますか」

馬祖「目の前にして、何を嫌うか」

五洩「それでは、テストを受けさせてもらえるのですか」

馬祖「秀才どころか、仏も置かぬ」

そこで、五洩和尚は、馬祖に親しくまみえることを欲して、出家を乞い願った。

馬祖「お前の頭を丸めてやるのはよいのだが、大事の成就是別だぞ」

五洩和尚は、都への道をやめ、入門をゆるされて、具戒したという。

馬祖が云う「秀才どころか、仏も置かぬ」は、官吏登用試験を受けようとしての旅の途中の若者には、理解できない言葉だろう。

我が日本の専門道場の禅堂の額にも、『選仏場』と書かれていが、玄関に『脚下照顧』と共に、大地に何不自由なく立っている自己を見よと、道場は己の虚しさを選ぶ場所でもあると馬祖は云う。馬祖の、「遠いなあ」の言葉は、近きの自分を見つめぬ五洩への、嘆きに聞こえる。

現代においても、選仏と官吏のテストと比較することは、同じ比重を持つと思われるが、金銭的なものを度外視して、比較する若者は、少ないかもしれない。

選仏は、煩悩、妄想からの主体の確立を主とし、その主であることから自由である、絶対自由の無碍道人の顕現であることから、秀才どころか、仏も置かぬは、徹底した自己の照顧が求められる。

平成11年11月6日、禅を聞く講演会で、松原泰道師は「禅宗は、面白いところから、有り難いところへ行かなくてはいけない」と、お話していました。師のお話された通り、禅の問答は

、面白く痛快に感じられるのですが、理解できたからと、それで終わっては中途半端の半病人になってしまいます。やはり、最後は有り難いところがこの上ないように思えます。

さてある日のことです。大勢の修行僧達と共に、開元寺の西の塀の外に出たときです。突然、野鴨が飛び立ちました。

馬祖「お前は、何者か！」

政上座「野鴨」

馬祖「何処に行ったか」

政上座「飛んで過ぎ去りました」

馬祖はすかさず、政上座の耳をとって、引っ張ったものだから、政上座は、唸り声を発した。

馬祖「まだ此処に居るではないか。どこに飛び立ったと言うのだ」

政上座は、ハッと大悟した。五洩和尚もその経緯を見つめていたが、彼は未だ、機が熟さなかった。

五洩和尚「私は官吏の目的を捨てて、大師について出家したのですけれど、今日の日まで、何もつかめません。今、政上座の次第を見て、どうぞ慈悲を持って私に教えてください」

馬祖「出家するならば老僧である私でもよいが、悟るならば、師は別人が、貴方には善いようだ。無駄に年を経てもいかん」

五洩和尚「左様であるなら、正師をどうぞ、お教えてください」

馬祖「ここから、700里行ったところに、一人の禅師が居る。南岳の石頭と申す。お前がそこに行ったら、かならず善いことがあるだろう」

五洩和尚は、馬祖のもとを辞して、石頭に至って、言った。

五洩和尚「一言でもかなう事があれば、とどまります。もしかなわなければ、去ります」

そこで、五洩和尚は、靴を履いたまま、座具を手にもち、法堂に入った。しきたりの通りの礼拝を済ませて、石頭和尚の言葉を待って、側に立った。

石頭「何処から来た」

五洩和尚「江西よりまいりました」と、石頭の問いの真意を汲み取れずに、地名で、答えた。

石頭「受業は何処でしたのか」

五洩和尚は、真意を聞き取れず、だまって翻り、立ち去って、門を出ようとした、その時だった。石頭が「こらっ」と、背後から五洩和尚に、怒鳴りつけた。片足を門の外に、片足を内に置く五洩和尚は、その姿勢で振り向くと、すかさず、石頭は拳を天に突き刺して、言った。

石頭「生まれてから死に至るまで、ただこの一人が居るだけなのに、さらに頭を振り向けて、何になるというのだ」

その言葉を聞くと、五洩和尚は面目を一新して、大悟した。その後数年石頭和尚の側に仕え、人は五洩和尚と呼んだ。

だいぶ脚色して書いてしまったが、景德伝灯録には、20年、石頭に師事したとあるが、下の年譜（祖堂集）と合わない。どちらが本当か私には知る由がないが、伝灯録によると、「一言で

もかなう事があれば、とどまります。もしかなわなければ、去ります」の五洩の問いに対して、石頭は黙って、坐すとあり、この黙と大悟の黙＝省を量る。

しかし、我々は、石頭の大音声の言葉と、自らを提示して見せた態度に、臨場感あふれるドラマを素直に感服したい。初対面の男に、大声で叫ぶ理由は、五洩和尚の殻から今飛び出さんとする面目を認めてのことだと思う。

これより先、曹洞宗を開創する曹山、雲居禅師を世に出す、洞山良价禅師（807－869）が五洩和尚を師として、剃髪したことを思えば、彼の功績は大きい。そして、洞山も五洩、南泉、雲巖と行脚することをおもえば、五洩和尚に似る。

五洩和尚は、38歳で天台山に入り、白砂道場、東道場に住し、東白山に遊んだとある。そのとき神異を現じたとある。後世の人の捕遺である。浙江省浦浦県の移り、やがて五洩山に住した。元和13年（818）3月23日示寂。72歳であったという。

石鞏慧蔵（せききょうえぞう）禅師

かって、玉ねぎの核には何があるのだろうか、涙を流しながら1枚1枚皮を剥いて、たどり着いた所は、何もなかったことの記憶がある。最後の一枚をむしりとした時の驚きの姿を、今思い出すと、あの時、何を掴んだのだろうか。人間の探究心とは、面白いものだと思う。

よく題材にしやすいのは、住む環境によって肌の色が変化するカメレオンの本当の色は、いったい何色なのだろうかという問いだろう。本当の色を求めて、様々な環境のもとに置いてみたところ、カメレオンは死んでしまった。死んだカメレオンのその色を本当の色だとし、正しい色だと主張することは、誰でも異論があることだと思う。

コインの裏表を占う場合、投げる前の真実は、「表か、表でない」ことは本当のことです。

この答えは人を馬鹿にした答えですが、的を得た答えでもあると思うのです。裏か表かの確率は50%ですが、「本当の確率が50%と言い換えてみれば」、本当のものとは結果として、表か裏かは、常に一つのはずですから、真実から見れば50%は何の意味を持ちませんはずです。それでは、表と予測して、裏が出れば、それは嘘になるのか。予測という言葉は、常に外れることを含んでの言葉ですので、厳密には嘘を含んでいるわけです。ですが、嘘になるためには、結果が外れなければ嘘になりませんので、結果の出ない予測は常に本当ということにもなるのではないかと思うのです。よく予知・予言めいたことが話題になりますが、どんないい加減な予知や予言もこの意味からは真実を含んでいると思われませんが、いかがでしょうか？ただし、嘘を含んでのことですが。

本当のもの、真実である言葉の響きは、かって一人の若者を狂気に狂わしたことがありました。

『悠々たる哉（かな）天壤（てんじょう）、遼々たる哉古今、五尺の小軀を似て此大（このだい）をはからむとす。ホレーシュの哲学、竟（つい）に何等のオーソリチーを値するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉（つく）す曰く「不可解」。我この恨（うらみ）を懐（いだ）いて煩悶（はんもん）終（つい）に死を決するに至る。既に巖頭（がんとう）に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。初めて知る大（おお）なる悲観は大なる楽観に一致するを』

藤村操の『巖頭の感』の全文である。1903年5月22日、旧制高校の彼は、華嚴の滝に飛び降り自殺した。当時のことは知る由もないが、この事件が起きて、彼の下宿は『悲鳴感』として同窓生達が集い、共に彼の死を、万有の真相を語り、自らを責めたと言う。

私はホレーショの哲学も知らないし、恨みを懐いて煩悶するその内容も知らないが、『万有の真相は唯一言にして悉す曰く「不可解」』で、何故に華嚴の滝が出てくるのだろうかと思ふ。また、「大なる悲観は、大なる楽観に一致する」のくだりは、悲観を突き詰めたもの

のみが持つ悲壮感であり、樂觀と悲壮感の心は、ともに土壌が同じもののような気がする。

自分を卑下したわけではなく、万有の真相も、自分自身も不可解の存在であると、そのことに気づくことは大切なことであると思うのだが。

馬祖にこんな話がある。

石鞏慧蔵（せききょうえぞう）禅師の話である。撫州（江西省臨川県）の石鞏山に住み狩猟の生活をしてきたことより、石鞏という道号が付いているが、慧蔵が諱（いみな）である。馬祖との出会いは、天宝元年（742）頃、建陽の仏跡嶺に住して、その後、撫州の西裡山にやって来てのことだ。

その頃、慧蔵は常に弓矢を携えていて、山に分け入っては鹿を追い求めることを生業としていた。

今日も鹿を追って石鞏山の中を走っていると、たまたま馬祖の前を通り過ぎようとした。馬祖は慧蔵に向かった。

慧蔵、「和尚。鹿が通り過ぎなかったか」

馬祖、「おまえは何者だ」

慧蔵、「獵師だ」

馬祖、「おまえは弓矢が上手か」

慧蔵、「ああっ、うまいよ」

馬祖、「おまえは、一矢で何頭を射抜くか」

慧蔵、「一矢で一頭だよ」

馬祖、「上手くないな」

慧蔵、「和尚は上手いのか」

馬祖、「ああっ、上手いよ」

慧蔵、「和尚は一矢で何頭を射抜くか」

馬祖、「一矢で何頭も仕留めるぞ」

慧蔵、「皆、命である、何で何頭も仕留めることをするのか」

馬祖、「お前は既にそのことを知っているのならば、何故に自分自身を仕留めないのだ」

慧蔵、「俺が俺自身を仕留めるに、俺は俺自身を、手の下しようもないわい」

馬祖、「こやつ、今までの無明煩惱、今まさに、吹っ切れたわい」

慧蔵はすぐに気がつき、弓矢を捨てて、刀で自分の髪を切り、馬祖を師として出家してしまった。

慧蔵が言う、「即ち手の下す処無し」は「不可解」に通じる。

後、慧蔵は常に弓矢を携えて、機に臨んで「箭（や）を看よ」と接したとある。

そんな消息が趙州録の中にある。

『「石鞏慧蔵禅師は30年間一本の弓と2本の矢で、半人前の聖人射ただけであったといひます。今日は、どうか私を完璧に仕留めてください」

趙州は問うた僧の自信を無視して、立ち上がって行ってしまった』。

慧蔵は生涯、弟子を持たずに、山野に暮らしたと思うと、慧蔵に似つかわしい生涯だったろう。命の尊さを知りながらも、その命を奪うことを生業としていた慧蔵の、矢を番えて弓を張ってたたずむ姿を想像すると、胸を開いて「さあ、射よ」と言える人物がどれほどいるだろうかと思えてくる。

馬祖に会う以前、慧蔵は僧侶が好きでなかったと書いてある。狩猟を生業としている慧蔵ゆえか、そのことを思うと、矢を射ることの尊さが光る。まして、この時代貧しい猟師にとってたくさんの獣たちを仕留めることは、自らの生活の安泰、ひいては幸福と考えていない、慧蔵の慧眼に驚かせる。そんな慧蔵の好きでなかった僧侶を志そうとは、馬祖とはどんな人物だったのだろうか、窺い知りたいと思うではないか。慧蔵の真剣さが伝わってくる。

慧蔵にとって、手の下す処もなく、不可解なるそのものこそ、日常の働きの源泉であることとを思えば、この矢は全身の慧蔵であり、放たれた矢が貫いた私も、”不可解”そのものであると思う。いや、その不可解すら突き抜けることを、慧蔵は願っていると思うのです。でなければ、こうして語録に残される意味はないからです。

大珠慧海（だいしゅえかい）禅師

諱は慧海、福建省の人。姓は朱氏。越州（浙江省紹興県）の大雲寺の道智和尚のもとで出家、得度したという。大雲寺は戴初元年（690）則天武後の勅願によって全国各州に建てられた寺で、大雲經にちなんで付けられた名であると言う。

大珠は、馬祖について六年間修行したが、道智和尚が年を取って体が弱くなったので、大雲寺に帰って、この寺で一生を過ごしたらしい。

『頓悟入道要門論』一卷を撰した。平野宗浄師によれば、「著者は、馬祖下の大珠慧海とされているが、その論法からすれば荷沢神会の影響が強く、また『無心』という語の用法からみれば、牛頭禅の影響も考えられ、その成立が神会時代かと疑われもする」と書いていました。確かに馬祖は、語録の中で『無心』という言葉は一度も使わないが、雑貨舗といわれたくらいである、様々な面を対する人によって見ることができる。

大珠は江西に至って、馬祖に会う。

馬祖、「何処からきた」

大珠、「越州大雲寺よりやってまいりました」

馬祖、「何を求めている」

大珠、「仏法を求めてきた」

馬祖、「自分自身の宝を省みず、家をほったらかしてあくせくして、どうしようとするのか？ 私の所にはそんな者あるわけではない。どういう仏法を求めようとするのか」

大珠は礼拝して更に聞いた。「何が私の、宝でしょうか？」

馬祖、「今、私に問うもの、それこそ貴方の宝ではないか！総ては備わって、欠けているものは何もなく、自由に使いこなせるのに、その他に何を外に求めようと言うのか」

今まで自分自身に付き纏っていたモヤモヤが吹っ飛び、知覚によらないで、おのれの本心を知ることが、ことの真理が大珠を貫いたことでもあり、一辺に諒解した大珠は高らかに喜び、愉快でしうがなかった。馬祖に感謝し、その後六年間馬祖に師事した。

やがて、受業の師が年老いたことを知った大珠は、急いで大雲寺に帰り、師を介護した。その後、姿を隠し、ひそむかのように愚かさを養った。その間『頓悟要門』一卷を書き上げた。

ある時、法系では従兄弟にあたる玄晏が、その『頓悟要門』を持ち出し、江西の馬祖にお目にかけた。馬祖はこれを読み終わると、

「越州には大きな真珠がある。円く大きく輝いて、自在にして、さえぎられるところがない」それを聞いた僧の中に、大珠の姓を朱と知っているものがいた。それぞれが誓い合って、越州

の大雲寺を目指してきて、入門したという。

この時より、大珠和尚と呼ぶようになったと言う。

大雲寺に住持してより、様々な説法が記録に残されている。後年の黄檗の『伝心法要』に似て、知的な問答に満ち溢れて、理論的な問答は非常に解り易く、どうしてあまり評価されないのか不思議でしょうがない。どちらかと言うと、親の子どもに教えるに似て、親切で学者肌の人のように見受けられる。

馬祖の”即心即仏”の問答を、大珠が扱った話です。

他に大雲寺の寺男が質問した。「心がそのまま仏だと言いますが、いったい自分のどの心が仏なんですか？」

大珠、「仏でない疑っている心を示してみよ」

寺男、言葉が出ない。

大珠、「了解すればあらゆるものが、世界が仏であり、心である。悟らなければ永久に離れたままだ」

大珠、「仏のはたらきをするのが仏性であり、賊のはたらきをするのが賊性であり、衆生のはたらきをするものが衆生性である。性に姿形はない。その働きに応じて名を設けるだけである、経にも言っている『すべての尊敬すべきすぐれた人々は、涅槃の悟りを持ちながら、しかも差別の世界にいる』と」

”即心即仏”を、大珠は細かく説明をしてくれる。大梅法常禅師と同じく大珠も”即心即仏”で生涯ひたすらに通した人でもある。

大珠、「明日があることを信じるか」

僧、「信じます」

大珠、「明日をここに持ってきてみよ」

僧、「明日は有るのですが、今は持つてくることはできません」

大珠、「明日はつかみとることは出来ないけれども、これは明日がないわけではない。目が見えない人は太陽を見ることが出来ないが、太陽がないわけではない。今日が明日をつかみとることが出来ないのと同じに」

大雲寺で後年、馬祖との思い出を語る場面がある。

「”江西和尚の貴方の心には一切の宝が備わっていて、もともと自由自在ではないか。外に求むることをやめよ”と聞かされてより、私はすぐさま楽になり、自己に随う宝をひたすら受用している。まったく楽しい。私の心や法の、何一つ取るべきなく、何一つ捨てるべきものなく、何一つ生滅の姿を見ず、何一つ去ったり来たりする姿を見ず、あらゆる世界に何一つ自己の宝でないものはない。くわしくおのれの心を観察しなさい。あらゆるものは自ずから現れて、疑うべきものはない。思い煩うな。探し求めるな。華嚴経の”総てのものは生ぜず、総てのものは滅せず”と言うが如く、このように解ったならば、あらゆる仏が現れるだろう」

語録の中で馬祖を語る言葉は数少ないが、大珠の言葉を知ることによって、馬祖の一面をまた

知ることが出来る。馬祖の語録には、こういった語り口はほとんどないのだが、同年代以前にある語録にはかなり多い。逆にこのことは馬祖のいかに優れた禅者かを知ることが出来る。

大珠の語録には、神会の語録や経文（維摩経・金剛経・涅槃経・楞伽経・華嚴経・起信論・法華経）が随所に出てきて当時の時代や禅の姿が伝わってくる。また人物では下巻に、律者・行者（あんじゃ）・学徒・法師・大徳・俗人・座主・宿徳（高德の僧侶）と多くの当時代の知識人が登場することも面白い。

大珠の言葉の光るところは、「畢竟空の中において、湧き上がるように大慈悲を建立するもの、それが真の智慧あるものの姿だ」という言葉だ。

”維摩経”の「空無を觀ずれど、しかも而も大悲を捨てず」という文面を思い出してみれば、『大悲心』こそ、人にとって大切なかけがえのないものであると言う大珠の言葉は、跡に連なる我々の忘れてはならない言葉です。

大珠の問答に理解できずに立ち去る人に、大珠慧海和尚は話しかける。

「立ち去ってゆくもの、それが貴方の道ですぞ！」

西川の黄三郎

『西川に黄三郎という、年寄りがいた。

二人の息子を、馬祖にもとで、出家させた。息子たちは、一年が経つと、郷里に帰ってきた。その姿を見て、二人が生き仏のように思えて、礼拝して、言った。

「古人道（い）えり、我を生む者は父母、我を成す者は朋友」と。そして、

「これなんじら二人の子の僧は、朋友なり。私を取り持たせてくれ」と。子供たちは、

「お父さんは年をとっているとは言え、もしその志さえあれば、何の難しいことはありません」と、云った。お父さんは歓喜して、早速、俗人の姿で、二人の僧と共に、馬祖のものへと参じた。

馬祖に、このことを話すと、馬祖はすぐさま、法堂に上がった。

黄三郎は、馬祖の前に進んだ。

馬祖「これ！西川黄三郎！お前がそうか？」

黄三郎「恐れ入ります」

馬祖「西川より此処に至って、黄三郎は、今、西川にいるのか？洪州にいるのか？」

黄三郎「家に二主なく、国に二王なし」

馬祖「年は、幾つだ？」

黄三郎「85歳になります」

馬祖「そうだろうが、何の年齢を数える」

黄三郎「もし、貴方様にお会いできなかったら、虚しく一生を過ごすことだったでしょう。大師にお会いしてからは、刀で空を鋭く断ち切るようです」

馬祖「もしさようならば、いたる所、ありのままだ」』



西川（せいせん）の黄三郎という名前は妙に、呼び安い名前であるが、西川とは四川省の地を指すらしい。その他のことは一切不明の人物である。

列記とした馬祖の弟子であるが、85歳になって馬祖に投じたというから、余程の気力と体力の持ち主だったのだろう。変り種なのは、息子二人を、自分より先に馬祖の門下生にして、その成長を確かめてから、息子達を先達として、入門を果たしたことだ。

それにしても、よく考えてみれば、子供があるということは、奥さんがいたことになり、子供も二人より他にいたかもしれない。一家を養っていたことは、確かなことであると思える。農夫をしていたのか、漁師をしていたのか、あるいは牧童等考えられる。どんな家族

に支えられながら、この時代を生きていたのか、85年の年月を考えると、はてしない年齢だということがわかる。おそらく、その年齢は自分の古い先短い時間を、十分覚悟してのことだと思う。

馬祖と黄三郎との何がしかの繋がり、あるいは評判等の条件がなければ、息子達を馬祖に、差し出すことはなかっただろう。馬祖に師事するという決心は、息子達の姿、言葉、佇まいを信じて、故郷を去って、始めからやり直すという気持ちの吹っ切れを起こさなければ、旅に発つことは、できないのではないか。自分の手を見たとき、その皺だらけの手に、年輪を感じ、旅立ちてよりの、道を考えれば、たどり着くことに不安はなかったであろうか？

その当時の若者の目指す夢は、都の官吏であったことは間違いがない。当時、禅を極めようとするか、乃至、事の本質に迫ろうとする雰囲気、社会にあったのだろうか？

出家するということは、家を捨てるという意味であり、家は親、兄弟、親戚、知人を含んでのことだ。仏教界自身も世俗的な社会の反映である。唐代の禅界とは、まったく異質な世界であり、かけ離れていることは確かだ。しかしながら、我々が生きて護持しているからこそ、昔も保たれているとも言える。

寺に住むようになって、私は、寺の在り方をいつも考えている。今のままで良いのだろうか？寺の外からの眼は、鋭い視線を持っている。また要望は、もはやそう多くないように思える。その責任は私たちにもある。神社仏閣の、歴史的価値は大きな意義を持っているだろう。しかし、中身は、今……。私達は、どう仏道を、生きているだろうか。必要にされているのだろうか。それはおのれ自身の足を、つぶさに見つめることより始めることしかないだろう。

私の住職としての使命の一つは、次の世代への寺の存続である。伽藍の伝承ばかり考えないで、内容の伝承を、次の世代に気づいて欲しいものだ。そうでなければ、家の考え方そのものとして二重に映るだけになってしまう。現代の出家は、過去の僧侶と比べると、変貌している。深く反省する事も多いが、違った側面を持つことが、複雑にさせる。

それならば、今の姿を、繕いながら、何とか容（かたち）あるものにとと思う。

仏教は、今の時代を貫く指針と価値観を、十分に持っている。否、仏教こそ、時代が変わっても、普遍を表現している宗教は無いと、固く信じているのだ。

早く急がなければ、名を代えた続くはずもない永遠を求めて、彷徨っている私とも、サラバだ。

黄三郎から見た、若者の僧の姿は、生き仏のように、清潔感にあふれ、神々しく、黄三郎は感動した。さらに、自分もそのような姿に、憧れたのだろうか。否、そうではなくて、85年という年月が、無駄ではなくて、価値ある無駄と実感したのかもしれない。子供たちに礼拝するということは、心から素直さを表現した証明なのだと思う。

85歳の年齢を考えると、黄三郎の心は、なんと若々しいことか。

馬祖の、「西川より此処に至って、黄三郎は、今、西川にいるのか？洪州にいるのか？」の問いは、85年間の西川と今の洪州を量る問いだ。

それに対し、黄三郎の答えは、「家に二主なく、国に二王なし」と、『礼記』よりの引用の言葉だ。「民に君臣の別あるを示すなり」と結ぶその語は、馬祖への帰依を示すと同時に、西川も洪州も通り越した、黄三郎それ自身の産声に、思える。

「刀で、空を鋭く断ち切る」ことこそ、存在そのものを断ち切ることであり、もはや、虚空もなく刀もない、黄三郎の、すがすがしい心境なのだろう。それでこそ、馬祖は、黄三郎を認めたのだ。

自分自身を、黄三郎に置き換えてみると、虚空を切ることこそ、大切なことがわかる。

馬祖道一禪師（馬大師）

南宗禪は六祖恵能大師より神会（荷沢宗）一法如一南印一道円一宗密と、南岳一馬祖（洪州宗）一百丈一黄檗一臨済に分けられた。南宗禪の神会を主流とすることは、宗密の出現によるところが多いが、後世になってみれば、洪州宗系の禪が残ったことを考えれば、南宗禪本流の北宗禪を退けた経緯を見れば、退けることはいずれ退けられる運命に当たるということになり、歴史の不可思議な歩みを感じます。

馬祖を語るには、その前に達磨から二祖慧可、三祖僧サン、四祖道信、五祖弘忍、六祖恵能、南嶽懐讓（677-744）と馬祖に続く系譜を知らなければ、馬祖の世に出現した意義と、臨済から現代の臨済宗へと連綿と続く歴史の流れがわからない。時には臨済から流れをさかのぼることも必要であると同時に、多くの馬祖の弟子達にスポットを当てることによって、馬祖がいかにとてつもなく大きな存在であったかがわかると思うのです。

雑貨舗と言われるくらい、あらゆる側面をちらつかせる馬祖、そして、そのそれぞれの側面を、弟子達が奪い取り、そして更に磨きをかけたことを思えば、弟子達を語ることによって、馬祖を語るができると思います。また、この時代に馬祖と並び南嶽に石頭希遷がいたことも大切なことです。700里隔てた所に、石頭がいたことにより、馬祖も石頭もともに違いを表明できたこととなります。

馬祖の弟子や法友達を挙げてみれば、麻谷宝徹、趙州、百丈、大梅山法常、西堂智蔵、西川の黄三郎、丹霞天然、五洩和尚、汾州無業、亮座主、ホウ居士、大珠慧海、石鞏慧蔵、塩官齐安達です。

そして時代を経て今の私に連なる祖師達は、

百丈懐海、黄檗希運、臨済義玄、興化存奨、南院慧キョウ、風穴延沼、首山省念、汾陽善昭、石霜楚円、揚岐方会、白雲守端、五祖法演、円悟克勤、虎丘紹隆、応庵曇華、蜜庵咸傑、松源崇岳、運庵普巖、虚堂智愚、南浦紹明、宗峰妙超、関山慧玄、授翁宗弼、無因宗因、日峰宗舜、義天玄承、雪江宗深、悟溪宗頓、獨秀乾才、仁岫宗寿、快川紹喜、状元祖光、智門玄祚、大愚宗築、西江宗蘂、隠嶺梵阿、江巖祖吸、文室祖郁、錐翁恵勤、大室祖昌、華山要印、方充祖丈、乾梁祖廉、屠龍宗牙、照道恵静、雪傳文可、玓田恵葛、圓瑞宗玖、雪川惟整、清川恵廉、元峰イ一、雅山宗直です。

総勢52名というすごい数の祖師たちです。そして彼らの法友達を数えれば、更に増えます。また臨済宗の僧侶は必ず専門道場で修行をしなければ、僧侶としての資質を備えることが出来ないわけですから、その法系は別にまた有ることを思えば、途方もない数字になることとなります。

馬祖は四川省什方県の人であり、故郷の羅漢寺で出家したとあります。西暦709年から788年の生涯とありますので享年79歳で、日本では平城京から長岡京遷都の間ぐらいの時代に当たります。古事記や日本書紀や万葉集が作られ、大仏開眼、唐招提寺建立、延暦寺建立と国家と仏教の関係がより密接になり始まる頃です。

712年から756年が唐の玄宗皇帝の治世ですから、唐が最も栄えた頃と言っても良いでしょう。

容貌は奇異な感じがしたとあり、牛のように歩き、目は虎の目のようだったとあります。舌を出せば鼻に届き、足の裏には二輪文様があったといえます。不思議なことに、この容貌から雑貨舗・よろず屋というイメージはどうしても湧いてきません。雑貨舗というイメージには、あらゆる変化に対応する内面性を持つことに思えるからです。牛のようにのっそりと歩き、虎の目で人を射抜き、萎縮させるイメージが強く、まして容貌が奇異な感じで、背は高くとなると、人は近づきがたいのが正直なところですが。しかし時代と場所が違うことを考えれば、納得はいかないけれども、やはり違うのかもしれない。人となりは慈悲深く、首には三つのくびれがあったといえます。

容貌の怪異さは後世に、伝奇的な神聖犯さざる地位に祭り上げるものです。しかしながら、当時を想像してみれば、人が集まるといことは、山賊の集団ではないのですから、滋味に満ちた多くの人を受け入れる、厳しさと寛容さを持っていたと思うのです。実際は何処にもいる普通の親父だったのかもしれない。そんな親父が、ひなびた水田を水牛と共に耕作している姿を描いてみれば、のどかな時と安らぎの情景が思い浮かぶ。しかし、世間では奢侈に狂奔し、都を目指す若者の群れ、経済は中に疲弊を含んで、将来に黒雲を到来する予感に満ちた世界だったりして。

幼いとき資州唐（徳純寺処）和尚（669-736）のもとで、髪を剃り、四川省巴県の円律師に具足戒を受けたとあります。そして唐の開元年間、衡岳（こうがく）（湖南省衡山）の一峰、祝融峰の前にある福厳禅寺、伝法院にて座禅を修したとき、師の南嶽懐讓（677-744）に出会ったとあります。

『心地は諸種を含み、沢に遇うて悉く皆崩す。三昧の華は無相なり、何ぞ壊し復（また）何ぞ成ぜん』の詩は、南嶽が馬祖に与えた伝法の偈である。そして馬祖は、南嶽に10年間仕えたという。

後、福建省建陽県の仏跡嶺に住んだ。そして江西省臨川県（743）に移り、江西省南康県に於て公山に至った。大暦年間、洪州開元寺の住持となった。

馬祖が住持となってしばらくすると、南嶽が弟子を遣わした。弟子は南嶽に言われたとおり、「どうですか」と問うた。

馬祖は、「どうやら30年、塩と味噌は切らしたことがありません」

これを聞いた南嶽はうなずいたと言う。

達磨の二入四行論に「心は自ずから心ならず、色に由って心を生ずるを、名づけて色界と為す。色は自ずから色ならず、心に由るが故に色なれば、心と色との無色なるを、無色界と名づく

」と、あります。

同じ内容を、馬祖は「あらゆる目に見える事象（色）はみな心が現れ出たものである。心それ自体で心であるわけではない。事象に因るから存するのである。こうと解れば、事がら自体がそのまま真理なのであって、そこに何の隔てもない。心が生み出すものを現象というのであり、しかもその現象が空であることを知っているから、生じるといっても、実は生じていないのである。こここのところが解ったならば、その時々衣を着たり飯を食ったりして、流れのままに暮らして行くことができる」と言い、さらに「現象世界を否定もせず、絶対の境地に安住もしない。現象は絶対の側から働き出したものであり、絶対は現象の側のより所である。そしてその絶対のより所にとどまらない」と言います。

何時いかなる時も、虚空のように、寄る辺なき所をより所として、自己の本性のままでいることを出家の有るべき姿と馬祖はとらえます。あらゆる現象は本性より生じたものとする、その現象をどう処置していくかが、問題になると思うのですけれど、我々には至難のことに近いのです。

達磨から引き付いた教えを、実生活に活用し、しかも新たに、不生禪に発展させる種を含んでいる、そんな馬祖の有名な言葉、『平常心』は、今私達は頻繁に使用する言葉ですけれど、考えてみると、内容はお粗末な限りです。

つまりは、平常心とは、道のことであり、法のことであるという。

「造作なく、是非なく、取捨なく、断常なく、凡なく聖なし」であり、そしてこれに違うことを、汚染と言い、そのことは、生死の思いがあって、あれやこれや造作したり、目的意識を持つたりすることであると言います。

また、「あらゆる法は全て心に由来し、あらゆる名は全て心の別名である。心がありとあらゆる法の根本である」そして「あらゆる法は全て仏法であり、そのさまざまな法そのものが解脱である」と言います。

そして解脱した私とは、「真実を離れて己の在りかたがあるのではなく、己の在りかたがそのまま真実なのであって、全てはこの己の本体なのである。もしそうでなければ、いったい誰だというのか」と、1000年以上の時を隔てた私達に、語りかけてくれます。

馬祖の法を継いだ、趙州の言葉です。「何か有れば、考えればよい。何もなければそこらに坐して、理を極めればよい。老僧行脚の時、食事を除いて、その他はさらに用心することはなかった」

『あるがまま』の当体が、在るがままに日常の動作に活躍します。

では道に迷った人はどうすればよいのでしょうか。

「道に迷った人は、方角や自分の居所を見分けることは出来ない」と、馬祖は言います。これは、迷った人の正体を見極めなければならないということでしょう。迷いを苦しみとしたら、その苦しみの当体を見極めることから始まります。あくまでも自分で一つ一つ気がつかなければ、超えることは出来ません。

こんな話があります。

ある日のことです。厨房に用事をしていた僧に、馬祖が問うた。馬祖「何をしている」。僧「牛を飼っています」。馬祖「どういう風に飼う」。僧「叢に入ってゆこうとすれば、鼻輪をつかんで、引っ張ります」。馬祖「汝、放牛は、本物だ」

草を、無明煩惱に。厨房の仕事を、放牛に喩えて、十牛図を考慮してみれば、日常の何気ない問いかけが、いたる所で行われていたことがわかります。

洪州の水老和尚が、馬祖に参じた。水老「如何なるか、達磨がこの土地に来たった、真の意味は」と、問い掛けた。馬祖は「先ず、礼拝せよ」。水老和尚は、礼拝した。馬祖は、すかさず水老を蹴った。ポーンと蹴っ飛ばされた水老は、瞬時に徹通し、起き上がった水老は、手を叩いて大笑いした。今まで積み重ねて研鑽した妙義が吹っ飛んで、全身に世界が覆い被さったかのように、大悟した。礼拝の場面は、この他、伝わった話に、機鋒が鋭いものが多いような気がする。そして、一回目の礼拝と、二回目の礼拝に、礼拝自体に差は無いが、内容に大きく違いがあるのが、おもしろいし、二回目の礼拝は、教師に殴られて、恩師のあり難さを思う、昔の学生を思ったりする。このように、馬祖の機鋒は、その人により、鋭く妙を得た接し方があるかと思えば、日常における接し方は、借りて来た猫のような話もある。

南泉が僧達のために、朝、給仕をしていたときのことである。馬祖が聞いた。馬祖「桶の中は、何だ」。南泉「この親父、口を結んで、何をか云う」。馬祖は次の言葉がでなかった。

桶の中身を、南泉の迷い、怒り、躊躇と考えてみれば、底を打ち破ることが修行であるから、南泉の心境を問うたことになる。それに対する南泉の答えは答えに物ともせず、鋭く、馬祖を寄せ付けない。馬祖の問いかけから転じた、好々爺の姿が眼に浮かぶようだ。

馬祖は、手放した弟子達に厚く心を配る。

『馬祖が百丈に手紙と醬（ひしおみそ）を三甕送った。百丈は法堂の前に甕を並べ、大衆が集まってきたとき、杖で甕を指し、「真に言うことができたなら、打ち割らぬ。言うことができなかったら、割る」と、言った。誰一人何も言わなかった。そこで百丈は打ち割って、方丈に帰った』（四家語録・広灯録）

この話は、やがて南泉普願禅師の有名な『南泉斬猫』に発展するかのようです。南泉普願禅師は馬祖の法の、働きの部分で、その活躍の究極の人です。

馬祖は貞喪4年戊辰の年、2月1日遷化された。

貞元4年正月、建昌の石門山に登り林の中を歩いた。そしてとある洞窟に至り、平らなのを見て、侍者に言った。「私は、来月この枯れた体を携え、この地に帰ることにしよう」

やがて、馬祖は、病に臥した。

枕もとで、院主が尋ねた。「体の具合はいかがですか」

馬祖は、「日面仏。月面仏」と答えた。

2月1日、身を清めて、座禅を組みながら、入滅したとある。年は80歳であり、法臘60年であったという。塔は石門山下に宣宗が江西観察使の裴休に勅して宝峰寺建てさせ、荼毘にして、境内に埋葬した。

五百生 百丈和尚

これは、今から1200年以上前、百丈懐会禅師の話です。中国は、唐代中頃のころの話です。まだ日本には、本格的に禅が伝わっていません。中国でのことです。馬祖道一（ばそどういつ）禅師→百丈懐会（ひゃくじょうえかい）禅師→黄檗希運（おうばくきうん）禅師→臨済義玄（りんざいぎげん）禅師となって、臨済宗は始まります。その源をたどれば、馬祖の遙か前に、達磨がいて、釈尊がいることになります。

この頃になると、大勢の雲水を抱える修行の道場は、たとえ山深い人里離れた場所であっても、まかないの惣菜（そうざい）など食糧の多くを自ら造って、活気のある生活をしていました。

畑には、多くの野菜、お茶、牛を飼い牛乳を生産していたのです。きっと、かまどにはには、一日中、煙が絶えることがなかったことでしょう。

もちろん、薪の切り出しや運搬も、雲水という修行僧の役目でした。きっと汗にまみれて作務をする雲水は、汗くさかったし、衣服を買うこともままならなかったほどに、僧院は、多くの人をかかえていたと思われます。

こうしたの禅宗の修行生活の基礎をつくった人物が百丈和尚です。百丈和尚が若かりしとき、あまりにもぼろの衣と汗くささに、図書館の官吏は、経本の閲覧を拒んだと記録にありますが、身近に感じる故事です。

「一日なさざれば、一日食らわず」の言葉は、この百丈和尚の言葉で、大勢の雲水の集まりの中で、働かなければ生きて行けなかった環境があったのだらうと思いますが、それだけではなく、みずからを律し、人々のために働くという慈しみが感じられ、親しみが湧きます。

釈迦が、涅槃におよんで説いた暗闇の灯火、貧者の宝珠として戒めは、田畑を耕し、家畜を飼い、草木を伐採し、収穫をあげ、医薬をつくること等、ことごとくこの時代頃より遠ざけられたのでした。多分、釈迦時代のような、大檀越が少なかったのかもしれませんが。その結果、集団を運営する経済感覚が養われたのだとも思われます。

典蔵（てんぞう）という賄い係、副司（ふうす）という経理係、維那（いな）というお経係、知客（しか）という運営統括者、侍者（じしゃ）という衆僧接待係、直日（じきじつ）という衆僧統括者等という制度が確立されたのも、この百丈和尚の頃でした。僧院の衆僧全員により、助け合って働くことを、普請といいますが、この百丈和尚の言葉のようです。修行道場にて、頻繁に行われる総茶礼（そうざれい）は、修行者全員でお茶を喫することですが、働くだけではなく、その場に集う全員でお茶を喫することその中に、お茶を通して意味が生じます。「お茶にしよう！」と。知らず、この時代の言葉を我々も受け継いでいます。

また、禅には、『道中（作務を含めた行為による）の工夫』という言葉があります。それは、『静中>坐禅によるの工夫』に勝ること百千倍というごとく、作務という行為を通して、心を耕し、人を耕すということを発見したといえるでしょう。

禅宗の規則という厳格さと道場の静寂は、常に心を耕しながら真を求めてやまない雲水の姿がある故です。托鉢するおおくの修行僧の雁行も、ホーホーというかけ声のなかにも、静けさが表れています。この修行道場の制度が合っこそ、禅宗は保たれているといっても過言ではありません。この修行道場の制度を作られた偉業の人物こそ、百丈和尚でした。

そんな多くの衆僧が集う僧院で、衆僧を指導する百丈和尚は、毎日、多くの修行者に法を説き、巧みに問答を仕掛けます。

あるとき、百丈和尚は、いつも説法をしているとき、一人の老人がそっと話を聞いていることに気がつきました。毎日のことでしたが、衆僧が退くと、知らず老人の姿も消えていました。

ある日のことでした。衆僧が散々に散った後に、老人は一人のこり、百丈和尚の前に姿をさらしたのです。

百丈和尚は、「おまえは誰だ？」と問いかけました。

すると、老人は答えました。

「わたしは人間ではありません。はるか昔、それは迦葉仏（かしょうぶつ）の時代でしたが、この山に住んでいたのです。

あるとき、修行者が、『修行を完成した人は、因果の定めに落ちるでしょうか？』と、たずねてきました。そこで私は、『因果の定めに落ちない』と答えたのです。

それ以来、500生も野狐の身として生まれ変わりを繰り返しているのです。どうか和尚さん、わたしに替わって、この身を救うお言葉を、述べて頂きますようお願いします。」

そして、百丈和尚に、たずねました。

「修行を完成した人は、因果の定めに落ちるでしょうか？」

百丈和尚は言いました。「因果の定めをくまらず。」

老人はただちに悟り礼拝しました。

後日、百丈和尚は、修行僧に命じて、山奥の巖下に横たわる一匹の狐の骸を探し出し、亡僧の葬儀を執り行ったと言うことです。

因果の世界とは、縁起の世界と同じで、今、わたし達が生きる世界に違いありません。この縁起ゆえに、今の私があると言え、この因果こそ、今の私を現すものです。

この故事に、飯田老師は、「老人何ものぞ、人にあらず、狐にあらず、神にあらず、仏にあらず、ただこれ因果じゃ。」と、今のこの私に成りきったなら、狐も人もないと、この一瞬を生きる、因果そのものの中にこそ、おまえの生きる場所が在るではないかと諭します。別の言葉で言えば、今のあるがままのおまえ自身を、受け入れよということでしょうか。

因果や縁起のない世界とは、神や仏の世界でしょうし、そこには、この問答のように、問うことも、答えることもありません。「狐が狐に安住して他をうらやまぬ時を仏と言ひ、人が人に満

足せずして求めてやまぬ時を狐という」とは、これも飯田老師の言葉です。

因果に落ちずに住むことで、長い年月の流転を繰り返す。くらまさないで、この繫縛が解かれます。共に答えであることが、ここに引っかかれば、因果に落ちるし、因果にくらまされると、迷妄の世界に入ってゆきます。

500回は数えることに困難な数字です。狐だからこそ、人を騙そうとするのか？考えてみれば、百丈も狐に似て、人を迷わします。

500回も繰り返して生きることができれば、その500生の一生一生を充実して生きれば、この老人は多生の縁を、くり返し楽しんだはずですし、煩惱と菩提のあいだの往復を繰り返したはずです。

何ともこの世は、変化に富んで面白く、不可思議で、解ろうとすれば、人や狐を迷わします。何度となく迷ってみなければ、解らないことかも知れません。

「因果に落ちない」で、生まれ変わり。「因果の定めをくらまさず」に、死して、再びめぐる生のない所に行ったか、どっこい、狐はここにいる。

多回生の世界観を持つことで、再生の願望が現れ、また一回生の世界観である涅槃や解脱が現れます。仕事にしても、全存在を通して、立ち向かってゆき至れば、最早、そこそじぶん自身の存在はありません。しかし、立ち止まってみれば、因果は巡る風車のまっただ中にいたことに気づきます。そして、その場所で、考えてみれば、因果の世界に迷うが故にこそ、智慧や慈悲が尊ばれる世界があるとみれば、もう一度生まれ変わって、狐となり、人となるのも人間の選択肢とみれば、案外と多回生の世界こそ、人を豊かにする世界なのかも知れません。

大梅山法常（752-839）

大梅和尚は湖北省荊州の玉泉寺で得度したという。玉泉寺は天台智顛が建立し、神秀（606？-706）も住山したという。南嶽懷讓が出家した寺でもある。明州に生まれ、襄陽の人なりとある。浙江省に生まれ、湖北省の人であるということは、人生の多くの時間を湖北省で過ごしたのだろう。玉泉寺で数多くの経論を講ずとあることから、知識は豊かな人だったらしい。人生の知識が豊かなことは、その核心を持ってこそ、知識は揺らがないものだと思うが、大梅も知識を講ずることに違和感を覚えて、このままでははがゆく、心に突き動かされるかのように、各地を遍歴する旅に出ることになった。

江西の馬大師の風評を聞くと、すぐさま江西に足を運んだ。

江州の開元寺は、玄宗が開元26年（738）に、各州に一寺ずつ建てた官寺でもあり、仏教を国家統制の下に組み入れる中心機関としたものらしく、つまりは、この時期にはすでに、禅宗は国家、皇帝にも受け入れられていたことになる。入室の弟子139名とあり、四方の学者が雲集したとあるので、かなりの数の人がいたことになるのであろう。

馬祖の問答で有名な言葉は数多くあるが、その中でも『即心即仏』は、『非心非仏』と共に、解り易く、納得させられるものがある。だが、その馬祖は、「我が語をおぼえるなかれ」と、物まねを厳しく戒めた人でもあった。あくまでも個人の性そのものを主人公に、全体で働く自己の開放を弟子達に諭し、働く自己のそれぞれの責任において果たすことを示した。

数多い馬祖の弟子の中で、「我が語を覚えるなかれ」という馬祖の言葉に向かって、一生を『即心即仏』で通した男がいた。大梅法常禅師である。

馬祖のもとに赴いた。

大梅、「仏とは、いったいどういったものでしょうか」

馬祖、「貴方の心こそ、そのものだ」

大梅、「その心をどうしたら、捕まえ、保てばよいでしょうか」

馬祖、「よく護持しなさい」

大梅、「法とは、いったいどのようなものでしょうか」

馬祖、「貴方の心が、そのものだ」

大梅、「達磨の意図は何だったのでしょうか」

馬祖、「貴方の心こそ、そのものだ」

大梅、「それでは、達磨に意図はなかったのですか」

馬祖、「貴方の心の、法として備なわらぬ法もない、貴方の心をこそ見て取りなさい」

大梅は言下に、この玄旨を諒解した。すぐに杖をもち、はるか雲山の景色を望んで、大梅山の麓についた時、この深く幽々とした山を我が棲家としようと思ひ入り、30年に渡り消息を絶つことになる。

後に、塩官和尚に（塩官齊安 ？—842）付く僧が、旅の途中で山に迷ったとき、草の葉を衣服として、髪を長く束ね、粗末な小屋に住まう一人の老人に出会った。

老人は僧を見ると、先に”不審”と声をかけた。老人は内心、自分のとっさに出た”不審”の言葉を叱咤した。出身を表す言葉であり、同時に言葉はクグモッタ言い方になった。僧はその意を図りかねたが、問いただすと、老人は「馬大師に見えたことがある」といった。

僧は「ここにどのくらい居るのか」と問うと、

老人は「さあ、どのくらいになるのか？周りの緑が青くなり、黄色くなるを見るのみで30数回は数えたであろうか」

僧は、老人に「馬大師のところで、何を得たのですか」と、うかがった。

老人は、「即心即仏」と答えた。

僧は辞すついで、「山を脱け出るにはどちらに行ったらよいでしょうか？」

老人は、「その溪流の流れに従って去るがよいであろう」と言った。

僧は、塩官和尚の元に帰り着き、山での模様を和尚につぶさに報告した。

塩官和尚は、「昔、江西に居たときのことだ。一僧が馬大師に仏法と祖意を問うたところ、馬大師は”即心即仏”とお答えなされた。それから30年、その僧の行方はいまだに知れない。彼ではないだろうか？」。

塩官和尚は、そこで数人の僧を遣わして、「馬祖は近頃、”非心非仏”と言い、”即心即仏”とは言わない」と、僧達に言わしめた。老人の元にたどり着いた僧達は言われたごとく、塩官和尚の言葉を老人に伝えると、

老人は、「たとえ”非心非仏”と言おうが、私はただ一筋に、”即心即仏”で通すだけです」と言った。

これを聞くと、塩官和尚は感激して、

「西山の実は熟しておる。君らは、そこに行って思うがままに摘み取ってきなさい」と僧達をせき立てた。大梅の下には、2、3年のうちに数百の修行僧が集まったと言う。

”即心即仏”、それは、「君の心そのものがそれだ」「君の解らないと言う心そのものが仏性にほかならない」と言う言葉であり、”三界は唯一心”の經典の言葉を、自分の言葉に直したものである。”仏”や”法”を、自己や、世の中、迷い、あり方、有り様と様々に言葉を置き代えてみると、総ては「貴方のそのままの心、そのものが世界であり、自己である」という、総てを肯定的に認める大梅の心は、朗らかに大地を潤す。

『衆生病むがゆえに、われも病む』と言った、釈尊の心は、衆生の病む心そのものが、実は釈尊の心そのものであるということと、同じ意味を持つことを思えば、自分自身に三十有余年”即心即仏”で通す、大梅法常の”即心即仏”は光り輝く。

麻谷山（まよくざん）宝徹禅師（平成12年1月27日）

すべては不明の人物である。馬祖に嗣法した。丹霞天然禅師と共に遊行し、蒲州（山西省永濟県）の麻谷山を通りかかり、丹霞と別れて、そのままそこに住したと言う。

宝徹禅師が、丹霞禅師と旅をしていたときの話が、馬祖語録に書いてある。

『山間の川の辺にたって、宝徹は、丹霞に尋ねた。大涅槃とはどのようなものか？

丹霞は振り返りながら、「急」と言った。

宝徹は、「何が急なるか」。

丹霞は、澗水（谷川の水）の流れを示した。』

語録（景德伝灯録）では丹霞の役を、馬祖が務めているのではあるが、注に祖堂集のこの話があったので、こちらのほうが情景が理解できることから、取り上げてみました。

丹霞と宝徹のこの話は、涅槃と急と澗水の話になるのだが、仏教では、涅槃は、諸行無常、諸法無我の当体であり、つまり世界の真理であり、法そのものです。

急とは、注に、急迫・切迫しているとの意味があるとある。さらに、法句経に「命逝くこと川の流れの如し」。論語に「子、川の辺にあって、曰く、逝くものは斯くの如きか、昼夜をおかず」とあり、古注では、川の流れのように、時は休みなく流れすぎ、人はどんどん年を取ってゆくことを嘆いたものとしている。

澗水は、時の流れを川にたとえて、時は休みなく流れすぎてゆく代名詞にとれる。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(タタ)なし。世の中にある、人と栖(スガ)と、またかくのごとし。」

我が方丈記の巻頭も、河の流れを人生に譬える。

臨済に言わせれば、麻谷の宗風は、黄蘗（きはだ）のように苦みばしっていて、誰も近寄れなかったといえます。澗水という、水の流れを詳しく見つめるには、臨済のこの言葉がぴったりと当てはまります。

「一切の草木皆なよく動く、ゆえに動はこれ風大、不動はこれ地大。動と不動と、共に自性なし。なんじもし動処において、それを捉うれば、それは不動処に向いて立たん。なんじもし不動処にむいてそれを捉うれば、それは動処に向いて立たん。譬えば泉に潜む魚の波を鼓して自ら躍るが如し。大徳、動と不動とは是れ二種の境なり。還って是れ無依の道人、動を用い不動を用う。」

澗水の流れは動くものとして、私たちにもつぶさに観察できるのですが、この澗水から動かないものを発見することは、ひとひねり必要です。見えるものと見えないものは、私達に苦勞を強いるようです。もちろん日常の生活では、動くものの中に、動かないものを発見し、見えるものの中に、見えないものを発見することは、意味があることと思います。私達が見えるものをそのまま受け入れるには、錯覚・錯誤を植え付ける意識・心の問題が潜んでいるからです。私達が見ているもの、そのものが真実な姿であるかは分からないからです。

その錯誤・錯覚という意識・心を排除し、動くもの、見えるものを素直に受け入れることが大切なことだと思うのです。

澗水の動かないものとは、まず気がつくことは、水は高きから低きに流れるという道理であり原理です。この道理は動かないものとしてありますし、澗水の流れを見る者にとっては、見えないものとしてあります。つまり水が流れるは、水の高きから低きところへ流れるという性質が、流さすと言えます。

冷たい水は重たく、温かい水は軽いという性質によって、流れがあるでしょう。また何がしかの資源が含有された水も流れを作ることがありますが、圧力のような力がかかわらなければ、水は上から、下に流れます。そういえば、川底も動かないものとしてあります。さらに動くもの見えるものを観察する私達の意識は、動くものそのものです。しかし、世の真理は、無常そのものですから、川の流れは真理であり、意識のさし挟む余地のないものでしょう

曹洞宗は道元禅師の正法眼蔵、現成公案の末尾に、馬祖大師の門下で、麻谷山宝徹禅師の” 風性常住、無処不周” の公案があります。

麻谷宝徹禅師、扇をつかふ。

ちなみに僧きたりてとふ、風性は常に住して周ね不る処として無しなり。なにをもてかさらに和尚扇をつかふ。

師いはく、なんぢただ風性常住を知れりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理を知らずと。 僧いはく、いかならんかこれ無処不周底の道理。ときに師あふぎをつかふのみなり。

僧礼拝す。

仏法の証驗、正伝の活路、それかくのごとし。常住なればあふぎをつかふべからず、つかはぬをりも風をきくべきといふは、常住をもしらず、風性をもしらぬなり。風性は常住なるがゆえに、仏家の風は大地の黄金なるを現成せしめ、長河の酥酪（そらく）を参熟せり。

《麻谷宝徹禅師が扇を使っていた時に、

一人の僧が来て問うた。「風性常住、無処不周です（風の本質は常住であり、すべてに行きわたらないところはありません）。どうして和尚は、その上に、扇を使うのですか。」（仏性はあまねく行き渡っているのに、その上更に修行する意味はあるのですか）

師は言う、「お前は、ただ風性の常住なることを知っているだけで、行きわたらないところは

ないという道理はまだ分かっていない。」

僧が言う、「行きわたらないところはないというその道理とは、どういうことですか。」

この時、師はただ扇を使うのみであった。

僧は、礼拝した。

仏法の証の驗（しるし）と仏法が正しく伝わるその活きた路は、まさにかくの如くである。風性常住なのであるから扇を使うことはない、使わないときにも風を感じる筈だというのは、常住もわからず、風性も知らないということである。風性は常住であるが故に、仏道者の「風」は、大地は黄金なのだということを真実現し、長河の水を酥酪（そらく：醍醐味の精乳）に完成熟させるのである。（中央公論社大乘仏典”道元”より）》

上記は1232年中秋、陰暦8月15日頃、鎮西の俗弟子、楊光秀宛に、道元禪師34歳の頃執筆されたものであり、正法眼蔵、現成公案の最終を飾る言葉として、また、道元の出家の原点になる話題であり、古来様々な人が評論、注釈しています。

間解は、「風性常住は体、無処不周は用」であり、扇を使う用に於いて風も動く、風性常住でなければ扇いでも風は来ぬと言う。

私記には、「自己の知見、慮知によって合点する、みな情識なり。麻谷の問答は、何必（かひつ）の引証なり」

御抄には、「僧は世間の風の心をいい、禪師は仏家の風を答う……諸仏常住、無処不周ともいふべく、衆生常住・無処不周ともいいつべし」

弁註には、「有所得は尽く妄想邪見なり」とあります。

前出の臨済の言葉に風大、地大とある。地水火風は、この当時の世界を形成する元素である。風は、空気の別名であり、風の本体は何処にも存在するものとして、見えないものとして、動かないものとしてある。風や波はその見えないものの表現であり、現成（差別の相）であるのでしよう。また、見えるもの、動くものとしてあるといえます。見えないもの、動かないものは、空気や水は公案（平等の相）として、澗水や扇の風は、動かないものの動いたものであるのでしよう。

イスラエルでは、ヘブライ語で神の霊ルアーは、風を意味すると聞く。風性常住は、本然自性と重なる。隠すところなく、衆生本来仏であり、欠けることなく与えられていた事でもあります。澗水や急は、本体が現成した姿と言えます。

「経典（涅槃経）には、仏性は誰にも備わっていると書いてある、それなのに、仏となるのに、何故あらためて発心して修行しなければならないのか」と、若かりし頃、道元は自問自答したという。

本来の自己が、活発に活動した現成、表現が、扇を持つことであり、空気が風となって現成、表現される。

扇を使うという行為がなければ、常住なる風性も動いて風とならない。動くとは動かないもの

が動くのである。ここに仏教の立場がある。行為に於いて具体的になるという。

黄金と酥酪は、仏教本来の立場にして真理を意味し、仏の姿であり、風性常住は法性常住であり衆生本来仏なりである。この世界はその活波乱である。大地もそのまま黄金であり、長江の水も酥酪である。

鎮州普化（ふけ）和尚

臨濟録には普化和尚の話がよく出てくる。その中で、私が好きなのは、全身脱去の話だ。普化はある日、自分に死が近いことを知り、街中で人々に僧衣を布施してくれとねだった。人はそれぞれ僧衣を贈ったが、普化は、誰からももらわなかった。

臨濟は院主に棺桶を買わせた。普化が臨濟院に帰ってきた時、言った。

「わしは、汝のために僧衣を作っておいた」と。

普化は、「臨濟の小童、よくやるよ」と、受け取って別れを告げた。

普化は、早速棺桶を担いで市街にくりだし、街中に叫んだ。

「臨濟が、わしがために僧衣を作ってくれた。わしは東門に行つて死ぬぞ」

市民は競つて、普化の後を追ひ、様子を見ようとした。

「今日は、八卦が良くない。まだ死なぬ。明日南門で死のう」

市民はまた、昨日のように街を出た。

「明日の西門でのほうが、縁起がよいようだ。今日はやめた」

翌日は、市民の数か少なくなつてきた。普化はまたも取りやめた。

こうした事が三日続くと、人々は普化の言うことを、信じなくなつてしまった。そして四日目になると、誰もついて来なかった。

普化は城外に出て、鈴を振りながら自分で棺の中に入り逝つてしまった。するとこの事件は街中に広まって、人々は先を争つて集まり、棺を開けた。すると、普化は全身脱去しているでわないか。ただ空中に鈴の音が響いて去つて行くのが聞こえたそうだ。

先日、3年という長さの年月で、患う母を持つ男性と話しをした。彼がつぶやく言葉に、そういうものかと受けて、同じ立場に立つてみれば、私もそう思うだろうと同意する。

その言葉は、「存在としてあるだけでも、母が今、生きていることだけで良いのです」、だった。

患つた側から見るか、看病する側からどう思うかでは、話しは違つている。まして、伝説の人となつたとなおさらだ。肉親はいたのか。病気だったのか。どういう時代にどう言う生き方をしたのか。臨濟録や伝統録の記録は、かっこいい断片だけだが、それが歴史のなせる技なのだろう。普通だったら、普化を惜しんで命を粗末にするなときつと呼びかけているはずだ。

数年前、鎌倉建長寺の管長の自坊に老いた母親が患つていた時のことだ。管長の妹さんが懸命に看病していたが、管長はその妹に「看病に、後悔するなよ」と、言つていた言葉を思い出す。

普段の普化の生活は、鈴を鳴らしながらの托鉢を中心に営まれていたらしく、全身脱去の鈴は、その鈴を髣髴させる。僧衣は直綴（じきとつ）といって、ここでは旅衣の意味を持たせば、より解りやすい。無文老師は麻衣と書いているが、普通の人も着ていたというが、文人や道教の人達も着ていた衣だろうか。

死という概念も普化の時代と現代はずいぶん変わっているわけだが、当時の中国の話では、人の死は次の世界への旅立ちで会ったのだろう。その世界は繰り返すというより、一方的な旅立ちであり、やはり寂しいことであつたろう。中国の辺境を旅する人が、峠で聞く猿の泣き声に涙したとあるが、似ている。猿の鳴き声と鈴の音が共通する響きをもっている。

原文は「隠隠として去るを聞くのみ」とある。一人身の市井に食を求める乞食の風来坊の禅者にとって死に様は、いかにも普化に似つかわしく、呆気ない。呆気ないからこそ、隠隠と響くのか、そこから何かを取り出そうとすると、普化のことだ、お膳をひっくり返してさっさとそこにはいない。まったく取り付く隙が無くして、形にはまらずだ。無理して紫の衣を着させてみれば、毒が抜かれて死んでしまうに違いない。この話しは、達磨の消えて行くさまとよく似ている。

普化は普段、墓場に寝泊りしていたらしく、日中は鈴を持って街に出、食を乞うたらしいから、生活だけをみると、今のホームレスとかわりはない。そう思ったら、隅田川河畔に点点としてある、青いビニールシートの家に住人に、何やら熱いものがこみ上げて来た。

母が元気だった頃、早朝の寺の前を通り過ぎたホームレスに、大声で声を掛け、菓子をあげていたのを思い出した。掃除の手を休めて、ホームレスを呼びとめ、寺に戻って、菓子を持ってきて渡すというあわただしい動作に、あれは何だったのだろうと思っていたが、懐かしくなった。

三十年以上前、新宿東口に、風月堂という喫茶店があった。クラシックやジャズが流れて、一種独特の雰囲気があり、梁山泊のごとき、いろいろの人が宿っていた。総称してフーテンと言ったが、彼らも政治や芝居、音楽、思想と良く語り合ったものだ。そのなかに、ひょっとすると普化も紛れ込んでいたかもしれない。

私が二十数年前、京都の南禅寺僧堂より帰ってきた時、寺の玄関に、それまで使っていた網代傘と行雲流水と書かれた看板袋を掲げて、和尚が逗留しているという標しを示した。その袋と網代傘は今も使われずに壁にさがっている。普化から言わせれば、今の寺のそんな所に本当の禅はあるわけないと言われそう。いや普化だったらそんな所にひっかかっているわけではない。せめて、行雲流水そのままの心で脱落し、行雲流水そのものにならなければならないと思うが、年寄りには安心され、仲間には信頼され、若い人には慕われる。これぞ、せめてもの極意としようが、私にはなかなか出来ない。修行がたりない。まだそんな所に引っかかっている。

寒山・拾得

老いをさがそうと寒山に登ろうとしたが、寒山に老いはなかった。

《 歲月、流水のごとく、須臾（しゅゆ）にして老翁となる。》

この言葉も、人間の一生は、あたかもお盆の中にはう虫のようなものだ。人は、終日、盆の中にありて、塵や埃にまみれて、苦悩はつきない。そして、神仙のような傑出した精神は得られることもないのあとに続く言葉です。須臾にして老いる身は、多くの人間であり、そんなことは当たり前のこととして、寒山自身の老いの姿もみえません。

東洋の伝説に老いの生活や苦勞の姿は、なかなか見えない。

寒山・拾得は、8世紀から9世紀頃の人として、語録やこの寒山詩に消息があるのみで、一切は不明な人物として史上に登場します。

《昔はかなり貧乏だった。今はもっとひどい。何かをなそうにもうまくゆかず、歩みは苦勞ばかりだ。泥みちを行くにも脚を取られ、村人と交われば腹が痛む。猫さえもいなくなった思ったら、鼠どもが米びつを囲んでいる。》

その生活は、貧しく、貧しさも、彼らにかかれば黄金色に色を変えるから不思議です。

この寒山の貧と比べて思い出したのは、石川啄木でした。一握（いちあく）の砂や、悲しき玩具の歌集を読むと、同じ生活や貧しさでも、啄木の歌は救われぬ。しかし、その救われぬ歌で、今までの短歌に新しい道を開いた啄木ではあるのですが。

《はたらけど はたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり ちっと手を見る。

「石川はふびんな奴だと。」 ときにかう自分で言ひて かなしみてみる。

この四五年 空を仰ぐといふことが一度もなかりき。かうなるものか？》

こうも自己の内面を赤裸々に、そして奔放といえるほどにさらけ出すと、読んでいる方は、かえって爽快になるから不思議だ。しかし、90年前の当時、この短歌に接した人々は、衝撃を受けたことと思う。

《大といふ字を百あまり 砂に書き 死ぬことをやめて帰（かへ）り来（きた）れり。

怒ると時 かならずひとつ鉢を割り 九百九十九割りて死なまし。

死ぬことを 持薬をのむがごとくにも我はおもへり 心いためば

何がなしに 頭のなかに崖ありて 日毎（ひごと）に土のくづるごとし。

その親にも、親の親にも似るなけれ—かく汝が父は思へるぞ、子よ。》

（岩波文庫啄木歌集より）

今までに、このような歌に接したことがない。

寒山の貧は、ああ貧にしてまた病む身であり、友や肉親もないという孤独がおおうが、憔悴することはなく、《愁い多ければ定（かな）らず人を損（そん）せん》という。深い愁いは人の老いをはやめ、命を損（そこ）なうことを知っている。

《心を落ち着ける場所を得たいと思えば、寒山こそは、思う場所である。微風が、幽松の間を吹いている。間近に聴けくほどによい。その樹下に、白髪まみれの老人が（中国は太古の聖人黄帝か老子の）書を、読みふけている。その男は、もう十年以上もふるさとに帰らず、ここに来たときの道は忘れていて。》

寒山詩には、拾得（じつとく）という名の朋友が連れだって登場することは少ない。それでいて、寒山・拾得は、山水画のテーマであり、人々の話にはたびたび登場する。

この詩を念頭にして禅の語録・従容録（しょうようろく）に宏智正覚（わんししょうかく）禅師が、拾得を登場させます。

《寒山来時（らいじ）の路（みち）を忘却すれば、拾得（じつとく）相将（あいひき）いて、手を携（たずさ）えて帰る》

寒山の住んだ地は、寒巖（寒石山）で、中国浙江省天台山にあります。ここは、6世紀に、天台宗の祖・天台智顛（てんだいちぎ）が、この地で禅を修行したゆかりの地であり、國清寺（こくせいじ）という寺を中心に栄えました。天台山は天台宗の根本道場でもあるからです。8世紀9世紀になると、道士（道教）と禅師たちがこの場所に集うようになります。

その天台山の寒巖に暮らす寒山の説話は、寒山と豊干（ぶかん）禅師それに拾得が加わり物語化がまします。

この詩で、寒山の住み暮らすぶりは、来た路を忘れ去るほどですから、それは、悟りきった世界にして、何もものつけ込む余地のない世界にたとえられています。こうした寒山の精神世界に、拾得が登場させて、寒山を、奥深い山の中から手を携えて下り来させようとするのが、この宏智の詩となっています。

話は変わって、釈迦三尊像とは、お釈迦様に文殊菩薩に普賢菩薩を指します。この詩において、寒山は智慧第一の文殊菩薩にたとえられ、拾得は慈悲第一の普賢菩薩にたとえられています。澄み切った世界に暮らすことを、独りよがりとみて、こうした世界に暮らすことの是非を宏智は問題にしているのです。これぞ大乘仏教の説くところなのですが、実際となると、修行道場の老師でないと、なかなか……。

政治と庶民の生活を考えると、智慧第一を、官僚の机上の政策にたとえてみると、慈悲第一は、庶民の暮らしとなるのでしょうか。庶民の暮らしは喜怒哀楽であり、その観察するところは机上の政策です。机上の政策は人が喜怒哀楽を生きる知恵となつてこそ智慧の真価が問われ

ます。拾得の詩のようにです。

《この世に生を受けて、楽しきことを考えるとするなら、それは山居することだ。
木々が咲かせる花々は、錦に似て、心を華やかにする
四季ごとに見せる 姿はいつも身をすがすがしくさせる。
あるときは溪谷の巖（いわお）に坐り、迫りくる緑に眼をさらす。
こうして、のどかに、楽しんでいるようではあるが、
心では、そこに留まれば留まるほど人々のことを想う》

拾得の詩は、智慧第一の世界をもつがゆえに、慈悲第一の世界が見えてきます。そこで寒山が言うには、いたずらに争い競うことをす、べきではない《仏は説けり もと平等にして 総て真如の性ありと ただつまびらかに思量せよ》と。

（岩波書店 中国詩人選集 『寒山』を参考にしました。）

虹

モノが見えるということは、視力があり、認知する機能があり、それを記憶する機能があり、判断する機能がなければ、成り立たない。しかし、見えているからといって、見えないことがたくさんあるのです。もっと見たい。そして総てを見通す術を手にしたいと、誰もが思うことでしょう。

人を見る時、真正面から見れば、長四角の彼、上から見れば、真丸の彼、斜め上方から見れば、楕円形の彼、受け入れられる彼は長四角だが、怖いと思う彼は真丸の彼、彼の全体は円柱のように、人は見る角度によって、装いが違うものです。

見えたり見えなかったり、虹にたとえて、実は、探している真実は、その彼方にきっと在るのではないかと…………。

しかし、それが虹の姿だとしたら、…………。

ヘイヴン・ペックの場合―続貧しいけれど、豊かだった―

題名 豚の死なない日 続豚の死なない日著 ロバート・ニュートン・ペック

訳 金原瑞人 刊 白水社

正月、ホテルの宴会担当の女性と話をしている、やはり、この業界にとっても、10年、20年先の姿を想像することの難しい東京になってきたことを、顕著に感じました。

彼女によると、結婚式に見る変化は、従来の形は全くと言っていいほど、役に立たなくなっているといいます。その言葉に、少しでも、その先の世界を見たいがために、いったいどんな風にといいると、先ず、仲人が間に入る形式がなくなってきたこと。雛壇があって、そこに新郎新婦が座るスタイルは変化し、新郎新婦の位置が、段差のないテーブルに移動してきていること。珍しいこと、新規なこと、変わったことと、親の姿が見えなくなっていること等、その変わり様は目まぐるしく、もはや、ホテルの営業を始めた頃とは格段に違ったものになってきたという

。その時、このことは、もう少し経てば、これと同じことが人の終末においても起きてくるのだろうと、感じました。

自分たちでものごとを考えてすることは必要なことであると思いますが、親が見えてこないことに、危機感を覚えます。私たちの歴史はどこにあるのだろうか？ただ壊されるだけの歴史だったのか、と歴史の何を、私たちはつかんでいたのだろうかと考えてしまいます。

中学で日本史を習ったとき、下克上の世の中と教わったが、何に対して下克上なのかと不思議に思ったことがあった。どうしてそう思ったかという、つまりは、モラルが壊れたことが、壊された方には問題になり、壊した方に、正当性があることの裏付けは、民主主義の原点ではないかと、薄々思ったのだ。上を壊して、下に正義があると。

2000年という年は、モラルが、破壊され喪失した時代と言えないだろうか。

特に、議員や公務員の犯罪発生率を調べれば、この国の至っている現状がわかる。人が生きる社会は、何らかのモラルがなければ、安心して生きていくことが出来ない。古いモラルが無くなったなら、新しいモラルが形成されなければ秩序を維持できないのだが、混沌自体が秩序になってしまったら、それは狂気の世界です。

昨年11月に、私の叔父がなくなりました。私はその通夜の式場で、本当に久しぶりに、小学校の友人に会い、親しく話をしました。後日、その友人から、メールをもらいました。

その葬儀を、どういう風に感じて、どう思ったかを、幼なじみに聞いた返事です。

幼なじみのメール。『今日告別式に出て、壇払いの席でお坊さんのお決まりの説法(?)を聞

きました、私も、妻も何を言っているのかわからない説法でした、もう少し砕けてわかりやすくしてほしい、お釈迦さまの話????あまり学のない私たちには無駄な時間でした、それより早く飲みたい。半分過ぎた人生残りを大切に遊びたい、宜しく。』

壇払いの話とは、説法といえるものではなく、僧侶本人が勝手に思いこんでいるだけの、まったく通じない話でした。葬儀を執行したのは、八王子の市街の中心に、大きな寺領をかかえて、伽藍を維持している、浄土宗のG寺の住職でした。

幼なじみの友人は、「煩惱の餓鬼となって、飢えをしのぐために、さらに美味しいものを食べて、遊びたい。今を楽しみたい。充実したい」と、言ってることと同じです。彼の表現を、別に言い換えれば、こういうことでしょうか。人は、その為に、人を殺し、傷つけ、略奪し、追いつめると言ったら、言い過ぎでしょうか？

大勢の人が集い、叔父に対する葬儀の執行に、この住職の表現は、我々に語りかけてくるものがなにもないのです。叔父のことも語らないし、今後の遺族のあり方も語らない。仏教こそが、真にそのことの意味を追求してきたはずではなかったのか。

法式や形式が、時代と合わなくなったと知ったなら、修整することも出来ない住職を頂くことに、拒否できない檀信徒は、はっきり言って不幸です。そのことこそ、豊かさの追求なのです。父親や母親は、子供に何を与えてきたのだろうか、といぶかる時代です。何を伝えたいのかと自問したとき、自問する大人は、果たして、何を伝えたいのか、伝えたいものがあるとするれば、そうさせる根幹の思想・概念を考えたことがあるのか、多くの人たちは、ただ目前にぶら下がる問題のみに追われて、その背景を自分の足で、じっくり着実に考えることを忘れていてる。

以下に、記す内容は、冒頭の本の一部です。ご一読下さい。

《豚の死なない日》より

1960年後半頃より1970年前半にかけて、アメリカでは、ヤングアダルトという分野の作品に、きわめて優れた作品が出版された。本作品も1972年に発表され、一躍作家として認められた。白水社からは金原瑞人氏が翻訳で、1996年に出版した。後に、彼の訳文から、随所に、この本の簡潔にして、言葉を差し挟むことの困難なほどの、圧倒的な迫力の現実描写から語られるものこそ、今、日本に一番欠けて、喪失してしまった、人が生きるという原点にあるものが語られてある。装飾的なものを一切しりぞけ、人が必死に生きることの、真の価値が描かれている。

《父、ヘイヴン・ペックに……。父は寡黙で穏やかで、豚をころすのが仕事だった。》この本の、巻頭の言葉だ。農夫の心はウサギの心のようにやさしい。農夫の目は青い。しかし農夫の目はワシのように鋭く人の心を見抜く。

ヘイヴン・ペックがいう。「それにタナーだって、おたがいの土地の境には柵を立てたほうがいいと思っている。わしと同じようにな。ベンジャミンはわかっているんだ。柵はいがみあうためのものじゅあなくて、仲良くやっていくためのものだってことをな」

ヘイヴンは大地の道理を語る。「今の町の連中にはさっぱり縁のなくなってしまったものだ。あ

いつらにはそれがわからないから、くだらんものだと思っているがな」

「そうとも。大地の掟といってもいい。日没の頃のソロモンをみればわかる。あのでかい牛も夕方だけは落ち着かなくなるだろう。それは昔、日が暮れるとオオカミたちがやってきたせいなんだ。一度もみたことがなくても、ソロモンはオオカミがどういうものか知っている。一日の仕事が終わったら、ゆっくり休まなくてはいけないことも、守ってくれる囲いが必要なこともな。囲いの中にいれば、壁に体をぴったりつけて、反対側をみていればいい」

「父さん、僕たちは豊かじゃないよ。」「豊かじゃないか。互いに守るべき人がいて、耕すべき土地がある。それにこの土地はいつかわしらのものになる。……日が沈むのをみれば、目頭が熱くなり、胸は高鳴る。風の音に耳を傾ければ音楽だってきこえるじゃないか。心はうきうきして、ステップを踏みたくなる。まるでヴァイオリンでもきいているようだ」

「たいせつなのは、仕事をする力があるかどうかということだ。ときどき、もうこれ以上、クレイ・サンダーのところの豚を殺せないんじゃないかと思うこともある。しかしわしは毎日豚を殺す。殺さなくてはいけないからな。それがわしの仕事なんだ」「人間は自分の仕事から逃げてはいけない」

「わしら大人がみんなおまえのように夢ばかりみていたら、無理だろう。あのソロモンだって夢があるだろうが、それでも足はちゃんと動かしているぞ。」

「口をつぎむ時を心得ろ」と父さんにいわれたことがある。その言葉は考えれば考えるほど正しく思える。

「うちの旅人はどうだ？」父さんの声だ。「帰ってきましたよ」母さんが答えた。「夢の世界からね」

「ロバート、そんなことしてなんになる。事実から目をそむけるな」

「不公平だね、父さん」僕はいった。「世の中というのは不公平なものだ」父さんが答えた。

「一日が終わっても、この豚のにおいは消えない。だが母さんは今まで、これぼっちも文句をいったことはない。一度わしは、母さんにすまないとあやまったことがあった」

「母さんはなんていったの？」

「こういつてくれた。誠実な仕事のおいじゃありませんか。あなたがあやまる必要はないし、わたしも聞きたくありません、とな」

父さんは一度ぼくに教えてくれたことがある。木は人間を三回温めてくれるんだ、と。一回目は木を切るとき、二回目はそれを引っぱるとき、そして三回目は燃やすときだ。

「冬がそこまできてるね、父さん」

「ロバート、ひとついっておくことがある。『ほしい』というのは弱い言葉だ。ほしいと思ったからといって、何がどうなるものでもない。大切なのは自分がどうするか、自分の手で何をするかということだ」

「父さん、どうしてぼくたちは『質実の民』でなくちゃいけないの？ どうして？」

「それがわしらの生き方だからだ」

「ぼくは一生ああいうコートは着られないの？ どうしてもだめなの？」

「着られるさ。自分で稼げばいい。おまえもそのうち一人前になる。それも、すぐにな」

「まだまだ先の話だよ」ぼくがいった。

「先じゃだめなんだ、ロバート。すぐに一人前にならなくては。今年の冬のあいだに大人になるんだ」

「すべてのものには終わりがある。そういうものなんだ。嘘じゃない。真実から目をそむけるな」

「春がきたら、おまえはもう男の子じゃない。一人前の男になるんだ。13歳の大人だ。この土地で何かやるときには、つねにおまえが責任を持て。おまえひとりが頼りなんだ」

「父さんはいつも働いてます。休むことを知らないだけじゃなくて、もっと困ったことに、心も働きっぱなしなんです。顔をみればわかります。命がけで何かを追い求めているみたいで、ぼくにはそれがなんだかわからないけど、いつだってそれは父さんの手の届かないところであって、絶対につかまえることはできないように思えるんです」

父さんは冬のあいだは持ちこたえた。5月3日に、牛小屋でねむっているあいだに死んだ。父さんはいつもぼくより早く起きる。その朝ぼくがいてみると、牛小屋は物音ひとつしなかった。父さんは自分で作ったわらの寝床に横になったままだった。そばにいかなくても死んでいるのがわかった。

「父さん」ぼくは一度だけ声をかけた。「だいじょうぶ、今朝は寝てていいからね。起きることなんかないよ。仕事はぼくがやるから。もう父さんは働かないでいい、休んでていいんだよ」

「墓標も墓石もない。そこに眠っているのが誰なのか、60年の生涯にどんなことをしてきたのか、それを伝えるものは何もない。ぼくはキャリー叔母さんと母さんにはさまれて、父さんの墓をあとにした。ふたりともしっかり前を向いて歩いていた。ぼくはそんなふたりと並んで歩いていることを誇らしく思った。母さんのやさしそうな顔は無表情でさびしげだった。母さんの心を占めているものを言葉にすることはできない。ぼくたちはそれぞれ心の中の父さんに思いを馳せた。

このヴァーモントの土の下にぼくの父ヘイヴン・ペックがいる。額に汗して懸命に働き、自分のものにしたいと願っていた土の奥深くに眠っている。今、父さんはヴァーモントの土の一部になったのだ。「おやすみ、父さん」ぼくはいった。「13年間、父さんといっしょに暮らせて幸せだったよ」

《続・豚の死なない日》より

父ヘイヴン・ペック亡き後の、愛児ロバート・ペックの苦難。父の記憶を頼りに、父から教わったことを、土台に、家族を支え着実に力強く歩むロバート。

そこに、ちょうど大恐慌が興り、世界は一瞬のうちに、大不景気に、父から譲り受けた5エーカーの小さな農場にも押し寄せてきます。老いた乳牛デイジーの乳が出なくなってしまったことから始まる、その顛末。働き牡牛ソロモンの死の顛末は、すべて彼の肩に掛かってきて、農場は暗雲が立ちこめる。そこに大干ばつが襲う。彼は銀行への月12ドルの借金返済、農場の固定資産税支払いと、ついに現金の収入が途絶えて、父や兄たちが葬られている農場を、手放すことになってしまうのです。

牡牛ソロモンの死を、受け入れたロバートは、ひたすら大地に穴を掘った。母は静かな声で祈りを捧げた。「死に安らぐものは、土の一部となる。雲が空の一部であるように」

「自然の世界には悪いものも汚いものもないからな。……ヘイヴンにもう一度会いたいもんだなあ。いつだって信頼できるりっぱな隣人だった」と言わせるヘイヴンも立派だが、そう言うタナーも立派だ。良き大人たちに囲まれるロバートは、その時「父が死んだとき、僕は神様が太陽を空からはぎとってしまわれたような気がした。自分が火がつかないランプになったような気持ちだった。そして乳のでなくなったデイジーを、手放す決心をするとき、「デイジー、なんで僕たちは親しい仲間をこんなにたくさん失わなくちゃいけないんだろう？」と。生と死を切り離して考えるのではなく、生も死も受け入れよと自問するロバート。いつか母さんも、叔母さんも、この手で葬らなくてはならない時が来るだろうと、考えていた。

彼は種をまいたばかりの畑に立ちつくしていた。そばにいるのは神様だけだ。その時突然、神様に最後までやりとげさせてください、とたのむのはやめようと思った。ただ、やりとげる力をお貸しくださいとだけ祈った。すべてを彼に託した父の死後、半年たった時。

デイジーを、犬用の餌として売ったロバート。デイジーはばたばた暴れたが、逃げ道はない。「さがってる、坊主」。ハンマーが眉間の小さなつむじの下のあたりをうち砕く音。デイジーが倒れる音。彼は、帰りの道すがら、デイジーの名前を呼び続けた。どうか、どこか緑の濃いところでソロモンと暮らしていますように、と祈りながら。

トウモロコシの種を撒いた畑を干ばつが襲う。「父さんはいってたよ。仕事をやめるのは疲れた

ときじゃない。仕事が終わったときだって」と、ロバートは、畑に、丘の下からバケツで水を運ぶ。

「あら星よ」母さんがいった。「感謝の祈りを忘れていたわね」「この世には、こうした恵みにあずかれない者もおります。その人々にも祝福がありますように。」ロバートは、生まれてから今まで今日ほど神様に感謝したことはなかった。

「母さん、ぼく疲れたよ。今日はいろんなことをきかされたんで、わけがわからなくなりそう。頭がこんがらがっちゃうよ」ぼくは母さんの頬にふれた。「だけどぼくだってそろそろ自分でちゃんと考えられる年だよ。何が正しいか考えて、間違ったことはしないようにする。だから信じて」

要するにぼくたちが成長するという事は単に背が大きくなるということではないのだ。ある意味では、マルコム先生は、本当の農夫だ。かたい決意をもって種をまいている。収穫するのはぼくたちだ。先生をみると、先生以上の何かを感じる。ある意味では、戦士のようだ。でなければらうそくに似ている。敵は僕たちの中にある闇だ。

「大人になるっていうことはがまんしなくちゃいけないってことだ。男らしくするってことだ。」ウィルヘンリーが弟のジェイコブ。ヘンリーとロバート・ペックに言った言葉です。男らしくとは、いくじがないなんて思われたくないことなのです。

いったい大恐慌の時代に、貧しい13才の少年が、こぶしをかためて、母と叔母を養うために、あえて冬の風の中を歩く姿を、どう想像したらよいのか、けんとうもつかない。

「13歳の挫折なんて挫折のうちに入らないわ」と慰める、幼き恋人は「耕すべき土地を失うことがあっても、そこで人生が終わるわけわけじゃないんだから」と、「冬が終わる前にたきぎを全部燃やしてしまうなんてばかっているわ」と、決してあきらめてはいけないと、こういうときだからこそ、胸を張って、堂々としろと励ます。

父の残した農場を無くすことの葛藤を通して、多くのことを学び、最後のこの3人の家族は、友人の家の2階に間借りするすりことになる。一つ一つの問題を真っ正面から受け止め、着実に乗り越えてゆくことは、それが成長するということの証。引っ越しはクリスマスイブの夜。多くの友人がこの親子を祝福してくれた。その夜、少年は、「こんなに心が満たされたのは生まれてはじめてだよ。こんなに幸せなことも」と、感謝した。

生前葬

生前葬儀をしたいからと言われたのは、秋彼岸の中日だった。

S氏が、奥さんの家の墓参りに訪れたときだ。それは、久しぶりの対面だったと思うが、少し身体全体が、少しやつれた感じがしたが、年を取ったのかなと思った。

後ろに見守るかのように付きそう奥さんを背にして、彼は言った。

「今年、脳梗塞で倒れたのがきっかけで、墓を建てようと思うと思うのだけれども、どうでしょうか？父親も、脳梗塞が原因で、亡くなったことを思うと、何かをしなければと思う」と、言う。

「今の医療と、食事制限に、言語と身体運動リハビリで、父の年齢を超えることが出来そうなことは、自分にとっては嬉しいことだ」とも言い、深くうなずきながら話すS氏の様子に、引き込まれる。S氏は、もともと、エネルギッシュな人でもあり、言葉も少し詰まらせ気味の語り口は、熱く、仕事を離れて、何かをしたいという、熱い意気込みを受けた。

「今、自分は、67歳である」と、言う。そして、「親父が亡くなった年齢を過ぎて、生前葬儀をしたいのだが、どう思うか」と、それは、唐突な問いであった。

戸惑いつつも、悲しみを伴わない葬儀に、私は今まで経験が無く考えもしなかったことなのだが、とっさに、葬儀とは字の通り、葬り去ることが原義だし、何を葬り去るのが明解であれば、逆に進められることではないだろうか、と思ったのです。

そして、考えてみれば、葬儀の内容の核心は、意識の変革であり、魂の肉体からの解放ということでもあるわけですから、そうすると、葬儀の対象者は、生きているか死んでいるかは問わなくてもよいのではないかと思いました。逆に、意味さえ確信できれば、生きているものにとって、必ずや必要なステップになると思うのではないかと考えてみたのでした。

葬儀以後は、今までの世界でありながら、新しい世界でなければならないことは、現実の欲望や、行為と悩みからの解脱、迫り来る内外の心理的圧迫要因からの解消し、離れることが出来なければならないし、出来なければ決心だけでも力強く持たなければならないでしょう。

更に、時という問題も絡みます。生きていれば、過去や未来のあらゆるいましめが、今を決定し、動かすことが現実なら、少なくとも、未来を過去を解放し、自由を取り戻さなければならないでしょう。生前葬儀は、そのことを中心に、表現されなければ、見せかけだけの儀式に終わり、意味を喪失すると思います。

時を通じてのみ、時は征服されるという言葉がありますが、それを実践することになるのです。

S氏の誕生日は、5月5日だという。葬儀の日時は、その誕生日の日か、それに近い日が適して

いるように思われた。それは、あくまで人生における中間地点の日なのですが、場合によって、初めと終わりの交差する日だからでもあります。生きている者にとって、毎日が始まりと終わりであることに違いないものの、誕生日という初めがあることは、亡くなることの終わりがあることでもあります。しかも誕生日は何回も刻むことが出来るものの、死亡日が一回であることに、興味を持ちます。本来、誕生日と死亡日は各一つしかないものの、年齢を数えるべき、誕生日は加齢の数だけあります。でも、考えてみれば、誕生日の前日は、その年の年齢最後の、死亡日と考えると、加齢の分だけ年齢の死亡日もあるはずなのです。

誕生日の前日に、その年齢の最後を偲び、反省し、行く末の明日に向かって、未来を誓うと言う作業があつてしかるべきなのでしょう。そんなこととしては、ややっこしいし、理屈っぽいことです。

これは、初めの前に終わりがあるかということで、本当の死亡日の終わりの日は、うかがい知ることが出来ないことです。そして、本当に問題なのは、その始めも終わりも、今という時に、あることなのだけれども、でも、初めがなければ終わりがなかったことを、単純に思えば、やはり、生前葬儀日は、誕生日が適しているように思われます。

「それでは、本当の葬式は、家族だけの密葬という形が良いでしょうね」と、奥さんの前で、本当の葬儀を約束するのも、奇妙な感じがいたしましたが、却ってあつけらんかんとして、隠すことなく話せるのも、生前葬儀の後の葬儀の重要度が違ってきているからでしょう。

その意味では、思い通りに行かないことが多い人生だけれど、このことだけは、決めて逝きたいと、その意志が生前葬儀なのでしょう。場所は、会社の近くのホテルとし、引き物も既に考えているとのこと、後は、導師がウンと言う返事があれば、走り出すことだったのです。

以上が、生前葬に関する9月23日の取り交わされた内容です。

私にとっては、これから、手探りの状態を取りかからなければならない難しい問題です。

儀式の内容はこれからとして、奇妙なことに、例えば、この葬儀には、喪がないのです。喪がない葬儀なんて、普通は葬儀とは言わないはずなのに。哀しみを伴わないことからみても、喪はないのです。

因みに、『喪』とは、亡くなった方を想い、世の中のつきあい（特に祝い事）を避けて、身を慎むことです。それには、二つの意味があります。自分の心構えとしての『追悼』と、外へ『忌を及ぼさない』という他人への配慮です。

他にも、普通、葬儀には、御霊前とか御仏前を持参致しますが、本人を前にして、ご仏前、ご霊前はすぐわなないことから見ても、これは、意味と内容を、よほど考えなくてはいけないでしょう。

何と言っても、一番難しいことは、生きている者に引導を渡すことです。これは、死んでいる者に引導を渡す比ではないからです。葬儀から弔う内容を削除したものが、生前葬儀とすれば、弔わない内容の葬儀とは、どんな内容が良いのだろうか。普通は、この場合、懺悔式、授戒会、得

度式があぶり出されると思うのだが、そう考えて次に、生きている人の何を弔うかを考えた方が適しているように思えるのだ。

S氏の、用件を終えての、帰りしなのいくらか足を引きずるように見える姿に、病後の痛ましさを覚えたものの、それでも芯に強い意志をかくしている姿を見てとると、S氏の強さと、たくましさを嬉しく思いました。

平和を我らに-GIVE PEACE A CHANCE (平成13年10月31日)

※この記事に対するコメントのメールは受け付けません。

1980年12月8日午後10時50分、この時間は、ダコタ・アパートの前で、マーク・デヴィッド・チャップマンが放った銃弾で、ジョン・オノ・レノンが倒れた時間です。ジョン・レノンは、すぐさま、ルーズベルト病院に搬送されたが、もはや二度と、私達の前には、帰っては来ない人となってしまったのです。

40歳2ヶ月の、何とあっけない彼の死だったことか。残念で仕方がないと同時に、彼が背負っていた、ビートルズという大型スクリーンの残像が、消え失せようとしていることに、ふるりのほろ苦い郷愁を憶える。彼は、沢山の歌を遺してくれたが、忘れられない思い出は、何と云っても、私の青春そのものと共にあったということです。

そして、再び蘇るかのように聞く彼の歌声。

IMAGINE

想像してごらん 天国なんてないと その気になれば簡単さ 僕らの足元には地獄はなく 頭上にはただ空があるだけ

想像してごらん すべての人々が 今日のために生きていると

想像してごらん 国なんてないと そんなにむずかしいことじゃない 殺したり 死んだりする理由もなく 宗教さえもない

想像してごらん すべての人々が 平和な暮らしを送っていると

※印 僕を夢想家だと思うかもしれない だけど 僕はひとりじゃないはずさ いつの日か きみも僕らに加われば この世界はひとつに結ばれる

想像してごらん 財産なんかないと 果たしてきみにできるかな？欲もなければ飢える必要もなく 人はみな兄弟なのさ

想像してごらん すべての人々が 世界を分かちあっていると

※印 (繰り返し)

あれから21年も経っていたのかと、移り変わりの速さに驚く。

2001年9月11日、ニューヨークの貿易センタービルに、2機のジャンボ旅客機がイスラム過激派によりハイジャックされ、突っ込んでいった。

世界に誇り、アメリカを象徴するビルの、猛煙を上げて崩落する姿は、世界中に放映された。そ

れを、世界中の人々が、テレビの前で、まるですぐ目の前で起きているかのような思いで、目を見張り、その惨劇を目撃した。まるで、映画のように、他人の死として、犠牲者の悲惨な姿の膨大な数に、その膨大な数の、癒すことが出来ないことを予感した。

巻き添えになった多くの市民の死を悼む。それは犠牲者と家族や友人に対して悼む以外に、方法を持たない私の、無力さでもある。

ビル街にポツカリと口を広げたような瓦礫の惨状の姿。40日が過ぎても、未だに煙をあげ続けているのだ。まるで、ニューヨークの地中に取り残された魂の、空に向かって舞い上がる姿に見える。それは、亡くなった者の魂の叫びのように見える。

速く舞いあがれと、大型クレーン車からの放水は続く。瓦礫の下では、亡くなった者の、怒り、憤り、哀しみ、驚き、嘆きの思いや叫びが火となって燃えているかのようだ。放水は、その人のやるせない思いを、冷ますかのような祈りに思える。ことの大きさを、今も告げる。

アメリカは、怒り、星条旗の下に、堅い絆によって結ばれようと、一つになろうと結束を誓った。人々は、星条旗をかざして、自分を表現しなければ、結末を模索することの困難な、出口の見つからない連鎖の中に突入することは出来ないと思うかのように見えた。

遠い国の事件が、すぐ近くの国の事件として見えるこの不思議さ。そして、この事件は、戦争となって、イスラム過激派のテロ実行犯が属するリーダーが拠点とするアフガニスタンと隣国パキスタンに場所を移したのです。

長い間に渡って戦うこと以外に日常がなかったといえる民族は、何を守ろうとして、戦ってきたのだろうか。その為、教育というベールまでも脱いでしまったとき、人は獣となったかに見える。国や民族の誇りを犯された若者達の怒りは、敵の喉を、研ぎ澄まされたナイフや刀で、掻き切ることを知ることで、怒りと恐れのおそろしさを知ることが出来る。

国々との平和と平等の交信が、その国を照らす明かりだとすれば、それを自ら閉ざす行為は、暗闇を選択する行為である。自ら、その闇の中で手探りをして、出口を模索し叫ぶ声が、あの日の澄み切ったニューヨークの空を襲った雷鳴であり、轟音となって飛び込んでいったテロ達の叫びなのだろう。それは、アフガニスタンの山々に木霊し、響く叫びに思える。

とにかく、世界は、戦うことを止めなければならない。

過去の歴史を見れば解るように、戦争で、解決する時代は、もう当の昔に終わってしまったことに、まだ、気がついていない。世界の良識は、テロ首謀者達を捕獲するために、何十人、何百人、何千人、何万人を殺せば気が済むのだろうか。

偶像を破壊することで、自らの神までも冒涇した彼らは、その報いをもうとっくに受けている。受け入れることは難しいことは承知していることだが、彼らを許すことが、世界の良識の試練として、今は、アフガニスタンの空が、澄み渡ることを祈ろう。

ソクラテスとヤージャニダッタ

陽岳寺の本山が、京都の妙心寺であり、宗派は臨済宗妙心寺派に属することをよく知っているという方々は、案外と少ないものです。山門の表札に『禅宗』と書かれていても、禅宗には今日、臨済宗、曹洞宗、黄檗宗が日本にあり、韓国にも曹溪宗という禅宗があり、台湾と中国にも、禅宗があります。

禅宗の起こりは、もちろん釈尊に始まります。そのことから、禅宗では釈尊を、始祖（しそ）と言います。そのインドから中国に六世紀初め頃飛来した禅宗の使者は、達磨さんですので、鼻祖（びそ）と言います。その中国で、八世紀九世紀に、禅宗は大いに栄えました。禅は、内なる心の実践であり、その外に顕れた形が、坐禅であり、黙想であり、やがて、生活全般の行住坐臥まで含めて、哲学的、或いは観念的に思想として形成して行き、やがて、五家七宗の彩りを数えました。その中の一宗派が臨済宗であり、臨済義玄（を宗祖（しゅうそ）と言います。日本に渡って、臨済宗は十四派に分派しましたが、江戸時代に白隠禅師を出した妙心寺派が、今日、最大の派閥になっております。

坐禅には二つの方法があると言われております。一つには心を安定させるため、瞑想に近く、ストレスを癒す働きを求めるための手段としての方法でもあります。二つには自分を無や空という概念、或いは宇宙とか虚空という概念に成りきるそのことが、本来清浄なところに立っているということであり、自己が消え失せた状態としての坐禅と言えるのでしょうか。前者は、スリランカ、ビルマ、タイに残り、後者は、中国、日本、台湾に伝わりました。また前者を、上座部仏教、後者を大乘仏教と喩えると、更に意味が解ると思います。

達磨が伝えた禅は、「心が牆壁のごとく、木石のごとくなるように心を内に向ける壁観」と伝わっており、この実践を求めることから始まりました。

初期の禅の代表者である縁法師は言います。

「一切の経論は、心が起こした不始末のあと始末にすぎぬ。道を求めるという心を起こすと、つくろいが生まれる。心を起こさなければ、なんで坐禅が必要であろう。つくろいが生まれなければ、なんでわざわざ念を正すことがあろう。道という心を起こして悟に入ることにこだわらなければ、道理も事実も何もない。」

動かぬ前の心に還れと、それは、あっちを立てこっちを立ててと見通すのではなく、見通す前の心に還れと言いました。見通す前の心とは、自分に返れと言うことであり、自己を捕まえようと言うことであり、自己を理解すると言うことです。その自己は、自意識という確実にあるという物ではなく、自己とは働きそのものですから、じっとしている自己だったら捕まえることもできるでしょうが、動いている自己を捕まえると言うことは、捕まえようとする自己も、その働きと

一体になることで、捕まえることができるわけです。捕まえた自己はさっきまでの自己ですから、はからいを止めることでもあります。

どうして、そうしなければならないかという、これは私たちの世界の見方を、違う角度から見つめなさいと言うことでもあります。違う角度から見つめるとは、違う角度の見方が別に存在するということではなく、本来、その違う角度の見方しかないモノを、私たちが暮らす現実生活の物差しが、過去の事物と、現実の事物と比較対照することによって成り立っているという錯覚です。その錯覚を尺度としている限り、違う角度からの見方を得ることはできません。

臨濟義玄のことを記した『臨濟録』という本があります。その中に、ヤージャニダッタの故事があります。

『修行者よ、時の過ぎるのを惜しめ。君たちはわきみちにあたふたと、禅をおさめ道をおさめ、名目をあてにし説明をあてにして、仏をさがし祖師をさがし、友人をさがして、見込みどおりにやろうとばかりする。まちがってはならぬ。道の仲間よ、君たちにはちゃんと一人の父母がいられる。いったい何を探すのだ。君たちは、自分で自分を映し返してみるがよい。古人もいう。

「ヤージャニダッタは自分の首を失ったが、欲求心がやんだとき、そのまま何事もなかった」と。』（舎衛の町に住む美貌の青年ヤージャニダッタが、鏡に映る自分の顔を見て、いちど自分の顔そのものを直接に見たいと思いつめ、どうしても直接見ることのできない自分に、発狂してこの問題をすり抜けるかの時、友人に教えられて正気に戻ったという、首楞嚴經の故事。）

眼は眼自身を見ることはできません。このことの示唆する内容も、ヤージャニダッタの故事と内容を同じくするものです。私たちは、私たちの正確な姿を見ようと、可笑しくないかと、似合っているかと、鏡の中の私たちを映します。正しくは、左右逆の映像であり、大小、或いは特定の波長の色を付いていることがあります。やはり、自分の姿を映したものに過ぎなく、生の自分ではありません。何年か前に、鏡を三面鏡でなく、二面鏡に正面をガラスにして中に水を入れて、それに、自分を映すと、自分の姿が、左右変わらずに映すことができると考案して売り出した人がいましたが、現実とは何か、正確さとは何かと問い続けることから出てきた答えとも見えるのですが、ジレンマを含んで、面白い。

かつて、神戸新聞の随筆覧に、久米正雄氏という人が、「不思議なことに人間は、自分の顔というものを遂に見たことがなくて死んでしまう。目玉と視神経とを長く伸ばして一度ジカに自分で自分の顔を見たい」と書き、斎藤素厳氏は「往来でふと飾窓や鏡にうつる姿をみて何ていやな奴だろうと思うと、それが自分なのである。自分の顔が見えないことは私にとって偉大な救いだ」言うことが、中山延二氏の著作《世の中》に書いてあります。それと同じように、自分を知ると言うことも、映す自分と、映された自分の関係と同じように、「不思議なことに人間は、自分というものを、遂に知る事がなくて死んでしまう。」のでしょうか。

知らないことを知っていると思うことと、知恵がないのにあると思うことと、死を恐れることは同じだ」と言ったのは、ソクラテスです。知らないことを恐れるなと言っていることと同じです

。ソクラテスは、『死を知っている者は誰もいないのに、人々はまるで死が最大の害悪であるによく知っているかのように、死を恐れる。これこそ、「知らないのに知っていると思う」という、最も不面目な無知にほかならない。私は、あの世のことはよく知らないから、その通りにまた、知らないと思っている。』から、死を恐れるものとは思わないと、《ソクラテスの弁明》の中で言います。

ソクラテスは、「ソクラテスよりも知恵ある者は誰もいない」という、デルポイの信託の意味を訪ねて、多くの知恵ある人を訪ねます。そして「わたしは、知らないことは知らないと思う。ただそれだけのことで、勝っていることを知る」のです。そして知ったことは、この信託の否定できないことの実事となり、神だけが本当の知者であることをも知るのです。ソクラテスの“知の探求”生活スタイルの、自分は知恵に対してはじっさい何の値打ちもないのだということを知りえるための旅は、結局、神を実証する旅であり、神の指示にしたがっていることにもなります。

「ほかでもない君たちが自ら信じきれぬゆえに、寸時も休まずさがしまわり、自分の首を放つといて他の首をさがして、自分でやめることができぬのである。完全で本来的なボサツでさえ、理法の世界にあらわれると、浄土の中にいながら、凡を嫌って聖を慕う。こんな連中は、よりごみの心がふっきれないで、汚れと清浄という分別を残している。しかし、禅宗の考えというものは、そうでない。ずばり現在であって、何らの時間的限定がない。」と、臨済が言うヤージャニダッタの故事は、ソクラテスに似ます。

知の探求は、自分の探求であり、神仏の探求でもあり、一人一人のそれぞれの心の問題です。その心は、「君たちの一瞬の疑いの心が、土という要素に自分を固まらせるのであり、君たちの一瞬の渴愛の心が、水という要素に自分を溺れさせるのであり、君たちの一瞬の怒りの心が、火という要素に自分を焼かせるのであり、君たちの一瞬の喜び心が、風という要素に自分を舞い上がらせるのである。」であり、その為に、土と水と炎と風の中で、形を離れ、その意味の完成を求め～！ことを、臨済は言います。「心は無形にして十方に通貫し、目前に現用す。人はそのことに思い至らないため、すなわち、名を認め句を認め、文字の中に向かって仏法を意度（いたく）せんと求む。天地遙かにことなる。」と。

禅は、真実と事実を見極めることを第一と、人を育てます。つまり、自分を見失うことを嫌うのです。それにはどうしても、ソクラテスのようにヤージャニダッタのように、自分を、知を追いかけていなければなりません。人は、近くを追いかけて遠くを見失い、遠くを見つめるあまり近くが見えなくなります。事実、それを見てうかがう人によって、正反対にも、いかようにも変化するものです。事実を、世界の表現とするならば、真実は仏や神です。その仏や神は、事実の中に宿るとも言えるのです。

蓮（平成14年6月2日）

お寺の本堂の仏壇には、金の蓮が飾ってあります。この花の意味など考えたこともないことに気がついたのは、タゴールの詩集”家なき鳥”だった。この詩の中で、貧しさの中に必死に生きる少女の言う言葉が胸を打った。

「蓮は、花を付けて種を沢山、数多くの筒の中に蓄えます。やがて季節が変わって風が吹き、種を播いて、多くの株がまた誕生するのです。そのことより、富と豊かさを表す」と、言うのです。

。そう言えば、釈尊はアーリア系の人種であり、ヨーロッパや中近東などでも、池に蓮を咲かせて愛でる習慣があることに気がつくのと、発想は同じものなのではないかと思ったのです。

でも何故に蓮の花を供えるのか、そして、お経を唱えぐるぐると回る行道での読経に、蓮の花びらをかたどった散華をまくのも、蓮だ。拈華微笑（ねんげみしょう）と言って、釈尊が迦葉（かしょう）尊者に法を託したのも、蓮の花（金波羅華）だった。霊柩車の装飾も、仏壇の彫刻も、蓮は多い。金蓮は本尊の前に、具えられ、よく見ると、蕾と花、開いた葉に、まだ大きくなれない葉、花の散った後の種を含んだサヤがあるのです。富を豊かさに替えてみて、実りと豊かさを象徴する考え方そのものは、やはり深刻な貧困や悩み、葛藤、患い中から生まれてくるものです。

でも、実りや豊かさなら、肥沃な大地に育つ植物なら沢山あるはずなのに、何故蓮なのだ疑問を持ちます。思い当たることは、蓮の育つ環境である、泥であることに気がつきます。それは、今自分が生きている、立っている湿潤で肥沃な足元なのだ気がつくのと、嬉しさももちます。また、その泥は、私の心とも言えます。そこから一步も出られないことを忘れて、外にも向かって何ものかを求めてようとする、人間の無知をも示していると思うのです。

「お前達は、泥の中に住んでいるのだよ」と、その泥を多くの意味を持つものと置き換えてみれば、その中でしか生きられないことを知ることが大切なことだと思うのです。そして、そう知ることが、あの蓮の花が咲くことに、蕾に、多き広げた葉に、まだ、くるまっている葉に、花びらが落ちた茎にたとえられると思ったのです。その一つ一つが比較にならない、一つ一つの豊かさなのだと思います。

豊かさとは、今、多くの栄養分をもつ泥ではないかと、それを体中に浴びているではないかと、それが生きているということではないかと、すでに備わっている現実を知ることだと思います。すると、貧しさとは、そのことを知らずにもがき苦しむことと言えます。しかし、そのもがき苦しむところにこそ、豊かさの源泉があるとすれば、どちらも大切なおろそかにできないモノなのです。どちらも誠実に真っ正面から向かう姿勢こそ必要だと実感いたします。

仏教の至る所は、豊かさの自覚とも言えるのです。それが実りとも言えるのではないかと気がつ

きました。

誰でも、自分自身の姿を、あるがままに捉えることは難しいことです。何故ならば、自分自身の姿を捉えること自体矛盾を含んでいるからです。観察する自分と観察される自分の二つの自分が存在してしまうからです。どちらが真か影か虚か。

私にとっても、見つめなければならぬ私の姿を見つめてよと言われたのは妻からでした。それは平成12年12月13日、母の死においてでした。

2年間にわたる母の療養生活を必死に支えていた私の梁が、葬儀と納骨が終わった後から、無くなってしまったことに由来するのだと思います。その少し前、母が療養生活で家を出て、私と妻と、二人の確かさをもたらす子ども達が住む家となって、私の気持ちが徐々に変わっていった気がするのです。

一つの平凡な家族でも、年月の変化に、家族の様相は、平凡なりに大きく変化するの当然です。厳密には、それ以前から、父が亡くなってからです。ジワジワと進んでいた変化は、母にとっては寂しさと諦めの感情を生み、妻にとっても責任と不安を生んでいたことの進行形です。

一緒に暮らすことは、私も、妻の側に立ち、母をかばい、母の側に立ち、妻をかばうという嫁と姑の関係の中で、子であり夫であることの綾取りを繰り返していた。二世帯家族同居に起こるさまざまなことの板挟みに、母の子離れを促し、妻の孤独感を乗り越えることをひたすら願って、男の中性化現象の見本のようになっていたことです。板挟みの中で、否、板挟みだからこそ私も揺れるのですが、私に見えないモノは、板挟みは私が作ったものだということでした。

のほほんと毎日を過ごしていた私には、自分自身が見えなかったと言えます。では、今は見えるのかといえば、情けない話ですがよく解らないことでもあります。でも母が亡くなってから見たものは、それは父の死を通して夫婦というもののもろさと確かさ、そしてその夫婦がやがてどちらか一人になった時の、取り残された者のもろさを、母を通して見えたことは、哀しくも美しい母の心だと教わったことです。親しく亡くなった者を忍ぶとは、美しいし、悲しいし、癒されることのない時間に、一人佇まなければならない自覚なのだと、それが、死を真っ正面から受け止めることなのだと思います。

母のそうした時間を体験している時、それは、励ますことの意味もまとまらなく、結局は、側にいるだけの私のうろたえている時間でもあったし、そんな私をじれったいと見ていたか、母と子という私の間隙に入ることの戸惑い、難しさを持った妻の時間でもありました。

いくら頭で理解しようとも、大きな亡くしたモノの跡にポツカリと空いた穴は、埋めて癒すことのできないものです。だから、哀しいのだし、涙が出てきて止まらないことでもあり、そこから生まれる亡くした者の行為は、理解できない行為と見えることでもあるのでしょうか。亡くして始めて分かる私であり、身体に刻まれるこの味は、ほろ苦く、甘いものでもあります。

自分が見えないことは、人の気楽さですが、見えれば、いたたまれないことでもあります。父の

最後に至る過程を見、そして、母の至る道を見て、知った老いたる夫婦の道筋は、同じものではないことは知るものの、実は私たち夫婦も、長く続く限りは、この物語は終わらないし、私たちがいなくなってもこの物語は、子供の代へと続く気がいたします。

振り出しに戻った感があるモノの、振り出しに戻ったのではなく、全ての愛と死は続きの中なのです。だから、終わることが始まりになり、始まりは終わりを意味してこの繰り返しのうちに、私たちは時を刻んでいるのです。いずれは、私たち夫婦も、父と母が経験した、どちらかの立場になるのだろうけれど、今は想像することもできない。

母の全身から感ずる老いが進んで行くと、その先が見えるような錯覚に陥る。自分で理解することのその先は、自分に降りかかった現実ではなく、仮想の理解です。母が、現実には父と築いたこの家を出て居なくなって、この家は世代交代が進み、次の世代に移ったと言えます。父と母が去ったが故に出来上がったこの家族で、これからの寺と家の経営をしなければならないことを意味するが、私にとっては、往復に五時間かけてゆく母への逢瀬が、私の真価を確かめるものだと言分に言い、その行為に意味を付け加えていた。ちょうど二年間母はその病院で療養生活を送ったわけですが、毎週、欠かさず八王子の郊外の母が居るところへ通うことに、意味など見出す必要があるわけではないのだが、母の意志がわからなくなって始めて、母の価値を知ったのだと、たとえ意志が通じなくても、そこに行けば生きていることが、子にとってかけがえのない礎であることを知ったと言ってもよい。それは私たち家族が元気であることを、母の願いなのだを知ったし、その願いに答えるためと、平和な暮らしが続くことが必要なのだとも知ったのでした。

母が具合が悪くなって、家族みんなで外食をすることが多くなった。それは、母の思い出を子ども達にも記憶させるためでもあったし、家族が一つになることが、お互いに共通の時間を外で持ち過ごすことも大きな意味を持つものと思ったからです。そのことが家族が元気に生きていることの証明となることでもありました。こうして、家族とは何かを築こう築こうとして時を織る。母が、入院しても、母がこの席と一緒にいられないことが残念に、後ろめたさを憶えることもあったが、母の居ない家族での外出は続いた。いないが為にも、時という反物を織り続けることによって、縫いつける作業をしなければ、その時の意味を失うかのようになります。

父や母が居なくなると、自分だけで飲みに出かける回数が増えた。それは空虚さが全身を覆うかのようにでもありました。このことを考えてみると、自分にとって、母を亡くしたモノの正体を探り当てられないことからくる仕業なのか。そのことを考えてみても自分ではわからない。自分の弱さなのか。それをジッと見守ってくれる家族にすまないと思う。多くの別れに立ち会って、それは、私にとっても別れでもあるのだが、真に自分に降りからなければ、この喪失感は理解できないことなのだろうが、時はまぎれもなく進んでゆく。しかし、そんなときに、高校3年生の長男が急に頼もしく見え始めてきたことは嬉しいことだ。それは、私が年を取って行くことを意味するのだろうか。長男の振る舞いと言葉に、私がうなずくことの寂しさと、うなずくことの心地よさを認めるとき、あと10年ぐらいで、世代交代が実現しそうな予感、妙に安堵して、落ち着く。そのぶん、妻には、距離に隔たりができて哀しい。

多くは、土曜日、日曜日と法事は多いのですが、考えてみれば、いつも自分が座って見上げる全面に古くあか光りする金蓮は、実りと豊かさを投げかけ、その金蓮に挟まれて立つ、灯明は、自分の足元と道を照らす。仏道とは、自らが輝くことであるが、それは、自らの今を知ることでもあるのです。

心-KOKORO (平成14年6月25日)

修行の僧堂を出て、まだ30年は経っていないが、後数年で、30年が経つ。「更に30年！」と、禅録にはあったが、意気込みとしてならわかるが、そんなに人生の残り時間はない。しかし、このホームページを開設して、何年か経つが、私は、未だに、何を書いているのだろうと、迷う時がある。情けないとも思うし、頭の回転がついていけないもどかしさが充満する。誰かを読者として、書いている場合もあるが、ほとんどは呟きのものでしかない。一体誰が、呟いているのかということ、生きて、一瞬たりとも動いている、それを躍動している自分と言うのだろうか、今、キーボードの上を走らせ、整理しながら、茨の道に踏み入らせている。

禅とうたっているものの、果たしてこれが禅なのか、師匠を亡くして一人歩く道は、模索の道でもあります。不安定の上に、安定を見つけ、ひとときの憩いの時に覆う疑問が、一瞬のうちに、立場を翻します。それでも、追いかけているものは、心なのだろうとすれば、それは、私の禅です。揺れる自分の心を、突き止めようとして探す、試みなのです。自分の今の表現は、明日の自分ではなく、それでしかないを知るものの、それでも、ふと気がつくと探している自分がいます。だから猶、揺れるのでしょう。むしろ、揺れるそのものの中に、境涯を見つけようとする自分が居ます。

達磨大師は「外、諸縁を息（や）め、内、心に喘（あえ）ぐこと無し」と、無事これ貴人の主体を指し示しますが、無事が貴人の境涯であれば、活発に躍動する無事こそ、貴人の真価だと思います。

寺を預かっていることの意味を考えると、多くの”無事これ貴人”との接触で、その一人一人の”無事”を、理解することを心がける意味で、無事の内を自己を取り込むことが出来ればと、私なりにその表現を受け入れることの繰り返しの連続です。時に苦渋となり、感心し、時間に追われ、哀しくなり、同情し、何とかならないものかと考え、眠くなり、……様々な、私の無事です。

十牛図、臨濟録、碧巖録、正法眼蔵、総ての禅録は自身の心を探す試みの軌跡です。探し当てた心の記録であるが故に、探心記と言えますが、そこで探し求めた心は、仏に通じ神に通じ、探仏記となり、探神記になるのですが、しかし、私たちがそれを読もうとしても、やはり、人の書いたものは、あくまで、その人の探心記であり、自分のモノではありません。自分のモノにするためには、どうしても、自分で心を探す試みの旅に出なければ、確信が持てないのです。

大いなる哉、心（しん）や。

天の高きは極むべからず、しかるに心は天の上に出づ。

地の厚きは測るべからず、しかるに心は地の下に出づ。

日月の光はこゆべからず、しかるに心は、日月光明の表に出づ。

大千沙界は窮むべからず、しかるに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚か、それ元氣か、心はすなはち太虚を包んで、元氣を孕（はら）むものなり。

天地は我れを待って覆載(フカイ)し、日月は我れを待って運行し、四時は我れを待って変化し、万物は我れを待って発生(ほっしょう)す。

大なる哉、心や。

《興禅護国論の序—栄西禅師》

上記は、鎌倉時代、栄西禅師の表した興禅護国論の序です。自分自身の強い探心の希求が、中国への旅に結びつき、探心の到りえた栄西の格調高い響きです。

未だ禅が知れ渡っていないこの時代に、禅を昂揚する意気込みが感じられますし、自分の発した言葉に、一步も引かない熱い血潮に、触れると壊されるような、近づきたいものがあります。

それ故に、心ときめく言葉でもあります。

「大いなるかな今の自分の心や」と、この詩をそらんとすると、生きていることの充実感、或いは、閑かな時の流れを感じて、大きく飛翔することが出来ると思います。

太虚とは、言い尽くせることの出来ないもの、語る事ができないもの、太虚そのものとして体験したとき、これこそが、心なのだと、それを、無相の自己と言い、無心とも言います。余談ですが、私は、この心という字が、ブランコで揺れているイメージがあります。上から、紐で吊して、或いは、心の真ん中の棒の上を釘で留めると、回転するイメージを持ちます。だから何なのと言え、それだけのことなのですが。

臨濟禅師が言う「赤肉団上に一無位の真人有り、常に汝等諸人の面前より出入す、未だ証拠せざるものは、看よ、看よ」の、“一無位の真人”こそ、栄西禅師の言う“太虚”と同じモノであり、者とか物というと、何か限定できるモノであります、これは、限定できないモノであるがため、位がないモノであり、これが心なのです。

心とは、語り得ぬものであり、一無位と言い、無心と指し示すのですが、私がないことそのものは、やはり語る事の出来ないものです。その心は元氣を孕んでいる。どうして孕んでいるかということ、実現した私が語らせるのだと言え、元氣とは、私の働きの源と理解します。私とは、この元氣の働きの表現でもあります。限定できるモノ、語る事の出来るものは表現された私です。では、その語る事の出来ない心の表現した私は、どうしてあるのと言え、喜怒哀楽愛悪欲の七情の変化を思います。その一つ一つは、相と縁が織りなす葛藤、想い、感情だと考えます。

無相の相の字は、辞書に、「二つ以上ものが互いに関係しあうことを表す」とあります。具体的には、事物、木の姿を見る、仲間、関係しあうことに恵まれる、助ける、関係することの働きの意味ではありますが、結びついていることの意味では、縁と同じ内容です。この相と縁により、私たちの日常は成り立っていますが、喜怒哀楽愛悪欲の七情の発露、そして、意欲、創造等意識を含んだあらゆる行為の実体は、この相と縁という、ネットワークの表現でもあると言えるのではないかと思います。

心の表現は、表現された私です。そして、この表現の源は、相とか縁、ネットワークに依存しております。これは、私という人間が、父となり、子となり、和尚となりと呼ばれることで、相と縁の関係を物語っている事実であり証明できるのではないかと思います。その相と縁の表現の私を自覚することは、同時に、相と縁のネットワーク故に、母や妻、子、友人と言う他者を巻き込んで、相互の縁起関係を成り立たしめているとも言えます。この相関関係の自分自身の立場、今立っていることの根拠は、しかも、その相と縁のネットワークは、現実の事物かどうかは問いません。記憶や、イメージ自身がネットワークの産物だとしたら、例えば亡くなった人とのネットワークは、記憶の中で結ばれていることでもありますので、その記憶が亡くならなければ、無くならないと言うことが出来ます。実は、記憶自身も、イメージもネットワークと考えれば、そこから生まれる意識も、私を飾るもの、飾るものも私自身と考えられないでしょうか。

実在したものを亡くしても、記憶の中で生きている、人を亡くすという意味の困難さが理解できると思いますが、そのことも、心の表現なのですし、表現された私でもあります。

この心は、様々な差別・平等を通り越したモノとも言えますが、同時に、このモノを掴んだとき、山となり、風となり、火となり、水となり、雲となり、時となり、今となることが出来ます。古来、悟りの現前と言ってきたものです。

この相や縁というネットワークを張り巡らせながらも、無とするところに、自己を置けば、一無位の真人は、具体的な事実として、”あるがまま”という事実が顕現すると言えます。このあるがままこそ、無相の自己が顕現した心ーK O K O R Oと言えます。

ワールドカップを見ていて、自己実現という言葉も、何度か耳に致しました。妙にこの言葉が引っかかります。自分は自分さと、意味など理解してなくて、頻繁に親や友達に抵抗し使っていた若い頃の記憶がありますが、その自分も年を取ってみれば、よく言う”おじさん”そのものの実現された自己なのかも知れません。生きることは、自分らしさを実現するためと思うものの、その為には、何よりも自分に誠実なことが大事なことだと、何事も真剣に受け止めようと、その受け止めた今の自分の行為に、誠実さがあふれていれば、それこそが自己実現なのだと思う今日この頃なのです。

独り暮らし（平成15年4月12日）

自分を語るこつて、そして語れるこつて、更に語れる相手を持つて、人を助けるなつて続く思いました。独り暮らしのお年寄りの家に訪ねる機会があります。

身体を気遣つて、「どうですか？」「いかがですか？」「体調は？」などと訪ねると、思った以上のこつが返つてくる場合があります。老人性鬱病の持病があり、精神科に通つているのですと、ケロツと言われると、思わず、「本当ですか？」と、今、話す相手がそんな症状を持つていたこつなど想像が付かないほど、ビックリするこつがあります。

本人も、「私は、何の隠すこつも嫌だからと、どんどん話してしまふんです」と言う。その話の内容は、自分に降りかかつてくれればゾツとする内容の怖い話した。

家の中で、独り閉じこもつて、自分が自分を外部と閉ざしてしまふこつに、抵抗できずに、その家の中も、自分が居る場所すら我慢ができない場所と変わつて、ひたすら震えながら気分が過ぎ去るまで、閉じこもるこつしか選択肢がない気持ち。その時の自分が何をしでかすかわからない恐怖。それこそ、刃物を持ち出し自分を傷つけるか、一歩外に飛び出し、他人に抱きついて世間の避難を浴びてしまふかも知れないこつを、高らかに話してくれたりする。七十才近くのお年寄りの言葉にしては物騒な話しを、開けっぴろげに話されるこつに、この人の生命力を思います。それはうかがい知れない過ごしてきた苦しい時間に、耐えて変わつてきた自分を、「隠してもしようがない」「敢えて、話せる相手には、話してしまふんだ」の言葉が表しています。

そうなんです。こうして自分のこつを、誇張しながら？話ができるこつに、いや、できるようになつたからこそ、鬱病という怖い病気と付き合うこつの姿勢がうかがえて、この人を、たくましく感じるのです。

とある女性は、「何でも聞いて下さい」と、言う。亡くなられた夫の話をし、こうして上がり口で対話していたこつを思い出しながら、話していると、急に涙を見せながら、「ご免なさいね。涙もろくなりまして」と、時間を忘れて話し出す。「そうなんです、そうなんです」と、何度でも話す。話すこつによつて、独りぼつちになつてしまつた今の自分の、後戻りできない自分の、どう過ごして行けばよいものか、前に進めない揺れる心を表している。これが、独りになるこつの苦勞、試練なのだろうと、辞して思います。

お年寄りの、と言つても、六十五才を過ぎての独り暮らしが、多くなつたと実感する、今日この頃なのです。

平成15年4月13日

年老いて、亡くしたものの、帰つてこないという実感は大きい。午前、訪ねたくとも、足腰が弱つて、訪ねることができなくなつてしまつた静岡に住むお年寄りと話して、主人が亡くなつ

たことより、息子が亡くなったことが、もう4年経ったのに、こたえると、しみじみと話していた。嫁さんはどうですかの問いに、今でも、耐えられない時間を過ごしていると聞く。電話してみようかなと思うが、つい、忙しさに紛れて、時間が経過していることに気づく。鬱病は怖いし、その時以来いまだに後を引いていることに、息子や娘が支えるだけ支えていることに希望を持ちながら、考えを止める。

もう頑張る必要はないかもしれない。頑張ろうとすればするほど、思い出すことが多くなり、余計に、楽になれないとするなら、頑張ることを止めることも必要なのだろう。でも、それができれば、こんな悩むことも、落ち込むことも、苦労はない。無責任なことだが、そうやって問い続けていることが、一生懸命に生きている姿に映ります。

もう、立ち直ろうとしない、立ち直ったところに何があると問えば、それで、いいじゃないの。立ち直った世界はどんな世界で、どうしなければならぬとしたら、余計にストレスがたまります。

今の貴方ではいけない、しっかりしなさいと励まされることに、立ち直った自分は今の自分と同じか別かと問えば、立ち直らなくてもいいじゃないの。喪のまっただ中にあること、そのことが、苦労なのだから。どう考え方を変えたとしても、変えられない自分がいることが問題だとしたら、考え方など変えない方がより自然です。まっただ中は、問い続けることの連続です。その連続した時間こそ、今の自分を正直に表現するものであり、それを苦労と言うのだと思います。

自分の行く末より、亡くなったものの行く末を問えば、彼方の世界から帰ってきた者など、いまだかつて一人もいないという事実こそ確かなものです。彼方の世界に行った者の意志を覗けば、その意志によって帰りたいと思わない世界が現存するとみることもできます。だって、本当に、絶対、誰も帰ってきたことはないのですから。

問題は取り残された私なのです。閉じ込められた私なのです。そう思って立ち止まったとき、自分の行く末が現れます。

今朝、独り暮らしの66才の女性の家を、久しぶりに訪ねました。昨年10月親しかった友人を突然亡くして、考えることが多いという。まだ若いし、丈夫だし、誰か再婚相手はいませんかとの問いに、こう答えた。

「いっそのこと、大きな家に、みんなが寄り添っていける場所があればいいですね。仕事ができる人はそれを仕事に、料理が好きな人はそれを仕事に、掃除が好きな人はそれを仕事に、テレビが好きな人はそれを仕事に、具合が悪い人はそれを仕事に、仲の良い夫婦はそれを仕事に、おしゃべりが好きな人はそれを仕事に、針仕事が得意な人はそれを仕事にと、みんなが寄り添っていて、どんどん新しい人が入ってこれる、そんな大きな家があったら良いですね。アパートに閉じこもるのではなく、みんなで閉じこもれる場所、いいですね」と共感して帰ってきました。言ったことに振り返り、きっと、色々な問題があるだろうと、それでも、誰も排除しない大きな家が、地域に広がれば、それも、大きな家に違いはないかなと。

老いが、咲いていた！（平成16年7月5日）

老いが、咲いていた！（平成16年7月5日）

平成16年6月30日、午後八時、N氏の娘さんより、「父が、午後6時55分に、上野のN総合病院にて、亡くなりました。穏やかな姿で、きっと喜んで、生をまっとうしたことと思います」と、家族の誰もが、夫や父の死を、冷静に見つめる姿に、N氏が育んだ、N氏の家族らしい姿に、N氏の面影が浮かびました。

それでも、突然の訃報に、驚き、同時に、何故と言う言葉の先がありません。

お寺を使っただけ、葬儀の依頼に、先ずはいったん、家に休んでと、葬儀社のK商店を教えて、電話を切りました。

多分、午後10時ごろ、黒い寝台車に揺られて、家族は、「ただいま」と、帰宅したはずですが、

傷つき疲れた貴方にとって、突然に居なくなるN氏の無念もさることながら、家族にとっては、やはり、N氏を喪失することの戸惑いがあります。

この夏の暑さは気になりますが、家族にとっては、やはり、自宅で落ち着いて、先ずは、この数ヶ月の移り変わりの日々を振り返ってみることが、それが、癒すことであり、悲しみ悼むためには、自宅にいることこそ、必要なことだと思います。それでも、家族にとっては、言葉を発しない、N氏の眠る姿を前にして、どんなに優しい言葉でも、励ますことの難しく、人の力の無力さを、覚えるときです。

そしてこのことは、N氏の旅立ちへの、最後の手伝いをする私の、戸惑いでもあります。

葬儀という時間を大切にするために、その数ヶ月、そして、それ以前の時間が、葬儀という形で収まるためには、家族それぞれが、自分の中で、記憶を書き換える作業が、受け入れるための時間が、必要なことだと思うのです。突然と始まったN氏の死ではなく、生きる希望を断ちきられた葬儀ではなく、N氏の生涯が、この葬儀により、後戻りできない人生を象徴として、実りある人生に終止符を打ち、新しく生まれ変わることを意味を、家族が共有できさえすれば、家族にとっても、旅立ちの意味が含まれると思うのです。

N氏が治療の中で、家族とともに、快方に向かうことを疑わずに、兆候の改善と、新たな発症の繰り返しの中、いずれはと予想していたものの、考えてみれば、予期できないことに、困惑していたのではないのでしょうか。それでもN氏は、いつも強く、じぶん自身の快方を信じて、周りには、少しも弱さを見せませんでした。この強さゆえに、突然と襲う不幸なのです。

家族が落ち着いた頃を見計らって、翌日の午後4時、電話を入れて、再度、お話しを聞きながらも、病床にて、「すべてを治して帰るから」と語るN氏の気持は、暗くなる気持ちを吹っ切った、家に帰るのだと、強い未来への決意を知ります。

きっと、病床にいても、「有り難う」「心配するな」と語りかけ、人をいたわるN氏の思いやりの言葉が、たびたびと、家族に安らぎを与えと、これは、貴方の自分に厳しく、人へは、思いやりの証明でもあるのでしょうか。

そして、何度も何度も繰り返す体調の変化に、家族が、N氏のために時間を費やすことが増えることに、「すまない」と悔やみ、「申し訳ない」といたわり、「もう少し待ってくれ」と、いぶかりながらも、その葛藤を見せない、強いところざしにおおわれていたのだと思います。

N氏が病床にて眠る様子に、そっと帰宅した家族に、どうして電話をできたのか、「どうして黙って帰ってしまったのか」と、N氏の葛藤が顔を出します。

3月の半ばに、N氏がちょうど入院した頃、お寺では、N氏の家族が彼岸の墓参に来ないのを、いぶかっておりました。そして、入退院の繰り返しに、5月、お施餓鬼の返事が来ないことに、何かあったのだろうと想像するも、頼りがないのは無事のことと、平穏を装うことでもありました。

そんな中、体調のゆっくりと進行する変化に向かって、6月10日に再入院し、N氏の更なる仕事を持ち込んでの強い意識が、周囲をなごませるのでしょうか、そして26日、急な体調の変化が襲います。

このことは、考えてみれば、N氏の知らない出来事が、N氏の何処かで進行していることの、それは、私たちの将来とか未来というものの、不確かなものの証明です。

そして、その不確かなものに振り回されるより、不確かなものを現実の事実として、病床で、受け入れたN氏に代わって、その不確かなものを、観念でしか受け入れることしか方法を持たない私たちの作業が、如何に、動揺をきたすか、N氏は、知るよしもないのでしょうか。

また、夫婦にとっては、共に築き上げようと誓った家庭が、誰も替わることの出来ない、私一人で立たなければならない、この夫婦の過ごした年月の意味を見だし、何を語らなければならないのかと、考えなければならないことほど、辛いことはありません。

むすめ達にとっても、父の様態と、意欲に揺れて、そこに荒れ狂うの時間の流れに奔流され、時の流れを止めることのできない不安と、自己の苦痛に襲われることの、繰り返しの連続する時間を、家族は、持っていたはずです。

それでも、29日まではなんとか、N氏の意志は強く、その思いは、気づかないことです。火葬場より寺への、車の中で、

「そう言えば、3月、むくみで入院したとき、先生が、この状態でゆけば3ヶ月持つかどうか心配ですと、おっしゃいました。でもまれにですが、治る方もいるのですの言葉に、父は、勝手に、その治るほうに、自分がいるのだと、受けとったのです。あとになって、先生が、そんな父を、微笑みながら、見つめていました。たった数パーセントの確率を、父は、それが100パーセント自分にあるのだと、思ったみたいで……。」と、娘さんが語りました。

家族にとっては、N氏の症状の変化は、ゆっくりとした症状の変化に見えたのでしょうか、「もしかして」と、N氏の死が浮かぶものの、N氏の強さに、気持ちが救われることの繰り返し

の日々を持っていたのでしょうか。

28日、29日と、意識を保ってはいたものの、もしかしてと、この二夜の、病院で、もっとも尊くて、短い夜を過ごしたのだらうと、朝が、来なければよかったのにと……思います。

そして、30日、早朝、急変し、突然として、N氏の意識は、夢の中に、入ってしまったかのようです。同時に、N氏の意識が薄れたあとのN氏の事実は、N氏が知るよりは、家族が知る限りの事実の変化になりました。

考えてみれば、たった十数時間のことです。77年の生涯のたった、十数時間の大きな変化でした。

人にとって、年齢を重ねるということは、本来、より自分を見つめるという意味があります。でも、現実には、次々と与えられる試みに、未だ来ない時間に、着実な自分を重ねて、今という時間を、走っていたはずです。

過去や未来が与えられ、築くものとするなら、もう与えられない、もう築くことが出来ない未来を前にして、さかのぼることのできない過去をどう私達は、保てばよいのでしょうか。

いくら思い出して豊かな時間が続こうが、なつかしい経験を思い出しても、過去は夢のまた夢です。

だからこそ、築き上げた時間の、失うことを予感して、N氏の生涯を受け入れるという作業が、大切なのだと、充実した生涯だったと、N氏は、今、喜んでいるのだと、娘さんが繰り返し語るのです。

それでも、幻のように思ってしまいます。その嘘のような幻のような日々は、夢の中の事実でもあります。

事実が記憶に刻まれ、過去の事実として、思い出になります。しかし、現実を隠して、記憶に刻まれることもあります。また、いまだかつて、未来の事実が、記憶に刻まれたことはないのですが、あのとき、こうしていればよかったと、事実でない未来が、記憶に刻まれます。

記憶に刻まれたという事実は変わらぬものの、現実の事実かどうかは、過去の思い出ということだけでは、わかりません。その解からないということが、人の夢の、儚さであり、過去の思い出の懐かしさや苦渋に繋がります。

人って、支え合って生きるものですが、夫婦の日常の生活は、意識しなければ、共にしっかりしようなどとは、普段、思わないものです。

それは、季節が、人の意識に寄り添うがごとく、いつも一緒にあるに似ています。季節の花々の違いのように、人は咲かないものなののでしょうか。年毎に、年齢を重ねて咲く、今年の花々にたとえて見たいものです。散る前に、もう一度、そして、何度も何度も咲きたかったと、N氏の声が響くようです。

不思議に老いの姿が似合わないN氏でした。N氏の、それでも、77才という年齢の、一途に自分を生かし切ることにたけたN氏は、人生に定年はないのだと……、心に強く想いがあればこそです。普段とかわらぬままの、N氏の老いとは、熟達した見識と知識の見事さなのかと、推し

はかります。

病を抱え、傷ついた人間を、自然の老木にたとえて……、若木に比して人を圧倒する姿は、本来、人も年をとればとるほど老齡の枯木に似ている姿なのですが、異なって見えるのは、人の思いのなせることなのでしょう。

人が年を重ねた末の、悲哀や年輪を偲ばせた変形した姿・形のたくましさを、もっと見つめてもらいたい。

あっという間の過去は目に見えず、若い人と年を重ねた人も、同じはずなのですが、N氏の77年は確実に違う重みを、昔から言えば、77歳はすでに老齡なのでしょうが、その老いが似つかわしくない老齡のN氏の枯木のくるおしい姿を見て、若さや勢いを見て、なおさらに持つのです。

通夜の夜、娘さんが、「父の写真をたくさん、棺（ひつぎ）の周りに飾ってよいですか」と、聞いてきました。

私は「どうぞどうぞ、おいて下さい」と、写真を受けとり、棺の周りに立てかけて見えるようにいたしました。そして一枚一枚、子供の頃の写真、子ども達との写真、孫達との写真をうち解けた家族写真をおきながらも、一枚一枚見ながら、思わず嬉しくなりました。

今まで、N氏とせっして気がついて不思議に思っていたことは、若々しく老いた姿を見ることがなかったことです。繰り返し訪れる季節のなか、言葉を交わすことが少なかったとはいえ、30年以上にわたる付き合いのなか、いつも変わらぬN氏と接していたのですが、棺の中に眠るN氏も、77才とはいえ、老いた姿にはほど遠く見えました。

子ども達や孫達に、式場に囲まれて、もっと老いた姿を見せたかったなど、思っていたことでしたので、この写真には、驚きました。そして、人って解らないものだと、改めて、感心したのでした。

このことを、火葬場への車のなかで、娘さん達告げるとき、娘さん達が、答えました。

「そう言えば、私たちに接するとき、もちろん小さかった頃よりずっとですが、Nは、いつも父としての姿がつよく、そう言えば、子供の頃も、今の孫達に接するような、あんな姿は信じられないのです。仕事場に行っても、孫はどうしているか、今、何に興味を持っているのか、勉強はしているか、スポーツはどうだと、孫の話だけです。

いつだったか、私が、銀行で8万円を、置き引きにあったのです。父に電話すると、何だそんなことか。孫が事故にでも、何かあったのかと思った。ビックリさせるな。そんなことは、大したことではないと、そんなことで電話をするなど、言われたんです。父に、言われてみると、そうだなと、納得してしまうんです。マンションを買おうと決断しかねていたとき、父に相談したら、即座に、買えと言われ、私たちは、即決したのです。これからは自分で決めなければならないですね。」

孫達に囲まれ、ソファの中心に座って、カメラに向かって、顔を崩すN氏の写真、それは、

まさしく老いが咲いたN氏でした。

深濱－fukahama

仮通夜のため、この男の家に行ったとき時も、この家には、人が、ごった返していた。そして、枕経で、すすり泣く声を聞きながら、顔に白い布をはがして眠っている男を、前にして、この男の、男気をねぎらった。

終わって、男親が、「足が弱って、痛く、情けない。この親不孝が」と、かすれた声で、私に、ささやいた。キッチンのカウンターには、ありとあらゆる酒瓶が林立している。「家族や、友人に飲ませるのが好きで」と、婦人。

通夜の日には、700人が、焼香の列をつくった。そして、男の最後の花道を飾った。通夜と葬儀の経中に流した涙の、経を終えて振り返る顔々は、うつむきながらの、やるせなく、疲れて、希望のない、うつろな顔々だった。

翌日、告別の式が済み、棺が引き出されると、ふたが開けられ。200人から300人が列をなし、この男の想いを、花々で飾った。

そして、ふたが閉じられようとするとき、棺に、深濱の男達が群がり、「ヨシ！これで最後だ、思う存分飲め！」と、怒号の中に、なみなみと酒をそそぐや、式場は、涙があふれ、たちまち、嗚咽にかわった。

それは、平成16年6月28日、午後12時だった。この男のために喪服を着た人が群れ、冷房の効かなくなった部屋は、熱気に満ちていた。

その暑さの中、挨拶が終わり、人氣がひくと、その熱気は急に冷め、家族と私と、男達が10人残された。棺の中には、49才で亡くなった精悍な男の遺体が横たわり、沈黙して、茶毘を待っていた。

後は、瑞江の火葬場にと、霊柩車まで棺を送るだけだった。隊列を組んで、10人の男達によって運び出された棺が、階段を下りきったところ、それは、むっとする梅雨の晴れ間の蒸し暑さの中でのことだった。

この男の旅立ちを、待っていたかのように、隊列の両脇に、深濱の半纏を着た若者が、激しく拍子木を打ち出した。その場が、一変した。

日焼けした神輿総代の荒々しい発声が、「オイ サッ！オイサッ！」と続くや、その隊列を囲む黒い群れが、小さく上下に揺れ始めた。「オイサッ！オイサッ！」と、霊柩車に続くわずかな道

のりを、まるで深濱の大神輿のように、ユッサユッサと、男は、担がれて進んだ。棺が霊柩車にたどり着いたとき、神輿総代の男が、家族や私の目の前で、荒々しく「指せ！」と、叫んだ。棺には、10人だった男達が、群れてふくれあがり、黒い服に真っ青の深濱の半纏におおわれ、高らかに持ち上げられた。男達の手は、棺を叩いて、「指せ！指せ！」と、日差しが照りつける中、それは、いつまでも続くかのようだった。男達の眼には、涙があふれ、家族は拳を握りしめて天を指し、49才の男の妻も目頭を熱くして、棺を仰いだ。いつまでも続くことではないとの思いが湧いたとき、棺は、静かに霊柩車に納められた。

この別れの驀引けに、この男にふさわしい深濱の儀式、それは、どんな言葉よりも、どんなお経よりも、この仲間達にもっとも合った別れの方法に思えた。たとえ声には出さなくても、誰もが、この時、「オイスッ！オイスッ！」「差せ！差せ！」と、叫んでいた。私も……。

人の別れの道行きが、涙であふれることの、この姿は、特別なこととして、まぶたに残った。それにしても、この時々、流していた涙は、すべて、棺の中に眠る男に向かって流した、涙でした。ただ一人、涙を流さず、嗚咽することもない男がいたはずだ。棺の中に。この男だけは涙を流さず、静けさにあふれていることが、さらに涙を誘ったと思った。

哀しみは、過去から、未来からと、私たちに迫ってきます。この迫り来るモノを受けて、涙と嗚咽という形で、哀しみという潤いを、私たちは与えられます。しかし、ユッサ！ユッサ！と揺れる棺を思いだし、この涙だけは、過去や未来から来たものではなく、哀しみや寂しさでもないと思った。あの時の涙は、過去に出逢った涙ではない。

あの時の、止めどなくあふれる涙を追ってみたいと、次男の嫁が、着物の袖をまくり上げて、拳を差し上げる姿を、棺の向こうに見たことを思いだしていた。「差せ！差せ！」のリズムに、ジーンと、身体が動いていた。

男も、担ぎ手も、囃（はや）しても含めて、その場に立ち会った者すべてが、過去や未来から来たものではない涙に、自身の全存在を傾けていたのではないかと。そして、存在の総てを傾けたとき、涙が止めどなくあふれたのではないか。その時、自己という形を離れて、この場の時計が止まっていた。

この男の最後の花道に、それは、一瞬のことだったが、揺れる棺の中で、確かに、男も泣いていた。それは、この男に最もふさわしく、最後の涙に違いない。

……………。

三年三年ごとに来る深川の本祭りに、旅立った者の想いが重なり、じぶん自身の身の三年、六年、九年と加算されることを思うと、あまりにも四十九才の旅立ちは哀しいものです。

この家のまわりには、いつも、深濱の想いがつきまとうかのようです。深川の祭の、神輿の誇

りは、深濱です。その深濱の神輿総代は、町神輿の総代とは違うのでしょうか。深濱の相談役が、この夏も、神輿を盛大に繰り出すと言っていました。

でも、男の遺骨が納骨されないかぎりには、重い腰を上げることに、息が上がりません。そして、8月1日、男は納骨された。考えてみれば、過去、何十人、何百人、何千人もの深濱の仲間が、旅立っていったことでしょうか。その人達の思いを、また、残された家族の思いを込めての、熱い熱い夏の、濱の神輿の繰り出しなのでしょうと考えて見ました。これは、深濱の神輿だからこそ、言えることでもあるのだと……。

暑かった夏の日が終わり、久しぶりに出逢った深濱の総代。

「男の写真を、花棒にサラシで巻き付けて、14日、15日と、八幡宮まで繰り出しました。そして、私は、半纏の下に、やはり「ヨシ」の形見を偲ばせていたんです。」

死に顔

陽岳寺の本尊は、十一面観音菩薩です。いわれは、どこかで書いたので省略したいが、なぜ十一の顔を持つのだろうか、ふと、お経ちゅうに思った。

お経ちゅうに思うなど不謹慎なことかと思うかも知れないが、よく、本当に、ふと湧いてくることが多いのです。

この十一の顔を持つ本尊の、なぜ十一なのかという問いの裏には、人は様々な顔を持つものだという思いがあったればこそその問いでした。そして、顔とは、その顔とは、様々な自分を表現するものであり、顔とは、人と人との関係や縁起をあらわすものであると思ったからです。

「よく私は、頑固である。意地汚い。小心者である。本当は気が小さく弱いものなのです。忘れっぽい。おっちょこちょいです。食いしん坊である。欲が深い。マラソンが好きです。」と、自分を表現する言葉には、必ず、自分以外の関係や縁を指しているといえれば、自分の表現は、関係とかつながりを語っていることとしていえるのです。

千手観音の千手を取りさってみれば、後に遺るのは十一面観世音菩薩だとすれば、本来、顔も千有ってもおかしくないはずだと、類推するのです。

この類推は、仏教の知識をなにも探ろうとせず、こう言い切ってしまう大胆さであり、おそらく専門家の方からは叱責を買うことは目に見えているが、そう考えてしまうのです。

こう書いて、なぜ十一とか千というたくさん顔にこだわるのかといえば、人が一つの顔しか現さないときをふと浮かんだからです。それは、人の死に顔ではないかと。

「安らかな顔、眠るような顔、いい顔をしている。あまりの穏やかな顔に、ふと眼を醒ますのではないかと錯覚しそうな」と、人が一つの顔しか見せないことに、これが死の姿でもあるのだろうと気づいたからです。

そして、ある時、十九歳の女の子のプリクラ帳を拝見する機会がありました。

もちろん、その子のご両親から見せてもらった時のことでした。多分、二百枚以上の三百枚はあったかも知れませんが、プリクラの自画像収集でした。一回目を通したとき衝撃は、どれも、華やかな、楽しげにして眩しいものでした。しかし、くりかえし見て、この子の残したかったものは、言いたかったものはと考えるようになりました。カメラに向かって笑顔をした顔に強烈なライトが当たり、自分の隣に並ぶ人は変わるものの、目を見開いて、レンズに向かう顔や姿に、楽しかった一瞬の収集に見えたからです。しかも、みな同じ顔だったことに、なぜか、ひとつの顔のイメージが、死に顔を連想させ、なぜ、もっといろいろな顔をしていないのだろうと、十一面の姿を思いだしたのです。

考えてみれば、相手の顔は三百と違うものの、三百の楽しさの表現を一つの顔で現す子といえればよいのかもしれないが、奇妙に見えたのです。この楽しみの顔を、死に顔とはいえないものの、なにかおかしい。

そこに、この子の求めていたものがあるはずだと、三百という機会を、この子は、街角のプリク

ラ機で証明して、収集したことになる。この子が何故か、不憫に、哀れに、悲しく思えたのです。
。三百という機会の巡り合いに、その数以上の、この子の顔が有ったはずです。その顔を見たかったのですが、あまりにも強烈なプリクラに圧倒されてしまいました。

松山鏡（ソクラレストとヤージャニダッタの 続き）

《舎衛城(シャヱウヨウ)に住むヤージャニダッタは、鏡に写る自分の美貌を楽しんでいたが、ある日、じかに顔を見ようと思ったが見えないので、鏡中の像は悪魔の仕業であると早合点して、怖れて町中を走り回ったという、自己を失った愚かさの故事。その後、変わり果てたヤージャニダッタは、友に話を聞いてもらいました。友人はやさしくさとし、ヤージャニダッタは普段の彼に戻ったのです。》

鏡に写る自分の顔に、鏡をとおさず自身で直接にふれたいものだと思ったのです。本当の姿という幻想をいだし探し求めようと、もがき遍歴する試みは、人間の追求してやめぬ心の構造を物語っています。

そこに鏡が登場して、写されているものに、写す自身の心の歪みが写されているものが、物語りとなります。

この故事が、臨濟録・示衆（じしゅう）にあります。「なんじ、ただ一個の父母有り、さらに何物を求めることがあるだろう。なんじ自ら振り返ってみなさい。古人云く、演若達多(インヤダッタ)は頭（こうべ）を失った。求める心がなくなったとき、無事がおとずれる」と。

「ただ一個の父母」とは、本当の自分のことです。演若達多（インヤダッタ）は、この話の原型ヤージャニダッタという主人公の漢訳名です。そして、この話が中国から日本に伝わって、昔語り、謡曲、落語として伝わっています。

昔語りの松山鏡（まつやまかがみ）

松山鏡は、越後国、松の山という地に、貧しく暮らす、父と母、それに娘三人の物語です。

ある時、父が、山や河、難所を幾つもこえなければ行くことができない京都への旅に出ました。一ヶ月がすぎ、やっと自宅に帰ってきたある日の夕方のことでした。

大きな荷物を背負って、旅支度をといた父は、晩になって、大荷物をといて、中から細長い箱を取りだし、約束のお土産を娘に手渡しました。

それはそれは、かわいらしく、都の匂いのするお人形さんやおもちゃでした。

そして妻には、銅製の鏡を、渡したのです。二人の喜んだことは申すまでもありませんでしたが、妻にとっては、鏡は手にすることが始めてで、知らなかったのです。

そんな妻の様子に、夫は、やさしく、「お前、それは鏡といって、都へ行かなければ手に入ら

ないものだよ。ほら、こうして見てごらん、顔が写るから。」といました。

そして幾年かは、三人で平和に暮らしていたのですが、娘が15才になったとき、母が具合を悪くしました。母の病気は重くなり、もう今日明日の命となったときの、その夕方。

母は娘を、枕元に寄り、やせこけた手で、娘の手を握りながら、「長い間、有り難う。わたしはもう長いことはありません。これは京の土産にお父さんから頂いた、だいじな鏡です。この中にはわたしの魂が込めてあるのだから、いつでもおかあさんの顔を見たくになったら、この鏡をのぞいておくれ。どうか、わたしの代わりになって、おとうさんをだいじにして上げて下さい、たのんだよ。」といて、鏡を渡したのです。

娘は、目にいっぱい涙をためたまま、いつまでも、うつむいていました。

それから間もなく、おかあさんは、息を引き取ったのでした。あとに残された娘は、悲しい心をおさえて、おとうさんの手助けをして暮らしていたのですが、寂しさがこみ上げてくると、娘はたまらなくなって、「ああ、お母さんに会いたい」と、鏡を出しました。

するとどうでしょう、鏡の向こうにはお母さんが、にっこりと微笑みかけています。

その後、お父さんは人にすすめられて、二度めのお母さんをもりました。

娘は、今度のお母さんとも、先のお母さんのように、親しく暮らしていました。

それでも、娘はやはり時々、先のお母さんが恋しくなると、そっと部屋に入って、鏡を出してはのぞき込み、お母さんに向かって、笑いかけていたのでした。

今度のお母さんは、時々、娘が悲しそうな姿をしていることを気にかけていました。またそんな時、部屋に入り込んで、いつまでも出てこないことに、心配していました。

そんなことを繰り返すと、お母さんは、娘が隠し事をしているのではないかと疑って、だんだん娘が憎らしくなりました。

お母さんは、自分の思いを、お父さんに話しました。お父さんは「私が見届ける」といって、娘の後から部屋に入って行きました。そして娘が一心に鏡の中に見入っている姿を見たのでした。

。

娘は、父に驚きながらも、こうしてお母さんにお目にかかっているのだと話しました。

「お母さんは居なくなりましたが、この鏡の中にいらしゃって、いつでも会いたい時には、会えるといつて、この鏡をおかあさんが下さった」のだと話したのでした。

お父さんは、このしおらしい娘の心がかわいそうになりました。すると、その時まで次の部屋で様子を見ていた、今度のお母さんが入って来て、娘の手を固く握りしめながら、「これですっきり分かりました。何という優しい心でしょう」といいながら、涙をこぼしたのです。（講談社学術文庫より）

謡曲の松山鏡

この話も、昔話の松山鏡と同じように、母の形見の鏡をのぞいては、そこに写る母の姿を偲んでいる娘の姿があります。

ある日のことです。母の三回忌の命日、妻の夫が、持仏堂へ向かったのです。すると、そこにいた娘が何かを隠そうとしたのでした。これは、世間の噂のどおり、新しく結婚した今の妻を、娘が呪っているのだと思い、しかるのでした。

しかし隠していたのは亡き母の娘に託した鏡であり、娘は鏡の中に浮かぶ、母の姿に思いを馳せ泣いていたのだと気がつくのでした。

そうした状況の中、持仏堂の中には、地獄から娘を心配する母の霊が現れ、鏡にまつわる説話を語ります。さらに、母を連れ戻そうと地獄から俱生神が現れます。その鏡は、同時に過去の母の娑婆での罪科が写る鏡でもあったのです。俱生神が、鏡を母に見せましたが、そこに写っていたのは菩薩の姿でした。

娘の母を思う心が、俱生神の心をうち、母を連れることなく地獄へ戻っていったという謡曲です。

落語の松山鏡

越後の国の、松の山村に、百姓の庄助という男がいました。24才の時、父庄左衛門と死別し、妻はもらっていたものの、以降18年間というものの、毎日、両親が眠るお墓に、花と線香を欠かしたことがなかったのです。そのうち、村人から、孝行ものの庄助と噂が立つと、越後の国の領主に知れることになりました。庄助にとっては、貧乏で生前に親孝行ができずにいたことを悔い嘆いてのことだったのでした。

名主の権右衛門共々、領主のもとに召され、褒美を下されることになったのですが、庄助は褒美は一切いらぬから、できるなら父親に会わせて欲しいとひれ伏します。

そこで、領主は、「いかなる無理難題でもお上の威光をもって、必ず庄助の望みをかなえさす」との約束を案じて、庄助に鏡をみせます。庄助は、鏡に映った父親の姿に大変感激します。その鏡は、朝廷より国の領主の印として預かった、八咫（やた）御鏡（みかがみ）であり、殿様は、「子は親に似たるものぞと亡き人の恋しきときは鏡をぞ見よ」の歌を添えて男に鏡を与えたのでした。

庄助は、殿様に言われたとおり、誰にも見せず、鏡を納屋の中にしまい、朝には「お父っ

あま、行って参ります」と出かけ、夜は「ただいま帰ってまいりました」とやっております。

これを妻が勘違いし、「夫の様子がおかしい。納屋になにか、隠しているんじゃないか」と、疑いだしたら切りがありません。ある日、夫が出かけた後、納屋に入り、鏡を見つけてしまったのです。

妻も、鏡を見るのは初めてなので、鏡に映った姿に、「どうも様子がおかしいと思ったら、こんなところにアマツ子を隠して」と、腹を立て、地団駄ふんで悔しがります。仲睦まじかった夫婦も、庄助が帰宅すると、この夜は大喧嘩です。そこに通りかかったのが、隣町の尼寺の尼さん、二人の話を聞き、一緒に問題の納屋に入りました。納屋にしまわれていた鏡を尼さんが見て、「中の女は、面目ないと思ったか、坊主になって詫びている」。

今更、鏡を心と言ひ換えて読むなどとは、不調法というものです。庶民の賢さは、笑いや芸能に……。

真ん中（平成20年4月1日）

谷川俊太郎質問箱（ほぼ日BOOKS）という本があります。この本は、糸井重里事務所が運営するインターネットサイトの『ほぼ日刊イトイ新聞』が、64問の質問をメールにて受付、谷川俊太郎氏に答えてもらったものです。

その質問は例えばこんなふうです。

しょうごろう 36歳の人からの質問。

『人間をはじめ、多くの生物って左右対称ですけど。なんででしょう？』

谷川俊太郎さんは答えました。

『こういう質問には、科学的な答えってのがあろうと思うんだけど、答を知るとまたその先を、「なんで？どうして？」って訊きたくなるのが、人間なんだよね。

でも問い続けて最後の究極の答は、多分科学には出せない。で、ぼくの答。

いまある世界ははるかな昔、左右もない上下もない混沌から生まれてきた、私たち人間の内部には、いまもその混沌が生きてうごめいている。

だけどそれを解放すると、この世界の秩序があやうくなるから、人間はときどき鏡を見て、あるいはステレオを聴いて、あるいは三次元映像を見て、目も耳も二つずつある左右対称を楽しみ、確認して安心するのです。』

左右対称を楽しむとは、バランスがとれているという意味でしょうか。それは地球の引力に対してもそうでしょうけれど、目は三角法の測量により長さを測ることにより、耳は、音源の移動に、相対的な位置を知る働きがあるからでしょうか。

この左右対称は、対象を捕まえる、追いかける、ものを投げる、水の中に泳ぐ、愛し合うためには不可欠なものであるけれど、それを意識したとたんに、左右はばらばらの動きに、自己はコントロールを失うものです。だって、われわれの手や足は、右や左と意識したら、思うように手や足を動かさないからでもあります。

それよりも、意識して右足を出し、左足を出してと歩むことはスムーズではありませんことから、左右の間にいるものは何ですか？と、問いかけてみたいものです。

『人間をはじめ、多くの生物って左右対称ですけど。なんででしょう？』の疑問は、生物の左右対称という在り方だけではなく、人の考え方や、見方となってもいます。そして、左右対称の在り方見方は、左右対称を意識しないことに成り立っているように思えます。たとえば何気なしに行っている行為に、紙を半分に折る場合があります。左右の端を合わせることで、中心が浮かび上がってくるようにです。

これを人間の場合で考えてみると、上と下、右と左、さらには、好きと嫌い、損や得、順や逆、西と東、始めと終わり、相対的なものを知ること、人の位置を知る働きがあるといえるでしょう。

順や逆、始めや終わり、左右や上下、損も得も、つまり相対的な関係は、我々の位置をはかるものです。そして相対的な関係のものには、必ず、真ん中があることが不思議なことです。

谷川俊太郎氏は、「いまある世界ははるかな昔、左右もない上下もない混沌から生まれてきた、私たち人間の内部には、いまもその混沌が生きてうごめいている。」と言います。

仏教が中道を指向する理由も、この辺にあるのかもしれませんが。

その混沌の働きとは、左右という世界に生きて、左右にとらわれない働きとすると、どう考えることができるでしょうか。

谷川俊太郎氏は「確認して安心するのです」ということで、その混沌というものを含めて在るものに迫りません。しかし、混沌というものこそ、人間を人間たらしめるものではないかと考えさせられます。それが真ん中ではないかと。

その真ん中を知るための試みとして、左右や損得という相対的な関係にあえて踏み込み、損しても減らないもの、得をしても増えないものを考えてみます。

もっとも、「そんなの関係ない！」は、すべての繋がりを切るものですが、切ったと思っているのは自分だけで、考えてみれば、かえってその繋がりを浮き上がらせているものだとも思います。真ん中がです。

でも本当に人間として、価値あるものは、得をしても増えないもの、損をしても減らないものの中にあるのではないかと思います。たとえば、偉くなっても偉くならないもの、稲穂のように。鬼になっても鬼でないもの、鬼の目に涙とかです。

かって長安の都を目指して旅する僧に「大道、長安に通ず」と言った禅僧がいましたが、大道などはあり得ん、今の一步が大道ではないかと、右も左も前も後ろに行くも含んで、真ん中自身を語りました。

損しても減らないものとは、優しさとか、思いやりともいえます。いくら働かせても、働かせても減らないものです。もっともっと山ほどあります。しかし、これを知るには、自分中心としながらも、そこから出てくるものは右か左かという発想では思い浮かばないことでもあります。

また、得をしても増えないものとは、気づきではないでしょうか。それは、人はもともと自己に欠けているものとして、さらには、思っても見なかった自分に備わっているものに気づくことではないでしょうか。慈愛や慈悲、敬いや、いたわりこそ、誰もが持っている真ん中自身、宝物ではないでしょうか。ただただ、気づくことです。

そしてさらに、社会にあることわりや、自分にとって見えない道が見えたとき、これが大事ではないでしょうか。ここからは、恵みとか喜びというもので表現できるものです。あるいは、感謝もよいでしょう。私は、よく混沌の悲しみと言います。それは、もともと持っていたものを相対的世界に生きるために失うことです。失う必要性などあるわけではないのにです。

こう考えてみると、順や逆、損や得、好きや嫌いという相対的なもののなかに、それを超えるものがたくさんたくさん潜んでいるように思います。

これを見つけようと、人は、揺れるものかもしれません。

禅宗の祖師は、「境縁にはよしあしはない。よしあしは心から起こる。心がもし無理に分別しなければ、妄情はどこから起ころうか。暇な時は誰が暇なのか、多忙なときは誰が多忙なのかを

考えてごらん下さい。そうすれば、多忙の時に代って暇な時の道理があり、暇な時に代って多忙の時の道理があることをきつと信じるでしょう。」と言っています。

そして、『人間をはじめ、多くの生物って左右対称ですけど。なんででしょう？』から導き出したものは、

右にも左にも左右されないもの、まして、真ん中にも左右されないもの、

また、そこに在ることも、無いこともないものが、在るためにです。

百万回いきたネコ（平成21年1月1日）

百万回生きたネコという童話を、読んだことがあるでしょうか。佐野洋子さんが、物語と絵を創った絵本で、講談社から出版されたものです。その内容は……。

大きくてりっぱなとら猫は、何よりも自分が大好きで、大好きで、だからというのも変なことですが、飼い主に対しては、みなキライでした。何しろ百万回生きたということは、自分が好きなために、百万回死んだということだからです。

この物語の百万回の生に、とら猫は飼い主から多くのものや経験を与えられました。自分だけが好きだという自覚は、与えられたものの意味を考えることを、させません。このとら猫は、そんな自分を嫌うことはなかったようです。百万回経験してもです。

とら猫は百万回にわたって、飼い主の悲嘆と涙を見たけれども、飼い主に対しては一回も泣かなかったのです。飼い主の悲嘆と涙に共鳴する、とら猫自身の心の豊かさを見ることはできなかったのです。

そしてこの物語は、百万一回目にして、始めて野良猫に生まれ変わります。とら猫は喜びました。誰のネコでもない自分のためのネコになったからです。

多くのメスネコたちが、そんなとら猫と結婚しようと言い寄ります。ところが、ある時、とら猫は自分を無視するシロ猫に恋をしてしまいます。初めてのことでした。自分より好きなものができたということが、このお話のポイントです。

この好きになるということは、さまざまな与えることを創造するようです。でも、与えることで振り返らせたり、与えた見返りを求めたりでは、それこそ、二元対立の世界におちいる自分を創ってしまいそうです。

そしてこの物語は、ある日のことです。とら猫は、そのシロ猫のそばに暮らしたいと告げたのでした。そして「いつまでもそばにいました」となります。やがて、子ども達がたくさん授かります。すると、その子ども達も好きになり、りっぱな野良猫として育てて、それぞれの子ども達も、独立して行きます。

とら猫は、そんな子ども達の巣立ちを見届けながら、シロ猫と共に、満足していたのでした。

無償の愛の中に生きるとは、与え、与えられることを通りこして、ただそばに生きることの大切さを表現しているようです。

自己愛から始まって、たどりついて到ったところに、出逢いがありました。出逢いは人を変え

ますが、その変えられた人は、共に歩むなかで、なかなかその時の思いを保つことは難しいものです。この物語は、出逢いから変化しても、いつまでもそばにいることを考えさせられるものです。

その出逢いから、結婚に、そして子ども達の誕生と成長、独立、そして二人の老いを通して、一生という変化において、”いつまでもそばにいること”、それが幸せであるというかのようです。

そして、この物語は、一緒に暮らしはじめた、とら猫とシロ猫に、老いが訪れます。その老いの季節が、シロ猫と、いつまでもいつまでも、生きつづけていたいと思わせます。

そして、ある日、愛するシロ猫が、とら猫のとなりで、静かに動かなくなっていました。とら猫の悲しみは深く、百万回も泣いたそうです。

死はその関係をそぎますが、そして、悲嘆や涙がおとずれるのですが、悲嘆や涙を否定するものではなく、その悲嘆や涙のなかに、自己愛から始まった一生が含まれているのだと、気づかせてくれる物語です。そこには、充実して生きるも、稔りもありません。

百万回生きて、百万一回目にして、一回性の生と死を手に入れたということです。貫かなければ、一回性の生と死は、保たれません。この物語にはシロ猫やとら猫のほかにも、動物や人間が登場いたしますが、みな、それぞれ一回性の生を、生きていました。

とら猫もシロ猫も、共にそばに生きたということ、そのことで、一回性の生と死を手に入れたということ。逆から見れば、百万回も繰り返しながらも、その幸せは手に入れることの難しいものなのだと提言かもしれません。

老いのおとずれの中で、とら猫は、「いっしょに、いつまでも生きていたいと、思いました」が、それは、「いっしょに、いつまでも生きていられない」予感と同時に、そのことの受け容れでもあるのでしょうか。

平成二十年度の漢字は”変”でしたが、変わることを恐れるよりは、むしろ、変わることの連続性こそが、人生であり、変わることの内にあっても、「どんなことがあっても、いっしょに、いつまでもいきたい」が、とら猫の願いです。

さらに、「いっしょに、いつまでも生きていたい」とは、永遠を彷彿させるものです。

この物語は、とら猫の涙が涸れたとき、シロ猫のすぐそばで、静かに動かなくなりました。そして、とら猫は、「もう、けっして生きかえりませんでした」、という童話です。

悲嘆が百万回、涙は枯れるまで、とら猫をおおうのです。百万回の生と死を通してたどり着いた、「そばに生きる」ことの無償の愛は、貫かれていきます。

無償の愛を、自分を捨てることと理解すれば、とら猫の悲嘆と泣くことは、「そばに居ること」から「いっしょに」を完成することなのではないでしょうか。死を受け入れると同時に、シロ猫の生も受け容れたことで、すべてが自分となって、無償の愛からの報（むく）われとして、成就されたのだと思えます。

自己を最後まで捧げて、悲嘆と涙のうちに、静けさとなります。そして、とら猫自身も「生きかえることはありませんでした」と、これは、物語性をもつ人間の考えや思いを否定する言葉です。

一回性の生とは、かくも、強くて悲しく、過酷で無残でもあるし、美しくもあるし、心を動かす物語です。

(無門関～百丈野狐より、五百生)

夜来る鳥（平成21年1月1日）

「夜来る鳥」、この本は、岩瀬成子（いわせじょうこ）さんが言葉を、そして、味戸ケイコ（あじとけいこ）さんが絵を描き、PHP研究所が1997年に出版したものです。今は、絶版となっています。

《 真夜中に、真っ黒な森の中で、イタチのお別れの会が、動物たちによって行われました。

イタチは重い病気にかかって、ぐったりとしています。

イタチを取りまいて、タヌキや野ウサギ、野ねずみや鹿たちが坐っています。木々の枝には、フクロウやトビ、鳥たちが見えています。森の奥の、漆黒の闇の中、月明かりが、横たわるイタチだけを照らしています。

タヌキが、「どこまでも続くと思うと、いきなり消えるもの、なあんだ」と、横たわるイタチに言いました。

イタチは弱々しい声で、「いのち」と答えました。イタチは、弱々しく燃える自分自身の命の灯を描いていたのだと思います。

ところが、タヌキは、「いいえ、イタチの足あとです」と、自ら答えました。

すると回りの動物たちみんなは、手をたたきました。

次に野ねずみが、「ピカピカ光って美しいもの、なあんだ」とたずねました。

イタチはようやく「星」と答えました。

イタチは、漆黒の闇の彼方に広がる、星々の瞬きを見ていたのでしょうか。消えかける命の瞼のスクリーンには、漆黒の彼方にキラキラと輝く星々だけが写っていたのだと思います。

ところが、野ねずみは、「いいえ、イタチの目です」と答えました。

動物たちは、尻尾で地面をたたきました。この時、イタチにもはっきりと、森の仲間たちにとって、自分の命がどのようなものだったのか理解できたと思います。感謝したと思います。

もしかして、イタチと他の動物たちとのかかわりは、そんなに長い時間ではなかったかもしれませんが。少なかったかもしれませんが。それでも、精いっぱい仲間であった。家族であった。共に生きた時間を持つことができた。別れの時間を持つことができた。そして、イタチの命を見つけてくれた、たたえてくれた。

最後に鹿が、「聞こえなくても、いつまでも聞こえているもの、なあんだ」と、たずねました。

イタチは目を閉じたままでしたが、かすかに震えたように見えました。

もうイタチには答える力がなかったのです。答える力がなかったけれど、イタチの喜びを、動物たちもわかっていました。

鹿は、「イタチの声です」と自ら答えました。

風が吹いて、栃やブナ、カエデがお別れすると、イタチは、もうピクリともしませんでした。

動物たちは、しばらく、イタチを見つめていましたが、やがて、だれからともなく拍手が起こりました。また、風が吹き、林はざわめいたのです。

きっと、森の奥の動物たちは、繰り返し繰り返し、仲間たちのお別れをして、今に至っているのだと思います。》

私たちはどうでしょうか。一人一人、自分の言葉で、イタチの命を語る事ができるでしょうか。

「どこまでも続くと思うと、いきなり消えるもの、なあんだ」

何と答えるでしょうか。そして私たち自身の答は……。同じように、次の質問には何と答えるでしょうか。

「ピカピカ光って美しいもの、なあんだ」

「聞こえなくても、いつまでも聞こえているもの、なあんだ」

そして、惜しめない時間が私たちに与えられたとしたら、質問は数限りなくあるはずです。それを発見するのは、私たちです。

「見えなくとも、いつまでも見えるもの、なあんだ」

「いきなり表れて、涙をさそうもの、なあんだ」

「自分が悲しくなったとき、笑いながら見つめてくれるもの、なあんだ」

「人が年数を重ねて思い出したとき、変わらないもの、なあんだ」とね。

「あの時そう思っていたけれど、悲しくなかったけれど、今、自分が変わって、わかるようになって、有り難さが増すもの、なあんだ」

ところで、この本の題名は、「夜来る鳥」です。鳥がちっとも登場していないと、いぶかるかもしれませんが。実は、このイタチのお別れ会を目撃しているもの達がありました。鳥と少女です。

この物語は、森のなかの家で、夜、窓越しに漆黒の闇を見つめている少女に、突然と大きな鳥が訪ねてきて、少女を森の世界に誘うことから物語は始まります。その鳥はフクロウですが、その鳥の背中に乗って、少女は高く舞い上がり、森の奥の一カ所に、木立が開けた小さな広場を見渡せる木の上に舞い降りたちます。

沈黙というより、静寂のしじまの出来事です。味戸ケイコさんの絵は、静寂のしじまを彷彿とさせます。森の闇の中で、淡々と進む目撃した出来事が、イタチの死を悼む、森の動物たちの儀式でした。

夜来る鳥は、この出来事を少女に見せようと、遠くの森に誘います。少女の家では、両親も、もしかしたら、兄弟姉妹も一緒に暮らしているかもしれませんが。どうしてこの少女だけが、選ばれたのだろうかと考えてみると、きっと、この童話を見つめ読み進むもの自身が、この少女なのだ気がつきます。

すると、この夜来る鳥は、作者の岩瀬成子さんが鳥となって子ども達を背中に乗せ、夜の世界に誘うのでしょうか。もしかしたら、夜の世界とは、子ども達にとっては未知な世界、不可解な世界なのかもしれません。すべてを闇で覆いつくすから。

子ども達にとって、この世の中のおおかたの出来事が、未知な世界だと思います。それは、相対的な世界であり、変わりゆく世界なのですが、未だはっきりと口をあけているわけではありません。

この動物たちがイタチに発する問いかけはどうでしょうか。抽象的な概念である、命と死の事実を見つめています。意味するものではなく、作られたものでもなくですが、答は生を語るものであるから不思議です。そこに、死は、生によって語れるものであることを表しているようです。

走り行くイタチ自身には見ることがない足跡、自分の目のかがやき、聞くことを知らないイタチの鳴き声こそは、森の動物たちにとってイタチそのものです。ナゾナゾのような問いかけに、イタチは、今の自分の命、その自分が目撃する漆黒の彼方の星々の瞬きこそ、イタチにとっての答なのでしょう。考えてみれば、イタチが、いのちや星と答えること事態、人間の思いで、不釣り合いです。

言葉で言い表すことのできない死を、どう表現したらよいのか、動物たちに託して、少女が目撃した事実として、私たちに語ります。もともと私たちの心も、動物たちと同じように、同じものを写しています、それこそ、あるがままの姿をです。

岩瀬成子さんは、この後、半年をかけて、『月夜の誕生日』を出版いたします。死のテーマから生のテーマへ、岩瀬さんは、「生まれてきたものは必ずいつかは死ぬのですから、すべて生と死の間のドラマですから、これを抜きには考えられませんね。誕生日って生まれたことを確認できる大切な日ですよ」て言います。誕生の物語は、生のテーマで、少女が戸惑いながらも、次々と与えることで、生きる喜びを知る物語です。これも生きることは、与えることだと言うかのようです。改めて、私たちは何を、大切な人たちに与えているのでしょうか。

だいじょうぶ、だいじょうぶ（平成21年2月1日）

家族という絆のきしみやゆがみ、そして崩壊が言われるようになって久しくなります。孤独死も、都心だけではなく、数多く聞くようになってしまいました。

人という字が支え合って出来ているように、その人という漢字の前に、わざわざ一（いち）を加えて一人（ひとり）を強調しても、その人の内容は、やはり支え合って生きているものです。独（ひと）りとは、争うことの好きな不快な犬の意味が、語源であると大漢語林にあります。

『だいじょうぶ、だいじょうぶ』という童話があります。

いとうひろしさんが、物語と絵を創り、講談社から1995年10月に出版されたものです。その内容は……。

この物語の主人公は二人、お爺ちゃんと、”ぼく”という名の子供です。そして、”ぼく”が生まれて、ヨチヨチ歩き始めたときからはじまります。

”ぼく”とお爺ちゃんは、いつも二人で散歩をしました。

”ぼく”がヨチヨチしていたとき、家の近くを、ゆっくりと歩きました。でも、”ぼく”にとっては、大変な冒険だったのです。なぜなら、”ぼく”にとっては、何もかもが初めての出会いで、それこそ道のつながって続いていること、草や花や木々がさまざまな色と形をしていることが不思議でした。

ポストと看板が何故あるのか、家々の玄関や、大きなコンクリートやレンガの建物の中には何が詰まっているのか。電信柱や電線は何のためかなど、わかるはずがありません。雨や曇り、晴れがあり、空にはまぶしい丸いような輝くものが動きながら、空をいろどるのです。在ることが不思議でした。

道路には、大きな車や小さな車、自転車に乳母車、さまざまな人が歩いています。アリやミズ、蝶やミツバチまでもです。

お爺ちゃんは、古くからの友達のように、アリや蝶に話しかけました。ヨチヨチからトコトコへ、ゆっくりと時間が過ぎるにつれ、”ぼく”の世界はドンドン広がります。まるで、魔法にかかったようにです。

そしてだんだんと、新しい発見や、楽しい出逢いが増すほど、困ったことや、怖いことがあることを、知るようになりました。

「おむかいのケンちゃんは、わけもなく僕をぶつし、おすましのクミちゃんは、僕に会うたびに、顔をしかめます。犬はうなって歯をむき出し、自動車はタイヤをきしませて、走ってきます。

飛行機は空から落ちることも知ったし、あちらにもこちらにも、恐ろしいバイ菌がうようよし

てるってことも、知りました。いくら勉強したって、読めそうにない字があふれているし、なんだか、このまま大きくなれそうにない、思えるときもありました。」

だけど、そのたびに、お爺ちゃんが助けてくれました。お爺ちゃんは、”ぼく”の手をにぎり、おまじないのように、つぶやきました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と。

”ぼく”は、そんな体験を通して、「無理して、みんなと仲良くしなくても、いいんだってこと。わざとぶつかってくるような車も、飛行機も、めったにないこと。たいていの病気やけがは、いつか治るもんだってこと。言葉がわからなくとも、心が通じることもあるってこと。この世の中、そんなに悪いことばかりじゃないってこと」を、知ることができました。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

僕とお爺ちゃんは、なんどもなんども、この言葉を、繰り返しました。

「ケンちゃんとも、クミちゃんとも、いつのまにか仲良くなりました。犬に食べられたりしませんでした。なんども、ころんでけがもしましたし、なんども、病気になりました。でもそのたびに、すっかりよくなりました。車にひかれることもなかったし、頭に飛行機が落ちてくることもありませんでした。難しい本も、いつか読めるようになると思います。」

”ぼく”が、大きくなるにつれ、お爺ちゃんは、白髪がふえ、小さくなり、ずいぶんと年を取ってゆきました。

この物語のおしまい、挿絵です。その挿絵の真ん中には、お爺ちゃんがベッドに寝て、しかも点滴までしています。花が飾ってあって、窓があります。窓の向こうに青い空が見えればなおよいのですが……。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

”ぼく”は、おじいちゃんの手をにぎり、語りかけます。「だいじょうぶだよ、お爺ちゃん。」

私の母は、二年半の入院生活でした。たくさんの思い出があります。しかし、最後の二年間、母の言葉を聞くことはありませんでした。

一週間に二度、母の故郷である八王子の山奥に通ったことは忘れません。そして、できるだけ小学校に通っていた子供たちをつれて行きました。

子供に、母の食事の介助をさせるためです。「自分で食べられなくとも、だいじょうぶ、だいじょうぶ」とです。

言葉がなくとも、表情がわからなくとも、寝たきりでも、やせて、しわくちゃになっても、だいじょうぶだいじょうぶ。

子供が母の口の中に、スプーンにのせた食べ物を入れるとき、「お婆ちゃんア〜ン」と言います。そのとき、子供が自分も大きな口を開けることに、可笑しく、どうして一緒になって口を開けてしまうのだろうか、真剣に考えたことがありました。

そのとき、何一つ表情を変えずに母もア〜ンと口を開け、孫がスプーンを入れます。上あごにスッと食べ物を残してと、その繰り返す行為に、子供の霧中になる姿に、だいじょうぶの中に、いくつもの言葉があることに気づきました。

それは、おだやかさや優しさであり、信頼や絆だったのですが、今では、懐かしさばかりがおおいます。

昨年のことでした。お檀家さんでもあり、親しくしている婦人が危篤になりました。娘さんから連絡を受けて、一ヶ月ぐらいが過ぎたとき、「どうしているだろうか」と病院に見舞いに行きました。

点滴のチューブで飾り、酸素マスクに息を荒げて横たわる婦人の姿に接し、何もしてあげられず、ただ見つめるだけの無力さをおぼえます。それに比して、危篤を繰り返しながらも生きようとする生命の力のたくましさに圧倒されます。娘さんは家族の助けを借りながら一週間、泊まり続けているとうかがいました。

娘さんの口から、夜、母の姿を見ていて、「お母さん、もういいから、頑張らなくともいいから、有り難う。有り難うね、と思いがおこるのです」と聞かされました。息を引き継ぐというのでしょうか、フランクルの「What is past, will come. けれど生き抜かれた過去は、やってくる。」の言葉を思い出しました。これも、だいじょうぶと同じところから出てきている言葉です。

しかし、今の時代は、なかなか「だいじょうぶ、だいじょうぶ」とは、言えないことかもしれません。でも、いつの時代にも、どんな時にも、人は、この「だいじょうぶ、だいじょうぶ」の中に、生きていくはずだと、強く思います。たとえ、手をつないでなくとも、つながっているものがあるはずだと。

だいじょうぶの中に生まれて、だいじょうぶの中に去って行く、そこには、しっかりとした絆があるはずで、稲尊の葦の葉のたとえのように、人が寄せ合って生きる、支え合って生きる自覚が、何よりも必要なのだと気づかせてくれます。

そして、その「だいじょうぶ、だいじょうぶ」の出所を考えたとき、仏心というものを想像します。だいじょうぶとは、臨済録にある「道流、大丈夫児、今日始めて知る、本来無事なることを」の、本来無事を指すからです。仏心とは、大丈夫にほかなりません。

陽岳寺では、円覚寺の朝比奈老師が話された、「仏心のなかに生まれ、仏心のなかに生き、仏心のなかに息を引き取る」言葉を、「仏心を尊さにかえ、命や家族、慈しみの心にかえ、智慧や自然・世界にかえて違和感なく思い描くことができる時、稲尊や無数の祖師たちに出逢うといえます」と、提言しています。

だいじょうぶのなかに生まれ、だいじょうぶのなかに生き、だいじょうぶのなかに息を引き取る、そんな自覚を持った日本であり続けたいと思うのですが、いかがでしょうか？

無常への帰依

世の中自体が無常であることに異議がある人は少ないと思います。

無常へのこだわりを、いかに持つことができるかは大きな問題だと思うのです。

受け入れた無常を、寂しさ儚さとするか、喜び微笑ましいこととするかで、自分自身の立場が変化していることがわかれば、無常との付き合い方がわかるのでしょうか。

幻

希望（平成12年1月2日）

葬式坊主

泥棒

赤とんぼ

老い

……ロス

後姿

寿陵

ついで参り

目標

六道を行く

もの言わぬ羅漢達…揀択をこえて…

宮本武蔵

五合庵断章

K子さん！

今は昔

十一面観世音菩薩

尽七日忌（平成19年5月1日）

幻

八王子の広園寺は、臨済宗は南禅寺派の修行道場でもあります。その老師は丹波慈祥老師と
言い、法は三浦一舟老師を継承していますが、京都南禅寺専門道場に、長年にわたって修行した
方でもあります。

その得度の寺は、丹波の高源寺です。妙心寺派に属し、中峰派の（玄住派）の本山です。中峰
禪師という方は、中峰明本といい、臨済宗楊岐派（ようきは）の禪僧であり、高峰禪師にその法
を継ぎました。多くの皇帝が、賜号を贈った、西暦1263年～1323年、中国は、杭州銭塘
の人です。

その中峰国師の玄住禪を丹羽老師は、『中峰広録』より、易しく約して下さいました。

「私達は幻に住し、幻が生じ、幻が死す、幻が見、幻が聞くのであります」と。

「このことに気づいた時から、私の今までの生き方が一変したように思います。言い換えれば
、無字に住し、無字が生じ、無字が死す、無字が見、無字が聞き、無字が生きているのであります
」と、南禅寺専門道場の平成13年10月1日号会報に、書かれていました。

中峰和尚座右の銘に、「道心堅固にして、すべからく見性を要すべし」とありますが、この見
性は、私という本性に気づくことであり、それを、中峰国師は『幻』と観たと表現しています。

今、私達は個性とかアイデンティティーという言葉を多用します。その個性をも、禪は『幻』と
言うとしたら、禪は個性を否定するともいえます。その個性は永続的なものではなく、変わりや
すいもので、対象としてとらえずに、もっと自由にと考えているのです。

人が誕生して、一人前と言えるようになるには、また、大人と意識されるためには、子供から
大人、あるいは一人前としての転換がなければ、なりません。その社会的な節目が、元服であり
、成人式です。人にとって、社会通念上の何かしらの儀式は、通過儀礼ですが、もう元に戻れな
いという、過去への決別の儀式ですが、もっとも、最近では、成人になる若者の自覚の欠如が成
人式事態の無意味さを表していますから、すべての決まり事の基盤が揺らぎ、心が揺らいでいる
ようにも見えます。これも、個を大切にすることなのでしょうか。

その通過儀礼が、意味を失いかけているとき、『一人前』は、その時その時、年齢で、知識で
、体力で、その環境でいう、私の好きな言葉でもあります。赤ちゃんは赤ちゃんの一人前、一年
生は一年生で一人前、初心者は初心者と、一人前という意味で使うのが好きです。

私達には、当たり前前と知っていることが、実は全く当たり前でなかったり、何とも思わないこ
とが、何も気が付かないけれど、よく考えてみればとても不思議なことが身の回りに結構あるも
のです。

赤ちゃんは、お母さんのお腹の中に10ヶ月も居ます。そして、世の中に生まれてきます。赤ちゃんが生まれとき、あの赤ちゃんの姿を見たとき、他の動物と何と違った状態で、私達は生まれてくることかと考えさせられます。目も見えなければ、自分で食べることも出来ないし、歩くことも、走ることも、座ることも、おしっこやうんちの片づけも出来ないではないですか。話すことも、しゃべることも、着飾ることも、初めは親も知らない、何も知らない。出来ることと言ったら、食べさせて貰うこと、寝かせて貰うこと、身体を綺麗にして貰うこと、温かくしてもらったり、汗を拭いて貰ったり、話しかけて貰ったり、動くものを見せて貰ったりと、本当に自分ではなにも出来ないのです。それらに反応することはあるものの、そこで、人間とは、教えられなければ何も出来ない動物なのだと、気が付きます。

名前を何回も呼ばれて、繰り返されることによって、自分の名前を知り、他人と区別しなければならぬことを知ることになります。そして、他を多く知ることによって、自分との違いをより鮮明に知ることができ、自我が形成すると言ったらよいのでしょうか。それでいて、愛情を注がれる存在として、社会が認知して、社会が待望して生まれてくる。その何処に、特定された個性と言われるものがあるのだろうかと思えます。

色が白い、手足が長い、指が短い、二重の瞼だと体質的な特徴は数えられるものの、意志を持つ年頃になったとき多用する個性は、環境や、赤ちゃんを取り巻く人間の資質によって、発芽し育てられたものであって、生まれたときより持っている個性などと言うものはあり得ないと思えるのです。外側の世界から接触や誘導させられたり、刺激を受けて芽生える、花咲くものと言ったら良いのではないのでしょうか。これが個性の芽とでも言えばよいのでしょうか。

植物を育てると同じに、どう育てるかによって、いかようにも変化するといえます。人は自分勝手には育たないものです。自分勝手に育ててしまうから、その勝手を個性と勝手違いするのでしょうか。

大切に育てられた個性の芽は、やがて、発芽いたしますが、それは育てられている環境と環境から注がれる情報を選択しながら善く成長し変わって行きます。それを、生き方と言い、私は、生き方を同じとする人はいないことが、そのことを個性と考えることに意味があると思えるのです。勝手違いの個性も、生き方を模索し求める個性も、同じ個性といえますが、見える人から見ると違うのではないのでしょうか。

個性を発揮して、生きることそのことが個性であるのですが、発揮するためには、個性を育む善い環境が常時必要なことです。その上で、人は、すべて魅力に溢れてといえるし、生きることそのことが、無理やり作るのではなく、個性を伸ばすことになると思えます。

しかも、その個性を『幻』と理解することは、大切にして、必要なことだとおもいます。ですが、その『幻』が実体として在るものに見えてきたとき、人は狂い、逸れるのも事実です。飽食の時代は、その個性を、大きく育てた時代とも言えないのでしょうか。その結果、バブルとして弾けてしまった個性。『幻』をも幻として見るのが大事なのでしょうか。

『幻』と見ることは、造られた個性を否定することなのですが、それは、今までの自分を常時

否定することが、より新しい個性を発揮することになることであり、それを発見したのが仏教です。今の自分を否定することによって、生まれ変わって生きることを、仏道と言うのだと思います。

見えているのも幻であり、見えないものも幻であり、その見ている者も幻とする者の、日本語の不可解な言葉使いがあります。

幻とは、「無いのでは無い」であり、これは、有ることの強調表現なのか、あるいは否定の強調表現の用語は、自分の未来の行為を、否定の否定で表現することで、現実の自分を把握し、表現している方法なのだ気がつきます。自分の中身が現実にはみ出している姿と見ると、そこにも生き方が現れます。

「自分で言うのも、恥ずかしいのですがとか、高い席から恐縮ですがとか、若輩者ですがとか」と、何気なしに使う言葉があります。この言葉も、前提として大勢の人がいて、突出して自己表現することを回避する言葉です。これも自己否定することが、自己表現する手段になっているという、今の自分を否定して、新しい自分を全面に出すという、禊ぎに似た行為でもあります。考えようによっては、自分を卑下し、同一化しなければ、社会の一員になれないようなそんな社会の未成熟さを表している言葉とも言えますが、善く考えてみれば、「偉いとか、いい男とか、いい女とかあるけれども、みんな同じなのよ！平等なのよ！それでいて、バラバラの個性じゃないの！」と、美しい表現なのではないかと思うのです。

希望（平成12年1月2日）

今まで、この寺の住職をしてきて、また地域で役を務めるようになってから、随分といくつかの家庭が崩壊するところを見てきました。もちろんそれに比して喜ぶべきことは数多くあることは確かなのですが、悲しいことは尾を引きます。

平成11年の暮れの一日のことでした。寺の側のバス停にたつて30分に一本のバスが来て、妻は東陽町までバスに乗りました。妻は後ろの席の窓がわに腰掛て外を見ていたそうです。二つ目のバス停で、野球帽を目深にかぶり、障害者用のアルミの杖に、中学生の男の子と一緒に乗り込んだ男性は、久しぶりに見る、彼と息子のGちゃんでした。妻は声はかけられなかったものの、元気そうだったと夕刻寺に戻って、私に報告してくれました。彼の、娘のHちゃんとGちゃんが、彼を見下しているとの噂を聞いた記憶が、Gちゃんが付き添っての姿は、胸を撫で下ろす内容であり、無事に生活していることを思うことが、この文章を書かせたのです。そして、彼の趣味であった篆刻の印材は、この寺の本堂の地下室に、埃をかぶって保管してあるのです。彼はもう要らないから、処分してくれと言ったものの、そう簡単に処分は出来ない。私にとっては、今でも悲惨だと思っている事件なのです。

彼は一般の家庭より禅僧になりたいと、修行をしたいと、その寺の住職であり、とある本山の管長でもある禅僧の弟子入りを許された男でした。九州の久留米にあるきびしい修行道場に一年行き、その後京都の祇園にある修行道場に5～6年行ったのではないかと思います。このことを今振り返ってみて何になるのだろうかと思うのですが、この記憶は折に触れて、話題になる事も事実であり、痛ましく、かわいそうな事件であり、今でも、なんともやりきれない思いなのです。ましてや彼の姿を誰かが見たとか、様子がどうだったかと聞くと、「あっそう。元気そうだった！よかった」と、胸をなでおろすようです。

この事件は、私の記憶の中でもそろそろ風化してきている内容なのですが、はたして彼にとってはどうだろうか。もちろん過ぎ去ったことに、心を縛られていては、この先の彼こそ大事なのであり、いまさら蒸し返してみても何の意味も持たないと思う。でも人一人の事件に、家族が絡むと、波紋は大きく広がり、その事件の周囲にいた私たちへどう教訓となるかは、この事件を、時がたって検証することも大事なのではないだろうかと思ったのです。

彼は大きな格式のあるお寺の副住職であり、いつも留守の住職に代わって寺の務めを果たしていたのです。その事件がなければ。

10年前、私の上の子どもが幼稚園の年長だったときです。7月の末の東京の暑い夕刻、その寺の玄関前に、ビニールのプールに水を張り、私の子どもは、彼の子ども二人と水遊びをしました。夕方子どもが帰ってきて、幼い子供同士の遊びのことを聞き、普通の団欒を私は過ごしていま

した。彼や彼の奥さんも、私の寺とはすぐ近くのことでもあり、彼が私より4～5歳年下で、比較的年齢が近いのと、私もどちらかと言えば、寺で育った環境ではなかったことより、彼とは馬が合う間柄だったのです。彼は、どちらかと言うと豪快なところがあり、私とは性格が違っていました。

この地域は、5月、6月と付き合い寺院の施餓鬼が毎週土曜日と日曜日に催され、彼とは一緒にタクシーを使ったり、歩いたり、バスだったりと出かけることが多かったのです。事件が起きた後、彼の言動に歯止めがなく、他人のいるところにもかかわらず、大柄な態度と言動は目に余るものがあったことに気が付いたのですが、今でもそれが兆候だったのかは確信が持てないのですが、多分兆候だろうと思うのです。

忙しい寺でもあり、彼が全面的に任されていたこと、師匠は本山と道場のトップに君臨する立場にして、その傘を着ていたところもあったように思えるのですが、内心は、いつ尋ねてくるかわからぬ師匠にビクビクしていたところもあったようです。そして奥さんは子どもたちを育てる環境に、苦悩していたこともあるのでしょう。

今考えてみると、その頃の彼の生活は、破滅に向かってブレーキが利かなくなっていたようなところが見え、危ない気がしました。しかし人の意見など聞く耳を持たないところがありました。私と較べて明らかに違う風は、豪快に人と付き合い、懐が深く、高らかに生きる彼を頼もしく思っていました。今思い出しても、彼と付き合いだした最初の頃、彼は謙虚に生活していたと思うのですが、どうしてあんなってしまったのか残念でしかたありません。

そういえば、彼の寺はヒノキ作りの本堂を建て替えたばかりで、広島から来た宮大工の棟梁たちが1年あまり近くのアパートに泊りがけでの工事は、三度の食事の支度や、二人の子どもの世話で戦争のようだった毎日を終わってのつかの間の休息だったような気が致します。

翌日聞いたことは、その晩、彼は子どもたちのいる前で、雲膜下出血で倒れ、救急車で、葛西の森山脳外科病院に入院、前頭葉に穴をあけ、出血を吸い出したと聞きました。3ヶ月の入院と6ヶ月の墨田区の東京都リハビリ病院入院は、その後の彼を大きく変えてしまったのです。言語障害と右半身不随の身体障害で彼は一級の手帳を手に、寺に戻ってきたのですが、彼と家族の居場所は、もうありませんでした。

彼がいなくなってより、寺はてんでこ舞いでした。彼が倒れてすぐ、寺は施餓鬼の法要が迫っており、押入れや帳簿類の点検にごった返して、彼の惨憺たる惨状が明るみに出てきたのです。ダンボール箱に通帳やカード、お布施や下着・衣類がごちゃ混ぜになってでてきたり、本堂建築の寄付金集計がでたらめだったこと、各種の契約書が見当たらないこと、過去帖が付いていないこと、お檀家さんの住所録がでたらめだったこと、夫婦喧嘩が耐えなかったこと、今思い出してもかなりハチャメチャだったことは確かです。師匠もここまで出鱈目だったことに思いも及ばず、ただ許せないことと思うばかりのようでした。

後になって聞いたことなのですが、彼の身分では考えられない相撲部屋の鼻屎になったり、植木

屋さんが入って判ったことなのですが、境内のあるところから彼のペットだったはずの珍しい亀達の死体がたくさん出てきたりと、啞然とする以外は考えられない事ばかりでした。

しかし、森山脳外科病院で入院中の彼には、何も思い当たることがなかったのです。私は、その思い当たることが無いということが、彼がいかに精神的に追い詰められていたことの証であるように思えるのです。彼は重症の病態で、住職である師匠が見舞いにこないことをいぶかることばかりでした。

彼が彼の能力では限界だったことが判るにつけ、なぜ相談しなかった、誰かに手を伸ばさなかったのか、残念に思うことばかりです。この病院の入院中に、彼は師匠から一回の訪問を受けました。その訪問の目的は、印鑑を押せと強いての、絶縁状を叩きつけることだった。彼の頭の中は真っ白になり、途方にくれる彼を目にすると、痛ましいばかりで、これからの道のりは決して楽ではなく、誰が彼を支えるのだろうか、彼の家族はどうなってしまうのか、子どもたちはどう育つのだろうかと考えると、暗い気持ちになりました。

寺の和尚が若い身体障害者であれば、他の身体障害者にとっても希望であり、精神的負担はきっと彼のためにも、この寺や他の寺院のためにもハンディキャップはあるものの、優れた逸材を得ると思うのだが、彼の師匠は、「だめだ！」の一言で、退けてしまったのです。せめて、退職金や当座の生活費を支援していただけたらと思うのですが、かたくなに心を閉ざしている師匠を見ることが出来ませんでした。やはり、当事者でなければわからないことのようにです。

彼の持ち物は処分された。倒れる半年ぐらい前に買ったカメラはその後、知り合いの寺に貰われたが、その寺の和尚が、カメラに入っていたフィルムを現像したところ、倒れる数時間前に水浴びをしていた私の長男が写っていたからと持ってきてくれたのを思い出す。

今、振り返ってみると、労災であったのだろうと思うのですが、その後の彼は、師匠と同じに、かたくなにしこりを胸に、沈黙しています。

雲膜下から9ヶ月経って、彼は、彼を受け入れてくれるリハビリ病院や職業訓練所を転々として、彼の将来の手がかりを探すかのようです。彼の様態は、まだら模様で調子が良くありません。特に雨や曇りは、彼を部屋に釘付けにして、疾患の症状が過ぎ去るまで、彼を動かさせません。子ども達は、部屋でごろごろしている父を、邪魔に、蔑視を持って見るようになると、しばらくして彼から聞きました。さらに耐えなければならないことが、これからも彼の胸中を騒がせると思うと、悲惨に思うのです。一級の障害者の手帳は、さしあたっての生活の安定をもたらしているようですが、奥さんは勤めに出て、彼は部屋に閉じこもる日々が続いたようです。私は、賀状のみの付き合いになるのですが、左手で書く毛筆の筆跡は、現在、10年前と同じくらい達筆になっています。しかし、手紙の住所は彼の実家である所からです。

今、多分47～8歳になると思うのだが、寺を出た後、彼は寺を少し離れたところに、マンションを借り、子どもたちが大きくなるまで、地方都市の脆弱な福祉を避けて、江東区の補助を受けながら、生活している。

彼にとって、ぬぐい切れない過去とはと考えると、なんともやりきれない。せめて子どもたちがすくすくと育ってくれることを願う。

葬式坊主 藤木さんへ

平成11年5月31日夜7時半過ぎ 電話が鳴った。5月の初めに私の寺で葬儀を準備してくれた葬儀社の人からだった。葬儀が終わって片づけが全部済んで挨拶の時だった、

「これを縁に、場合によっては葬儀の導師を引き受けてくれますでしょうか」と、言われた。初めての葬儀社の人だったが、葬儀社の場所が遠いので、「何かありましたら」と、返事をした。その彼からの電話だ。

「宗派は何処でも良いのです。墓地がないので、もし良かったら譲ってあげてください。戒名も多分頼まれると思いますので、付けてあげてください。亡くなられたのは、5月31日です。性はM、名はYで、大正11年1月生まれだから、77歳です。自宅は足立区Mで、電話は……です。6月2日、6時から通夜、3日は10時から告別式で、場所はM葬祭場です。いかがでしょうか。是非お引き受け下さい」

私は、最初ためらいました。何故なら、先ず場所が足立区のM葬祭場で、自宅が足立区のMでは、お墓のお参りが遠くはないか？事情によって墓地が遠くなってしまうのはやむを得ないこととしても、新規に墓地を取得するのなら、自宅に近い所が良いに決まっている。そうとなれば、近くのお寺の住職に頼むのが一番であるに超したことはない、思うからです。

その旨を、電話で話すと、是非にという。あのような葬儀を初めて知った、あの時の葬儀の感動が忘れられず、あのような葬儀を自分でも手掛けてみたいというのだ。

葬儀社の人から、そう言われて嬉しく思い、引き受けないわけにはいかないと思ったのです。

「お引き受け致しましょう。それでは、どんな方ですかわからないと、葬儀の組み立てができませんので、電話してみてもかまいませんか」

「有難うございます。お願い致します。戒名もお願い致します。また誠に恐縮ですが、お布施は〇〇円、お車代は〇円でよろしいでしょうか」

「戒名に付いては、お引き受けできません。俗名で葬儀を致しましょう。先方が戒名についてどんな考えを持っているか知りませんが、もし私が戒名を付けたとして、何処か寺院墓地を取得した場合、トラブルが発生致します。私も陽岳寺という名前をだすことから、起こる可能性があるトラブルは避けたいものです。またお布施に付いては、喪主が決めるのが筋であり、私は出されたものを、そのまま受け取るだけです」

こうしたやり取りがあって、葬儀はM家に電話をすることから始まることになった。

この度、何かの縁で私が葬儀を執行するはめになったこと、MYさんが亡くなったことへの同情、私とお寺の紹介、MYさんの亡くなった時の様子、生前の生い立ちと仕事のこと、家族のこと

、私が知らなければならないと思うことを、亡くなった人の家族から多く聞くことによって、私と残された家族との信頼が、儀式を通してなりたつ。それは一本の電話から、いつも始まることなのです。

6月1日午後3時すぎ、私は葬儀社から教わったナンバーに電話をした。

私。「もしもし。私、葬儀社からこの度依頼されたお寺ですけれど、今よろしいですか。ちょっとお話をしたいのですが」

電話の向うで、チャイムが聞こえた。誰か来客か？

私。「大丈夫ですか。かけ直しましょうか」

M家の奥さん。「ちょっとお待ち下さい」

M家の奥さん。「もしもし、大丈夫ですから。どう言うことですか」

私。「セレモニーさんからこの度、葬儀を依頼されました寺の住職ですけれど」

M家の奥さん。「ああっ！お寺さんですか。今忙しいので、後にしてください」

受話器を切られた。

私は、すぐに、この話はお断りしようと思い、葬儀社の名刺を紛失していたので、私と葬儀社の共通の友人に電話をし、私の勝手ではあるが、この度の件はなかったことにしてくださいと伝言を頼んだのです。

その友人は快く、いきさつを聞いて了解してくれたのですが、私にとっては何とも後味が悪く、すぐに、この文章を書き、何が問題なのか考えることにいたしました。

葬儀社にとって、葬儀は常に緊急なものです。このような場合に備えて、知り合いの各宗派の僧侶を用意していなければ、成り立たないものです。多分、この葬儀社も専属のお願いする僧侶がいたはずです。その人達に頼まず、わざわざ私に依頼されたことを思うと、私に頼んだことによって番狂わせで、憤慨したかもしれません。そしてそのことに、私は弁解するつもりはありませんし、すまない思いで一杯です。

また、知るか知らないか 解りませんが、M家に対してもすまない思いです。

M家にとって、葬儀の坊さんってそんなものに見られているのかという思いが強く、ここのところが自分の修行の足らなさなのか、また、知らずに強く自負の念が芽生えていることにも、僧侶として揺れる部分を見ます。おそらく、通夜の日に挨拶して、そのまま通夜の読経をして、翌日、葬儀の引導を渡せば、私の依頼された勤めは終わるのでしょう。

M家にしても、葬儀の連絡に終われ、葬儀の意味を改めて考えるということをせずに、人が亡くなった、葬儀をしなければ、戒名を付けなければと準備に忙しく、足元を見つめることさえ不可能に近いことはよくわかるのですが、私は、自分自身を、その中に立たせるのをためらうものがありました。私を本当に必要とする人は、葬儀社ではなく、葬家の人であるはずが、葬家の人は、僧侶ならば誰でも良いのだと見えたからです。戒名・葬儀ってそんなものなのか、もしそうだとしたら、亡くなった人を汚すものだし、いっそのこと葬儀をしなければ良いのにと思えるのです。

私は、和尚、僧侶を天職として自分に位置付けています。それは、私の生き方であり、おのれ自身を全うし続けることであり、裏表ない人格を、和尚ないし僧侶というのだと思うからです。

私が考える葬儀は、死者をだした家族、喪主との喪失感の共有をすることから葬儀は始まることでなければならないと確信いたします。その場だけの葬儀は、やはり容赦してもらいたいのです。共に考え、共に残された人達の胸の中に何時までも残る葬儀であり、このことを機会に自分達の足元を見つめなおし、否定し、肯定して限りある人生を歩んで行きたいと思うからです。

大多数の寺院が、現実には、葬儀や墓地の収入から成り立っていることを思えば、私の寺も同じなのですが、これではいけないと思いつつ、ただ時間が経過するのみで、出口が見えないのがとても歯がゆく感じられます。

寺や僧侶は、ただ問われるのみにて、我々から現代を常に問うことが必要なことであると思うのですが、そのことは、我々の足元を固く踏みしめて、一人一人が自己を行ずることでもあると思うのです。

私は葬式坊主に違いないが、私の思うがままに葬式坊主である

泥棒

平成10年9月始めの、ある日のことだった。寺は本堂の外壁塗装工事をしている、職人が2人、仕事をしていた。昼過ぎて2時ごろだったと思う。

それは、本当に突然の事件だった。今思い起こせば、まったくの偶然のことに違いないのだが、庫裏に一人いた私は、ふと気配を感じたのだ。気配と言っても、確かなものではなく（だから気配というのだろうか！）、本当に偶然と言うことのほうが、正しい表現のような気がするのだが、何故か、玄関に出ていったのだ。

若い二十歳ぐらいの男がタイル張りの土間に立っていて、ビックリして、間の抜けた顔をしている。

「この辺は、お寺がたくさんありますね。何軒ぐらいあるでしょうか？」

こんな尋ね言葉はない。他人にものを尋ねるのに、いきなり、ズバリと挨拶もせずに尋ねるとは？しかも他人さまの玄関の中に、突然佇んでのことである。唐突な質問を浴びせ掛けられ、私は面食らった。何の用だろうか、呼び鈴も押さずにどうして、ここまで入ってきたのだろうか。

私の目に、彼の後ろの、寺の建物を守る韋駄天様が映る。この韋駄天様は、禅院の庫裏には欠かせないもので、建物の火事や盗難から守るべき守護神である。陽岳寺にはもともと無かったのであるが、先代の住職が、多分通販で買った、台湾製の木像で、正直言ってあまり傑作な仏像ではないのです。それでもお墓参りに来る方々は、この韋駄天様に手を合わせて、幾らかの賽銭を投ずるので、お賽銭箱には多少のお金が入っていました。墓参の方は、そこで、線香とシキビを受け取り、お墓に行くのです。

その賽銭箱が置いてある場所が、妙に殺風景な気がしたのです。在るべきものがない景色は、何か欠けているように、何かが違うと思った。そう言えば、彼と目を合わせたとき、彼の右手は、彼の前にある紺色の布製のバッグのチャックを閉めた行為の後だった。彼の左手は、その布製のバッグをしっかりと大事そうに抑えていた。

私は、彼の後ろの韋駄天様を気にしながら、賽銭箱のないことに気が付き、彼を問い詰めた。

「おい！そのバッグを開けてみる！」

後でよく考えてみると、私も他人に、いきなりこういった言葉を吐くとは、恐れ入った。修行の道場では、天を突くような勢いで、『この大ばか者！』『コリヤー！』と、修行僧は吐く。確信が、突然言葉を発せさせるのである。しかも、腹の底からである。まさか、初対面の人に『コリヤー。この大馬鹿モン！』とは言えない。何故なら、ばつが悪そうに、突っ立っているからです。

私は、彼の抱えているバッグに手をかけ、無理やりバッグのチャックを開けた。後で、刑事さんから、『してはいけないことなのです』と言われたのでした。調書では彼がバッグを、私から言われて、開けたことになっていると、書いたようです。

バッグの中には、小さな賽銭箱と、白い手袋と、剃刀が他に入っていたのです。

「これは何だ！」

彼は、「ごめんなさい！勘弁してください！」と言った。

私は、咄嗟に「外に出ろ！」と、言い、彼をつかんで玄関のドアを開け、外に連れ出した。後で考えてみたら、やはり、「外に出ろ！」はない。まるで喧嘩の常套言葉ではないか。まして、寺には私、一人だけだったので、そこまで言うことは無いのにと、反省したことでした。しかし、もし彼が、暴れ出したらと、考えてのことでもあったのです。

「勘弁してください」と言う彼は、あどけなさが残った、何故か無抵抗の彼でした。

咄嗟に、彼の名前や住所、連絡先になるものを聞いたのです。

「名前は？」。

彼は「〇〇△△」と答えた。

「学生？」。

「違います。」。

「ご両親の連絡先の電話番号とかは？」。

「電話はありません」。

「働いているの」。

「はい。建設会社に」

「勤め先の名前と連絡先の電話番号は」

「電話はありません」

「アノネー。君は、勝手に侵入して泥棒をしたんだよ。ご両親に話して罰を与えてもらわなければ、君のこれからの為にも良くないと思う。君が、君の素性を話すことが出来なければ、私は義務として警察に、連絡しなければならないよ！」

彼は、しづしづ了解したように、覚悟を決めたように、思えた。

私は、ペンキ職人の勝っチャンを呼んで、彼を捕まえてもらい、庫裏より無線電話を持ってきて、110番に電話したのでした。

しばらくすると、深川警察署の刑事さんが二人、覆面パトカーでやってきた。制服警官も、その後、送れてパトカーでやってきました。

玄関に着くと、泥棒を取り押さえ、盗まれたものは、この賽銭箱ですかと、もと紅茶の空き箱を利用した、不細工な箱を手にした。私は、その賽銭箱が世に出るとは思ってもいなかったもので、やはり寺の備品は粗末なものでも、やはり間に合わせはよくないと、妙なことを思って、恥じらいでいた。（今は、私が、どこぞで景品で当てたものであるが、下の子どもが組み立てた、列記とした立派な賽銭箱が代わりに置いてある。）

その賽銭箱を確保して、刑事さんは、「捕られたものは、他にありませんか」と言った。

賽銭箱を、彼から取り戻していたので、厳密には、捕られたものは無いことになるのが、不思議な気持ちだった。正確に言うと「捕られて取り返したものは」有りませんか？が、正しい日本語だろう。後に、賽銭箱の中身は、4千円ちょっとで、警察署の刑事課のクリーム色の床に、その賽銭箱と千円札、五百円玉、百円、五十円、10円、5円、1円硬貨とが、几帳面に、恥ずかしそうに、並べられ、記念撮影をされたのでした。

「無いようです」と言い、「刑事さん、あまり大業にしないで下さい。彼が反省してくれたらよいのですから」と、付け加えた。

刑事さんも、「承知しました」と、私の意思をくんでくれたようでした。

「まずは、署に行って、話をうかがいたいので、恐れ入りますが、住職さんも一緒に来てくださいませんか」

家内と下の息子が、外出から帰っていて、何があったのだろうと、のぞいていた。

「泥棒だよ！」。

「なに、捕まえたの？」と、興奮した様子。

「ちょっと警察に行ってくるから」と、3時ごろだったと思うが、彼と一緒に、覆面パトカーに乗り、深川署に出かけたのでした。

警察署について、3階の刑事課に行くのに、ジロジロ見られて、「窃盗犯！確保！………」とか飛び交う中、大部屋に到着したのです。だだっ広い室内は、机はたくさんあるのだが、人間はほとんど居ませんでした。部屋の中央に、皆と向き合うような形で、この部屋で一番偉い人と思われる人が座って、こちらを見ている。彼の後ろには、なんと！神棚が有るではないか。”八幡様”だろうか？と妙なことを思いつく。そして、八幡様が祭ってあるなら、もう少し懇切丁寧に、お祭りの神輿の行列を規制してくれたらよいのにと、都合のよいように、すぐ思いつくのだから、人間って職業に関係なく、勝手なものだ。

「住職さん！こちらの部屋にどうぞ」と、これが取調室だろうか？と思案しながら、その部屋に入って、ソファーにすわった。覆面パトカーの刑事さんが、お茶を出してくれて、一人ポツネンと座っておりました。

しばらくすると、もう一人の刑事さんがあらわれ、「住職さん、告訴することに致しましたので、ご協力お願いいたします」と。書院の少し古いワープロを持ってきて、正面にすわった。

「実は、前歴が出てきましたものですから、訓戒ではいけません。逮捕して、地裁に送りたいので、調書を取らせてください」

「そうですか、逮捕ですか？前科があるのですか？わからないものですね！」

それから、私は、順を追って、いきさつを話し、刑事さんはカチカチとワープロを打ちました。気になるのは、彼のことです。彼は7日間、警察の留置所で取調べを受け、裁判の日まで、拘置所に逗留することになるのです。私の判断が、人をこのように拘束すると思うと、正しかったのかと、もっと他に方法はなかったのかと、しばらくずっと考えておりました。このことは、調書の最後に、私の捺印を強要されましたからでもあるのです。宅急便の印鑑と違う、重みは、最

後の文面に、告訴するとの内容があったからです。私は、捺印いたしました。

6時か7時ごろまで警察に居たのですが、部屋の偉そうな人や、後から帰ってきた人が、コンビニで弁当を注文するらしく、560円の何々弁当とか、やけに細かく、電話でしゃべっているのです。こちらは無償の時間を、警察のため、世のため費やしているのに、お腹が空いてきて、少しはこちらの思いをくんで、弁当ぐらい出したらよいのにと、思ったのですが、警察も、緊縮財政で大変なんだと、妙に同情し、感心したりもしたのです。あまり長く、警察に居るものではないことが、よくわかりました。

そのあと、刑事さんと、今度は白黒の、あのパトカーで、寺に帰ってまいりましたが、その後も、写真をとったりと、夜8時ぐらいまで、時を費やしました。

1日たって、彼のことが気になって、「チョコレートでも、差し入れてこようか？」と、家内に真剣に、告げたのですが、「ちょっと！おかしいんじゃない」という家内の言葉に、忘れることに致しました。

数日たって、元紅茶の箱の賽銭箱は、警察より凱旋してまいりました。

そして、それから1ヶ月がたった頃です。彼の弁護士から電話が入りました。

「私、彼の弁護人と致しまして、ご住職にお願いの儀がありまして、参上して、お話を聞いて下さいませんでしょうか」と、丁重なる電話に、「どうぞ、いらして下さい。うかがいましょう」と、日時を約束して、彼の消息を聞き、電話を切りました。

そして数日が過ぎ、弁護士が見習の女性弁護士と一緒に訪ねてまいりました。

まず弁護士は、迷惑をかけたこと、ビックリしただろうこと、怖がらせた想いをさせたこと、彼も後悔していること等を謝罪と共に、話してくれました。そして彼の身の上を、話したのです。

弁護士

「彼は、五歳の時、ご両親の離婚をきっかけにして、お父さんの仕事の関係上、一緒に住めないもので、岩手県のお父さんの実家に養育を頼み、年寄り夫婦と一緒に暮らしたのです。小学生の時、お爺さんが亡くなったそうです。そこで、お父さんの兄のところへ引き取られて、暮らすようになったのですが、彼は友だちもいなく、いじめられ、一人で時間を費やすようになっていたそうです。彼の知性の発達が少し、幼稚なのもこのようなせいかもしれません。しらず、本屋さんで万引きしたり、お店で、お菓子やジュース類をくすねたりと、窃盗をするようになってたそうです。何回か補導を繰り返して、少年院に繰り返し、入所したそうです。今年の3月、彼は出所いたしました。

お兄さんが、引取りを拒否いたしましたもので、やむなく、お父さんと一緒に暮らすこととなります。彼は、自立を考えまして、少年院で取得した特殊車両の免許をいかそうと、住み込みの建設会社を探すのですが、受け入れてくれる会社が、なかなか見つからなかったのです。とにかく、彼は、家を出たかったのです。四月初め、彼は二十歳になりました。そして職を探しに行くと、家を出たのですが、公園やサウナ、あるいは路上に寝泊りしながら、お寺や神社の賽銭箱を狙って窃盗を繰り返してきたそうです。半年にわたって、窃盗を繰り返して、逮捕された時の所持

金は、1000円弱でした。ご迷惑をおかけいたしました、という風にお感じになりましたでしょうか」と。

私

「ウーン。気の毒に。人格を形成する大切な時期に、多感な年頃に、辛い経験の連続だったでしょうね？明るく跳ね返すことができれば、またその辛さを共有してくれる誰かがいたら、また、違った人生を歩むのでしょうか？実の父と、そんなに小さな時に別れていたら、一つ屋根の家に、いくら親子といえども、心を打ち解けて、普通に暮らすのは容易ではなかったでしょうね？彼が、家を出たいと、思う気持ちが辛いですね。しかし、特殊車両の免許は施設で取らせてくれるのに、現場に行く時必要とする、普通車両や、大型車両の免許は取らせてくれなかったのですかね？なんか、ちぐはぐですね？彼は、未熟な社会の、可哀想な被害者でもあるのではないのでしょうか？」。

弁護士

「そこで、お願いがあるのですが、10月末日に、第一回めの公判があるのですが、彼の弁護証人になっては頂けませんでしょうか」。

私

「ちょっと待ってください。捕まえて告発したのが、私とすることになってますので、彼を弁護したら、可笑しなことになるですよ。裁判が成り立たないですよ。それに、彼を捕まえた刑事さんの立場が可笑しくなったら、可哀想ですし」。

弁護士

「刑事さんの立場は、離れておりますので大丈夫ですし、和尚さんのお立場で、今、さっき仰られたことを、そのままお話いただければよいわけですから」。

私

「ウーン。わかりました。お引き受けいたしましょう」と、簡単に引き受ける私は、どうも成り行きで、変てこな方向に進むことになってしまって、『行ってみるか』で、即決即断したのです。

10月某日、私は霞ヶ関の、大きな建物の家裁・地裁とかかれてある、建物に、生まれて初めて足を踏み入れたのです。長い廊下を、部屋番号を探して、エレベーターを使って探し当て、着いてみると、そこは、あたりまえのことですが、テレビで見るのとまったく同じ風景でした。弁護士さんが待っていて、挨拶し、検察官と判事さんと書記の人が出てくると、開廷です。傍聴人が二人居ましたが、彼らは事件と何のかかわりも無い人のようでした。私は、被告人の関係者、つまり父親を探したのですが、居ませんでした。

彼が奥の扉から布の紐を身体に巻いて、警備の人に連れられて出廷してきたのです。寺に泥棒に入ってきた時と、変わりなく、多少うつむきながらも、元気そうだったので、懐かしく思いました。

唐突に、裁判は始まっているようでした。裁判官と検察官、弁護人のやり取りは、何を言っているのか、主語や述語がない会話のようで、よくわからず、裁判官の「証人は前に来ててください」の言葉に、私は、何故か、周囲を見回して、席を立ちました。

書記のような人から、一枚の紙を頂きますと、宣誓と書いて有りました。詳しくは、『真実に誓って、申し述べることを誓います』と、あるのです。

こういう言葉に出くわすと、すぐに反応して考えてしまうのです。私は禅宗の僧侶ですから、”真実”と言う言葉には、世間の人より多少、理屈っぽい。その”真実”のため、修行し、日夜造業造作してきたからです。それより『事実を、脚色なしに、私の見たままに、思い、話すことをおゆるし下さい』と言ったほうが、私にはとても言いやすい。

また、”誓う”と言う言葉も、誓う行為の自己を考えると、とても難しい言葉であり、行為です。そして、”事実”と言う言葉も同じように、難しい問題を含んでいるのですが、裁判所でそれを言ったとしたら、何もいえなくなってしまう。西田幾多郎や歴史に名を残す哲学者が全員でできたって、話が先に進まないことなのですから。

『神に誓って』と言ったほうが、言いやすい。しかしながら、”神”に関しては、神学等何千年の歴史を持たない日本では、社会全体に神の確立が出来ていないので、やはり無理でしょう。それでは、”仏”ではだめだろうかと思うのですが、もともと許す、受け入れるという色彩が強いので、あまり似つかわしくないかもしれない。それにしても、ただ自分の思ったことを、話してきたのに、最初から、ちょっと当惑したことでもあったのです。

私は、弁護士の方から、頼まれたとおり、彼の罪は罪かもしれないが、彼を動かしたのは、日本の未熟な社会のゆえなのでしょうと、その意味では、彼は被害者でもあるのです。私は、今日の彼にとっては大切な日だと思うのですが、彼の肉親が、この場所に立ち会って欲しかったです。この彼を見て、そして、父親も、彼に許しを乞うて欲しかったのだと、思う通りに話しました。

すると、裁判官が、机から乗り出して、弁護人に「私もそう思います。父親は今日、どうしたのですか」と、話されたのです。その時、制服の裁判官が、とても親しみのあるように、感じられました。

『へーっ、裁判所も、アットホームなものを、持っているんだ』と、思い、嬉しくなりました。弁護士は、「今日は、仕事がかち合っていて、私も説得したのですが、だめだったのです」と、困ったような声を出しました。

突然、裁判官が私に向かって「向井さん！もし彼が出て、相談に行ったら、いろいろと相談に乗ってやってくれますか」と、こちらに顔を向けたものですから、「ええ、私にできることなら」と、答えたのです。

裁判官は、「そうですか、それでは、次回は3日後です。判決になります」と、事務的に検察官と弁護士に目配せしながら、簡単に日取りを決め、裁判は終わったのでした。

彼は、警護の人に、布の紐で繋がれ、法廷を去ってゆきました。どんな気持ちなのだろうか、知る由もないのですが、彼の姿が、可哀想で、今でも、思い出します。

その日から、一週間後ぐらいでしたか、弁護士から電話がありました。弁護士からの電話は、判決は、執行猶予2年についての懲役3年であり、判決日、翌日には拘置所を出たことが知らされました。

驚いたのは、お賽銭4千何がしかの窃盗に、懲役3年と言う響きです。もちろん、ことはこの寺のお賽銭だけではなく、あちこちの窃盗がからむことではあるのですが、少年院から出てきて、二十歳になり、半年も流浪をして、また、社会から重い刑罰を受ける、ちょっと智慧が足りない若者の、なんとも悲しい軌跡ではないですか。

この話には余談があります。

裁判官から、相談云々と言われたことが、忘れられずに、私は近くの運送屋の社長に、もし彼が訪ねてきたら、今度は幸せになって欲しいからと、運転手の助手に雇ってもらえないかと、たずねたのです。社長は、すかさず「ああっ、いいよ。お安いもんだわ」と承知してくれました。しかしながら、よく考えてみると、もし彼が仕事の中に、悪さをしたら、私にも責任がでてくるなど、その時は、こちらも覚悟をしておいたほうがよいなと思ったのです。しかし、すぐにあまり調子よく、すぐに引き受けられないほうがいいなと、よく考えなければと、ぜんぜん反対のことも思ってしまうのです。

判決が出て、2週間たった頃だと思うのですが、突然、彼と父親が「本当にご迷惑をおかけいたしました。有難うございました」と挨拶に来られました。彼の顔は、はにかみながらも、落ち着く場所が見つかったみたいにホットした表情でした。

「よかったね、元気に暮らすんだよ」と、別れて、またしばらくたった、ある夜の事です。電話が鳴りました。ペンキ屋の勝っちゃんからです。

彼が寺に、泥棒に入った日、勝っちゃんは本堂の外壁に、塗料を塗っていたのでした。勝っちゃんは足場板の上で、玄関に入る前の彼の、うろついているさまを上から見ていて、『お参りにしては、やにうろうろしているな』と、不審に思って仕事をしていたのでした。

「和尚！あの野郎、もう出ているのかい？俺が、仕事をして帰り道、あの野郎が、歩いているじゃないのよ。後をつけたら、うろうろしながら、自販機の釣銭が出る所に手を突っ込んでみたり、床下を覗いてみたりしてるんだよ。あまりと思ったんで、コラッ！何シテル！と、怒鳴ったら、あいつ、一目散にいちまいやがんの。出てきてるんだー」と、言うことだけ言って、電話は切られた。

私は、しばらく大笑い。「こいつは、変わらないもんだなー」と、大笑い。しかしこの笑いは、何故か、嬉しくもあり、悲しくもある大笑いだったのです。

最後に、陽岳寺の玄関に祭ってある韋駄天様は、安物の韋駄天様かもしれないが、天下一品の、他には無い、韋駄天様なのだ。

赤とんぼ

先日、京都は妙心寺山内の奥さんと、電話で話していることである。

二人で、どうしてこんな世の中になってしまったのだろうか話し合っていた。

「つい最近聞いた話であるが、今、首都圏で判っている範囲での話だが、年間30万人の墮胎手術が行われているという。実数は、おそらくこの倍であろうと言うのです。交通事故の死亡者が1万人、中高年の自殺者が3万人、何年か前の記憶では、癌の死亡者が30万人を超えていた思うのだが、これらの数字と較べて、何が起きていると思いますか。」

この問いに、蟠桃院の奥さんは、「この頃の子ですけれど、『赤とんぼ』を歌わなくなったとおもわへん。15年ぐらい前に、韓国のお坊さんが、そのことを指摘していたんよ。日本は、今に大変なことになると言い合ったんですせ。だから、『赤とんぼ』を、どんどん歌いなはれと、お言いでした。」

「そう言えば、『赤とんぼ』を、歌わなくなりましたね。」

「何ですか、『ちょうちょ』は良く歌うのですが、やはり、イメージが暗いせいでしょうかね。」

確かに、この歌を、子ども達は歌わなくなったような気がする。しかしそれは、演歌も同様だろうし、大正以前は、共に無かった歌のような気がする。

何と言おうと、子ども達が、夕日を浴びて、家路を歩く姿こそ、この歌の景色に似つかわしいと思うのです。

『赤とんぼ』の歌詞は、三木露風（1889年(明治22年)兵庫県龍野(たつの)市生まれ）が作詞いたしました。夕焼け空に飛ぶ赤とんぼをながめて、子供のころを思い出して作られたそうです。

作曲は、山田耕筰です。

夕焼け小焼けの赤とんぼ 負われてみたのはいつの日
山の畑のくわの実を 小かごにつんだはまぼろしか
十五でねえやはよめに行き お里の便りも絶え果てた
夕焼け小焼けの赤とんぼ とまっているよさおの先

この曲から何を思い浮かべるか。日本人ほど夕焼けが好きな民族はいないと、誰かが話していた。

夕焼けも赤とんぼも、詩歌において、夏の季語である。夕焼けは何も夏に限ったものではないが、子ども心に思い出すのは、夏休みの日中の長い一日が、もう終わってしまうという情景であり、家路につかなければならないという、時間にかかわる内容の情景です。

日中の暑さの中の、蝉取りや、川遊びには、いつも年齢を超えた幼友達がいたものだ。子ども達一人一人が多様な時間を持ち、多くの時間を持つ者が、少ない時間を持つ子どもに、多くの時間

を持つことの意味を教えていたように思うのだ。そんな日中から、夕焼けの記憶家の中へ場所を移ることは、私の知る範囲ではのことだが、昭和半ばの、日本の家庭の、団欒のひと時であったはずだ。

日中と夜との境は、光と闇とを仕切るカーテンのよう、炎天があり、西日があり、夕焼けがあり、夜が訪れるのである。夜は家族の休息の時間であり、語らいの時間でもあった。

『赤とんぼ』は、アキアカネと言い、田んぼに水が張られる頃、幼虫に孵（かえ）り、7月頃、成虫に成ります。夏の盛夏に高地に群れをなしている『赤とんぼ』をご覧になった方は多いと思いますが、産卵は涼しくなってからです。それまでは、生まれた所にいることは少ないのです。秋、平地に産卵のため帰ってくるのです。つまり、赤とんぼの風景とは、田んぼの風景と切っても切れない関係にあり、アキアカネに姿を変えてからは、一夏の時間そのものです。銀やんま、金やんまは、数少なく成虫の時間も短く、大きな旅は致しません。無数のアキアカネが空をおおう時、それは田んぼに水が無くなる季節でもあります。一気に産卵の時を迎えたのでした。そんな風景が、何百年と繰り返されてきたのでしょうか。

ここ深川には、田んぼはありませんが、川や堀が数多くあり、川や堀の引き込みの場所で、『赤とんぼ』も生きていたのでしょうか。最近では、子ども達のいなくなった、プールに場所を変えているようですが、もう、無数の『赤とんぼ』を見ることはありません。

一夏の風景は、生から死へ、赤みを増しての死に際の変化です。赤とんぼになる前の生態は、よく知りませんが、田んぼと関係がある以上、卵から孵化するのは、田んぼに水が張られてからなのではないでしょうか。短い期間に成長し、蝶のように空を飛ぶことにおいて、最終を飾ることは、意味が有るように、意味付けをしなければ勿体無いと思うのです。

夕焼けは、和らぐ光であり、西方浄土を思い起こさせる。これは、私たちの体内に、ヨーロッパ人アメリカ人とは違って、歴史的記憶として刻み込まれているものと思いますが、あらためて考えてみようと思ったり気づく人は少なくなってしまうようです。

多分、私たちの年代の多くは、『赤とんぼ』の曲を、今でも、口ずさむことが多いと思うのですが、確かに、今の子ども達は、口ずさむことはほとんどないことに、気づきます。

私にとっては、『赤とんぼ』の曲は、寂しい曲だけれども、ものの哀れを感じさせる響きに、手をつないで、子ども達が家路に帰る風景を思い出させる曲でもあります。そして、この気持ちこそ、日本の土壌の中で、培われたものの中で、最も大切なものの一つだと思うのです。

「○ちゃん、△ちゃん、また明日ね！さようなら！」と、家に急ぐ。家では、お母さんが、お風呂と夕食の支度をしている。真っ黒に汚れた子ども達は、お風呂に入り、浴衣やくつろいだ服を着て、今日あったことをお母さんに話す。一家団欒の風景が浮かんできます。

今、こんな風景、いや、文化と言ってもよいかもしれないが、亡くなってしまったようです。その風景は、田んぼや、赤とんぼ、子ども、家……と、全てが結びついて、ゆっくりと時を刻んでいる風景であり、芳醇なものを育てていた時間でもあったと思うのです。

ゆったりとした時間を取り戻すことこそ、必要なことと思います。少なくとも、『赤とんぼ』の曲を口ずさむことは、とても忙しい人には、出来ないことです。このことは、言ってみれば、この曲を口ずさむ事の中に、ゆったりとした時間が含まれているということでもあります。

私は、これを発展して、ゆったりとした時間は、人と人が、互いに手を結ぶあり方にもあるような気がいたします。

今のお母さんは、背中に赤ちゃんを背負わない。

良く考えてみると、背負うことは、お母さんの視線と一緒に同じものを見つめることであり、何か用事をするこも、母親だけの視線ではなく、赤ちゃんの視線でもあったような気がいたします。そして肝心なことは、赤ちゃんを背中に背負うということは、お母さんが、掃除や洗濯、買い物にいつもスキンシップで繋がっていたということかも知れません。

抱っこは、赤ちゃんの視線に、お母さんきりしか、眼に入りませんし、抱っこは、長時間に適しません。

どうでしょうか、お母さんと赤ちゃんの外出を観察いたしますと、ほとんどの母親が、バギーです。少し大きくなれば自転車の前に、幼子は乗ります。手をつなぐという習慣がなくなりつつあるようにも思えます。

様々なものと結びついているという自覚こそ、大切なことだと思うのです。

老い

平成16年11月1日、明治小学校にて、セーフティ教室が開催されました。1、2年生の集いを拝見して、「変な人に声をかけられ、危ない思いをしたことがある人？」の指導員からの呼びかけに、3分の1の生徒が手を挙げ、その多さに驚きました。また、エレベーターを使用して通学している生徒の、これもまた、多数の生徒が手を挙げました。

「どんなふうに、声をかけられたの」の質問に、「お菓子をあげる」とか「お小遣いをあげる」に、いっせいに子ども達が話し、会場のにぎやかさは大きく広がりました。

ちょうど、奈良県の幼子が誘拐され殺害された事件が発生したあとでした。この事件は、すぐ近くの事件なのだと、たまたまこの地域にはなかったことなのだと、社会は大きく変容しているのだとの思いを強くもちました。

世間の変化がめまぐるしいということは、月日の速さも増しているということなのだろう。

つい何年か前のような気がするが、少子高齢化という言葉がありました。それも今や、少子高齢社会になっている。しかし、私に言わせれば、地域の生活環境の変化に、何故、年齢だけを浮き立たせて問題にするのかと意識を持ちます。この問題は、言葉の綾のように聞こえますが、大きな問題を含んでいると思っていますからです。

少子はいけない、高齢は、世の中にとって、いけない問題であると、考えることが出来るからです。その逆に、大きく生産し、大きく消費する世代だけが、世の中にあって価値があるような気がいたします。すべては、数でとらえる世の中の風潮に、そうかなァ〜と疑問を持ちます。

区の行政も、数字をたくさん出して、年金財政や、介護保険の数字をいいます。言われてみれば、もっともなような、でも、数字だけが一人歩きする危険はないのだろうか。

個人的な嗜好ですが、老いという言葉は、私が好きな言葉です。この言葉に、寂しさや、喪失感、また、達観や存在感、威厳や重たいものを捨てたひょうひょうさ、狡猾さやしたたかさ、たくましさ、老いには、ありとあらゆる姿形があるからです。

お年寄りが未曾有の多さに直面した社会の、それは、老いの熟成した社会と見る事ができれば、こんなにも、世界で成熟した社会の出現した歴史を持った国はなかったとも言えるからです。

老いとは、在る面では、人が年を重ねることを意味いたしますが、実際には、老いが熟成した人間の出現と解釈できれば、老いとは、人と人との関係の中に生ずる優れた知識ではないかと思うのです。

家族や世間と、密接に必要な関係が保持されているからこそ、老いは、成熟していくものだと、老いは、人の境遇、生き方、見識により、年代年代により、実りあるものと成っていくものだ

と思います。そして、老いが語られる場所も、その関係の中にあつてこそ、意味があるものだとも思います。老いとは、血縁、地縁、共縁、と縁が連なる、その関係そのもののなかに育まれるのではないのでしょうか。私の父や母、その母方の父や母の記憶も、威厳があり、日に暖まった縁側の温もりと、そこに座り、孫達のはしゃぎ回る姿を、笑顔で見ていた姿の記憶が、実に懐かしい思い出です。布団の綿入れの時には、孫達を上手く使って、私の母も、母の姉たちも、一緒になって、綿埃の中に居た思い出は忘れることができません。老いは、こうした光景の中にあつたと思うのです。

老いを喪失した、老齢や加齢には、魅力をそぎ落としてしまった、少子高齢という、問題だけが浮き彫りにされた言葉に響きます。

核家族が定着し、作家の黒井千次さんは、平成16年10月28日の読売新聞のコラムに、『老人は孫の目を失い、夫は背後からの親の目を失う。妻は姑という監視者をなくした。

「自由だけど、老いも家族の形もあいまいになり、不安定になった。高齢社会とは老人なき社会ではないか』と、語っていました。

何か、老いにあるすべてが喪失して、老齢という、加齢のいまいましてだけが表現されている言葉を、我々は使用しているような気がいたします。

この何年間か、生活福祉にかかわる、ホームレスの問題や低所得の問題を、少しながら社会勉強をしました。ホームレスという言葉には、絶望的な響きがあることを思います。

あらためて、家庭という意味の欠落を意識いたします。孫と子ども、老齢の老いを育むことで、子どもが親を育む。兄弟姉妹が、兄弟姉妹を育み、友達や地域が、人間を育む。

そんな関係の中の、家庭から言えば、このホームレスになった人も、おじさんやおばさん、父や母、兄や弟、姉や妹、従兄弟や姪や甥という関係を現に有しているはずです。何某かの問題さえなければ、それは、家族や家庭、親族の間に、れっきとした居場所をもっている人です。居場所さえあれば、人間としての、成熟という老いの表現する場所があるはずです。

生活保護となった瞬間、世間は視線を投げかけます。母子家庭も、特殊な思いをもちます。お互いが、この視線や思いをもつことで、地域や家族が切り離さないよう、人と人との輪の中に、成熟する過程を奪うことだけは止めたいと思います。

私たち、現実には、人と接する限りは、名前を持ち、誰々さんの立場で接します。

この名前を大切にすることは、あくまで、ホームレスも、生活保護も、母子家庭も、徹底して、誰々さんとの関係でありたいと思うのです。

このホームレスや生活が破壊された人たちの入所する塩崎荘の食堂にあった言葉が、今も、忘れられません。

わたしたちは、花を咲かそう人にありたい。

みんなで 笑おうね 楽しいものね

一人 ひとり もっている花を、大きく咲かせたい。

この施設のなかにおいて、大きな花を咲かそうとする人でありたいと。今の、自分を語ります。みずから、笑おうね、楽しもうねと、くじけないようにと、どんな時にも前向きに強さを出そうと、今の、心境を語りながらも、みんなでと、人と人との関係を大切にすることが歌われます。これは、みんなでと言う関係を喪失したことゆえなのか、いまの自分たちの自覚なのか、それゆえに今のみんなでと、多くの意味を含むのだらうと思います。

今の自分の、それは、じぶん自身の可能性を、人間の尊厳を、成熟する人として、大きく咲かせたいと記していたと、この塩崎荘にかかげてあったから、良い言葉に響くのではなく、私たち一人一人の心に、刻んでも良いのではないのでしょうか。

昨年暮れに、お札を送ったときの添え書きの文章にも引かれます。

『その老いについての禅の言葉です。＜年老いて心狐（しんこ）なり＞となって、寂しく、心細くを徹して行くか、あるいは、＜年老いて精と成り、魔と成る＞となって、怪となり、魔物となって、場数を踏んだしたたかさや、一筋縄では行かない剛の者として、高らかに行くかです。一つの見方として、人をたぶらかし、よそおうとする節目と見るのもよいことかもしれません。』心狐も精も魔も、老いの成熟さです。家族の温もりの中にある成熟さを見据えて、歩いてきた道の厳しさを、自らに表して歩む老いとみたいのです。

.....ロス N・Iさんの為に

20年30年……と時を重ねて連れ添った夫婦に、いずれはどちらか一方の死が訪れる。その訪れは、突然の場合もあり、一つとして同じものはない。

たとえ残された夫婦の一人が、良き理解者の恵まれた家族の相談相手を持っていた場合でも、一人になってしまったと言う孤独感と愛する者を失ってしまった喪失感を、癒すには数年かかる場合もあり、一生持ちつづける場合もあります。

私の母も、そう言えば父が亡くなって10年たとうとした時、「お父さんが亡くなって困るのは、真に相談できる人がいないことなの」と、寂しそうに言った言葉を思い出す。息子である私を目の前に、そう言った言葉の奥の、寂しさを癒すことが出来なかった我が身の情けなさを反省したものだ。

とある日曜日、49日の納骨の法事があった。突然先だった定年後すぐの夫の遺骨を抱えた婦人は、物静かに落ち着いて、着実冷静に物事を見据える目を持っていた。この年代の老いは、そんな夫婦の人生の黄昏を、やがては一人ずつ別れ離れになる時が訪れるであろうとことの花道でもある。夫が退職し、新しいカメラを買い、パソコンを購入して、アドレスを手にしての突然の旅立ち、老いた母を残しての旅立ちでもあったのです。夫婦には、一男一女の優しく心強い恵まれたお子さんがいたのだが、婦人の心には、どうしようもない悲しみと、一人になってしまったんだという不安感が現れていた。

私との会話の途中で、「相談することができる人がいないのです」と言う言葉があった。私は、夫婦の対話の、何でも無い婦人の言葉を吸収するご主人の、いなくなってみて、かけがえのない存在だったことの重みを、その婦人に見ました。誰も代わることのできない、誰も聴くことができない、つらいことがらです。

ふと私の母の言葉を思い出した。娘さんと息子さんのいる席での婦人の言葉に、数年前私が落胆した通りに、この娘・息子さんも思っただろうか。いくら母をいたわる努力をしても、けっして父の変わりが出来ないことを、いずれ知るだろう。

悲嘆と失望が、実り多くそれぞれの人を潤すことの結実の難しさをつくづく思います。

それでも、潤いのある人格を形成する為には、こう願う以外に方法はないではないかと自問自答します。そして、今は、実り多い潤いの果実を早く熟すことを願って、先に旅立っていった夫からの試練と捕らえて欲しいのです。

人は一人で生まれ、一人で去って行きます。その過程において、歩んできた道の違う男女が、幸せな家庭を築くことを誓って二人になります。やがて、人格を持つ一人を生み育むのです。何千

年と人は同じことを繰り返しながら、ロミオとジュリエットにならない限り、最後の別れは一人旅立ちです。とても不思議に思えてしまいます。

榎本クリニック院長・榎本稔先生が日経新聞の夕刊に、書いていた文章です。

『パチンコ依存症者は一般に、物静かで無口で目立たない。自己主張は乏しく、消極的な性格である。友人は少なく、他人と付き合うことに気をつかい、ささいなことで傷ついたり、気配りで自分が疲れてしまい、程よい人間関係がつかれない傾向がある。反面、負けず嫌いで、強い自尊心をもち、他人からの干渉を嫌う。心は強い空虚感に被われ、イライラし、不安を感じ、葛藤している』

極端なたとえだが、依存症という言葉が、特別に引っかかった。別に、婦人がパチンコ依存症になっているというのではない。何十年連れ添った夫婦の関係は、どの夫婦でもお互いに依存し、分担して家庭が成り立つ以上、突然の死によって、一人に放り出された時のあり様は、戸惑うばかりである。夫婦関係は、良い意味で依存症によって成り立っている所があるのではなからうか。パチンコ台を男と見、女と見、あるいは混ぜてみた場合、何処かに共通点があるような気もする。突然に世の中にパチンコ屋が無くなってしまったとしたら、その喪失感はどのようなものだろうか。

人は一人では生きて行けなくせに、一人で生まれます。内面的にも、多重人格は激しい葛藤を産み、耐えられないことでしょう。古来から宗教は、全人格的な統一を掲げます。なぜならば、そこに絶対的な安らぎがあると思うからでしょう。

人はさまざまな恩恵を受けて生きることしかできないのに、ことあるたびに独立を目指します。独立した次に、さらなる目の前に立ちはだかる壁に闘志を燃やし、あきらめ打ちのめされ、孤立します。孤立した瞬間、さまざまな恩恵は、嫉妬や悪意に変化します。

人として最後までなくなるものには、自尊心があります。よくいう人格とは、自尊心そのものではないかと思うことがあります。心はどんなにも大切なものであり、どんなにも人を惑わす悪童でもあります。

禅は、安らぎを求めません。禅は一人を目指しません。禅はかといって二人をも求めません。禅は心を求めません。禅はどう対処したかの行為、その一点に就きます。その行為の中に、求めて得られない安らぎがあるといえるからです。

後姿

私の知人からこんな質問を受けた。それは昨年亡くなった江東区内の大きな会社の創業者のお墓のことだった。知人は長らくその方の秘書的な仕事をしていた人でした。

「和尚！納骨も終わってしばらくしてのことです。墓地には名刺受が置いてありまして、その中にたくさん名刺が置かれていたそうなんです。遺族がお参りした時、持って帰るのですが、お礼も言えないので、何かお礼の言葉をその側に立てておこうかと言うのです。どんなものでしょうか？」

私は、即座に、「必要ありません。もしお礼がしたかったら、その名刺の方にお礼状でも差し出したらいかがですか。故人を偲んで墓参に来るのに、名刺を遺族に残そうと考えていたら、いかなもののでしょうか？」と話しました。

彼は、「私も、墓参に行くのに名刺は置いて行きません。よかった、同じ意見です」と、同調してくださいました。

家族が思えば、お礼の言葉を立てたり、刻んだりすることに、抵抗はないのですが、名刺を置いて行く人物を訊ねたら、何やらあまり思わしくない人と答えられたので、そう答えたのでした。

昨年のNHK紅白歌合戦を、何年かぶりに家族と一緒に見たときのことで、歌手の武田哲也さんが、歌の中で、「こりゃ哲也、他人様に指差してはいかんよ！指差すってことは、残りの三本指は自分を指しちよるってことを、忘れたらいかん！」と言っていました言葉を何故か思い出しました。

他人を誹謗し非難することは、自分を卑しめることになることと、自分を売り込むことも、自分を卑しめることになること、同列のことと思えたからです。

しかしながら、こと仕事となると別なことです。セールスや仕事上の付き合いは、自分の熱意を売りこみ認めてもらわなければ成り立ちません。信頼してもらわなければ仕事になりません。

私が望み願うことは、上野宋雲院の故山本禅登師のお話です。

『人間には前からお辞儀される人と、後ろからお辞儀される人の二通りある。前からお辞儀される人は、金と力のある人だ。人間は金と力に弱い。だから金と力のある人の前に出ると、その金と力のあやかりたいと思って、お辞儀をする。言いかえると、その人にお辞儀をするのではなくて、金と力にお辞儀するのだ。ところが、後ろからお辞儀される人は、それと違う。

その人は誰にも親しまれ、尊敬される人なのだ。だから、その人の前にでると、親しい仲だからお辞儀はしない。後姿に、心から、ああ立派な人だなあと、お辞儀するのだ。……金と力はあったほうがいい。しかし、それよりも、後ろからお辞儀されるような人になってくれた方がわしは

嬉しい』と、後藤檜根氏の言葉を記して、法光（昭和44年1月号）誌に、「新しい年に当たって考えてみよう」と書いていました。

個人の社会と接する取り組みの姿勢の是非を問うことはできませんが、私など、お金も力もないし、かといって、後ろからお辞儀される人でもないし、せめて、考え方、物の見方の私なりの一面観を伝えるということぐらいしか出来ないが、禅登師も考えてみようと言ったことに、禅宗僧侶の意味を推し量っている今日この頃です。

寿陵

生前に墓地を取得することは、現代人にとって、必要なことであると思う人が増えている。その理由として、終の棲家としてと考えている人が大半である。しかしながら、その終の棲家も、家族の延長である『……家之墓』、女性だけの墓、何らかの特定の仲間を募っての墓、夫婦墓、寺院が経営する合霊塔形式墓等と多種多様になってきた。いずれにしても、生前に確保することから、寿陵といえるだろう。

さてその寿陵のことだが、何か言葉からすれば、お目出度いことのような気がする。はたして、そうだろうか。



禅僧の墓石は、昔から寿塔といった。なぜ寿なのか不思議に思うのだが、それより前、中国の古い制度に寿蔵という制度があったらしい。蔵と言うからには、暗く穴の中のような場所であるらしい。韓国で先ごろ元大統領が、大統領の罪を、それ以上に追求し責めて獄中に縛ることをせず、禅寺に隠遁することで社会的には許されるという、実に文化的に成熟した社会ならではの事件があった。日本ではそんなに話題に上がらなかったが、韓国国民の持つ共有された伝統は、現代に受け継がれて、文化を形成しているのだなど、羨ましく思ったことがあった。隠遁は、自らが自らを裁くことでも有り、それを受け入れて良しとする市民も、そのことを自らの中に持っていなければ成り立たないからだ。

中国的東洋世界では新しい支配者に交代した場合、その支配に従うことを欲しない人達が数多くいた。新しい支配者も謀反、反逆さえしなければ隠遁生活を許容する風習があり、姿を隠す場所を、寿蔵と言ったらしい。穴蔵での生活の起源を考えると、あまり立派な穴蔵は意にそぐわないものがあるが、チョット前まで、ある意味では我々日本の現代人にも通じることだったはずだ。

『塔』についていえば、塔は天を指し、石や土を積み上げる。昔も今も変わりはないように思えるが、内実は同だろうか。塔を積み上げると言う行為そのものの持つ意味はなくなっているかもしれない。積み上げても崩れる塔は、海辺の砂遊びや、それこそ賽の河原の石積みであり、我々の現実生活の年輪であり、過去そのものと言っていいはずである。合理的や便利さ快適性等、たくさんの方が追求してきた中に、積み上げて行くと言う我々の行為がおろそかにされたような気がする。肝心な場所は地下の穴蔵であると言うことは言うまでもない。人が葬られる場所は、塔の下なのだ。そこでこそ、人が眠るに、につかわしい。

江戸時代の熊さん八さんの庶民は、寿陵を建てようにも、その余裕はなかったのではないだろうか。その意味では、現代人は大方、墓を持つ文明の暮らしをしていることになる。

私は、いつも思うのだが、江戸時代の熊さん、八さんのお墓は何処に残っているのだろうか。寺の古い過去帖は関東大震災で燃えてしまっているのが解らないのだが、江戸時代前の熊さん八さん、もっと前の熊さん八さんのお墓なんて、どこにも残っていやしないように思える。どう考えてみても、我々が日ごろ踏みしめている大地こそ、彼等が埋まっている穴蔵なのだと、何か確信さえするのだ。

年をとって、足が弱くなり車椅子生活になたとしても、良識有る施設では、足置きのペダルは上げて、できるだけ足の裏を地面につけることによって、老化の予防と回復を助ける。大地は私達をあらゆる意味で刺激する。その大地は、先人達が眠る大地だからだ。私達が生きる恩恵は、大地から多く受ける。

ついで参り

今日は、お聞きしたいことがありましてメールしました。

お墓参りの事なんですが、日曜日に、従姉の7回忌の法要があります。同じ霊園に、それも従姉のすぐそばに伯父の（従姉の父）お墓があります。そういう場合、従姉のお墓に参ったあと、伯父のお墓参りをしてもいいのでしょうか？

ついで参りはいけない、と言われたことがあるのですが・・・。

でも、伯父のお墓の前を素通り、というのも伯父がかわいそうな気がして。

どうなのでしょう？

私も、父母のお墓参りに行ったとき伯父が別に作ったお墓の方へも寄るのですが・・・

お墓参りのきまりのようなものが、あるのでしょうか？

お忙しいことと思いますが、教えて頂けますでしょうか？

よろしくお願いします。

お答えします。

実は、私も、よく知らないことなのですが、一緒に考えてみましょう。

まず、ものの見方には二つあります。お参りするほうと、されるほうです。お参りする方としては、どうせ行くなら同じ墓地にある他の墓も寄ってお参りしたら、一遍に方が済むと思うものです。このことを、詳しく言えば、『一遍に』と『方が済む』が問題なのでしょう。

お参りされるほうから言えば、墓地に埋葬された遺骨は、自分のことを振り返って欲しい、思い出して欲しい、会いに来て欲しい、語り掛けて欲しい、家族の成長を目の前で見せて欲しいと……願っていることでしょう。

しかし考えてみると、そのお墓には他に埋葬されている方がおりませんか。もし居ましたら、父親のお参りに行って、祖母のあるいは祖父のお参りを、ついでにすることになります。なにか変ですね？

基本は、いつでもそうなのですが、お墓はお参りして、はじめて墓であると言う事です。ついでと言う言葉は、そぐわないことなのです。

ある目的を持って、一途にものを突き進むことがあります。

例えば山の向うにある村に、道を通そうとトンネルを掘ったとします。ところが、穴を掘ると、今まで地中に隠されていたものが、掘り出されます。小判であったり、化石であったりします。

『偶然』『不思議』という言葉はこの時使われますが、小判や化石を目的とする発掘には、出てきて当たり前、出なければ、致し方ないことなのです。この意味では、世の中『偶然』『不思議』ということはありません。まして、小判や化石が、ここに有るから、居る

から掘ってくれと言うことはないのです。勿論、掘ってくれなかったら恨むとか、ついででも良いから掘ってくれ、ということもないのです。

死者は見とおしているという言葉があるとすれば、その人が語らしめたことです。

お墓参りに決まりなどないのです。もしあったならば、作法ばかり気になって、偲ぶこともできません。何事も、自分の良心に素直なことが大事です。

さらに、それでもついで参りが気になることがありましたら、これぞ、極意です。「ついで参りで、ごめんなさい」「お久しぶりです」「こんな形でなくては、なかなか来れないの」と、お参りするのです。そして『偶然』、『不思議』のお話は、「あら不思議。偶然ね」と、なります。

目標

平成12年2月28日の日経新聞朝刊の春秋からである。

『目標を見つけることが目標になってしまった十八の今』と、東洋大学が毎年募集する「現代学生百人一首」で秀逸作品には、卒業控えて入試に埋まるこの季節の日本の若者の心模様が浮かびあがる。自分が何をすべきなのか。それがわからない。

目標

私が、高校一年生のとき、叔父から突然この寺を継いで見ないかと言われた。それは、まったく私にとっては、突然のことでした。今、振り返ってみると、叔父も、父の姉も、そして何より父にとって、大きな願いだったのだと思う。もうこの三人も、泉下の人となって久しい。叔父は慶応の教授をしていたことより、私にとっては雲の上の存在だった。それこそ私にとっては、親しく話をしたという記憶はないのだが、その存在だけは、今でも大きくある。叔父が私をどう見ていたのか、そしてこの寺の後継者としてどう適任と思って、私にゆだねたのか、今は知る由もない。叔父の父は、私にとっては、祖父だが、私の小さかった頃に亡くなったことと、その当時の私の住んでいた西八王子は、まだまだ田舎で、遠方であったことより、記憶は全くといっていいほどない。

祖母についても同様に、あまり記憶はなく、かえって母方の、祖母のほうが目につくことが多い。小さかった頃の環境と体験の記憶が、大人になっても、大きな比重を占めるということは、いかに大事なことであることの証明でもあろう。

多感な時代だったということで、高校時代、大学時代は、眼前にぶら下げられた目標を決断することと、将来の自分のしたいことを探すことと、自分の熱中できることを通すことへの不安と、すべてを拒否することと、父の身体の変調を戸惑いに似て察知する私の、早急に決断できない自己ジレンマに陥っていた時代であった。大きな葛藤を引きずりながらも、時は流れて、その葛藤は、この寺に住むことになってまでも、最後の最後まで、葛藤を繰り返していた。

職業とか、仕事を選択することが目標であれば、仕事をやめたとき、職業を変えた時、多感な頃の十八の今はどういう立場にあるのだろうか。どうやら、多くの人が、一生の仕事を持つことは、不可能な時代になっているような気がするし、一生といっても、仕事についてはリタイアするまでと区切りを持つわけだし、多種多様に激変する時代になったことは、一人の人間にとっても、一生は多種多様なものになってしまったような気がする。リタイアしても、その後の長さを考えると、人の生涯はいつも途中であることの自覚が必要であり、”人生の定年はない”を旗印に、生きて行くことが肝要なことと思う。考えてみれば、仏教の教えそのものだ。禅で言う、前後際断とは、道元が言う「たきぎははひとなる、さらにかへりてたきぎとなるにあらず。しかあるを、灰はのち薪はさきと見取すべからず。しるべし、薪は薪の法位に住して、さきありのち

あり、前後ありといへども、前後際断せり。」の通り、今している仕事はリタイアしてする仕事と、後先のモノではなく、独立して、最前を尽くすことこそ、仏道と言える。たとえ目標があったとしても、前後際断、今を行じるのみであり、目標は、あくまで未だ至らないモノにすぎなく、今を行じることが歩んできた道と目標を含んで、後先なく、前後際断。

モンセ・ワトキンス著、井戸光子訳の《夢のゆくえ》（現代企画室）に、1999年3月にイエズス会のスペイン人司祭マヌエル・エルナンデスに対して行ったインタビューがある。彼は30年以上にわたって、日本で刑務所訪問を続けている偉大な人であり、服役する人に発して言う彼の言葉に、共感を持つ。

『まず、私たちはお説教するのではなくて、彼らの話に耳をかたむけなければなりません。すると、彼らがどう変わっていったか、わかるんです。とは言っても、助言をすることもあります。

「妄想にとらわれないように」とね。つまり、家族のことをあまりにも心配したり、刑務所での処遇で誤解したりしないように、「妄想には注意」と言うわけです。また「この世の中には原因不明のことはあり得ない。なぜあなたがここにいるのか考えてみるように」とも言います。また、自分たちは社会の犠牲者だ、という思いを捨てるように話します。

同時に、悪人はいないということ、そして踏みはずしても正しい道に戻る可能性はあるのだということも、じっくり考えてもらいます。人は、強制されて変わるものではありません。変わろうと思わなければ、六年も七年も刑務所にいるまでです。自分の人生を、ビデオを見ているように見なおしてごらんと、言うんですよ。「自分が変わるために、今、これから何をやればいいのか考えなさい。ここに舞い戻ってくるのは最も簡単なことなのだから」とね。また彼らが家族に手紙を書くときには、刑務所にいると書かないようにと言います。「仲間と一緒に労働して、学んで、一定の時期がたてば卒業できる、いわばそんな”国際産業大学”にいる」わけですから』

マヌエル・エルナンデスの言う言葉は、仏教の教えでもある。聞くと言うことは、お経の最初に出てくる”如是我聞（によぜがもん）”に徹する姿勢ですし、妄想にとらわれないとは、今いる自分の立っているところ、それは、目に見えないモノを含めての实在を直視しなさいということです。今、何をやればいいのか考えて、ただひたすら歩むことが仏道なのだから、考えてみれば、目標とは、目の前の自分自身の事実にかかわっていると云えます。だとするなら、おのれ自信の根拠を考えてみると、人は生まれた環境により、生い立ちにより、自分以外の世界から影響され生きる訳ですから、明確不明確にかかわらず、目標が、おのれを導くとも言えるです。

目標が、明確に、自分自身を決することの決断ができるかどうかには価値があるように思えますが、悩むことも、前後際断で独立し、不明確な目標がそうさせるとも云えます。

確かな目標を持つことを、その目標に向かって生きることを、時代を大海原に譬えてみると、上手に泳げる人たちは、ほんの一握りで、多くの人たちは、漕ぎ出だすことの困難さと、沖に出て

、翻弄され、もがき喘ぐことに終始しているかにみえます。

目標に向かって漕いでいるときも、目標を見いだせずただ漕ぐことも、漕いでいることに関しては同じ行為です。目標に向かっていても、自分の意図する目標でないかも知れないことを考えれば、目標は、今、漕いでいる事実であり、目標が漕がせると思えば、共に、漕ぐことが目標なのでしょう。明確な目標と、不明確な未だ明確でない目標も、共に、今を漕がせるのです。

しかし、どちらが優れているか、確かなモノかは、価値判断でもあり、目標に向かって今を上手に泳ぐことも、翻弄されて喘ぐことも、共に今を生きる姿と違いないのですから、考えてみれば、与えられた場所と時間に、一生懸命漕ぐことに、居場所があり、目標が現れるということなのです。

六道を行く

人の一生は、巡礼の旅路。日ごと遍路は、遠き道あり、近き道あり、往く道あり、もどり道あり。

巡礼の道は、回帰と再生の繰り返し、回帰は、人の振り返り、再生は旅立ちとして、振り返りはおのれ自身を問うことであり、旅立ちは今的一步を歩むことである。

白装束は死に装束、杖は墓標の今日の旅路なり。

六道を行く

かって、「私は、両親に望んで産んでくれといったわけではない。両親の営みの中で、ただ産まれただけです」と平然と言う三十前の女性と話したことがあった。彼女の中に、大きなゆがみを見た。「もっと、私のほうに向いて、愛情を注いでください」と言うかのように思えたのだ。だが、両親をも知る私は、どんなに愛されて育まれても、そう受け取ることの出来ない彼女の心の歪みは、どうしたら良いのだろうと、手を差し伸べられない私の不甲斐なさの、無力感がおおう。

達磨の『二入四行論』に「仏心とは何をいうのか」という問答がある。

心が特別な姿形をもたぬのを真如（ありのままなるもの）という。

心が変化すべくもないのを、法性（存在の本質）という。

心が支配されるものをもたぬのを解脱という。

心そのものがさまたげられないで自由なのを菩提という。

心そのものがひっそりと静まりかえっているのを涅槃という。

と、ある。

問題は心にある。心そのものが仏であるという、禅の主張は、八世紀から九世紀にかけての馬祖和尚以降に見られるという。

「人心とは、平常心もしくは衆生心の意であり、当たり前の人間の心の全体であり、善悪正邪の動きの総てを含む。それは、精神の奥底に隠れている真性とか良心とかいうよりも、むしろ日常生活の表に働いている具体的な心である」と柳田聖山氏は「臨済義玄の人間観」で言う。

この頃より禅は具体的に生身の人間をたからかにうたう。そして私達の生身の総てを肯定し、現実世界の実践的・主体的な人格そのものこそ、ほかでもなく祖師そして仏であるという意味で、人間讃歌の宣言を主張する。

さらに「仏心の宗を明らかにして、寸分たがうことなく、行と解とが照応するもの、それを祖と

いう。また、悪を見て嫌うことなく、善を見て履行したいと思うことなく、愚者を捨てて賢人を招こうとはせず、迷いを抛（なげう）って悟りにつこうとせず、大道に達して杵を超え、仏心に通じて並々ならず、凡聖と同じ範疇には住まわぬもの、彼をこそ超越的に祖とは呼ぶ」と宝林伝の達磨の章に記述されている通り、人の道を説く。

『黄檗宛陵録（筑摩書房・禅の語録より）』に、

「衆生が本来仏なのでしたら、その上さらに四生（胎生、卵生、湿生、化生）だの六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天）だのと、さまざまに違った姿かたちを取ることはないはずでしょう」

黄檗が答えた「諸仏はその本体が円かに充足しており、増えることも減ることもない。それが六道に転入していても、どこかででも円かさを失わぬ。かくてあらゆるたぐいの衆生も、一つ一つが仏である。喩えてみれば、一つの水銀の丸が、飛び散って諸処に分かれたとしても、その一粒一粒はみなやはり円いようなものだ。

しかし分散しない時は、一つの丸としてある。この一つのものが一切であり、一切のものが一つである。さまざまな姿かたちというものは、喩えていえば住み家のようなもので、口バの住み家と縁を切って人間の住み家に入り、また人間の身を脱して天人の身に生まれるといった具合だ。声聞とか縁覚とか、菩薩とか仏とかいった家にしても、すべて君自身がどれに入居するかを決めるのであり、そのために家の違いがあるわけだ。しかし本源の真性には、そんな違いはあり得ないのだ」。この黄檗の会話は、万人を救う言葉だ。

平成十一年一月のある日のことだ。八十を過ぎたT婆さんとバツタリ出くわした。

T婆さんの弟、Sちゃんが昨年夏ごろ、脳梗塞の発作が起きてより塞ぎこんで、何よりも「本人がやんなっちゃうよ、死にたいよ！とこぼす言葉に、わたしゃ心配で、……」、残されたたった一人の弟の今の姿が、なにより悲しいと言う。

しばらくたって、ふと気になり思い立って、夜、Sちゃんの所へ電話をしてみた。

たどたどしい電話口のSちゃんの会話が、痛々しく寂しい。

「いつかSちゃんのことを話題に上がってね、元気を出さなくてはしょうがないよ。少し元気をつけてもらおうと思って電話したんだよ。それで、どう？」

「それは、すいません。どうのこうのって全く困ってしまう。もう情けないやら……」辛く悲しく、人の一生の老年になっての、行きついた姿を見ると、たまらなくつらい。

昨年夏前までは、元気に大きな声で話す言葉に勢いがあり、顔色も日に焼けて、下町の町工場の気さくな親父さんだったSちゃん。今はその面影は無かった。幾つになっただろうか、七十五歳を過ぎた年齢に、老いの病気が重く覆い被さる。

「Sちゃん！そう歎くなよ！Sちゃん。言葉が不自由になってしまったが、まだ喋れるじゃない。それは、危なっかしい歩き方かもしれないが、まだ歩けるじゃない。耳も味覚もまだ残っているじゃない。Sちゃん！ついているよ！まだまだ、見放されていないってことだよ！そう思お

うよ！」。電話の向うで、すすり上げる声がした。

後日、又、T婆さんと会った。

「電話してくれたんだって。Sちゃん、喜んでいたよ」「なっとくしたみたい。少し元気がでたみたい」。

みんな、六道を歩いている。

もの言わぬ羅漢達…揀択をこえて…

平成10年7月9日午前4時ごろ、突然ボタンという音で眼をさました。隣の部屋で寝ている母に違いない。母の部屋のドアが開いて、膝をつき両手をつき、情けない困った顔の母の顔が私を見ていた。母のいるジュータンに、あっちこっちに汚物が散乱していた。昨夜、母は初めて成人用の紙オムツをして寝たのだった。

1ヶ月前より、トイレにて大便をしぼりきれなくて、タラタラと肛門より垂れ流しのような状態になっていて、よく下着を汚していた。下剤を飲まなければ便がでないし、弱い下剤でも1日2日で効き始めると、何回もトイレに行かなくてはならない。その度に、少しずつ下着を汚すことになってしまう。下腹に力が入らないのだ。

母の姿をみて、トイレに坐らせ、ジュータンを拭きはじめた。トイレにつれて行く時、母は右足を苦しく痛がっていた。母のお尻を洗浄し、新しい紙オムツをつけて、新しい寝巻きをはかせ、寝室に運んだ。ベットに坐らせ母の足を触りながら、「何処が痛い」の言葉に、母は太ももを痛いと言った。朝はまだ暗く、明るくなるまでもう1度休むことを願い、眠った。

7月はお盆の季節で、脳梗塞をおこして少し痴ほう気味の母の看病が出来ないので、7月11日に、北砂の特養老人ホームにショートステイを申し込んでいたところだった。9日の午前中に、北砂のホームの人と、枝川の介護支援センターの人が、母を見に来ることになっていた。8時頃、母を起こし、背負って1階の食卓についた。母は右足を痛がっていた。

10時頃、KSホームとE介護支援センターの人が母の様子をうかがいに来て、母の足の様態に、「念のため、レントゲンで見てもらったらいかがでしょう」との言葉に、すぐ近くのS外科病院にすぐ連絡し、手配を頼んだのでした。結果は、その場で入院でした。右大たい骨骨折でした。思ってもいなかったことに、その後の約1ヶ月は朝、昼、晩の食事の介助や就寝の「おやすみ」を言うため、私の家族や姉達はひどく疲れた毎日を過ごしたことになる。手術は成功裏に終わったのだが、入院直後、病床で脳梗塞の発作がおこったようで、ベッドの上で、母は右半身不随の状態におちいった。病院は、驚いたことに、院長、看護婦、ケースワーカーの連絡がまったくとれていず、私達は、病院を信用せず早く転院をしなければ、病人が本当の病人になってしまうと、真剣に母の状態が少しでも快方に向かうことを祈った。

転院前日の終身前、咳きをしながら当直の看護婦に、「隣の部屋の患者がインターホンを押して、20分たっても看護婦がこない。もし俺に何かあったらどうするんだと」怒っていたことを話したら、「夜間看護婦が3人しかいないのでどうしようもないのです。私は週に2日のアルバイ

トなので」という話だった。信じられないことがここでは頻繁に起きていたのだ。次いでだからすこし就けたそう。

母が入院して世話になったのは、不思議なことに、隣の病人だった。暑かった夏にベッドの上掛けを気にしてくれたり、水を飲ませてくれたり、手足を吹いてくれたりした。また同室の病人の食器の搬入や片づけを彼女はしてくれた。彼女が退院しては、私達もそれを見習ったりした。彼女は1週間食事を食べずにいて、転院して行った。

その何日か前、K町のS婆さんが、腰をうったとあって、救急車で運ばれてきた。彼女はベッドの上で、すぐに尿の管を挿され、寝たきり生活を始めてしまった。私達が退院する頃には、彼女はすっかり痴ほうが進んで、やがて千葉の老人病院に転院したことを聞いた。ある日のことだった、「管を挿しては、歩くことができなくなってしまう」の言葉に、息子サンはS婆さん管をはずしてもらった。食事の後のことだ、S婆さんが尿意を催して、息子サンがナースコールをしたのだった。看護婦が来てわけを聞くと、簡易便器をだして、その息子に「貴方が介助してください」といった。息子サンは怒って「金を払っているのだから、少しは看護婦らしいことをしろ」と、言うてはいけないことを言ってしまった。

3週間ほどして院長に様態を伺った時のことだ、「大分足もくつついて来たので、そろそろ軽いリハビリをするように」と、看護婦に言い渡してくれた。リハビリの先生は、夜6時頃出勤して、白衣姿で病人を訪ね、数分出てくるという始末なのだ。約1ヶ月いて、母のところに来たのは1回で、それも、2分いたかどうかであった。ちなみに院長が病状を説明してくれたのは、この時と、手術後のお礼を渡した時と、入院した時、転院の許可をもらいに行った時だった。考えてみると、回診している姿を見たことがなかったのが不思議に思われる。

ある日のことだった、姉から電話があった。例によって朝8時病院に行ったときのことだった。「母の病室が3階の3人部屋に突然変わってしまった」と言う電話に、駆けつけた。こんな部屋があったのかまったく知らなかったが、その部屋に入って驚いたのは、まるで生きた年寄りの捨て場のような雰囲気をも受け取った。なんとなく、この部屋に入る看護婦の様子が、入ってはいけない場所に入るような素振りに、彼女達はすぐに駆け足で出て行った。私達は、部屋がえを頼んで、夕方には個室の病室に移ってホッとした。

ある日の朝だった、部屋を閉め切って、クーラーなしで、母の顔は赤く、身体は汗をかき、ほてっていた。急いで窓を空け、真夏の掛け布団をとり、汗をふいた。看護婦に聞いたら。「夜中身体が震えていたので、寒いと思って布団をかけました」とのことだった。母は半身不随で、右腕や右足を、震えて動かすさまを取り違えて施した措置だったのだ。

母は近くの医院から、常時薬をもらっていて、朝、昼、夜と決まって投薬があった。ピンクの薬は、朝と夜といった具合にきまっていたが、医院からもらってきた薬の、投薬はまったくでた

らめだった。掛かり付けの医院の先生には、「どうして、よりによって、あそこに入院しちゃったの！」と言われた。まったく、こうなるとは思ってもみななかった自分の落ち度なのだが、本当に入院するとは思わなかったのだ。

入院したその日に、『院長にはいくら、看護婦さん達にはいくら、介助の人にはいくら、後日執刀医にはいくら』と、現金を渡したが、怠け者には何を渡しても何の薬にもならないと残念でしょうがない。この病院が、数年先、特養老人ホームを塩浜のほうで移転して開業するという。元気な人しか入院できず、身体の弱ったお年よりが真の病人になって退院？する病院が、ここまで凄かったのかと思うと、この病院を認可している公共機関は、一体どこに目を持っているのだろうかと思う。

平成10年8月5日、西葛西にある老人保険施設のKに足が完治しないまま、母は転院した。当初食事まったく取れなくて、微熱続きの母は、この施設の献身的な介助によって、順調に身体を回復して行った。だが、残念なことに母の右半身麻痺は治らず、痴ほうは進んでしまっていた。

施設入所当初、母のいる5階のエレベーターが止まり、ドアが開いた瞬間、明るい光線が飛び込んできたと同時に、私は啞然としたものでした。正面にナースセンターがあり、そこから広い通路がエレベーターまで真っ直ぐに走っており、その両脇に各4人部屋や3人部屋が配置してある作りでした。通路の中心を開けて壁沿いに沢山の車椅子とそれに腰掛けたお年寄りが一斉に、突然現れた私を見たかのように思えたからでした。私にとっては異様な光景が飛び込んできたと同時に、私には受け入れがたく、「いやだなーっ」と、何度も思ったのものでした。後になって知ったのですが、みんな誰かが来るのを、心の中で待っていたからでした。

年寄りの大勢の動かない顔、うつろな顔、曲がった顔が全体に大きな壁絵のような景色に映ったからでした。その時のことをいまでも強い印象をもって覚えています。こうなりたくないという気持ちだが、一人一人を見ることをさせずに、さっさと車椅子の前を通りすぎ、ナースセンターにて、母の場所に行きました。

この日より、西葛西のK通いが続きました。私は、昼食の様子や、リハビリ、おやつ時間を筆でスケッチしていました。そして気がついたとき、私自身が変わっていたのでした。

チョウさん

『細面の顔に、いつもいたづらっ子のように、口を尖らせて、眼をまん丸に開いて、人を真正面から望む。首を立てに振って合図をよこすのか、挨拶をするのか解らない。ただ真剣に人を捕らえていることだけは、眼を見れば解る。食事時、特製のプラスチック前掛けを胸に、その中に食べ落ちた食事がポロポロとこぼれてゆく姿は、豪快そのものだ』

チュウさん

『身体が細く、いつも食堂の奥の席に座って、全体を見渡している姿は仙人のよう。歩く姿はヒョコヒョコとユーモラスに、それでいて飄々としている。しかも、足早に歩く。しかしながら意外にすばしっこく、おやつの時、余った果物を我先にとほうばる姿は忍者のよう』

シャチョウ

『歩く姿勢がなんと、しばらく空や天井を見たことがないのではないかと思われる。太って、腰を直角以上に曲げ、両手を介護人にゆだねて歩く。眼はわるく室内でも、サングラスをしている。だが、声はそれこそ天を突くような大きな音を出す。食事する風景は、頭をななめに表を下にして、手は機用におかずやご飯を、スプーンでさらうが、半分はエプロンやトレーに落ちる。本人は必死かどうかわからぬが、見ているものには必死に見えて、たくましさを感じる。いつだったか、大きな声で「ショウチャン！ショウチャン！」と叫んでいる姿が目に残った』

トウさん

『手の甲に少しむくみがあるのか、やはりボーッとしている。この人もリハビリ中にて、ほとんど口を聞くことはない。たまに、食事時手を貸すと、ジッと見つめて、また同じ作業を繰り返す』

貴婦人

『やせていて、色が蠟のように白い。車椅子に座った姿は、貴婦人を思わす。いつも遠くを見つめていて、人を見つめている時も、その後ろに誰がいるのではないかと思ってしまう。食事の時違うところを見つめながら、右手はおかずを拾う。スプーンは、口元に行かず、中身はトレーにこぼれるのだが、辛抱強く繰り返す。この往復の動作が、淡々と行われるところに、なぜだか自然の美しさを覚えてしまうから不思議だ。私が軽く首を振ると、微笑んで笑みをかえす』

年寄りの一人一人を見ていて感じることは、意志や考え方はわからないけれど、何よりもひたむきに食べ、見つめる姿が、いつのまにか神々しい清らかさを放つかのように思われた。清らかさとは一途さなのではないだろうか、思えてきた。

いかなる知識や見識をとったとしても、最後の1枚、プライドだけは残ってしまうものなのだが。食事を前にして、その最後のプライドを忘れ、人はものを食べている姿に、その人の純粋なあり様を見ることが出来るような気がする。

そう言えば、檀家の牡丹町のT婆さんを、渋谷のS病院に見舞いに行った時もそうだった。渋谷のI婆さんもそうだ。冬木町のKと話していた時、「私も、一人になって、寝たきりになったときどうなるのか？娘が近くに嫁いでいるのだが、そう心配もかけられないが、なるようにしかならず、かといって準備をしようにも、そのときになってみなければわからないし！」。

平成10年12月14日、母は八王子の上川病院に転院した。転院した夕方、姉の長女が病院に

見舞いに言ってくれた。電話でその姪と話しをした。

「数多くの病院を見学しての結果で、ここを今、最良の預けられる老人病院と考えてのこと。だが、私の心の中には、判断はこれで良かったのだろうかと思暗くなる気持ち。遠く八王子の彼方に、今、母は何をしているだろうかと思うと、つらい。母の産まれ故郷とは言え、一番上の姉が棲んでいるとはいえ、やはり、気持ちは手元にいて欲しい。」

姪は、老人病院に数度見舞いに来てくれた。そして、見舞いで院内の様子の体験を聞くと、長くいると涙が出てきそうだと言う。姪も感情を成長させて、優しさを高めてゆく。私の長男は。中学2年だが、私の外出中の日中、私のいない寺を留守番するはめになる、そのことで、人は身に降りかかる事件によって、少しずつ成長し、感情を豊かに、自分を見つめて、変化して行き、たくましくなってゆくのだと思う。

病院で様々なお年寄りの姿を見つめることが出来て、ふと感じたことは、その姿、顔が、古びた石や木造の羅漢像の姿と良く似ているとことだった。そういえば、寺の本尊も、羅漢像も、石塔も、お骨も、キリスト像やクロスもみなそうだ。何も言わない。いつもしゃべっているのは、私のほうだ。何を言っているのか知りたいと思う気持ちが、自問自答する。

何も言わないからこそ、引かれるのかわからないが、様々な像の、そこに人間の純粹の叫びや驚き、悲しみの表情を、投影して見る事が出来るからだと思った。悲しいかな私達は望んでも、現実にはそこまで、衣を拭き去ることは出来ない。

話しかけても、ただその純粹な姿を留めて、「お前達に、わかるかな？」と、問いかける姿に引かれる自分があるだけです。自己の本性的目覚めと言えれば良いのか、荒天の雲が一気に晴れえと向かうすがすがしさに似ている。本人の意思は何うことができないけれど、きっと、今まで経験したことの無い、本人にとっての自己に違いない。

現実のもの言わぬ羅漢達の、ただ現実を黙々と食べている姿に、自己を投げ出して、たくましく生きる姿は、時に神々しいような光をはなつ。

宮本武蔵

二十一歳で京都吉岡一門との決闘、慶長十七年一六一二年四月十三日小倉での岩流佐々木小次郎との決闘で、武蔵の名を知らぬ人はいません。時に武蔵二十九歳でした。十三歳の時はじめて勝負をしてより、二十九歳まで六十余回勝負して、負けることがなかったようです。そして武蔵の消息はここでプツリときえてしまいます。行雲流水の自己鍛練の修行が続くのだと思います。

寛永二十年の十月十日、武蔵六十歳の時、熊本の金峰山、岩戸観音の洞窟にて、天道と観世音を鏡として『五輪書』を一気に書き上げます。

「其より以来は尋入べき道なくして光陰を送る」と、それでは五十一歳で、養子の宮本伊織を引き連れ九州の小倉に現れた時、武蔵の心境はどうだったのでしょうか、『五輪書一空の巻』は語ります。

「空という心は、物ごとのなき所、しれざる事を空と見たつるなり。勿論空はなきなり。ある所をしりて、なき所をしる。

世の中において、あしく見れば、物をわきまへざる所を空と見る所、実の空にはあらず。皆まよふ心なり。

この兵法の道においても、武士として道をおこなふに、士の法をしらざる所、空にはあらずして、色々まよひありて、せんかたなき所を空いうなれども、これ実の空にはあらざるなり。

武士は兵法の道をたしかに覚へ、そのほか武芸をよくつとめ、武士のおこなふ道、少しもくからず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心のみがき、観見二つの眼をとき、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空とするべきなり。

実の道をしらざる間は、仏法によらず、世法によらず、おのれおのれはたしかなる道とおもひ、よき事とおもへども、心の直道よりして、世の物差しにあわせて見る時は、その身その身の心のひいき、その目その目のひずみによって、実の道にはそむくものなり。その心を知って、直なる心を本とし、実の心を道として、兵法を広くおこなひ、ただしく明らかに、大きな所をおもひとって、空を道とし、道を空と見る所なり」

宮本武蔵は正保二年五月十九日一六四五年、熊本の千葉城で没しました。世寿六十二歳でした。その七日まえ、自誓の心にて遺書をしたためます。

独行道

- 一、世々の道そむく事なし
- 一、身に楽みをたくまず
- 一、よろずに依怙の心なし
- 一、一生の間よくしん思はず

- 一、我事におひて後悔をせず
- 一、善悪に他をねたむ心なし
- 一、何れの道にも別をかなしませず
- 一、自他共にうらみかこつ心なし
- 一、れんぼの道思ひよる心なし
- 一、物事にすき好む事なし
- 一、私宅におひて望む心なし
- 一、身ひとつに美食を好まず
- 一、末々什物となる古き道具所持せず
- 一、兵具は格別余の道具たしなまず
- 一、道におひては死をいとはず思ふ
- 一、老身に財宝所持もちゆる心なし
- 一、仏神は尊し仏神をたのまず
- 一、常に兵法の道をはなれず

正保二年五月十二日

新免武蔵 判

武蔵の一生を二つにくぎるとするならば、二十九歳佐々木小次郎との決闘が境になるだろう。前半は武術の鍛練、果たし合いと話題が豊富であるが、後半生は果たし合いもなくひたすらに求道の旅だったようだ。おそらく前者が自己の外に向かったの修行だとすれば、後者は自己の内に向かったの修行だったのだろう。死の七日前にしたためた厳しい自戒の文に、宮本武蔵の求心的な孤高の生涯がうかがわれます。

中国は唐の時代の禅僧のことばで、「仏道とは、悪いことはするなかれ。良いことを行わずにだけだ。そんなことは三歳の子供でもよく知っているが、八十の年寄りでもこれを行うことができんのじゃ」とあります。現代の我々も何か自戒を持ちたいものです。

五合庵断章（平成10年10月17日）

世の中は供へとるらしわが庵は 形を絵に描きて手向けこそすれ
今よりはいくつ寝ぬれば春は来む 月日よみつゝ待たぬ日はなし
なにとなく心さやぎていねられず あしたは春のはじめと思へば

「いったい良寛さんはどんな正月を迎えていたのであろうか」、ふとそんな思いに駆られて著作を調べてみると意外と数が少ないのに驚きます。それにしても歌はいかにも童心の良寛さんらしく、閑散とした部屋に絵に画いたお供えを前にして指折り数える姿、心はしゃぐ姿が目浮かびます。

漢詩では「ただ 明朝 新たに歳を迎うるに慣れ 玄鬢(ゲンビン:黒髪)の化して霜となるを省みず」と除夜を歌った詩が有るのみで、その内容は自省の詩です。

北陸の冬は厳しい。まして日本海に面した国上山は海風がはこぶ湿った雪に覆われ、何といても来る日も来る日も続くあの灰色の空は憂鬱になる。戸外に出て暖を取るための粗朶も集められず、何百年かたった杉、老松の根元を掻き分けてふもとに下りて行くことも出来ず、できる事はただじっと春を待つのみ。

「玄冬 十一月 はげしくみぞれが降る。山は白一色と化し、道に人影はない。昔を思えば、夢のように、今は一人草庵の扉をとぎす。よもすがら炉にそだを焚き、古人の詩を読む。」

「孤峰 独宿の夜、外はみぞれが降りしきり、思いは悲しい。山に黒猿の叫びが響き、凍てついた谷川はせせらぎの音を消す。窓ぎわの燈火は動かず、床に置いた硯の水は乾ききる。徹夜 目は冴え、眠られぬままに、筆に息を吹きかけいささかの詩を書く」

厳しい冬籠りで、蓄えも底をつき、ただひたすら暖くなるのを待つ良寛にとって、ひとりぼっちの正月自体には、それほどの意味を持たなかったかもしれない。否、厳しい閉ざされた冬があつてこそ、暖かな春の訪れをつげる、陽気をひたすら待つ良寛であつたのでろう。白一色の世界と灰色の長い長い冬だからこそ、子供達と戯れる便りの暖かさが待ち焦がれる。粥をすすって寒夜を消し、日を数えて陽春をまつと良寛は歌うが、それにしても北国の冬は長い。

冬夜長 三首

「冬夜長し 冬夜長し 冬夜 悠々としていつか明けん。燈に焰なく 炉に炭なし ただ聞く
枕上 夜雨の声」

「ひとたび思う 少年の時 書を読んで 空堂に在り。燈火 しばしば油を添え いまだ厭わざり
き 冬夜の長きことを」

「老朽 夢 覚めやすし 覚め来って 空堂に在り。堂上 一盞の燈 挑げ尽くして 冬夜長し」
年が明けて旧暦二月になると木々の枝には新芽がふきだし、雪を溶かすかのように草は萌えいで、岩にしがみついた苔は緑をとりもどす。暖かな風が吹くかとおもえば、老いた梅の枝からほのかな薫りを辺りにまきちらす。国上山の中腹五合庵より眺めれば、ふもとにはいく筋もの煙がたなびき、まるで踊っているように見えたに違いない。

「草鞋に杖をとり 江村の路を歩めば、まさにこれ 東風二月の時。鶯は高いこずえにうつりさえずるが、その鳴き声はまだ小さく、雪は低い垣根に残って、草色微かなり。たまたま友に会い風流を語り、しずかに本をひもとき、手であごをささう。この夕べ 風光 ようやく穏やかに、梅花と詩情とふたつながら相い宜しい。」

「春気 ようやく和調にして 錫を鳴らし東城に出づ。園中の柳は青々として池上の浮き草は漂っている。(托鉢の)鉢は香し 千家の飯 心はなげうつ 万乗の栄え。古仏の跡を追慕して 次第に食を乞うて行く」

「比類なき愚かさゆえ 草木をもって友となす。老いぼれたこの身には もはや迷とか悟とか問うに物憂く ただみずから笑うのみ。すねをかかげてのどかに水を涉り ふくろを携え行き春を歩く。敢えて世塵を厭うのではないが いささか余生を過ごす。」

春になればすべてが、生き生きとする。それは冬が厳しければ厳しいほど一層に思われたに違いない。友と酒を酌み交わし、草を摘み、子供達と遊び、梅をかぎ、桜・桃の花を愛でる。良寛禅師こそ真の自由人であった。

ひさかたののどけき空に酔ひ伏せば 夢も妙なり花の木の下
国上山雪ふみわけて来しかども 若菜摘むべく身はなりにけり
鉢の子にすみれたんぽゝこき混ぜて 三世の仏に奉りてむ
霞たつながき春日をこどもらと 手まりつきつゝこの日暮らしつ
いざこども山べに行かむ桜見に 明日ともいはゞ散りもこそせめ
五合庵

索々たり五合庵 室は懸磬のごとくしかり。 戸外には 杉千株 壁上には 偈数篇。

釜中 ときに塵あり 甑裡さらに烟なし。 ただ東村の叟ありて しきりに叩く 月下の門。

*注 懸磬(ケンケイ) 貧しく何も無し 甑裡(ソウリ) 飯を蒸すこしきの中 偈(ゲ) 禅宗における漢詩

良寛禅師がここ五合庵に住み着いたのは、今から数えておよそ百八十年前、文化元年頃のことと思われる。その時良寛四十七歳であった。

宝暦八年(一七五八)、越後国三島郡出雲崎の名主橘屋山本以南の長子として良寛禅師は生まれた。幼名は栄蔵といった。家業はなかなか思うようにならなかった。安永四年(一七七五)、栄蔵は十八歳で名主役見習となるが、突然尼瀬の光照寺に出家する。安永八年(一七七九)、備中玉島円通寺の国仙禅師が光照寺に立ち寄るのをきっかけに受戒剃髪、大愚と号し良寛が誕生する。時に良寛二十二歳であった。以後国仙に師事すること十三年間のながきにわたった。寛政二年(一七

九〇)、国仙より印可の偈を受ける。

「良や愚のごとく 道うたたひろし。騰々任運 誰か看ることを得ん ために附す山形爛藤の杖
到る処壁間午睡の閑」

これより一生を清貧の乞食生活として送り、国上山の五合庵へ住み着いたのは文化元年(一八〇四)良寛四十七歳の時であった。五合庵下山が五十九歳の時と言われ、国上山ふもとの乙子神社境内の草庵に六十九歳まで居たと言われるので、つごう国上山には二十三年間居たことになる。天保二年(一八三一)、正月六日午後四時頃、島崎の木村家の庵で示寂。良寛七十四歳のことであった。

つたえきく良寛の辞世に「うらをみせおもてをみせて散るもみじ」とあり、次の言葉が忍ばれる。

「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候。」

K子さん！（平成12年7月19日）

K子さん！（平成12年7月19日）

確か平成12年4月29日だったと思う。Kさんが突然救急車で入院したのは！
Kさんのご主人のSさんは、一緒に修行した経験はないものの、私の修業道場の先輩でもあることより、僧堂を出てより、たびたびお邪魔するにつけ、Kさんとお話をする機会が増えていきました。

18年前の記憶は不確かなことなのですが、当時Kさんは、腎臓透析に上野のJ病院に通っているとされました。Kさんが何処か信頼できる病院はないかと話をしているところ、私の従姉妹の夫がT病院の放射線科で技師をしているから、聞いてみましょうと、言った言葉がきっかけで、それ以来T病院に腎臓透析を通う姿を、私は見ることになりました。Kさんは1週間に2回、欠かさず病院に通って、約半日透析を繰り返していたことになります。

お寺の奥さんであるKさんの大切な仕事の一つは、寺の留守を守ることがあります。留守を守ると言っても、この守り方一つで寺が人の絶えない寺になるか、尋ねにくい寺になるかと色々なのですが、Kさん程その勤めが似合う人はいないのではないかと、妙な誉め言葉ですが思う人でした。

透析をしていると、時に血液が濃くなり、脳溢血、脳血栓を引き起こすことがあるということなのか、留守中、それは突然の出来事だったらしい。Kさんが倒れた。

帰宅したSさんが発見し、娘さんに連絡をとり、救急車でT病院に搬送された。CTスキャンにより、脳に出血が認められ、手術。術後は言語障害が発生したのですが、筆談での会話は何とか出来るというのです。

風の便りにKさんが入院した事を聞いた私は、Sさんに電話をして、Kさんの様態を聞き、この変化に驚き、医療処置を病院に任せ、祈り気遣う家族の姿を想像しながら、私はメールを送りました。

Sent: Sunday, May 07, 2000 10:10 PM

Subject: 具合はどうですか

その後、奥様の具合はどうですか？

心配しております。少しでも良くなりますように！

Sさんからのメールです。

平成12年5月8日

ありがとうございます。昨夜危険な状態といはれて、娘が泊まり込みました。今朝の連絡で何とか持ち越したようです。今朝息子に連絡してすぐ帰るようにしました。あわただしいことです。

脳溢血も起こしたようで、意識があるときと無いときがあり、この一兩日が危険な状態とのこと、心配です。ではまた

平成12年5月14日

毎日重い空気の中で生活しています。

昏睡状態というのは、一心に眠り込んでいる状態、しかしそこには意識が無いといわれている。事実呼びかけにも何も反応しない。寝てるから。脳幹まで冒されてはどうしようもない。医者もこれ以上手がつけられないと言う。しかし足が突然動いた。また周りで話をしていると涙を出している。

これは脳の深いところで聞いているのではないか。それはその反応が現れているのではないか。看護婦さんはわかりませんと言うが、身内の者にしてみれば、そこにかすかな期待を持ちたい。今日もこれから励ましに行って来ます。

平成12年5月15日、Kさんは家族が見守る中、心臓が停止し、息を引き取りました。

52歳でした。通夜・葬儀はしめやかに、そして多くのお別れを惜しむ人たちに囲まれ、旅立っていきました。残像として、いつまでも印象に残るKさんでした。

平成12年7月12日、私はお盆の棚経で、船橋を訪れました。蒸し暑い夏の始まりはここ何日か続いて、この日から私の実質のお盆の到来でもあります。

Mさんのお宅は、今年の4月始め、ご主人を亡くして、初盆になります。しかしながら、初盆を迎えるべき老妻は、病院のベッドの住人として、脳死状態でいるのです。3週間前食物に喉を詰まらせ、15分の心臓停止から蘇生した老妻の意識は、元に戻ることはなく、それより病院生活に入ってしまったという。

もう何年も前から、『植物人間』、『植物状態』という言葉が一般に使われるようになっていきます。『動物人間』、『動物状態』とは言わないことに、面白く思います。動物が植物になることに、何か否定的なイメージが有るとすれば、幻想に過ぎなく、厳密な定義など、もともとなくせに、『植物人間』、『植物状態』という言葉が、一人歩きしているのだと思うのです。

Mさん宅で、Sさんのメールの

「昏睡状態というのは、一心に眠り込んでいる状態、しかしそこには意識が無いといわれている。事実呼びかけにも何も反応しない。寝てるから。脳幹まで冒されてはどうしようもない。医者もこれ以上手がつけられないと言う。しかし足が突然動いた。また周りで話をしていると涙を出している。

これは脳の深いところで聞いているのではないか。それはその反応が現れているのではないか。看護婦さんはわかりませんと言うが、身内の者にしてみれば、そこにかすかな期待を持ちたい。」という内容が、私の頭の中をめぐりました。

そこで、老妻の様子をうかがい、メールの内容をお話いたしましたら、対応していただいた、息

子さんたち、娘さん、お子さんのお嫁さんたちが、この内容に一齐に頷きました。

そこで気がついたのです。ぐっすり眠り込んだ夜、目を覚ましたときは、もう朝という時があります。ふと考えることは、この熟睡している時間の私は、私を意識することもなく、夢も見ることはない。しかしながら、ひょっとして、鼾をかいているかもしれない、寝返りを何度もうっていることだろう、手は布団を引っ張っているかもしれない、動かそうと意識せずに生理的に動いている私も、私の一部であり、目をあいて活動する私の時間のやはり何パーセント何十パーセントは、意識しない私が含まれていると思う。そう思うと、考えようには、植物人間でベッドに横たわってしまった私と、眠っている私は、同一の状態に近い場合もあるのではないかと思うのです。

人は、意識の無い部分と、ある部分と合わせて、個性を表現いたします。意識のある部分だけを取り出して、人の存在の価値や意義を云々することは、価値や意義を見出さない部分を作ってしまうことになるのではないかと、考えてしまいます。

昏睡状態に陥った人の意思はと、考えた場合、最後まで生きようと血が流れ機能が働きます。このことも意思に違いありません。意識の応諾は得られないかもしれない、こちらの意思は通じないけれど、応諾しない通じないことも昏睡状態の人を形成する部分なのです。

脳死をもって、人の死とすることが、一般に浸透し始めています。忘れてならないことは、このことだと思えます。そうしなければ、一人の人の意思や意識だけが、人なのだと選り分けすることになってしまう気がいたします。

船橋のMさん宅で、K子さんの顔が浮かび、「ほうや！陽岳寺さん！全部私ですわ！」と話し掛けてくれたような、「マダマダ修行がたりません！」と叱られたような、とても懐かしい気持ちにさせてくれたK子さんでした。（SさんとK子さんに！

今は昔

私が小学生も低学年の頃、西八王子の田舎より見た、ここ深川の思い出は、何と言っても隅田川の大きさと沢山の水路だった。その水路には、沢山の舳（はしけ）が浮かび、人が生活していたのだ。

陽岳寺に、小津安二郎本家の墓地があるが、彼の映画にも水上生活者の風景があった記憶がある。今では考えられない景色なのだ。彼の映画にあって、今はない景色は、暖かな家族の団欒の風景であり、その団欒の風景は、船の上であったり、横丁の路地であったりだった。

多分さまざまな職種があって、雑多に交じり合って、町を形成していたのだと思う。

禅語に「佛殿裏に香を焼き、山門頭に合掌す。」という語が有ります。

禅僧が修行の道場で、ふすまの開け閉め、下駄草履の扱い、低頭の仕方、畳み敷居のまたぎ方、ぞうきんがけの仕方、歩くときも寝るときも規矩(きく)に則りそれこそ着衣喫飯、行住座臥、僧侶としてのなりふりだとか、姿形がそれなりに、見えるにはやはり長い年月と修養がそうさせるのです。しかし、修行道場での生活は、団体生活ですので、それを乱す者には容赦ない罰刑があります。大勢の雲水達が修行がしやすいようにとの老婆心からです。

職人の世界でも、大店の店でも修業道場に似て、掟とか、家訓、弟子と師匠の決まりといったことが沢山あったと思うのですが、今は、見事に無くなった気がいたします。それと共に過去の文化も崩壊したような気がいたします。

禅僧の日常から、つまり修行の中から、多くの禅僧が大悟、小悟をえては、それを慣らしてきました。古人は、「到り得て帰り来って別事無し」と語をつけます。

禅僧としての、日常の風情であり、同時に人間としてのありようであるとも思います。

古来、日本人は自己を習練し、磨き、人格の完成を目指すことを人生の目的としてきました。だからこそ武道、茶道、弓道、華道等、”道”という言葉が当てられてきました。

それに引き換え、現代最も卓越した企業の課題は、”利潤の追求”です。追求の後の分配は、豊かさなのでしょうが、そこが気になるのです。豊かさが、物質であり、有り余る余暇であり、束縛の無い自由さなのでしょう。

現在でも習字を習うときなど、姿勢、息に気を付け身を調べてから字を習います。この身を調えることが、求心的な行為であり、自己を習うということです。この自己というものを忘れて、豊かさばかりを追求した結果が、現代の姿なのでしょう。

かって、この国に、禅が出現し、武道、茶道、弓道、華道等、”道”という文化を形成したこと

が嘘のような、現代です。

この違いは根底にある探求の方法です。利潤を追求する発想は、積み上げて積み上げて達成しようとし、それはより強い鎧を着てガードする考え方でもあります。この鎧は、年金制度、保険制度などでもあります。

しかしながら、過去の文化は、精神的にガードする思想、見方を削いで削いで、自分自身を消滅することにより、優れた独立性を確立したものであります。

ある僧が師に、「如何なるか祖師西来意？」(達磨さんがはるばるインドより中国へ渡ってきた目的はどのようなものなのでしょうか？お釈迦様の説くギリギリの処はどのようなものなのでしょうか？)と尋ねましたところ、「照顧脚下」と答えられたという故事がありますが、人々自己の足元をしっかりと固めて、それぞれが行ずべきことを行ずる、それをこの「佛殿裏に香を焼き、山門頭に合掌す。」という禅語で現したものであり、削いで削いで行ずるそれぞれの姿のあり様だと思っております。

十一面観世音菩薩

おん・まかきやるにきやや・そわか

1 パラミータ

《ある人が「私たちに神の王国についてお示してください」とイエスに問いかけました。イエスは答えました。「そこには時間というものがない。そこには永遠がある。時のない瞬間が、それが彼方だ」とラージニシ・和尚は云います。彼方とはパラミータです。空そのもの、もとの完成された智慧そのものといえるでしょう。この物語は、その彼方から始まります》

未だ私が産まれる以前のはるか”彼方”。それは天も地もなく、悠久さは、みちみちていることが続べてであり、いまだ世界を形づくる以前の、瑠璃色の水が覆うのです。太虚といい、混沌という宇宙。

禅は、そんな世界を、私という、一身上の世界に当てはめます。

滋味というその水は、彼方を深々と、芳しくたたえる。この悠久さには、時が経つという記憶もない。

しかし、やがて、ゆっくりと悠久の滋味の中に、千枚の花びらを持つ花が誕生したのでした。それは、ゆっくりと、すべての生き物が誕生する余韻に先駆けてのことです。

凜として、白く、弁の中に七色の虹を放つ花は、ゆったりと、幾本ともなく咲き、”彼方”を覆いつくしたのでした。

やがて、天と地が誕生し、光が誕生すると闇が広がり、太陽と月が生まれました。

その花は、太陽と月の輝きを受けて、次々と命あるモノを生みおとして、悠久の水を、それぞれの体内に注ぎ込むことを心がけたのです。

命が芽生えたモノたちは、その水から外に目指して、羽や翼のあるモノ、ヒレのあるモノ、尻尾のあるモノとして生まれ、いつしか人が登場しました。

2 蓮華

誕生したあらゆるモノは、未だ、混沌の中に、混沌のまま、それが、今、生まれたままに、あるがままにあるという、天地の間に、滋味あふれて憩いでいる姿でもありました。

混乱も、争うことも、優れていることも、劣っていることもなく、世界の一々として、光と闇が入り交じる、朧（おぼろ）そのままに光り輝いていたと言えるでしょう。

しかし、世界にモノが溢れて、悠久の水が使い果たされ、体内に注がれた命がやがて枯れるようになると、時が刻まれ、諸行無常の世界が誕生いたします。

世界の誕生は、時と空間の誕生です。

此岸というこの世界で、人々は、”彼方”に咲くその花を、愛で、『蓮華』と呼んだのです。浄土は遠い彼方に遠ざかるのですが、蓮華は今でも滋味あふれる瑠璃色の光を放って、世界を照らしています。

3 我

人が思いを抱き、物を自分のモノとし、いつまでも命あるモノと願うようになると、そこに、いつしか「わたくし」という幻を、それは、まるで確かなものであるようにと信じてしまいました。浄土が後退し、やぶれて、どうやら我という私の想いが出現したのであります。

それ以降、生きることは分別の繰り返しとなり、病に侵されていることすら知らず、むしろ、病に深く侵されることこそ、人の価値が上がるとことを目指す思いが、世界に蔓延するようになったのです。

潤いの中で生まれた私が、渴きを求めて、外に飛び出すかのようにして、私が生まれ、人々は、同じように病を宿すようになったのです。

私という病を。そして、私という分別を、世界を。

4 十一面観世音菩薩

おん・まかきやるにきゃや・そわか

「時に、観世音菩薩は仏に申して曰く、世尊、我に心呪あり、十一面と名づく。此の心呪は十一億の諸仏の諸説なり。我今これを説かん。一切の衆生の為の故に。

一切の衆生をして善法を念ぜしめんと欲するが故に、一切の衆生をして憂悩なからしめんと欲するが故に、一切の衆生の病を除かんと欲するが故に、

一切の障難災怪悪夢を除滅せんと欲するが為の故に、

一切の横病死を除かんと欲するが故に、

一切のもろもろの悪心者を除きて、調柔ならしめんと欲するが故に、

一切のもろもろの魔鬼神の障難を除きて起らざらしめんと欲するが故なり。

正面の三面を、菩薩面となし、左面の三面を瞋面（しんめん）とし、右面の三面を菩薩の面にてつのと牙をだし、後ろに一面ありて、大笑面と作し、頂上の一面は仏面となす。」

おん・まかきやるにきゃや・そわか 南無観世音。

その名を十一面観世音菩薩いう。

人に智慧と慈悲を、諦めと意気地を、勇みと情けの花を咲かすため、地藏菩薩と毘沙門天を引き連れて創造されたその化身故に、気がつけば、欲すれば、呼びかけに応じてすぐ傍に、佇み、包み、慈悲となって、人を覆います。

それは、自分自身に自由であることの全てを、思い出させるのです。

それは、未だ私が産まれるはるか彼方、それは天と地に分かれぬその日、それは太虚といい、混沌という、光も闇もない世界。深く悠久の水に覆われた、すぐ近くの彼方のことです。

おん・まかきやるにきゃや・そわか

陽岳寺本尊十一面観世音菩薩物語

天地未だ別れざりし時、一日（いちじつ）すこぶる風吹きてそのあとに、いとど深き水の太虚（たいこ）を覆い尽くせり。奇なるかな妙なるかな、その水いと芳しき水なり。

日ならず月ならず、その香り尽きず。芳しき無尽蔵の水、その故や、如何に……？。それ無尽蔵なる花の、水の中に咲くが故なり。白くいとけなき、千枚の花びらを持つ花の、水中にゆかしく咲きぬ。太陽と月、交わりて、その花生まれいでたり。しこうして、その花より、あらゆる命、生まれ出でたり。いずこにも病（やまい）見当たらず。世はおしなべて、光と闇の入り交じりし朧（おぼろ）なる、瑠璃色の混沌なりき。

皆、ありのままに天地の間に憩いたり。

天地別れて後（のち）、世界が生まれ出でたり。世界は、時間と存在の織りなす綾にして、人々、生き死にを繰り返しながら、その花を、蓮華と呼びぬ。

諸行無常の娑婆世界。浄土は久しからず。人、思いを抱き、物を引き寄せ、いつしか「わたくし」という幻を永久（とわ）なる器と信じたり。即ち、浄土やぶれて我あり。

我が心の田に、木の櫛をさして境界を造る。

我が田にクシ。

しこうして、私生まれ、諸人（もろびと）等しく病を宿したり。私という病なり。

時に、観世音菩薩は仏に申して曰く、世尊、我に深き願う思いあり、十一面と名づく。此の心の願いは十一億の諸仏の諸説なり。我、今これを説かん。

一切の衆生をして、ことわりの法を、念ぜしめんと欲するが故に、

一切の衆生をして、行方知らぬ迷いの道を、なからしめんと欲するが故に、

一切の衆生をして、病の源を知らしめんと欲するが故に、

一切の降りかかる災いを、ひるがえ見せしめんと欲するが為の故に、

一切の横病死者の心痛を安らめんと欲するが故に、

一切のもろもろの悪心者を除きて、素直さの深奥を知らしめんと欲するが故に、

一切のもろもろの魔鬼神の降りかかる障難を除きて、起らざらしめんと欲するが故なり。

我、この世界に、もろびとの苦しみがある限り、共に歩まんと……、人の心に、悩みの種がすむ限り、深く耳を澄まして、恐れにひるむことなく共に歩むことを誓わん。すがたかたちを変えて、諸人と共に歩まんと、求める人のかたわらに立たん。

諸人の苦しみと悩みとは、生老病死・くじかれた夢・親しいものとの別れ・恐れと憎しみとの会い別れなりき。生きることは、移りかわりであり、その移り変わりの多くの要素の、一つ一つの事柄には心は無い。

しかるに、生きるためには、みな必要なものばかりであると気づきしとき、乗り越えなければならない我が身に、豊かさや実りがもたらされんと。

我ら、強くすこやかに力あるとき、みずからむち打ち、みずから励まして、自己のうちの、形なき限りなきものを求めたまえと、変わらざる源をもとめたまえと。奮い立つ心をおこさんと。

我ら、今えりごのみの心を見極め、自己の内なる愛憎、好悪を知り、ただ瑠璃色の混沌のごと、何物にも染まらず、我等の所有する一切の概念を忘れ、いかなる思いも留めようとせず、抱かず

、ただ虚心にて、ここに、立ち、座れり。

我ら、今、誠に愛憎の記憶を投げ捨てたり。苦しきは時間と存在の記憶なりと、我、まことに知れり。

観世音菩薩、頭部に深き願う思いとする、十一のしるしを掲げるは、心の根源を突き止めたあかしとして、正面の三面を、菩薩面となし、左面の三面を、怒る瞋面（しんめん）とし、右面の三面を菩薩の面にてつのと牙をだし、後ろに一面ありて、呵々大笑面と作し、頂上の一面は仏面となす。」

オン・マキャカルニキャヤ・ソワカ。 南無観世音。その名は、十一面観世音菩薩。自由自在な心と、名づけられし、観自在菩薩。

それは、未だ私が産まれる以前のはるか彼方、それは天と地に分かれぬその日、それは、太虚といい、混沌という、深く悠久の水に覆われた、すぐ近くの彼方のことです。

『御開帳綺譚（文芸春秋社刊）』玄侑宗久師著作を参考にして

尽七日忌（平成19年5月1日）

島崎藤村に、「三人の訪問者」という随筆があります。その最後は、「まだ誰か訊ねてきたような気がする。それが私の家の戸口に佇んでいるような気がする私はそれが「死」であることを感知する。おそらく私が、「季節の冬」「まずしさの貧」「人生の老」という三人の訪問者から、自分の先入主となった物の考え方の間違っていたことを教えられたように、「死」もまた思いも寄らないことを私に教えるかもしれない」と結んでいます。

戸口に立っている「死」は、けっして訪問することはありません。思いを馳せることはできますが、人生の不可思議や不思議、矛盾の気配を察する、その気配だけでよいと思います。何故なら、私たちは、生と死という事実のなかに生きているからです。

四十九日忌の法要は、亡くなられてから七日七日と七回数えて、その七日の忌明けの意味があります。そして、東京では、この頃が遺骨を自宅からお墓に納骨する習慣となっています。通夜・葬儀から続いて四十九日忌の法要は、その短い時間の長さに対して、そろそろ、訪れた死という不可解なるものを、自分自身で考え、そこからそれぞれの糧とすることで、人生に潤いを与える試みでもあるのだと、試練として考えていただきたいと思います。

昔の人は、死への旅立ちに対して、様々な道を創造しています。その代表が、まずは四十九日忌ではなかったか。もはや私の側へともどれない現身に対して、旅立つことを強いられて死者の道に歩む姿を四十九日という日数に見出したのだと考えてみました。その道は、さらに、地獄や極楽、天国へと次々に創造していったのではないかと思います。これは先人達の私たちへのメッセージとしての智慧でもあります。

平成19年3月30日のある葬儀の日、外国に出張に行って、なんとしても父の葬儀に間に合わせようと、十何時間かけて、やっとの思いで通夜の29日、飛行機の切符を手に入れ、父の葬儀に参列した喪主である、息子さんがいました。彼が飛行機に乗っている時間に、電車を乗り継いで父の元へと駆けつける時間に、生前の父の姿を思い、そこから「自分にとって父とは」と、父の死を考えていたことを話されました。

息子さんの葬儀の挨拶は、とても考えられた父の背中の話でした。その言葉を聞きながら、すぐに駆けつけられなかった彼の長い時間は、身近さゆえに、考えることもなかった父という人格を、考えさせられた時間だったことを思いました。もう見（まみ）えることができないという思いが、より身近な父にあえたのではないかと、それが死ではないかと……。

多くの亡くなられた方々の棺の中に眠る姿を見て、花に覆われた棺のふたが閉ざされることに立ち会っては、生は何処にあったのか、死は何処にあるのかと、不思議な疑問を持ちます。

そんな疑問に「棺の中に眠っている死者を指し、すぐそこに在るではないか」と、確かに死であることに違いないけれど、でもそこにあるのは、父だった死者であり、母だった死者であり、

親しいものだった死者であり、友人だった死者の姿が、冷たくなって在るように思えてなりません。

私の死にしても、私に訪れた死は、私の死ではなく、他者の死を通じて知る命の死であることから、私が経験できない、他者にとっての私の対照的な死であり、相対的な死ということです。

私の父の死、私の母の死、私の友人の死と、死とは認識ではないかと、だからこそ、その認識を確かなものにするために、通夜をして、葬儀をして、荼毘に付してと、人は、悼み、驚き、悲しみ、寂しさに包まれ敬虔に、同じことを繰り返し行ってきたのではないかと思うのです。わき起こる感情や思いすべてが死ではないかと思うのです。確かなものとするためにです。

しかし、相対的な死であっても、私が形成されている環境を思ったとき、たとえば、家族とか、父や母との関係において自分がいることを思えば、親しいものの死は、自己意識という私の一分が喪失したともいえるものです。

それは、私と他者との、あいだの、不確かなものとして、突然に、家族のここの関係の揺るがない絆のきしみや、ほころび、崩れとして現れるものでもあるのでしょうか。そのあいだの表現として、悲しみや寂しさという、立ち止まりや佇みが、決して避けるものではなく必要なのだとも思います。そして、立ち止まりや佇みのあと、歩みがうながされるのだとも思います。

「今でも、亡くなったということが信じられないのです。夫婦二人で過ごしていて、主人がいなくなり、ひとりお茶を飲んでいるとき、ふと、すぐ側に主人がいるような、ドアを開け帰って来るようです。遺品となってしまった時計が回り続けることに、生きているようで、ハンガーに吊された主人の服が寂しさを誘い、どこかで私を見ているようで」と言った、婦人がいました。人と人とのあいだとは、縁というものですが、その縁は、根拠、相即といえるものでもあり、拠り所といえればわかりやすいでしょう。だから、貴方から私へのあいだは途絶えてしまいましたが、私の貴方へのあいだは、途絶えていないのです。

決別へ誘う思考こそ、死を確かなものとするためのものです。そうしなければ、送る遺族として、迷いが生じることでしょう。死を確かなものにしなければ、残されたものが確かな足取りとして歩めないからでもあります。こう考えてみると、死は、私たちの内部にある観念だと思えてなりません。

だからこそ、亡くなったものの思い出は、つぎることなく、時間を超えて、私たちの中にわき起こり、ジレンマとなって次々に覆うのだとも思います。死は形がなく、時間的にも私たちのうかがい知れるものではありません。まして、突然に訪れてしまった死は、好きになれるものではありませんが、そうであっても、忌み嫌うものではなく、葬りさるものでもなく、わき上がる寂しさと涙の後に、考えるもののように思えます。

そして、死が遠ざかるとは、私が変わること、時間がたつこと、忘れることで、死は遠ざかってゆくように思えるのです。変わらない貴方と私のあいだとして……。

そこから、新たなあいだを形成してゆくためには、個人は消滅を繰り返すものの、決して消滅しない、断絶しない、死を超えて彼方に広がる、生命といわれるものが必要になるのだと思い

ます。

「禅は、今でも、今・ここです」。だとしたら、死も、今・ここに、あるはずですが。しかし、現実には今・この死を対象化して見ることはできません。何故というなら、私が生という物語を創造して、生きているからです。

人は巡礼のように、回帰と旅立ちの繰り返しのなかに生きているといってもよいでしょう。ここに不可解で不思議なものとして、生と死が、浮かんで参ります。そこで、生きているということを対象化し、認識し考える自己をもまた対象化し、相対的なものとして想定するとなると、認識し考える自己は、手や足を思うとおりに動かす自己と、無意識に手や足を動かす自己と、行為を強要し押さえようとする自己はすべて対象化し、相対的に考える自己となり、大きな矛盾を含んで、バラバラになることに気づくでしょう。そのバラバラの自己も、死は認識できないとすれば、実は、生を認識していると思っている自己こそ、創り上げられた自己であると思えてしかたありません。

こう考えてくると、もともと、生死という場所に居て、死を問うこと、生を問うことなどできない存在において、質問自体が成り立たないことにも気づかなければ、すべては観念の世界の、創り上げられたものとして在ると言えないでしょうか。鏡のなかの私のように。

今ここに生きている、死は、ここにある。だけれども、私の死は対象化して捉えることができない。生も対象化して捉えることはできない。そのために、残された私たちが生きるために思いつきを相対的なものとして共有し、天国を必要とし、一步一步遠ざかる階段を必要とし、生まれ変わることを必要とし、風や空、海を必要とするのではないかと思います。

また人が、個別として、単体として生きている場合を除くと、生命体という意味では、子孫が生きることににおいては、地球や宇宙までも含めて、活発な生命体内部における個別な死は、その生命体にとっては痛みであり、死はないといってもよいでしょう。その痛みは、残されたものが、生き続けなければならないという記憶でもあります。

禅で言う自己とは、生と死の、今、ここに生きているということ、その事実そのものです。禅は、私の無心の働きとして、私を超えて生の讃歌を世界に満ちあふれさせます。それが、相対的な自己や他者を創り上げないで生きる唯一の智慧だと、釈尊から伝えられたメッセージなのです。

時節と言ったとき、世界はと言ったとき、それはもう仏教を話していることなのです。

本当のこと、私は、あなた、今、全体、部分、疎外、差別、平等、対立、一、多、相即、同時、分離、同一、全体、絶対、過去、現在、未来、一瞬、今を生きる、老い、死、誕生、永遠、もっともっとほとぼしるままに、記すことができたらと思いますが、仏教の表現してきたことは、世界を表現していることなのです。世界が複雑になればなるほど、世界がネットワークで結ばれば結びほど、その表現は増します。

総ては、土と水と炎と風の中を……

この手のひらに一禅僧の死—（平成10年11月18日）

昭和46年3月初め、早朝、京都南禅寺山門の上より、左方向の眼下に『南禅寺専門道場』の藁を眺めている、私がありました。これから修行にしばらく入門の寺を下見の一人旅です。白く霜で浮き立つ砂利の参道を3人ないし4人の雲水達が、朝の托鉢へと整然と足を揃えて出立する姿は、厳格な規律を感じさせます。早朝の鋭利な刃物で切られるような景色と、門を閉ざした寺のたたずまいが、この門前に1ヶ月後に雲水の形をして立つかと思うと、不安と緊張を誘いました。この1時間は眺めていたでしょうか、鐘楼の先の潜りの門が開き、赤茶色の着流しに頭を剃り上げた年配の男が、腕を後ろに出て法堂の方角に、ゆっくりと歩いて行く姿を見ました。南虎室老師です。その姿をずっと追う私は、どんな人物だろうと思いを巡らしていましたが、その姿だけが妙に思い出に残ります。

入門しての室内で、老師の大きく見えたこと、また動じざること岩のような存在でした。最近ふと思うことがあって考えてみたことは、面と向かい合って私が老師の正面を見据えると、老師はたびたび、藐睨みのように、目玉を右前方に左に前方に向けることでした。そういえば、写真にも、そんなのがあった。どうして、正面から捕らえてくれなかったのか。不甲斐ない修行僧だった頃の、私の疑問です。

昭和58年11月18日、午後1時15分、京都は南禅寺僧堂の隠寮、一階は東南の廊下で、南禅寺派管長で南禅寺専門道場の師家である、勝平宗徹老師（室名・南虎室）が首をつって死んでいるのが発見された。61歳でした。

修行の道場を出て、五年ぐらいたった頃だ。その頃の深川の陽岳寺は、困窮してはいなかったが、住職である父が元気で、僧侶二人はいらず、私はサラリーマンとなって、銀座の会社に勤めておりました。経理・財務・企画の責任者として、若かったのですが仕事は忙しく、いつも帰宅は夜遅かった。会社の緊迫とした中で過ごすうちに、いつしか人相も変わっていたのでしょうか、東京は高輪のホテルで修行仲間の会が催されたときがありました。老師から「人相が変わったな」と、久しぶりの対面で言われた言葉が妙に心に残っております。

髪を伸ばして、朝から深夜までの仕事は、自分を振り返る余裕もなく、僧堂の生活を何だったのかと問う言葉もなかったのだと反省いたしました。勤めている限りは、今日は昨日の続きで、明日に仕事を残す毎日でした。それでも、老師の言葉がどこか頭の隅に引っかかっていたことは事実でした。

その会があっても、相変わらず私は勤め人で、以前よりも忙しく、常に気をはっていなければならない毎日が続けておりました。

サラリーマン時代を通して、ずっと思っていた事は、私の仕事の取り組み方は、僧堂生活を絶えぬいたという自信が、作り上げたものであるということでした。気力の充実の仕方と自分の行為と責任の取り方。知らない知識や分野への挑戦の意欲。力の抜き方。一人で違った組織に合流する溶け込み方。資金の取立てによる裁判と強制執行。

会社の設立と滅失作業に、従業員解雇後の転職斡旋問題。親会社への決算説明会や大勢の新規職員に対する訓練。東洋一の大規模ショッピングセンターの開設準備作業と軌道に乗せるまでの管理運営業務。サラリーマンの最後は、そのショッピングセンターのデパート、テナント、資産管理会社の固定資産と償却資産の金額確定分離計算とテナント、デパート、税務署との折衝による資産税の確定の仕事でした。ほとんど総て一人で問題をくぐりぬけてこられたのも、総ては僧堂生活に端を発しているのではないかと思っております。断っておきますが、僧堂は何も教えてくれないことに徹します。総ては、自分の目で見て、考えてを基本としながら、昔からの通りとなって、淡々と日々が過ぎ去って行きます。ただし、人を助けるゆとりはありません。自分の限界の所で、生きて行く以外に、私の道はありませんでした。

そんなサラリーマン時代を終えて、私は寺の次代を担うため再び頭を剃ることになりました。昭和57年2月頃のことでした。修行を辞めてから10年という時間は、すっかり僧侶としての作法や振舞いの勘を狂わせておりましたが、寺での日常が少しずつ取り戻しながら禅録や思想書を読みふけるようになったのも、その頃からです。

昭和58年11月18日、夜のテレビニュースで、京都南禅寺管長勝平宗徹老師の自殺の一報が流れまし。死んだということより、自殺で、しかも首吊りという、絶対と言って良いほど似合わない死に方は、ニュース画面の普段では絶対に映像にならない、僧堂の雲水があわただしく動く映像に、遠い別世界のこのように見えました。

私は勤めていた関係で、その頃、僧堂との縁は全く希薄になっていて、修行仲間と僧堂の往來の話を聞くにつけ、懐かしく復縁を思っていたところでした。

やがて、日が立つと新聞や週刊誌、業界紙が記事を、書きはじめました。私は、集め読みしました。

「何が、あったのだろうか」、「どうして」と、記事を探しました。

僧堂を出て、音信を絶ってより10年もたつと、道場にいる雲水もがらりとかわって、同期の雲水二人に連絡しても、「どうも、うつ病だったらしいよ」との収穫話だけです。

中外日報新聞の話です。

昭和58年春、中興本光国師350年の遠諱が大々的に行われた。5月頃「目が赤いですよ」と言われ血圧を測ったところ、上が200にも達したという。その時は医師の薬で一応、血圧も平常に服したが、7月頃から、やはり普通ではなくなった。9月10日、松江の寺に帰り、9月16日松江日赤で急性肝炎と診断され直ちに入院した。10月3日、MとKが見舞いに行った。入

院中の管長は顔色が白くなり、ふっくらと健康そうに見えたという。目方も五キロほど増えて「これなら大丈夫」とMを安心させた。その後、「10月20日に退院し、28日に上山する」という連絡が本山に入った。ところが10月20日すぎ僧堂補佐員Tが見舞いに行き「あまり急いでは良くない、もっと養生して欲しい」と忠告して28日の上山は取り消された。僧堂の開講式を遅らせて、11月13日、管長は帰山した。「松江での管長さんと、帰られてからの管長さんの顔色があまりにも違っていたので驚いた。ふっくらと色白であった顔が、大分やつれて、色も黒っぽく見えた」とKは言う。15日に開講式を行ったが、いつもなら30分ぐらいのところを、1時間かけて講じた。

週間文春の記事です。

勝平師は午前中、道場1階で講義をし、そのあと11時から昼食をとったあと、2階の居室で一人で牛乳を飲んでいました。そのあと午後1時過ぎ、世話をする雲水が、午後の講義に出る予定の管長が来ないというので様子を見に行ったら、一階の廊下で首をつって自殺していたらしい。大正11年8月、島根県平田市で生まれた勝平師は、旧制松江高校を卒業。旧海軍飛行予備学生となり、さらに昭和24年、東京大学文学部東洋史学科を卒業。大学院で学んだ後、26年南禅寺に入った。

週間朝日の記事です。

9月、本山の用務で九州を旅行中、倒れた。松江市に帰り、9月14日、日赤病院で初めての入院生活を送った。10月20日退院。自坊で静養の後、11月13日、本山に帰った。「15日から始まった大接心では雲水を相手に堂々とした声で提唱された」という。だが帰山した管長の姿は痛々しく、3ヶ月ほどでゲツソリやつれていた。9月に入院してから、鬱てきな状態が続いていたという。

週間新潮の記事に18日の事が書いてある。

関西のK百貨店Wが電話しているのだ。11月18日、午前9時ごろのことだった。「いろいろお世話になりました。ご病気のほうはいかがですか。といたしますと。”まあまあ治って、お勤めさせてもらってます”というご返事なので、これからすぐにお伺いして、お目に掛かりたいのですがと申し上げますと、”実は今、大接心に入っていて、外部の人とは会えないんでね”、とのことで、”でも22日には一段落しますから、そのときに会いましょう”という約束を頂いて電話を切ったのです。それから4時間後に、ああいうことになってしまったのですから」

松江の赤十字病院の副院長の話「松江に帰っておられたとき、急に黄疸がでて食事がすすまないということで入院されたのですが、軽い黄疸で、経過は順調だったのです。まあ、ごく普通の肝炎でして、私も長い間、内科の医師をやってますけど、あの程度の病気で世をはかなむ、なんてことは考えられません」

自殺当時の識者の感想の新聞を読んで、（中外日報・読売新聞・週間文春・週間朝日・週間新潮・京都新聞）

①受け止める

竹田 益州 故建仁寺派管長

常住不変ということは願わしいことであるが、手に入れることは難しい。これが手に入っても入らなくても、努力するのが坐禅で、老師がその中心になって、やって頂いている。管長さんが、自分の責務が果たせるか、果たせないか自分で知っていただけるわけで、勿論、果たせたんですけども、もっと生きて欲しかった。

古田 紹欽 松ヶ丘文庫長

個人の自由な考え方をその人の位置付けの上において、何かということをおはかんがえたくないし、言いたくもない。人それぞれの生き方というものはその人自身にある。私は老師をよく知っていたから、その心中がわかるような気がする。

武邑 尚邦 本願寺派勸学寮員

仏道修行によっても解決することのできない人間の弱さというものをつくづく考えさせられた。

青山 俊薫師 曹洞宗愛知専門尼僧堂々長

勝平管長の死は、行も悟りも無常、”今”を問うことが大事、ウカウカするなど、という”提唱”と受け止めさせて頂いています。

雲井 昭善 仏教大学教授

だが、釈尊も、成道してから後でも、肉体的苦痛は、肉体があるかぎり味わってる。このへんは、別にして考えないといけないと思う。

壬生 滋雄 臨済宗永源寺派宗務総長

勝平さんは死を以って応えられた。それも一つの行き方ではなかったか。

今岡信一良 日本自由宗教連盟

”捨て果てて身は無きものと思えども、雪の降る日は寒くこそあれ”と禅僧の言葉もありますが、いろんな事情があったんだろうと思いますが、自殺しちゃいけないという事はないのではないかと、そういうふうに考えています。

中村 尚志 取手市医師会病院長

この事件によって、勝平師の人間性について云々すべき事でもないと思います。とにかくこの事件は宗教とは切り離して考えるべきだと思います。心安らかな境地を獲得し、それで持続させるにも、心と身体が健康であると言う平凡な、しかも大事な教訓を得ました。

匿名師家 京都臨濟宗僧堂

そもそも、禅僧だからといって安然と死ぬると思うのは錯覚だ。僧堂の老師というものは、孤独なもので、僧堂に閉じ込めて慰める人もいない。

②否定する

横井 邦一 円覚寺派宗務総長

世間で言う自殺と同じように扱われると場所柄、道場ですからまことに遺憾のきわみです。新聞報道のような形の上で見ると限るは、はなはだ遺憾なことで困ったことだということは事実です。

福井 康順 元大正大学長

仏教界にとってあり難いことではない。

埴 瑞比古 笠間稻荷神社宮司

私の場合は、どうにも苦しい時は神前で祈願をこめて、心の安らぎを得てきました。これからも一貫してこの姿勢はかわらないでしょう。

二葉 憲香 京都女子学園長

私には死者を批判や批評のしようがない。真宗では、敢えて早く死ぬということはでてこない。

花山 勝友 武蔵野女子大学教授

一言で言うと恥ずかしいです。仏教全体の立場から見ると、擁護するのはマイナスだと思うので、あえて言わせて頂いた。

勝又 俊教 大正大学前学長

最後まで生きてほしかった。宗教者は人の先達であるという意味で残念だ。

道端 良秀 日中友好仏教協会々長

勝平さんは禅者であるが煩惱が多い人間であるということが感じられる。どれだけ修行しようとも、どうにもならないというのを感じます。これからも、もっと働いてもらいたかった。

田中 恒清 神道青年全国協議会々長

完璧さを追求しすぎたのではないか。それにしても、なんともやり切れない思いでいっぱいだ。

山中 長悦 ポックリ寺浄土宗吉田寺住職

病気になって、その責を果たすことが出来なければ、適当な人にその職をゆずり、医学に救いを求め、心の悩みは仏の慈悲にすがる。お気の毒にたえない。

奈良の中堅有名寺院の若手住職のリーダー

どんな理由があるにせよ、ああいう死を選ぶべきではなかった。

池山一切圓 天台宗生源寺輪番

私は自殺を肯定したり、自殺を勧めるものではありませんが、我々は一般の方に「命懸けで生きよ」と言っていますが、まさに命を賭けたことになります。

佐伯 真光 相模工業大学教授

あの方は”うつ病”だったと聞いています。むしろ、お付の人が気づいて休ませてあげるとか、それについて対処すべきだったと思います。

篠原 大雄老師 永源寺僧堂師家

本当のところは、本人自身にしか解りませんし、あるいは本人にもわからないままなのかも知れません。とにかく、生きていてこそです。

安齋 伸 上智大学教授

キリスト教では、自殺を悪で罪だと徹底して説いている。

那須 政隆 真言宗智山派元管長

外からの安易な批判は慎みたい思うと同時に心から同情申し上げたい。なぜ同情というような言葉を吐くかといえば、やはり生命を断つことは、人生にとってあまりいいことではないからです。

宮崎 蛮保 永平寺監院

仏家の一大事因縁は生死の問題を明らめるということだ。ところがその人が生死に使われておる。結局は頭の間人なんだ。師匠の老醜をうまくカバーする弟子を作っておかなきゃいかん。わしも死ぬ時には、うまいこと死にたいけど、どないになるやらわからん。生きとるうちに信心を積んどくことだ。それには願を立てること。願は叶うんだから。常に、こうあるようにと願っておることだ。願いは必ず叶えられるんだからね。

高田 亘 車折神社宮司

病気を苦にしていた、と仄聞している。自ら死を選ぶくらいならば、ほかに何らかの解決法があったのではないかと、同じ宗教者として思う次第である。

寺内 大吉

知育偏重の行き詰まり、そのもろさが仏教会にも出てきたと言えるのではないかと。

③解らない

加藤 太信 新義真言宗管長

理屈をつけようと思えば出きるが、何とも言いようがない。病のしからしむるところじゃないかと思う。

鈴木 宗忠老師 妙心寺派龍沢僧堂師家
騒いだら仏様に気の毒だ。

横超 慧日 大谷大学名誉教授
私どもが人間である以上、悩むことはあるわけです。軽くものを言うような方ではなかったという印象を持っています。

渡部 宝陽 立正大学仏教学部長
そういうところに批判, 批評をする方を、逆にうらやましく思います。孤独の世界を求めていくということは大変なことですから。

田村 克喜 筥崎宮宮司
みんな耐えて生きていく。どうしてもわかりません。私には、この問題は難しい。

西谷 敬治 西洋哲学者
非常に意外で判断がつかない。ただ、原因なしで起こるということはないから、何か原因があったはずだ。それが何かわからないが、そのうちにわかるかもしれない、と言うほかはない。

立花 大亀 元花園大学長
禅僧の生とか死とかいう問題ではないと思う。そっとしておいて、冥福を祈りたい。

当時の記事を改めて読んでみて、上記に掲載した元学園長ともあろう人が、週刊誌では全く正反対のことを言いながら、ふざけてみたり、祇園でもっと遊んでいたほうが良かったという現在東北方面の僧堂老師がいたり、仏教会は多士済々だ。

当時の事を振り返ってみて、新聞紙上に老師の会下の者が、意見を発している新聞がなかったのは、寂しく思う。

老師は自分がうつ病にかかっていたのを、何人かに確かめていたことが、ここには記さないが、週刊新潮に書いてあった。老師はうつ病に、かかっていたのだ。

昔、父が亡くなった後の日記を、読んだことが言葉を思い出します。年をとって来て、パーキンソン症候群の病魔に侵されたとき、じっと今の自分を見つめて、「断崖から突き落とされた気がする」と。この先に自分がどうなって行くのか、その予感を想像したとき、呪ったかもしれない。幸い、父は脳が侵されて意識が不明の状態になったおかげで、私達は救われたが、意識がはっきりと内向して、緊急に分裂を起こすであろう自分と、投げ出すことが出来ない立場に立ったとしたならば。

自分と違う意識が襲い掛かり、自分のコントロールがつかない状態が、愛する雲水の前で出現したとしならば。

運転手の居ない車はどこに行くのか不安な状態に違いなく、しかもそれは突然来るとしたならば。

竹田益州老師が言っていたが、「出雲の人は正直です。素直で、実に人間としても真面目です」と。まじめすぎてそんなボロボロの状態、引くに引けず、相談する相手もいなく、休む間もない大接心に挑まなければならない。ボロボロにさせたのは、老師自らであると同時に、無責任な、「老師！老師！」と書き物をねだり媚びへつらう、派内の、弟子達の我々だったのかもしれない。

自殺は、どんな場合でも、それにかかわる人にとっては、何らかのメッセージがあるはずです。自分は自殺はしないが、あるいはしたくないがと言っても、そうになってしまうことは、無いとはいえない。仮になっても、死んでから悔い改める訳にはいかないのが現実ですが。理解できないのは、メッセージを受け取れないだけであり、それは、その人を知らないからだと思うのです。

自殺は罪だと人を非難しておいて、聖職者が葬儀の儀式において、神や仏に自殺者の許しを請い、許してもらうにも、自分のうちに罪を非難しておいて、その橋渡しをするに、人を愛し、人を罪もろともに受け入れる心が無ければ、矛盾を感じます。総てを承知の知力、知識、知恵、胆力、忍耐を持った人が、突然自殺してしまったのです。その事実だけが真実であり、それからは都合に過ぎない問題です。

老師の近くに居たならば、ひょっとして何かわかったかもしれないが、優秀な雲水が周りに居て、何も出てこなかったのは、弟子達共通な問題を、投げかけてくれたのだと、今は思います。人間勝平宗徹老師は、結果として存在を賭けて、そのものを我々一人一人に残してくれた。

修行中、問題意識が起きず、いつも怒られていた私。老師は、「こうした問題を出すんだ」と、そっと紙に書いてくれた。その問題を、切実に取り組めない年齢と幼さだったのかもしれない。扉の外の賑やかさや静けさがいつも気になっていた私でもあった。

自殺した老師から、眼には見えない様々なものの種を、植えていただいた私にとって、今、一番願うことは、『一目でも言いから、会いたい』、ただそれだけです。

南虎室老師祥月命日に向けて

戒（平成10年7月25日）

仏教本来の生き方を考えてみると、一人一人の生き方といったこの時点で、すでに本来の生き方では無くなってしまふことではあるのですが、すべてにおいて自由という標榜を掲げている以上、実に捕らえどころも無いものになってしまいます。またそのことは、それぞれにとって一つ一つ意味、価値観がちがっていても、自由においては普遍性を持つとも言えます。それゆえに、仏教にとって守らなければならないものとは、一体なにか？

秋月龍珉師は著作集”空の詩”において「戒とは、我とみずから誓って我が生活を規制すること」と言い、その目的は”調心”すなわち”心を坐らせる”と言います。ところが、このことは仏教以前のことであり、智慧の完成において、般若が動き出すところからが真の仏教の実践なのではないかと考えます。絶観論（初期禅宗史上貴重な敦煌出土文献にこの菩提達磨絶観論がある。その中で戒律について論じている部分があったので列挙してみる。訳は禅文化研究所編絶観論による）に、興味深い問答があります。

殺 「いったい、ものの生命をとることのできる条件がありますか」

「野火は山をもやし、暴風は樹木をさき、くずれた崖はけものをおしつぶし、洪水は虫をおぼらせる。きみの心がこれと同じなら、人だって殺すことができる。もし、とまどいの心があって、生命を意識し殺傷を意識し、心の中に吹き切れないものが有る限り、たとえ蟻一匹でも、君の生命をしばりあげるのだ」

盗 「いったい、ものを盗むことのできる条件がありますか」

「蜂は水面の花をつみ、雀は畑の葉をつつき、牛は水辺の豆をくい、馬は田の稲をかむ。どこまでも、他のものという考えを起さねば、他人の山だってとりあげることができる。さもなければ、たとえ針の先ほどの細い葉でも、きみのくびに紐をつけて奴隷にする」

姪 「いったい、姪をおもいのままにする条件がありますか」

「天は地におっかぶさり、陽は陰にあわさり、便所は上の汚物をうけ、ふんすいは溝にそそぐ。きみの心がこれと同じなら、あらゆる行動は何のさまたげもない。もし胸中に分別の念をおこすなら、たとえ自分の妻でも、君の心を汚す」

嘘 「いったい、嘘言をいうことのできる条件がありますか」

「ものを言っても主体がなく、しゃべっても心がなく、声は鐘になるのにおなじく、ものいう息は風の音に似ている。きみの心がこれと同じなら、ブッダとよんでも何も存在しない。さもなければ、たとえ念仏しても、嘘言である」

酒 「ある人は酒を飲み、肉をくい、五つの欲望のすべてを満たしています。ブッダのおしえを行ずる資格があるでしょうか」

「心すら存在しないのに、何人がよしあしを定めるのだ」

人を真の自由に導く仏教において、仏教徒となるに当たっての束縛の網に掛ける戒律があるのが面白い。中国で達磨から六番目の恵能禅師の『六祖壇経』は、戒壇においての無相心地戒を授ける説法である。

一つ 自らの清浄法身仏に帰依します。（大日如来）

人は生まれながらにして本来清浄と同時に耀いている、またそのことはあらゆる存在が自己の本性のうちにあることであり、そのことに反する行為は一切つつしみとしたい。

二つ 自らの千百億化身仏に帰依します。（釈迦如来）

人は自分を見失って迷路に入るとき、本性の変化をきづかない。一瞬の本来清浄の耀きが智慧を生むとき、また耀きのままに自ら照らすことを、これを本性の化身と言ひ、これに反する一切の行為はつつしみとしたい。

三つ 自らの当来円満報身仏に帰依します。（彌勒菩薩）

一瞬の本来清浄の耀きが、自らの過去のあるいは現在の闇を照らすことを報身と言ひ、自ら目覚め自ら修めます。これに反する一切の行為はつつしみとした。

四つの聖願

禅の説く気づきや目覚めという、人本来のかがやきの心が、自分のすべてに目覚めるように。

禅の説く気づきや目覚めという、人本来のかがやきの心が、自己の虚偽を払いのけるように。

禅の説く気づきや目覚めという、人本来のかがやきの心が、自己に限りなく時を越えて包まれるように。

禅の説く気づきや目覚めという、人本来のかがやきの心が、いつも心を謙虚に保って、すべてを敬う。

懺悔

過去の心、未来の心、現在の心が自己が、本来の自己で有り続けることを知ることが真の告白であり、懺とは死ぬまでそのことを守りぬくこと。悔とはこれまでの過ちを知ることである。

無相の三帰依戒

自己のうちの一瞬一瞬の本性の耀きの目覚めに、帰依いたします。

自己のうちの一瞬一瞬の本性の耀きの喜びに、帰依いたします。

自己のうちの一瞬一瞬の本性の耀きの汚れなさに、帰依いたします。

幽霊

私が小学生の小さかった頃、西八王子はいたる所に原っぱがあった。遊び場所はその原っぱであり、民家の庭であり、垣根越しに庭は続いていたので、家々の庭を通り抜けることで、遠くに行くことが出来た。それは獣道ではなく、子どもだけの遠慮のない抜け道であり、お寺のお墓に通じていた。

薄暗いお墓で遊んだ記憶があるが、お化けや幽霊のことに関しては記憶がないので、いまだ怖いものを知らない、ただ暗くなるまで一杯遊ぶ年齢だったのだろう。そこには大きな櫓があって、真夏、素手で登って蝉を手づかみで取った記憶がある。

「お父さん！幽霊っているの？」と、私の次男から小学校三年の夏、聞かれたことがあった。

「裕斗は見たことがあるの？お父さんは見たことがないので、わからないよ！ただお寺だからといって、お化けが出るとはかぎらないよ！お父さんは毎日、お墓や境内をきれいに掃除しているから、お墓に眠る亡くなった方々は、感謝はするけれど、恨んで悪さをするとは思えないよ！第一お父さんがいなければ皆困ってしまうもの！一人一人皆よく知っている人達であり、思い出せばすぐに、笑顔や姿を思い出す人達が、お墓にはたくさん眠っているからね！」

「ふーん、恐くないんだ！」と、次男は真剣に感心していた。

陽岳寺の門前は交通量の多い交差点で、年に数回交差点の何処かで必ず事故がある。人が亡くなったという事故は記憶にないが、トラックや乗用車に跳ねられ轢かれたり、ガードレールや電柱に車がぶつかるという事故は以外と多い。今年の五月末日、どこかの御婆さんが大きなトラックに轢かれるという事故があった。今この事故を目撃した人を捜す警察の立て看板が立っているが、轢かれた付近に花も置いてないし、そんな噂もないので無事なんだろうと思われる。

この文章の幽霊というテーマを書くに当たって、もし亡くなっていたとしたら、幽霊となって交差点に立つのだろうか、妙なことを考えてしまった。そしてこんなことを思った。

昔から日本の幽霊には足がない。足がないと言うことは、自分で移動することが出来ないと理解できる。つまり移動するには、何者かに憑依することが必要なことのように思われるのです。しかし、憑依するといっても、自力で取りつくことができれば、それは自力で移動することが出来ることであり、足がないという象徴的な幽霊にはそぐわないことです。このことは、過去の日本人の意識と深くかかわっているように思える。私が知る限りでは、外国の幽霊は足があって、自分で歩けるからです。

やはり取りつくには、取りつかせる者のなかに、その条件を持っていないかならないと思うのです。幽霊が怖いという意識には、すでに幽霊が巣くっているといっても良いでしょう。お化け

が出ると思ったら、お化けが出る準備はすでに、その人のうちに出来ているということなのでしょう。

「お化けは本当に居るのだろうか？」という問いに、私は見たことがないので答えられないが、人として恨み、辛み、想いを達せられずに亡くなった方はたくさんいたはずだから、それらのものを受け取る人にとっては、お化けは怨念として常に存在することなのでしょう。このことは人間の善悪、良心の問題を含んでとても大切なことだと思います。しかし、存在というと禅の冷暖自知の原則からいって、触れなくては事実と言えないわけですから、人の創造した、幻とも言えるわけです。

最近の子ども達のマンガや映画、テレビドラマには、足のあるお化けがたくさん出てくるようになってきました。それは時にロボットだったり怪獣だったりするようです。町を壊し、人を傷つけるお化けは完全に存在する身体であり、子ども達も待ち望んでいる姿で現れ、ヒーローが退治するのです。 足を持つと言うことは、目的を持つことであり、血を吸わなければ生きて行けないドラキュラのように、擬人化したお化けは、目的遂行の為に生きる為に彼らの任務を、あのエイリアンのように遂行しなければならないのです。我々の知らない世界には存在するかもしれない、未来にはこういうこともあるかもしれないと、せっせと想像力を働かせて、それを楽しむ人間の、「怖いもの見たさ」の欲望には限りがない。

しかし、このことが現実起きるかもしれないと思えば、いずれは存在することになり、事実として成り立って行くことになってしまうことを考えれば、お化けは創造のすえ、存在することになる。まして、ドラキュラの求める他人の血を、お金や資産に代えてみれば、人間そのものとなって、現実の人間の姿そのものと言えるからです。時代が変化する限り、お化けは姿を代えて人を襲う。これは、もはや私の考える良き幽霊の範疇を超える。

やはり、幽霊は怨念を抱きながらも、現実の空間に漂いながら、自らは何も出来ずにいる姿こそ、痛ましさを感ずることができると思うのです。晴らすことの出来ない怨念を抱きながら漂う幽霊を、目をこすって、はっと我に返ったとき恐怖を覚える幽霊の、脳裏に焼き付く姿こそ、それぞれの人の過去の真実の姿であり、幽霊を吊うには、我々自らの改心が必要なことです。

みんな仏教徒（平成10年5月27日）

私がまだ八王子に住んでいて小さかった頃、母は父方の寺の墓参りに深川の陽岳寺に連れていってくれたものでした。まだ地下鉄の東西線もない頃でした。国鉄の中央線で東京駅に着くまで、子供の頃の記憶はとても長かった。茶色の古ぼけた電車で酔って気持ちが悪かったり、そのため御茶ノ水の堀の景色を見るために、座席に膝で座り、土で汚れた運動靴が隣に座っている人のズボンやスカートを汚して、母に小声でしかられたものです。東京駅からチンチン電車に乗り換え、ガタンガタンと石畳の上を走って、ガチャンと門前仲町駅の次の駅が深川の停車場だ。目の前にある寺が、陽岳寺だった。

今からもう四十年も前のことなのだが、今思うと深川の寺の住職になっていようとは感慨深いものがある。たしか？現在の赤札堂は映画館だった。もちろん首都高速九号線は、油堀という運河だった。寺や神社は今も変りなく、元の場所にあるが商店街は様変わりだ。母や父は、よくお不動様や八幡様にお参りしたものだ。今でも一日十五日は八幡様、二十八日はお不動様に縁日でにぎやかだが、昔もそうだった。このにぎやかさが、みょうに楽しく、もっとも親と一緒に歩いて行けば何か買ってもらえるという下心もあったのだが、人ごみの中を親と手をつないで歩くことがうれしかった。今、自分の子供に同じことをしていると思うと、人は繰り返しながら少しずつ微妙にあるいは急に時代は変わって行くのだなと思うのです。

今はあまり言わなくなったが、このお参りを”信心”と云いました。お賽銭を投げて、何かしらのお願いやお礼をまた報告を心の中でつぶやくのだ。誰も願いがかなわないからと言って、文句を言う人はいない。

さて、私が修行から帰ってきて陽岳寺の住職になってより、二十年がたとうとするのだが、情けない話だがこの”信心”という言葉が、なかなか言葉に表現することができなかった。形式として、習慣としてのお参りは日々欠かさない毎日なのだが、日常の中に埋没してしまった言葉を、掘り起こすという作業を試みてみた。その前に、仏教徒という言葉の意味をあらためて考えてみた。仏教の基本的な言葉としての”空”と”縁起”は、信じるという言葉以前に、実は世界や物事の成り立ちを説く言葉であると気がついてより、誰もが仏教徒としての自覚さえあれば、仏教徒なのだと思うようになったのです。

私流に云えば、『仏教徒とは因果の理を信ずる人』という意味で、因果は縁起と同意味の言葉です。禅では「一滴の水も大きな川や海を支える一滴の水であり、一塵の動きも世界の全体が関係している」と云います。大海を見てそれが一滴の水の集まりであることを知ると同時に、朝露の一滴の水は大海を代表する尊く愛しい一滴の水であるわけです。

一滴の水を「私」に譬え、「友達」に譬えてみると大海は世界となり自然・環境・宇宙になります。かけがえのない私と同時に、私は世界を支える一滴の水になります。個々のものはすべてが連鎖していると同時に、個はあくまでも個であることの認識が大切です。この意味から自立と共生は表裏一体、同時に支えあっています。禅では”同時”を”即”と言い換えて使いますが、同時が非常に大切です。片寄ったものの見方を矯正する働きがあります。同時はまた中道をも意味することになります。眼には見えませんが、世界中の人々は実は全員手と手を取り合って輪を結んでいることになります。ただ私達にはなかなかそれが見えないのが、また実感できないのが残念なのですが。「私にはまだ真実が見えないけれども、このことは理解できる」 あなたは、真正銘の仏教とです。

赤ちゃんが泣くのも何かの理由があって泣くのであり、勝手に泣いている訳ではありません。これを因果と言い、正しくは因縁果といいます。仏教徒になられたからと言って、他の教えはだめだというのではなく、神社や教会にて頭を下げたりお話を聞く、手を合わせることも大切なことであるでしょう。自然な気持ちで接することが大切です。人が大切に思っているものを、自分の心得違いの考えで排除するのは良くありません。

縁起に随うことのまっただ中に真の自由を見つけ、自分の生き甲斐、目的を行ずることこそ必要なことであると思います。これを”信心”と云います。お不動さんや八幡様で見かける、”信心”と別のものではありませんでした。禅ではよく、不昧因果、不落因果と百丈野狐にて問題にいたしますが、因果を”くらまさず”と云います。縁起の世界において、すべての人の行為は、縁起を免れるものではありません。自ら躊躇せず飛び込むことの中に真の自由になりきった自己を発見できれば、そこに自由人としての私が存在します。

その”私”は、鎌倉時代の栄西禅師の興禅護国論、序に有ります。「大いなる、心や。天の高きは極むべからず、しかるに心は天の上に出づ。地の厚き測るべからず、しかるに心は地の下に出づ。日月の光はこゆべからず、しかるに心は、日月光明の表に出づ。大千沙界は極むべからず、しかるに心は大千沙界の外に出づ。それ太虚か、それ元氣か、心はすなはち太虚を包んで、元氣を孕むものなり。天地は我れを待つて覆載し、日月は我れを待つて運行し、四時は我れを待つて変化し、万物は我れを待つて発生す。大なる哉、心や。」

元氣とは心と一体にして、つまらない自分、不愉快な自分、悲しい自分、愉快的自分これらすべて元氣のなせる技にして、自分の中の主”元氣玉”の姿・形を変えた姿です。この自分の中の元氣玉を自由自在に扱えることができ、元氣玉と一つになったとき、ここに自由があります。くれぐれも運命とか因縁と言ってあきらめるという意味ではありませんので注意が必要です。

最後の晩餐（平成10年5月23日）

平成九年の暮れですが、テレビのニュースステーションの番組で「もし明日あなたが死ぬとしたならば、命の火が消えるとしたならば、今日、最後の晩餐として何を食べたいと思いますか？」という内容の報道がありました。

私が見たのは、仲代達也と樹木きりんという俳優が出演した番組でした。仲代達也氏は、ちょうど九州公演の最中だったらしくて、福岡の河豚屋(ふぐや)さんで、カウンターに河豚刺しや鍋をおいしそうに並べてニュースキャスターとお話をしながら日本酒を飲みながら芝居の話や、自らの劇団の話などを淡々と語り合っていました。

樹木きりんさんの場合はまず場所が意表を突いておりました。それはここ陽岳寺と同じ宗派だったこともあるのですが、麻布にあります光林寺という寺の本堂の縁側にお茶とお菓子での対談になっておりました。もし明日命がないとしたら、「……………食事を頂く必要がないでしょう」との内容で、墓地を取得したいきさつなどを語り合っていました。

もし明日あなたの命がないとしたならば……………。現実にこのような企画の内容を考えたこともなく、一見無意味な内容でいて実はとても示唆ある内容で、ハッといたしました。修行から帰ってきて20年以上もたつのですが、修行の道場で三度の食事をいただく前に読むお経なかに、五観(ごかん)の偈(げ)があります。

一つには功(こう)の多少(たしょう)を計(はかり)、彼(か)の来処(らいしょ)を量(はかる)。

(この食卓にいたる食べ物の過程を思い、感謝して頂きます)

二つには己(おのれ)が徳行(とくぎょう)の全闕(ぜんけつ)を 忖(はか)って供(く)に応(おう)ず。

(自分自身の徳のいたらなさを深く自省して頂きます)

三つには心(しん)を防ぎ、過貪等(とがとんとう)を離るるを宗(しゅう)とす。

(心を静めて、むさぼりを戒めます)

四つには正(まさ)に良薬(りょうやく)を事(こと)とするは、形枯(ぎょうこ)を療(りょう)ぜんがためなり。

(私の心と体に必要な量だけ頂きます)

五つには道業(どうぎょう)を成(じょう)ぜんがために、将(まさ)にこの食(じき)を受(う)くべし。

(私のめざす道の完成を成し遂げるために頂きます)

何度となく繰り返し唱えたお経の内容を鮮明に慚愧さとともに思い出しました。「四つには正(まさ)に良薬(りょうやく)を事(こと)とするは、形枯(ぎょうこ)を療(りょう)ぜんがためなり」通夜、葬儀、法事と人の死にからんだ行事には、不思議と酒とご馳走が盛りだくさんに供され出

てまいります。

それはまだ幼稚園の頃だったろうか、親戚に不幸が続いたことがあった。火葬場で真っ赤に焼かれたお骨の熱気に恐怖をおぼえ、母の胸に取りつき、真っ赤に耐える故人を「すごいね。強いんだね」という私を、母はあまり不幸が続く物だから連れていくことを躊躇したそうである。私は、普段食べられないご馳走が食べられるのと、大人達がお酒を飲んでかもし出す別世界を恐さと好奇心で見るのが面白かったのを何故か今でも記憶に鮮明に あります。また、そのことを思い出すと、不思議に成人して小料理屋の水で打たれた入り口の盛り塩を妙に思い出します。

葬儀や法事・祭礼が” 聖” や” 死” ” 安らぎの世界” の場所としたならば、そのあとのご馳走は” 俗” や” 生” ” 安らぎに反する世界” の場所になるに違いない。儀式とは死者の御霊の鎮めと追悼儀礼と同時に生者の誓いというのか、今を生きる人々のためにあるのだなとあらためて思いました。

明日死に行く人は、食事を食べたくとも食べることができないのです。明日も今の生の延長として生き続けるだろう人は、明日生きるために今日の食事を頂きます。それが、死んでいった人の命を生かすことに繋がると思うのです。

禅問答（平成10年5月31日）

嘘つきのパラドックスといわれるものがある。「私が今言っていることは嘘である」という命題は、真か偽かと問われたとき、内容が正しければ、命題は偽になり、言っていることが嘘であれば、命題が真になるというパラドックスである。

G・ベイトソンの”精神の生態学”に、”ダブル・バインド（拘束）”があります。「私の言うことに、従うな！」という命令です。命令を受け入れ私に従えば、結果従う事をゆるさず、従わなければ従った事になってしまう。この問題は、我々自身の生活の中で厄介な問題をひきおこします。子供への愛情に深刻に悩んでいる母親が、子供がまとわりつくのに絶えられず、「向こうで遊びなさい」とやさしく抱きしめ諭すとする。子供にとって見れば母親の心理は理解されずに、やさしく引きつった顔での自分を避ける姿が母親の愛情表現として、日常生活の中で蓄積されていったとしたら、親子関係はどうなってしまうのだろうか。実は、考えてみれば、社会構造の中にもこのパラドックスはいたるところにあると思います。

さて、ダブル・マインドに話をもどしますが、このことの真偽は不明ですので、結果は想像していただきますより仕方ありません。

まず、犬に正確な円と楕円を見せて、円と楕円が判断できれば、餌を与えたそうです。もちろん判断し識別ができなければショックという虐待を与えます。犬がショックを拒否したいことに異論はありませんでしょう。犬はこ実験が始まる事は”ご飯ですよー”と喜び、実験に参加したか解りませんが、問題は楕円を限りなく正確な円に近づけた時に起こりました。結果は発狂したそうです。そのときの詳細な犬の様子はかかれていませんでしたが、かわいそうに発狂したそうです。

このことを知ったのは、もう15年以上ぐらい前だったと思うのですが、週刊読売の記事だったと思います。禅の問答を直感いたしました。それと同時に我々日常の中に、かず限りなくある問題をおもいました。

「前後左右にあなたは行っては行けません。もちろん斜め、上下はだめです。つまり、あなたはどちらの方向にも行けません。さらにじっとそこに止まることもいけません」「さあ、進め！」と言われたときに、自分の行動を問われたとき、ましてその問題があなたの全人生全人格を含んでの問題だったならば、どう一歩をふみだすか。その家庭の環境において、自分の子供に何一つ愛情を持ち得ない母親が、子供に愛情を注がなければならないとしたならば。おそらく、現在は政治に経済に倫理にあるいはリストラ、失業問題が個人である私達に難問を吹き付けてまいります。企業は税金が高いからと言って、海外の安い税金の国に避難すれば良いでしょうが。会社

や国や家庭は倒産、離散によって問題をクリアすれば良い事になりますが、個人である私達一人一人は、どこに逃げても問題と共に有りつづけます。

それではパブロフの犬のように、精神の破壊によってこの問題をクリアすれば良いのでしょうか。

いたずらっ子だった頃、夕方遅くまで遊んで家族を心配させ母親にしかられた事が、何度もありました。母親や姉の心配の大きさをおもったら、それに償うだけの心の大きさを、子供はもっていないものです。そのときの子供の反応はたいてい、「ワーッ、ごめんなさい」で母親の胸に抱きついたものです。実に立派に、母も子供も問題をクリアするものです。その子供もだんだん複雑になってくると、「ワーッ、ごめんなさい」が言葉に出なくなり、後ろ向きになったりして「シクシク、……」になり、ストレスを積む事になります。問題を抱え込んで、答えの吐け口を見出せなくなり、自我の問題が露出いたします。

一人一人、問題も解決の答えも方法も違います。嘘つきのパラドクス、ダブル・バインドにおいて迷路にはまり込み、ダブル・マインド化した場合において、この命題をインド哲学では、そのパラドクスを生み出している原因である《自己言及》を避けると言う、子供が母親の懐に飛び込むに似る簡単な方法でクリアすることができるそうです。くれぐれも、自らの命を捧げることよっての解決は選ばないで下さい。

禅は、 《安禅は必ずしも山水をもちいず、心頭滅却すれば火もおのずから涼し》

問題は火であり炎です。限りなく沸く思いを炎にたとえてみますと、

《猛火焰裏の内に向かって清涼を行ず》

実はその限りなく沸く思いの炎の中に、勇猛果敢に分け入る心こそ、涼しさそのものであると同時に、清涼を行じている自分にきずくことこそあなたにとっての禅問答の答えであると同時にパラドクスの答えにもなります。回答者はあなた自身にして、採点し評価するもあなた自身です。

。

分銅

あるお年寄りの話である。

「太平洋戦争末期、今から思うと、時代の大きな流れで、予科連に志願して南方に配属になりました。海軍の飛行機の整備を任務としていたのです。離陸する帰ってくることもない戦闘機の軌跡を、南の空の遠くに、いつまでも見ていました。友人が乗る戦闘機は、私が整備したものです」

戦後、50年以上経過して、戦争体験者の多くが80前後の年齢に達しています。その80年前後の内の、数年の非日常体験は、彼らの中で時計の振り子のように、今でも揺れているのです。人にとっての重大な事実こそ、振り子の重さになり、それは悼み、悲しみ、後悔、せつなさといった、心の奥に作用するものこそ、大きな重みを持つと思うのです。

忘れることの出来ない記憶は、胸に秘めた分銅であり、この分銅は、さまざまな重みを計ることができる。しかしながら、様々な分銅ではなく、多くの変わりになる分銅ではないことが、人の固定観、一面観の出所になるような気がする。

かつて私は、人にとって進むべき道の選択肢は数限りなくあると書いた。そして悲しいかな、人はその内の一つきり選ぶことが出来ないのも書いた。歩いてきた一本道はやがて二本に分かれ、その内の一本の道を進むのである。

知り合いの奥さんに言われたことがあった。

「私の弟は、数年前父の一周忌を前にして、父の位牌をもって突然消えてしまいました。今、どうしているか、消える前は、私に心配をかけ、無心する気が小さな繊細な子でした。調子がよくて、人なつきがとても良かった子でした」

私の知り合いにも、両親が他界したあと、可愛い二人を男の子と奥さんと離婚して後、行方不明になっている男がいる。もう年齢は50になるだろうか、5、6年前に突然いなくなった。私からの郵便がマンションのポストに入っていたというので、会社の人から私を尋ねてきた。サラリーマンなら退職金も申請せずに、会社に来ないなんて、何か事故に巻き込まれたか、自殺か、何か事情があるはずで、どうしていいかわからないと言っていた。

その後は何の便りもない。親戚もなく、兄弟もいない。そう言えば、彼も人なつきがよく、調子がいい。何か心配なところがあった。別れた奥さんに連絡したくとも、住所はわからないし、可愛かった男の子も、上の子は高校生になったのではないだろうか。離婚の理由も、ただ『だらしがない！』という奥さんの言葉しか知らないし、ふと思い出すのです。

「今ごろどうしているのだろうか？」

「搜索願も出していないのではないかと思うのだが！」

選択肢を全く選ぶことが出来ない時、人はドロップアウトするのではないだろうか。道が続くものなら、続くその道の分かれ道を踏み出して歩くという行為が伴わないからです。

年をとるにしたがって、方向を左右する選択肢はそうたくさん有るわけではない。まして取り返しのつかなくなる年齢に達しようとする時、人は迷うものです。しかし迷ってもどれか一つ、決断しなければ、先に進むと言うことはできません。

人が歩いて、岐路に差し掛かったとき、必ず選択の大小の決断が行われるものです。決めるという行為に密着する後悔しない、間違っていない、これでいいんだということを含んでの決断です。人はいついかなる時も、一歩踏み出す道を歩いているのですが、その時、各自の分銅が揺れて、バランスを保っているのではないか思うのです。禅ではそれも分別といって嫌うのですが、そのことは、分別以前のもっと大きな分銅が、働くことと思うのです。

後悔しても時間を戻すことはできないと知りつつ、やはり後悔するなら、後悔以前の無心に行ずる姿そのままとなって、ひたすら歩くことも大切なことです。

天国は汝ら自身に宿る（平成10年11月24日）

宮尾登美子氏の『天涯の花』を読んでいて、主人公の平珠子が養父白塚国太郎の言葉が、自らに浸透した。

「あの先達さんや仏家にはきびしい修行があつてな、行場めぐりでは鎖を伝って洞穴に下りていたり、滝に打たれて祈願したり、そんな鍛錬を経て自分を磨くことができるが、神職にはそれはないゆえに、ひたすら自らが自宅潔斎をせんならん、とくに神へのお供えものを調達する火を大切に、けがれないようにするのが、これが神職第一の修行と思いなさい」の宮司の言葉だ。

四国山脈の西日本中、最も天空に近いのが1,982メートルの石鎚山、1,955メートルの剣山があり、二峰とも神様がいらっしゃる聖地で、ここに暮らす人間は選ばれた人になる。剣山の剣神社の祭神は、山の鎮めの神様で、オオヤマツミノミコト（イザナギ、イザナミノミコトの御子神）と弟のスサノオノミコト、安徳天皇である。それぞれ永久に安んじ奉るため、神に仕えるこの職をこの上なき栄誉と心得て、一心に身を清め、誠心誠意、相勤めることを神職の第一とすることが考えられる。

この神社で少しなれた頃の、珠子の言葉である。

「じゃけんど、お父さんと一緒に暮らして、お父さんの仕事を手伝うてるうち、だんだんと、神様は人間一人一人の持つる良心ちゅうもんで、お社の奥においでになるのは、自分の良心の鏡や、いつもそこに映されているんやと思うようになったんです」「お祈りしてると、心がおだやかになるのは、ほんまなんです」

曹洞宗の尼僧を代表する、青山俊董師の幼少の頃の思い出話がある。師は小さかった頃、寺に預けられた。其の時の庵主さんの第一声が、薄暗い本堂の内陣に坐る金色の本尊、阿弥陀如来の結ぶ印、法界定印（両手の親指と親指、人差し指と人差し指を互いに結んで、お腹の所で輪を作る形）を指して、

「よいかえ！お前が悪さをしたと思った時、仏さまの作る印を見てごらん。丸い輪がいびつに三角になっていたら、仏さまが、悲しんでおられる証拠じゃ。仏さまを悲しませるんじゃないぞえ！」

師は子供心に、この言葉がよほど身を貫いたと見えて、何回も何回も、薄暗い内陣の奥に坐る阿弥陀如来の印を、いつも丸に結ばれていることを願い、恐れたそうであると、何かの本で読んだことがある。師はこのことがやがて、今ある自分の原点のような気がすると思っていたのを思い出します。青山俊董師にとっては、そのときの阿弥陀如来は、師の幼少の頃の、良心そのものを映す鏡だったのでしょ。

臨濟宗の中興の祖、白隠禅師の幼少の頃の話の、人が亡くなった行き先の火炎地獄の切実な恐怖は、やはり師の生い立ちの原点になる。すべては、心の中に幼いうちに、良心の遍歴の怖さを、意識するにかかわらず持っていたことが大きく成長させていったと確信すると同時に、この地獄も白隠にとっての良心そのものだったのです。その証拠に『南無地獄大菩薩』と成長した白隠は揮毫している。

私は小学生のころ、八王子市千人町三丁目の小学校の傍の母の実家の貸家に、五人家族で住んでいました。夕方、そろばん塾にかよっていた記憶の中に、街灯が裸電球だった夜道を帰る私は、街灯と街灯の狭間の暗さが怖く、物陰から得たいの知れない黒いものが出てはこないかと、夜道の帰宅を足早に急いだことを思い出します。40年前の夜は暗く、やがて街頭テレビができて、バナナ売りの掛け声と共に、夜は明るさを増してきました。振り返ってみれば、お十夜の縁日のガス灯の懐かしい匂いや、見世物小屋の賑やかさと怖いもの見たさと一歩離れると、夜の暗さが迫って、懐かしくもある。誰と行ったのか、思い出せないのだが、その頃、夜はもう8時になると子供の声はしなかった。とにかく、夜は怖かったのを思い出します。夜は自分の影にも恐怖を覚えることから、自分の心のあやふやな部分が大きく増徴されるに違いない。

また自分の年を重ねて行く少年から青年の道筋で、大人に成ることへの不安や、いつまでも子供でいたいノスタルジックも、考えてみると、すべては良心のゆらぎだったと、今、思うのです。神や阿弥陀如来、そして地獄が、自分の良心そのものだとしたら、剣山の社殿の奥のご神体も、青山師の育ったお寺のしゅみ壇の奥の阿弥陀如来も、白隠の火炎地獄も、実は自分自身そのものに違いない。ご神体や阿弥陀如来に対峙する自分自身の変化を恐れ、変わりなく無事の自分に安らかさを覚え、自分の至らなさを、良心に照らして、神や仏に誓い・祈る姿の自己をさらけ映すことによって、穏やかになれることは、神や仏が救ってくれることと同じ意味を持つ。

こうしたことが成り立つ前提に、自分や神仏に対する恐れや不明の自己に対する求心的な働き、それは例えば「これで良かったのだろうか」という類の問いかけがなければ、成り立たないと思えます。

大人に成って思うことは、今の何を問うことがわからないのが、現実のような気がします。いつしか、年を重ねて、気が付いてみれば50才に届こうとしている自分の、40数年の歩みはけっして、さまざまな一日一日の積み重ねであるにもかかわらず、それだけの重みを感じないのは、とても寂しいことのような気がします。

人に、今の自分を、今の瞬間を、一度きりの今を、今の出会いを、過去も未来も含んだ永遠の今を説く自分自身の今は、無心に静まり返っていたり、大きく波を打っていたりとしている。それでいながら、日中の行事を、波を打ちながらも、行ずる自分自身以外にはない自分自身ではあるのですが。

人は、ある程度の年齢に達すれば、実は悲しいかな私もそのような傾向を持つのだが、将来の老後に漠然たる不安の解消や安らぎを求めています。不確実の老後に、蟻とキリギリスの蟻のように、こつこつと働いて準備しているといつてよいでしょう。

自分にとって人生は、まだまだタツプリあると思って疑わない自分があることも事実です。自分が消滅する時の良心のありようを問う問題より、自分の始末を金銭という力で解決し、精神的な問題は先送りしながら、それで老後はひとまず安心する生活を送っている自分があることに、反省するのです。

不確実の老後に安心する方法は二つあります。そしてその二つをうまく使うと、とてもバリエーションがあります。一つは、お金で買うということです。いろいろな年金、生命保険、損害保険、各種の金額の高い低いを問わずの老人ホーム、お墓もそうです、最近では生前に葬儀の予約を受ける葬儀会社があることは、これから死のうとする人まで、不安や恐れになろうと思われる問題を、事前にすべて金銭で、解決しようとする人が、多くなってしまったような感があります。

このことは決して悪いことでは有りませんが、少し寂しい気がいたします。二つ目は、自分自身の終焉とはと、問うことから始まります。このことは、一番大切なことです。内面的に求心的に自己（神仏）を求めることは、同時にまた、生き方の問題、つまり、外に向かって考えることに必ず連携するからです。つまり生き方を支えることになるからです。答えは貴方自身の中にあると同時に貴方そのものです。ですが、人と較べて生き様を問題にして優劣をもって考えれば、美化されてみたり、卑下されたりと、本質を見間違ふことがあるでしょう。さらに、死によは問いたくありません。何故ならば、死に方は選ぶものではないと思うからです。

人間にとって必要な感情はと問われた時、私は” 恐れ” と” 感謝” ですと応えます。

恐れ・怖さは自分の心の内部と対面いたします。夜道は暗く危ないの発想は、夜道を明るくし、危険なもの、不慮の事故は、予測と予防によって防いでしまった。人間が自己と対面する、機会がますます減って、後、問題はストレスだけが一番大きな問題として取り上げられるているような気がいたします。

感謝は、内面に向かう心を、外に向かわせる働きがあるように思えます。そして、感謝という気持ちに必要な知識は、現状の認識力と分析です。今ある自分は、与えられた知識＝勝ち取った知識、勝ち取った地位＝支えられている地位、歩んできた道のり＝歩かせられた道のり、切り開いてきた運＝捧げられた運に違いありませんからです。

せめて、極端な話ですが、怖さを忘れかけた我々は、真に感謝できる人間にならなければならないと思います。

私達、日本人は、人それぞれの価値観を認め合うことが、なかなか出来ません。日本人それぞれの価値観の違いが、実際にはほとんど差があつてはならないという命題だ有るかのよう思えるのです。ですから、自分と違う人間を認めたがらず、陰湿な攻撃をしかけたりするのかもしれない。しかしながら、確実に自己主張をし、容認する風潮は増していることは間違い無いと思

ます。自己主張は自分の正しさの誇示です。大切なことは、この自己主張もけっして、自己主張を受け入れてくれる世界あってこそです。そこに気づけば、そうできれば他人の違いがわかり、他人の元気を願い、他人の幸せを祈れるに違いなく、他人の喜ぶ姿を悲しむ自己など有り様はさすがなく、またそのことは、感謝する自己があれば求心的に向かうと思われるのです。

良心の輝きが大切であり、神仏も光輝く存在になるに違いありません。そのとき、恐れや怖さに気が付いてもらいたいと思うのです。

宗派

「何宗でしたでしょうか？本山はどちらでしたでしょうか？」

この寺の住職をして、年に数回は、尋ねられる言葉です。毎月、本山の『花園誌』と『寺報』を配布してる寺がです。山門には、禅宗と書いてあります。法事には、臨済宗聖典という経本を皆でお読みいたします。

京都花園の妙心寺という本山が、東京では知られていないことが大きな原因だろうと、私は思っています。ですから、妙心寺の末寺に、甲斐の武田信玄で有名な、恵林寺とか、伊達正宗で有名な、松島の瑞巖寺、枯山水・石庭で有名な竜安寺、那須の雲巖寺があるんですよという、「ああ、そうですか。」と判っていただけなのです。

また、禅宗となると、「永平寺ですか？」と、聞いてきます。「禅宗には、臨済宗と曹洞宗と黄檗宗がありまして、臨済宗の有名寺院は、関東では源氏や北条氏で知られる、鎌倉の円覚寺や建長寺があります。京都でも、南禅寺、東福寺、銀閣・金閣、相国寺、大徳寺、建仁寺、天竜寺などがあるのですよ！」と言いますと、もうそれぐらいで、頭の中は一杯のようです。どうも観光で有名な寺院ではないかと、不思議な気がします。

新しくお墓を取られた方や法事や葬儀を頼みにきます方々は、地域の人が、利便性やら、檀家や知人の紹介がほとんどです。その方々の事情はそれぞれで、仏教ならばそうたいして違わないだろうという思いがあるようです。

確かに、この地域でも浄土宗、日蓮宗、禅宗、真言宗、浄土真宗があり、しかも同じ宗派でも、分派しているのですから、一々その内容を知らなければ、寺を選ぶことができないとなれば、ほとんどの人は一生かかっても選ぶことはできないでしょう。これはとても厄介なことです。このホームページは、そうした疑問や戸惑いに答える内容を含んでもいます。また、もっとやっかいなことに、余計に解らなく進めてしまうものになるかもしれません。宗派と住職の考え方、捉え方、見方、生き方がどう交差して、参考にし、惹かれるものがあればよいと思っています。そこから、改めて、宗派って何だろうと考えられると思います。

新しく知り合った方々と話して、未だに多少残っているのに、家の過去の宗派があります。しかしながら、過去の宗派を聞いて見ますと、何々宗と唱えるお題目、名号は知っているものの、中身となると皆目知りません。そして、聞いてきます。

「ご本尊は、どうしたら良いのでしょうか」。

「何とお唱えしたら良いのでしょうか」。

これを聞いて、私は思うのです。何も染まっていないと。多くの人が宗派については、何も染まっていない状態にあると思います。いや、それ以上にほとんどといってよいくらいに、関心がな

いようにも見えるのです。姿、形あるものには、理解を示しますが、内容となれば、「行き着くところは、同じでしょう」とは言うのですが、”行き着くところには”それ以上は興味は示しません。

さかのぼって下るからこそ、時代や文化の特色や、宗派の意味が見えるのですが。実に、寛容にたけていると言えるのです。本山や宗派の大学、教学研究機関を除いて（ひょっとして除く必要はないかもしれないが）、末端の寺では、脱宗派が進んでいるのではないかと思えます。そう思う理由は、宗派の掟、戒律が無くなってきているように思えるのです。守るものが在ってこそ、広めたいこともあるのでしょうし、その守るものを説くことが出来なくなってしまった宗派の、宗派性は法式と出所の証明ではないかと思えます。単立の宗教法人がとても多くなってきたのも、気になるところです。

しっかりした信仰を持ち得ない、日本人の精神は、何を支えとして、何を目的として、人間をどう捉えて、生活（死んでゆく身が、どう生きるか）するのか、何を求めての生か、その求めるものは正しいものなのか？なにが正しいかと考えたのか？宗教こそ、その問題に答えを導くものです。マインドコントロールを解くものこそ、仏教の教義のはずです。怨霊やたたり、カルトを退ける道です。

考えてみて、日本の仏教教団は、必ず何らかの意味で、名前を掲げ標榜しているものがあります。宗祖の名前を付すもの、教義の中身を掲げるもの、お題目を掲げるものと数多くあります。不思議に思うのは、お釈迦様に発した仏教が、何故に人の名前や、又、別な名前を掲げなければならないのでしょうか？そんなことは、問う以前に判りきった事なのですが、考えなければならないことでしょう。

「以前の掛け軸の本尊はどう致しましょうか」と、問われることがあります。

私は、「そのまま結構ですよ」と、そして「換えてしまって、その掛け軸をどうしたらよいのか、粗末にしたくなく、迷ったときは、寺に持ってきてください」と。

年を取って、今までの過去来歴を否定したくないし、また否定しようとも心の履歴は抹消できるものではなく、その上に積み重ねるように、この寺での履歴をそっと重ねた方が、その人が豊かになると思うからです。本尊を取り替えても、記憶に残るものまで、取りかえることはできないからです。”南無阿弥陀仏” ”南妙法蓮華経”と唱えていたからと言って、過去のお唱えは、間違いではないし、違うお唱えの言葉を無理やり言うことは、唱えるたびに不自然さがつきまとうものです。

こう言うと実に、無責任なことのように思えますが、現実の姿です。現状の末端の寺からは、ここから信仰とは宗教とはと、論じることには、難しいことなのです。本人が決める前に、祖先が決めてしまったことの、何に従うのかと考えて見たとき、思想性を葬るか、自分に都合のよい有り方を受け入れることしか、選択肢はないのかもしれない。私の寺のそれぞれの方は、『うちのお寺』とか『角のお寺』と言います。そして『うちのお寺の仲間達』は、法話の会を主催して

みたり、お施餓鬼でも、和んで溶け合っているのです。

本山関係者が、この記事を読んだら、きっとビックリするかもしれません。本山は末寺末寺と意識いたしますが、末寺は本山をそんなに意識しません。それより『うちのお寺の仲間達』の幸福をただひたすら願い、思うことが、『うちのお寺』の基本的な有り方であると考えています。

本山は布教、教化と言います。ですが私は、布教、教化は致しません。『うちのお寺の仲間達』が、より自分に真実に生きることを願い、私は、同時代と一緒に生きることに喜びを感じていますですから、お経の後のお話は、私の考え方、見方、生き方を、話すだけです。それを布教と言うのだよといえ、そうなのかと思いますが、共鳴してくれれば、私は本望です。

この時代に、それぞれがそれぞれに生きている。そのそれぞれの一喜一憂のそれぞれに、祝福あれ！

穢れ（平成12年8月30日）

まだ住職をして日が浅い頃のことだ。不思議なことがあった。近くの家の婆さんが、この寺の檀家になることを迷っていた。それは、とある神社の神徒で、それこそ先祖代々の神様を信じての家であり、墓はY県にあった。年をとって墓を仏式に改宗しようと、やはり決断を下すことは容易ではない。

まあ、親しく挨拶をして、婆さんも親密にこちらを慕ってくれての、改宗騒ぎでした。しかし、私からみれば、この改宗ということに、それでは、こちらの宗派を理解してくれたのか、あちらの宗派は一体なんだったのだろうか、神と仏の差とは、名前の差は何処にあるのかと、受け入れるには相当考えも致しました。

墓を、田舎からこちらに移すことを決めてから、4霊の改名をいたしました。やはり、なくなられた方々は皆神様であり、何々の命（みこと）と命名されているでした。

神様が、仏様に改宗するとは思えず、仏様が神様に改宗するとは思えません。ともに死者が神として、仏として祭られることに意義があるのだと思いました。仏教に六道、神道に黄泉の国があることは知られています。

私が小さかったころ、古事記の中の物語を読んだ記憶があります。それは決まって、真っ白い衣装を着た伊邪那岐命（いざなぎのみこと）が、黄泉の国を失踪する場面でした。黄泉の国の化け物の襲撃に、命は様々な障害をクリアーして脱出する物語です。ハラハラドキドキした記憶があります。

暗闇の黄泉の国で、蛆（うじ）が湧く苦界にもがく亡者（もうじゃ）どもも、人間の末裔ではないか。そしてこの亡者どもも、やがては晴れて命としての神に昇天することがあるのだろうかと考えてみたり、否、命になれないから亡者としてしか生きる糧がないのだろうかと考えてみたり、それでは人間の世界と同じではないかと、恐々と読んだものでした。今のRPGゲームの日本版原型であり、伊邪那岐命が伊邪那美命（いざなみのみこと）を慕っての冥界訪問・脱出物語ですが、神話における日本誕生物語でもありました。

712年に記された古事記によりますと、《天地が開かれて、天上は高天原（たかまがはら）そして、地上はその時クラゲのように大海原にぷかりぷかり浮いているような状態でした。その時の神様は5人いらっしゃいまして、身を隠してしまいました。その次に7人の神様が誕生いたします。

国土・雲の根源の神様、泥・砂の神様、杭・支柱の神様、存在の神様、人格の完備と意識の発生

の神様、男性の神様、女性の神様達でした。そして、この男性・女性の神様こそ、伊邪那岐神、伊邪那美神の神様だったのです。》

天地開闢の神話は、その民族の正統性への証明でもあります。ですから、それが作られた年代も意味を持ちます。大陸にはすでに大文明が芽生えておりますから、その大陸に向けての開闢でもあると思います。

古事記は、《ここより両男女神を、命（みこと）として区別し呼びます。つまり隠れた5人の神様が、諸々の命をもって、男女の2神に詔勅することによって、命となるのでしょう。

当然この神様たちは結婚し、お互いに慈しみあいました。愛し合って、そして出来た子ども達こそ、様々な神々の島々の誕生でした。その後、その島々に必要な、様々な神々が誕生いたします。

屋根を葺く神様、石や土・砂の神様、家の神様、海の・河の神様、凧（なぎ）と波の神様、分水嶺の神様、ヒサゴで水を汲んで施す神様、山の尾根や谷の神様、霧の神様、山地に迷う神様、鳥のように天空や海上を通う神様、食べ物も神様、物を焼く神様、火と光の神様、焼ける匂いの神様、鉱山の神様、粘土の神様、灌漑用の水の神様、生産の神様、糞尿の神様達、ありとあらゆる神様を産みました。》

日常のあらゆるものを司る神が誕生するにあたって、誕生する神々の出現は人々の誕生を前提にして産声を上げていることに気づきます。そして、次に、邪神や悪神も誕生することから、すでに秩序が生まれていることが解ります。その秩序にのっとて神々が誕生するのです。

《しかし、伊邪那美命は火の神様を産んだ時より、病がちになり、ついに死んでしまいました。火の神の名は、火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）でした。伊邪那岐命は嘆き悲しみ、伊邪那美命を広島県の比婆の山に葬り、子である火之迦具土神の首を、十拳剣（とつかつるぎ）で切り落としてしまいます。切り刻まれた神の身体からは、頭、胸、腹、陰部、左手、右手、左足、右足と8神が誕生いたしました。さらに、この感情のほとばしりから様々な神々が誕生しつづけます。》

神々の死からは、神々が誕生するのです。命によって死がうまれました。不思議に思うことは、神と命の差は、言葉であるのでしょうか。その裏づけが命（めい）なのでしょう。

天地の初め、黄泉の国はなかった。人格が死ぬことにより、黄泉の国が必要となり、誕生したことになるのでしょうか。穢れが発生し、同時に禊が誕生いたしました。焼け死んでしまった伊邪那美命は、黄泉の国に行くことにより、神と人との分離、死と誕生の秩序が生まれたようです。そして、秩序が生まれるということは、混沌が発生しているという意味をもつのでしょうか。

《伊邪那岐命は、五神から受けた命の詔勅を、二人して成し遂げていないことに心を痛めます。そして、愛する美しい伊邪那美命を連れ戻そうと、黄泉の国に侵入いたします。

彼女が葬られている古墳の入り口で、彼は『還るべし』と問い掛けます。彼女は、彼のその熱い思いを知り、嘆きます。

『悔しい。貴方が早く来ないので、黄泉の食べ物を食べてしまいました。その結果この国の住人となり、脱出は難しい。しかし、愛する貴方が迎えにきてくれたことに、私は嬉しく思います。還りたくないわけがない。黄泉神と話し合ってください。しかし、私を決してみてはいけません。』

この国を司る黄泉神（よもつかみ）に会って、彼女を連れ帰ろうと入り口より入っていった彼は、はやる気持ちに待ちきれず、その約束を破って火をかざして彼女の姿を見てしまいます。彼女の身体は腐って蛆が湧き、雷神が全身に蠢く姿となっているのを見て、伊邪那岐命は、怖くなり逃げ出してしまいます。そのことを知った伊邪那美命は、『吾に辱を見せつ。』と怒り、予母都志許売（よもつしこめ）を追手として彼を追いかけます。》

開闢の五神は、身を隠すことによって世界から消えました。また神の死は、神々の誕生というパターンもありました。しかし、伊邪那美命という人格を持った命が死ぬことは、初めて身体が腐乱し、蛆が湧き、死臭という香りも誕生したことでしょう。そして悪霊が取り付きます。いよいよ、禊と祓いの誕生です。

《 彼は、追手に追いつかれそうになると、身に付けている飾りを必死に投げ打ち、それを食べ物に変え、それを貪る予母都志許売を置いては、また逃げます。更に、雷神と黄泉軍が追手として押し寄せてきます。伊邪那岐命は十拳劍（とつかのつるぎ）を振りかざし、やっと黄泉の国の入り口、黄泉比良坂に到着すると、桃の実を投げつけ、呪力で退散させます。桃の実が邪鬼悪霊を退散させるとは、中国神話からきていますが、わが国の桃太郎伝説も、この流れを汲むものです。

この桃の実に、彼は『私を助けてくれたように、葦原の中国の人々が苦しい時、煩っている時、助けるように』と、神様を誕生させます。

いよいよ最後に彼女が追いつきました。彼は二人の間に、千引き石（ちびきのいし）を置き、彼女の侵攻を止めることが出来ました。

伊邪那美命は、最後に『愛しき我が夫よ。かくなる上は、汝が国の、一日に千人の領民の首を、切り落としてくれようぞ』と、叫びます。

それに答えて、伊邪那岐命は『愛しき我妻よ、私はそうとなれば一日に千五百人の産声を誕生させよう』と宣言しました。

このことにより、人の生き死にが始まりました。

日向に国に帰った伊邪那岐命は、身の穢れを禊ぎによって払います。そして多くの神々がここでも誕生するのですが、左の目を洗った時、天照大御神。右の目を洗った時、月読神。鼻を洗った時、須佐之男命を誕生させるのでした。以後、高天原を天照大御神、夜を月読神、海を須佐之男命に治めさせることにするのでした。この物語のあと、黄泉の国のことは話の出てきません。須佐之男命が告げる『母がいる根の国』という表現にかわります。》

子供の頃に読んだ本は、童話だったのでしょうが、今読み直してみると、また違った読み方がで

きるものだと思います。

黄泉の国とは、死者の行く闇の世界なのです。その国に、別の国の者が、足を踏み入れることは、穢れでもあるという。黄泉の国の食べ物を食べることは、その世界で生きるという意味を持つとしたら、何やら『飯を食う』という諺も、随分古い過去を持つのだなと感心した。

さて、仏教において、死者が懺悔し、三帰依文保持し、教義を説くことによって、仏様という覚者に祭り上げる発想は、禊祓うことによって、人が神に昇格するという神道と親しい。新鮮に感じることは、仏様となり、命（みこと）に祭られれば、それは死んで死なないという人格を手にしたことになります。

歴史的に言うと、山岳仏教のミイラ化した生き仏伝説などを考えてみた場合、虐げられた民衆の不条理を吸収していたのだと理解できるだろう。

穢れとは何だろうと考えてみた時、それは、人の尊厳であり、存在そのものであり、鎮められない葛藤そのものではないだろうかと思いました。

お彼岸

秋のお彼岸にしても、春のお彼岸にしても、大きな共通点は、夜と昼の長さの時間が均しいと言うことです。そして、これは分岐点をさし、身近には室内に日の差し込む角度が長くなったり、短くなったりとなります。

暗から明、明から暗は、同時に、寒さから暑さに向かうことを意味としたものと、暑さから寒さに向かうことの意味を持ちます。春夏秋冬から言えば、行きと戻りの中間地点でもあります。冬至を始発とすれば、折り返し点は夏真っ盛りの夏至です。どちらが行きなのか、戻りの地点なのかは、一年が環状の輪になっているとすれば、始発の地点が何処かによって変わってきます。どの時計も、針は真ん丸に、時を刻んで、ぐるぐる回るからと言って、元の時間に戻るとは言わないように、人生に戻りの季節がないように、人生に環状の輪は無く、いつも行きなのです。

戻ることは出来ない月日の季節の循環こそ、時計の針の動きに似て、矛盾を含んで、私は好きです。また巡ってきた秋は、去年と絶対に違う秋であり、お彼岸のはずなのです。それは、母を失って始めて迎えるお彼岸であり、父を失って、子を失って……、あるいは二度目の秋彼岸であり、結婚して始めて迎えるお彼岸であり、子が生まれて初めてであり、すべての人にとって、今年も始めて迎えるお彼岸なのです。

お彼岸は、寒さから暑さへ、暑さから寒さへの中間地点と言えますが、それは、命あるものの芽を吹き、青葉が茂り、花が咲く景色と、実をつけ、葉の色が変わり、やがては近づく試練の季節を乗り越えるため、身につけた一切の余分な身繕いを棄てようと営む行為にと向かう分岐点です。このことから、春は、生き物を称え大切にし、自然を慈しむと言えます。秋は、自分が今・ここに居ることの意味を知り、亡くなった尊い祖先を敬い、しのぶことの意味が強いと思います。陽から陰へ、活動から停滞へ、華やぎから静けさへとも言えるのではないかと思います。

お彼岸とは、『人が、心と立ち止まる』時かもしれません。精神的には、彼岸は、此岸（しがん）あつての故の彼岸なのですから。そして、彼岸は、正しい智慧であり、真理であり、悟ることです。何故この時期と言え、太陽が西東に直角に交わり、西にも東にも近いからとも言えそうです。考えてみたら、それ以外の日は、此岸とでも言うのでしょうか。現実には、暦（こよみ）に、此岸はありません。

此岸が彼岸となり、彼岸が此岸となる。彼岸となり此岸となる、『と』こそ、人の立ち止まっている場所なのでしょう。何故なら、暦上は、丁度中間地点にお彼岸だからです。そうすると、これより一歩踏み出す先が、彼岸であり、此岸になります。彼岸が在るためには、此岸がなければ成り立たない世界に私達が生きているとするならば、幸福を彼岸とすれば、不幸に生きていることを知らなければ、満たされるためには、満たされていないことを知らなければ、飛躍するためには、立ち止まって英気を養うことをしなければならぬでしょう。

しかし、一步踏み出した場所しか、私達が生きる世界がないということが現実なら、例え彼岸だろうが此岸だろうが、彼岸として生きることこそ、幸福なことだと、これが仏道です。

この時期、足下を見つめてみれば、様々な色に満ちあふれています。

春を代表する草は、春の七草で セリ（芹）・ナズナ（薺）・ゴギョウ（御形）〔＝ハハコグサ〕
・ハコベラ（繁縷）〔＝ハコベ〕・ホトケノザ（仏の座）・スズナ（菘）〔＝カブ〕・スズシ
ロ（蘿蔔）〔＝ダイコン〕です。

名もない路傍の草花と言っても可笑しくない草花たちですし、これらが食用になることを思うと、秋の七草は食べた記憶がありませんが、りっぱな草花で、この違いは何なのだろうと思います。

その秋の七草は、ハギ（萩）・オバナ（尾花）〔＝ススキ〕・クズ（葛）・ナデシコ（撫子）・オミナエシ（女郎花）・フジバカマ（藤袴）・キキョウ（桔梗）です。どう比べても、秋の七草が種も背丈も変わって、草だけではなく、小木も入っていることから、華やかで在りながら、寂しさもあり、考え方が違うのではないかと、あとから考えて揃えたようにも思えます。

仏壇やお墓に供えるものは、春彼岸は『ぼたもち』、秋彼岸は『おはぎ』や『彼岸だんご』となります。最近では本当に少なくなりましたが、この頃になると、各自宅で、それらの外にも、五目ご飯とか造ったものです。昔の家々では、必ず、多く造って近所の家々に『お裾分け』したことは、忘れてならないことです。そう言えばと、初午なども、ご近所さんに配ったものでした。結婚式も棟上げ式もお祝いだけとは限らず、葬儀や通夜も入れれば、何かの行事には、必ず何か振る舞われたものですが、その地域に息づいて、分かち合うという習慣が、今は少なくなり、無くなっているのに気がつきます。

分かち合うとは、彼岸に到るための、六つの徳目の一つです。到彼岸とは、波羅蜜多（パーラミッタ）の漢訳です。陽岳寺の法事で、最初に読むお経は、般若心経で、摩訶般若波羅蜜多心経と言います。摩訶は偉大とか、大きなという意味。般若は、プラジャーナと言ひ、正しい智慧、真理です。波羅蜜多が、到彼岸ですから、このお経の題名の訳は、『偉大な正しい智慧という真理に到るためのお釈迦様の教え』となります。

仏心

私たちが生きている環境に、無くてはならないもの、それは、空気です。頭の中では理解しているものの、当たり前のように思って、では、どんな味がするかといえば、季節によって、生活の中の場面によってかわります。食事の前の空気の匂いは、カレーライスのようにもあり、魚がこんがり焼けた匂いであったりします。花々に覆われれば、薔薇の甘い匂いや、深い森に行けば、川に行けば、海辺ではと、様々な味と匂いに、私たちは出会います。

また走って息を切らしているときの元気な身体が吸う空気は、潤すかのようですが、弱った身体には、濃度がうすそうに思えます。苦しそうな空気です。

では、色はどうかといえば、澄み切った空は青く、どんよりした曇りの日は、灰色です。それに温度が加われば、清々しく、カラッとして、鬱とおしくと感じますが、空気本来のと言い方をすれば、わかりません。

現実には、煙のようなら見えるのですが、目の前の空気は見えません。近くや遠くに見えるものを介して在ると知識で理解します。そして、肌を感じる風を通して、冷たさや、暖かさ、やさしさや激しさでわかるのですが、でもそれは、風です。

ガスの匂いや、ひどい粉塵に襲われたときは、一刻も避けたいと思いますが、二酸化炭素に襲われればわからないのです。

無味無臭の空気は、生かされている環境の中では、とても解りにくいことです。

インドに、昔から伝えられている話があります。

青い海に群れをなして魚たちが泳いでいました。その中に、すばしっこく泳ぎの達者な魚がいました。

好奇心旺盛の若い魚です。その魚が、一緒に泳いでいる仲間尋ねたのでした。

「世界のどこかに、果てしもない海があるというはなしを聞いたことがあるが、その海って、いったい何処にあるのだろうか？そんな海に出会ってみたいものだ」。

仲間達は、いっせいに、口をつぼめて、泡を出しながら言いました。

「ここにいる我々みんなも、海のこと聞いたことがある。だけど、何処にあるかは知らないし、わからない」

年老いた魚が、そのはなしを聞きつけ、若い魚を呼び、教えてあげました。

「お前たち、よく聞けよ。お前たちの話しの海って、今、わたしが泳いでいるここじゃよ。世界は、どこもかしこも海ばかりじゃないか。わたらはその海の中に住んでおるのじゃ。

わたらは海の中に生まれ、海の中で暮らし、海の中で死んでゆくじゃ。わたしが今泳いでいる、暮らしている、これが海じゃ」。

仏の教えとは、人間の尊さ、おのれなき尊さ、人に和（なご）むことを、何よりも優れて尊ぶことです。そして、仏道とは、生活の中で、つくられたるもの移り行くこと、この世にあるもの一人あらずこと、おのれなきものに安らいがあることの中に、自分が居ることに気づくことです。

このことの表現として、合掌があるのだと思います。

そして、「仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引き取る」ことの意味を、仏心を尊さに替え、命や家族、慈しみの心、智慧や自然に替え違和感なく思い描くことが出来る時、釈尊や無数の祖師達に出会うと言えます。

仏心

私たちが生きている環境に、無くてはならないもの、それは、空気です。頭の中では理解しているものの、当たり前のように思って、では、どんな味がするかといえば、季節によって、生活の中の場面によってかわります。食事の前の空気の匂いは、カレーライスのようにもあり、魚がこんがり焼けた匂いであったりします。花々に覆われれば、薔薇の甘い匂いや、深い森に行けば、川に行けば、海辺ではと、様々な味と匂いに、私たちは出会います。

また走って息を切らしているときの元気な身体が吸う空気は、潤すかのようですが、弱った身体には、濃度がうすそうに思えます。苦しそうな空気です。

では、色はどうかといえば、澄み切った空は青く、どんよりした曇りの日は、灰色です。それに温度が加われば、清々しく、カラッとして、鬱とおしくと感じますが、空気本来のと言い方をすれば、わかりません。

現実には、煙のようなら見えるのですが、目の前の空気は見えません。近くや遠くに見えるものを介して在ると知識で理解します。そして、肌を感じる風を通して、冷たさや、暖かさ、やさしさや激しさでわかるのですが、でもそれは、風です。

ガスの匂いや、ひどい粉塵に襲われたときは、一刻も避けたいと思いますが、二酸化炭素に襲われればわからないのです。

無味無臭の空気は、生かされている環境の中では、とても解りにくいことです。

インドに、昔から伝えられている話があります。

青い海に群れをなして魚たちが泳いでいました。その中に、すばしっこく泳ぎの達者な魚がいました。

好奇心旺盛の若い魚です。その魚が、一緒に泳いでいる仲間尋ねたのでした。

「世界のどこかに、果てしもない海があるというはなしを聞いたことがあるが、その海って、いったい何処にあるのだろうか？そんな海に出会ってみたいものだ」。

仲間達は、いっせいに、口をつぼめて、泡を出しながら言いました。

「ここにいる我々みんなも、海のこと聞いたことがある。だけど、何処にあるかは知らないし、わからない」

年老いた魚が、そのはなしを聞きつけ、若い魚を呼び、教えてあげました。

「お前たち、よく聞けよ。お前たちの話しの海って、今、わたしが泳いでいるここじゃよ。世界は、どこもかしこも海ばかりじゃないか。わたらはその海の中に住んでおるのじゃ。

わたらは海の中に生まれ、海の中で暮らし、海の中で死んでゆくじゃ。わたしが今泳いでいる、暮らしている、これが海じゃ」。

仏の教えとは、人間の尊さ、おのれなき尊さ、人に和（なご）むことを、何よりも優れて尊ぶことです。そして、仏道とは、生活の中で、つくられたるもの移り行くこと、この世にあるもの一人あらずこと、おのれなきものに安らいがあることの中に、自分が居ることに気づくことです。

このことの表現として、合掌があるのだと思います。

そして、「仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引き取る」ことの意味を、仏心を尊さに替え、命や家族、慈しみの心、智慧や自然に替え違和感なく思い描くことが出来る時、釈尊や無数の祖師達に出会うと言えます。

ご祈祷

禅宗の祈祷の始まりは、西暦813年、百丈禅師が亡くなって、190年後『禅門規式』の、三八念誦からと言われていています。三と八の日に、十仏名を唱えることで、報恩謝徳の思いをあらわしたと言われております。念とは、心にあること、誦とは、口に発することです。この頃、各宗派でも盛んに祈祷がおこなわれていて、その影響を受けたようです。

『禅苑清規（ぜんえんしんぎ1103年）』によれば、一つは、国家並びに仏法の隆昌、施主の増福・増慧するため、二つには、無常を感じて自己の修行完成を祈念する修法であったと言われていています。これが、禅宗における、誓願としての“いのり”の初めと云われていると、臨済会編『葱嶺集』に記してありました。

また、蒙古襲来のおり、禅僧は坐禅ばかりして、「お祈りも申さぬ者」として批判されていた記録があります。幕府からも、天下太平檀那安穩のためお祈りせよと、ひまなく禅院に祈祷を依頼されたようです。その後、夢窓国師は、「坐禅工夫は退転す」と、この時代の一般寺院を表現しておます。今日、禅寺に残る、一日、一五日の祝聖（しゅくしん）という天下太平を祈る法式は、この時代の歴史を引き継いだものです。

そして、中世から現代に至って、禅宗の祈祷は、悪をつつしみ、善をなすべしの意味を持っています。善月祈祷というその善月が、諸天善神が四方を巡行して、ちまたの大小の善悪をもれなく四天王に報告する月として、帝釈天が鏡を持って、我らの世界を照らし、人の善悪を察する月が、正月、五月、九月であると、『勅修清規』に書かれています。身びいきの恐れから、贖罪の祈祷として、祈祷の中心でした。

そして今日、それ以外が主となって、祈祷は、日常のあらゆる場面に、顔を出します。受験、交通安全、家内安全、家庭円満、疫病退散、厄年祈祷、虫封じにぼけ封じ、悪魔払いや、各種お祓いには、つねに、その時代が顕れます。人の思いには切りがない分、これからも、人暮らしの変化に合わせて、様々に登場してくると言えるでしょう。

この祈祷の場所としては、東西南北の神々鬼神により結界がはられます。青龍（東＝青）、朱雀（南＝赤）、白虎（白＝西）玄武（黒＝北方）は中国古来の神話でもありますが、その神話に、仏教が合流し、帝釈天の守り神として、持国天・増長天・広目天・多聞天（毘沙門天）が、その四方の守り神として重なります。

大相撲の土俵の四隅も、結界をはった神域として、五穀豊穰や、国民和楽を祈る場所としてあります。さらに地鎮祭、上棟式、地下に埋もれた幽鬼としての遺骨のお祓いも、結界をはったの祈りの場所になるのです。

さて、陽岳寺護寺会の催すご祈祷は、“無事や平常であること”をテーマと考えます。何があっても無事を祈ることです。無事の基本は、変わり続けることの中に、何事にも変化しない自身の心の姿の自覚です。人の一生は、みずから朽ち、消滅して、かたちなき限りなきものとなることへの旅路ですというなら、生まれる前から、生まれても、そして旅立った後も、変わらない自分とはなにかと考えることです。

そのために、このご祈祷最初のお努めは、先ずは、何事も受け入れられる心構えとして、無心となることが強いられます。

これは、ひとえにじぶん自身に偽りのないようにと、素直さをいつまでも持てるようにとの意味です。これを懺悔と言います。

懺悔について、斎藤緑雨は、『眼前口頭』の中で、「懺悔の味わいは、人生の味わいである。」と記しています。しかし、その懺悔も、人生において、苦渋や自責、許されることのない罪、知らずに傷を付けていた事実の認識、叱責や出生において、苦悩や後悔がなければ懺悔も成り立たないことでもあります。原罪を持たぬ我々は、生活の中の、忙しさの中に、過ぎ去ることで、忘却という世界の中に生きているかのようです。

さて、祈祷とは、人の祈りを昇華させるものであると思うのですが、祈りがなければ、祈祷は成り立たないものです。その祈りの中身が、悩みや感謝とするなら、ヘルマン・ヘッセが、『放浪』のなかで、しるす言葉が光ります。

「祈りは歌のように神聖で、救いとなる。祈りは信頼であり、確認である。ほんとうに祈るものは、願いはしない。ただ自分の境遇と苦しみを語るだけである。小さい子どもが歌うように、悩みと感謝を口ずさむのである。」

また、祈りを昇華させるためには、祈る人と、その祈りを可能な現実なものにする超越する人格がなければなりません。超越する人格は、神や仏、亡き人や、聖者と考えられるものです。そしてその二つの間を取り持つ役割を担うものは、神官や僧侶です。なぜなら、祈りについての、その祈りの内容を、また、祈りのあとの現実を、具体的に示すことも必要なことだからです。もっとも何を祈るか見当もつかなく、ただ目前の欲望のみに囚われて、心を虚しくすることもあります。欲望を祈りに取り違えることは、現実をゆがめます。

カフカは、『カフカとの対話』の中で、“祈りを行為”に、“人を揺籃”に、そして、“やがて贈る側に転身を希う”と書いていました。

「祈りと芸術は、熱情的な意志の行為です。普通に見られる意志の可能性の領域を踏み越え、高めようとするものです。芸術も祈りも、それはともに暗闇に向かって差し出された手であり、その手は何ほどかの恩寵を掴み取り、やがては贈る側に転身したいと希（ねが）うのです。

祈りとは、消滅と生成に間に渡された光の弧の変容の手に我が身を投ずることであり、その途方もない光を、自己の存在のあるかなきかの、はかない揺籃（ようらん）に定着させるために、その光の弧のなかに我が身を完全に没入させることなのです。」（これらの文章の引用は、筑摩

書房の筑摩哲学の森、別巻定義集からです。)

“光の弧”とは、プラスとマイナスの電極の間の、稲妻です。それは、消滅と誕生の間の揺籃する命でもあるのでしょうか。芸術家にまかせることは置いておき、人が祈る行為により、揺籃する心から転身する。全てはこのことが尊いのでしょうか。このことの中に、感謝が芽生え、知らず贈る側に居る自分を知ることがあるのでしょうか。祈る行為は、その中に、転身を希うことが含まれていることになります。

じぶん自身の計らいの中の、気づきは、人を変えるものです。この変えられた自分を希うことを、このご祈祷の本意と、考えました。

そして、過ぎゆく年の、来る年の、そして今日ただ今の無事や、平常であることを願い、祈りとしたいのです。

無事とは、禅語の『無事これ貴人なり』と、また、平常とは、これまた禅語の『平常心これ道』の、無事や平常の意味から引用いたしました。

平常とは、平等常住の略意で、涅槃・菩提・迷いのない世界・悟りの世界・名利を越えた世界・無心であるのですが、ここから一切の働き、一切の行為があらわれます。この行為や働きは、一切の善悪・順逆を離れているのです。善悪・順逆は我々心の分別です。このこと故に、私たちが世界に住んでいる限り、無事でないことは、まぬがれないことです。平常に生きることは、とても困難なことでもあります。

無事や平常は、逆に、この世間の事の中に住むからこそ、この日常ゆえに、対するものとして考えられます。日常を否定するのではなく、日常の生活のなかで、平常が現れなくてはならないのです。

カフカは、「やがては贈る側に転身したいと希（ねが）うのです。」と言うのですが、転身することです。

積極的に世間に事や日常にかかわることのなかに、転身することです。

徹底して、日常と平常は同じ道であるかと説くか、異なった道であると説くか、臨済が云う「歩々これ道場」は、行為は同じでも、無心か我が身では、雲泥の差が生じます。蓮如上人が、「婆さんや、糸をつむぎつむぎ念仏するのも結構じゃが、念仏しいしい糸をつむぎなされや」と、さとしたと言いますが、同じ行為でも、念仏するという無心の働き、それは、臨済が云う、「随所に主となる」行為です。身びいきの我が身に気づくことは、それは、じぶん自身の否定的転生です。絶対なるものとは、その光の弧のなかに我が身を完全に没入させることで現れます。

転身への祈り、それは、徹底できぬ自身への、素直さへの回帰という意味でもあります。

施餓鬼会にて（平成17年5月28日）

それはチベットの山々のはるか彼方のこと。一人の村人が、今、死を迎え、最後の儀式と作法をのぞんでいる。家族は、親しいラマ僧を、その男の臨終に呼んだ。

ラマ僧は、お寺にはいり、読み書きや呪文の教えを受けた十歳になるかならない小坊主を連れて、山を越え、谷を渡った。死者になろうとする家へいそぐ。

ラマ僧は、この小坊主にも、そろそろ、教えの扉を開いてよい頃だと思った。それには、人の死を目の当たりにし、この小坊主のうける様子にそくして説こうと。

誕生のときには、あなたが泣き

全世界は喜びに沸く。

死ぬときには、全世界が泣き

あなたは喜びにあふれる。

かくのごとく、生きることだ。

この言葉は、三万年の死の教えーチベット「死者の書」の世界（中沢新一著 角川ソフィア文庫）にある言葉です。

刻々に変わる人の臨終の姿に接して、変化して行く、その度に、法を説きます。このことは、臨終に接する親しいもの達に、死はすべてを奪うものではなく、ほんとうの豊かさをあたえてくれる機会だからこそ、山を越え谷を越えて、ラマ僧は人の臨終に出向くのです。

私は私という命をとおして、私の世界を生きています。そして、私の環境をとおして、私の世界を造り上げているともいえます。犬は犬の命をとおして、犬の世界を生きていといえるでしょう。

平成17年5月27日、フィリピンで60年ぶりの元日本兵発見のニュースに、真偽はともかく、元日本兵から眺めてみれば、また違ったものになることを思いながら、ふと、肉体は持たなくとも、もしかして、餓鬼は餓鬼、亡者は亡者という命をとおして、餓鬼あるいは亡者の世界を生きているのかも知れないと、こう考えることもできると思いました。

縁起や因果という条件が、命を左右し、それぞれの世界を作り続けるとするなら、お施餓鬼という眼に見えない世界に、亡者は餓鬼の姿ではなく、生前の最後に接した姿・形で瞼に浮かびます。しかし、私がつくる世界に、親しく亡くなった者の時間の経過は、浮かんでこないものです。

本日のお施餓鬼法要の冒頭の言葉を記します。

「若し人、三世一切の、仏を知らんと欲せなば、まさに、世界の一切は、おのれ自身の心が造ると、観ずべし」

これは、施餓鬼文、冒頭の言葉です。じぶん自身を含んで、世界を見渡し、判断するものは、私の心です。

この故にこそ生じ、限りなく変化し、親しかった家族から切り離された多くの故人への思いと、

故人の思いを、お施餓鬼の法要は、七名の如来を迎え、称えて、助けとなるように、故人に送り届けます。

その七名の如来とは、旗に掲げた、南無宝勝如来（ナムホウシンジライ）南無多宝如来（ナムトホウジライ）南無妙色身如来（ナムメウシンジライ）南無広博身如来（ナムコウハシンジライ）南無離怖畏如来（ナムリフイジライ）南無甘露王如来（ナムカンロヨウジライ）南無阿弥陀如来（ナムオミトジライ）です。

七名の如来の名号を唱え、掲げることで、

苦しみの姿を変じて、鏡の中に、仏の姿・形に変えさせることができます。

また、人は、惜しみ、むさぼることのくり返しのなかに、本来の我を忘れるが故に、総てが備わって、よみがえります。

美しい姿形の象徴故に、本来の自分らしさが整えられます。

広大無辺の象徴故に、与えられた物が、身をうるおします。

つねに追いつめられるが故に、恐れが遠のき、安らかになれることができます。

じぶん自身の欲による飢えの渴きの連鎖を断ちきるが故に、わずかな与えられた喜びを、大きく頂けることができます。

無数の餓鬼の限りなく創り出す心故に、この如来を前にすれば、心が入れ替わり、平穏にして、無事に生まれ変わり、救われます。

施餓鬼会の法要とは、弥勒菩薩の兜率天内院、四十九院を再現しようとする試みです。

五十六億七千万年後に出現するといわれる、弥勒菩薩を待てない我々の、せめて、一年に一回の試みです。亡くなられた方々と、供養する施主と、多くの尊宿和尚様方との出会いの場でもあります。

今この祭壇に、食べ物を象徴として多くの供物を捧げます。これは、人は、死して魂となっても、旺盛な食欲に支えられているものだとの気づきです。そして、これは人間の貪欲さであり、気がつかないけれど、心の貧しさなのかも知れません。だからこそ、お施餓鬼会です。

これより、当山の檀信徒皆様方より願われ参加された、法号あるいは家々の先祖の名を、当山住職が読み上げますが、これは、安養の世界に往生を願う祈りです。香りによって届けたいと思います。また、お米と水の振る舞いは、我々自身の他者を思いやる心の育みの祈りとなります。

それは、心が充たされることの祈りです。

それは、潤いがもたらされることの祈りです。

それは、宇宙に偏満せる諸仏や神々に気づくことで、帰命することの祈りです。

さらに、この法要は、法華経の苦しみの心を救う道であり、みずからじぶん自身を見つめ直す誓いでもあります。

この故に、過去七世の父母に、今を生きる私たちの感謝を至心に捧げます。

それは、私たちの幸せを願い、無数の先に亡くなったもの達の心痛を安らかにして、生きとし生きる者が気づかなかった過ちをあらため、迷いの道から遠ざかることを願うものです。

ジテンキジンシュー 我ら、汝等に、この食を、施さん

命ある者の、自分が造りだしている世界は、この命ある者にとってだけ意味をもつ世界です。それを心と言うのですが、その中をいきながら、根源に達していると感じることができない。

「だから、途中なのだ。」と、ラマ僧は言います。

悟っても悟らなくとも、わたし達はこの途中にいることを忘れてはならないと思います。言葉を換えれば、未完成でしょうか。だからこそ、人の臨終に接して、知らずわたし達は、安らぎを求めます。

お施餓鬼の法要とは、時を経て、餓鬼や亡者に、永遠や安らぎという悟りや彼岸、完成を祈ることを忘れないための法要です。亡くなって久しく時をへて、日々、振り返ることを忘れたがちな者にとっても、これは途中にありながら、途中であることを無くす試みともなれば良いと思うのですが……。

永遠の命

多細胞の不死に近い動物が、この地球上には数多く存在するという。岡田節人(おかだときんど) (兵庫県出身、1927年生。京都大学名誉教授。生物学者、理学博士) 氏が言うには、十八世紀より知られており、生物科学においては原始的な知識の一つであるという。あえて不死に近いと称する動物は、プラナリア (正式の日本語は渦虫類) といい、ヒルのような形をしていて溪流の石の下などに住んでいるようだ。切っても切っても再生して元の通りになり、プラナリア自身、自らの体を前後に切って再生・増殖するという。遺伝的素性が同じの、自己の子供とは言えぬクローンのプラナリアは、かくて分離再生の増殖作業を繰り返して現在にいたっている。

氏が言うには、「このような生きざまで生きる動物の寿命を考えてみると、見方によれば、それは三日間だとも言えないでもなかろう。しかし、三日後に二分して生じた二匹のうちの一匹は、もとのと同じだ。別の一匹は新固体といえそうだが、本当にそうなのか？生殖を経由しないでつくられてきたのだから、これは分身であり、親子関係の全くないクローンなのだ。だから二分された時点をもって、新しい寿命の開始時点とはいえないし、またそれをもって、固体の生の終わり、つまり『死』とはいえないだろう。この二分切方式の生き方を続ける限り、固体の生命一寿命といえる一は持続する」。

つまり、見方によってはプラナリアは、永遠の生命を手にしていても過言ではないのではなかろうか。氏は更に言う。

「そもそも生死、加齢といった言葉の意味が、プラナリアにとってはさだかでないものになってしまっている。つまり、生き物にはさまざまな生きざまがある、ということであって、生命・自然を人間の実感だけから延長して眺めるのは、折角の自然のもつ光彩をかげらせるということだ」。

プラナリアにとっては、二分した後、脳も眼も再生されるという。ただ残念なことには、この動物は大変に死にやすらしい。環境の変化に大変に敏感で、住んでいる水質にちょっとでも気に食わぬとなると、懸命に逃げようとするらしい。おかげで、水質検査の道具として使われたりするようだ。いま死と言ったが、正しくは、半永続的なるべき寿命の切断であり、殺されたといえる。

誕生と死を繰り返す循環型生命体としての成長あるいは老いという過程がない生命体にとってみれば、誕生と死のメカニズムも存在しないことになってしまう。かれらは永遠をいつのまにか取得した存在であるわけだ。そうすると繁殖の必要性は、種の保存にとって最低限のものに限られるのだろうし、彼らが絶滅することの回避プログラムは、必要のないものになってしまうこと

になると岡田節人氏は云う。

一般的な生物は、自分の肉体的な変化の中で、つまりは成長と老いの過程の中で自らの存在を認識しつつ、次の世代に向かって自己の情報を発進し伝達するというプログラムを幾世代にわたって繰り返し、増殖し、種の保存を続けてきたことになるわけですが、彼らは生老病死のうちの生老死がないことになり、遺伝子という言葉自体も意味がなく、彼らにとっての存在への危険は、環境変化と外敵より自己を守る防御機能さえあれば良いことになってしまう。外敵より自己を守ることが、二分切方式だとしたら、彼らこそ生物の固体において、地球上、人類の目指すところの肉体の永遠性を手にした生物といえるのではないだろうか。彼らからしてみれば、生老病死を持つ固体は下等な存在なのかもしれない。

われわれ人間はここで視点を変えてみて、実は人間も生老死がないとなれば、われわれ人間の習性・習俗もずいぶんと変わってきて、世の中はどんなになるのだろうか。

結婚がなければ子供はいない。子供がいなければ、守るべき家族もない。教育は何十年いや何百年するのだろうか。延命のための医療はいらない。自分のクローンばかり増えてもしょうがないので、人口の増加もなし。富の蓄積は必要のないものになってしまうだろうし、自分のクローンが数多くいる世界では見栄を張っても競争しても意味がない。老化しないのであれば健康への心配もさほどなく、何歳までと人生設計することもないし、失敗しても取り戻す時間は有り余っていて、人類の目標である不老不死は達せられているのであるから、年金はなく今までとは全く違う考え方や目的があるに違いない。

私達は、”命”と言うとき、その命は常に自分あるいは固体を指していないだろうか。プラナリアにとって”命”と言うとき、実は我々にとって当たり前誕生と死の存在しない”命”のことなのだ。

「人間にとって誕生と死が存在しない”命”とは？」と考えたとき、考えられる命とは、我々を覆う命のことではないであろうか。命を育む環境、地球、宇宙。それは、自分を取り巻く総ての環境をつつみこむ存在そのものであるに違いない。存在そのものが続く限り、地球も宇宙も環境も存続するとするならば、我々一人一人の命も存在そのものの中で、永遠として生死を超えて、命を育むに違いない。

人は死ぬものだから、死にたくないのだし、病気にかかるから、病気にかかりたくないのです。老化防止のため運動をしたりするのであって、不自由な生活はいやだから豊かな生活したいし、競争するから勝ちたいのであって、不幸より幸せで居続けたいものです。人の願いをよくよく考えてみれば、これってプラナリアの世界にとっても似ていると思うのですが？

輪廻する葦（平成10年5月27日）

どうして家庭において三世代四世代の大家族の姿が見えなくなってしまったのか？ どうしていじめは起きるのか？ どうして、子供達は外で昔のようにいろいろな年齢そうに渡ってのグループを作って遊ばないのだろうか。

老人ホームや各種の施設がなければならぬ世の中なのですか？ 何故、皆行き着くところ、自分が大事と自分の事しか考えないのだろうか？ 昭和三十年以降、我々は何を求めて現代を歩いて来たのだろうか？ もちろん、それぞれの人があるゆる角度で、無駄を省く事を追求し、我々自身の生活の質の向上と豊かさと幸せを目指して来た事は、間違いのない事実です。でも、何故ですか？ 我々の求めて来たものは、何だったのでしょうか？

求めるその事自体を考えることも必要なことです。求めるということは、当然それに反する事は疎外を伴います。合理性や便利さ快適性面白さを追求すれば、それに反するものは我々の家庭内・企業内から排除されることとなります。我々が捨ててきたもののうちに、答えはあるのだろうか？

社会は管理しやすい、それぞれ均一の固まりに仕分けすることを求めます。各種の施設が林立し、組織が組成されるという事は、そのことによって排除も同時進行しています。すべての組織・施設は人が構成して成り立つ以上、排除は人間に及ぶわけです。また物を大量に消費する事に未来が開けるとしたなら、現代においての未来は悲惨を伴います。何故ならば、未来にとっての資源や繁栄を現代は食いつぶしているかのように思えるからです。未来にとっての現代は礎であるべきに思います。

礎は個人である私達一人一人です。いま、あなたの生まれてきた価値を問われた場合、あなたはどうか答えられるでしょうか。私達の血液や、からだを生物として考えた場合、私達の遺伝子を次の世代へと伝達するという使命を負っていると言ってよいでしょう。次の世代へと渡すという行為を、私達の祖先は何千年何万年という時を経ておこなってまいりました。そして今があります。

今という時間には祖先が行ってきた何千年何万年と言う時が凝縮されていると言っても過言ではありません。つまり過去と言う総てが含まれているということになります。そして一人一人という単位から何十億人と言う単位に広げてみると、実は世界中がひとつの生命体として考えてみると、この生命体も同じことをしていることとなります。命はひとつであると同時に、そのひとつの命は無数の命によって支えられている命です。私達はそのひとつひとつに過ぎないと同時に

、実は全体の命を代表するかけがえのないひとつの命なのです。

私達はその大きな命から次の世代へと情報を伝達す使命を持って生まれ、やがてその大きな命に帰って行きます。人間とは輪廻する葦と変わりありません。地上に生存する短い間、私達は生命維持プログラムをいじる権利を与えられます。ですがその権利は未来のためです。

礎は、ものの価値を命を次の世代へと継承する事に有ります。それぞれの人々が常にそれぞれの立場において、情報（価値観・考え方・物の見方・自分自身の生き様）を、次の世代に向かって発信し伝承する事が必要なのではないでしょうか？

その中に人それぞれの尊厳が輝きます。もちろんその為には、様々な人が一人一人謂いたい事をいえて、それぞれの人々が聞く耳を持っているという環境が大切ですが。

人が消費されない疎外されない世界を伝承できるなら、未来を含んだ今日も輝いているのですが？

連鎖する命（平成10年6月2日）

葬儀においてまた日常の生活の中で、お清めとかお払い・禊〔みそぎ〕と言う行為をよく目にいたします。何がきれいで何が汚いかということは、その社会における暗黙の決め事であり、また永いときを得て蓄積された個人観のものですが、時代を変遷しつつも底流に流れていると言ってもよいでしょう。時代に寄ってその底流の流れはあまり大きく変化しないものなのだと思います。これもひとつの不浄観ではありますが、裏切りがあります。官僚による密告。もっともこの裏切りも”正義を正す”と言う観念によって行われれば裏切者は官僚の社会であり、密告者こそ正義であると言う事になるわけですから、密告者の不浄観が社会に告発するということになります。そしてその不浄観を社会が受け入れられなくなった場合は、社会そのものに閉塞観がただよい、息苦しい社会になって行くことでしょう。

古来、インドや中国では、人間の死体の腐って土に返る様をながめて、人間の虚しさを知るのも修行の一つだったとも聞きます。昔、肉屋の中で生きた鶏の足をしばり、逆さまにつるして首を折り、羽をむしってつるしてあるのを見て、いまでも鶏肉を食べられない大人を知っていますが、何がきれいで何が汚いかと問えば、不浄観が問題になります。もっともこの場合は、嫌悪感と同時に人間の持つ悲しみの感情と拒絶観が体にしみつき、まざりあったものを思います。この不浄観と虚しさが、やがて仏教を興すことの源にあるといったら、研究者の叱責をこうむるかもしれないですが、少しはあったらと思うのです。この虚しさは、やがて空の思想へと発展したと言ったら、ますます叱責を買うかも知れません。

この虚しさを空あるいは無と言わずに、《実態が無い》ということから、この話を進めてみたいと思います。

この世界に存在する総ての物質、生命はそれ自身にとって、《実態が無い》ということと、また、この世界に存在する総ての物質、生命はそれ自身にとって、唯一のかけがえの無い存在であると同時に尊厳あるものであるということは同じことなのです。それゆえ、総てのものはあらゆる可能性を持ちながら、あらゆる束縛、拘束を持つ。

いま、世界は情報ネットワーク化により急速に狭まったかのように思えますが、実際は、私と言う一人の人格のネットワーク先が急速に拡大して、広がったということなのではないでしょうか。良く言われることなのですが、私に友達が10人いて、その10人の友達も10人の友達がいたら100人になります。同じようにして100人は1,000人に、1,000人は10,000人になります。私を中心として、実は世界中にネットワークは昔から繋がっていたのは事実です。ただ、私と言う人格がそのネットワークを実際に見、感知することが難しかっただけの事です。今も昔も、私と言う人間が誕生したその瞬間にネットワークは張り巡らされます。ただし

その情報の速度は極端に遅かったり、早かったりのまちまちですが。

赤ちゃんにたとえてみますと、母親から誕生した瞬間《実態の無い》（純粹無垢とも言う）赤ちゃんは母親と子供というネットワークを結び、直ちにまた時間をかけて、母親は母親と言う人格をはぐくみ、赤ちゃんは母親にとって子供という人格を形成していきます。そして二人目の赤ちゃんが生まれた瞬間、一人目の赤ちゃんと二人目の赤ちゃんはネットワークを結び、例えば姉と妹、兄と弟というように。ネットワークをはずせば二人とも独立とした尊厳ある一人の人間となります。このように、ネットワークで結ばれる事によって《実態の無い私》は、弟が誕生する事によって兄となり、姉となり、先生と生徒というそれぞれの経験の蓄積により人格を形成していきます。

つまり、ネットワークに流れているものは情報であり、《実体の無い私》を規定し、拘束するという性質を双方向にもつものですから、考えてみるとこのネットワークを無限に広げて行けば、《実体の無い私》は無限の可能性を人格形成、あるいは知識をつむことができます。ところが同時にそのことは、無限の束縛、拘束をも受けることとなります。私と言う実体の無い人間を中心として、世界が、宇宙がネットワークを結んでいるとはこの事をいいます。実際は私にとってのネットワークの世界はたった一つであるのですが、それぞれの私がそれぞれのネットワークを確立していることとなりますので、実はこのネットワークは共有されている事にもなり、それぞれの私がネットワークの中心に位置していると同時に私あるいはそれぞれの私は、ネットワークを支えている一人ということにもなります。このネットワーク全体を、《大きな命》と呼び、仏と呼び、神と呼び、地球環境、生命体と呼んでみましたら、総ての生命体は実はひとつの生命体と認識できるような気がするのです。

ネットワークの中を双方向に流れているものは、まさしく人を規制する情報です。兄と弟は互いに独立とした尊厳ある生命体であるのですが、それでも兄は兄であり、どう転んでも弟は弟として平等と差別の関係が双方向に成立いたします。私がこのネットワークに一石を投げれば波紋は世界中に広がると同時に、他者が投げた一石は私をいかようにも揺るがします。生命を持つと言う事は、翻ってネットワークを共有するという事でもあり、この情報ネットワークには、常に情報が流れて変化いたします。これを無常と呼び、このネットワークの関係を仏教では縁起といい、世界の有りよう、あるいは成り立ちを定義する言葉として重要な意味をもちます。

ネットワークは時間をも取り込みます。私にとって過去は常に今という瞬間を規制いたします。また未来は常に現在を規制することとなります。家にいて外出前、外は雨が降っているとすると、玄関を出る前人は傘を持ちます。家の外は未来です。未来は現在を規制し、現在に傘を持たせるのです。子供が来年の2月に私立の学校の受験があるとすると、未来の受験が今を動かすのです。これも時間の双方向のネットワークです。しかも私を中心としてです。

このネットワークも常に波紋を投げかけます。私達は過去を終わってしまったことと思うので

すが、過去は現在において始めて過去であり得ることを思うと、過去は過ぎ去った過去ではなく、過去も現在において常に変化いたします。《失敗は成功のもと》とは、言い得て妙なことです。未来も現在において、常に変化いたします。このことより仏教では無常と言います。今が始まりとともに大事な大切な今となります。この常に変化する世界と時間の中で、大切な今という瞬間に、人は変化しない、永遠、幸福、友情、安定を求めてやみません。ここにそれぞれの人にとって、心の問題が意味をもって来ます。

ネットワークの中心はあくまでそれぞれの私であるのですが、私の心は、いやな事があれば、ネットワーク全体を灰色に見ます。世界の端っこに、穴があったら入りたくなるのですが、穴に入ってもそこが世界の中心です。私が悲しめば世界も悲しむ事になります。どうもがいても私が世界の中心にいて世界を代表していると言っても過言ではありません。あるがままに生きるとは、一種の開き直りのような、現実を厳しく見つめた上での覚悟に似ている言葉です。命とはそれほど貴重なものです。私が薔薇色なら世界も薔薇色とはこのことを言いますが、私以外の人のネットワークの世界は多少は変化するかもしれませんが、私の色に染まりません。それぞれの人がある世界の中にあることになるからです。私は、それぞれの私を認めて、受け入れると言うことが大切です。

禅宗の修行とは、ネットワークのただ中において、独立とした尊厳ある自己を認識することにあると思うのです。そこに、真の自由である私を発見していただきたいとつくづく思うのです。ネットワークのただ中において不自由の世界を、今を輝かして下さい。それぞれの私の求める、変わらぬものを、永遠を、友情を、幸福を輝きの中に見出せることを念じて。

涅槃（平成10年8月12日）

涅槃（平成10年8月12日）

先日、脳の雲膜下出血にて重い脳障害が発生し、治る見こみがない人からの快気祝を頂いた。この悲しい祝い品は品物を各自で好きなものを選び、後日デパートより届くわけだが、ふと彼女も使うことが出来るのだろうかと考えてみたら、身体の中に寂しさがよぎった。痴呆性の老人のところに、病院へ見舞いに行った時のことだった。ある時は、彼女は目をつぶり見舞いのゼリーも口にせず、このままでは寝たきりになるのも時間の問題だと見えたものだった。翌日に行った時は、彼女は私の顔を見て笑った。ふと「起きますか」との問いかけに、彼女は全身で答えたように思ったので、私はベットを起し、大たい骨骨折の手術2週間ちょっと後の彼女の身体を足をベットから投げ出し、座らせてみた。彼女にとっては入院してから初めての腰掛だった。

元気だったのは一日で、また、具合が悪そうに眠る彼女の真実はどちらだろうと考えたとき、どちらも本物の姿なのだ気がついた。その姿は、本人にとって悲しくも有り、見るものを辛くやりきれない思いを誘うかと思えば、歩こうとする本人の意思を感じられてうれしく思うのも事実だし、一日の内の極端な変化でもあったのだ。

そしてその辛そうな姿を見たとき、かすかに「殺して」の声に、人の一生の無常なる試練を呪った。現代の医療では残念であるが、時がたてばやがて痴呆はもっと進んで、おそらく最後は、彼女は安らかな顔をして穏やかに眠るがごとくに、息を引き取るに違いない。そしていつか、彼女の菩提寺の和尚として、私は彼女に引導を渡すことになるだろう。後日、リハビリのための転院先で彼女は元気を取り戻し、笑顔が戻ったのが何よりうれしく思うと同時に、繰り返しの時間の進行の最先端は不確実性の真っ只中であるをつくづく思うのです。ただただ老年の姿の変わり身の早さとそれに追いつかない老年の心の中を、何とかしてあげたいと思うのですが、出来るのは祈りと希望を与えることのできない自分への慙愧のみです。

古来より仏教では、人は生まれ変わり死に変わりして、人の魂は永遠に輪廻を繰り返すと説いてきました。しかし現代では、現代と思っているのは私だけかもしれませんが、過去より未来永劫の間、人の魂が他の肉体に宿り繰り返すというようなことは想像の範囲を超えることであり、まして事実であるとは断定できないことと思うのです。しかしながら、ある一面においては、万物一体、地球は一つ、生命の連鎖と密接に関連していることと考えると、そっとしといたほうが優雅であると思うのです。

現在に至るまで、人は何兆人だか知らないが人の死のおかげで現在の自分があるわけですが、その人達の記憶と、遺体を含めての糞尿すら地上に記憶を留めていない。しいて言えば我々の大地

がその存在の証になるわけで、このことは物質としての肉体の循環＝リサイクルこそ、大地が人を生物を育むのは自明のことです。豊かな大地あるいは母なる大地が最も大切なことは、あたりまえのことです。その大地に人の肉体が消えて行くとき、人の思いや魂は何処に行くのだろうか？

過去、仏教の聖地インドではカースト制度や厳しい環境下、貧富や身分の差が激しく這い上がることなど困難な社会において絶望と悲嘆の交差する生に、更に生まれても生まれても辛く苦しい社会において生きるとしたなら、また限りなく困難な生を繰り返すとしたら、人は死んでも死にきれない。次の誕生に恐れ絶望を抱いたであろう。

過去の世界から翻って現代を考えてみると、このことは現代でも生命の連鎖を繰り返す人にとって、十分に通じることなのだ。公害病に散々悩まされ、辛く苦しい戦いを強いられた人々。ベトナムの枯葉剤による遺伝子変化は現在も悲惨なる現実の問題としてテレビにて報道される。ダイオキシンによる被害は数年先の未来を予感させる。オゾン層破壊はどうか？各種の食品添加物の問題。船舶の鉛塗料と海洋汚染。海洋投棄とゴミ埋め立てによる有害物質流出の問題は、海だけでなく、飲み水と作物への影響が心配であると同時に、これはいずれ一人一人の問題として、個人にのしかかってくる。

つい最近まで日本の水道水は安全であったはずである。浄水機や安全な水を我々は今求めている。ごく近い将来、安全な空気を販売する時代になると否定することは、あながち出来ないのではないか。自分の脳を含めて身体中ガンに犯され、また環境汚染により免疫力の極端な低下にさいなまれ、多くの人類が「生きたい！でも殺してくれ」と叫ぶ未来がくるかもしれない。しかしながら、もし怨念やたたりが、映画「もののけ姫」のように現実存在したならば、水俣の空はいつもどんよりと曇っているはずである。日本中いや世界中の戦争や被爆地、災害や事故の地は怖くて歩けない。

次の世代は過去の世代による負の恩恵の生活を強いられるとしたら、まさに人は命の連鎖を絶たねばならない時代に突入している。その上で人は生き続けなければならない、生きながら人は命の連鎖を絶たなければならぬだろう。ここに禅の必要性がある。

釈尊の悟った涅槃の内容を竹村牧男氏は著作【仏教は本当に意味があるか】で《マジマニカーヤ》の中の《聖求経》の文を紹介しています。

『修行僧らよ。かくしてわたくしはみずから生ずるたちのものでありながら、生ずることがらのうちに患いを見て、不生なる無上の安穩・安らぎ（ニルバーナ）を求めて、不生なる無上の安穩・安らぎを得た。みずから、老いるもの、病むもの・死ぬもの・憂うもの・汚れたものの中に患いのあることを知って、不老・不病・不死・不憂・不汚なる無上の安穩・安らぎを求めて、不老・不病・不死・不憂・不汚なる無上の安穩・安らぎを得た。そうしてわれに知と見とが生じた、－「わが解脱は不動である。これは最後の生存である。もはや再び生存することはない』

牧村氏は、この本の中において釈尊の無上正等覚いわゆる悟り、そして解脱・涅槃を過去の仏典

を屈指して追跡していて大変に面白い。

禅において最重要なことは、釈尊の追体験以外にない。この立場に立つてこそ、釈迦・達磨は大先輩になり、臨済、黄檗、南泉は先輩になることができるでしょう。そしてこの立場に立つて更に一步を踏み出すことがそれぞれの独立とした境涯をかもちだすことになると思うのです。その一步を踏み出した言葉を禅録で見てください。

「和尚は百年の後どこに行かれますか」

南泉和尚「山下の檀家で一頭の水牛になる」

「凡の次元より聖の次元に入るとはさておいて、聖の次元より凡の次元に入るとは、どういう場合でしょうか」

曹山和尚「一頭の水牛に成りきるころ」

南泉和尚は、日ごろ「およそ沙門たるものは、畜生の生活を行じなくてはならぬ。畜生の生活を行じなければ、道理というものはない」と説いた。

「そもそも、南泉は何のつもりこのことを言ったのでしょうか」

帰宗和尚「畜生を行じても、畜生の報いを受けぬところだよ」

趙州和尚「実在を知っている人は、どこで休止しますか」

南泉和尚「山の下で一頭の水牛になる」

南泉和尚「諸仏祖師は有を知らぬ、山猫や狸狐の部類は却って有を知る」

古来、南泉和尚が活躍していた時代、やはり前世の負債を重く背負った個人が死んでなお負債を払うという時代でした。一般には死んで浄土をめざすわけですが、南泉和尚を含めてすべての禅僧は西方浄土に旅立ちません。畜生となって働き生活し、活発に心を躍らせることに、人としての活躍する場所があると受け止めます。また畜生を自らの煩惱と言い換えてみますと、悩みや苦しみの真っ只中に宿命を背負うことにもなるわけです。真っ向受け止めむしろ積極的に悩みや苦しみの中に生きるところに、本来の自己が主体となって、自己が新たに世界にかかわって行くこととなります。そこに悲壯感はなく却って爽快感こそ見て取れると思うのです。

私は自由という言葉をよく口にいたします。そして、その自由の表現として、自己の世界の一瞬の耀きと言います。この耀きのまま、不自由のまっただ中に没入したとき、輪廻あるいは生・老・病・死を超えて、あるがままの自己と真の自由を得ることが出来ると思うのです。このことは『鏡』において書いたごとく自由なもののみ方と、だけど自分はこう狭くしか見ることが出来ないのだという、諦めの中での落ち着きどころに似て、すべては元のままの現風景を映し出して、自己の主体は細部を見ることも可能となります。

武者利光氏の著作『ゆらぎの発想』のなかで、「ゆらぐことが生きていくことの証であるということを知り、迷いが多くて自信を失っていた自分に生きる力がわいてきました」と、読者の感想がありました。

氏は「常に典型（標準型）からのゆらぎが存在することによって、典型の近くにどんな異なった生存の条件があるのかを認識することができます。つまりゆらぎは、典型の近くにある、さまざまな生存のための条件を認識するための、触覚の役割を果たしているということが言えましょう」と言います。典型を見極める自己の鏡がとても大事なことです。武者氏には叱られてしまうかも知れませんが、典型を平常時の心と置き換え、ゆらぎを感情の変化や悩み苦しみと置き換えてみますと、「ものごとなんでも進化するためには、ゆらぎが必要です」の進化を生きる力、たくましさ、積極性と置き換えますと、悩みやつらさマイナスものこそ、人を人として自立させる糧になります。

更に煩惱を《ゆらぎ》とみた場合、そこに落ち着き場所をもうけてしばし、ゆらぎの中で、じっくりと自らのゆらぎと付き合ってみてはいかがでしょうか。南泉和尚も喜ぶかも知れません。武者利光氏の言葉です。

『人間の進化にもゆらぎが必要ですか？

私が高校生の頃、生物の教師に「君たちは、親に似ることが遺伝だと思っているが、実は似ないのも遺伝なのだよ」といわれました。当時は何を言っているのか、その意味がよくわかりませんでした。ゆらぎを相手にしていると、わかるようになりました。進化にはゆらぎが必要です。親と子が全く同じ、子どもと孫が全く同じだとすると、進化はありません。進化がなければ、その生物は環境に適応できなくなるときがあります。生物の形態が、全く同じではなく、少しずつ似ていないという遺伝があって、初めて進化することができます。この親と子の違い、子と孫の違いが、ゆらぎです。

物事、なんでも進化するためには「ゆらぎ」が必要です。生物の形態がゆらいで、その中から環境に適したものが選ばれて生き残っていくことになります。』

私は、武者氏の”進化”を”成長”や”老い”と読み替えてみますと、このゆらぎの意味することは大変に興味深く、あるときは悩みに、また立ち止まって深く自分の存在について考えてみる思索のことだったり自分のことに当てはめてみるとわかると思います。ゆらぎの中に自らの存在の湧き出る泉があるように思います。

もともと人の心は常に耀いて、生き生きと活発に活動しています。そここのところをどう見るかです。「心は太虚を包んで元気を孕むものなり」マイナスはプラスに、プラスはマイナスに、自由は一心にありというところです。

鏡（平成10年7月25日加筆）

鏡に鏡を映すと、鏡はその性質をいかんなく発揮して限りなく鏡を映す行為を重ねる。その闘志は滑稽に見えて悲しい。

人は外出の時に目的や場所を思案して服を選ぶ。その服が季節と合っているだろうか、乱れていないだろうか、おかしくはないだろうかと鏡の前に立つ。鏡は鏡の前にある事物を忠実にただありのままに映すのだ。人は鏡の持つ客観性をおのずから知り鏡の前に立つが、おのれ自身に客観性を持たぬことを知らない。それゆえ鏡の前に立つことは必然に長くなるが、独断にたければ短くなるのも道理に違いない。

幾世代にわたって人は鏡の持つ魔力に引かれ、数多くの物語をつくり、そして考えてきた。鏡の前で「この世で一番美しい人は誰か」と問う女性がいたり、水面に映る自分の容姿にうっとりときを忘れる人もいた。鏡の前に据わり涙を流す女性を映した映画を見たこともあった。鏡の前に立つことはこれから始まるドラマの初めであったり、あるいは終幕の後であったりと。鏡に向かって口紅をさす女性はけっして鏡の中の女性自身に、口紅を塗ることはできないのが不思議に思えたりもする。

鏡の色を考えてみると、日常よく使う鏡は銀色の鏡なのだが、ものを映す鏡の中の鏡の色は自分の色を持ってはいない。もちろん銀色でなくてもよいわけで、内容は表面粒子の細かさとか並び方が光沢を造るのだろうか。すると、鏡とは物質の表面の状態をたんに云うだけであって、物質は問わないのかもしれない。物質の表面の輝きが鏡を造るとしたならば、鏡自身が自分の色を持ち得なくなったときに初めて、鏡は鏡となるのだろうか。

昔、中国で瓦を一生懸命に磨いて、鏡を造ろうとする禅僧がいた。心を磨いて仏心を造る喩え話なのだが、ひょっとしたら現代の技術を使ったら鏡になっていたかもしれない。すると歴史は少し違っていたかもしれない。

人は自分自身の中に何らかの鏡を持つといえる。

江戸時代、赤穂に盤珪禅師がいた。不生の仏心を広めた禅師であり、禅師の説く不生の仏心の話はわかりやすく庶民に好かれた。

説法の日、「私が話すことを聞こうと思って、この場所に皆さんおいで下さいました。ですが、話を聞いている間にも、皆さんの不生の仏心は、寺の外にて、犬が鳴きますと、犬の声と聞き知り、鳥が鳴きますと鳥と知ります。目には赤白の色を見分け、鼻によしあしの香りをかぎしります。見ようの聞こうのと覚悟無くて、見たり聞いたり致すところが、靈妙な仏心が不生にして、見聞きすると申すものでござる」

「仏心は不生にして、しかも靈妙でござる。仏心には念と物が在りませんから、色々様々の念が起ころうが、払おうとも、止めようともかまわず、取り合わねば、自然と不生の仏心に叶います。不生の仏心にはもともと、迷い無いことを知りなさい。また、一切をよく照らし別けまする」

「鏡は元来無心なものでござる。写りたる影を除こうとも、除くまいとも存ぜず致さぬが、明鏡の徳と言います」

「見ようとも思わずして、20年来の友来れば、友と知り、火にかざせば熱いと知る、靈妙なる徳というものでござる」

私がまだ高校生の頃だったと思うが、夏休みに信州の霧が峰に行ったことがあった。ただ覚えていることは真っ白な世界だったことだ。冷たい風に霧の白い濃淡が流れて、私が流されているのかのように錯覚したことがあった。自然の猛威と美しさの中で、くるくる舞う小さな舟のような自分の存在が、何かに向かって太刀打ちできない存在だということを思い知らされるかのように、それは美しい怖さだったと思う。白い闇に違いない。

鏡は暗闇の中で、像を映しているだろうか。それは光の無い世界で、物を映すという行為はあり得るのだろうか。光がなければ物は鏡に映る筈がない。鏡が私自身だとすると、闇にあるのは私の意識そのものを映すことになるのだろう。

年老いてここは何処、家に帰らなければと自分の安らぐ居場所を求めて、非日常の少女時代の我が家や兄弟を探してさまよう老人の鏡は、いったい現実の何を映しているのだろうか。鏡は鏡として忠実に現実の在りようを映していることに間違いはないのだが、老女は闇の中にと変わらぬ。光り輝く現実その物が闇と化した老女の心意識は辛く苦しい。

辛く苦しいがゆえに、自分自身をも忘れて欲しいと思うのだが、人は自分自身を忘れることは至難の技だ。そうして夢の中の世界を「ここは、どこ！」と、今日もさまようすがたは、悲しく痛ましく感じる。健康で、ものの判断力は一人前と何ら不思議に思わない健常者の鏡は、はたして現実をそのものに映しているのだろうか。おそらく誰一人として、忠実に映している人はいまい。だから、人は迷い、苦しむ。そして、楽しいのである。ここに、人間の地に付かぬ原点があると思うのだが、どなたかお聞かせ願いたいものである。

先日ごく親しい友人と話していて、彼の言った言葉が示唆に富んでいる。彼は週末になると聖路加ガーデンにて水泳をするのだが、最初の300メートル400メートルを泳ぐのに息を切らして何年もかかってしまった。700メートルを連続して泳ぐのに数ヶ月かかった。其れから2

、3ヶ月で何時間も泳げるようになったのだが、

「2キロぐらいは泳ぐだろうか、まず背骨をまっすぐに意識して肩の力をぬき、全身の力をぬいて泳ぐのだが、不思議なのは水の抵抗を意識しなくなってしまうことなんです」

自己に鞭打ってがんばるその先に、頑張らなくても全うする忘我の自分は、すべてを見とおして、染まらない自分でもある。そういえば、平成10年の不景気に、

「実は、こういう景気だからこそうちあたりの商売に光が当たるのです」と言った人がいました。多品種少量の廉価で機能性に富んでいるカバンの会社なのだが、多品種ゆえに生み出すのが大変と思われたが、「大変だったのはもう通り越してしまいました。今では、お客さんや従業員に支えられてバッグが随時生み出されています。今は楽しいです」と、この社長さんも肩の力を抜いて、感謝にあふれていました。

自分自身を忘れることは、まさしく現実を受け入れる大きな一歩であり、私自身の意識が闇そのものとなることでもある。私は太虚そのものとなり、宇宙となることによって、初めて私自身の存在になるに違いなく、ここに真の宗教のあるべき姿がある。（平成10年7月25日加筆）

流星

今、われわれは輝いているだろうか！

流星の軌跡を追うか！

それとも、流星の輝きそれ自身となるか！

人の一生をよく、流れ星、流星にたとえます。夜空に流れる、流星のように時間は短くとも、それぞれに輝いて軌跡を描いているとも言えるからです。

人の死は失うことと得ることのシーソーです。

夫や妻の死は今の半分を失い、親の死は過去を失い、子供の死は未来を失い、友の死は一部を失うといえます。

失うことによって、夫や妻を知り、親を知り、子供や友を知り、自分を知ります。築いたものが大きければ、失うものも多く、得ることも多い。失ったものが大きいか、得たものが大きいか、死はさまざまに、残された私達を試します。

人が誕生したとき、私たちは何者にも染まらない、無垢の精神と肉体で生まれてくると言います。しかしながら、実際には、人は決められた時を、自らの中に刻まれて、誕生してくるともいえるでしょう。空を渡る鳥たちのように、ふるさとに帰る時を守ると言う、時の番人を、自らの肉体の中に住まわせているともいえます。

時の番人の登場の時刻は、私達のうかがい知ることの出来ない時間です。このことに備えるために、私達は、私達の命を、いつでも、本当の自己とは何かと、知る必要があるといえます。

そのことは、先に延ばすことはできない、いつでも、今ここが最後の場所であると。そしてこのことと同時に、今ここに、私はよみがえり再生するという。

ギリシャのエピクロスは、「私が存在するときには、死は存在せず、死が存在する時には、私はもはや存在しない」と語りかけてきます。言葉は時を越えます。

このことの意味を考えてみると、私達は、自分の誕生と死、そのものを確認するすべを持たないということです。自分自身の終末の時を迎えることはあっても、現実には、生の内に、自分の死そのものを絶対にできないということです。私達に出来る事は、自分の生のみを、最後まで生き続けるということです。

このことは、私たち個人個人の意識にとっては、始まりも終わりもない世界を持つともいえます。始まりもなく終わりもない世界には、残された者の行く末の心配や、この世界から居なくなることも、世界の消滅ありません。

確実な死とは、生き続ける、家族や友人・知人の生の中に、さまざまにゆだねるという意味を持つのだと思います。人の生き死にを確認するすべは、自分にはなく、遺族や友人知人、他者に

あるといえます。

多くの人は、私という存在そのものに疑問を持つことは少ないかもしれませんが。しかしながら、状況によって、私は、いたたまれず、我慢ができなく、得心が行かず、憤りを感じるものです。特に、私がないがしろにされる、置いて行かれる、ついて行けないという時、一人という対象化された自己と、対象化された他者や社会の問題に直面いたします。

この原因は、私という自己の形を運ぶことにありそうです。

川を人の一生の時間と空間として見た場合、橋の上に立つ私を今の私とすれば、上流の川は小さい頃の私であり、これより下流の川と海はその後の私であり、川は私の総てであると言えば、上流の川は眼には見えないけれど、今も流れて在り、下流の川は海に今流れ込んで同時に有るといえるでしょう。

自分が今、存在すると言うことは、総てが存在して、私を表現してくれていることだと、仏教は教えます。さらに存在するものは時としてあるといえ、すべての時が、今を輝かせていることに気がつくのです。

人が誕生し、成長し、病気、老いる、そして死、これら総てに、時間を運ぶ自己が、かかわっているように思えます。

考えてみると、私達が充実している時を過ごすとき、つかの間の安らぎを得るとき、幸福なとき、ほっとするとき、時間は影のように表を見せない。

もし時間という概念がなかったら、私達は私達そのものをより実感できるのかもしれない。時間が私達を束縛し、苦しめ、悩ますといってもいいでしょう。

さて仏教の時間論は、釈尊登場より今日まで、”永遠の今”を主張としています。現在を中心に過去と未来を持つ現代人に、絶対現在を認識することはとても難しいことです。

過去や未来はただ今の命に集約され、自分を離れて時間や存在はあり得ない。存在するものはすべて時間としてあると、そしてその時間は”ただ今”があるのみであり、その今のまっただ中には、時間は存在しないことになる。

瞬間とは存在しない時間であると同時に、総ての時が含まれるという時間でもあると思うのです。

そんな時間の、未来は現在を、時に不安にし、時に愉快にします。過去は私達を縛り、現在を未来をいざないます。人は、現在が未来を過去までも溶融する智慧を持つことを、理解できません。移ろい変化する時の波間を、

人は翻ろうされ、逆らい難く、人はそれを運命と呼び、彷徨うことを煩惱の海といいます。

真の存在は知覚を超えて時を止めます。其のことは存在への結びつきを無くすことから、始まります

自分を対象化して、固定化して描かれた自己ではなく、思い描いて創造した自己でもないところに働く自己、それこそが、今ここに私は完結している。今ここは、最後の場所であると発言

する、生きる主体としての自己です。

詩人ウィリアム・ブレイクは「一粒の砂に世界を見、一輪の野の花に天界を見、一握のうちに無限を思い、一時のうちに永遠を思い」と表現いたしました。私達が、何ひとつかけていないことを知らせる為に。

人が誕生して年を重ねる先には、必ず行き着く先があります。それは、消滅か誕生か輪廻か。ヘルマンヘッセが八十五歳で亡くなる四年前の作品、”野の仏”の中にある一節が答えを示してくれているように思います。

「人の一生は、みずから朽ち、消滅して、かたちなき限りなきものとなることへえの旅路です」と。

かたちなき限りなきものとは、永遠の一なるものの、あらゆる変容のしるしです。

土と水と炎と風のなかで、かたちをはなれ、その意味の完成を求めています。

仏陀は「姿形によって私を見る者、音によって私に従う者は、吾れを見るものにあらず、さとり目醒むるものこそ、つねに吾れを見るものなり。」と永遠の一なるものを説きます。

答えは、貴方自身の中にあると同時に、貴方自身そのものです。

古来、道を求めた禅の先人達は、自由を他に求めず、無我から自他不二を通り越したところに働きいずる大悲心をもって、真の自由を得てまいりました。

真の自由とは輝きそのものに違い有りません。

一瞬一瞬動いてやまぬ心に正常な知識の光があり。

一瞬一瞬動いてやまぬ心に余計な分別以前の明瞭な知覚の光があり。

一瞬一瞬動いてやまぬ心に平等な知見の光がある。

それぞれの光が集まり智慧を構成し、その働きが輝きとなる時、私達は変容そのものとなり、世界を時間を自由に羽ばたくことが出来るでしょう。

流星の奇跡を追うか、それとも、流星の輝きそれ自身となるか。

TAO（平成11年1月3日）

インターネットという情報ネットワークが凄まじい勢いで世界中に張り巡らされて、国境と言う概念が薄れてゆく。この波に乗り遅れるかによって勝者が決まるかのように、あらゆる既成の体系が変化の波の中に翻弄されている。対応を一步誤ると取り返しのつかない事態となる。何故ならば、構築体系化されたものは、次なる体系に、常に変化し再構築されなければ維持できないからだ。

お金や思想がその波に乗っかりまたたくまに、世界を何周もする時代に突入する「時代」になってしまった。

そんな時代の人々を見つめると、不景気も手伝ってか、自然と家庭や家族への回帰現象がおきているように思える。家族よりさ迷い出た人間は、犯罪を助長するかのようになり、人を襲う。社会は新たな規律や道徳を求めて動き出している。国家や世界が分裂と統合を繰り返し、すぐ目の前に迫った二十一世紀を模索している。

だが、来るべき時代に即応したビジョンは見えてこない。モラルも見えてこない。社会はより魅力ある秩序を探して、混沌の海の中をさ迷う。

社会の基礎となる核は、家族や家庭だ。その器は家である。

中身は一人一人の集まりであるのだが、家族を超えた大きな塊が秩序を求めてさ迷う時、その核となる社会の単位は結集して、核内に堅固な秩序を本能の回帰するが如くに形成する。そしてより大きな次なる秩序を形成して行くかのように見える。次なるより大きな秩序とは、新しき国家か、それとも家族単位で世界を漂流するか。

道はその家から始まる。隣の家に行く道。会社への道。学校への道。友達のうちへの道。仲間と集う場所への道。どうやら、第三の道というものが出現してしまった。それがインターネットという獣道だ。自然と対峙しない無機質なケーブルの中の道、あるいは、電波と成って空間を突っ走る道。瞬間に生み出された意志だけがその軌道を走りつづける。家族の一人一人と言う単位に直通する道。だが、道というからには、必ず訪ね行く場所がある。

ある僧が尋ねた。「道とはどのようなことなのでしょうか」。

趙州和尚が答えた。「その垣根の外にある」。

ある僧。「その道のことではありません」。

趙州和尚。「ではどの道のことだ」。

ある僧。「大道のことです」。

趙州和尚。「大道のことなら、長安に通じているよ」。

あまりにも有名な禅問答であるが、京都長岡禅塾の半頭大雅老師の言葉である。

「道というのも、もともとは、こっちの家からあちらの家に行く道なんですね。その道を修禱（しゅうふつ）する、ととのえ禱う、それが道徳ということらしいんです。だから、今の日本のように道路がきたないのは、人と人との関係がうまくいっていないことのあらわれ、ということになりますね」。

家族回帰は、最少単位の人と人との出会いや、結びつきを現実的に反省し整える姿なのだと。大道とは、現実的に、反省し整える姿、そのモノ、真っ只中にあるのだと教えてくれています。どうも、我々は先を急いで、目的地を目指しますが、実は真の目的地は、目先ではなく歩くそのものの中にあると言えます。

『人の道』と言うも、『天の道』というも、すべては今歩いている足元から始まります。私が歩くから道は存在すると同時に、歩いている私が無ければ、その道も存在しません。

四大

…土と水と炎と風の中を…

仏教で、地・水・火・風を、四大と言う。我々の肉体を形成する元素を指す言葉であるが、私はこの言葉が好きだ。

地は糧である。土は大地に、我々が生れ、育まれる総てを含んで、そして我々の帰る場所でも有る。母も大地より生れることを思えば、大地は穢れのないものでなければならない。我々も汚染されることを思えば、地球を汚染しなければ発展しない文明は、いずれ滅びる運命を持つことになる。悲しい運命をもって生れた子供達の未来を、何とか明るく輝いたものに出来ないだろうか？ 仏陀は『人々が病むために、吾もまた病む』と言ったという。その言葉から、仏陀を大地に連想しすると、大地を傷つけないことは、我々のつとめとしたい。

水は潤いである。言うまでも無く命を支え、心を潤す水は、一滴より始まって大河を形成し、海に至る。このことは、道そのものとして、姿かたちを変え、やがて大海を形成する。その大海より人類が誕生したことを思えば、我々は水その物と言えるかもしれない。我々自身が限りなく潤う為に、慈しみと悲しみをたたえて、人に接し、水を注ぐことが大切なことである。

火は命である。命は炎の中にともし火続ける。我々の心のざわめきは総て炎として、我々を焼き尽くすかのように、青い火、赤い火、大きくなったり小さくなったり、心の在りかを示すと同時に、命そのものとして存在し、私達の体内で燃焼する。永遠をつかさどる炎は、けっして私達が消滅しても消えることはない、そのことを私達は胸に刻んで、未来へ後を託そう。

風はさまざまな物を運ぶ。風は季節を運び、風は人を創る。人が歩けば風を起こす。炎を盛んにするのも、また消し去るのも風が吹くことによってであり、そのことに、風に真正面に向かうことも、また背を向けて除けることもある。風は人を、植物を鍛える。私達を運ぶ。

土と水と炎と風の中で、人は生れ、育ち、老いそして形を離れて、その意味の完成を求めています。揺らめかないために。

挨拶

挨拶（あいさつ）とは、もともと禅の言葉で、問答をくり返し合うことです。そこには、真剣さがあり、切迫した気迫の応酬があります。挨拶は、立ち止まり、思い迷うの意味がありますから、挨拶は、そんな挨拶に、切り返して迫るのが、挨拶の本意なのでしょう。

ずっと以前のことだが、「不思議だね。挨拶の言葉って、どうして今、現在のことを、問題にしているだろう」と、言われたことがあった。世界共通のことだそうだ。

「おはよう」「今日は」「今晚は」「最近会わないね。元気」

「どうも。どうも。お久しぶりです」。

出会いの挨拶は、当たり前の話ですが、貴方の今、ここ、どうしたのを問いかけます。時間、場所での状態を問います。

では、別れの挨拶は、「元気でね」「またお会い致しましょう（それまで元気で）」「いつまでも、お元気で」と、未来の状態を祈ります。

挨拶とは、今の状態を問い、未来の状態を祈るともいえます。

挨拶を出来ないでなくて、しない子どもが増えている。

この子達は、人との大切な出会いの瞬間、人と人とが会うということから起こるさまざまな実りを、拒否することに等しいということに気づかない。何故なら、人が生きるということは、何かしら自分以外の人や社会と密接に関係することによって、人は自分を知るのですが、挨拶しないことは、その出会いを、拒否することに繋がるからです。自分を知ることは、他人を知ることでもあり、他者とのかかわりを常に受けることを知ることにもなるからです。

朝起きて、「おはよう」。学校に行く時は「行ってきます」、それすらない家庭があるのです。しかしながら、挨拶を礼儀と等しくすると、こんな言葉があります。

『最もよく礼儀に習熟した人は行動するが、これにこたえるものがないとき、袖をまくりあげて相手を引っばろうとする。それゆえに『道』が失われたのちに、『徳』がそこにあり、『徳』が失われたのちに仁愛がそこにくる。仁愛が失われたのちに道義がきて、道義が失われたのちに礼儀がくる。およそ、礼儀は忠誠と信義のうわべであり、騒乱の第一歩である』。

ふと、思い出したが、この言葉が”老子”か”孔子”の言葉だったやら、誰だったか思い出せない。

挨拶は礼儀の内に含まれるものかもしれないが、別のものと考えたい。他者と自分との関係の接続詞だからです。

多分、挨拶できない子ども達には、人と人との関係において大事な実りを欠落することになる。網の目に喩えますと、魚を捕る網の一つ一つが、それぞれの子どもの達だとします。その網を、海でも川でもよいから仕掛けます。魚がやってきまして、一つの目に掛かったとします。

魚をとった目は、他のたくさんの目に対して「どうだ上手いだろう。こんなでかい魚を俺様は一人で捕まえた」と選んで、他の目を、何の役にも立たないお前達だと思ったとしたら。

この一つの目は、自分で気がつかないけれど、他のたくさんの目と、密接にかかわっていることを解らないのです。それは、他の目は、魚をとることはできなかつたかもしれませんが、全体で大きな網を構成していることを、理解できなかつたことになります。他の目は、魚を取れませんが、他の目がなければ、魚を捕った一目は役に立たないのです。それぞれの一目は全体を代表する一目であり、それぞれの一目は全体を支える一目であり、合わせて大きな一枚の網なのです。

挨拶とは、一目が他の目に、結びつきを確認する意味があるようにも思えるのです。そして全体を構成する一目にとっての役割を、人間に置き換えて考えてみた場合。人は、それぞれに身体的、精神的、環境的にさまざまな違いがあるのですが。次のことが大切なことです。

- 一、それぞれの人の、生き方が大切にされること
- 一、それぞれの人の、違いを受け入れること。
- 一、それぞれの人の、幸福を願うこと。

冥福

同じ町内にある明治小学校は、陽岳寺にあった寺子屋が発展したもので、来年で130周年になります。その校章は○の中に『明』が記され、燦然と輝く光線が八方にのびたデザインです。校章の由来には「若き子らの学び舎にとって、生命の根源としての日月と、成長の根源としての水と躍動する大気の中で愛と勇気の智恵を象徴する緑の大樹を形象化したものである。日月は、明治の明のシンボルである。」とあります。

『明』を夜と昼、光と闇、見える世界と見えない世界というように対立するものを含めた世界を極めることを、この校章は示し、これこそが教育の眼目ではないかと考え、明治の『明』を乗り越えた先人達の卓越した見識をみることができます。

さて、人が亡くなってから、通夜・葬儀・年に幾度となくの墓参・そして数年ごとの年回に、故人を偲び、冥福を祈ります。こうして墓守を続けて思うことは、いつも絶やさない密（しきみ）や花が飾られているお墓があるかということ、彼岸とお盆と年末か新年に花が飾られ、線香が手向けられる墓が大半なのですが、淋しくなるのは、ほとんどと言っていいほどに、墓参に訪れる人がないお墓があることです。

毎朝、墓地を掃いて、訪れる人の居ない墓を前にして、ここに眠っている人の葬儀をしたことがあり、遺族が社会的に地位がある人だったとしても、今は良い子ども達や家庭に恵まれていたとしても、今の自分は、もちろん本人の努力により今の環境は在ることですが、やはり訪れることがなく、苔むした墓を見ると、後継者が居なくなってしまったのならともかく、立派にいることを思うと、寂しいかぎりです。

見るに見かねて、その墓石を洗って苔を取ると、その墓の主が「すまない」と、声を掛けてくる気がします。亡くなった当初の悲しさが嘘のようです。年数が経てば仕方ないものかと思うものの、中には、連れあいを葬って後、あとは私の楽しい人生とでも思っているとしたら悲しく思います。

「ご冥福をお祈り申し上げます。」の言葉に、辞書は、『冥福』を、死後の幸福と記しますが、幸福とは、安らぎと解釈いたします。しかしながら、この『冥』の字は、恐い内容を含んでいます。

日と六とで十六日の意であり、何故に十六日かということ、月が十六日を過ぎて、欠け始め暗くなることを指し、更にウ冠で覆うことは、『幽冥』となることであると、大漢和辞典にある。しかし総ての意が、暗く奥深い中で、『冥合』のように、暗黙の間に意志の一致するという意味を持つこともあり、『冥婚』のように、死して男女を一緒に添い遂げさせる壮絶な恋言葉もある。しかしながら、『冥』は徹底して暗く深いらしい。

そこで『冥界』とは、暗くて深いかどうか解らない世界ですので、真っ暗闇では我々自身の姿も見えないと同様に、この『冥界』は、自分自身の姿形・精神もはっきりとは、見えないのではないかと思います。

そんな『冥界』の『冥』で覆われた冥福を、“死後の幸福”から“見えない幸福”と理解した方が幸福の意味が研ぎ澄まされると思います。見える幸福は、壊れやすく一時のものであり、その状態を維持することを考えれば簡単に苦に衣替えするのです。苦を含んでいる幸福と異なって、絶対の安らぎこそ、“冥福そのもの”であると思います。

ですから、現実には直ぐ側（そば）に冥界があったとしても、否、現実には裏表の世界であったとしても、一枚の紙の表面が、裏面を見れないように、また裏面になれないように、私達には見えなくてよいのです。もし私達に見えたら、私達が『冥界』の住人になったということですから。

「冥福を祈る」とは、亡くなった方の“絶対の安らぎ”を、真摯に観念すること、それが祈ることなのではないでしょうか。また、そうすることが私達の安らぎでもあることに気が付くべきです。祈るという行為は、心が渴望し揺らいでいることでもあります。表面的、形式的に祈るのはいけません。こちらからはあちら側の姿形は見えないことは話しました。では、相手からはこちらの姿は見えるとしますと、祈るという行為を忘れてただひたすら祈ることが必要なのでしょう。何だか子どもの頃に読み聞かされた、小泉八雲の“耳なし抱一”の話に似ているとおもいませんか？因みに、抱一の全身に書き込まれたお経は、『見えない幸福』を謳っている般若心経です。これは本当に心を込めてお祀りしないとはいけません。

生前おばあちゃんが好きだった食べ物・飲み物を供えて、「おばあちゃん春になりましたね」とか、孫の卒業証書を供えて「太郎も中学生になりました」とか、「私もこんなに年を取りました」と家族をさらけ出すことが、おばあちゃんの冥界での冥福をお祈りすることの本質なのだと思います。さらに言えば、冥界との対話なのだと思います。私達一人一人がしなければ、誰がしてくれるのだろう。

今、私達が社会の景気や政治・経済に忙殺され、目の前の事に振り回され、安らぎを得たいと思ったとき、私達の心に潤いや味わいというものが必要となすなら、『故人の冥福を祈る』ことそのことこそ、私達の安らぎでもあります。

私達は、普段目に見える世界だけで物事を判断しています。『明』と『冥福』を通して、目に見えない世界と見える世界は別のものではありません。耳に聞こえない声、舌で味わう事の出来ない味わいに触れてみる事が大切ではないでしょうか。

（四国の実相寺、やんと師からご指示を仰ぎました）

盂蘭盆

仏説盂蘭盆経

《釈尊がコーサラ国の首都・舎衛城の祇園精舎にいたときのことで、神通力が多才な目連尊者は、亡くなって久しい母の姿を見たいと、そして、もし苦しみを受けていれば、助けたいと思ったのです。

そこで、母を見てみると、やせ細り眼窩がくぼんで、恐ろしくも餓鬼となっているのではありませんか。目連は悲しみ、哀れんで、母へ食べ物を差し出したのです。母は喜び、食べようとしたのですが、食べたいと思い、手を出すと火になり、炭となって食べられません。さらに苦しむ母の姿を見て、目連は泣きながら、いたたまれずに、釈尊に一部始終を話し、どうしたらよいのかを問いました。

釈尊は、「母親の罪が深いこと、それは物を惜しみ貪ることこそ餓鬼に生まれる原因である」からと目連に、告げました。すると、目連は、考えて、母がこうなった原因は、母一人のための行為ではなく、子供たちの幸せを望んだためなのだと、釈尊に母を救う方を、すがりました。

「目連の母への思いはよく解った。いかに神通力があっても、今の母を救うことはできない。多くの衆僧と威神の力でこそ、母は救われる」のだと。

母は業によって、餓鬼となった。その業による報いから解き放れる方法の一つが、七月一五日、僧自恣（そうじし）の日、修行を終えた僧たちに、ご馳走を献じて供養することだと告げたのです。そして、七月一五日、衆僧たちが、供養する人々の様々な願いを、心静かに禅定し祈願して、その食を受けると、目連の母は、この日を限りとして、苦しみから逃れたのでした。

釈尊は目連に、「生み育ててくれた母以外の、あらゆる父母の苦しみを救うため、孝慈をめざすあらゆる人は、この日、盂蘭盆供養を勤めなさい。父母を長く養い、慈愛の恩に報ずべし」と。

》
季節感がなくなってきたというと、「そんなことはない！誰でも暑い寒いを感じるし！新緑も紅葉もきれいだし、好きだし！」と言うでしょう。しかし、季節感というのは、その時期の暑さ寒さを彩ってあることも確かなのですが、前の季節と次の季節をも含んでいてこそ、しきたり・行事・催しにあるのではないかと思います。

例えば二十四節気とか、節句、七五三、七草、鏡割り、羽子板市、鬼灯（ほおずき）市、七夕、酉（とり）の市、お富士さん、お十夜、十五夜、ぼろ市、彼岸、クリスマス、正月、お盆に草市、闇市という季節と共にあるものです。季節感がなくなるとは、多くの歳事ものとの接触が、省

略されて、なくなったとも言えると思います。

お盆と言うと、八月の旧盆を指し、夏休みの代名詞みたいですが、本来は、七月十五日を中心にした仏教の故事です。禅宗では今も、一年を、修行季節として、雨安居（うあんご）と雪安居（せつあんご）に分けます。修行僧が集まることを、結制（けっせい）と言います。結制した雨安居は、夏安居（げあんご）とも言い、四月十六日から七月十五日を制中（せいちゅう）言ったのです。そして、この夏の制中の終わりの日が、七月十五日でした。ちなみに、雪安居は十月十六日から一月十六日となりまして、その間は、制間（せいかん）と、今でも道場では呼んでいます。

七月十五日は、僧自恣の日と記します。自らほしいままにする日と書き、その期間の修行の成果を反省する日でもあったことから、その日を待って、信者の方々がご供養をしたということです。修行道場では、その日に限らず、うどん供養とか、大根供養、餅供養、最近では餃子供養と変わった差し入れがあります。粗末なご飯と一汁に漬け物ですから、修行僧の喜びでもあります。禅宗は千五百年以上の修行の伝統なればこそ、理解できる内容です。自恣の日は、現在では、起単留錫（きたんりゅうしゃく）と言って、道場での雲水の成績うかがいのような反省する日のこととなっています。

盂蘭盆の行事は、竺法護（じくほうご）の記した仏説盂蘭盆経より出たのではあるが、この経には、倒懸（とうけん）の故事は無い。盂蘭盆とは倒懸と言われ、『逆さまにつり下げられること』という意味なのです。

マハーバラータに《広野の穴の中に、多くの人が草の根に支えられ倒懸し、この草を一匹のネズミが噛んでいるという話》がある。ここに、倒懸という言葉が出てくるのだが、盂蘭盆ないしは烏蘭婆那（うらんばな）と言う意味はないらしい。盂蘭盆の正しい語源は、“ullambana”であり。これは、懸垂（けんすい）の義だそうであると、臨済会編・山本禅登著『葱嶺集（そうれいしゅう）』に書いてあった。

最近ではイラン語起源説が学会では有力らしい。イランでは死者の靈魂をウルヴァンと呼び、このウルヴァンが盂蘭盆の語源であるらしい。

日本で盂蘭盆会が催されたのは、七世紀初頭、中国では六世紀の前半という。盂蘭盆経の他にも、お盆にからんで、救抜焰口餓鬼陀羅尼経のお経があるが、共にサンスクリットの原本は無い。このことは原本が無い故に、語源や起源には、新たに解釈を施すことができるといえます。

“逆さまに吊された苦”と“死者の靈魂”の伝説こそ、遙か彼方の故事が、日本で重なって実を結んだ行事・お盆となったのです。ただし、逆さまに吊された苦そのものを私達に、死者の靈魂を安らぎに見立てれば、更に、意味のある内容となってくる。

現在のインドにあるベンガル仏教の死者を弔う法事も、衆僧の供養にあると聞いて、日本と同一の内容なのだ后感心しながら、これは食を大事にしなければいけないことでもあるぞと、チンプンカンなことを思案していたりするのでした。

精霊棚（しょうりょうだな）は、ご仏壇とは別に、篠竹とか棚を組んでマコモのゴザを敷いて、四隅を竹や篠竹で飾って、縄で結び、鬼灯やそうめん、昆布などを飾りました。ゴザの上には、茄子の牛、胡瓜の馬です。なぜに馬と牛かと言うと、馬で来て、牛で帰ると言い、早く来て、ゆっくり帰るという意味だそうです。亡くなられたの乗り物ですから、十三日は、内に向き、十六日には外に向くとされています。

乗り物の他には、水（器の中に水を張り、みそはぎの花を浮かべる）、水の子（水の実とも言い、茄子などを細かく切ったものを皿に供えたもの）、そうめんを供えます。茄子の種は、数多くあり、それが一〇八の煩惱の数にたとえられて、それを取り除くという意味もあるそうです。場所によっては、小さな舟を手当てして、サラシの帆に、菩提寺の和尚が筆で文句を書いたりいたします。灯籠流しに似て、川や海に十六日の夕刻、精霊流しとも言います。棚を作る行事は、他にも、七夕、十五夜も棚を作って祀り、お雛様、節句も奉りました。博多山笠が、崇福寺（臨濟宗）の施餓鬼の精霊棚に由来することを以外と知りません。

提灯は、使わなくなってしまったものの代表ではないでしょうか。限られた行事以外は本当に使わなくなってしまいました。風情があるものですが、提灯の形によって使い方が決められているものです。盆提灯を、その季節以外に飾ったら、妙なものですし、お祭りには、各町会のはずれに結界として、竹と高張提灯をさしたり、盆踊りや、納涼船にも小さな提灯が私たちを楽しませます。

祈り（平成14年7月4日）

祈り（平成14年7月4日）

平成14年7月1日号の陽岳寺便り巻頭に、講談師・悟道軒圓玉の独演会のお知らせを掲載いたしましたが、ちょっと変わった演目と、お寺という状況に、聴衆が来るだろうかと思いましたが、平成14年7月2日、当日、午後6時30分開演に、60名を越す聴衆が来場されました。世間の感心もまんざら捨てたものではないと、押し寄せた聴衆の熱意に、時間を9時まで延長して「大石内蔵助 東下り」と、裁判のてん末をおもしろ可笑しく、毅然とした師匠の覚悟をまとめた「実録・我が獄中記」が、18年ぶりに演じられました。

独演会の前日、1日の毎日新聞夕刊に、「祈り」と題して、師匠が紹介されました。その副題は「病の私を思う、母に捧げる」とありました。その中で《母は戦地で病死した父に代わり、洋裁店を営んで一人息子を育てた。ホームに入所後、圓玉さんは母のたんすから、一片の紙に書かれた「祈り」という詩を見つけた。『より偉大なことができるように健康を求めたのに、より良きことができるようにと病弱を与えられた……』。米国の入院患者の作品らしいが、何度も読んだのか、線や丸の書き込みがある。母の心に、涙があふれた。》と江刺正嘉毎日新聞記者が書いています。痴呆で特養老人ホームに入所する母に恩返しする18年ぶりの公演だったのです。

その公演する師匠も、身体障害者4級、精神障害者2級の身です。平成元年の夜の川越で起こった交通事故は、母と子の運命を大きく変えて現在に至っております。この師匠の強さは、圧倒的な困難さの中で必死に生きる姿です。師匠の社会的弱者の偏見に孤軍奮闘する勇ましい姿は、同時に、自らの痛々しい姿でもあります。

その師匠が、陽岳寺での独演会の最後を結んで発した詩です。

大事をなそうとして 力を与えて欲しいと神に求めたのに
慎み深く柔順であるようにと 弱さを授かった。
より偉大なことが出来るように健康を求めたのに
より良きことができるようにと 病弱を与えられた。
幸せになろうとして 富を求めたのに
賢明であるようにと 貧困を授かった。
世の人々の賞賛を得ようとして 権力を求めたのに
神の前にひざまづくようにと 弱さを授かった。
人生を享楽しようと あらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようにと 生命を授かった。
求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞きとどけられた。

神の意にそわぬ者であるにかかわらず
心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた
私はあらゆる人の中でもっとも豊かに祝福されたのだ。

(ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩)

ニューヨークの病院の壁に落書きがあるなんて、なかなか想像できないことではあるが、勝手に想像すれば、リハビリ研究所の暗い通路、それは、患者が歩行訓練に歯を食いしばって壁際の手すりを探りながら伝う姿か、或いは、広い部屋のリハビリ室の壁だろうが、落書きはアメリカでも落書きだろうから、書こうとすれば隅の壁 だろう。ここに記した人が、どんな病気だったのか、或いは、事故か不明だが、弱く、病弱であり、貧困の中に生涯を送ったことが告白されている。年齢を想像すれば、大方の生涯を送った老いた者の言葉に聞こえる。

この詩の圧倒的な迫力は、『神の意に添わぬ者』の祈りに対して、『求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた』という感謝です。その祝福の中身は、『弱さ、病弱、貧困』を通じた彼の生涯であり、『私はあらゆる人の中でもっとも豊かに、(神)に祝福された』と、私だけの神に出会い満たされた彼の存在が示されています。求めたものは、彼が持っているものの正対するものです。求めている限りは、絶対に与えられないことは、“放てば手に満ちあふれている”ことを導きます。今、自分が持っているもの、それゆえ求めていることを神に捨てれば、彼の求めている心そのものを、そのまま救ってくれたことになるでしょう。

この詩の中に語られている、“語られないもの”、それは、祈りです。その祈りとは『心の中の言い表せない』そのものであり、自分自身そのもの、それが心と言うものではないでしょうか。それが、丸ごとかなえられたとは、神が持って行ってしまったような、虚ろになるのではなく、神に満たされたことと同じでしょう。すくい取ってしまった状態、何かを求めた意志そのものが亡くなってしまったことですから、『心の中の言い表せない』ものそのものが祝福されたと言えるのでしょうか。

不思議なものです。師匠のお母さんが、何度となく読んだ詩を、師匠がなんとなく読み、今、私がなんとなく読む。師匠のお母さんがなんとなく読み、自分の今の有り様を、自分も祝福されたものだを見たか、師匠が意識もなく重症だったとき、看病を老母が献身的にする姿が、この詩と重なります。

師匠が、お母さんの記した赤線や丸印を見て、師匠は今の自分の状況と、母の状況を考えたとき、絶望感に似た想いに襲われたと同時に、この詩の意味を知り、涙がにじんだと思います。それは、母がたどった足跡だからでもあります。そして、母の生きることの強さを想い、感謝したと思います。

仏教が無我を主張している理由は、あまりにも、私という自己にかかわる悲惨な現実、不幸な

事件、多くの葛藤と揺らぎがあり、移りゆくことの負の面が、人生には多くあるものだと、釈尊の観察かも知れません。

もっとも、これらの問題も、実在して悩む私という自己が、私になれば、このような問題もないのではないかと考えれば、察しがつきます。現実の私の目の前の闇は、私自身が創造する闇でもあります。その闇を、怖いと見るか、美しいと見るかも、私が創造していると言えるでしょう。そうした私は創造されたものと見るとき、仏教の主張である、私という自己は実在するのではないということの徹底した自覚が浮かび上がってまいります。

この私は、過去未来を含んで、多くの記憶の集まりであり、情報の交信の集まりであり、力の集まりであり、願いの集まりです。実体なきものの私は、それらに、生かされて、支えられ、言葉では言い尽くせない創造された私でもあります。

自分の命は、今を生きているのではなく、語り尽くせぬ多くのしるしから、今を生かされていることの自覚です。生かされていることの自覚は、同時に生きていくことを支えるもの この世は、過去未来を含めた、この生かされているものの重々無尽の集合体として見ると、無我となったとき、祝福された私がいて、神に満たされ、神の意に添わぬ者は神の意志となることが出来るのです。

「前略、御免下さい。お変わりもございませんか。私は八十一歳の坂を一生懸命登っております。体の方が弱ってくると気持ちも弱くなるもので、早くお迎えがこないかとそればかり考えて仕舞います。皆と待ち合わせてお墓参りが出来た頃がなつかしく思います。一年置きに姉が亡くなり一人になって仕舞いました。卯木の義兄も姉を見送ってからすっかり弱って仕舞い一人さみしく暮らしております。私も足が弱って外出も出来なくなって仕舞ったので、余計さみしさが身にしみます。でもそのうちに迎えにきてくれると思いますので、それを楽しみに頑張りませう。ご住職様皆様もどうぞお体大切に百歳迄も長生きして下さいます様お願い致します。お母様の優しい面影が目に浮かびます。もう一度お会いしたいと思っておりますが、実現できる様頑張ります。では呉々もお身大切にお願い致します。かしこ 平成十四年六月二十五日 H・K」

先日、お便りをいただいたH・Kさんのお手紙を、お手紙で掲載承諾を申し上げ、ご了承賜りましたこと、本当に有り難うございました。この手紙を幾度となく読み返して、貴方の寂しさがひしひしと伝わってまいりました。そして、この気持ちに似たものを心に持って日々を過ごされている方々が、少なくとも私の周りにいることに気付きました。

それ故、この手紙に答えを出そうと試みることは私の務めでもあると思いました。そして、貴方と同様の気持ちを持つかもしれない多くの人、未だ老いのなせる心の震えを知らない多くの人に伝わることを、願ってやみません。少しでも多くの方が貴方の気持ちを知り、何とかならないものかと念じることも、人それぞれの坂を登る指針となる姿でもあります。

『八十一歳という坂を一生懸命登る』という表現に、貴方の今までの坂を想います。楽しく坂を忘れて登っていたこともあったでしょうし、苦しく登ることが辛いこともあったことでしょうが、どの時代の坂を登っても、坂は眼前に様相を変えながら聳えているのだと推測致します。

私には、この手紙を頂いて、正直、八十一歳にして、なお坂を登ることの意味を考えさせられました。その年齢から登る坂道の景色は想像できませんが、私も五十三歳の坂を登っているのでしょう。そこで、上を仰いでも、私からは、遙か上の方を登る貴方の姿が見えませんが、下を見ても、誰かが登ってくる姿に会いません。この坂に居る限りは、先回りして、貴方をねぎらうことは出来ないかと推察致します。私が登るこの坂の先には、貴方の歩く姿は、ないのかも知れません。

ただ言えることは、着実に、一步一步、歩くという行為なら、八十一も五十三も無く、たとえ坂が変わっても、共通した一歩です。その別々の一歩は、楽しくもあり、可笑しくもあり、憤ってみたり、豊かに満ち足りた様々な一歩を比較するのではなく、触れることによって、寂しさが変わることもあるかも知れません。これは、仏典を読んだり、小説や童話の登場人物の一步一步に、私たちが一喜一憂することと同じです。

前文の「祈り」を幾度となく繰り返し読まれることを、お勧め申し上げます。そして、少しでも、その寂しさが、豊かに実りあるものになることを念じて止みません。

此道や 行人（ゆくひと）なしに 秋の暮（芭蕉）

仏事歳時記

お盆

お盆のお経を読むため、各家々を訪問することは、それぞれに近親者を亡くした人のその後の姿に接することであり、何日、何ヶ月、何年と月日を重ねることで、新たな発見や喪失感の気づきに出会うことでもあります。お盆とは、得意な性格をもって、我々一般の日本人に問いかけてくる行事だと、この夏のお盆に考えさせられたのです。

家々を訪ねることは、その家族の有り様をつぶさに見ることになるのですが、祖先の霊や亡き近親者が帰って来るといふ言い伝えは、素晴らしい智慧だと、今更ながら新鮮に感動したのです。多分都会では、本来の意味を見失って、それぞれの家庭で、この古いしきたりを今更考えてみようなどとは思わないと思った。

この時期多くの家族や親しかった者が集い、盆提灯や、ワラで作られた馬や牛を飾り、果物や麺類を施すことって、その集う者達にとってどんな意味があるのだろうかと思ったとき、ふと、これって見えない者達を中心として、見える者達が多くの絆や関係、写真や記憶をくっつけて、家族や親戚、友人との新たな関係や対話を通して、再構築を考えさせられることなのだと思います。以前幽霊について書いた事があるのですが、お墓に13日に迎えに行き、16日に送りに行く慣習は、日本のお化けには足がないことと関係して、霊魂にも足がないことと共通している。亡くなった者は、一人では動くことが出来ないと考えると、生きている者が迎えに行かなければ、自宅に連れて来ることが出来ないのです。亡くなった者もまるで生きているかのように、一年に一回連れて換える風習は、天国の階段の扉が開く日でもあり、地獄の釜の蓋が開く日でもあるのでしょうか。

一人でいるとき、ふと亡くなった父や母、師匠に友人を思い描くときがあります。死んだ者に、「どうしているのだろうか。もし何処かで生まれ変わっていたとしたら遇いたい」などと思うときがあります。すると、とても恋しい気持ちになるから不思議でなりません。お盆は、そんな亡くなった者の里帰りの季節なのです。今まで、この風習を祖母や祖父がしていたものと知りつつも、初盆を迎えて、どう飾りをしたらよいものか、何を揃えればよいのだろうかと案じるものの、考えを整理して、この本来の意味を認識することはあまりないことです。

この夏、私が棚経で、本当にうっかりして、一軒飛ばして行かなかったのですが、夜、その家から電話をもらって、行かなかったことに気がきました。家族が集まって待っていたのことに、謝っただけではすまないのですが、許してもらいました。電話の向こうのご主人を亡くした奥さんは、「息子は、親父と酒を飲みたかったのでしょうか」と、息子の心を推しはかりました。そう言えば、枕行の時も、通夜の時も、葬儀の時も、納骨の時も、息子さんはじっと目を閉じ長く対面していたことを思い出しましたが、お盆という慣習や風習が、現実となり、家族にとって亡くしたモノの再確認する場合でもあり、見えない者との距離を探り推しはかる大切な場でもあるのです。見えない者との距離を探り推しはかることは、見えない者と残された者との近づくことのない、遠ざかる一方の過ぎ去った時間の経過した家族の今の姿です。

お盆の棚経を廻って、今年はずとめて、こんな質問をしてみました。

「お化けでも、幽霊でもいいから、どんな形でも、夢でもいいから、出てきましたか？」

この返事に、全部が「いいえ、出て来てもらいたいのですが、普段でも、出て来ません」と、答えました。

「出て来ないことが、無事に過ごしているのでしょうか」と、まるで生きている人のことのように話す私は、「それでも、出て来てもらいたいですね」と。なかには、癌を宣告されて、余命一年と言われたものの、一人で身の処し方を考え実行しなければならない、妻を亡くした深刻な状態に追い込まれたご主人は、「少しは、俺の相談相手になってくれよ」と、声を上ずらせて話します。

お経が落ち着くのか、生者が見えない者になってより、読経の声は節目節目に登壇致します。そのことが、読経を介して、見えない者と見える者の結びつけをより堅固にしてくれればと、そうであってくれれば、悲しみの中の、私の嬉しさなのです。《平成14年8月の夏終わり》

彼岸

此岸は、生死輪廻の迷いの世界であり、彼岸は、解脱悟りの世界を言い表すことは知られていることなのですが、この立春、立秋が彼岸会とすることは、日本独自のものだと思います。

中国のお経には、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の八王日に読経持齋すると命が長らぐとあり、このうち春分、秋分の二つを彼岸として、法会を行ったらしいと禅学大辞典にあるが、何故に彼岸という言葉がついたかは記されていません。

善導の『観經定善義』に、弥陀の仏国を迷える衆生に解らせる最良の日が、陽が真西に沈む日を挟んで前後一週間であり、その時期に法要を行うことによって、浄土行きへの大願を遂げることが出来るとあります。現実、此岸にいて願い祈る衆生には、西方浄土、彼岸の世界が来迎するとも言えるのででしょう。

西方浄土と日が沈む位置が、ぴったりと重なったことを吉とするという発想は、縁起がよいものを含んでいるのででしょう。幾つかのことが重なって起きることに、吉と不吉を重ねるのは、人間の習わしでもあります。位置を特定できないが故に、重なって、近いことを教えられるのかも知れません。そうでなければ、イスラム教のメッカを指す磁石があるように、日没に、西方を礼拝する習慣が過去行われていたと思いますが、今は、あまり聞きません。

陽岳寺は、古老の伝えで、昔、富士見寺と言われていたそうです。今は、高層ビルで見えないけれど、西に、東京タワーが見え、重なるように富士山が見えていた頃、日が沈む様子が綺麗だったことを憶えています。陽岳寺がビルになり、ビルの上層部で見る富士山が美しく輝いて見える時がいずれは来ると思いますが、次の世代に期待します。

磁石の話に戻しますが、イスラムの磁石の話聞いてから、釈迦が亡くなった場所を指す磁石があってもよいと思いました。そうになると、各宗大本山があって、それを示す磁石が出来たりして、やはり滅茶苦茶になってしまうかもしれない。

到彼岸は、ギャーテイ・ギャーテイ、ハラーギャーテイ・ハラソーギャーテイ・ボーゾソワカです。行け行け彼岸ですが、同じ仏教でも、禅宗は、彼岸を他に求めず、自己に求めますので、取えて、この春分と秋分の意味を考えれば、一年を二つに分けての春分秋分は、冬至と夏至より、立春立夏立秋立冬より際だって意味を持つことを思い起こさせます。

彼岸の特色は、光に包まれた時間と闇に覆われた時間がバランスを持ってあるとすれば、私たちはそこに、今、生きているということなのだと思えます。

私という個人は、現前と姿を変えないものの、光と闇に覆われた私の、光を陽に、闇を陰にすれば、此岸と彼岸に当てはめてもよいでしょうし、その自覚が、今を生きる姿です。

此岸を彼岸とし、彼岸を此岸とする、道元古仏の『彼岸到』は、「彼岸は相貌蹤跡（そうみょうしょうせき）にあらざれども、到は現成するなり、到は公案なり。修行の彼岸へいたるべしとおもうことなかれ。彼岸に修行あるがゆえに、修行すれば彼岸到なり。」とあります。

同じく道元は、苦集滅道の四諦（したい）に関して、「これをきき、これを修行するに、生老病死を度脱し、般涅槃（はつねはん）を究竟（くぎょう）す。この四諦を修行するに、苦・集は俗なり、滅・道は第一義なりといふは、論師の見解（けんげ）なり。もし仏法により修行するがごときは、四諦ともに唯仏与仏なり。四諦ともに法住法位なり。四諦ともに実相なり。四諦ともに仏性なり。」と、彼岸にいて彼岸に気づかない、一枚の紙の、裏と表を、表が彼岸か裏が彼岸か、気がついてみれば、表も彼岸、裏も彼岸、彼岸到の私ではないかと、苦を嫌っていたが、苦そのまま救われていたのだと、彼岸到の私に気づきます。

秋彼岸

暑さが、その内にも涼しげな風と湿度と温度に変化するとき、秋が訪れます。「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるように、暑さの終了を意味し、寒さに向かうという春の彼岸を一年の出発点とすれば、折り返しの地点でもあります。春の彼岸と比較して、一日の昼の長さや夜の長さが同じなものの、向かっている季節の違いから、趣も大きく異なります。

彼岸は、向かっている季節の違いから、趣も大きく異なりますが、光と闇の中間の時間を表します。光と闇を、他の言葉で表せば、好き嫌い、辛い苦しい楽しい、損か得か、失敗か成功か……、しかし、その時そう思っても、それが結果だとしても、時間の経過によって人間の人生においては、その判断気持ちは大きく変わるものです。

その判断し思う気持ちの今という時間を表せば、それは、私が立っている場所です。

彼岸には、お盆と違って、多くの家族親戚友人知人が墓参りに訪れます。いかがでしょうか、お墓で故人に花を供え香を焚き、偲び姿は、個人を通して今の自分を省みる姿でもあります。墓とは、鑑のようには見えないけれど、今私が立っている心の場所を写す鑑でもあり、私が歩んできた道を照らす鑑でもあるとすれば、それが今という時間の私が立っている場所ではないでしょうか。訪れる冬に向かって、勢いのある夏を過ぎて、閑かに思いを巡らせる季節であり、光と闇の間に向かって進もうとする起点でもあると思えます。

春彼岸

長いトンネルから抜け出せば、光がまばゆいように、寒い季節につかつか、暖かい季節が恋しいと、草や樹木、動物達までもが華やいで萌えいでる季節です。

今の日本では、室内が空調機器によって、寒さから身体を守って、それを快適と言いますが、実際には、私たちの感性を曇らせていると言えます。身体のためと称して、体の機能を鈍らせることに、世を挙げて進むのが文化的というなら、その季節を語る事が出来なくなった、この四季に溢れる国に住む私たちは、何処が文化的なのでしょう。疑問に思えます。

友人や知人多くの他人と直に言葉や動作で触れることが少なくなったがために、勝手に生きている独りよがりの人達が多くなり、閉じこもる部屋を与えられたことによって、閉じこもり現象が、カードを手にしたからこそ、カード破産が生じ、病院で亡くなる方々が増えたために、死が身近にあっても見えなくなり、すべてに原因があり結果があります。しかしその結果は原因となり、現象に過ぎないので

すが、その現象に振り回されないがために、禅があるとも言えます。代々と続く世代の途中でいなくなる我が身の果たす役割は、誠実に私を生きるということではないでしょうか。去年の秋彼岸は、二度と帰ってきません。この春彼岸は、今年限りの春彼岸です。恐れずに純真に生きるとは、老いてまだ坂を登るが如くあるから、老いが豊かであるのではないのでしょうか。何処に立っているかです。老いて、若さに立てば老いは醜悪な姿かもしれません。春彼岸、前途は華やかで、花咲くことを夢見ていますし、季節が春成れば自分も春となり、身内に春を含んでいることを、まだまだ、花を咲かせる、そんな今の自覚が、春彼岸だと思います。

「お祖母ちゃん、お祖父ちゃん、春が来て、僕は入学します。就職します。結婚します。失恋しました、でもめげません。」と、墓石の前で手を合わせる。誓う相手が見えないからこそ、将来を誓える相手を持つことに、家族の墓を持つことの意味は大きく思います。

暮れと正月

お盆と比較して、この時期も、家族が集う季節です。祖霊を迎えに行きませんが、家々には神々を祀る仕度をして、迎えますが、真に向かえるものは、新しい暦です。ご来光をめでの習慣も、暦と関連づけることが出来るのではないかと思います。暦は時間ですし、時間は光と闇の織りなす模様でもあります。この暦を良しとするため、お寺では、ご祈祷をして、檀信徒の本年のご多幸を祈ります。

彼岸は日没ですが、不思議なことに、正月は、日の出を崇めます。日の出は新しい一年の出発ですし、一日の始まりでもあります。その始まりに、かまどや水場、家々の戸口、風呂場やトイレ、床の間や玄関、道ばたの道祖神、仏壇に神棚、には新しさという神様・祖霊・仏様が宿ります。これが日出ずる国の古来の仕来りでもありました。宿った神や祖霊・仏様は、実際には、それを祀る人々の心に宿ったとも言えます。”新鮮さとか、清々しさ、新しい気持ち”とは、そのことを言います。顔を洗って冷たさに引き締め、新しく思う。「おめでとうございます。」と人にいいながら、自分に降りかかっていることを知ります。実際は何も変わることなく、季節は巡る風車なのですが、この季節のみ新しくあるは、自分が持つ古さが自然と無くなることでもあります。総てが新しく見えることに、新年が輝く一瞬でもあります。その気持ちを一年中持ち続けることが出来ないのも我々ではありますが、本来は、毎日が元日であり、輝いているはずなのです。

そこに、家族が集まって、新しさを祝う、総てが始まりの中の途中の日です。檀信徒は、墓所にお参りして、祖霊に一年の無事を祈り、一年の計を立て達成を願い、過ぎ去った一年に感謝を捧げて、それぞれが報告する。

※墓参りを進める文章になってしまいました。ですが、この寺に墓を持つ家族の幸せを、お寺からみでの願いを、少しでも解って頂ければとおもいます。お墓参りには、寺によって少しでも顔を見せて頂ければと思います。

この文章は、別に新しく四季のお寺の行事を考え直したのとは違って、こういうふうに見なおせば、意義があるものとなることを自分に納得したかった為です。幸せを噛みしめるには、今の時代、とても難しく思います。先を見るのも占うのも結構、でも、今自分が立っている場所さえ気がつけば、そこに幸せがあることを念じます。平成14年10月3日

再び 最後の晩餐

平成10年5月23日に、最後の晩餐として、この覧に掲載しました。6年半がたち、新に、続きを記します。

そして、実名で記す、大野君子さんは、平成16年12月11日、85歳で永眠されました。陽岳寺の合霊塔に合葬されました。お心当たりの方がいましたら、ご連絡下さい。

平成16年12月13日、あなたの訃報を知らされ、葬儀とあなたの遺骨を、この寺で預かることをきめてより、午後1時30分、あなたの話しをうかがいに、あるホームにゆきました。そこで、あなたについて知り得たことはほんのわずかで、あなたの資料は、あなた自身が持って、旅立ってしまったのだと、思いました。あなたの旅立ちを立ち会うことに、わたしがふさわしいとは決して思いません。これから、わたしが語るあなたは、わたしにとってのあなたの事実です。

貴方のことをさがそうと、でも資料はないしと、貴方の名前の君子から探そうかと思って開いた漢和辞典。突然、君子花という花が飛び込んできました。それは、蓮の花の別名として、または、菊の花の別名としてと意味が書いてあったのです。

四君子は、蘭・菊・梅・竹で、中国あるいは日本でも、水墨画の良き題材になっています。でも、その四君子には、蓮がはいっていません。

でも君子花と言える植物の花は、蓮と菊です。ふと貴方のお父さんの名前が菊治さんであることが浮かびました。そして貴方が、生まれて育った入谷から吾妻、八広、京島、立花と、この下町の文化が色濃く残る町を、結婚しても出ることがなかった貴方の足跡を、この蓮の花咲く足元の泥として、地域として考えてみたのです。あなたは知ることがなかったと思うのですが、蓮は、豊かさの実りの象徴です。

この君子花そのものを、あなたの、陽岳寺での戒名にすれば、蓮そのもの戒名に、一字を加えることで、仏の世界に導き入れることができるのではないかと、思いました。

後の一字の意味で、あなたを表し、顕彰して、君子花と合わせて、あなたの足跡を、そしてあなた自身を、讃えたいと思います。

それにしても、あなたのことを知る手がかりは、わたしには多くはありません。でも何故、それほどまでにあなたのことを知りたいか、そこに、あなたがあなたであることの自己があるからです。

世界とは、わたし達のことを人間というように、人と人との間というように、人が支え合っていると書くように、世界とは、人の意志や感情の交差する世界だからです。人の意志や感情の行為のうえに出来上がったもの、それが世界だからです。

この世界ゆえに、あなたが最後に棲家としていた、ホームの、五〇二号室、それは、小さな部屋かも知れませんが、この広い世界のすべてが、あなたが暮らしている限りは、世界の中心として見つめていたことを、思いだして下さい。

ここで知る世界のニュースは、みな田舎か辺境の遠い便りの出来事です。あなたが何とか過ごしていても、この世界に向かって、あなたの便りを発信していたことを、あなたは知らなかったはずです。じぶん自身とは、そうした世界があってこそ、確立しているものです。

12月4日午後、わたしはあなたが、立川病院に、心筋梗塞の危険な症候が出ているため、搬送されたことを、その日の夕刻、ホームの先生の口から、聴いていました。そして、亡くなって知る、この4日以前のあなたが頻繁に買った、食べ物の伝票を見て、こうした行為も、世界に向かってあなたの情報を発信している姿なのだと、おいなりさんや、太巻きの寿司、マグロに卵焼き、カレーライスにカキフライにコロッケとレモン、毎日注文して、まるで、キリストの最後の晩餐みたいです。

ある有名な人が、「人間の本当の最後は、何も食べられないことができないのよ、だから、わたしにとっての、最後の晩餐は、ありません」とハッキリという言葉を読みだしました。そんなものかと感心していたわたしは、あなたの伝票を見て、あれは嘘だと、あなたの行為に接して思いました。やはり、現実に直面した人の、足跡は、嘘がない。

病院に搬送されて、食事が取れなくなることを見越していたようなあなたの足跡。それは、毎日のように、昔を懐かしく思いだすように、好きだった食べ物を、もう一度食べて、昔の自分を懐かしむかのように、そして今ある自分が自分であることの、あなたの伝票が語っています。わたしは、母の命日に、家族で、鰻をご馳走になりました。ついこの間です。父が亡くなって、父の命日には、母も含めて、わたしの子ども達と、やはり鰻を食べました。下町のご馳走は、寿司やさしみ、うなぎ、揚げ物に、カレーライスにカツ丼親子丼と、それも、家族で食べた、親しかったものと食べた、そこに、生き生きと生きる自分があったと、今の自分を自覚するからです。仏教の供養とは、今のすべての自分に対しての、自覚の供養です。

この意味から言えば、これから、ホームの料理に出る、おいなりさんや、太巻きの寿司、マグロに卵焼き、カレーライスにカキフライにコロッケとレモンと、みんなで食事を頂くならば、あなたが生きていたことが、みんなが今生きている証明ともいえます。

「ご馳走様」と、いったとき、あなたは、「はいお粗末様でした。」と、聞こえない声が、耳をそばだてれば、聴こうとすれば、すべての食卓に、聞こえるかも知れません。わたし達には、ただ聞こえないだけなのです。聴こうとしないから……。

人の思いや願いが、それは、人が確かな自己として存在していたということなのですが、死んでからも、わたし達の世界に留まるといえるかもしれません。この留まるといふ思いは、わたし達が気づかずに、自然と口からでる言葉に現れたりします。それは、わたし達の世界が、私たちの心の世界を含んでいることによってなおさらです。

細い身体に、小さな身体、やせたからだに、小さな声、そこに、強い意志が働いて、あなたは

最後の晚餐を、幾度となくしていたことになるのです。誰と一緒に晚餐だったのか、何を話していたのか、何がそうさせていたのか、人の最期を数多く看取ってきた施設長は、「意外とあることなのです」と、言います。

そんな、あなたに贈る、わたしからの贈り字の一つは、晚餐の饗宴の饗の字です。それは、もてなす、ねぎらうから、うける、神が祭りを受け入れる、また多くの神々を祭るという意味があるのですが、この字は、また、食べ物を間に、二人が向き合うかたちでもあります。

あなたは、大正8年10月10日、父を小芝菊次さんに、母を渡邊やすさんの長女として下谷区入谷に生まれ、昭和32年7月1日に、大野参治さんと婚姻し、吾妻町に暮らします。それにしても、その時、あなたは38歳だったはずです。

そのご、9年がたち、昭和41年11月12日、あなたが47歳の時、参治さんが亡くなりました。この短かった出会いと別れの9年間に比し、その後のホームに入所するまでの34年間の長さ、京島で暮らすあなたは、平和に暮らしていたことになっています。その34年間、あなたが誰と、平和に暮らしていたのか、名前は知りません。そんなあなたの、親しかった人が急になくなってより、あなたは独り取り残され、にわかに体調を煩うことが多くなったようです。この体調を煩うことに、あなたの老いが、独り身を襲ったのでしょうか、老いの身体は、一人保つことは難しいことです。

平成12年、立花ホームより、厚生病院に入院しようとしたあなたが、突然に、このホームの入所が決まって、業平のホームにショートステイに4日間過ごし、平成12年11月17日、81歳の時、このホームに入所いたしました。

参治さんを亡くされてより、この34年のうちの多くの月日、あなたは二人して、この“饗”という字のように、過ごしていたのではないかと思ひ当たったのです。だからこそ、今はなくなってしまった、二人して過ごした家が忘れられず、「家を片づけなければ、家に帰りたい」と、幾度となく言っていたのではないかと気がつきました。

そして、もしかすると、あなたは帰れない家で、名前を知らない誰かと二人して、食事をしていただのではないかと思ひました。

おいなりさんや、太巻きの寿司、マグロに卵焼き、カレーライスにカキフライにコロケとレモンと、あなたが最後に買い物をねだって食べていたこれらの食事が、最後の晚餐だったような気がするのです。

この手のひらにII（平成18年11月18日）

—禅僧の死—

平成10年11月18日、“この手のひらに”を書いたことを思い出す。老師が亡くなって、15年目頃だったろうか、そして、8年が過ぎた。今でも、老師が元気だったらと、たびたび思うことがある。亡くなった年齢は61才だったから、あと何年かしたら自分もその年になる。

島根県松江市奥谷町の万寿寺を自坊に、京都は南禅寺の管長と僧堂の師家として、この多忙さは、身にしみただろう。そして亡くなる何日か前、この自坊に過ごしていたと聞いた。だから一度は見たかった。ここに過ごして、ここから請われて出かけ、ここに帰ってきたから。

平成18年10月26日、南禅僧堂の同参（僧堂で同じ釜の飯を食べた仲間）10何名が出雲は松江、玉造温泉に集まった。ここ数年は、この仲間が毎年必ず一回は何処かに集まる。一回どころか二回は必ずあつまるようになった。そして、逢瀬は、一緒に食事をし、酒を少々飲んで羽目を少しだけ外すという、たわいもないことなのだが、同じ釜の飯を食ったというだけで、坊さんとしては、原点だからだ。元気でいさえすればよい、南虎室老師会下、同参の仲間として。

私は、せっかく松江に集まるのだからと、万寿寺に行ったこともないし、是非、老師の墓にお参りしたいと仲間にせがんだ。考えてみれば、老師が亡くなってから、京都には何回も行きながら、僧堂にはどうしても足を向けることができない自分に、せめて松江の万寿寺に行ってみたいと思っていたことだった。そしてお墓参りをしたい。それ以前にも、松江でもう少し大きな会下の仲間が集まろうという計画があったが、老師の死でお流れになっていた。

10月26日、出雲空港におりた私は、「とうとう来た」の思いを秘めていた。考えてみれば、この出雲は、邪馬台国の発祥の地か、日本民族の国作りの原点でもある。この地で、ラフカディー・ハーンは、松江藩士の娘小泉節子と結婚した。そういえば、彼の50回忌法要は、万寿寺で行われたと聞いたが、それは50年も前の話であった。因みに、小泉八雲は、この地域や日本の各地に行われた今は途絶えてしまった葬送の儀式の風景を残してくれた。

その日は、玉造温泉に身体を休めて、翌日の27日、万寿寺に一同で出かけた。山門に白い塀、その塀の前には畑があり、その下には田んぼがあって、稲はきれいに刈り取られていた。畑の一部には冬野菜が少しだけ育ててあったが、米は自給するだけの量に違いないが、野菜は、少なかった。老師が南禅寺に出向してからは、この畑や稲作は、近所の知り合いが丹精していたと聞いた。

参道を登り、山門をくぐると、左に庫裡、右に本堂がある。本堂は開け放されていた。古い木

造の作りに何年が経っているのか、きっとこの方丈に何度も座り立ちと俣ばれる樓。この本堂の裏が山になっていて、屏風のように山肌がえぐられて、そこに老師はいる。そのえぐられた山肌を目指し、少し登ったところが歴代の和尚が葬られている墓域である。老師は、ここに23年になるのか、何も言わずにいる。苔むした石像が迎えた。

苔に覆われたその石仏は、苔に覆うがごとくまかせている。いずれは覆い被さって苔むしたこんもりとしたものになるのを許している。午前11時頃に拝塔したのだが、老師の墓は、木が鬱蒼として、木漏れ日が照らし、清々しい気分を与えてくれた。地は苔むし、幾つかの古い塔が並んでいた。

万寿寺本堂を見下ろすかのように配列された、歴代和尚の墓、そこに勝平老師の師匠である宗達和尚、その師匠の大喜老師、さらに大喜老師の師匠の大航老師の塔もあるのだろう。案内人を頼まぬ墓参りに、宗徹老師の墓だけは、友の禅僧が先に詣った。途中で花を買い、線香は、やはり友が持参していた。その花と線香を供え、一同で、大悲呪を唱えた。突然のろうろうとした大音声に懐かしさが滲んだ。老師は何も応えない。

大喜老師の師匠、大航老師は、「禅僧には学問は必要ない」と常々言われていた。勝平大喜老師が勉強をしたくて中学を無断で受験したとき、烈火のごとく怒った大航老師に、大喜老師は、学問への情熱で、師匠の怒りをよけた。しかし、四高（金沢大学）の合格発表となって、とうとう大航老師から破門を言い渡される。その後同志社大学神学部（授業料は無料だった）を卒業したのが万寿寺大先輩の大喜老師だった。

そうした先輩禅僧を見ていた宗達師は、「これからの時代は禅僧も学問が必要だ」と感じていたと宗徹老師は言った。

昭和16年秋、松江高校3年生だった宗徹老師は、二年半で高校を卒業し、東大に入学する。考えてみれば幼かった頃よりずっと、地方にいたとはいえ支那事変、日支事変と戦争の土音を何処かで聞いて育ち、思春期に入って、太平洋戦争のその時に、学生になり、昭和18年学徒出陣にさいして真っ先に徴兵された。23才であった。

宗徹老師は昭和18年12月10日、呉の海軍に入隊する。任務は偵察員であり、この頃サイパン島が陥落し、沖縄にはアメリカ軍が上陸をはじめていたし、特攻という最後の作戦に頼るしかない戦況だったという。

特攻に志願したが、「戦争で死ぬことが、すべての解決の道と思った私は、生き残った。死んだのは、すべてあんなやさしい奴が、あんな温和しい、柔和な奴が、と思える者ばかりであった」と、“たくあん石の悟り”のなかで言っている。

昭和20年8月15日まで、この呉の海軍兵舎で、毎日をどう過ごしていたのか、いずれにし

ても矛盾の中に悶々として死を決し、空を見上げる日々が訪れていたのではないかと思う。

昭和21年、再度上京して、東大に復学した。東京は荒れて荒廃した土地と化していた。滅び去った都に、何をもって生きたのか、現実の様子は地獄に近かったのか、それとも地獄に住み自責の念と無力さに打ちひしがれていたのか、道は遠かったし、人生の意味に悩んでいたのかもしれない。

また僧侶という生き方や資格に、自らを疑問に悩む姿があった。道は始めから引かれていた。しかしよくあることだが、その道を断念すのも、始めから引かれていて、宗徹老師も、この一本の道を改めて目指すことを、師匠や母に告げたのが、昭和26年だった。

戦争の焼け跡は復興へとおおきく舵を切っているが、引きずっているのは、じぶん自身の矛盾した足跡なのだろう。この間の生い立ちこそ、宗徹老師の人格を語るものだと思う。しかし私には語ることはできない。

昭和36年、宗徹老師は、修行を終えて松江の万寿寺に帰ってきた。柴山全慶老師について修行した時代、それは老師にとっては何よりもかけがえのない時間であり、老師が真っ直ぐに道を歩んでいた。師匠の宗達和尚も、老師の帰山を喜んだ。松江と京都では、気候も違うし、気質も違う。

小泉八雲のかじり読んだ伝統が随所に残っていて、のどかではあるものの、凜とした気骨の人々が生きている。この寺にわずか6年であったが、宗達和尚と宗徹老師はともに過ごした。老いた師匠に、若く修行を全うした宗徹老師の生活はどんな模様をなしていたのか、知る由もない。

昭和42年、寒松軒老師の5回に渡る説得に、松江をあとに、京都は南禅寺僧堂の師家に着任した。

後年になってのことだが、宗徹老師は、僧堂での大きな見性体験を話している。

「おのれに愛想を尽かした末にたどりついた。すべての感覚を無くし、自分が存在することすらない、狂喜じみた自分」だったと。この言葉の激しさに、宗徹老師の、自身に対する強い姿勢を思うし、あの生前の姿や動作からすると、不思議な気持ちにとらわれる。

寒松軒老師が残した、宗徹老師への最後の言葉、それは《花のひらくことは栽培の力を仮（か）らず、自ら春風の伊（かれ）を管對するに有り》だった。

禅語字彙によれば、さほどに世話をやかずとも、春が来れば花は自ら開く。只坐禅すれば自ら悟るときがあるの意とあった。

花が春風を呼んだのか、春風が花を咲かせたのか、どちらも同時現成する花は、じぶん自身。寒松軒老師の遺書か遺訓か、宗徹老師のひとり進むことを強いる。自ら花となって咲くことを寒松軒老師は突きつけた。この言葉は、寒松軒老師が宗徹老師が描いた椿の絵に、賛をしたもので、この後、寒松軒老師は遷化したのだった。

「ぱっと咲き、ぽたりと落ち、ぱっと咲いて幾百年の星霜を、人目にかからぬ山陰に落ちつきはらって暮らしている。あの色は只の赤ではない。見ていると、ぽたり赤い奴が水の上に落ちた。静かな春に動いたものは只此一輪である。」

夏目漱石『草枕』の一節ですが、宗徹老師にとっては、椿は寒松軒老師と重なる。それは寒松軒老師がことのほか椿を愛していたからでもある。

山陰の地にひとり咲く赤い椿に春を感じさせるところがあると宗徹老師はいうが、私には、椿は冬を象徴とする花だとしか思えない。きびしさの中に咲く赤い花だ。耐えて耐えて咲いた椿は散り際とともにある。あの色は只の赤ではないと、まして赤い花が置かれた場所が真っ白な雪の上であったらと考えると、ゾツとする。

庫裡にて茶を進められたが、始めから墓参りだけが頭にあった。この山陰の寺の、屏風のように山肌が削られた苔むした歴代塔のひとつに、何を見つめるか、老師の眼差しは虎視のように鋭かったが、自らをもあの虎視で見つめていたのか。

墓に深々に頭を下げ、両耳に手のひらを空に向け、この手のひらに老師をのせること、しばし、温もりを感じながらも、これは……。今も、この山里にいてこそだろう、宗徹老師に別れを告げて参道をあとにした。

南虎室老師祥月命日に向けて

死んで生きる智慧（平成19年3月27日）

平成19年3月27日、桜が開花して花びらを散らす季節、長男が鎌倉はE寺専門道場に旅立っていきました。思い出して重なるのは、昭和46年4月6日、やはり桜の季節に、京都はM寺専門道場に、私は一人雲水の旅支度で入門したことです。前日、近くの床屋さんで髪を剃っていただき、京都へ一人新幹線に乗った思い出が蘇ります。投宿さきの法衣店で、うどんの夕食を頂き、翌早朝、勇んでM寺専門道場に向かったものでした。

それこそ右も左もわからないこの身を、修行道場に向かわせたものは、決心といったものではなく、ただただ奮い立たせる心許ないおのれ自身だったことを忘れません。それは、入門した後の生活が全く理解できない、何があるのかも不透明な気持ちを抱えての旅立ちだからです。

そして、E禅寺の山門に発ち、歩みを専門道場の玄関に運ばせました。網代傘を玄関の脇に立て掛け、暗く広い玄関の縁に、膝を折り腰掛け、頭を下げ袈裟文庫に額をつけて、震える大声にて、「たの一みーまーしょう」と声をかけたのでした。庭詰め始まりです。二日間と聞いていた庭詰めの多くの時間は、目の前の袈裟文庫の感触です。それは身体だけが頼りの、腰の痛みと、足のむくみ、頭に血が上り、腕のしびれとの戦いだったような気がいたします。

その庭詰（にわづ）めをして、途中、追い出し棒を居丈高に掲げて、常住（じょうじゅう＝修行中の雲水と専門道場の対外的世話をする係）の雲水に、「当道場は万衆で断ったはずだ。いつまでも居るのだ、出て行け」と、玄関先に追い出され、南禅寺の境内を歩く身に、咲き誇る桜は、美しさや見事な色彩となって身を覆うことより、身に堪（こた）えたことを忘れません。境内に咲き誇る桜自身は何も語らないものの、語らせる自分自身の思いは、気ままに自由に浮かぶ思いであり、そんな世界に歩んできたことの、別な世界の期待に、のどが渴きをおぼえたものでした。明日のことは何があるか不明の、身体だけが頼りの生活を強いられる布石のような思いがあります。

専門道場は静けさだけが、あふれています。専門道場は、別名、僧堂とも言い、また、叢林（そうりん）とも言い、「草の乱れずして生ずるを叢（そう）といい、木の乱れずして長ずるを林という」という言葉より、修行僧をたとえて叢林といったのです。

広く鬱蒼とした道場に、修行僧が何十人いようと、閑散とした風景は、静寂をよく表現しています。静けさが、自然に近ければ近いほど、叢林の規則がよく保たれて言えるといえます。聞こえる音は、自然の風の音であり、その風による木々の揺らぎの音であり、時たま鳴く鳥達のささやく、鳴き声でしょう。しかし、注意深く耳を澄ませれば、静寂を破る音が、時たま木霊いたします。それは、金属を打ち鳴らす音であり、板を鋭く叩く音があります。保たれた静寂を破り、乱す音は、また、かえってその静寂さを引き立たせることに気がつくでしょう。

その静けさのうち、長い二日間が過ぎ、庭詰めを終えて、次の入門のための単荷詰（たんがづ）めへと移りました。それは、古い木造の寮舎の中で、京壁に直面して坐禅することです。もと

より坐禅の経験は乏しい身にとって、これもまた、おしりの痛さ、膝の痛さ、姿勢を保つことの困難さ、首をただし続けることの苦勞に、そして何よりも心がビクビクして落ち着かない集中心の欠如に、この三日間は苦しみました。

背中の中の障子は開け放たれ、緊張と眠気に、ときたまの単荷寮を通り過ぎる足音に、気が張ります。それ以外の気配は、風と、その風に舞う桜の花びらが障子に当たる音の訪れでした。緊張に寂しさが包まれて、遠いところに来てしまった思いをわき上がらせたものでした。

この同じ道を、今、息子が歩もうとしていることを思うと、旅立ちへの哀愁に包まれます。その点、母親は強くじぶん自身に決別を言い聞かせているようです。母親の本心はわからないものの、男親は、自分が歩んだ道に重なり、男親自身の旅立ちへと続く道なのだと、改めて感慨を持ちました。そして、私の父も同じようにこの感慨を、私の旅立ちに持ったのではないかと、思いがけず知る私の父親の気持ちを偲ぶことでもあります。

専門道場での生活は、経験してみなければ、全く説明できないものです。しかし、数年間体験したものは、ここにこそ、禅宗の存在意義があるものだと気がつきます。

専門道場は、はるか中国は唐の時代に生きた百丈禅師（794～814）が創造した禅宗教団のあり方を踏襲するものです。時代時代により、その時代と専門道場との関わり方は変わらずにあるようにも思えるものの、時代や国が変わればそこに生きる人にとっては、その変わり様は変わって見えるものです。今時、米、味噌を除いては自給自足だなんて、履き物はわらじと下駄に素足と、生活は何もかもがトイレだけは水洗になったみたいですが、私の時は、未だに“くみ取り式”でした。

トイレは東司（とうす）といい、今でも、専門道場はその言葉を使用していますが、その司（つかさど）り用を足された排泄物は、雲水が天秤棒で担いで運んだものです。禅堂の側にそってあった東司から汲み出された排泄物は、畑のさきの竹藪の中に二つある置き場の一つに入れます。コンクリートで造られたその肥置き場は、小さい頃の小学校の小プールより小さかったものの、充分と泳げる大きさであると思ったものでした。その二つある肥置き場の一方は半年ほど発酵を促し、その力を充分に殺してから畑に施肥のため蒔いたのです。

専門道場に入り、天秤棒にぶら下がった、桶の中の生の肥では、作物に害を及ぼし、その活力を殺すこと、そこではじめて用にこたえる肥料となるものだと、天秤棒にぶら下がり桶の中の中身は踊ります。化学肥料は便利なのですが、人の生き方に例えることが出来ないのは残念です。

深川にはじめて引っ越してきたとき、いたるところに様々な材木屋さんがありました。未だ新木場が湾岸に移る前で、木場があり、貯木場と川には、大きな材木がイカダのように繋がれて浮かんでいたのを覚えています。江戸の風情というのか、川波衆がその材木の上を渡る姿は、勇ましく、ポンポン船がそのイカダを引いている姿が、橋の上から見えたものでした。

人から聞いたことなのですが、ああして材木を真水と海水の混ざった川水に何ヶ月もさらすことで、木の持っている力がそがれて、木材としての用途がまずのだと、木の持っているソリや割れる活力を殺すのだと聞いたことがあります。専門道場も、同じ意味に繋がっています。

それこそ夢や希望、生き甲斐や、人間の価値といった我々や個人が創り上げた世界を一度すべてふさいだあとの世界に何が残っているのか、専門道場とは、その世界を垣間見せ、そこに生きる舞台を提供する場所のような気がしてなりません。それこそ研修や学習で習得するのではなく、そこに過ごし生きるということでは体験できない世界、自我を殺すとは、このことを言うのではないかと思います。だからこそ、数年の旅が禅寺の後継者には必要なのだと思うのです。

☆専門道場にての修行内容は、読経・掃除・托鉢・農作業・普請・公案・坐禅……を、朝起きたら顔を洗うように、365日、我慢するのではなく、相対的な自己を創造するのではなく、淡々と過ごして行くことにつきます。このことは、禅の大志を抱くことを含んで、やがて、今まで見たこともなかった自己の置かれている場所が見えてくれることを願うのです。

(平成19年3月27日息子の旅立ちから)

五百生（ごひゃくしょう）（平成19年11月20日）

これは、今から1200年以上前、百丈懐会（ひゃくじょうえかい）禅師という方のお話で、中国は、唐代中頃のころの話です。まだ日本には、本格的に禅が伝わっていません。

馬祖道一（ばそどういつ）禅師→百丈懐会禅師→黄檗希運（おうばくきうん）禅師→臨済義玄（りんざいぎげん）禅師となって、臨済宗は始まりますが、その源をたどれば、馬祖の遙か前に、達磨がいて、釈尊がいることになります。

この頃になると、大勢の雲水を抱える禅宗教団の修行の道場は、たとえ山深い人里離れた場所であっても、まかないの惣菜（そうざい）など食糧の多くを自ら造って、活気のある生活をしていました。こうした生活様式は、他の仏教教団とは一線を画して、大きな違いだったのです。

畑には、多くの野菜、お茶、牛を飼い牛乳を生産していたのです。きっと、かまどには、一日中、煙が絶えることがなかったことでしょう。

もちろん、薪（まき）の切り出しや運搬も、雲水という修行僧の役目でした。きっと汗にまみれて作務（さむ＝労働のこと）をする雲水は、汗くさかったし、衣服を買うこともままならなかったほどに、僧院は、多くの人をかかえていたと思われます。

こうしたの禅宗の修行生活の基礎をつくった人物が百丈和尚です。百丈和尚が若かりしとき、あまりにもぼろの衣と汗くささに、図書館の官吏は、経本の閲覧を拒んだと記録にありますが、身近に感じる故事です。

「一日作（な）さざれば、一日食（く）らわず」の言葉は、この百丈和尚の言葉で、大勢の雲水の集まりの中で、働かなければ生きて行けなかった環境があったのだらうと思いますが、それだけではなく、みずからを律し、人々のために働くという慈しみが感じられ、親しみが湧きます。

釈迦の時代を受けつぐ南伝の仏教を、田畑を耕し、家畜を飼い、草木を伐採し、収穫をあげ、医薬をつくること等、この時代頃より遠ざけられ、大乘の仏教の変化です。多分、釈迦時代のような、大檀越が少なかったのかもしれませんが。その結果、集団を運営する経済感覚が養われたのだとも思います。

典蔵（てんぞう）という賄（まかな）い係、副司（ふうす）という経理係、維那（いな）というお経係、知客（しか）という運営統括者、侍者（じしゃ）という衆僧接待係、直日（じきじつ）という衆僧統括者等という制度が確立されたのも、この百丈和尚の頃でした。

僧院の衆僧全員により、助け合って働くことを、普請（ふしん）といいます。この百丈和尚の言葉のようです。修行道場にて、頻繁に行われる総茶礼（そうざれい）は、修行者全員でお茶を喫することですが、働くだけではなく、その場に集う全員でお茶を喫することその中に、お茶

を通して意味が生じます。「お茶にしよう！」と、知らず、この時代の言葉を我々も受け継いでいます。

また、禅には、『道中（どうちゅう＝作務を含めた行為による）の工夫』という言葉があります。それは、『静中（じょうちゅう＝坐禅による）の工夫に勝ること百万倍』というごとく、作務という行為を通して、心を耕し、人を耕すということを発見したといえるでしょう。

禅宗の規則という厳格さと道場の静寂は、常に心を耕しながら真を求めてやまない雲水の姿がある故です。托鉢する多くの修行僧の雁行（がんこう＝雁の飛んで連なる姿）も、ホーホーというかけ声のなかにも、静けさが表れています。この修行道場の制度が在ればこそ、今でも、禅宗は保たれているといっても過言ではありません。この修行道場の制度を作られた偉業の人物こそ、百丈和尚でした。

そんな多くの衆僧が集う僧院で、衆僧を指導する百丈和尚は、毎日、多くの修行者に法を説き、巧みに問答を仕掛けます。

あるとき、百丈和尚は、いつも説法をしているとき、一人の老人がそっと話を聞いていることに気がつきました。毎日のことでしたが、衆僧が退くと、知らず老人の姿も消えていました。

そしてある日のことでした。衆僧が散々に散った後に、老人は一人のこり、百丈和尚の前に姿をさらしたのでした。

百丈和尚は、「おまえは誰だ？」と問いかけました。

すると、老人は答えました。

「わたしは人間ではありません。はるか昔、それは迦葉仏（かしょうぶつ＝釈迦が誕生する前の、過去七仏の六番目の仏）の時代でしたが、この山に住んでいたのです。

あるとき、修行者が、『修行を完成した人は、因果の定めに落ちるでしょうか？』と、尋ねてきました。そこで私は、『因果の定めに落ちない』と答えたのです。

それ以来、五百回も野狐（やこ＝きつね）の身として生まれ変わりを繰り返しているのです。どうか和尚さん、わたしに替わって、この身を救うお言葉を、述べて頂きますようお願いします。」

そして、百丈和尚に、たずねました。

「修行を完成した人は、因果の定めに、落ちるでしょうか？」

百丈和尚は言いました。「因果の定めを、くまらず。」

老人はただちに悟り礼拝しました。

後日、百丈和尚は、修行僧に命じて、山奥の巖下に横たわる一匹の狐の骸を探し出し、亡僧の葬儀を執り行ったと言うことです。

因果の世界とは、縁起の世界と同じで、今、わたし達が生きる世界に違いありません。この縁起ゆえに、今の私があると言え、この因果こそ、今の私を現すものです。

この故事に、飯田老師は、「老人何ものぞ、人にあらず、狐にあらず、神にあらず、仏にあらず、ただこれ因果じゃ。」と、今のこの私に成りきったなら、狐も人もないと、この一瞬を生きる、因果そのものの中にこそ、おまえの生きる場所が在るのではないかと諭します。別の言葉で言えば、今のあるがままのおまえ自身を、受け入れよということでしょうか。それは、自己が空

なる、仏なる自覚でもあります。

因果や縁起のない世界とは、神や仏の世界でしょうし、そこには、この問答のように、問うことも、答えることもありません。因果や縁起も、本来空なる世界です。

その空が空の世界に住むことを、「狐が狐に安住して他をうらやまぬ時を仏と言い、人が人に満足せずして求めてやまぬ時を狐という」と、これも飯田老師の言葉です。

因果に落ちずに住むことで、長い年月の流転を繰り返す。くらまさないで、この繫縛（けばく）が解かれます。共に答えであることが、ここに引っかかれば、因果に落ちるし、因果にくらまされると、迷妄の世界に入ってゆきます。

自己そのものも本来空であり、因縁・業も、本来空であることを思えば、この本来空の場において、諸縁に対して真っ向に引き受けていく、これを仏道というのだと思います。

五百回は数えることに困難な数字です。狐だからこそ、人を騙そうとするのか？考えてみれば、百丈も狐に似て、人を迷わします。五百回も繰り返して生きることができれば、その五百世の一生一生を充実して生きれば、この老人は多生の縁を、くり返し楽しんだはずですし、煩惱と菩提のあいだの往復を繰り返したはずです。

何ともこの世は、変化に富んで面白く、不可思議で、解ろうとすれば、人や狐を迷わします。何度となく迷ってみなければ、解らないことかも知れません。

「因果に落ちない」で、生まれ変わり。「因果の定めをくらまさず」に、死して、再びめぐる生のない所に行ったか、どっこい、狐はここにいる。

多回生の世界観を持つことで、再生の願望が現れ、また一回生の世界観である涅槃や解脱が現れます。仕事にしても、全存在を通して、立ち向かってゆき至れば、最早、そこにじぶん自身の存在はありません。しかし、立ち止まってみれば、因果は巡る風車のまっただ中にいたことに気づきます。

そして、その場所で、考えてみれば、因果の世界に迷うが故にこそ、智慧や慈悲が尊ばれる世界があるとみれば、もう一度生まれ変わって、狐となり、人となるのも人間の選択肢とみれば、案外と多回生の世界こそ、人を豊かにする世界なのかも知れません。

破地獄偈（平成20年5月24日）

お互いが認め合うことで、たとえ、あの声が聞こえなくとも、今、話しかけたい。たとえ、あの人が食べなくとも、今、美味しいものをお供えしたい。たとえ、喜ぶ顔が見えなくとも、お花とお香をお供えしたい。たとえ、あの姿が見えなくとも、手を合わせたい。今・ここに、いっしょに、いるから。だって、先祖の血、みんな集めて、私は、生まれたから。

施餓鬼会（せがきえ）の法要とは、弥勒菩薩（みろくぼさつ）の兜率天内院（とそつてんないん）を再現しようとする試みです。

その彌勒菩薩は、五十六億七千万年後に出現するといわれています。しかし、私たちには、待つ時間はありません。

禅に、「釈迦も弥勒も修行中」という言葉がありますが、釈尊は過去の人、弥勒菩薩は未来の人です。ともに今逢うことができないならば、私という心の中に、釈迦と弥勒を再現させる以外に方法はないではないかと。それは、私が釈迦になり、弥勒となる以外にないではないかと。

そのヒントが、施餓鬼会法要のお経、施餓鬼文冒頭の言葉にあります。その内容は「若し人、三世一切の仏を知らんと欲せば、まさに法界性を、一切唯心が造ると観ずべし」です。世に、破地獄偈（はじごくげ）と呼ばれるものです。

それは、仏を知ろうと思ったならば、心が世界を創っていると見破りなさいということです。

釈尊は、クシナガラ郊外のシャーラ（沙羅）樹の林の中で最後のメッセージを発しますが、遺教経（ゆいきょうぎょう）というお経の中にあります。

「弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、自らを灯火（ともしび）とし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法を灯火（ともしび）とし、よりどころとせよ、他の教えをよりどころとしてはならない。」

「他の教え」とは、人間が創った教えと解してよいと思います。また「自らをよりどころとせよ」の、自らとは私なのですが、これは主体性を持った私という意味です。しかも、私の手、私の足、私の身体、私の心といったふうに、対象として考えられない私という意味です。

その私を、鏡とたとえると分かりやすく、鏡の性質に二つの特質があります。それは、鏡はあらゆるものをすべてそのまま映すということです。もう一つは、景色が変わっても、前の景色や残像を残さないということです。

映るものは時間とともに刻々と変わるけれども、永遠に鏡の中に残るものは何もないということです。私たちの心の中に、この鏡性という、それは静けさともいえるものですが、見届けているものがあり、それを、仏性・仏・父母未生己前本来面目・一無位の真人と、禅は位置づけているといえるでしょう。

その鏡性は、世界を映しながら、「すべての存在は本来空相であって、真実のものは何もない

と見届けています。真実に存在するものは何もないのであるから、実法なしである」と、そう徹底して見ていくのが真正の見解（けんげ）とといいます。

もっとも、真に存在するものは何もないといいながらも、実際には、世界（時間と空間）は因と縁により出現したものと解釈し、その因縁がなくなれば、消滅するものと考えています。だから実法無しと、一期一会の出会いとは、真にかけがえのない出会いのことを表しています。

「自らをよりどころとせよ」とは、よりどころとする私を見極めることの発言ですが、さらに、「この法を灯火とし、よりどころとせよ」と釈尊は重ねて告げます。

施餓鬼分の巻頭の語、「法界性を、一切唯心が造ると観ずべし」には、法と鏡性としての心がしるされます。この法と自ら(私=鏡性)の関係を一体としてつかむことが禅の宗旨といってもよいと思います。

臨濟録には、「云何（いか）なるか是れ法。法とは是れ心法（しんぼう）なり。心法は形無くして、十方に通貫し、目前に現用す。」とあります。

目前に現用すという意味は、「眼に在っては見るといい、耳に在っては聞くといい、鼻に在っては香をかぎ、口に在っては談論し、手に在っては執捉（しっしゃく）し、足に在っては運奔（うんぽん）す。」と、心の働きになります。

鏡性自身は、私とも、仏とも、本来の面目とも、有とも無とも言えません。何故なら対象となるものではないからです。自らが働き出したときに、初めて対象(客観)として見ることができると解釈できます。

臨濟録には、その現れ方という関係が、主観と客観を例にとり、四通り記されています。

《◎記：臨濟録・山田無文老師・禅文化研究所出版》

◎主観を奪ってしまって、客観の世界に実在を発見していく。

我と世界とが一体という立場において、お互いの生活を分けていくと客観だけになってしまう。自分を忘れて映画に見とれてしまう。あるものは映画だけだ。自分というものはなくなってしまう。自分を忘れて花を眺める。我を忘れて子供を愛する。客観を生かし相手を生かしてゆく。こういう場合も人生にはある。

◎客観がなくなって、主観だけになってしまう。

そういう場合もあるはずである。相手をすっかり忘れてしまう。思う存分に歌ってやる。舞を舞う人が思う存分舞うようなものだ。天上天下唯我独尊だ。相手も周囲も社会も、何も考えずに自由自在に人間性を生かして、我を生かし、我を肯定していく。こういう場合も許される。

◎主観も客観もなくなってしまう。

お茶をやりながらお茶を忘れ、我を忘れておる。工場で機械を動かしながら、工場におることを忘れ、機械を忘れる。仕事と我とがピッタリ一つになって、そこに人も境も忘れてしまう。内外打成の一片の無字である。念仏三昧、そういう境地もある。

◎主観があり、客観があって、お互いのこの対立的な常識的な世界が開けてくる。

我もあり、人もあり、世界もある。「花有り、月有り、楼台（ろうたい）有り」だ。夏になったら、涼しい浴衣でも着て、家内子供連れて、有馬温泉へ行って風呂に入り、ゆっくりと涼みな

がら、帰ってこようか。我もあり世界もある。こういう境地もなくはならん。この四つの世界を自由自在に使い分けていくものが、禅というものだ。

私たちの生活は、この主観と客観のかかわり方の変化に過ぎないのですが、その主観(私)と客観(世界)を対照的に観ていくのではなく、切っても切れない主観と客観を、一体として観ていくのが禅的な生活です。

ただし、主観は一切主張していませんし、認めることも、求めることも、願うことも、心配することも、物語を作ることもしません、言葉も発しません。思うことや考えることは客観として対照的なものですから、移り変わるものです。「釈迦とは誰ですか、弥勒とは誰ですか」と問われたとき、その問いをはっきりと聴いた主観こそ、釈迦や弥勒と一つも違わない普遍的な主観です。

この主観をつかみ、わかると、眼・耳・鼻・舌・心・意に触れるものが、そのまま実在となって現れると言えるでしょう。何故なら、一体となっているからです。

それを、生活という中に言い表してみると、縁に随ってそのままに、夫という衣装を着け、妻という衣装を着け、サラリーマンという衣装を着て、子供という衣装を着け、親という衣装を着け供養するものという衣装を着けるといふ、主観が客観となって働きが輝きます。

施餓鬼会法要に参加するとは、お互いの主観がお施餓鬼という客観の世界を創造することです。お互いの心がそれを認めなかったら、このお施餓鬼は存在しえないことです。

だから、お互いが認め合うことで、たとえ、あの声が聞こえなくとも、今、話しかけたい。たとえ、あの人が食べなくとも、今、美味しいものをお供えしたい。たとえ、喜ぶ顔が見えなくとも、お花とお香をお供えしたい。たとえ、あの姿が見えなくとも、手を合わせたい。今・ここに、いっしょに、いるから。だって、先祖の血、みんな集めて、私は、生まれたから。

法とは、世の中を眺めていく眼でもあります。その眼さえ分かれば、むやみにもものを求めることも、さげすむこともないはずです。それは、逆に言えば、仏を見て、お金を見て、人を見て、すべてを見ていく眼となります。山田無文老師は言います。「人生の中に尊いものを発見するのではなくして、尊いものと卑しいものを見分けていく眼をつかむことが人間の根本問題である。その眼さえ開ければ、何を見ても美しく思うように、自分の中に美しさの種を持つようになるものです。「我を見る者は法を見る。法を見る者は我をみる」と釈尊が言うとおりにです。

ジテンキジンシュー　我ら、なんじに供物を施さん。

この指止まれ！

一体どうしてしまったのだろうか？この国は！

この国の未来は？

家族の行く末は？

子供たちの未来は？

子孫にとっての故郷は？

家族と家庭（平成11年1月5日）

毎日が矢のように過ぎ去って行きます。そして今、私は二人の男の子を養育しています。私の母は、八王子の古いしきたりを持つ、織物の機屋の七人兄弟の二女として生まれ、五番目の子供でした。大勢の職工さんをかかえた旧家は序列が決まって、母は下二人の妹達の世話を結婚までよく面倒を見ていたそうです。今考えると、だからこそ、序列が守られていたわけになるのだろう。そう言えば、母は若くして亡くなった三男のことを、「やさしかったし、よく世話をしてくれた」と、話していた。長男は家名を継ぎ、今も健在で九十五歳を迎えて、「百歳まで生きるのだ」と豪語しているが、家督は継ぎの世代に繋がれているものの、家業は時代の流れで廃業し、多くの八王子の機屋と同様に転業している。

父親は侵すべからざる存在として、家庭と家業の中心として君臨していたことは間違いない。母は、私達子供に、自分の育った環境をよく話してくれた。しかし私が物心ついた頃、不思議に思ったことは、母の育った伝統の習慣を、私達には伝えてこなかったことだ。父が、八王子の中学の国語の先生をしていたので、母が育った時の環境とはかけ離れていたことは事実だ。父も次男だったせい、そして職場を外に持ったことにより、私には、母から教わった、父から教わった習慣が無い。

今、私に伝わった習俗を点検し、見つめなおそうとしようとする時、そして新しい年を迎えようとしている今、「いや、正月の気分がなくなったですね。歳末と言う雰囲気、本当になくなった」と、友人は言う。友人の歳末を見る景色も変わったが、実は、友人の心も、年があらたまるという変化を、新しく感じられなくなってきていることを思う。

そのことを自分に照らし考えてみてもそうだ。子供の頃の、正月を家族と迎える気持ちに変化があるのだ。昔も今も、正月じたいは変わらないし、同じ営みを続けている。確かに、子供の頃は貧しく、今とは食べるご馳走が正月以外食べることができなかつたし、晴れ着を着る時もなかつた。

二十三歳を過ぎての修行の道場は、これは伝統と格式の場で、まさしく言い伝えそのものの中に、どっぷりとつかった。正月3日間は禁足、午前中は大般若經の転読をして、4日目にして、般若札を信者宅に新年の挨拶を加えて届けるのが、雲水の仕事だった。なにより嬉しいことは、厳しい行が、正月はなかつたことだ。

考えてみれば、家庭における習俗は常に変化していくのは当たり前であり、その変かに合わせて習俗が多様性を持たなかつたのが今なのだろうか。その変化は、家庭に電気製品が侵入した頃から始まるのではないか。便利さ合理性、そしてそれに反比例するかのよう、習俗が亡くなっ

ていったように思える。分析してみても昔に戻らない。正月の新聞を読んでも、過ぎ去った歴史は様々に捉えていることはいるが、現在も未来も語られていない。

禅の見方から見れば、家庭を築きながら、家庭を問うことは、私と家庭はすでに離反していることになる。それは父親でありながら、自らの父親を問うことに、父親が不在であることの家庭の悲劇であるともいえる。自己を問うことも、問う自分と問われる自分が分離していれば、二つは離れたままだ。されど、問わなければ一つになりえないというジレンマがあるのだから、ここが面白い。

どっちに転んでも、救われるのは、私がいかに離反していようと、家庭は歩みつづけるということだ。

もし煩悩を捨てて菩提に入らば、知らず、いづくにか仏地有らん。（ほう居士）

導師（平成10年8月30日掲載 平成11年2月26日補筆）

葬儀において、家族の深い悲しみを背にして祭壇の前に立つとき、亡くなった人が臨終あるいは意識がなくなる前に「ありがとう」と、感謝の言葉を残していった人のことに関しては、この言葉が本人にも見取った家族にも、その人の死はそして葬儀は、天より与えられた人としての使命を全うし、死を受け入れ、卒然として旅立って行くことの確認になります。

辛く苦しく病魔にさいなまれ、死んでも死にきれない内に迎える辛い死の場合は、その死が突然訪れようと、ゆっくり進行しようと、葬儀の場合はこの辛く苦しい無念の心を晴らさなければ送ることができません。それには、まず涅槃の中身を説くことになり、その言葉ゆえに二度と苦しみのない浄土に生まれ変わることを決定していることを宣告いたします。その中身を家族が受け入れられなければ、無念の心を代わりに背負って、そして祈ります。

自殺の場合は、叱る場合もありますが、自殺の先の束縛からの開放の目的を提示することによって容認する場合もあるでしょうが、残された遺族と共に歩こうということを考えると、遺族の対応を見ながら、迎合はせずに、堂々と正論を主張しながら、共に歩こうという対応も必要なときがあります。

では突然死と言われる、心臓発作、交通事故等の場合は家族にとって、戸惑いと落胆は大きく、死者が若ければなおさら喪失感は大きく言葉もかけられないのが現実でしょう。まして葬儀は時間が限られていて、その後の対応がより大きな問題となるからです。

平成10年8月旧盆にお経を詠みに行った家庭の話です。一人息子が国立H大学の大学院を卒業直前の3月、交通事故で亡くなったのでした。25歳だったそうです。卒業の記念旅行を車で出かけた際に、4人の内彼の息子一人だけがスピードの出し過ぎだったそうですが、車から放り出されて亡くなりました。運転手の後席に乗車していたそうです。葬儀は彼の友達のいるH市で執り行われたそうです。

父母は仕事の都合で千葉県に住んでいたのですが、5月江戸川区の西葛西に引っ越してきました。仕事の都合上、定住場所を持っていないのか、定年まではこの葛西で過ごそうと思っているそうでした。彼を誇りとしていただけに、その喪失感は大きく、遺骨が大切に飾られておりましたのが辛い気持ちを表わしておりました。

定年になったら、父親の故郷近くに静かに暮らしたいという、ご夫妻にはただ聞くだけで、お別れに「25年というかけがえのない思い出を頂きましたね」と声を掛け、「何か私で役に立つことが出来たら」と去りました。寺への帰途、とてもやりきれない思いになりました。息子を突然亡くした夫婦が、いずれ立ち直ってくれることをただ願うばかりです。葬儀に良い悪いはないのですが、やはり考えてしまいます。「私が葬儀を執行していたら、この夫婦にどう役に立てたでしょうか」と。

葬儀における導師とは、文字通り”導く師”なのですが、私は死んでいった人を導くより、死んでいった人の家族や友達の人々の心を通して、死者の魂を導くのだと思うのです。そして死者の家族と共に在り続けることも必要なことではないでしょうか。共に歩き歩きつづけるため、導師はそれまでとは違った視点で捕らえ、切り口をえぐり、別れの式に集まった人々を浄化させ、人の尊厳を高らかにうたいあげなければなりません。

亡くなった人を、何処に導くのかと言えば、それぞれの人の心の故郷です。私は心の耀きの中に導くのを生業とするのだと思っています。なぜならば、人が生きる場所は、現実には迷い悩みや辛いところにいることが多いからです。またその中にこそ人の生きる場所はないのだと、決め付けたほうが却って安心できるからです。共に生きる場所は私達が生きる場所でもあり、その中に浄土を、心が常に耀いていることの発見をすることが大切なことと思うのです。後のことはお任せすることが大事なように思うのですが。

家から個人へ、そして家族・友達へI

禅では、人生を、『人が生まれる』と読むそうである。この読みはそれぞれの人にとって、多くの意味を持つと同時に、こんなにズバリと万人にあてはまる言葉もない。人間のこの世での一生は、『人が生まれる』より出発し、『生まれた人の寿命が尽きる』ことにより、幕を閉じる。そして、この間のいかなる時も、『人に生まれる』時を保持している。

凍てつく北風に背を丸めた時、冬の訪れを知ることと、草花が芽を出し、花を咲かせる時、春を認めることは、けっして春が来たから草花が花を咲かせるのとは違う。一人一人それぞれの冬であり、格別の春である。去年の冬と、今年の冬は、その人本人にとっては、まったく別のものであると思うのです。

人が年を加えて、新聞の活字がぼやけて見えなくなった時の肉体的な衰えを知ること、そのことは、本人にとって未体験の領域に踏み込んでの、実体験です。人はいつでも未知との遭遇を経験しています。この意味では、赤ん坊も老人も、平等に初体験を繰り返します。もちろん軽く受け流すこともあるでしょうが、それが大きな意味を持つ場合もあります。

二十歳過ぎて、友達が次々と結婚して行く適齢期にたった女性のあこがれに、「私も、近い将来こうして幸せな家庭を築きたい」という希望がある。やがて友達に、赤ちゃんが生まれて、大きくなって行く過程の母親やそれらを含んだ家庭の姿を見るに付け、結婚願望がしおれて行った女性を見ました。

勤めていた頃の友達と較べて、子供の成長や家族との関係に追われるように、毎日が過ぎて行く。毎日が自分の自由になりえると思う自分の姿と照らして、「ああまでして、なぜ結婚しなければいけないの」の言葉に、返答が詰まってしまった私であった。

そういえば、「彼は四十過ぎて、可哀想に、まだ独身なんだよ」という友人の言葉に、別の友人が「なんで可哀想なんだい。結婚している我々のほうがよっぽど、彼から見ると、可哀想かもしれないんだよ」と言った。

「我々は、社会の年寄りを支えながら、次の世代の子供を育てているのだから」。

何十年か後、彼らが年寄りになって、他人が育てた子供から年金や社会の恩恵を受けるとしたなら、今、何をしなければならないのだろうか。ひょっとすると、この考え方はもう時代に合っていないのかもしれない。なぜなら、アメリカでは401K年金が主流で、この考え方は個人の責任で自分の老後を設計するというのが原則であるからである。

戦前までの様々なものの考え方の一つに、『家』というものがあった。家によって縛られる個人の人権の開放と言う意味で優れての効果は、女性や跡取問題の家へからの開放であったはずだし、そのほかにもたくさんあったはずだ。専門家ではないので、うまく言うことは出来ないが、国の施策も相続税とかそれに沿った方向に同調して、結局なくなったのは、家々での文化の伝

続や習俗、家を守る人と人とのつながりではなかったろうか。不思議なことに、皇室が家制度を今も守っていて、守ることにより、伝統や文化が温存されている。

無い智慧を幾ら絞っても、この問題は大きなテーマであるので考えがおよばないが。いいたいことは、野放図の勝手自由と個人の責任と権利との関係である。だって、そこには自分意外を尊重すると言う発想が無いように思えてしょうがない。もちろん、他人を尊重するということの中には、口を挟まないということはあるでしょう。ですが、そのことは自分の考えやものの見方を押し付けないということとは別に、慈しむ、育む、見守る、受け入れるという、社会と接点を持ちつづける自分が欠落しているように思えてしょうがない。

だいぶ、脱線してしまった。話しを元に戻そう。彼女は、小さい時から父母の言うように、幼稚園は〇〇幼稚園、小学校は〇〇小学校、中学高校は〇〇学園、短大は〇〇短大にと規定の路線が走っているかのように進んで行った。

バブル崩壊後、本当はスポーツ選手の栄養管理の仕事をしたかったのだが、仕事がなく、給料はすごく安かったが、港区のS病院の栄養師として就職した。あまり人づき会いは好きではなかったので、彼女に合っていたようだ。5年ほど勤めた時、やさしかった祖父の死去をきっかけに、父母に病院勤務を止めさせられ、実家の家業を手伝うはめになってしまったと。その間、親しく付き合う男性があらわれた。東北の出身で、言葉に東北訛りがひどく、それがもとでコンプレックスにおちいった男性を励ますうち、いつしかお互い思い合うようになり、結婚を約束したのだが、娘の父母の頑強な抵抗に会い、断念した彼女だった。

「二十七歳になって、結婚をせまられても、今まで、すべて親の言うなりに抵抗できずにいる自分がいやなんです」、「私この頃、一日がおわって布団に休む時、ホッとするんです。このまま死んでも良いと思ったりすることもあるんです」と言う彼女の屈折が、彼女を阪神大震災一週間後、神戸に走らせたりもした。しかし、「あんたらは結局、よそもんや」と言う被災者の古老の言葉が、彼女を神戸から遠ざけた。今、彼女は家業の、保険の仕事の手伝いをしている。両親は彼女を「早く、嫁に行け」というが、彼女にとって、この問題だけは親の言う通りにはならない。「だって、どうして結婚しなければいけないのかわからないんだもん」。

彼女も一生懸命に、自分自身を模索している。

葬儀において、告別式が終了して出棺の前の挨拶で、若い喪主がメモを見ながら会葬者に挨拶をしていた。「最後に残された私達遺族に、故人に受けました生前と変わらぬご厚誼を賜りますようお願いしまして、挨拶といたします」と、話していた。何度もこのような場所に立会いながら、『どうして、故人の生前と変わらぬご厚誼を遺族にも振り向ける』ことを、誰もが挨拶の終いに言うのだろうかと思つた。喪主にそっと聞いてみたら、「こう言うもんだと言われた」と応えた。

その時ハッと気が付いたことは、故人を偲ぶために、追悼の場に来てくれた沢山の会葬者の厚情を、実は遺族への引継ぎの形で終わらせる、伝承の儀式の意味を持たせることによって式は終了するのではないか。

私がする葬儀において、亡くなった故人を偲んで、徳をたたへ、人格を肯定し、今まで歩いてきた道を追想し、これからの旅立ちの道を照らす儀式の執行は、何の意識も無くその行為を『しきたりだから』と挨拶する中に、遺族への伝承の儀式にすりかわっていたことになっていたのだ。遺族、それは残された最少の血縁家族のことだ。では何の為にそのことが必要なのであろうか。言うまでもなく、残された家族の幸せ、安らぎ、つぎへの伝承である。

本来から言えば、家族は一人一人ばらばらの人格の集合であるから、家族の一人一人の人格へ、故人の生前と変わらぬご厚情を、今後は受けることになる。

人というものは、血にしる、学問にしる、事業にしる必ず次への伝承のものがなければ滅びることなのだ。伝承とは、別名、未来とも言うのではないか。滅びる先に未来は無いとするならば、我々は次の世代にもっと語り継ぐことをしなければならぬし、語り継がれる世代は、謙虚に耳を傾けなければならない。どうしても説教調になってしまうのは職業柄いたしかたない。

私は最近、『先祖供養』という言葉に『精神的遺産への感謝』と言うようにしている。もちろんこの言葉が理解できるには、『人に生まれる』と言うことが実感できなければ無理だし、自分の中に流れている血の否定的なものや肯定的なものをそのまま受け入れるということが必要なのだが。

家から個人へ、そして家族・友達へII

過日、ある家に行った時のことだった。その家の次男の嫁さんが、実に客である私達に应对がすばやく、菓子を出し、お茶を運び、その間にも私達の注意をそらさず、実に気持ちの良い接待をしてくれた。その時その家の姑が、「〇〇さんは、とてもおしこみが良いこと」と、みんなの面前で話されたのでした。

しばらくして、次男の嫁さんが帰った後、娘達が母親に、その『おしこみ』について、「失礼な言葉」とか、「もっと違う言葉」がなかったのかと、話題に上がったのでした。

少し前の大家族制度、あるいは家制度の中では、外部から来たものを含めて、その家での序列が決まっていた、その序列を護ることが、その家族を維持することであり、その家の格式を護ることにつながり、家の安泰つまり後世への存続へと繋がることだったと思うのです。

またそうでなくとも、大きな集団を維持するには、それなりのルールが必要であることは、誰しも異存はないでしょう。その意味で、『躰』、『おしこみ』は当然のことでもあったはずです。その集団の中での自分の立場が決まっていた、そうしなければ、維持できないのですから、その枠を守れということだったのです。今では古い慣習となってしまったことのように見えて、このことの中から何か真理があるように思えて、仕方がないのです。何故なら、その次男の嫁さんの立ち居しぐさが、自然で美しいと思えたからです。もちろん、おしこみだけでなく、次男の嫁の人間性のすばらしさ等があるのは、言うまでもないことです。

今は『学校崩壊』が話題になっていますが、その数年前には『家庭崩壊』が世間を騒がせていた時が、あったのを思い出しました。ある集団が崩壊する条件として、第一に挙げることができることは、集団を構成する個人の、その集団を維持する為の自覚のあり様です。小学校の生徒が、生徒とは何かとわかっていなければ、生徒とはいえないわけで、生徒の務めを果たすことによって、学級は成り立つことは当たり前のことなのです。そして生徒とは、知識を覚えるために、まず学校に毎日登校することも当たり前です。その他には、体力をつけたり、友達を見つけることも必要でしょうが、クラスでは先生と生徒との関係を保つことが必須条件なのは、誰しも認めることでしょう。この関係というところで、仏教がからみます。

先生が成り立つ条件として、生徒が必要なことは当たり前です。生徒がいなければ、先生はいませんから。また、生徒にとってみれば、先生がいなければ、いくら学校に行ったとしても、生徒ではありません。先生や生徒は、この対立する関係において、成立することであり、相手がいなければこの関係は維持できません。つまり、生徒は先生によって、自らの立場を確立することになります。生徒の務めを果たすとは、このことを言いますから、努めを果たせなければ、自らの

立場を失うということにもなるのです。さらに努めを果たすことによって、クラスである全体を維持できることを考えれば、崩壊する理由は簡単です。

屋根の瓦を想像してみましょう、大きな屋根に瓦1枚では何の役にも立ちません、全体に敷くことによって、雨風を防ぐという働きを遂行致します。その全体の中の1枚の瓦を考えてみれば、必死になって1枚の瓦としての努めを果たすわけです。もし欠けていたり、ゆがんでいたり、斜めになっていたりすれば、全体の役目を果たすことができないでしょう。瓦1枚は、ただの1枚ではなく、大切な1枚です。

『躰』『おしこみは』は、集団での自己のより所を全うする為の、きまりだったのです。1枚の瓦を、補修することは、躰に該当することです。それぞれ1枚の瓦が、より堅固に任務を果たせば、屋根は二十年、三十年と年月を刻むことができるのです。

会社にしても、部長の仕事の役目を護ることによって、組織は成り立つことで、皆が勝って気ままに仕事をしていたら、その会社は潰れてしまうこと、目に見えています。組織を構成する個人は、自らその構成員としての責務を全うする事において、組織は維持されるということを自覚しなければなりません。自分の努めを果たすことは、組織を維持し発展することなのです。そして自分が努めを果たしているからこそ、組織は維持できていることでもあります。

家族にも同じことが言えますが、現在の家族は、さまざまに変質しているようです。まず自ら個人の存立する条件を直視して、自分の存立する条件は自分にはないということを知ることです。夫婦はその関係として、夫婦を全体として考えた場合、夫は1/2、妻は1/2で全体を支えます。連れ合いを亡くすと、人生の半分を亡くすというのは言い得て妙な言葉です。夫は夫の努めを果たすと言うので、さまざまな夫婦によって努めは異なることですが、それぞれに補完しあいながらも、家族は維持されて行くと思うのです。

脳死そして臓器移植 …子供たちに光を！…（平成11年3月2日）

1999年2月26日の夕刊から始まった高知赤十字病院の、一人のドナーカードを持った、44歳の女性の脳死が日本中をわかせた事件は、実に1968年の和田移植以来31年ぶりの、多臓器移植の夢を実現させた。関係機関は和田移植の二の足を踏まない鉄則のもと各機関が連携して、この歴史的な幕開けを演じた。

日本の一人の女性の脳死が、しかも故人の善意の意思がそして女性の家族の理解と勇気が、これほどセンセーショナルに報道され、結果として6名の命を救ったことと、臓器提供を受けたそれぞれの患者がひとしくあらためて命の大切さを思い、感謝して冥福を祈ったのでした。

私は一人の寺の和尚として、ひしひしといずれこの私も、私の関係する家族の葬儀を通して、このことにかかわる当事者の一人になることが、遅かれ早かれやってくると思うと、考えなければならぬと思うのです。そして、人の死が二つあるという矛盾と、子供たちに、この究極の命の喜びを伝えられないというジレンマを悲しく思うのです。

脳死は、心臓停止という死と人の尊厳を問う問題なのだろう。死は、心臓停止と脳死に分離された。心臓停止の死は、人工呼吸機によって延命され、脳死は、全脳死と脳幹死に分かれるらしいが、日本では全脳死を選択し、脳死者の臓器提供の意志確認と家族の同意をもって認めると言う、但し書き付きの二つの死が存在することになってしまった。

人の尊厳を問題にすれば、人の死を、人為的な作用で加えてはならないことが鉄則でありはするが、脳死をもって、人の死とすることを確信することは、やはり自然死を是とする現状では、勇気を持たなければ言えないことだと思うのです。後世においてひるがえされるかもしれない判断を下すと言うことは、大義がなければ下すことは出来ません。

生物は生物の死によって成り立っている現状があります。人も人に生まれて、生の時間のなか、意義を見出して、善意をもって歩む途中、自己の判断ではどうしようもできない、自分のいしくも、借り物の肉体との決別の時を迎えた臨終の時に、自身の肉体の処置を、家族や医療従事者に遺言の執行として、依頼せざるを得ないのです。見届けることのできない理不尽さが在るかもしれません。信頼という言葉の意味を噛み締めながら考えても、最後には任せることしか選択はありません。

医学では死を、機能停止と呼ぶのだろうか。私は死を、旅立ちと言い、家に帰ると言い、自然に輪廻すると言う。その上で浄土、天国と言い、仏や神と結びつける。自然は在るがままと言い

、それを寿と言い、妙と言う。

脳死において、刻々と変化する臨床と判定の時を追って繰り広げられる事実、脳死患者の心臓を取り出す外科医のメスは、人の死を執行する立場（心臓停止の死における側より見れば）に、手術室は葬儀の場所に、外科医とコーディネーターが脳死者の意志を導くような気がするのです。

せめて、僧侶がそばに控えて、家族に脳死者個人がいかに生きてきたか、そして呼吸が止まった時、脳の機能が止まった時が、人の終わりではないことを告げ、受け入れて貰えなければ、死者や家族の意思は次のステップに進まない、私は思うのです。家族と共に、この事態と展開を見つめ、切り刻まれた遺体を鎮め、亡くなった人の尊厳をたたえ、家族の祈りを死者の魂へと送る勤めが葬儀という儀式の本位ならば、僧侶である私は、家族と共に見届けたい。

脳死を人の死とするかの問題は、本来、人口呼吸機が作られたときに社会に問わなければならなかった。人工呼吸機は人の命の延命を願って作られたのではあるが、その時、人の命、生物の死、人の願いを、人は問わなかったのだろうか。確かに、心臓停止の人の死は、冷たくなって行く死に行く人の身体をそっと見守った時、臨終の決断は迫られない自然な死であると思う。そして大多数の人の死は、従来どおりの死であることに、間違いなことであると思う。人の死は、受け入れるまわりの一人一人によって違うし、一つとして同じ死はあり得ない。

本来の死は、脳死も心停止も時間差はそれほどなかったのだが、人工呼吸機によって、その時間差が長時間にわたるようになってしまった。人は、その長時間の時間差を利用して、自己の命を支える臓器移植と言う究極の布施行を発見したことになる。そしてその布施行には、現時点で、家族の痛みをともなう。その痛みを喜びに昇華する立場を、僧侶はになっていると思う。

「まだ生きているのに、マスコミはこんな騒ぎになるのか」と家族の動揺が、26日の夕刊に伝えられている。この言葉から、脳死の臨床判断と判定の食い違いによる報道の騒ぎが、脳死を日本で始めて受け入れるという、家族の作業の決断の苦渋がうかがえる。

臓器を受け入れる立場は、考えてみれば辛く苦しい。受け入れた臓器は、はたして、受け入れた患者の体内で適合するだろうか、適合しなければ次の臓器移植か死を選ぶことになるのだろう。一生にわたって免疫攻撃を受ける。そのため、一生、免疫抑制剤の投薬と身体管理を受けなければならないという。外部から侵入した異物は、投薬と言うだまかしがなければ、他の臓器と一体となつての連携プレーが出来ないという。

私だけがどうしてこのような身体をもってしまったのか、生きたい、死にたくない、人並みに最後をまっとうしたい。そのことが少しでも可能なら、実現できたらよいと思う。

自分の死と対面して、暗い気持ちが少しでも好転したら、どんなに世の中を違った視点でとらえられるか、生きていることの意味をどんなにか肯定できるかと思うと、限りない意味をもつことになる。自然に臓器移植さえしたならば、内部の疾患を治せると、そんな時代が、すぐ近くに

来ているのかもしれない。両親にしても、生まれた子供の治らぬ疾患が、善意の意志によって、子供の成長を見れるとしたなら、どんなにか救われることだろう。

だが、現状は15歳以下の子は、その可能性が閉ざされている。命の尊厳に、年齢の差があってはならないはずなのだが、ドナーカードの臓器提供意志が採択されないらしい。幼い人の意志が確認できないのであれば、その意志が採択できるまで、家族が親がその子に代わって、意志を表示できないものだろうか、考えてみる。が、そのことが社会に与える意味を、私は、はかり知ることができない。

人が生きると言うことは、『生かされて、生きる』ということに違いがなく、自分が生かされて生きて、もはやこれまでと言う最後を迎えたとき、私の臓器が他人が使えるのであれば、私の意志として、脳死を死と認めて、求める人に提供しよう。

追記 平成11年3月3日

脳死患者から各病院へ臓器を搬送する報道をみて、臓器によって随分と時間差があることを知った。心臓と肺は短く、肝臓が、腎臓がそれに続く。脳の臓器移植は聞いたことがないのだが、考えてしまう。また、ふと思ったのは、実は脳にも死に至る時間があるということなのだろう。もし脳死が人の死と決まった場合、おそらく圧倒的に多いであろう、心臓停止や呼吸停止の病人の脳はどうなのだろうか。まだ生きていることになるのではないだろうか。

何やら大変なことに気がついたような気がする。確かに構造的に脳が破壊されたら、総ての機能は遅かれ早かれ停止してしまうだろう。それよりも、意識を生み出せなくなってしまうし、創造的活動も、感情の作用も、心の働きとしての作用がなされない。人格の創造的死と言えるわけだ。心臓はペースメーカーに代わるができるし、その内、技術の発達で総ての脳以外の器官は作られるのかもしれない。病院の緑色の心拍計の横一線のグラフに、付け加えて脳波計を置いたとしたら、心臓計の心臓停止の合図も、脳波計が元気にグラフをうっていけば未だ生きているということになる。

追記 平成11年3月4日

人の死は、すべて個人的な死であると思う。部分的には脳死も心臓停止も細胞死も筋肉死もあるわけであるが、総てを含めて個人的死であると言いたい。死者に対面する人の感情は、それぞれ受け入れがたいものを持つ場合もあるし、共通する場合もある。場所や時間によっても違うのだろう。死体が冷たくなっても、まだ死んでいないと自分に叫ぶ場合もあるだろうし、どう対処していいか分からない場合もある。個人的な死である限り、死者に対面するそれぞれの人が、「死んだ。亡くなった。天に召された。土に還った」と、自分が納得する作業によって、それぞれの死を見つめるのだろう。

友人がこんな話をしていた。

「いや、昔、田舎の火葬場で、火葬うのため、重油に火をつけ、職員が裏のかまどの中をのぞこうとしたら、お棺の蓋が動いて、中からギャーと言う悲鳴が聞こえたと言う。職員はゾッとして、逃げ出したと言うんだ」

「昔、まだ土葬だった頃の話で、火葬が行われない場合は葬儀が済んだら、墓地で穴を掘って座棺を埋葬したんだ。数週間して、遺族がフッと気になったらしい。気になりだすと、どうしてもて墓地を掘ってみなければと思ったんだ。墓を掘り返すなんてことは、出来るもんじゃない。だけど、掘ったんだね。棺桶の蓋の裏には、無数の引っかき傷があったんだって」

追記 平成11年3月12日

人の死は、それぞれに固有のものであることは言うまでもない。身内にとっての死は、二度と帰ってこない自覚の、死を容認するという作業があってはじめて成り立つことであり、そこには医療とは別個の死が存在する。二度と帰ってこないという確信が、医療の信頼のもと、脳死を受け入れる前提になることは間違いない。だが「そこに存在するだけでいい」と言う親族や家族の気持ちも否定することは決して出来るものではないことも確かだ。多くの檀家と接する私の鉄則に、「けっして檀家一人一人を評価してはならない」という守り事があるのだが、医療従事者も同じだと思う。このことは、それぞれの立場を、生きてきた過程を、心情を、考え方を、ただ受け入れると立場にあるということだ。

独り決めの生き方

平成11年9月19日の日本経済新聞に、文芸評論家秋山駿氏の、戦後に生きたわれわれの世代にとっての何かが変わりつつあるのかと、『遠去かる戦後の影』と題して、江藤淳氏へのエッセーが載っていた。

『遠去かる戦後の影』の中には、”独り決めの生き方”が、示唆してある。

『「私は自分（子供がいなく、夫婦二人だけの家庭）になぞらえて推量する。これらの人達にとって、戦争・敗戦・戦後展開する新事実、痛烈な、生の転換の時であった。彼等は決断した。一個独立、一瞬目にした幻を追い、すべてを捨てて、前途も知らず、自分だけの新しい道を歩いて行くと、と。すべてを捨てて、のなかには、子供も入れれば親族も入る、これは仕方がない。一瞬目にした幻とは、まるで蜃気楼のように浮かんだ文学のもっとも高い塔が、ここへ登っておいでよ、と手招きしたのである。……文学上でも人生上でも、同じ生の態度を貫こうとするとき、そこに生の原理が出現する。生の原理とは、いわば、自分独り決めに生きる、ということだ。妻に癌を告知しない、自殺する、すべて独り決めの行為である。……生きる、ということは、もう一人の人間とともに生きる、というのが人間生活の原則であって、もう一人の人間とは妻である。……江藤さんは独り決めに生きることに過ぎて、妻は妻で独り決めに生きるそこを覆ってしまった、それを謝罪しているのではないか、と感じたのである。……今日、核家族化の流れ、つまり親族から離れた、夫婦二人だけ……この夫婦に子供がなく、親族から切れていれば。

そもそも、一人の男と一人の女が手を結んで、夫婦というたった二人でこの地上に生きるのはなぜなのか、という、人間生活の根底の骨組、基本が露呈される。ただ、夫婦であるという、もっとも単純な人間の出会いの底に、どんな交流の声があるのか。江藤さんの、妻の死とともに味わう「生と死の時間」とは、人間が人間を思う、一つの源泉の声であったか。』と、結んでいた。

江藤淳氏の妻、慶子さんの葬儀での挨拶のとき、葬儀の司会者が、親族代表の挨拶を促した言葉を、彼が咎（とが）めた言葉は、「親族を代表してとは何事だ。後にも先にも慶子の身内は私一人だ」でした。この言葉から、秋山駿氏の鋭くも滋味ある文章が、始まる。

せんだて、突然に、ご主人を亡くされた婦人を、慰め元気づけようと話しをされていて、鬱的に閉じこもる彼女の口から、「庭の窓越しの木々を見て、真夏の昼の、強い光線が照りつけるのを見ると、とても外に出る気持ちはないのです。カーテンをして家に閉じこもっているのです。日が落ちてからなら、なんとか外に出れるのですけれど」と、彼女の、今の心境を聴いているうち、ふと、江藤淳氏の言葉が二重によみがえってきました。

江藤氏は、妻慶子さんの死後、「真夏のぎらぎらと照り注ぐ太陽に光る、庭の緑葉を見ると、

辛く、とても外に出ることができる気分ではなかった」と、これに近い言葉を、NHKのクローズアップ現代で、話していたのを思い出したのです。

そして偶然思ったのは、「慶子の身内は、私一人だ」と叫んだ言葉は、心の同じ所から出た、同じ言葉ではないかということだったのです。

物言わぬ身となってしまった妻も、送ろうとする私も、一つだとしたら、どこに送ろうとしたのか。行き場のない自己の内に、共存するかののように、誰も踏み入れる事ができない、魂の叫びは、やがて自分を昇華することによって、「慶子の身内は、私一人だ」と叫んだ江藤氏の、慶子さんへの葬儀だったのだろうか。憶測ですが。二人の人間の、堅固に結ばれたの絆の深さ、脆さを、批評し論ずることはできませんが、ただ、じっと見つめることはできると思います。

そして、見つめて気付くことは、あのギラギラと照りつける、木々や緑の葉は、じつは江藤氏自身であり、また彼女自身の投影された病んだ姿であると気がつきました。すると、あの光線は、追い詰めるものの姿であると思うのです。照りつけるものも江藤氏自身であり、彼女自身であったと気がついたのです。

「妻は妻で独り決めに生きる、そこを覆ってしまった」という秋山駿氏の言葉の意味することを、考えてみれば、江藤氏の「慶子の身内は私だ」と叫ぶそのことこそ、私のある部分を亡くしたという、喪失感そのものと取ることが出来るのではないかと思います。私の一部となることになってしまった、慶子さんとは、また、彼女にとってのご主人とはと、考えたとき、突き詰めた、本当の独りになることは、秋山駿氏が言う「人間生活の根底の骨組、基本が露呈される」という言葉によって表現される以上に、波紋は広がるような気がいたします。そして「人間が人間を思う、一つの源泉の声であったか」と余韻のあるこの響きは、美しく、悲しく、やがては消えてゆくのでしょうか。

ですが、これからますます、このようなケースは増えてゆくことは確かなように思われます。独りになってしまった、男と女の話はここから始まるのです。秋山駿氏が言う「妻は妻で独り決めに生きる、そこを覆ってしまった」とは、どう考えたらよいのでしょうか。

人が、ぎらぎらと照りつける夏の光線になったり、照りつけられる木々や緑葉になったりすることの意味は、とても深い。そしてその意味から、木々や緑葉とそれを窓越しに見る人間は、どういう関係を保ち、どう距離を持ち、どう感情を交えるのかを考えることができるのではないかと、思えるのです。もっとも多くの人たちが、この問題を、何の問題もなく素通りしていることも事実でしょう。

これこそ人間の心と、世界・環境との有り方を示している事柄ではないかと思うからです。

この木々や緑葉は、亡き人と親しく住んだ窓越しに見るものでなければ、ならないのか。

旅先の窓では、駄目なのか。

遠くに在るものでは、いけないのか。

思い出す木々では、いけないのか。

枯れた木々や葉では、いけないのか。

夏を盛んに連想できる木々や葉でなくては、いけないのか。

夏の強い光線でなければ、いけないのか。

そのことを語る、今、そこに在る木々や緑葉こそ、ふさわしいことなのでしょう。何故ならば、そこに生活の思い出が隠されているからではないでしょうか。私が語るのではなく、実はそこに、今在る木々や緑葉が語るとしたら亡き人も共に見て生活した木々こそふさわしいのでしょうか。夏の強い光線は、強ければ強いほど自己を追い詰めるものになると思うのです。自己を悠鬱に落とし入れるそのものの記憶の扉が開くとは、そのことを言うのではないかと思うのです。

辛く耐えられない自分が、木々であり緑葉であり、光線は白日に晒し、思い出す働きをもち、そこを離れずに、窓越しに在ることを欲する自己は、全体を意味するとしたら、つまり、木々や緑葉は記憶であり自分そのもので、光線は、その記憶の扉を開ける自己であるとしたら、未だその世界を飛びすことが出来ない自分は、それ全体と捉えてみると、独り決めに生きた男と、未だ独り決めに至らない女の、共に至った妙な共通点の一致は、何を意味しているのだろうか、とても不思議に感じます。

このひと時に、同時に垣間見る、生と死の時間の織成す、人間が人間を思う、一つの源泉の声を聴いて、我々はどう教訓に、どう取り入れて暮らしたらよいのか？

僧堂I

平成11年11月6日、東京は有楽町、そごうデパートの七階にある、読売ホールで第37回”禅を聞く”講演会が、開催されました。本年は、東京にある臨済宗寺院により営まれています、臨済会の50周年に当たりまして、冒頭”禅寺の一日”と題しまして、修行の道場の《鳴り物》を披露できないものかと計画された、寸劇のような催し物でした。

実際に《鳴り物》を舞台に搬入し、雲水の寝起き、朝のお勤め、食事、坐禅、夜明け、警策、参禅、告報、托鉢と、それぞれの場面転換に、どう《鳴り物》が鳴り、《鳴り物》が、どう雲水を動かすのかと実演したのです。

道具は、小さな鐘から半鐘、大鐘（これだけは妙心寺の国宝、黄色の鐘をCDで用意）、喚鐘、雲板、法鼓（大太鼓のこと）、版木、柝、警策、鈴、本堂の荘厳用仏具、禅堂の単（畳一畳を連ねた、雲水の寝床兼坐禅場所）、食事の台という大道具をそろえ、朝のお経や、食事時のお経も、《鳴り物》ととらえて場内に響いた音は、おおいに、聴衆を魅了いたしました。一団で動く雲水の統制の取れた、無駄のない動きと、場面の転換の早さ、動きに合わせたスポットライトの点滅と強弱、暗闇に映る平林寺専門道場のスライド映写は、観客がどう捉え、何にどう魅了したのか興味を覚えました。終了の場内への托鉢で終わると、どよめきと拍手の喝采に、成功を確信いたしました。下記は、”禅寺の一日”の、冒頭のナレーションです。

《冒頭ナレーション》

私達が生きていくことを考えました場合に、最低限3つの条件がございます。先ず第1は私です。自己を問う、その自己です。そしてその自己は、常に場所という限定をもって、立脚あるいは、束縛・限定されます。つまり2つ目は、場所であり、空間であります。そして3つ目は、今であり、時間であります。自己の存在が常に、何者かとかかわっていることからいえば、私という自分自身、そのもの、を問うことより、今の私を問い、場所の私を問い、存在を問うこととなります。限定された自己そのものを問うことです。

修業の道場は、この3つを大きなテーマとして、成り立っております。雲水は原則として、時計を持ちません。今を告げる時は、鳴り物という道具であり、自然の光と闇であります。多くの出版物による紹介で、修業道場の写真や内容を我々は知らされております。

今回、少しではありますが、その内容にかかわって、雲水を突き動かし、静寂の道場に響く、時をテーマに、鳴り物を幾らかご紹介できればと、企画いたしました。それでは、これから臨済会有志一同によります、禅寺の一日をどうぞご覧下さい。

僧堂のことを別名、「草の乱れずして生ずるを叢と曰い、木の乱れずして長ずるを林と曰う」

という言葉より、修行僧を叢林に喩えます。

広く鬱蒼とした道場に、修行僧が何十人いようと、閑散とした風景は、静寂をよく表現しています。静けさが、自然に近ければ近いほど、叢林の規則がよく保たれていると言えます。聞こえる音は、自然の風の音であり、その風による木々の揺らぎの音であり、時たま鳴く鳥達のささやく、鳴き声でしょう。しかし、注意深く耳を澄ませれば、静寂を破る音が、時たま木霊いたします。金属を打ち鳴らす音であり、板を鋭く叩く音であります。保たれた静寂を破り、乱す音は、また、かえってその静寂さを引き立たせることに、気がつくでしょう。

《最終のナレーション》

いかがでしたでしょうか。厳格なる規矩・規則・法度を守るためには、時を告げる鳴り物が、重要な意味をもちます。まして私語が禁じられている道場においては、すべてが鳴り物によって、雲水を整然と動かすことが、僧堂の、尚一層の体面を豊にすることが出来ることを、理解できましたでしょうか。

禅寺の一日という題でしたが、本日皆様にお見せしたのは、僧堂の一日の朝の様子という、ごく一部です。私たちの毎日の生活の中で、見直さなければならぬものがあるとすれば、少しでも、役に立てばと、敢えて上演いたしました。

私達は、秘密のベールに覆われた中身が暴かれることに、とても好奇心が起こるものです。最近では聞きたくもない、見たくもない報道やドラマ、娯楽番組が多くありますが、暴く報道機関と、暴かれた内容に一喜一憂する読者の相関関係があります。真実をよりリアルに伝えることを暴くに、より興味を引き付けることを煽動・踊らすにすれば、メディアは、過激な事実を我々に押し付けて、我々に何を要求するのだろうか、と考えてしまうこともあります。

11月18日、午後4時、産経新聞の夕刊編集部の記者が、臨済会の行事担当者より紹介されて、この講演会の取材に来られました。この”禅寺の一日”は、各自が持場を、ただ忠実に遂行しただけのことですので、私達はプロの役者でもなく、司会でもなく、演出者でもないわけですから、そこに、意思はないわけです。

ただ僧堂の日常の現実を、切り取って再現しただけのことなのですが、上演となれば、何を訴え、聞かせたかったのか、記者としては、それが聞けなければ、記事になりえないのでしょうか。帰り際、「向井さん、最後のナレーションの《私たちの毎日の生活の中で、見直さなければならぬものがあるとすれば、少しでも、役に立てばと、敢えて上演いたしました。》の言葉に、何を伝えたかったのでしょうか」と聞かれました。私は困ったものの、咄嗟に答えてしまったのです。

「Hさん、ご覧になっていかがでしたか、20分弱の時間の中に、雲水の動きと連動して、鐘、太鼓、板、お経と多くの”鳴り物”がありました。やかましかったでしょうか？おそらく、皆さんそうだったと思うのですが、逆に静けさを感じたのではないのでしょうか？」

考えてみると、修行僧は、禅堂の単の、畳一畳の上で、寝起きを含めて生活しています。そこには身の回りの限られた物のみを保持することが許されるだけの生活です。目的はただ一つ、仏道

の成就であり、それは僧侶としての資質を養うことでもあり、智慧を育むともいえることです。その目的以外のものは、総てそぎ落とした、言ってみれば身一つの居ずまいとも言えます。今、企業ではリストラという嵐が吹き荒れています、その究極の姿が、修道僧の姿ではないかと思うのです。そぎおとされた者は、真に輝いて美しいとも思います。

そして、道場は、一種の共産主義的な発想を持っていることが言えます。つまり托鉢は、その道場を支える人たちの、無垢の喜捨で成り立っています。集まった喜捨は、食事の原料や電気代等諸経費を差し引き、あまった資金は、それぞれの修行僧の、下着や限られた携行を許された品物に姿を換えます。このことは分かち合うということです。社会や家庭も含めて、今、最も羨望されている世界が、僧堂にはあるのです。無駄を極限まで、そぎおとした世界が。しかもその世界は、時代の波によって、リストラされた世界ではなく、人間の根本的な幸福と平安を求めるといふ理想に燃えての、沈黙の世界であり、しかも時代の嵐の中を何もなかったかのように、平然と時を刻んでいる世界でもあるのです。私達が、参考にするとすれば、そういう世界から出てきた音は、今の私達を洗礼する音でもあると思います。

記者のHさんは、こうも言いました。「向井さん、会社もそうですけれど、お寺も、今、環境が激変していると思いますが、どうなるのでしょうかね？」

普段、考えて、答えを出そうとしている問いではあるのですが、改まって、面と向かって言われると、答えようもない。答えられるとしたら、この変化する社会にとって、普遍に価値を持ち続けることが出来ていれば、また価値を発信していれば、何も恐れることはいらぬ。しかしながら普遍に価値を持ち続けるものはあるのだろうかと考えてみれば、答えとして、自らの中に、その価値を否定する意味を抱えてものこそ、真の価値を持つと言えるのだろう。

今、新聞を賑わす、国際社会の紛争と政治、経済の変化、科学の変化、価値観の変化、教育問題、高齢人口や少子化問題等あらゆる変化は、それらを支える個々の人々の、意識の変化という大きな川の流れのおこす、波頭のようなものであり、人々の変化は、個人の変化であり、それは、個性といい、我と言ひ、自己という、自我意識の変化であるような気がする。自己の確立、個性を競うといい、自分が自分らしくの潮流は、他人にも強要し、自我の領域を広げようと、行き着く果ては、企業の市場独占のように、弱者を切り捨て思想となって、蔓延するかのようです。排除された弱者の叫びは、社会の歪みとなって、喘いでいる。

その潮流に、個性を捨て、我を捨て、自己を無に帰す哲学・思想・宗教こそ、潮流の流れを変える力を持つのではないかと、そんな気がする。このことは、真の個性の確立、慈悲、慈愛の息吹であり、統括するのは、研ぎ澄まされた智慧ではないかと思うのです。

僧堂II

《その潮流に、個性を捨て、我を捨て、自己を無に帰す哲学・思想・宗教こそ、潮流の流れを変える力を持つのではないかと、そんな気がする。》

このことの意味を、とある人から質問されて、もう少し考えなければと思って、更に文章を付け足すことにしました。

そして、その前に、まずは自己を問うことの意味を考えた時、疑問があります。その疑問とは、問う自己と問われる自己のどちらを指すのだろうかということなのです。

個性を持ち、我を持つ自己を考えてみた場合、すべては、対象化された自己であり、私の性格の弱さ、あるいは強さであり、私の良い面、悪い面であり、私の姿・形であり、私の行為あるいは、私のくせは、考えられる私であると思うのです。しかしながら本当に問題は、そのことを”考える私”がいるということなのです。つまり、その考えられる私は、”考える私”よりほとぼした私であり、”考える私”は、対象化できない自己であることに、気がつくのです。

自己を問うとは、あらゆる感情や行為の源となる、その自己のことです。真の個性とは、その個性となりようもないものであり、あえて真の個性と言いました。すべての人に平等に有り、うかがい知ることのできない、”うかがう自己”、それ自身を、慈悲、慈愛といい、それは行為でなく、人間の真の個性の当体を指し、そのことを知って、そこから芽吹く行為は、人を安らぐのです。そのことを次の文章で、表現いたしました。

《真の個性の確立、慈悲、慈愛の息吹であり、統括するのは、研ぎ澄まされた智慧ではないかと思うのです。》

”考える私”は、”問う私”でもあり、では、どんなものかを知ろうと探し当てたとき、探し当てた私は、対象的な私であり、さらに探す私があるわけであり、捕まえることのできない私は、それを智慧と呼べば、まさに智慧以外の何物でもないことを、うかがい知ることができるでしょう。そんな私の抛り所は、”考える私”という窺い知ることのできない私だとすれば、人間の意識のあり方は、厄介なことでもあり、面白いと思います。

一番頼りにならない私を、頼りにせざるを得ないことこそ、宿命なような気がいたします。そのことを知らないということは、迷いの元凶であり、感情の浮き沈みの中に人は一喜一憂し流されるのでしょうか。しかしそれらがだめだと否定されれば、多くの方は生きる糧を失うことになります。今以上に迷いと感情の浮き沈みを受けます。”考える私”を知ってこそだと思えます。

信念という言葉も、対象的に考えられるものならば、信念を貫くことに抛り所を持つ人は、かえ

って自分を不自由な所に押し込めることによって、また多様性や選択の範囲を狭めることによって、より良く生きることを、主張しているのだと思います。

老後の生き方が問題になっています。欲求や好奇心を大切にすることが、老化を防止することに役立つという。自発性や好奇心の衰えこそ、感情の老化の始まりという。それには普段から願望や欲求を抑えずに生きることが大切なことであり、楽しいことを自分にプレゼントするということと、いろいろな意味で装うことが大事であり、それはグルメ・麻雀・ブランドに凝る・エステサロン・ショッピング等、考えられるとといいます。「年がいもなく」という言葉を退けて、老化を防ぐと言うより、前向きに人生を生きるということが必要なことであるという。楽しいことをしていると免疫機能も高まるというデータもあるという。

心の赴くままに、しかも則（のり）を超えずとは、孔子の言葉ですが、”考える私”からしてみれば、今、ここで、食事をしている私、友達と話をしている私、散歩をしている私、景色に没入している私、潮騒を聞く私と捉えてみれば、それは対象的に考えられる私ではなく、考える私の連続した遍歴に、置き換えることができるような気がいたします。

夢窓国師の夢中問答集“46”に「自他身心の相を分ち、是非得失の念を浮かぶる物は、これ何物ぞ」とあり、問うものの主体を尋ねます。百丈禅師は、説法が終わり退出する僧達に、「大衆」と呼びかけ、振り返る僧達に、「これ何物ぞ」と問いかけたといいます。臨済は”一無位の真人”といい、俱底和尚は、指一本を”問う私”から示しました。みな”考える私”を指し示そうとの言葉であり行為に、違いありませんでしょう。

平成11年12月4日の読売新聞の朝刊に、第14回全国高等学校文芸コンクールの《詩》において、最優秀賞・読売新聞社賞に輝いた、奈良県立畝傍高等学校3年生、柳川杏美（あずみ）さんの『のっぺらぼうの話』掲載されていました。

掘り出しに行こうか あの日から生き埋めのままの 私の顔を
重い石の下で まだ小さく呼吸している 一番最初の顔を

その時が来たら 使い捨ての清潔なスペアは 全部生ゴミに出せばいい
泥のこびりついた、汚い顔で 街中 笑って ねり歩こう

だけど 見つけられなかったら？
長い年月に朽ち果てた顔 スコップで掘り当てるには
少しやわらかすぎたよう

その時の私の顔と言ったら、 ———のっぺらぼうだ。
そう、のっぺらぼうのお話
あの時 山で出会った人、そば屋のご主人におくさんも
みんな探していたんだね。
もう戻らない 本当の顔

人は誰もが、本当のもの、真実を探す旅に出ることが、うかがえると思う詩です。作者の柳川さんは、「本当の自分とは何だろう。理想像ばかり追い求めていると、本当の自分が見えなくなってしまう」と、この詩に表現したそうです。審査員からは「合理化され、機能化され、記号化された社会への、高校生らしい批評精神が発揮されている」と、評されました。探そうと、対象化された私の顔は、何処に行っても、今の自分には合わない。何枚剥がしても、あるいは取っても、得てして、探すのをあきらめたときこそ、探している自分と一つになれるような時があるものです。剥ぎ取った仮面は、また脱ぎ捨てた仮面は、思うままに生きようとして、剥ぎ取り捨て去った仮面であり、探すのをあきらめたときこそ、思うようにならないことを自覚した素颜であり、なるようにしかならない世界の中を、自由に生きることができると理解できるのです。

ヴィトゲンシュタインは『反哲学的断章』で、『キリスト教では、神様が人間にむかって、いわばこう言っている。「悲劇を、つまり天国と地獄を、地上で演じるでないぞ。天国と地獄は、私の仕事なのだ』と、書いています。私の好きな言葉です。人は、行為による、運、不運によって、天国と地獄に行きます。仏教で言うなら、神は智慧そのものであり、仏であるともいえます。

真の天国と地獄は、窺い知ることをしてはならない、不可知の世界として、真実の世界として、私たち誰もが共有し、包まれていると言ってもよいでしょう。仏教で言うなら、神は智慧そのものであり、仏であるともいえます。その窺い知ることのできない私は、散歩する私であり、考える私であり、ジョギングする私であるのでしょ。さらに、窺い知ることのできない私は、虚空そのものとして、世界そのものとしてあるのではないかと思うのです。

僧堂III

まるで中村先生の世界ですね。

田舎の武士の侍が馬から落ちて落馬して、女の婦人に笑われて、家に 帰って帰宅して、仏の前の仏前で、腹を切って切腹し、お墓の墓地に埋められた。

天国と地獄の間で、そのときそのときを生きている。そやから慎ましく、けなげに生きる姿こそ我が姿なり

山本文溪師からのメールです。

古くからの禅宗の葬儀のメインは、引導といって漢文の内容で、死者に対して、導師の見識を示します。漢詩という古則にのっとり、それは古来の禅の宣揚の如く思えてしかたがありません。また、それで本当によいのだろうかと危惧を抱きました。形式が先行し、そこに相応しい雰囲気を感じられないと思うのです。何よりも大切なことは、死者を悼むという気持ち、漢文では理解できなくて、表現できない時代に突入してしまったという気がするのです。

葬儀に参列した人たちの前で、「貴方の生は、きっと満足した人生だったのでしょ。しかし振り返って見たとき、私の見識では、別の言葉があります。喝！」では、家族が偲んで送り出そうとするときの言葉として、容認できないこともあるでしょう。漢文ですから、参列者にはよく理解できませんのが幸いとしているとしか思えません。痴呆だろうと、身障者だろうと、子供だろうと、事故だろうと、病気だろうと、老衰だろうと、人の最後の儀式には、死者を、悼んで、称えて、送り出してあげたいと思います。生前の軌跡がどんなに惨めで、無残で、傷を負っていようが、その思いを導師がさらりと担って、送り出したいと思います。葬式を通して人の最後にかかわる者にとって、死者と家族のそれぞれの思いを巡らし、家族が死を受け入れていく機会に立ち会えることを、私は、誇りに思います。もちろん生前に、折に触れ、ふれ合えることができれば、それに越したことはありません。

”一番頼りにならない私を、頼りにせざるを得ないことこそ、宿命なような気がいたします”は、人が意識を持ってしまったがゆえの、心の分離こそ、思考せざるを得ない、人の姿です。人のあらゆる行為に、意味を見出すことによって、人は自らの位置をはかります。またそのこと故に、人は罫にはまることも多いでしょう。天国と地獄の間を、そのときそのときを生きている姿こそ、今現実に時を刻んでいる、私たちの姿のです。天国と地獄は、私たちの意識です。慎ましくけなげに生きる姿は、人の意識の外から眺める表現です。

動物の生態を考えると、生まれて、食べ物をあさって、排泄して、寝て、危険を避けて、子孫を残して、死んでいくというのが摂理といってよいでしょう。人間も同じような形態を取りますが、大きく違うのは、そこに意識が有ることです。意識が有るとは、すべての行為に”生

きる”という彩りを添えることができることであり、精彩を欠くことでもあると思います。動物それ自体には、天国や地獄が考えられません。人の意識は様々なものを創造し、その創造したものは、いつしか独立して歩き始めます。在るか無いかではなく、ある世界の私に私に包まれた時、無い世界が出現いたします。人の意識が無くなったと時、そこには在るか無いかの世界は無くなり、逆にすべては在る世界が現成するのだらうと思います。しかしそうは言っても人は意識を持ち、物事や世界を、“考える私”と分離して捕らえることを宿命としております。

『衆生病むが故にわれ又病む』、『当処即ち蓮華国』、『此の身即ち仏なり』の、即ち同時と理解できることから、その分離前の世界であり、『衆生本来仏なり』は、本来仏であるにもかかわらず、分離している衆生となるということです。病むという行為や蓮華国や仏を、自己の外の世界と置き換えてみると、分離する前の世界、考える私の姿が見えてこないだろうか？

『「今、ここ」を生きる』人間は本来無一物、未練やこだわり、欲望を捨てれば、コップを空にすればいろんなものが入ってくるように、心身の器に「今」がたくたくと入ってくる。この「今を」大切に考える考えです。一日だけ生ければ十分だ。明日も明後日もと思うから、この世が面倒になってくる。（中略）

ただ、生きていることはアカとつきあうことだし、泥ともつきあわないと花も咲かない。そうも考えております。

この言葉は、有名な作家の言葉です。

私たちは何気なく、捨てるという言葉を使いますが、物を捨てるという行為は、捨てない物が在るとの対の言葉です。いらなくなった物を捨てる場合はよいのですが。

未練やこだわり、欲望をだけを捨てるのが本当にできるだろうか、自我にとってよいことを選びすぐって捨てるのが、本当に良く生きるということなのだろうか、本当にそういうことなのだろうか。捨てるということは、何かを残すということを含んでのことでのことであり、取捨得失の世界において、何も捨てていないのではないだろうか。

未練といいこだわりといい欲望というも、その捨てようとしている対象は、実は自分にとってと考えることが、かえって選択しているように思えるのです。言葉の抹消へのこだわりかも知れませんが、コップを空にすることの喩えは、自己を捨てるとの喩えです。

”「今」がたくたくと入ってくる”も、入ってこなかったら、自分の行為に疑問をもってしまおうでしょう。選りすぐったものを捨てても、コップは空になっていません。人間本来無一物とは、違う喩えだと気が付きます。

”そして、明日も明後日もと思うから、この世が面倒になる”も、「今、ここ」のとらえ方が、今ここが、自分にとって都合がよければ、それでよいという、自分勝手な教条主義に陥っての、自己満足の世界に陥ってしまいます。自己満足とは、自分にとって不満足なものを退けての、満足であり、いつまでたってもその葛藤は尽きることなく、かえって自分が不満足の世界にいることに気が付くでしょう。

禅の世界に足を突っ込んでいたことがある人の言葉だとは、思えません。

熱心な仏教徒であり、南朝を指示した北畠親房の神皇正統記に、『時は流れて、流れないものである。私のあるところいつもが現在である。時は現在に於いていつもが始めであり、終わりである。転地の始めは今日をもって始めとする理あり』文があり、この自覚こそが核心だと思います。

”ただ、生きていることはアカとつきあうことだし、泥ともつきあわないと花も咲かない。そうも考えております”も、以前、泥華と書いて、蓮の花の意味を持つと、花屋さんのおじいちゃんが亡くなった戒名に使ったことがあります。泥の中でなければ花を咲かすことができないという意味で、禅より言えば、泥は世界であり、花は自己ですから、世界の中の自己であり、多即一の成り立ちは、世界のありようであり、泥の中でしか生きようのない私は、生き生きと泥の中で生きる私の姿が花であるという意味を持ちます。アカと付き合う自分は、潔癖な私ではなく、アカまみれの私の自覚でなければならぬのでしょうか。分離ということは、葛藤でもあるのですが、それに気づかないものです。何故ならば、人にとって、自分とは、いつも自分以外を、その世界から離して見ている、自分もその世界に生きているとの気づきが無いからなのではないでしょうか。

般若心経の、色即是空、空即是色、はこのことを気づいたことの、言葉です。

道元禅師の『峰の色谷のひびきもみなながら我が釈迦牟尼の声と姿と』、良寛禅師の『おもしろや散るもみじ葉も咲く花もおのずからなる法のみすがた』も、このことを言うのでしょうか。

恥じ

電話のベルが鳴る。いつもここから葬儀は始まります。

たまに、「父や母が長く寝込んでいて、危篤の状態が続いているので、和尚さん、近いうちのことだと思うのですが、葬儀に来てくれますよね、予約については変なのですが、お願いしますね!」と、電話があることがある。

そうして、本当に近いうちに知らせがあることもあるが、何年経っても、知らせが無いこともある。考えてみると、お寺に墓地を取得したときより、家族の安住の地を決めたときより、生まれたての子も、年寄も、すべて生前予約したということなのです。生まれるということは、死ぬことを含んで、生まれることであり、その為に、菩提寺があり、菩提寺の和尚は、生まれてこの生きている間、その子の安住の地が変わるまで、共に生きることが、双方に必要なことであると思うのです。共に生きるとは、連帯しているという意味です。

最近のことですが、勇ましい、大阪の良識を見ました。日本もまんざら捨てたものではないと、思いました。それは、テレビでの年寄りのインタビューの事です。大阪府知事の民事裁判敗訴の報道に、「大阪の恥じです」と言う、マイクを向けた答えに、私は、最近耳にしなくなった言葉が、底流には残っているんだと思ったのです。インタビューの答えの若い人たちの答えは違いましたが、お年寄りには「恥じ」が残っているのを、耳に致しました。

ここで、「恥じ」について書きたいと思いますが、「恥」の文化的、歴史的素養が私にはありませんので、私の勝手な解釈です。

「恥」というからには、「恥」を受け入れる共通な集団・社会があることが、前提になります。そして、その集団・社会に大阪にとって「恥」とは、共通のわきまえ論が、少なくとも、マイクに向かって言うお年寄りにはあるということが理解できるからです。つまりは、お年寄りには、集団・社会の常識が残っていると言えることは、確かです。

大阪府知事の問題が、集団・社会の恥じであるという事は、そのお年寄りにとっても、いまわしい恥なのです。では何が恥なのでしょう。裁判の結果が恥なのでしょう。裁判は知事側の不戦の戦略が、結局裁判敗訴になり、その結果、世論を喚起して、知事の完全敗訴に終わったかのようです。戦わなかったのが恥か。結果として負けてしまったのが恥か。セクハラそのものが恥か。大阪を代表する知事そのものが恥か。その知事を選んでしまった大阪府民が恥か。アメリカのクリントン大統領にも、このような事件がありました。少なくとも合衆国国民のお年よりが、恥と知っているのは聞いた事はありません。

恥は、「弾（はじ）き出す」が語源とは思いませんが、大阪の集団・社会の長から、弾き出さ

れた事は確かな事です。ここで勘違いしては困る事は、社会・集団から、弾き出すではありません。その職務から弾き出された事なのです。では、その職務とセクハラはどう関わってくるのでしょうか。本来職務とセクハラは何のかかわりもないことなのですが、この事件ではかかわりを持って、扱われたようです。セクハラをするような府知事は、大雑把に言って、相応（ふさわ）しくないということでしょう。このことは、府知事の職務能力とは別な次元の問題です。つまりは、長の椅子に座る人格・資格・……が求められ、問われたということになります。当然、”恥”というお年寄りには、集団・社会にとって、自分を規制する”恥”が存在することになるのです。

古来、恥と分は、切っても切れない間柄でしたが、最近では口にする人はいないようです。差別を助長するという見方や、折角の伸びる芽や楽しく過ごすことの芽を摘んでしまうとか、とにかくあまり良い印象の言葉ではないようだからです。

”分”とは、わきまえであるとか、さだめ、けじめ、わけ隔てる、つとめ、きまり、境遇と多
種の意味がありますが、語源は一つのものあるいは、数あるものを分けるからきていることは間違
いないでしょう。分をわきまえないから、恥じる。定めに従わないから、恥じる。けじめをつけない
から、恥じる。つとめ、きまりに背くから恥じる。そして恥じる本人は、自分です。大阪の府
知事の問題を、自分の問題として、恥じる行為は、府知事が大阪府民を代表する全体の一であり
、恥じるお年寄りは、全体を構成する分ける一であるからです。これって、仏教の理論であり、
しかも仏教を代表する、華嚴の理論からくる事々無碍法界が、恥じると言わせたともいえます。
少なくとも、お年寄りは全体を構成する、自分は一人だと、叫んでいるかのようでした。そして
、そのお年寄自身も、所属する社会・集団を構成する一人として、分をわきまえて生きてきたと
思うのです。さらに分をわきまえるとは、自分もその社会・集団に恥じないということであり、
気が付こうが付くまいが、自分の行為はその社会・集団を逆に規制していることも事実です。

”恥じる”という言葉は、最近目にしなくなりましたが、目に付かないとって、社会が連帯
していないという事ではないのです。

そして、個性を大事にするとは、分を育てるという意味を持ちます。目立つという事も自己を
主張する事も、分を育てるという意味を持つのですが、一人一人の分は、連帯している事は間違
いのない事実です。今日の問題は、一人一人は、分を持っていることは明らかな事なのですが、
その分を自覚しないことが大きな問題だと思えます。地球レベル、国レベル、地域レベル、家族
レベルの総てにおいて、人は連帯して生きているのです。恥じに代わる何かが必要な時代です。
分を、ただ主義主張によって自覚できない障害が発生しているのです。ここに知らしむる、仏教
の責任があると思えます。

僧堂IV

世界の潮流は大きく変化している。この事に異議を唱える人は誰もいないであろう。あらゆる分野で変化している。

東京の下町深川でさえ、じわじわとその訪れが迫ってきていることを、感じます。

危機感を自覚して、小説が『知的な観察や見識によって不安を乗り越えようとする方向と、不安定な揺らぎにむしろ進んで共感しようとする方向（文芸評論家、清水良典氏）』とに進むことに大別する事ができるなら、ちっぽけな寺の住職である私にも、時代を探り、繋ぎ、次の時代に向かって、自分の言葉で、情報を発信しなければならないことがあります。この二つの流れの出所は、一緒のような気がいたします。つまりは位置、場所に変化が起きていることを察知した人は、賢明に知的に見識を掘り下げるか、流れの中に自己を投げ入れてともに揺らぐ方向に進むということだろう。

小説が『この数年で、急激に規範性と連続性を失いつつある』という状況は、総ての日本の文化的資産（遺産）に共通のことと思われるのです。規範性と連続性こそ、私たちが、胡座をかいていたふかふかの座布団であり、ペシャンコになってしまえば、座布団も必要なくなり、ましてや椅子という文化に代わっていたことさえ気が付かないでは、椅子の文化創造を早急に、衣替えさせなければ、時代に生きることが出来ないのではないか。

規範性と連続性の崩壊は、次の規範性と連続性の始まりとすれば、一つの時代が終わったような、次の時代に猛スピードで走り抜けるかのようです。一つの時代とは、いつもこういう意味を持っていることなのでしょう。

『もはや いかなる権威にも 寄りかかりたくはない ながく生きて 心底学んだのはそれぐらい 』と、茨城のり子氏は詩集” 寄りかからず” の中で言う。権威が規範性と連続性を含むものなら、権威と既成の価値観が崩壊したことになるということか。しかしふと気が付いてみると、このことは禅そのものであることに愕然とする。権威と既成の価値観の中にいる、私の目指すものは、禅の真実に含まれている。『もはや いかなる権威にも 寄りかかりたくはない ながく生きて 心底学んだのはそれぐらい 』この詩の意味するところは、まさしく禅そのものではないかと気づきます。

最近目にする事の多い事柄は、社会や家族の病理という事です、滑らかな社会関係や家族関係が歪んでいるということなのでしょう。ちょっとした個人の記憶に触発する事柄によって、個人の奥深くのトラウマが触発され、突然激しく持ち上がる多重人格は、他との共存を強いる社会の、恐怖を物語ります。” 切れ” るということも、触発された内面奥深くの記憶のなせることなのでしょう。切れるに巻き込まれた周辺の恐怖もさることながら、きっと本人にとっても、自覚さ

れば、後悔と慙愧に結びつきます。予防と切れるの本人の受け入れる環境は、ないように思えます。

また、最近のことですが、自動車に跳ねられ、身体の打撲骨折に脳挫傷で三日間意識不明におちいった人の、脳のリハビリの記憶を探す宛てのない日常は、内面奥深くの記憶のいかに大切なことをうかがわせる事件でした。

「私は誰！」と「今までの私が無い！」と、何をしっかりしなければわからない自分こそ、今いる自分の位置、場所がわからず、不安そのものの中で、もがく姿でもあります。今の自分の愚かさを叱咤し、懸命に自分を知悉している他人を探す旅に、人のもろさのやるせない情を抱きます。仏教とは、一切の執着を否定することであり、その究極が良寛の『災難に遭うたら、災難に会うがよろしい』の言葉なのですが、このことを自覚するには、体験と洞察、それに時期が必要なようであり、気づく作業がともないます。やはり物質的なものに満たされた人からは、納得がいかないことであり、その満たされたものを捨てる覚悟を持つ人において出る言葉は、真に輝いた言葉なのです。

人は、誰でも、自分の存在を認めてくれることを求めています。そうでなくては、各種の地位はありえません。ピアニスト、社長さん、妻、夫、母親、父親とあらゆる呼び名を持つ地位とは、そういうものではないでしょうか。またそのことは、人は誰でも自分と違う他者を差別することを、自己のアイデンティティーの確立とだけ思いこむ、危ういものを含んでいることがいえると思います。

幼子の命を綿密に準備をして、何の躊躇うことのないまま、蟻塚を踏みにじる行為に似て、葬り去る母親の心は、ためらうと言う自分の位置を探る行為なしに、自己の確立だけを優先させた、それこそ今の社会に広がる病理の姿です。

自己の独立性を確立できない場に臨んで、人は人間嫌いに陥ったり、自分の存在と比べて慎ましく生きる路傍の草に愛おしさを重ねたり、弱者を排除するという相反する行動に出たりもします。これらは相対的な自分の社会での羅針盤の不具合によることが多いと思うのですが、それでも、そこに自分の位置を確認している作業、それこそ幼稚な心の働きのような気がいたします。自己の独立性の確認といい、アイデンティティーと言い、これこそ病理の源のような気が致します。

『災難に遭うたら、災難に会うがよろしい』は、自己の独立性の確認という作業を、木端無尽に粉碎することにおいて、普遍の独立性に気づくことだと思うのです。

下記による、老後の生き方を、もう一度再考したいと思います。

『欲求や好奇心を大切にすることが、老化を防止することに役立つという。自発性や好奇心の衰えこそ、感情の老化の始まりという。それには普段から願望や欲求を抑えずに生きることが大切なことであり、楽しいことを自分にプレゼントするということと、いろいろな意味で装うことが大事であり、それはグルメ・麻雀・ブランドに凝る・エステサロン・ショッピング等、考えられるといえます。「年がいもなく」という言葉を退けて、老化を防ぐと言

うより、前向きに人生を生きるということが必要なことであるという』

人は成長し、いつしかその成長は老いと重なりと、以前、私は書きましたが、老化を防止することは、出来ない事実です。これは理屈になるかもしれませんが、老いと言う場合、私たちは若かった頃を、あるいは若い人の姿、言行を見て、自分の亡くしたものを回顧しつつ、今の自分と較べて享受できずに、不足するものを嘆き、あきらめます。

ほんの少しの老化の防止のためと考えて、普段から願望や欲求を抑えずに生きることが大切とは、常に満たされない自己の我を肥大増殖させるということであり、聞く耳を持たないことであり、いずれは破綻する事を含んでいると言えないでしょうか？

私の母は、この12月14日に、長期療養型の病院に入院して1年になります。姉や親戚が八王子に住んでいるとはいえ、山奥に近いところの病院に入院しているのです。深川から通えば、電車を使って3時間はかかりますし、車も中央高速は年がら年中渋滞です。せめて週に二度は母の顔を見に行きたいのですが、数えると一度しか行けません。

近い病院で療養してもらいたいのですが、今の看護より優れた看護は、おそらく東京都内ではないのではないかと絶対の確信をもった判断のつもりです。私は週に一度、母の下に足を運びます。誰でも親の入院に、あたりまえと言えばあたりまえの事をしているだけなのですが、この頃は、「よく行きますね!」、「偉いわね!」と、私を見ている人が声をかけてくれます。ふと、私が気が付いたことは、母は一級の障害者で、半身不随になり、今や声も出ない身になりながらも、私自身を育ててくれているということです。

妻は留守番をしてくれることで、私を支えてくれ、近所の人は「ご苦労様」と、私を癒してくれます。母を寝たきりにさせないと選んだ病院は、それに答えて、北欧の車椅子に母を座らせ、一日一日と生を全うすることに献身な看護をしてくれます。ただ今を生きている姿は、全身で生きている姿でもあり、その姿を見るだけで、私にとっての過去の母の記憶は、すべて自分のためであったのかと思うのです。そこには、願望や欲求という言葉はありません。

どんな親であり、振り返って気づく時、親とはあり難いものです。たとえ非道な親であっても、子が気づいたとき、非道は愛情へと、反転いたします。考えてみると、子に親があり、親には更に親があり、つまりは、総てが、今の私に注がれた愛情であると、気が付いたとき、そこには、感謝と慈しみが溢れるのではないかと思います。老いそのものを受け止める姿勢は、やがて、子どもたちへの指針ともなります。その人にとって年相応とは、実に飾らない言葉だと思います。総ての人が、与えられた自分の命を、今、ここにおいて、全うしているのだという自覚が、欲求や好奇心を大切にするとするという自我の肥大増殖を転換して、時を越えて、不変の命を手中にすることであると確信いたします。

返事（平成12年10月28日のメールに対して）

突然のメール失礼します。私は札幌学院大学4回生のMといいます。龍が動いて可愛らしく、内容も豊富で楽しく拝見させていただきました。「死・葬儀そしてその後・・・」に桜の写真が掲載されていたのを見て、正直、指が止まりました。高校時代写真部で写真が好きなのですが、このほんの小さな写真は心を切なくします。別れの象徴のような気がして、北海道の桜の花の咲ける時間はあまりに短いからです。

今、私はターミナル・ケア、終末医療について研究をし卒業論文を書こうとしています。現在は緩和ケア病棟においてキリスト教圏から輸入された考え方の、ホスピスが主流です。そこで、終末期の患者に対して日本人にあった仏教的なケアを施そう、というビハーラ運動というものを知りました。現在はキリスト教主体の終末医療が主流で、厚生省認可の仏教主体の緩和ケア病棟は一つしかありません。私も、キリスト教的なホスピスよりも日本人には仏教的接触が有効なのでは思います。

勉強不足で申し訳ありませんが、臨済宗はビハーラ運動のような活動はあるのでしょうか。そしてビハーラ運動は一宗一派に片寄らない仏教超宗派の活動であることが基本姿勢となっています。臨済宗としてはこのことに対してどう考え、対応なさっているのでしょうか。

《そう10年程前、私達仏教寺院の宗派を超えて、仏教情報センターという機関を作りました。テレフォン相談を主として活動いたしておりましたが、同時期に立ち上げた会に、癌患者家族語らいの集いがありました。この会は、後に情報センターから分裂し、片や、癌患者家族語らいの集い（築地本願寺東京ビハーラと共同の会）と仏教ホスピスの会「いのちを見つめる集い」（仏教情報センター）に分かれたものの、東京で、現在も活動している機関に違いありません。病院付属と言うことでもなく、設立当初の集いでは、確かに病院に出かけることはありました。しかし、比重は、会場に患者さんや家族が集まり、識者の話を聞き、患者、家族、医師、看護婦、僧侶のグループミーティングが中心でした。今も、両方の会員ですので、会報により知る所では、同じ形態です。

臨済宗としてはのご質問に、14派あり、それぞれに本山がありますので、残念ですが、私が答える立場ではありません。しかし、組織には属しておりますが、臨済宗の基本はそれぞれ一人一人の僧侶の資質です。資質と言いましても、レベルが高い低いのことではありません。このことの意味が、大きな運動に発展しないということにも繋がっていると思うのですが、臨済宗として、ご指摘のような運動はないと思います。人々が求めていることに、答えを出そうとすることが出来ないことは、時代の流れに、流れることができないことで、もどかしさを感じますが、残念なことです。

さまざまな問題を抱えながらも、その問題に真正面から取り込むことのできないジレンマに、臨

済宗の教団は、どこも悩んでいることと思います。

それ以上の答えは、禅文化研究所、各本山の教化研究所にお尋ねください。

新潟に、ビハラの運動があり、木曾にも同じ動きがあることを、申し付け加えます。》

そして活動の場が病棟中ということもあり、布教活動がおおっぴらにできない等の制限があるなかで臨済宗としてはそのような場合、どのような教義理念をもって患者に接していくのか、具体的教義理念はあるのでしょうか。

《 屁理屈に聞こえるかもしれませんが、臨済宗に布教ってあるのだろうか、いつも戸惑って考えます。法を伝えることが、布教なら、もともと伝わってるものに、備わっているものに、目を覚ますこと、気付くことは、布教とは言わないでしょう。教義というと、大本の教えがあって、その教えを研鑽し追求するということになると思うのですが、禅は、そのような教会的なものを削ぎ落とすことを、修行の第一といたしますので、どうも理念とか理想とかに合いません。”一人の人間として、あるがままに接すること”、これこそ具体的そのものに成り切ることで、今は申し上げます。》

また、ひろさちや氏は、成仏には生前からの修行が必要であり、これまでろくに信仰せず、今、まさに死にかけている人には無駄である、という批判をしています。このことに臨済宗ならいかに応えるのか知りたく、メールをだしました。お手数ですが私のこの疑問にお応え願いましたら幸いです。教義についてほとんど無知なもので、無礼がありましたらどうぞお許してください。

《 こうして書くことが、無礼なんて思わないことの、私の証拠です。

今、まさに死にかけていることこそ、生きている証です。生きていることは尊さです。その尊さは、かけがえのない命の表現です。そこに、喜ぶがあり、苦しさがあり、退屈があり、あがきがあり、満ち足りること、足りないことがあります。そして、それらは選択的に択一として選ぶのではないのです。

私も、至らないものですが、これでご容赦ください。不一》

質問に答えていただいたうえ、サイトで紹介までしていただき、本当にありがとうございます。仏教の各宗派によって何が違うかと本を色々読みましたが、もう、それが多すぎたり根本では重複していたりと、心理学しか知らない大学生には早すぎたかと反省しています。あれから見逃していた全てのコンテンツを時間をかけて拝見させていただきました。死ほど生を考えさせてくれるものはないですね。まだ人生の浅い私はその表層しか理解できていないと思いますが。もしくは理解しているような気になり、そこにとどまって自分を満足させているだけなのか。

素人ですが、仏教はこの時代だからこそ身を乗りべきなのではと思います。私もそうですが生きるうえでの指標や目的が即物的になり、それが当然のように世間では受け止められています。なにをなすべきなのか、勉強不足ですが、私も知識を増やし、卒論を書こうと思います。本当に

ありがとうございました。(平成12年11月3日返信M氏)

父殺し・母殺し・友だち殺し・子殺し（平成20年1月1日）

昨年一年間の事件をみて、子殺し、親殺し、友だち殺し、自分殺しのいかにたくさんあったことか。もっとも人が生きるということ事態に、海を殺し、山や川を殺し、国を滅ぼし、地域や家族を殺していることが極端に言えば含まれているのかも知れません。人はそれに気づいているにも拘わらず、時間に流されて、振り返ったとき何もできないということに気づきます。そんな日常に生きているからこそ、願い・希望・祈りが誕生するのでしょうか。人が追い求めた理想の世界とは、殺し終わったあとに出現する絶え間ない世界だったとしたらゾッと致します。

その絶え間ない世界は、苦となって果てしなく続くことです。これを業（ごう）と呼びます。

人間として生まれた限りは、社会に対して責任が発生いたします。その責任の放棄の果てが業となると考えてみました。もっとも普通の人の日常は、そんなこと考えもしないことです。しかし、ほとんどの事件が、その日常普通の人が起こすように思えます。

そんな責任有る存在としての自己に、真っ向う立ち向かった臨濟宗の祖師に、臨濟義玄（りんざいぎげん）がいます。彼は、五無間（ごむげん）の業を作ってこそ、悟ることができるかと物騒なことを書きました。

『大徳、五無間（ごむげん）の業を作って、方（はじ）めて解脱（げだつ）を得（う）。問う、如何なるか是れ五無間の業。』

師云く、父を殺し母を害し、仏身血（けつ）を出だし、和合僧（わごうそう）を破し、経像を焚焼（ふんしょう）する等、これは是れ、五無間の業なり。

云く、如何なるか是れ父。師云く、無明（むみょう）是れ父。汝が一念心、起滅（きめつ）の処（ところ）を求むるに得ず。響（ひび）きの空に応ずるが如く、随処（ずいしょ）に無事なるを、名づけて父を殺すと為す。

云く、如何なるか是れ母。師云く、貪愛（とんあい）を母と為す。汝が一念心、欲界の中に入って、其の貪愛を求むるに、唯だ諸法の空相なるを見て、処々無著（むじゃく）なるを、名づけて母を害すと為す。

云く、如何なるか是れ仏身血を出だす。師云く、汝清浄法界の中に向（おいて、一念心の解（げ）を生ずること無く、便ち処々暗黒なる。是れ仏身血を出だす。

云く、如何なるか是れ和合僧を破す。師云く、汝が一念心、正に煩惱結使（ぼんのうけっし）の、空の所依（しよえ）無きが如くなるに達する、是れ和合僧を破す。

云く、如何なるか是れ経像を焚焼す。師云く、因縁空、心空、法空を見て、一念決定（けつじょう）断じて、迥然（けいねん）として無事なる、便ち是れ経像を焚焼す。

大徳、若し是（かく）の如く達得（たっとく）せば、他（か）の凡聖の名に礙（さ）えらるることを免（まぬが）れん。』

この五無間のいわれは、仏説広博嚴浄不退転輪経から創作し意味づけしたのですが、お経には、「五無間の満足成就は、害母・害父・壊僧・殺羅漢・出仏身血」と、記されています。

先ずは、人にとってもっとも身近な存在である父や母を、こういう形で表現するということに、古人の姿や思いが見えないでしょうか。きっと身近なゆえに、父や母を殺すという表現が、大罪を犯すことに敢えて踏み込んで表現したのではないのでしょうか。禅宗の殺しとは、このようであればならないと臨濟は説くのです。殺すなら自己の妄執に限る、殺した跡の自由さに気づけと……。またそこから父とは母とはの思いも伝わります。

君たちのそのつどの思いは、どこから起こってどこに消えて行くということを考えてみたことがあるだろうか。まるで、連なる人の思いは、空に響くこだまのようなものだと思わないか。その限りなくこだまする連鎖する思いの起こりよう、無くなりよう、連なるさまを理解したなら、たとえ、そのつどの一念心が起こったとしても、無事平穏な状態にいられる自分になることを思わないか。父とは無事平穏な状態だ、それを父殺しというのだ。

父の居場所とは、子供心に見たあこがれに近いものかも知れません。父がいて家族が守られているからでもあります。守られていれば、そこに父は居ない、私も居ないのかも知れません。

次の母殺しとは、そのつどの思いが繋がって感覚的欲望の中に向かってゆくとき、欲望そのものの実体は、変化するものの仮の姿であると理解したなら、そのつどの思いを意識することが、母殺しといえます。

つまり、そのつどの思いに引きずられるなど言うことで、「美しい、可愛い、悲しい、寂しい、楽しい、欲しい」と、その出所を追い求めるなど、そのつどの思いの連鎖を断てと言うことでもあるのでしょう。

子どもが母に抱かれるように、子どもを尽きない自己の思いと譬えてみると、その一つ一つの思いを母の胸にすくい取るとも考えられます。どんな人にとっても、母とはすべてを受け入れて包み、あやしてくれる存在なのだなと見えてきます。母殺しとは時間の分断とも考えることが出来ますが、この時間の分断は、途切れさすのではなく、安らかな時間に導くと考えられます。

次の仏身から血を出すです。仏身とは、人間の本来性ですが、その本来性に血を出さずと読み替えると、仏という何のものにもとらわれない自身本来性という思いをも描くこととなります。描くと、清浄法界という本来性が血を出すからです。これは父と母を殺したあと、人が求める習性は、次には、聖なるものとなりがちですが、臨済は、その聖なるものまで拒否いたします。こちら辺が、仏教の中道に行くという発想として、良く現れているところです。

それではどうしたら良いかという、雪峰義存（せっぽうぎそん）という禅師に参じ、厳格な持律で頭陀行を重んじた玄沙師備（げんしゃしび）禅師が答えます。

ある日のこと、修行僧が、「何になったら生死に拘（とら）われなくなるか」と問いました。師備は、「漆桶（真っ黒けの漆桶）になりきれ」と答えました。これを仏身から血を出させるといいます。

先の長い名前の経には、『方便を滅せずして如来の想を滅するのが出仏身血』と書かれています。如来の想とは、人が人格を磨こうとか、人間の品格とか、聖人君子に近づこうとか考えることは、却って垢にまみれることだと、人の一念の浮かぶ思いを、或いは価値とか意味するものを否定するのではなく、そのままに囚われることなく、そのままに過ごせとの意味です。

禅宗の厳しさは、その意味あるものだ、価値あるものだと、その意味ある価値あるものを否定するのではなく、いかに意味があろうと、価値があろうと、その意味の中に価値の中に没入していくと、囚われになり自由を失うと主張するところです。漆桶とは混沌のまま、その行為に成りきることで、日々問われているものに行為として成りきる、それが、答えの同時存在と解釈します。

最後に和合僧を壊すとは、そのつどの思いが、どこにいても、煩惱や執着は虚空のように足場がないことに気づくことです。和という字は、なごむ・やわらぐ意味もありますが、この場合の和は、隠すのではないかと思います。様々な性格、それぞれ貪瞋痴を隠す、抑えることとしら、合うという字が、口に蓋（ふた）をする原義を考えたらピッタリのような気がいたします。

すると、お互いが干渉せずに水の流れるが如く、とどまることのない関係という意味になるでしょうか。僧はもともと複数を差します。考えてみれば、臨済は、煩惱や執着、貪瞋痴等々を僧と見立てたのでしょうか。こうした見識はとても柔軟性が豊かな証拠です。私など、臨済という人物の偉大さ、峻厳さを描きます。それは、あの臨済の一喝のせいなのですが、思いもよらない人間性発見でもあります。

最後に、経像を焼いてしまうとは、因縁も本来空であり、心も法も、もともと空なのだと、人の本来性そのままに固く決するならば、事ある世界に、事無しでいることができるといえます。迥然の迥（けい）の字は、はるか・遠い・かなた・抜け出る意味がありますが、やはり超然としてという訳が好きです。これが経像を焼き捨てるということです。

こうして五無間の業を殺すことに徹することができたなら、凡とは聖という名前に引かかることはないであろうと、臨済は言います。

釈尊の『諸行無常、諸法無我』に対して、我々は、だからこそ、超然（ちょうぜん）とすることを学ぶことが大事なのだと思います。

ついでに臨済が話したあと、常にいう言葉は、「我が語に、とらわれるな！」です。

その後

今では、私たちの仕事の多くの部分は、極端に言って、亡くなった方の法事と葬儀の執行という部分のみを担うことを要求されている。

それすらも要求されないことがある。

しかし、それは、この国の人々にとって、とても悲惨で愚かなことである。

悲しいけれど、人の死をきっかけとして、その後、その前と、私たちはもっと大切に考えることが必要です。

死者と私たちの、旅立ちが始まるから。

ほとけさま（平成17年5月1日）

ほとけさま（平成17年5月1日）

金子みすゞ童謡集『このみちをゆこうよ』に、《さびしいとき》という、詩があります。

わたしがさびしいときに、よその人は知らないの。
わたしがさびしいときに、お友だちはわらうの。
わたしがさびしいときに、お母さんはやさしいの。
わたしがさびしいときに、ほとけさまはさびしいの。

わたしがさびしいときにと、今のわたしというテーマに、金子みすゞは、素朴にうたいます。きっと、わたしがたのしいときには、お母さんはうれしいことでしょうし、ほとけさまはたのしいことでしょう。みすゞにとって、仏さまは、私を映す鏡のような存在であるけれども、鏡と異にすることは、仏さまは、私と同じに寂しくとも、寂しいままに、私を包んでくれる存在に響きます。

わたしがさびしいときに、よその人は、お友だちは、お母さんは、ほとけさまはと、それぞれの繋がりの中の世界を、みすゞは、謡うと同時に、わたしがさびしいときの全体の世界をも謡っています。わたしがさびしいときに、世界もまたさびしいのと。

平成17年4月23日、土曜日、とある49歳で亡くなった男性の七回忌法要で、姉妹が焼香をする姿を見て、新鮮にして、不思議な思いで、見つめている自分がありました。この便りを出させたのも、この光景のせいです。彼が亡くなって発見されたのは、それは6年前でしたが、近くの人の注意でした。昼も夜も灯りがついていることに不審に思ったからでした。

人にとって、やっと、なつかしく過去を振り返って見ることができる年齢は、50前後の年齢ではないでしょうか。これは、わたし自身の経験からで、他の人にも強制するものではありませんが、もしかして、こうして便りを出すうちに、私も振り返ることで、何かを綴るようになってしまった身を振り返ってのことかも知れません。

人にとっての過去って、いったい何処にあり、何の意味があり、今の私をどう支えてくれているのだろうか、考えたことがありました。

年を重ねて来た、自分の過去の一つ一つの年輪は、何処に刻まれているのだろうか。人の心の奥にそれはあるのだろうか。

彼が突然亡くなってしまうなんて、とても思いもよらないことでした。しかし、彼の将来を、彼の現状を照らして考えたとき、私の想像は、とても心配していた内容でしたし、おそらく4人の姉妹達も同じ想いで過ごしていたことと思うのです。

この当時、私は、閉じこもりで、人とまともに話がすることができない彼を、もっと周囲の人たちが注意して観察してくれたらと、このこと故に、成熟していない社会を情けないと思った

ことでした。彼は、そんな社会の犠牲者かもしれないと思ったものでした。

彼が亡くなる1年前に、88歳のお母さんが亡くなりました。お父さんは、お母さんが亡くなった年の15年前に亡くなりました。

建具職人として一徹だった父は、息子に、自分の仕事を継いでもらいたかった思いがあったものの、息子の不器用さと性格と気質に、諦めた模様でした。その分、厳しかった父だったのでしょう。父が亡くなり、遺骨と一緒にカンナやゲンノウが共に葬られました。そして、多くのノミやカンナが、和尚さんにと、私の手元に贈られてきたのでした。仕事場の二階には、建具職人が自ら造った仏壇に、その後お参りしたのですが、老いた妻は、その度にこの仏壇のことを話し、前に座った私も思いだしていました。

この家とのかかわりはこの年からでした。昭和59年の5月からでのことです。

それから、痩せてはいるもののしっかり者で賢い老いた母との二人暮らしが続くわけですが、母にとっては、この息子さんが気がかりで、ようやく仕事を見つけても、長く我慢ができなく、辞めてしまうのです。母と二人の家で、彼もいたたまれず、やがて、夜になると家を出て、ふらついていました。これは、昼にでると近所の人に見られるからと、人目を気にする行為に、悪さをするでもなく、酒を飲むでもなく、じぶん自身を人混みの中に埋没させることが、彼なりのじぶん自身の保ち方だったような気がしたものでした。

家にいれば、じっと閉じこもり、姉妹達も交替で、母と弟の元へと通う姿が続きました。やがて、母が区の新しくできた施設に入所し、平成14年に母が亡くなるわけですが、年月は、彼から両親を、彼の手の届かない処へと、遠ざけるかの仕置きをしたみたいでした。

一年を超えての、本当の一人暮らしだったはず。一人になってしまったのだと言う実感は、今までにない試練だったはず。その一年という年月。

彼は、幼かった頃の姉や妹と遊んだ楽しかった、もう二度と帰れない思い出にひたただろうか。姉や妹に心配をかけて、叱られてしょげ返ったことや、母そして父親や周囲の自分に対する過大な期待に、答えることのできない自分のふがいなさを、情けなく思っただろうか。嫌なものは嫌と通してきた貴方にとって、ではどうしても好きなものが有っただろうか。

母亡き後の一人暮らし。自分はどうなるのだろうか、考えたことがあっただろうか。何を目的として、生きていこうかと考えただろうか。このままの生活が、いつまで続くだろうかと考えただろうか。

現状の彼は、食べることの生活に追われて、ただ時間だけが過ぎていくのみであったはず。外に出ることは、人に注目されることであり、それは最低限の外出のみで、望むことではなかったはず。一度休んでしまった仕事は、再び顔を出すことに、彼はじぶん自身がいとおしく、これ以上傷つくのが嫌で、壁を乗り越えることができなかつたのでしょ。彼なりにですが、よく考えてみると、彼は、一つ一つの彼の困難な問題に、じぶん自身で結論を出してもいたこと

。

お寺に自転車に来て、カギをかけずに駐輪し、「自転車を盗まれた」といったときのあの顔。

公園に清掃に行かなければならないのに、休んでしまって、閉じこもり、福祉事務所に行くように姉たちに頼まれ、お寺で話したときの顔。みんなに連れられて寺に来た、はずかしそうな彼のことを思い出します。

一年間、ひもじくカップラーメンをすすって、どうして過ごしていたのか、いつも母や父の姿が、心の中にあっただろうか？と思いだすと心があつくなります。人にとっての拠り所って、案外そんなものかもしれませんが、もしそうでなかったら、彼は、逆に真の強い人ということになります。

金子みすゞ童謡集“あかりほうへ”のなかに、『はすとにわとり』の詩があります。

どろのなかから はすがさく。
それをするのは はすじゃない。
たまごのなかから とりがでる。
それをするのは とりじゃない。
それにわたしは きがついた。
それもわたしの せいじゃない。

蓮が咲くのもないし、まして泥が咲かすのではない。鳥がでてくるのもないし、まして卵が出すのもない。それに、私は気がついたのですが、気がつかせたのは私ではない。

命の営みの中のわたし達の一つ一つの行為、結局、その営み事態がなせることなら、営みとは、命であり、世界であり、仏さまでありと、みすゞは言っているようです。

平成17年4月23日、七回忌法要にて、姉妹達が彼に焼香し合掌する姿を見て、「彼を拝ませたのは誰だろう？」と考えると、私の心が熱くなります。

仏が仏に合掌する

この文章は、『ほとけさま』からの続きです。

金子みすゞ童謡集『このみちをゆこうよ』に、《さびしいとき》という、詩があります。

わたしがさびしいときに、よその人は知らないの。

わたしがさびしいときに、お友だちはわらうの。

わたしがさびしいときに、お母さんはやさしいの。

わたしがさびしいときに、ほとけさまはさびしいの。

金子みすゞの詩を呼んでいて、上手いと感じるのは、「わたしがさびしいときに、ほとけさまはさびしいの」と、世界いっぱい自己が広がる感性です。禅宗では、これを見性というのでしょうか、前文の、対立して変化して行く自己の形があるからこそ、その殻を破ってはじき出した自己が、天地一杯に広がり、わたしと、ほとけさまが一つとなる、総てが、自己そのものであり、ほとけさまそのものの世界が現出するといっただけでしょう。禅でいう、平等の世界です。

わたしがさびしいときに、ほとけさまはさびしいの。

わたしがさびしいときに、よその人は知らないの。

わたしがさびしいときに、お友だちはわらうの。

わたしがさびしいときに、お母さんはやさしいの。

この金子みすゞの詩を、順序を逆にしてみて、世界一杯に広がった自己から、対立の世界にと戻ってくると、「よその人は知らないの。お友だちはわらうの。お母さんはやさしいの。」は、善し悪し、好き嫌いをこえて、「知らないお友だち、わらうお友だち、やさしいお母さん」それぞれが際だって、みすゞの心に浮かぶことだと思えます。禅でいう絶対差別の世界です。よく「やなぎは緑、花はくれない」という消息です。

みすゞにとっては、ここまでくると、対立しているかに見える平等と差別は、一つのものとなってきます。これを、『金子みすゞの心』といえるのではないかと思うのです。

4月23日、土曜日、とある49歳で亡くなった男性の七回忌法要で、姉妹が焼香をする姿を見て、新鮮にして、不思議な思いで、見つめている私がありました。

世界が変わったように、新鮮にして、美しい、この光景は、『仏が、仏に合掌する姿』にたとえられ見えたのです。彼が喜んでいるといたら、幽界に踏み入ることになります。対立が終わり、シーンとして合掌する姿に、彼もいない、姉妹もいない、そんな波穏やかな法要と形容したら言い過ぎでしょうか。6年の年月が、姉妹にも辛い時間であったことは確かなことです。しかし、6年の年月が、このようにしたとしたら、しなければならなかったら、いえいえ、こうなって欲しいと願う私の心情なのかもしれませんが、『仏が、仏に合掌する姿』として見えたことは

確かなことです。

総ての法要が、このように見えるものなら、私にとっては、法要の意義は、はかりしれないものです。

彼を想い、その彼の母を想い、父を想いと、そして、そのつれづれの記憶のなかにいる自分を思うと、対立する自己があるものです。だからこそ、そこには、やるせなさや平穩、つらさや安らぎ、ふがいなさの苦渋があり、それは、今の自分の気持ちに、涙や笑いを誘います。時のいたずらといったら、俯瞰（ふかん）した見方になるのですが、過去の自分と今の自分の対立です。人はこの世界の中に生きていますが、もう一つ別の世界があるからこそ、此岸と彼岸のように、この世界が輝きます。

『ほとけさま』の便りを出させたのも、長く親しくこの際だった光景のせいです。

そこで、これは、一体誰が、こうさせていることのなだろうかと考えてみました。じぶん自身の計らいであるはずがなく、まして、自分以外の他者からの計らいのはずもなく、金子みすゞ童謡集“あかりほうへ”のなかに、『はすとにわとり』の詩で表した内容に感心したこともありました。

どろのなかから はすがさく。

それをするのは はすじゃない。

たまごのなかから とりがでる。

それをするのは とりじゃない。

それにわたしは きがついた。

それもわたしの せいじゃない。

金子みすゞの素敵な感性は、『どろのなかから はすがさく。』という、力強く生き活きとした差別の世界を見据えながらも、『それもわたしの せいじゃない。』と、絶対平等の世界に同時に生きることが出来る人だということでしょう。根源の世界に生きるからこそ、はからいを捨てて、あるがままの世界が見えるのだと。これらのことは、金子みすゞの、気づきです。気づくからこそ、見えて、『金子みすゞの心』を、わたし達は見る事ができるのです。

気づくことが、どんなに世界をかえるか、これは、同時に囚われると対立の世界は出口をなくすことを意味します。『はすがさく、はすじゃない。とりがでる、とりじゃない。きがついた、せいじゃない』と、不連続にして連続ものの見方。これは、今の自分を精一杯に生きることにつながります。

姉妹が合掌する姿に、これは、命の営みの中のわたし達の一つ一つの行為であるけれども、拝ませたのは、彼でもなく、姉妹でもない、気づけば、この一連の行為の中に世界や命が表現され、営みとは、『仏が仏に合掌する』ことになるのでしょう。

至道無難禅師の言葉に、「じひするうちは、じひに心あり。じひじゆくするとき、じひを知らず。じひしてじひしらぬとき、ほとけというなり。」があります。

合掌して、合掌しようとするとき、合掌に心があっては、真の合掌とはいえず、本当の合掌を知らないことなのでしょう。合掌して合掌を知らずときとは、ただひたすらに合掌する姿勢に、合

掌があり、仏ということなのだ、と、禪師はいいます。世界一杯に合掌が満ちるとは、今までの自己がなくなり、彼と一つになって、母と一つになって、父と一つになって、その彼も、母も、父もなくなって、合掌していることもなくなることです。

雪峰禪師の『尽大地これ汝が自己』とは、このことを言い、無功用（むくよう）とは、この合掌する行為のことです。さらに、百尺竿頭に一步を進めよという禅語がありますが、この6年間という百尺竿頭があったればこそ、百尺そのものが、天地一杯に、合掌という形で表現されたことになることを思います。

戒名（平成12年3月14日）

どの新聞にも、葬儀とお墓と戒名の話が、必ず定期的に掲載され、その記事を見るたびに、私はドキッとさせられます。どの言葉も、私と密接に繋がって、お寺の存在価値を問う内容だからです。

お彼岸が近づいたこともあるのですが、今日より、読売新聞の朝刊「葬送のかたち（1）」で、またもや取り上げられています。

このホームページは、陽岳寺和尚として、そんな世の中に、私はどう変化して接して、どう私の主張を貫き、その足跡である私の記録を、私の次の世代に、良いこともだめなことも残しておきたいと思って書き記すものです。

平成12年2月の末日、寺の電話がなった。受話器の奥から、搾り出す声で、名前を告げた婦人は、2月の半ばに、主人が亡くなって葬儀が終わり、これから四十九日とか法要のお寺さんを捜しているのだという。この寺の電話は、近くの書店で、臨済宗と告げて探してもらったというのです。

こんな電話が、年に何回か掛かってくる。その度に、葬儀屋さんと専属の僧侶の対応に、憤りを感じます。何も知らない遺族につけこんで、法外に請求し、式が終ってしまえばそれまでの考え方は、遺族のその後の心情や生活を考えると、ただ利益だけを追求する、まったく無責任な非道な振る舞いです。

現実の私達僧侶は、葬儀という式を通して、遺族に徹底的に尽くすことによって、私達の真価が評価されます。そしてその尽くす内容は、押し付けではなく、自分自身の到達した仏教をいかに説くかということです。そのためには、日頃、”如是我聞”の意味を、研鑽することが第一義です。

しかしながら、説くといっても、悲しみの真っ只中にいる人に向かって、振りかざして説く事も出来はせず、語らせることだけでも、充分仏教を説いたことにもなるのです。もちろん死者の生前からの交際があればなおさらですが、現状は、生前に僧侶と知り合うことの意義を見つけようとする人は、とても少ないのです。多くの人が縁起でもないと思っていることでしょう。

僧侶が側にいるという事の意味は、とても大きなことだと思います。そんな親密な関係の中においては、お布施はいくらです、戒名はいくらですと、どだい段階を設けて、請求する事自体可笑しなことなのです。近くの人と話していて、不幸があり、内のお寺さんから、いくら取られたと、頻繁に言われます。その度に、私は答えることが出来ません。

千葉県市川市行徳の方の葬儀に、なんで三多摩の福生市の僧侶が来て、「葬儀の祭祀は、私が執り行いますが、納骨や四十九日忌以降の法要は、どなたかお近くのお寺さんに頼まれるとよいでしょう。」と平然と言ったという。葬儀屋さんは、またも互助会で、葬儀に入る前に、「臨済宗のお寺は、千葉県、都内は非常に少なく」と、嘘を平気につくのです。そして、その互助会の専属の僧侶が言う、「近くの寺に頼めばよいでしょう。」を聞いて、これではお寺が、社会に認知されるどころか、それこそ自ら壊している姿と言えないでしょうか。仏教の教義など何処にも無く、ただ形ばかりの法要は、真に何のための葬儀かが問われていないことが原因でありましょう。人の死に携わるものとして、自ら自浄作用の機能しない産業化した葬式産業に警鐘を鳴らします。

その電話で、人が亡くなるということ、生きるということ、戒名の意義等ひとしきり話をして、戒名だけは付けて貰わなかったことから、「名前を付けるのなら、一緒に考えましょうと、それでよかったら相談いたしましょうと、家族とよく話して、また電話してください。戒名料はありません、差し上げた戒名に、価値を付けるのは貴方です。私はただ受け取るだけですから。」と、受話器を下ろしました。

一週間も経つと、きっと何処かに頼んだのだろうと忘れていた。

3月第一週を過ぎたある日、一度お話を聞きたいと、娘と一緒に訪ねたいと、今度は住所を名乗って、電話が鳴り、その翌日、婦人と娘さんがお寺にやって来ました。

ご主人の遺影と新聞の切抜き、それにご主人の来歴を綺麗に清書された文面を持参しての訪問に、お寺を思い切りよく訪ねてくれた事、ご主人の闘病生活のこと、亡くされての落胆した気持ちのこと等沢山お話して、戒名を創ったら封書でお送りしますとあって、帰られていきました。

○△様

冠省、戒名お贈りいたします。

梅寿院徳寶無端居士（ハヱウインクホムムソジ）です。

出典は、正法眼蔵《梅花》の「老梅樹、太(ハハ)だ無端なり。」の言葉を体としました。

《いま開演ある「老梅樹」、それ「太無端」なり、「忽開花」す、自結菓する。あるいは春をなし、あるいは冬をなす。あるいは「狂風」をなし、あるいは「暴雨」をなす。あるいは衲僧の頂門なり、あるいは古仏の眼睛なり。あるいは草木となれり、あるいは清香となれり。……老梅樹の忽ち開花のとき、花開世界起なり。花開世界起の時節、すなはち春到なり。この時節に開五葉の一花あり。…》

詳しくは、手に入ればですが、原文を参照してください。道元禅師は禅宗でも、曹洞宗ですが、顕している内容は、臨済宗の私の思うことと同じです。

さて、どんな名前がふさわしいのか、私は考えました。30年間の都立0高校の古文の教諭生活、T高校校長、私立K大学付属K高校校長と歴任されたご主人に、下町のちっぽけな寺の住職が戒名を授けることに、果たして命名する資格があるのか私にはわかりませんが、古文より引用致すことにしました。本来戒名は、信頼敬服する和尚から、授けられるものですが、私を知らない○△

様に、電話と一回の面識で、戒名を授けるのは無理があると、私は思います。授かる前に、ご一緒に考えて見ましょう。

頂きました新聞の切抜き、

「動と静、文と武が調和した自主創造の良い伝統は、創立以来、師弟の太いきずなによって支えられてきた。『教育には心のふれあい大切』と常々語っていた徳寶先生は、”トッポウさん”の愛称で親しまれた。自主・自立・創造の意気にあふれた0高校魂を忘れないで欲しいですね』と卒業生にエールを送る。」を、拝見いたしました。この切抜きを大切に保存する事自体、故人へのお気持ちと誇りをお察し致します。

ご主人が亡くなられたその日、私は、船橋に居ました。ここのところの寒さが嘘のように、暖かく、公園の梅の木に、梅花が咲き始めている姿に接していました。その時、思い出していたのが、正法眼蔵《梅花》の「老梅樹、太(ハハ)だ無端なり。」の言葉でした。亡くなられた日時をお伺いしたとき、真っ先に、この言葉を思い出したのです。そして、亡くなられたご自身を、老梅樹に喩えようと思ったのです。心のふれあいは太いきずなであり、そのこと自体が、互いにそれぞれの人格の確認という意味があるからです。師弟の絆は、お互いの人格を認め合うことが、より太い絆となると思うのです。人は、絆を強く意識するということは、気がつかないことですが、逆に、個性を強く意識していることなのです。真の自主、自立、創造の意気は、この意味より、理解できることと思います。

また、人として太(ハハ)だ無端なりは、端が無いということです。どうどうと真中だということをし、どんな立場・状況であろうと、端で無いんだという確信です。

老梅樹の一枝に花開くとき、即ち同時に自主、自立、創造の意気が開くということです。そしてそのことが逆に、老梅樹の自主、自立、創造の意気なのです。道元は老梅樹の一枝に可憐な花をさかす時、そこに春があるのだといいます。人に喩えれば、自主、自立、創造の意気は、春と変わりありません。徳とは自結菓なのでしょう。真の寶とは、そこに生きていうことではないかと思えます。その故、樹は寿に、言い換えることが出来ると思えます。

朝夕、位牌と対面したとき、「今の私は、無端なり。」と、対話することができます。

この戒名を授かれますように、陽岳寺 和尚

平成12年3月10日

揺れ動く婦人は、再三娘と相談し、私に電話をくれました。

婦人は、無端という言葉の響きが、寂しいといいます。

私は、「戒名を授かる前ですから、何度でも言ってください。四十九日までに決めればよいのですから。」と、「無端という言葉が寂しいと思うなら、それに代えて、咸新（かんしん：みな新たなり）と維新（いしん：これ新たなり）の中から、選んでみてはいかがでしょう。」と、咸新の意味と維新の意味を申し添えました。婦人こそ、「老梅樹、太(ハハ)だ無端なり。」の、地を行く姿に映りました。

自主、自立、創造の意気が開くということ、老梅樹の一枝に可憐な花をさかす時、そこに春があり、去年の花と今年の花は、花としては同じだが、年々歳々、一枝に宿す可憐な花こそ、人の今の表現であり、新たなる自分の顕現なのでしょう。無端は、咸新でもあり、これ新たなりです。

揺れる婦人を、娘が気遣うことこそ、やがて娘に支えられ、手を引かれて歩く姿は、今の自分の新たな姿です。

揺れながら、迷いながら、自分を見つめて、もう変えませんと、3月14日、受話器の向こうで決した言葉は、梅寿院徳寶咸新居士（バヂュイットクワカシソジ）でした。

朝夕に、位牌に対面し、「今日も、みな新たなり。」と、亡きご主人に感謝を捧げ、今在ることを喜びとすることを、願って止みません。

無用の用（平成12年2月21日）

お寺から見ると、今まで永續していた環境や文化的なものが激変してきていることを思う。このことをお寺にとって良いことか、悪いことか、都合の良いことか、都合の悪いことかは、寺に暮らすものがそれぞれ判断を下せばよい事なのだが、同じことが、お寺の中でも起きていることを思えば、一ヶ寺の事ではなく、お寺全体の問題でもあると思う。

平成12年1月6日午前、Nさんから電話がありました。母が亡くなったとの知らせでした。ちょうど一ヶ月前ぐらいに、私は居なかったのですが、留守の者が、Nさんが墓地にお参りに来たとき、母が病院で危篤であること、亡くなったら知らせるので、遠方だけれども葬儀に出向いてくれるかとの応対があったこと、できる限り出向くので、すぐ知らせてくださるようにと返答しておいたと、聞いたことを思い出したのです。

掛かってきた電話の内容は、母が亡くなったこと、葬儀はお金がないから出来なく、お寺さんは来てくれるな、戒名は付けなければならないのか、四十九日の納骨の日程を打ち合わせさせてくれとの内容でした。年の瀬に母の代わりに墓参りに来たことと、伝言された内容が変わって来ていることに、戸惑いがあった。どうしてそうなってしまったのだろうか訝ったものの、こうしたときの、私の説得力のなさ、不甲斐なさは、寺を預る住職としての私と、一僧侶としての私との葛藤が顔を出します。その場に立ち会えない和尚は、寺にとっても存在する価値は無いと思うからです。

寺を預り、この寺の墓地に眠る大勢の方々は、名前を言えば、あるいは、戒名を言えば、その人直接本人の顔や、経歴または家族や知人の顔が浮かび、墓を掃除するたびに、墓が私に語りかけてくれるような、妙な親しみを覚えつつも、安堵感を持つ。家族は元気に、たくましく生活しているとか、あれから大分子供たちは大きくなったとか、子供も大分年をとったようようですとか、行方が判りませんとか、この墓の後見人は、社会的には立派な人のようですが、実母が眠っているのにどうして何年も、お参りが来ないのだろうか、そんな墓の苔むした姿が偲びがたく、半年に一遍、私はそれらの墓を、たわしで洗います。

私から息子さんやその奥さんや子供さんたちに、墓参りに来いとは言えないけれど、こうして私が気持ちを振り向けることで、許してやってくださいと念じたりもします。いつも思うのですが、葬儀が終れば、ほとんどの亡くなった方の遺骨は、この寺の墓地に葬られることによって、納骨以降は、私との対話が専らなのです。その意味では、葬儀とは、家族から、私の元へと引継ぎ式のような錯覚を持つこともあります。亡くなった者が、生きているかのようにです。そのためにも、私は、家族からより多くの生前のことを聞き、亡くなる時の状況を詳しく聞くことにしています。不思議なくらい、詳細に渡って、家族は私に話してくれます。

Nさんのお母さんも、最初は熱が出て、風邪を引いたかのようなようでした。身体の不具合で、昨年2月、病院に検査に行ったのでした。診断は、脳種痘であり、即刻入院となりました。何しろ84歳でしたので手術はできず、薬で様子を見ることに専念しました。入院は次第に、母親の体力を奪うかのように、9月頃のMRIの診断によると、左脳半分に患部が広がり、点滴と流動食で身体を維持していたそうなのでした。やがて脳肝にも広がり、意識がわからなくなり、平成12年1月5日午前8時45分帰らぬ人となりました。ご主人が亡くなってから、挫折と転居を繰り返しながらの日々もありました。26年間4人男二人、女二人の子供たちを育てあげることが、並大抵の苦勞ではなかったのです。晩年は娘さん夫婦と暮らすことで、安らいだ日々を送っていたのですが、いつも穏やかに、気の優しい人でした。ほぼ一年にわたる闘病生活は、ほんのわずかな蓄えも無くなり、葬儀のためのお金もなくなっていたのでした。子供たちも、母の葬儀費用が都合がつかず、仕方なく子供たちだけで、10日の荼毘にされたのでした。

私は、訃報電話の翌日、お母さんと一緒に暮らしておりました、娘さんに電話いたしました。私は、人が誕生することの意味、そして亡くなることの尊さを話し、火葬にされ肉体が無くなる別れに立ち会うことの意味のために、誰でもいいのではなく、その菩提寺の和尚である私だけが、遺体と親しく向き合うことのできる祭祀者であることを、説明しました。受話器の先の、いくらか咽る声を聞きつつ、手紙に託すことで、電話を切ったのでした。

《冠省 お母様の亡くなられた訃報をお知らせいただきありがとうございました。電話では、納骨の日に、戒名を差し上げることになっておりましたが、10日火葬と伺いまして、速達ならば間に合うはずと、Mさんに承知していただき、早速郵送いたします。Mさん、そしてご理解いただきましたご主人、長期にわたる看護に厚くお礼申し上げます。たぶん幾度となく葛藤を繰り返されたことと思います。しかしそのことも、もはや過去のこととして、きっと悔いのないことと、今は思うのではないかと拝察いたします。

お父さんの戒名と一緒に並べた場合に揃うように、末尾の“心”字を先ず揃えました。そしてお母さんの名前の「いと」を、“綸（いと＝りん）”という漢字に変換いたしました。綸という字は、「綸…」と、…に漢字を使って熟語とすれば、天子・詔（みことのり）という意味を持ちます。つまり、この“綸（いと）”は、もともと尊い、かけがえのないものと言う意味を持つことに通じると思います。何がかけがえがないのかと言うと、自らの存在は、総て、糸で繋がっているという意味にとりたいと思います。このことは、私達は、知らずに母親・父親の姿を見て、育てきたし、その子どもも、更にその子供もと、繰り返すことから言えます。それは、自己の選択を拒否された運命を思います。子供たちの最初の産声は、そんな出会いであり、絶対の価値を持つことの表現でもあります。父母を亡くすと言う意味も、そこから出発していただきたいと思えます。

次に、“綸”の上の字は、“綾（あや＝りょう）”です。“綾”は、人と人の織り成す綾であり

、人生の軌跡であり、私は、人の生、そのものを“綾”とみなしました。そして言い換えてみれば、綾全体を“容（うつわ）”とすれば、人の心は、綸と綸の織り成す綾の上で、心を咲かすかのように、可憐であり、悲しくもあり、嬉しくもあり、退屈であるとも言えるでしょう。生前にはかなわぬ夢を、果たすことこそ、総てを受け入れるということであり、容認するということでもあると思うのです。死とはこのようにも解釈できることでしょう。

その母親が、火葬になれば、もはや見ることも出来ず、さわることも出来ない存在になります。生きてさえいれば、あるいは母の姿・形がどこかに在るということは、子にとって大きな支えです。その支えを現実に失うことが、葬儀の核心であるということは、子ども達にとっても旅立ちの儀式であり、もちろん母親にとっては帰郷の儀式なのです。私が望むことは、このことを良く考えて、母を最後まで慕いそして偲んで、それぞれにとって、お別れの会としてください。49日および納骨の式を含めた、お寺での追悼式にお会いいたしましょう。》

後日、火葬の日には、兄弟達が、和尚の手紙を回し読みながら、母を送りましたと、娘さんから手紙を頂きました。

私は出かけることが出来なかったけれども、兄弟達に、私なりの引導を渡すことが出来たのかもしれないと思ったのです。

今、私が、切に思うことは、人が生きるということの意味が、とても希薄になっているように感じられるのです。自分を離れた、かつて肉体を一つにしていた父母すらも、一体となって感じる事が出来ない、そんな子供達を育む現代の親達は、何年か前に、いけしゃあしゃあと、今を生きている内が花であり、楽しみと遊ぶのに、忙しくてしょうがないと叫ぶ、年寄りを前にしたことがあるが、自分を大切にすることは、ひるがえって自分以外をも大切にすることによって成り立つ事実を、しっかりと認識することこそ、より良く生きることの出発点の大事だと思うのです。

世話

人が生きて、息を吸うと言う事には、息を吐く事が含まれていて始めて、息を吸う事ができる。

15年ぐらい前のことだろうか、彼を注意深く見つめるようになったのは、彼の父親が昭和57年の春に、79歳で亡くなったときからだ。彼の父親は、ガラス職人だった。その当時、江東デルタ地帯にはガラス工場がたくさんあり、職人達が溶鉱炉の熱気に打たれながら、真っ赤になったガラスと格闘する姿があちこちで見うけられたものだった。その頃、彼は公立の小学校の用務員をして、生計をたてていた。人の良い彼は、純朴でいて長い年月に起きるさまざまな事柄を、受け入れ過ごしていた。

彼には、老いた母がいて、なかなか気難しく、その頃、都営住宅で、ベッドに寝ては起きる日々を送っていた。そして年齢が少し離れた、知恵遅れの障害を持った兄が母親と同居していた。彼と彼の妻は、都営住宅に通っては、二人の世話をしていた。しばらくして、兄の様態が悪くなり、兄は入院する事になった。老いた母と入院した兄の世話に夫婦は奔走する事になる。兄は入院したまま、平成2年夏、61歳で、帰らぬ人となった。

兄が亡くなった頃、彼の母は、ほとんど寝たきりの状態になりながらも、狭い都営住宅の真ん中にベッドを置き、掃除も行き届かない部屋に、横たわっていた。それでも母の口は達者でした。夫婦は、三度三度の食事、排泄の世話、洗濯と夫婦は都営住宅に、毎日通っていた。

平成4年の暮れ頃からだろうか、彼の妻の健康が損なわれた。胃がんだった。翌年の正月には、妻が入院して、平成5年3月、57歳の若さで急ぐように亡くなっていた。次々と肉親に旅立たれる彼は、それでも不幸を表面に出さず、母の介護に余念がなく、淡々と毎日が過ぎて、彼も定年を迎えたので、母の世話に忙しかった。その頃、彼の子供たちが次々と結婚し巣立っていった。

平成8年4月、桜が咲いているさなかに、彼の母が、90歳で旅立っていた。それぞれの葬儀は質素に、父親の葬儀には行けなかったけれど、兄の葬儀は、母のベッドの傍で執り行われ、母の葬儀妻の葬儀も遺骨にした後、肉親が祭られる自宅の仏壇の前で、残された家族と親戚だけで、本当にしめやかに執り行われた。

平成11年9月、久しぶりに彼の笑顔を見た。年も70歳を越して、日焼けて飾り気ない彼は、忙しそうにしていた。

「長男の息子が3歳になり、孫の世話に追われて、忙しい」という。

めぐり合わせの人生とは、儚くも美しく、不思議ではしょうがない。私が知る彼は、いつもあわただしく、人の世話を追われている。こうして18年の短い年月にもかかわらず、彼一人の18年間に4人の大切な家族がいなくなり、何一つ愚痴を言うわけではなく、孫の世話を追われる彼を見て、彼の強さを思った。

何かを望む人間は、そこに弱さを見つけることができるように、望まない人間には弱さはない。ただ生きることに徹して、目前の事実を受け入れ消化する姿に、打たれる。それこそ一息一息の呼吸に、生命はある。また、来年の春に、あわただしい彼の姿を見るのが、楽しみだ。

大きく育て！（平成11年1月18日）

大きく育て！（平成11年1月18日）

平成11年1月8日夕刻、電話が鳴った。

近くの特別養護老人ホームのM園、O指導員からの電話だった。

「入園していた八十二歳の女性・I岱子さんが、本日、Yクリニックで亡くなったのだが、葬儀が出来ないだろうか。さらに遺骨を引きとって頂けないだろうか」との内容であった。

「遺骨の引き取る家族・姉妹がなく、早急に決めなければならないので、ご理解の上、決断して欲しい」と、さらに続いた。

「今までは、こうした例では、東京都の多摩霊園の合霊塔に埋葬していたのだが、近くに埋葬できれば、その上葬儀までできれば、園の人達もお別れができるし、本人にとっても嬉しいことだと思う」の言葉に、私は、引きうけてしまったのでした。

さて、引きうけるにあたって、私は本人のことは一切知らないし、顔も見たことはないので、何か本人を知る手がかりを教えてくださいと葬儀は出来ませんとO指導員に伝えた。O指導員は、I岱子さんの、ここに来る前の、雇用主であるMさんの電話番号を教えてくださいました。

Mさんとの電話

岱子さんは、本当に気の毒な人なのです。岱子さんは、福島で、警察官の父と母とのあいだに大正5年4月28日に生まれたそうです。岱子さん4歳の時、お母さんが亡くなられたそうです。下に弟がいたそうですが、知能の発達が少し遅かったと聞いております。父親はすぐに再婚したそうです。その父親も、岱子さん10歳のときに、亡くなられたそうです。しばらくは、一緒に暮らしていたそうですが、後妻との間に妹が生まれていて、暮らしは楽ではなく、やがて、当時としてはハイカラな、女性が一人で生きて行くには理想の、美容師の道を選ばれたそうです。しかしながら、当時の美容師は徒弟制度で住み込みの、はたから見ているほどに楽ではなく、辛いこともたくさんあったろうと思います。なんでも、上京して有名な先生について聞いております。

おとなしく、辛抱強く、芯に気品のようなものがあって、品の良い穏やかな、それは美しい人でした。

戦争が激しくなるとまいりますと、パーマをかける婦人達もいなくなり、郷里の福島に帰ったと聞いております。そこで、男の人との同棲生活が始まりました。内縁関係だったそうです。ご主人や廻りの人の意見で、籍には入れられなかったそうです。岱子さんはそのことを、あまり語りませんでしたので、私もそれ以上聞くことはしませんでした。戦後すぐに、上京したことを思えば、長く続かなかったのでしょうか。

私との出会いは、30年ぐらい前のことなのですが、私が美容院を開店させた時、美容師募集の広告で、岱子さんは応募してきたのです。住み込みを希望でした。その時以来10年ちょっとのお付き合いです。私が身体を悪くしたこともあり、私の子供達を、それは良く尽くして下さいました。子供達もよくなつて、慕っておりました。岱子さんは65歳を過ぎて、大田区のアパートで一人暮らしを始めました。しばらくは元気で過ごしていたのですが、なんせ、年寄りの一人暮らしは心配で、何度か救急車に運ばれるということがあってより、大田区の福祉事務所に通い、何か良い方法がないものかと思案していた時だったのです。たまたま江東区のM園で、一人空きができて、それに飛びついたので。福祉事務所の担当者の機転とM園との出会いは、ついていたのでしょうか、運が良かったのですね。岱子さんは76歳になっていました。

和尚の思い

Mさんから電話にて、岱子さんの話を聞くにつけ、なんとも気の毒な話しであり、姉妹も義理の母も姿・形を現さない。これは、何かしらの事情で岱子さん自ら、音信を切った理由があるのだろうし、また、その反対かもしれない。生きていればの話しだが、恐らく先方も今更会いたくはないのかもしれない。

父親の名も母親の名もわからない娘が、82歳という年齢で、天寿をまっとうし、親しく見送られて旅立って行く。

不思議なもので、まったく身寄りのわからない人でも、両親を窺い知ることができると思ったのは、名前であった。人は見ず知らずの他人から、名前を頂くことはないのだが、たまにはあるが、そんなこともある。それは、葬儀において付けられる法名・戒名の類だ。突然の不幸に動転し、葬儀屋さんに誰でも良いとお坊さんを頼み、葬儀後、納骨をしなければならないが、我が家には、墓はないし、はてあれは何処のお坊さんだったのだろうかと思って、尋ねてみれば、何処の誰かもわからず、困って、近くの寺を訪ねてみて初めて、自分が法名・戒名をその時すでに頂いた身であることを、しみじみと確認する。

確かに両親からもらった名前を人は、いつまでも携えて歩き、他人はその名前で、人をわける。

中国の今の北京を中心として、五嶽がある。禅学大辞典よりの抜粋である。

『中国において、古くより国の鎮めとして尊び信仰された五つの名山。戦国時代、五行思想の影響により五岳の観念が生まれたが、漢代に至って、東岳泰山、西岳華山、南岳せん山、北岳恒山、中岳嵩山と定められた。その後6世紀末になって南岳は衡山に、17世紀になって北岳は恒山に改められた。衡山には南岳懷讓禅師・石頭希遷禅師等ゆかりの南台寺・祝聖寺・福巖寺等があり、嵩山には仏陀禅師や菩提達磨ゆかりの少林寺・嵩岳寺・会善寺がある。』

五岳の筆頭、泰山は岱山といい支山15、嶺は7、谷は15で、大山脈を束ね、岱宗とも言った。泰山からは、泰山のような安らかさ安堵感を導き、人の命は、泰山のように重い。また仰ぎ尊ばれる山であり、その故に人から慕われるということか。太山からは大きさと始まりを感じら

れる。山東省泰安市にある岱山は、大きいさまの敬称として、また胎に似て始めの意味も、持っ
たらしい。

名前から、親の教養がうかがえるし、その家の長子として、親の願いが伝わる名前に違いない。
だが、もしこの意味を知ったとしたら、誇りに思っただろうか。自分の行く末を考えると、重荷
になっただろうか。時に誇りに思い、身を歎いたであろうか。そんなことを考えながら岱子さんの
M園での、振る舞いを聞くうちに岱子さんは、とっくにこの意味の問題を卒業していたのを知り
ました。

誇りに思うことになったきっかけは、大きくなるということは、一変に大きな山になるというこ
とではなく、実は一つ一つの小さな土くれが積み重なった結果が大きな山だと、気づいたから
でしょう。このことは大変大きな意味を持ちます。人生の一つ一つの作業の、あるいは行為の結
晶が、間違いなく大きな山だと、気が付いたからなのでしょう。また、山は山自身の大きさを自
ら語りませんことから、そのままの素直な自分が大事だと気が付いたからなのでしょう。

禅の言葉に、「太山、只、重さ三斤。（従容録）」とある通りです。

岱子さんの葬儀は、1月12日通夜、13日告別式の日取りで、場所は陽岳寺、喪主はM園の園
長が勤めた形で執り行われ、Mさんたち家族12名ぐらいとM園のO指導員、寮母さんたち、元
気な入園者とお別れをし、出棺した霊柩車はM園の玄関前に到着、式に来れなかった人の見送り
を得て、瑞江の火葬場に向かい、荼毘にふされました。そして、幼くして亡くなったご両親の元
へと旅立って行きました。

没年 平成11年1月8日 午後1時38分

伊藤岱子 享年82歳

戒名 岱壽妙素 信女

平成11年1月13日 陽岳寺三界萬靈塔に埋葬される。

もし、この項を御覧になって、ご存知の方がおられましたら、一度お参り下さい。

ちなみに、戒名の岱素とは、自分が生まれる前、自分を生んだ両親も生まれる前、地球が誕生す
る前の意味を持ちます。もっとも、その意味に憑かれたら大間違いですが。そのままに暮らすこ
とを、『妙』と言います。

しもべ（平成10年11月7日）

しもべ（平成10年11月7日）

昭和59年6月後半、横浜で葬儀をした時の話しである。通夜、葬儀と自宅で執り行われたのであるが、喪主である長男の嫁が奥に入っていて、一向に挨拶にあらわれないのである。長男には妹がいて、その代りにせっせと忙しく立ち振る舞う様子に不思議と思ったものだった。今でも台所から一步も出ようとしない、その奥さんの顔が今でも私の脳裏に焼き付いて、今どうしているのだろうか思うことがあります。

所かわって埼玉の狭山市で、これも、ずいぶん前の平成5年1月半ばの話です。通夜と葬儀をおこなった時のことです。小さな会館で儀式は行われました。親族一同が式の会場に参列している最中、出頭前の親族と導師の控え室に、ひとかたまりとなった母親と三人の子供の姿があった。亡くなった方の親戚の姪っ子と子供達で、子供達は幼稚園ぐらいの年齢だった。可愛い盛りの女の子たちだった。

「小学校？それとも幼稚園ですか？」

母親らしい女性が応えた。

「いいえ、いいんです。子供達にとって、充分よけれとの思いで考えてのことです」

「そうですか」

私は、子供達の広くは絢い部屋の隅で、固まって遊ぶ姿を見ていました。何も言えませんでした。

通夜の勤めを終えて帰ってきた時も、その塊は、そこにいました。そして、翌日の葬儀の時も、かわることなく、その情景がありました。

子供達の感情やさまざまな体験の扉を閉めて、自分の思いで、子供達を鎖に縛って良いのだろうか？

この子達にとっても、その親にとっても、出会いと別れの、大切な節目をもかえてしまうものかと思うのです。そしてそのことによって、その人のこれからがどう変化していくのかは、誰も知らないことで、すべては自分で背負って行かなければならないことなのですけれど。

2年前の平成9年1月のとある夜、横浜の、あの妹さんから電話がありました。いつも、それは突然にやってきます。私にとっては、避けることが出来ないことなのですけれども。

「兄が亡くなりました」と、鼻をすする妹さんの悲しい声に、

「どうしたのですか？」と、最初、応えるのが精一杯でした。

妹の兄は私よりも二つか三つ年上だから、不自然な死に方に違いなく、すぐに笑顔やすました彼の顔が浮かびます。この寺の墓地に墓はないものの、長い付き合いの一家には、どこもそうで

すが、さまざまなことが降りかかって来るのを、じっと見つめます。

前年の五月に法事をしたとき、

「妻と息子、娘でアメリカに転勤です。今度は長くなりそうですので、日本との別れに、年会ではないのですが両親の法事をして行きます。食事は、隅田川の上で、船に揺られてのんびりしたいと思います」

「ニフティーサーブのアドレスに、郵便を送ってください」

さらに6月か7月頃に、メールを送ったことがあった。返事もすぐにきて、仕事にもなれて、元気にやっているらしく、メールのやりとりは、日本とアメリカの垣根を取り払ったかのようすと書いてあった。

妹の話は、こうだった。

「実は去年の12月29日午前9時15分に、兄は休暇で、家族そろってオレゴンのスキー場に行く途中、交通事故で亡くなりました。吹雪の中、奥さんが運転する車は、スピードの出し過ぎで横転、20メートルほど転がりながら大破して、助手席に乗っていた娘さんと奥さんは助かりましたが、後席にいた兄と息子さんは亡くなりました。1月8日荼毘にふし、奥さんの希望で現地に埋葬いたしました。私は、少しでも兄の骨を分けてもらい、多摩霊園にある、両親の眠る墓に埋葬してあげたいと思います」。

後日、追悼の会を催したいとのメールが舞い込んで来ました。

発起人のK氏からのものだった。

「彼は私立Y大学の工学部を卒業、富士通に入社、コンピューターのウェハスのラインを立ち上げたりと、それは失敗と苦労の連続の中を歩みつづけた仲間です。彼が勤めていた会社やK重工やK製作所の仲間が、せめてささやかな宴を催して、彼を偲び、そして語りたいたと思いますが、力を貸してください」との内容だった。

妹さんから、再び電話があり、独りぼっちになってしまったこと、ビザの期限が切れるであろう兄嫁のこと、娘のこと、冬ごろもした別荘での兄や兄の友達との楽しかったひとときを、涙ながらに話す妹さんの言葉が、一言一言、しみ入り、逆境に早く立ち直ることを願った。そして『偲ぶ会』に賛成し、私に出来ることは、協力いたしますと電話を切りました。

それより、2月7日の当日まで、メールのやりとりで、式次第やプロフィールの作り方や、進行の仕方を決め、偲ぶ会が決行された。

私は、冒頭15分強頂いて、彼の52年の生涯を思い、悼み、そして願った、会に賛同しかけてくれた大学の恩師や会社の先輩、仲間七〇名がそれぞれの思い出を語り、彼の冥福を祈った。

四十九日の法要が過ぎ、一周忌、三回忌とまたたくまに過ぎ去っていた。彼の妻と娘の消息は、オレゴンから途絶えたままに今日を迎えている。

彼女は、地球のハルマゲドンをはたすら信じて、その証人になるべく、アメリカの地を歩いているのだろうか。

電話（平成10年8月22日）

電話（平成10年8月22日）

昭和63年2月初め、私が仏教情報センターでの電話相談の日のことでした。午前11時頃だったと思うのですが、電話が鳴りました。受話器を耳に当て、「仏教情報センターテレフォン相談室です」と応答しますと、受話器の向こうで「……」沈黙が続きます。

かすかな息遣いを感じられましたので、「どうしましたか。大丈夫ですか」と呼び掛けてしばらく待ちます。かすかだった息遣いが大きく、受話器の向こうでは、嗚咽が始まりました。私は何か差し迫った予感を覚えて、声をおとしてゆっくりと何度か「どうしましたか。大丈夫ですか」と呼び掛けたのですが、嗚咽は止まりません。

受話器の向こうのしばらく続いていた嗚咽が止み、

「すみませんでした。ずっと電話をしたいと思っておりましたもので、なかなか出来ずつらくて気が付いたらダイヤルを回しておりました、つながった音に、とても不安を感じ、次に涙がでて……」。受話器の向こうの女性の沈黙と鼻をすする音に、多少の落ち着きを感じて、「さあ。話して頂けますか」と声をかけました。

広島近くK県K市在住の女性で、年齢は42才、二人の娘がいて姉は高校2年で妹は中学3年の受験に追われているとのこと。夫はがんで入院中、しかも末期の肺がんだそうで、あとどのくらいの命か不明とのこと。

夫の仕事はK市の小さな材木屋さんで、主人のいなくなった仕事場で伝票等の整理をしたり、家事、受験、病院の往復と夫の世話、将来のこと等、不安やいらだち、心細さを受話器の向こうで語りかけてきました。

私は、この年の1月から仏教ホスピスの会員として、『癌患者・家族の語らいの集い』に出席しておりましたので、緊急のときのため、国立がんセンターの先生と世話人の僧侶と私の電話番号を教えて、電話を切りました。

これで良かったのか、あまりに遠方であるため、岡山にある仏教テレフォン相談のことをも告げたのです。

「ありがとうございました」との最後のことばに、『めげないでください』と念じてやみませんでした。

時は、一年の歳月が立ち、秋彼岸の何日か前です。午後、私の寺の電話に彼女の声が聞こえ、夫が旅立ったこと、お店を閉めたこと、娘が進学したこと、彼女が勤めていて、今日はなぜか会社を休んでしまって、あのときの電話を思い出して、今、ダイヤルを回したことを語りかけてきました。

意思

『衆生病むがゆえに我病む』という意味を理解できるでしょうか。

私が病んでいる限りは、私が愚かである限りは、私が悲しんでいる限りは、私が憎しみに染まっている限りは、私が悪に足を踏み入れている限りは、私が飢えで苦しんでいる限りは、私が潤いを望んでいる限りは、私が支えを欲している限りは、私の意思が揺らいでいる限りは、私の感情が揺れている限りは、私が幸福である限りは、私の子供が成長するまでは、子供の子供が安心できるまでは、友人の病気が治るまでは、母や父を送るまでは、災害がなくなるまでは、私の心配が尽きるまでは、私の苦しみが尽きるまでは、仏は仏の、神は神の意思を、捨てることは無いという意味です。

人が生まれ、生きている限りは、神は神としての、仏は仏としての安らぎ、あるいは肩の荷を下ろすことは、無いということだと思ふのです。年がら年中働いて、見守って下さるということでもあります。このことに気づき、感謝できれば良いのですが、すぐに忘れてしまうのも、人の性というものでしょうか。

諸行無常を語る仏教では、総てが変化してあるということは、絶対の定理です。存在するのは、変化することは真理です。時を含むことは、もちろんのことです。

『衆生病むがゆえに我病む』にとって、病む内容は、”時代の病み”でもあり、”時代の表現”でもあります。

仏教における、人の生き方の目標は、自分自身に忠実に生きることだと思います。そしてそれには、自分自身と、忠実と、自分自身に忠実に生きることと、忠実に生きる自分自身の意味、それぞれが自己に問い掛けることが必要なことだと思います。

忠実に生きようとして、妨げになることは多くあります。忠実に生きて、死に臨むこともありました。

どんなに年をとっても、時に辛く苦しく、悲しく寂しく、不安や恐怖に、いらいらする時があります。いや、年をとればとるほど振り返ることが多くなり、今の自分と、これからの行く末を考えた時、まして、体の不具合の繰り返しと、自分の体調の変化に、強く危惧を抱く時、時の流れを止めることのできない不安と自己の苦痛に襲われるのはいたしかたないことです。

今を生きるということは、時に、辛く苦しく、悲しく寂しく、不安や恐怖に、いらいらすることも、それを取り除けない今の私なのだと思ふことが、今を生きている、豊かに潤いのある姿だと思ふます。

今から10年前の平成2年、長い間築いたY氏とU婦人の、二人の生活の過去を持つ家と土地を処分することに、決断し、実行に移した、老いた仲睦まじい夫婦がいました。

それは、子供がいない二人の、終焉の地を求めてのことでした。未来を占い、過去を厳しく見つめてこそできる、綿密な計画通りの実行は、さらに、夫婦の固い結びつきを思います。

終焉の地は、市川市の終末型老人ホーム、ウェルピア市川000号室です。

この家、この建物こそ、生涯に渡って貫いた、夫婦の象徴であり、もはや人格そのものの、投影のような気がいたします。それは、夫婦が帰る場所であり、温もりと安心の宿る、後戻りできない棲家だったからです。

他人に迷惑をかけることを許さないY氏は、小学校の教師を勤め上げ、最後はいくつかの学校の校長を歴任した、厳しい教育者でした。子供達に自立を植え付ける立場から、自ら率先して模範となる頑固さを持ち、臨終まで、Y氏は、教師の姿勢を通したのです。

半年前の5月のある日、私に一本の電話がかかりました。それは、この夫婦の後見人ともいえる人であり、私の寺の檀家のI氏の弟さんからでした。

「和尚！叔父（Y氏）さんの体が消耗して、すぐについていう訳ではないのだが、叔父さんの希望なんだが、葬儀に来てくれないですか」との内容でした。

私は、U婦人と最後に会話ししたのは数年前になっており、今いる場所に引っ越しての暮らしに、「良い場所がみつかりましたね。その後はどうですか」と、声を掛け、婦人も「ええ、本当に、安心して余生を楽しく過ごしております」と、うかがった記憶が、薄っすらとある。

「向こうの寺の和尚が高齢で来れないのなら、承知いたしました」と、電話を切ったが、それ以降電話はなく、ふと、「どうしてるだろうか」思い出すことはあっても、「なんせ88歳だから、腰の骨を痛めてのことだから、時間はわからないと思うよ」と、平静の忙しさに忘れかけていたのです。9月の始めに、やはり弟さんから電話があった。その後の経過を掻い摘んで話してくれ、「またその時はお願いしますよ」と、電話を切った。

秋のお彼岸に、弟さんにお会いした時、これから老夫婦の所に、お見舞いに行ってきます。老衰が進んで、もうそんなに持たないと思いますので」と、別れた。

どうやら8月はじめ頃には、痩せて、000室のベッドに居ることがおおくになっていた。U婦人が懸命に付き添っていた。

10月7日、8日、9日、ウェルピア市川の開設十周年事業が行われるにあたり、看護病棟に移動することになった時、Y氏は激しく抵抗した。医師の常駐することのない病棟で、療養することの限界はあるのですが、設備と看護体制が、整っているため、この施設の中に終末を迎えることもできるようにできているのです。

Y氏は、たとえ看護用病室に療養することさえ、妥協するには時間が必要であったのでしよう。それはY氏の様態の悪化こそ、病室で看護用ベッドに横たわることを容認するための理由でした。

数ヶ月前から、Y氏は「もう白浜に帰りたい」と、生まれた故郷の漁村に帰ることを、言うようになっていた。そこにはY家の墓があり、そこに葬られることを、希望し、そして、冷静に、命の残り火を推し測りながら、一日一日と、灯火を燃やしていたのです。いつしか、直面する事

実をただ受け入れ、一刻一刻と生きていることの実感を享受して、過ごしていたのだと思います。ここ数ヶ月の早さで、U婦人の願いとは逆に、Y氏の身体は時に激しく、ユックリと消耗し、体力を燃焼し尽してしまったかのようでした。

10月に入って、婦人は菩提寺に電話して、戒名を依頼しておりました。その戒名が来たのが、9日でした。

そして同じ日に、Y氏の体調が急変し、設備の整った病院への入院が検討され、近くの総合病院へ転院することが決まったのです。しかし、このことはY氏の意味に強く反することであったのです。000号室から離れることは、挫折することを意味するかのようになり、思えたのかも知れません。白浜へと通じる入り口だったのではないかと思いました。

翌10日、嫌がるY氏を説得し、転院いたしました。そして点滴と薬による治療が施されることになったのです。

Y氏は、自分の意思がないがしろにされたことに、いたたまれず、危機感を持ちました。手段を尽くして訴える強い意思が、危篤の状態の中、体の不自由さを超えて働いたのです。

目で訴え、点滴を外し、口で訴えたのです。「帰せ！」と。

人にとって大切なものを守ることの純粋で清らか、ひた向きの姿を、立ち会った誰もが、奥深くから湧き出るものなのだと、知らされました。

誰も止めることの出来ない強い意思は、たとえ総てを奪うことになろうと、承知であり、Y氏は、10日、000室に戻りました。もちろん医師は反対し、命の保証はないこと、それでも帰ると、移せと、夕刻6時ちょっと前に、施設に戻ったのです。

それから1時間後、Y氏は静かに息を引き取ったのです。

誰もが、こんなことってあるのだろうか、きっと不思議に思うことでしょう。葬儀は遺言により近親者だけで、Y氏を偲びました。参列する誰もが、Y氏を尊敬してやみませんでした。

Y氏の臨終の地を守りきった安堵が、自らの息を止めるとは、驚いて止みません。もうY氏の意味をはばもうとする者は、何処にも、誰もいません。

「こういう安らぎを得るドラマがあるのだな」と、声が出ませんでした。

本当に、「白浜に帰るのだ」と、Y氏が望んだこと通りになったのです。

平成12年10月10日、午後6時40分、眠るが如く、88年の生涯を終え、000室の扉から、白浜に帰って行きました。

葬儀を終って思ったことは、最後まで教師として生きていたのだと、強く思いました。もし私が同じ立場だったらと思うと、Y氏のように出きるとは思いません。そしてふと思ったことは、人として、自立ができなくなる時は必ずある。Y氏だったら、その時、どう行為するだろうか思いました。

「最後は人の世話になって良いのですよ！迷惑を沢山かけていいのですよ！もう頑張らなくてもいいんですよ！」と、Y氏が囁いているような気がするのです。

寡黙

平成15年2月26日午前10時ごろ、私は、子どもの大学受験合格のお祝いにと、長男に付き添って車で秋葉原にいた。子どもが、パソコンショップのツートップで、パソコンキットを購入している間、車のなかで、本を読みながら待っていると、携帯電話が鳴った。

電話は妻からで、M園の園長から電話で、身寄りのない入園者が亡くなったので、何とか、納骨を引き受けてくれないかとの内容でした。条件によって引き受けないことはないと言いに、帰り次第連絡を入れるからと、携帯のoffを押したのです。

そして、28日、M園の勤務交替の時間、午後6時45分を過ぎて、50分から通夜を執行いたしました。思いもがけず多くの方が参列してくれました。夜10時まで彼を偲んで、コーヒーにお砂糖を半分ぐらい入れて飲んでいて、これで陽岳寺さんには身寄りのないお二人の方を受け入れてくれてもらったこと、そう言えば、お二人とも「有り難うがとう」と、ことあるごとに言っていたこと、小さい頃に、田んぼでタニシを捕ったとか、母親の思いでを語っている姿があったなどおしゃべりをいたしました。それでも、彼は寡黙だった。青年期、壮年期が欠落しているのです。

翌日の、午後1時から葬儀が行われましたが、私と園長さん、それに寮母のHさんと三人で、瑞恵の火葬場に行き、彼を荼毘にふしたのです。

M・Y氏 2月25日午後4時28分、貴方が亡くなられたという時間です。M園で、肺炎を発症し、区内のT病院に行き、わずか2週間で貴方が去っていった時間です。

普通、この時間は、遺族にとっては、大きな意味があります。でも、こうして遺族が招かれない貴方の最後に接して、貴方がこの世界から居なくなろうとしている時、私には、貴方は誰だったのかと、あらためて、問いたいと思います。これは、遺族が招かれていないからこそ可能な、貴方に向き合う最後の時間でもあります。

26日、園長から、葬儀をするために貴方のことを知りたいからとうかがい、多くの方が貴方の足跡を記していることを知り、貴方を知ります。そして園でのスナップを見て、これが私の知りうるかぎりの貴方の69年の生涯の記録なのではないでしょうか。貴方とこの寺との関係はありません。話を聞けば、遺族の参列も、遺骨の引き取りもないと言います。園としては、遺骨を納める場所が欲しいと、困って、そして、私が引き受けてくれれば願ってもないことだと、依頼してきたのです。

私は、依頼されたことより、遺族のいない葬儀に、自分を試されていると、試みとして、お寺の墓地におなたの遺骨を受け入れをきめたのでした。きめてより、やはり、私には貴方は誰なのだとの思いが強くわき起こってまいりました。それは、私は、葬儀とか儀式の執行者あるいは仲介者として、私は、メッセージの橋渡し人を務めることを心がけておりましたからです。貴方の場

合は、渡そうとする人も、メッセージも考えられないことに気がつき、貴方は誰なのだと問うことに、問う私は貴方にとって何ものなのだと、受け入れることは、いったいどうした意味を持つのかと言うことに、迷っていることに、気がついたからです。

貴方の多くの残された思い出の写真を見ました。いくつかの写真の、そこには貴方の視線が写されていました。抑鬱的な見つめることに意味があるような、感情が読めない、そんな視線を感じました。貴方が見つめるカメラのレンズにむかって放たれた視線から、貴方自身が覗けそうでもあります。人との接点って、そうしたチャンスに、見つめる眼は見つめられる眼に対して案外と無防備に開け放されているのではないかと気がつきます。貴方は誰なのだとのぞき込み、その視線の奥に、おぼろげなものがうかがえると思ったとき、貴方は遠ざかる。遠ざかりながら、近くに見えてくるのは、見ようとする意識で、貴方とは別のものです。貴方がまったく別の貴方として、取り込まれたとも呼べるのかもしれない。

こんなことを考えながら、ふと、実際の貴方は、喜ぶだろうか、怒るだろうか、頭に浮かぶ。もはや、喜ぶこともなく、怒ることもない貴方の、喜びや、怒りを、そのおぼろげな安らぎのなかに確かめたいとも思いました。貴方の最後の遺骸を、この寺に受け入れる主としてです。

4階の男性三人部屋の貴方が生活していた室内を見ました。三列に並んだちょうど真ん中が貴方のベッドです。主のいなくなった貴方が休んでいたベッドや貴方の洋服タンスを見ました。事実は、あくまでもそこにベッドやタンスがあるだけです。ただそれだけのことが、人にとっては、掛け布団をまくり、いつでも受け入れることのできる状態のベッドに、もう帰ってきて、休むことができないという想いが、他者としての私をつくります。貴方を受け入れることを決めてからです。

そこで、ベッドこそ、年老いて生きることの、もっとも自分に親しく、大切な、温もりを提供するものだと言われました。年齢を加えて行き、今まで、当たり前、思うように行っていたことが、一つ一つ減って行ったとき、最後に安らぐことができるものがベッドだと気がつきました。人生の選択肢がいくらかなくなったとき、これだけは必要なモノ、それが、帰ってこれるためのベッドだと、貴方のベッドが語っていました。ベッド一つがもっとも親しき友とも言えるのではないか、何も言わずにどんな状態の自分でも支えてくれると。そのベッドの上で、ないがままにおくる、あるがままの人生を過ごしていた貴方に合わせます。

ベッドの枕元の上の電気には、近くの小学校の子ども達からきた葉書が飾られていました。その文面は、明るく子ども達の将来が書き添えてあります。屈託のない子どもの文面は、年をとっておぼつかなく、歩けなくなったモノにとって、かえって安らぎを与えることに、私を安らぎます。将に来る明るさが、将に来ないことを熟知した者を、明るく包むともいえ、ここにも、他者とのかわりの中に、今の自分を現す貴方の心が置き去りにされていることを知りました。子ども達の将来が、枕元の上から、灯りといっしょにいつも照らしている生活が、貴方にはあり、きっと微笑ましく、子ども達の将来を託していたのかも知れないと、思ったのです。

他者とのかわりの中で生きる人の、心を特定することなど、到底できることではないことと知りつつ、やはり、貴方は誰なのだと思います。

貴方がじっと見つめていた、景色に接して、貴方は貴方自身を紡ぎ出していたと思います。このM園に関係する人にとって、貴方は、かけがえのない存在でした。貴方をせつせと支えることは、その関係する人自身を支えることになるからでもあります。M園の世界の中に、貴方は貴方自身の世界をもち、一緒に施設で暮らす仲間たちそして関係する人たち80名を越えるそれぞれも自分の世界を持ちます。80人の貴方がいて、80人の世界を貴方は支えていると思うと、貴方は大勢の人の世界に別々に生きながら、その大勢の人を貴方自身の世界に生かしているとも言えると、貴方自身が誰であるかは、もはや、意味を問えなくなっていることに気がつきます。

こうして、亡くなってこそ贈る言葉が、貴方に届いている、いないことは、私には、もはや、問題となりません。あらためて貴方の世界を語ることに、生きていれば聞くことが出来れば、貴方はきっと真摯に耳を傾けることはできないと思います。この場に耳を傾ければ、いたたまれなく貴方はこの場所に止まることさえできないのではないかと思います。葬儀とは、そうしたものですと、私は思います。結果として、今の貴方の心地よさが伝わってくるようです。

関東大震災の傷跡と復興の土音の喧噪のなか、貴方は東京の下町で生まれました。自宅が火災に襲われたことを、実家が立ち行かなくなったことに重ね合わせることができます。そして貴方が、小学校5年生までの勉強を突然放棄し、妹さんと二人で、長野県佐久市の農家に住み込みで就労したことを語ることは、今の時代では、想像できず辛いことです。

幼い子どもが、働いて、家族を養うという事実、ましてそれが、戦争真っ最中の昭和19年から20年頃だと思えば、困難な時代に、自分を呪うこともできずに、ただひたすら働く以外に生きるすべがない世界が見えてきます。戦争が終わり、戦後の復興が叫ばれ、日本が大きく息を吹き返すまで、貴方は小諸に移り、その機会をうかがっていたのかも知れません。日本の繁栄のかすかな足音と同じくするように、貴方は上京し、バブル直前まで、建設の多くの現場に貴方の姿が見えるのでしょうか。それは、昭和40年代から50年代の、繁栄を続けることのきしみとしてあらわれた、蒸発という現象だったのでしょうか。もっとも、そのとき、貴方の家族がどうなっていたのか知るよしもありませんので、蒸発かどうかは、わかりません。貴方を捜す家族が、あったのか、無かったのか、一人で上京する意味が知れないのです。一人の男の軌跡としてなら、その軌跡を追う時間が私にはありません。貴方を思い出す人が、何処かにいるのだろうか。

昭和61年1月、私は、昭和39年に蒸発者した男性の葬儀をしたことがあります。葬儀を終えて火葬場で家族と話しをしたことがあります。七年間の蒸発だったのですが、家族が必死に探し果てた父は、警察に発見され、横浜の飯場での様子をこう語っていました。

「70歳に近い父の疲れ切った姿に、私達はまるで以前の父とは別人のように見え、声がでませんでした。ただ涙がほほをつたわり落ちたのをあぼえております。忘れようと思いましたが、忘れることは出来ません。けっして忘れは致しません」と。

「父が自宅に戻りましてしばらくは、7年間の疲れを癒すごとく、暖かな畳の上で床についており

ました。父は寡黙でございました。私達もいろいろと聴きたいこと、話して貰いたいことがたく
そんなのでございますが、多くは聞くことができませんでした。」

「それから十何年かがたちました、昨年の暮れの事でございます。父はいたって健康だったのでご
ざいですが、急に呼吸が苦しくなり入院することとなりました。何ですか肺に穴があいたんだそ
うです。今年に入りまして、医師より父がもう長くないことを知らされました。父は安らかに、
ほんとうに眠るように息が止まりました。父の最後の言葉が、私達の心を涙で濡らしました」。

「長いこと迷惑をかけたね。すまなかった、許しておくれ」。

その時の息子さん達の顔は、本当に優しさにみちあふれ、亡くなられたお父さんを慈愛で包まれ
ているように見えました。お父さんも、最後の言葉を、それこそはくまで苦しかっただろうと思
うのです。

家族がいれば、遺族がいれば、どんなにか貴方の心を癒すことができるか、貴方の最後に立ち会
って、貴方の旅立ちを送る私の無念な気持ちでもあります。

詳しく貴方を追いかけてみれば、貴方が、昭和56年に、胃の三分の二を切除したことと、昭和
58年には、足が悪くなり働けなくなることがわかりました。

昭和61年に中央区の福祉事務所で保護された時の年齢が、53才ですので、M園に入所するま
までの、9年間、貴方は、病院と保護を繰り返してきたのでしょうか。昭和56年からですと、14
年間になり、M園を入れると、22年間になります。おそらく、普通の人何倍かの苦勞を、苦痛
を自分に対して見つめ、歩んで来たことに、私は、驚きとともに、貴方の今のすべてに解放され
た安堵に慰められます。その安堵は、私がいなく安堵ですが、貴方の軌跡を受け止める私の務め
でもあります。

貴方の歩みに接し没入した、中央区の福祉事務所の係りの人が、心をわずらったと聞きましたが
、貴方のこの22年間は、善き人との出会いが多かったことを嬉しく思います。そして、心癒さ
れますが、じっと寡黙を通した貴方の最後だけが、やはり気がかりです。

他者とのかかわりの中で、見ようとすれば、見えてくる自分と他人。そこに言葉があれば、語り
出されるのです。貴方が、黙々と歩いてきたこと、多分その中で、そうすることで自分を見いだ
そうとして、いつしかホームレスになり、保護されたことで救われた、貴方の運命を思います。
そう思うことで、貴方が今行こうとする彼方に向かって、貴方を讃え、語ります。

萌和泥祥居士。これがすべての役目を終えた貴方に与える、私からの法号です。

貴方の両親は、貴方が生まれたとき、昭和の和に、善しを付して、貴方の誕生を祝い、前途を祝
しました。

人は、私は誰であり、私はなにか、私が私になることはと、他者のなかで行為することによって
表現いたします。その他者を泥として、自分がより生きるためには、その他者を滋味あふれるも
のとしなければ、自分は実りあるモノになれません。

自分がここにいるという事実は自分以外の人にとって何らかの意味がなければ、自分を実りある

モノにすることはできないでしょう。実りあるモノとは、支えられ支える関係のなかで、泥のなかでのたうちまわり和する行為のなかで、他者のなかに萌えいずるモノ、それこそが、各々の蓮華であり、自己ではないでしょうか。

生きる、その行為が、他者において萌えいずるのです。この行為は、良しとかワルというものではなく、ただひたすら生きる行為が他者との関係を造り上げ、綾をなして進みます。時間は、私は誰であり、なぜ私なのか、そして私が私になることの繰り返しのなかに誕生するでしょう。

泥になごみ、和して、誕生し萌えいずること、それこそが、ご両親の願った、善しという字であり、祥という、自分の生涯を全うしたしるしとして、萌和泥祥居士をつつしんで、貴方に捧げます。

禅は、築き上げてきた私の心を、幻想として、その私の心を開くことを願います。貴方の視線も、穏やかな視線となることを願ってやみません。

やっと、貴方に会えた気がいたします。ゆっくりとお休みください、私たちの彼方で。本当にお疲れ様でした。

(もし、この文章を読み、心当たりの方がおりましたら、また、時間が経ち、彼に会うことの気持ちが整理できるようになりましたら、どうぞ、陽岳寺にお参りを願います。)

妄想（平成10年8月2日）

夏で嫌いなことを上げろと言われれば、私はすぐにも熱帯夜の続く残暑を上げるだろう。暑く寝苦しい夏も、ようやく終わりきったかに見える。朝晩の風に過ごしやすさと、きっと山の方では秋の景色にさわやかな風が吹いているに違いない。

昨夜は、雨が少し降ったせいかな、ここ下町もひんやりとした空気にかわって、緑も生氣を取り戻したかに元気だ。

平成4年10月12日、午前11時頃だったか、自宅の電話がなった。

電話の中で、「福祉事務所のTと申しますけれど、〇〇番地〇号のMYさんのお宅で、近所の方が消毒液を散布したとかでえらく怒っているんですって。まことにすみませんが、ちょっと見て来てくれませんか」。

なんだか不思議な電話の中身だったので、「どうしたんですか」と尋ねてみると、Tさんは「きのうの夜、MYさんが警察のパトカーを呼んで、消毒液を撒かれて下水からその臭気が台所にはいって食事ができないって言うんですよ。そんなこと警察では対処できないって、今朝、警察から電話があったんですよ。そんなに臭いんですかね、ちょっと様子を見て来てくださいますか。」

私は、MYさんのことはそんなに知らない。そのお宅にMTさんという大正元年8月生まれのお年寄りの男性がいて、年に2回、区役所からの届け物を運ぶだけでした。その家族構成も全く知らないし、考えてみるとそのMTさんにお会いしたことはなく、いつも50歳ぐらいの色が白く笑顔が引きつったような息子さんだろうか、その方に託して、お元気ですかと問いかけ、安否をうかがうだけだったからです。

「承知しました。またご連絡いたします。」と、MYさん宅の回りを調べるために、福祉事務所のTさんの電話を切ったのでした。

町会の消毒撒きは7月だったし、なんだか訳の分からない内容に不審をいだきながらも、さっそく自転車に乗りMYさん宅の回り下水道溝を嗅ぎました。そんなに臭い消毒の匂いはないのです。自転車を止めて、下水道溝の穴に鼻をつけるとかすかに匂いました。

「はは一ん、これだな。しかしこれぐらいの匂いで何で。おかしいな」。

私は、MYさん宅の呼び鈴を押しました。留守だったのです。帰ろうとして近くの材木屋さんの所にさしかかりました。

材木屋のご主人を見かけたものでしたから、「昨日の夜、この辺でパトカー騒ぎなかった」と、尋ねました。「そういえば何か騒いでいたみたいだなあー」。礼を言い、私はやはり近くの町会長の家を訪ねました。

「いいところに来た。いやあ昨夜、MYとMTが酒飲んで親子ゲンカをして、MYの投げた仏壇の香炉がMTの手に当たったんだ。血を流してのケンカ仲裁で、パトカーは呼ぶしで大変だったんだ。なあに、発端は消毒液の匂いが下水から上がるからと、息子が食事が食べられないと騒ぐんで、親父がわざと撒いたわけではないからと、これぐらいは我慢できない匂いではないからと、こんなことぐらいで騒いでは村八分になってしまうからと言うんだ。それで親子ゲンカになってしまった。息子がパトカーを呼んで、その後、誰が撒いたんだと調べたら、2件先の警察の寮の奥さんが、前の生け垣に散歩の犬や野良猫が、糞やおしっこをするというんで、臭いで消毒乳液を撒いたんだな。いやあ、その奥さんたちに説明して、夜、バケツで何杯も水を撒いたんだよ。もう臭くはないよ。しょうがねえ奴だよ、親父がかわいそうだよ」。

福祉事務所の電話の話をすると、「そうかい、ああよかった、頼んだよ」と、「とにかく、MYさんとMTさんにあってみます」と言い、私は町会長宅を辞して自宅に帰ったのです。

寺に帰ると、「今、MYさんという人が来たわよ」と、「どんな感じだった」と私。「なにか落ち着きのない人みたい。目付きが怖いよう」と。

私は福祉事務所のTさんに電話をして、経過を報告すると共に、今後なにかご相談があるかもしれないからと言い、電話を切った。

「ちょっとまた行ってくる」。私は自転車に乗ってMYさんの家に出掛けました。

呼び鈴を押すと、しばらくしてMYさんがサッシ戸を少し明けて顔をだした。私は名乗って中にはいった。

「どうしたの」。彼は私の顔を見ずに、言葉を詰まらせながらも「親父が酒を飲んで暴れるし、村八分になっちゃうと騒ぐんです」。

彼の首のけい動脈のあたりが、ピクピクと痙攣するのを見ながら、「お父さんは。どうしたの」と私、「2階で寝ているんです。昨夜、遅くまで暴れていたものですから、それより臭くないですか」。彼は、玄関の脇の小窓を開けて、「ほら、匂うでしょ。台所の洗い場の穴から、臭いんですよ。意地悪ですよ。僕はこの匂いで食事もできないし、頭が痛くなりますよ」と、今度は外にでて、下水を指さし、「匂うでしょ」。「うーん」と私。彼のしぐさと話に何か違和感を感じた私は、「そういえば匂うかな。それでわねえ、福祉事務所のTさんという人がいるから相談してみたら」と、福祉事務所の場所を教えて別れた。

そのあと、私は自分の用事を終えて帰宅して、福祉事務所のTさんに電話をしたのです。

Tさんは電話にでるとすぐに、「来ましたよ」と、「エッ、もう来たのですか」と私。彼の行動の早さに驚いて、「それで、どんな相談だったのですか」

彼の相談の内容は、全く予想外の内容で唖然とした。

- (1) 夜中に風鈴を鳴らして邪魔をする。
- (2) 自転車のブレーキやペダルの音をだして、嫌がらせをする。
- (3) 夜中に大きな話し声がする。
- (4) 車のからぶかしと排気音とブレーキの音。

- (5) 玄関の扉が開くのだが、出て見ると誰もいない。
- (6) 玄関の呼び鈴が鳴るが、出て見ると誰もいない。
- (7) 朝、前のうちの人がガラス戸をバタバタさせる。
- (8) 外で口笛を吹く。
- (9) 夜中に誰かが歌をうたう。
- (10) 朝、近くの家の前まで掃除をするのだが、礼を言わずにかえってにらむ。
- (11) 消毒液の匂いがつよくて、じつは前の家のMKさんがそれらをやらせているんで、逮捕してくれないだろうかという内容だったのです。

翌日、考えたすえ、私はMKさんの家を訪ねました。2メートルぐらいの道路の、下町の軒を接しての住宅街に、噂はすぐに広まります。それは押さえなくてはなりません。また、どうやらたびたびのパトカー騒ぎだったようで近隣の恐怖感や、疎外をどうしたらよいのか、考えなくてはなりません。

近所の人達が、仮に彼が精神的な病気だったとしても、あたたかく見守ってくれるだろうか。私は、彼が逮捕してくれというMKさんに、それとなく注意をしてくれるようにとお願いすることにしました。

MKさんは、町会の副会長で温厚な人柄と実直な性格で、彼が言う人柄ではなく、私はMKさんに彼のお父さんの相談相手となって欲しかったのです。後に、そして今もMKさんは大変親身になって尽くしていただいております。

MKさんの口からいろいろな彼のこと、彼の父の話を聞くにつけ、私は彼に信頼され、心を開いてもらわなければならないと強く思うのでした。

その後、何度か彼を尋ねましたが、父親とは会えませんでした。ところが、偶然と路地で、買い物帰りの彼のお父さんに会ったのでした。

立ち話でしたが、昭和17年3月生まれの彼には友達がなく、彼が10年前タクシーの運転手をしていたとき、自動車に追突され、鞭打ち症になったこと。それで東大病院にかかっていたこと。

それ以後、仕事はしていないこと。父親は彼の変化に気付いて、病院に行けと言うのだが、彼がいっこうに行こうとしないこと。夜、かなりの酒を飲むこと。二人きりの生活に、会話があまりないこと。亡くなった彼の母親に精神障害があったこと。

彼には小さいころ妹がいたが、事情で養女にだし、恨んでいる彼女の手助けは当てにできないこと。彼の異変に周期があること。またその周期が早くなっているのではないかということ。長い時間をかけての立ち話に、次々と事実がはっきりと見えてきて、50歳の息子をかかえた80歳を過ぎた父親の顔は暗く、苦悩のしわがなんともつらい姿でした。

さらに、父親は、彼にしっかりしろと、仕事を探せ、病院に行けと強いるのです。彼の心は、言葉でその父親の思いを聞くことも跳ね返すこともできないし、さりとして父親と離れて暮らすことも出きないのです。どちらも痛ましい心なのだと、ただうなづいて聞くばかりでした。

別れぎわに、「早く病院に行ければいいですね。きっとよくなりますよ」。

そして、親しい近所の女医さんに相談したところ、「早々に専門家の診断を必要とするわね。被害妄想のけがあるから」と、いうことだったのです。「進んで悪くならなければいいけれど」

私には、彼の心が彼の意志とは反対に、「たすけてくれ」と、叫んでいるように聞こえるのです。あの行動の早さは、「どうにかして！」の電波発信ではないのだろうか。だが、彼の心は開かない。私は保健所の保健婦Iさんに相談しました。彼を行かせるので診て下さいと。

彼にそのことを告げに行くと、彼と父親が玄関で二人の男と口論しているのです。

保健所の衛生課の人で、もう10日もたっているのに、また消毒臭さの話しを必要にして、衛生課の人を閉口させているのです。私は説明をして、保健婦のIさんのところに診てもらうことになっているからと引きとってもらいました。

そして、翌日、彼は、保健所に行ったのです。

保健婦さんの話では、「やはり妄想のけがあるので早く診察してもらったほうがよいですね」とのこと、11月9日に保健所で精神科の先生の診察がありますのでとのこと、彼も、その日にくるからということでした。

その頃から、近所にこの話が広がり始めたのです。私はMKさんと二人で、あまり騒がないでくれと、彼は病気なのだからと、見守って見てあげて下さいと、説明にあたりました。若い女性、子供のいる家庭では、不安にかられたであろうことは否定できません。

また、彼が福祉事務所のTさんに言った、風鈴の件、MKさんのガラス戸の件、夜中の人声の話などを調べました。

風鈴をしまってもらったり、MKさんの娘さんの出勤時のガラス戸の開け閉め、風向きによって音が伝わってくることなど気が付いたのです。

幸い、彼は11月8日まで静かに、父親との生活を送っていたのです。

11月8日午前8時頃、MYさんの家に救急車が呼ばれ、タンカに運ばれる彼の姿があった。

クモ膜下出血であったと言う。

それから1週間後、11月16日、病院のベットのうえで、彼は、帰らぬ人となった。

平成10年夏、父親は元気に一人暮らしを続けている。もし、あの時、一週間はやく精神科のカウンセラーに診てもらっていたらと考えると、相談にのることの難しさを思います。

川（平成10年8月22日）

もうだいぶ前の話だが、東京が台風襲われたときだった。翌日は台風一過の快晴に恵まれた。翌日が快晴のほど、前夜の、前日の台風の激しさが嘘のように思われるが、各地の被害は、それが現実のすさまじさを増幅させる。午後、電話が鳴った。

「実は、昨晚母がサンダルのままいなくなって、いくら近所を探し回ってもいないのです。内のお婆さんがお参りに行っていないか、境内を見てくれませんか。」と、息子の奥さんの緊急の電話に、墓地と本堂の前をいそいで探して電話に、

「いません。心配ですね。もしいらしたら電話で連絡いたします」と、電話を切った。

それから、一ヶ月が過ぎた八月の初めだった。電話が鳴った。

「母が見つかりました。隅田川に死体が揚がったそうです」

それはこう言うことでした。一ヶ月前の嵐の夜、何かの用事でS婆さんはサンダル履きで外に出たのだった。彼女の家は保谷市の郊外で、宅地開発が徐々に進んだ雑草と宅地の混ざった街で、歩いて七、八分の所に小さな川が流れていた。その川にどうも転落したらしく、一ヶ月をかけて神田川を下り、隅田川に流れ着いたらしかった。八十一歳だった。

当時を振り返ってみても、保谷市に流れている小さな川が、どういうふうにして隅田川に繋がっているのか考えたことも、及びもつかなかった記憶がある。そして、葬儀のとき飯田橋より保谷市に向かう車中で、右に流れる神田川の水面を、この川をS婆さんはどんな思いで流れたのだろうか、深川近くまで川が運んでくれたのだろうかと思ふ不思議な思いで、見た。また、その小さな川は、一ヶ月たっても水の勢いは急だったこと、川沿いに葦やカヤが背丈を競いで伸びていたことを今でも覚えて、たまに神田川を通る時、ふとこの事件を思い出します。

S婆さんには三人のお子さんがいて、長男と姉妹だった。姉妹のうちの姉は家を飛び出て、行方が知れず、月島から保谷市に転居したものだから、お寺つきり姉との接点がないので、もし姉が墓参りに来たら妹が探しているからと、何度も何度も言われたものだった。

当時からすれば、隅田川も様変わりし、保谷市東伏見あたりもずいぶんかわっただろうが、人の記憶は当時の有りようを留めて、ふと、お姉さんは「どうしているのだろうか」と懐かしく思い出す。あれから十四年もたってしまうと、妹さんの家族もずいぶんと変化しただろう。

亡くなったS婆さん、姉妹に志賀直哉の言葉を贈る。

『人間ができて何千万年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生まれ、生き死んでいった。私もそのひとりとして生まれ、今生きているのだが、例えていえば悠々と流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は、後にも先にもこの私だけで、何万年さかのぼってもいず、何万年たっても再び生まれてはこないのだ。しかもなお、その私は依然として大河の一滴

にすぎない。それできしつかえないのだ』

風如（風のように）（平成10年6月18日）

昭和61年の正月も過ぎそろそろ2月に入ろうかという頃だった。ちょうど私が住職になった時より4、5年目の時だと思うのだが、定かではない。ヤスさんの兄貴が東京の清瀬市で亡くなったという知らせを聞き、ヤスさんの第二人で車で通夜に出かけた時があった。何でそんなことを覚えているのかというと、清瀬の夜の冷たい暗さと通夜会場の近くにあった公園の薄暗い街灯その街灯に照らし出される体格のいい三人の兄弟の姿が妙に記憶の中に残っているからだ。その筋の人に似てとは言わないが襟を立てた外套は、ボタンをかけずに両ポケットに手を突っ込み、くわえたタバコの灯りが街灯の電球に妙に寂しそうにとり、大男の背中の丸い後ろ姿がまるで古びた映画の中の景色に映ったからだった。

深川の漁師の家に生まれたヤスさんは、長距離のトラック運転手をしていて酒に喧嘩に、とにかく威勢はよかった。そういえば女性の話は聞いたことも無く、誰かと連れ立って歩いているのも見たことは無い。浮いた話はあったのか無かったのか知らぬが、晩年は確かに一人だった。思ったことをそのまま口に出すヤスさんの喧嘩はたえなかった。でも、菩提寺の住職である私に声をかける時は、妙にそわそわして正面を見ずに、早口でそそくさと用事を言い終わるとすばやくひるがえって帰っていった。そう言えばヤスさんはいつも雪駄をつっかけ履いていた。

得意の突っ張ってみてもしょうがない相手には、さっさと退散するのがヤスさんの得意手だったのだろうか。

そんなヤスさんが入院したという話を、弟のもと相撲取りの口から聞いた。病名は忘れてしまったが闘病生活は6年間にも及んだことは、今でもはっきり覚えている。ヤスさんが亡くなる5年前、寺のすぐそばの病院に引っ越してきた。そして亡くなる2年前だったか兄貴の七回忌法要に車椅子で参列した時のヤスさんの姿は今でも忘れない。髪は白く、病院やつれというのか肌は白く、ずいぶん小さくなってしまったもんだと、寂しく悲しく、人の移り変わりのさまをまざまざと見せられては愕然としたものだった。

平成6年12月21日ヤスさんは病院で静かに息をを引取った。元気だった頃のヤスさんには似ずに。

葬儀は盛大だった。深川で深浜を知らなければ、祭りを語る資格はない。それほど大きな神輿に浜の漁師たちの担ぎ方は荒っぽく、手ぬぐいはほっかむりで、半纏は鮮やかなあい色にひときわ目立つことが、担ぎ手の誇りを更に増長させる。何しろ町会という組織を持たぬ番外神輿だから、寄せ集めの担ぎ手はなおさらに結束が厚くなるのが不思議なもので、それが深川の深浜なのだ。ヤスさんはその深浜の一人だったのだ。深浜の仲間が青い半纏を身に纏って送りに来てくれた。

私はヤスさんにはちょっと難しいことばだったかも知れませんが、仏教での世界の有り様を説き、その後《お祭りが好きで、お酒のみで、短気で喧嘩ばやくて、気が小さくて照れ屋で、それでいて気が良くて、何とも忘れられない人でした》

《通夜告別式と大勢の人が貴方の6年間の闘病生活を忘れずにお別れに来てくれました。ヤスさんが元気だったころ、貴方は威勢が良く風を肩で切って本当に大きく見えました。ですがヤスさんは病院で普通の人は何十年とかかって年老いていくのを、6年間の月日で一気に年老いてくれました。太くて短かった人生、64年の生涯だったのですね。今思うといかにもヤスさんらしいと思うのです。ヤスさんは風のように過ぎ去っていった。せい一杯生きるということは、人生の蓄積に対してではなく様々な時によどみなく生きているということに違いない。今度はお父さんお母さんが兄貴たちのいる世界で仲良く過ごすといいですね。喧嘩はだめですよ。あとに残りヤスさんを送る我々も、いずれは貴方の後を追います。

今日、貴方は肉身を転じて佛界に入るため、長く目を閉じてしまった。貴方の姿はもう目にすることはできないが、目を閉じればそれぞれの人達の心の中に、一瞬一瞬のなかに、ヤスさんは永遠として生き続けることになります》

深浜の仲間が嗚咽をこらえて耐える姿がなんとも印象に残った葬儀でした。どんなに気丈な心をもった人でも悲しいときは悲しさになりきる、それが人の道ということなのです。

追悼（平成10年5月27日）

昭和五十七年十一月十一日、私は用事で八王子の姉の所に外出していた。母からの突然の電話だった。父が倒れたという知らせだった。その時、身体中の血がずっと下がっていくのがわかった。幸い家の近くに住む、すぐ上の姉とその連れ合いが駆け付け、そっと横たえ医者にも連絡する処置をしてくれた御蔭で、私が帰った時には、落ち着いて眠っていた。医者は「心配ありません。様子を見て、変化があったら電話をしてください。」と、足早に帰っていったそうだ。それは始めに動脈硬化に似た発作で、風呂上がりのたちくらみに似て貧血を起こしたようだった。私達には暗い影のようなものが走ったかのような感じだった。この発作に似たものは、軽かったが十二月にも一回起きた。だが、それ以外の父の様子は、私達にすこぶる元気に映っていた。また、父自身もすこぶる忙しい毎日を送っていたのだった。

恐らくこの頃より父の体の中では、何かしらの異変が起きていたのだろう。父もこのことに気付いていたのではなかったか。私達には、寡黙な父だった。残念なことに、家族はいまだ気付いていなかった。

そのころ父はかかりつけの医者にも、動脈硬化と軽い糖尿があると診断され、毎日三度の薬を飲んでいました。

翌年五十八年の正月二日、父に変化が起きた。母と参賀に行こうとしたとき、歩けなくなったのだ。はっきりと、父の病魔が姿を現したのだった。本当に突然だった。この時の母の気持ちは複雑だった。暗闇で誰かに押されるというのは、こういう時のことを言うのだろう。だが、母は、父が亡くなるまで誰かに押されていたのではなかったろうか。また、それは私にとっても、違う誰かに押されていたのだと、今、振り返って見ると思うのだった。

父は歩くのに、初めは少し前かがみになり、歩幅が狭く、歩き出すと止まらなくなるふうになった。時は容赦なく過ぎて行き、母と私達は、その時というものに追い付こうと必死だった。私達は父に杖を使うようにと、注意した。父は、そう言うと厭な顔をした。父は、私達の言葉を無視して、自分から進んで散歩に行った。

四月十五日より二ヶ月後の精密検査によって、父の診断が下った。『パーキンソン症候群』それは聞きなれない言葉であり、同時に受け入れることの出来ない響きを持った言葉でもあった。誰もがそう思うごとく、「治してやりたい」と思い、また、「そうしなければ」と思った。だが、その時父の身体は、深く病魔に犯されていたのだと思う。父もそのことに気付いていた。

このころより、母は、日々の父の様子や出来事を克明に、日記につけはじめた。それは、激しく過ぎていく父の思い出をつなぎ止めることに似て、父の中にいる病魔との戦いであった。

母の五月の日記の中に、この頃では珍しく強い字の父のメモがある。それは、ニューヨーク・カット・ステーキと書かれた広告のコピーで『昨日を思ひ懇ひ煩わず、昨日を憂わず、今日を清く生きよ』書いてある。父のせい一杯の気持ちを、このコピーに仕立てて表したものが、胸が熱くなる。家族との会話がとだえ始めるのも、この頃だった。また、父は病魔に犯された自分を、他人に見せることを嫌った。

六月、千葉県船橋にいた父の義兄が亡くなった。父と義兄とは、囲碁相手でもあり、また話し相手でもあった。よく義兄が遊びに来ると、ひがな一日、碁をしたりビールを飲んで過ごし帰って行った。父もそれと同じことを、船橋でしたことだろう。

晴れた良い天気の日であった。父より六歳年上の鎌倉の兄夫婦と一緒に掛けたのだった。年寄り四名を車に乗せて行ったのだが、大変と気を使ったのを思い出す。ちょうど今から十五年前のことだ。

通夜、告別式と二日間に亙っての式に参列し、どうやら無事にお弔いを終えての帰り、

「義兄の死をいたはり呉るる点滅か黒々と更くる夜のラ・ラポート」と歌った。

それは湾岸道路沿いの広大な船橋ヘルスセンター跡地に、東洋で最大と銘打って出現した、ショッピングセンターのシンボルトワーのきらめきを、目にした時の歌だった。私が幼いとき、父に連れられ、水が怖くて泣き、父の胸にすがり突いたことがある海辺でもあった。

「後ろより突き飛ばされし如くなる廻りに騒に声かくる人ら」

「子に孫に伝はる病ひと知らされてよりかへり見る健康体なり」

今、父の残したノートを見ると、このころ、はっきりと書体が以前と変わっているのが分かり、父の動揺が伝わってくる。「糖尿への経料」、「病名開眼」などと書かれ、その上に無造作な斜線が引かれているのを見ると、痛ましく揺れる父の心が間近に迫ってくる。

十一月、父の古い友人だろうか、死去と書いてある。父はもう歌が作れなくなっていたのではないだろうか。作ろうと思っても、作れない。父の残したノートには、たくさんの朱線の跡があり、斜線の跡がある。

「大阪の友喪ひし日昏なりわが義兄死にし」

やっとなのおもいで出来た歌に、父の思いを巡らせてみると、痛ましい。だがこれから、より以上に辛い日々が続こうとは誰も想像できなかった。

「葉り飲めば直る病ひと聞かされて暗に直ると自ら治む」

この歌が父の最後の歌だろうか。いつごろの歌だか分からないのだが、とにかくこの後のノートには、白紙がいつまでも続いている。十月六日、朝、父の兄が亡くなる。兄が病床に就いて、私達は一回の見舞いを除いて、なるべく伝えることを避けていた。父と母を車に乗せて、鎌倉に弔問に出掛けた時の事は、消えない思い出となり、母と私の脳裏に強く焼き付いている。冷たくなった兄の枕辺に、父が両手をつき、無言にうなだれていた姿を。先に旅立った兄を前に、父は何を思い、何を伝え、何を願ったのか、今は知るよしもない。ただ、時間の止まったその光景だけが、はっきりと残った。

父は長い下り坂を、一人転げ落ちているかのように、時折、手を差し延べた。母はそっと手を取り、いつまでもさすっていた。遠くを、じっと見詰めている時があった。そんな時、母は一緒に黙って遠くを見詰めた。母は父のことを、まるで子供のようだといいた。それでも時は、悪く過ぎて行った。

昭和六十年三月十六日、父にとっては内孫の、私にとっては初の男の子が生まれた。それは赤ら顔でしわのある四〇〇〇グラムを越えた大きな子だった。早く父に見せたかった。そして抱いてもらいたかった。病院から長男真人(まひと)が母子共に退院したその日、父に報告し、私の妻が産衣にくるまれた赤子をそっと父の前に差し出すと、父の顔が穏やかになり、両手をさしのばす。私は母がするごとく、赤子を抱いた父の肩に手を添え、その父を抱いた。

七月十四日、父が入院した。昨日からの熱でグーグーといびきをかいて眠る。肺炎を起こしたのだ。母が動揺している。この夏は暑かった。

翌年の昭和六十一年八月十二日、零時六分、父が母に見守られて、その腕の中で息を引き取った。父の生涯が終わったのだ。

受容（平成10年6月18日）

平成十年元日午後一時四十九分、家族に見守られてAさんちのT大婆さんが江東区内の病院で静かに息を引き取りました。家族の悲しみはわかっていたことですが、やはり悲しいことでした。T大婆さんの96年という気の遠くなるほどの生涯を思うにつけ、T婆さんが居なくなったんだという事実を受け入れる作業が、家族にとってみれば最初の作業です。病院からの帰宅は沈黙の帰省です。これから数日間の日常の起こるであろう変化を、家族一人一人が自分の役割を沈黙のうちに確認しなければならないのだし、この数日間がどう過ぎていくのかと漠然と想像するのが死者との道行きです。そこが死者と生きている家族の大きな違いです。帰省した家族は、大婆さんが死んだという確認の儀式を親しい近親者に知らせて執り行います。それが枕経という儀式です。

小さな祭壇の前に布団を敷いて、眠るが如くに在る大婆さんを前に、中婆さんが唇を濡らし薄く紅を塗り、髪に櫛を指します。70年近く一緒に暮らしていたことを事実としてすべて想像し語り尽くすことは出来ないが、ただ70年という数字の重みを人は思わなければならない。声無き声を聞くことが、仏教のあるいは人として大切な思いやりの原点としたら、人のうめきをそっくり受け入れよう。

T婆さんは96歳で亡くなりましたが、88歳の時道路で転倒して車に両足の先を轢かれたことがありました。3ヶ月あまりの入院でしたが、複雑骨折は見事に治りまたいつもの通りに杖で歩く姿を見ることができるようになりました。腰を直角に折りゆっくりと歩く姿は、重い荷物を背負う姿に違いないと見せてくれました。その姿で自分の育った環境、戦後の深川での事、ご主人との別れ、引越し、仕事のこと、家族のことを話す声は力強く、小さな目は皺でさらに細くなってはいました眼光は光って人を見ぬく鋭さはちっとも衰えてはいないのが不思議に思えたものでした。

やがて白内障で目が悪くなりますと、その頃口からでる言葉は、「年のせいで手術をしてくれないのが、悔しくてしょうがない」という言葉でした。明治生まれの家族を背負って生きてきた彼女の言葉は、烈しく強いものでした。

亡くなる2年前のことです。風邪をこじらせて入院したことがありました。「お婆ちゃんが危ない」との知らせに病院に見舞いに行ったことがありました。「和尚さんがお見舞いにきてくれましたよ」と耳元で叫ぶ中婆さんの声に、大婆さんは目を開けました。ナースセンターの隣の個室に彼女は中婆さんに付き添われ細いビニール管を体に何本もつけ横たわる姿は痛ましく、つい昨日まで元気だった彼女の姿と程遠く、近くまで死が近づいていることを思いましたが、「有難

うございます」と握手した彼女の力は強く、「私は、こんなに元気です」と人に訴える指の力は、まだまだ元気だ！大した物だ！さすがに怪物だ！と驚いたものです。「和尚さんが見舞いにきてくれて、アタシは死んでもまだ死にきれない」。彼女の生命はまだまだ元気で、死への準備はとうぶん先のことのように見えたものでした。

そんな彼女が一週間ぐらいして退院したとの知らせに、ただ” 凄い” の一言でした。やがて、散歩の機会は少なく重い荷物を背負う姿はあまり見えなくなりまして、だんだんと家に居る機会のほうが多くなってまいりました。その頃からです、彼女の心に変化が少しずつ出てきましたのは。「有難う」「すまないねーっ」。

人は年をとり、自分で自分のことが出来なくなることが必ずきます。徐々に人の世話になって行かなければ人は生きていくことができないと、その事実を受け入れるという繰り返しの作業の中で同時に近づいてくる自分の死を少しずつ予感し、また受け入れるという作業を繰り返します。自分の葬式は自分で出来ないの通り、このことも人の最後の受け入れるという儀式であると思うのです。

去年の12月末、「危ないんです」との中婆さんの知らせに、私は「おばあちゃん変わりましたか」と聞いてみました。その返事は「有難うと私を拝むんですよ」とのことでした。お婆ちゃんがよい正月を迎えられますよう、私は真っ赤な小さな達磨を「枕元に飾ってください」託しました。「お婆ちゃんが亡くなりました。和尚さんに頂いた達磨を胸に放さず、看護婦さんは真っ赤なリンゴと間違えて取り上げようとしたんですが、お婆ちゃんは胸に放さず、眠るように息をひきとりました。本当によい死に方でした。1月1日午後1時49分でした」。

蒸発

もうだいぶ前のことです。ある葬儀を頼まれまして(昭和60年1月)東武線の北千住の先の草加に出掛けて行った時の話しです。

亡くなられた御主人は83歳でした。前年の暮れより容態が悪化しまして、奥さんと息子さんたち四人に見守られるうち、安らかに天寿をまっとうしたとのことでした。生前のご主人は、熟練の機械工でいわゆる職人氣質で気むずかしく、頑固な性格だったようであります。

告別式を終えまして、火葬場で荼毘にふされるのを待っている間、遺影を前にしまして三人の息子さんたちとお話を致しておりました。

「母も私達も亡くなった父には随分と苦勞をかけられました。けっして幸福とはいえませんでした。今でもその頃の事を忘れることはできません。父はもと深川(江東区)で、小さな町工場を経営していたのですが、失敗しまして草加に引っ越してまいりました。それからというものの仕事に出では人と折り合いがうまくゆかなかったり、何か気に入くない事があったりで、家に居て独りふさぎこんでいます日がおおくなりました。

豊かだったというわけではありませんが、いっそう家計は苦しくなりまして、長男である私が大手の電気会社の下請け工場に勤めに出ることになりました。きっと父もくるしかったのでしょう。その頃の父の心は、仕事の失敗とそれでも家族を養って行かなければならぬ負担で、いっそう暗い気持ちになっていたのではないのでしょうか。弱かったんですね。でも、もし深川でつまづかなかったら、こんなことにはならなかったでしょう……」。

「昭和三九年東京オリンピックの開かれまして夏の事でした。父が62歳の、暑い日だったのをおぼえております。新幹線ができ、高速道路ができ、世間では景気がよく浮かれておりました。そんな日のことでした、父が居なくなったのです。まったく突然のことでした。

今思い出しましても、何て父親だろうと憎みながら、ただオロオロとうろたえていたのをおぼえております。その時の気持ちは、全くどうお話ししていいのかわかりません。それから七年間、父の姿を見ることはなかったのです。

警察に捜索願いを出したものの、じっと待っている事ができません、母と都内の飯場を探し、神奈川、千葉、埼玉の飯場を探し続けました。休日には盛り場という盛り場を、足を棒にして何処かでふっと会えることを夢見て、歩きつづけました。仕事から帰ってくる途中、ひょっとして父が帰ってきて居るのではないかと、玄関に入ると父が居るような気がしてみたり、父が帰ってきても家に絶対上げるものかと腹をたてたり、母の為なんとしても無事に帰ってきてくれと願いました」。

「それから7年間近い歳月が立ちました冬のある日、お宅のご主人が横浜の飯場に居るようだ、行って確認してもらいたいと、警察より連絡がございました。私共は直ぐに横浜にまいりました。父が居ました。薄汚れた、暗くじめじめして、体臭で酸っぱい臭いのする、平屋建てのプレハブを二段に仕切った1階の奥に、これも垢で黒光りする薄っぺらな布団にくるまって横になっていたのをございます。70歳に近い父の疲れ切った姿に、私達はまるで以前の父とは別人のように見え、声がでませんでした。ただ涙がほほをつたわり落ちたのをあぼえております。忘れようと思いついても、忘れることは出来ません。けっして忘れは致しません」。

「父が自宅に戻りましてしばらくは、7年間の疲れを癒すごとく、暖かな畳の上で床についておりました。7年の間に、次男、三男も勤めに出るようになっておりましたので、家計の方も随分と楽になっておりました。ですけれど父は寡黙でございました。私達もいろいろと聴きたいこと、話して貰いたいことがたくそんあったのをございます。多くは聞くことができませんでした。」

「それから十何年かがたちました、昨年暮れの事でございます。父はいたって健康だったのでございますが、急に呼吸が苦しくなり入院することとなりました。何ですか肺に穴があいたんだそうです。今年に入りまして、医師より父がもう長くないことを知らされました。父は安らかに、ほんとうに眠るように息が止まりました。父の最後の言葉が、私達の心を涙で濡らしました」。

「長いこと迷惑をかけたね。すまなかった、許しておくれ」。

その時の息子さん達の顔は、本当に優しさにみちあふれ、亡くなられたお父さんを慈愛で包まれているように見えました。ですがお父さんはどうだったのでしょうか。最後の言葉を、それこそはくまで苦しかっただろうと思うのです。

臨終（平成10年6月8日）

臨終（平成10年6月8日）

平成7年7月12日前2時35分、深川は福住町のとあるマンションの一室で、キクおばあちゃんが95年という永い命の時間に疲れたのでしょう、静かに本当に静かに消えるように息を引き取りました。

明治、大正、昭和、平成と随分長かった婦人の命でした。長かったが故に、今、思い残す事もなく、おだやかに死を迎えられたのだと思います。思えば、日本が戦争という暗い時代に突入した時代、困難な戦後を含めて、言い尽くせるものではありませんが、良いも悪いも、さまざまの事件がありました。

婦人は明治三十三年四月二十八日、岐阜でうまれました。大正大震災前、上京し水道橋の産婆学校に入学、卒業し、同十三年、UK氏と深川は永代で結婚し、二男一女の母となりました。また助産婦として取り上げた、数え切れぬほどの小さな生命は5、000人に達すると言われます。この子供達もやがて成長し、そして婦人を大きく、大きく成長させたのでした。体は小さくとも、それこそ大きな人でした。昭和四十四年三月二十四日、夫UK氏との別れ、娘A子さんの夫との別れ。悲しいこともたくさんありました。良いこともたくさんありました。それについても、婦人の笑顔が今でもはきつりと目に浮かびます。何とも忘れられない人でした。

亡くなった前日、午後8時、私はあなたの様態が危ないとの知らせを、息子さんや娘さんから電話を受け、あなたの居るマンションへと急ぎました。玄関を開けてまっすぐにあなたが横たわる部屋にと急ぎました。あなたは酸素吸入をされながらベッドに横たわり、荒い息をして横たわっておりました。家族の導かれるままに、私はあなたが横たわるベッドの傍らに座り、あなたの手を握り締めました。手はほんのりと温かくあなたの意思が指に伝わるのを感じました。そしてあなたの足をさすろうとした時、あなたの足はすでに冷たく、すでに死期が近づいている事をしりました。あなたの息は荒く、やがて静かに、そして、少しずつ冷たさが、あなたの心臓を目指して這い上がろうとするかのように、息はまた荒く、そして静かに、死は、体の抹消の部分より、ゆっくりと確実に間隔をせばめて近づいてくるのを見るおもいでした。私は、死を受容し、自らの肉体が最後の炎となって燃え尽きるのを待つかごとくの姿を見て、感動したと同時に、「頑張って」と、心のなかであなたにエールを送りました。「これこそが、天より与えられた人としての時間を最後まで完全燃焼した 姿なのだと」。

人間として、僧侶として、人間の尊厳をしかと確かめた思いです。

さて、我々が生きる世界の延長として死後の世界が存在するとしたならば、旅立ちと言えばよいのか、帰ると言えばよいのか。今、婦人が行こうとする世界。それは、もしかすると、生まれる前の世界であり、私たちの現実に生きている瞬間という、つかまえることの難しい時の狭間の世界なのかも知れません。いづれにしても、私たちが覆う大きな大きな命の渦の中に旅立って行き

ます。その場所で、婦人は、私たちと、同時に生きるとするなら、婦人は、気ままに季節の飾られた花々に成り、風になり、その風に舞う花びらになり、雲になり、空になることができるでしょう。

七月十三日、四ツ木火葬場にて、近親者に見守られて茶毘にふされされました。

旅立ちの扉は婦人の肉体が火葬場にて炎の中をくぐり抜けていくことから始まりました。きっと婦人は、勇気を持って平然と炎の中をくぐり抜けていきましたに違いありません。それは、現実の世界で遭遇する苦悩、怒り、まよいという炎の中を、勇気をもって平然とくぐり抜けて行く婦人の姿と違いありません。思い起こせば婦人が歩いた九十五年という長い年月そのものが炎でありました。そして、この世での最後の別れが、最後の炎のなかをくぐり抜けることのような気がするのです。

>後に残り婦人を送る我々も、いずれは婦人の後を追います。婦人の姿はもう目にすることはできませんが、目を閉じればそれぞれの人達の心の中に、我々の一瞬一瞬のなかに、婦人は永遠として今を生き続けることにります。

外道

毎年5月の第4土曜日は、私の寺のお施餓鬼で、今年は、平成14年5月25日でした。

お経が終わって、帰りしな、Sさんの息子さんから、

「和尚、少し宜しいですか。実は、弟が亡くなりまして、戒名を頂戴できないでしょうか。そして、父の墓に埋葬したいと思うのですが、今日はお忙しいようなので後日ご相談したいと思っておりますので、いつ窺ったら宜しいでしょうか。」と、持ちかけられました。

私は、少し深刻な内容そうでしたので、

「それでは、月曜日ではいかがでしょうかと。」約束し、彼は帰って行きました。

日曜日に、再度彼から電話があり、月曜日の午後に、彼は三多摩の郊外から車でやってきたのです。

彼の話は、故郷四国に住む父母の状態と、弟の家族のことを実情、そして、今の自分の現状と将来に渡って、真摯に語ってくれました。

それにしても、5月13日、耐えきれない頭痛に救急車で搬送され、翌日には不帰の人となった弟への厚い思慕に似た兄の思いは、ただ一つ、弟の妻への許し難い憤りに近いものからおこされたものだったのでしょう。

私は、詳しくは聞かなかったものの、弟の残された家族から、遺骨を取り上げることの毅然とした彼の態度に、誠実な彼の人柄を感じ、すべてを自分の責任で決行する強い意志を認めました。老いた両親を四国に残し、東京で独立して、側に引き取りたいものの、長年住み着いた地を離れることを考えると、それが出来ないもどかしさが伝わって来ます。将来、いずれは東京に引き取ることに決心は付いても、今はその時期ではないことを知っての彼なのです。どう応援し、彼に報いることは、私の努めでもあります。

秀才だった弟さんも、50歳で大手の会社からリストラなのではないでしょうか、子会社に配属され、半年以上に渡って、12時間労働を強いられ働きづめだったと言います。兄が4月に会ったとき、弟さんは、白血病に犯され体力が落ちながらも、まだ大丈夫と働いていたのです。過労死というSさんの話を伺っていて、弟さんの内心は、自分の気力や体力がそろそろ限界に達して、壊れそうな予感を持ちながらも、もう少し大丈夫と、自分で体の変調を先に延ばしていたことを知りました。そして、倒れる以前の数日は、頭痛やめまいがしていたと言います。弟の奥さんは、Eと言う宗教に勧誘され入信し、外出気味であり、そのことにも悩んでいたとも言います。弟さんは、外にも内にも、多くの逼迫する懸念を抱えていたと言えるのです。二人の息子さんは、一人は成人し社会人となり、もう一人は、高校生と聞きました。

彼の気持ちに答えて、この寺の墓地に、彼の遺骨を迎え入れることを賛同して、私は、弟さんが

倒れる前日まで必死に気を張って自分を保っていたことは、何を意味するのか、考えられずには
いられませんでした。自己の免疫を保てない白血病の発症を知ったときの葛藤は、自分の将来に
不安を投げかけるものです。頭痛が激しく我慢が出来なくなるまで、少なくともその信号は何回
もあったはずですが、そのことを自分で処理していたと知ると、家族は父親という命の何を見て
いたのだろうかという疑問を持ちました。

14日に弟さんが死亡して、仏式で、葬儀をしたと聞きました。父親に秘めてした葬儀に、弟の
妻は、「別れの儀式は、私の信ずる宗教の宗旨に合わなく、神様の天国で、私が、天に召された
ときに、再会できるから」と、積極的ではなかった。意味のないものの葬儀を取り仕切ったのは
、兄であるSでありました。

葬儀が終わって、遺骨を、弟の家でなく、彼の両親がいる家の仏壇の側に安置したとき、老いて
痴呆が進んだ父親は、遺骨を抱いて泣き出したという。私は、老いて父親の泣くその姿を想い、
老いた上に、更に自分の命の未来までも奪い取られるかのような、この残酷さの事態に、自分の
一部をもぎ取られる老父の表現を、その妻は見たのだろうかと思った。もっとも、翌日には、こ
うしたことさえも忘れてしまった父親のことを聞き、安堵したと同時に、人生の絶妙な不思議に
感心したのです。

弟の妻が、次の世界で出会うとしても、この世に残された人間にとっては、明日を知らない命で
はありますが、20年生きたとして、その20年の後は、姿形・意識も変化していることになり
ます。今、悲しみ、致し方なく別れることこそ、自分自身を直下に見ることであり、誠実に自分
の今を表現することに気がつかないことに、憤りを持ちます。また、同時に、マインドコントロ
ールというのでしょうか、人は、観念に縛られると、その観念にしがみついてぎこちない動きが
、周囲を困惑させます。外の世界を見ようとしない、逼り空間に暮らし、集団のイメージだけを
鋭く追い求める行為は、人間の持つ自然な情感をも痛めてしまうことを知ります。後悔もするこ
となく、ただひたすらに教義を追い求めて、その教義に沿わないものは受け入れることが出来
なく、矛盾を矛盾として教義に照らして認めないEの宗教は、人として踏みはずす道でもあります
。

馬祖の残された言葉に、『即心即仏（そくしんそくぶつ）』がります。心とは、喜怒哀楽愛悪
欲（きどあいらくあいおよく）の七情の表現を持って示すことができますし、仏を、単純にホッ
とした状態と置き換えてみますと、『即喜怒哀楽愛悪欲、即ホッとした状態』となります。その
逆から見てまいりますと『即ホッとした状態、即喜怒哀楽愛悪欲』です。微妙なニュアンスが理
解できると思うのですが、「身は社、心の神を持ちながら、よそを願うぞ愚かなりけり」の句の
、心の神を仏に、自分自身の喜怒哀楽愛悪欲にいたたまれず、救いや癒しを求めてかけずり回
ることは、私たちの日常の姿なのですが、先ずはそのことに気付くことが必要なのでしょう。あく
までも、自分の心の変化に気付くことがひつようです。禅が日常の生活を一步離れたら、禅では
ないことは、禅とは心そのものだからです。

繰り返すことの出来ない人間の一生であるが故に、今を大切にしないで、再会も別れもないではないですか。世界が悲しみに溢れ、自分自身に降りかかった不幸なことを真っ正面から受け止めることが、亡くなった者への最高の哀悼の意味があります。 全身で泣かなくて、それ以上のもっと大きな命が世界には在るなどと、親しく過ごして夫が持っていた一つの大きな世界が消滅したことは、夫にとっては、比較できる以上の命を亡くしたことになるのです。それにしても、弟さんの51歳という年齢の全身に、アクセルを踏み放しの末期が気の毒で、惜しまれます。

弟さんの、相談し、受け止めて、判断し、実行をうながすことを、胸に収めてひた走りしていた行為に、弟さんの強靱な精神の強さと、度量の広さが見受けられます。そこから、責任感も見えてきますし、子ども達が巣立った後の、将来の葛藤も見えますが、全身で主張していたことは、受け入れていたことの実事なのでしょう。

障子（平成13年3月10日）

嬉しいことがあると、そのことのために何かしたいと思うものだ。

平成13年早々、Aさんから電話があった。

「和尚さん、息子が結婚することになりました、3月の16日ですけれど、九州から親戚が大勢来ることになったのですが、ついでに、未だお詣りしていない人がいるものですから、羽田からバスで10時半頃になろうかと存じますが、本堂でお経をお願いし、お話を少ししてください。そうして、お墓参りをして、息子の結婚式に臨みたいと思うのですが、いかがでしょうか？」と。

おめでとうございます。嬉しいことです。有り難うございます。」

私は、このことが、寺にとって、滅多にあるものではないことに思い当たると、どんな風にしたらよいだろうかと考えた。結婚式と法事とは、お目出度とお弔いと対すれば、真っ向正反対の内容でありましょう。しかし、結婚が新しい家族の出発点とすれば、今まで自分が所属していた家族を支えていた故人に感謝をすることは、ましてその墓に実の父親が眠っていることを思えば、正当なことであり、結婚にこそ似つかわしい仏事でもあります。

式の内容と、回向を作りなおすことを考えたが、先ずは、本当のところは、畳を新しくしたいのですが、なかなか出来ません。そこで、私は障子を貼り替えることにした。

障子紙を剥がすと、そこには、黒く焦げた焼け跡があります。先代も先々代もその先代も、この障子を新品にしなかった。今も、この焼け跡を残しているのですが、焼け跡は無惨でもなく、懐かしい気がするし、この寺の誇りでもあるからです。

張替は、糊の乗りが悪いと、洒落で言っているわけではないが、張りづらいこと甚だしい。この焼け跡のことを実際に知るものにとっては、悲惨な記憶でもあるのですが、既に50年以上も経ってしまえば、懐かしいことでもあるのでしょうか。しかし、50年経っても終わらないことが、この国には多くあります。

昭和20年の3月10日、この当たり一帯は、火の海となり、陽岳寺の庫裡は消失した。しかし、本堂だけはからくも残りました。幾度となく繰り返した災害の、大正年間の黒江町火事、大震災と火災に遭い、もうこりごりと本堂を鉄骨鉄筋コンクリートにした智慧でもあったのです。災害に備えて窓は小さく、屋根を張り出した本堂は、昭和の5年頃立ち上がったと言います。それから15年が経ち、もう一度火に囲まれるとは、しかも焼夷弾の雨の中に立ちつくすとは、誰ひとり考えられなかったことだと思えます。

庫裡に飛び移った火は、本堂の鉄の扉を溶かし、中に進入いたしました。先々代達と避難した人達が必死で水を掛け助かったと伝えられています。一昼夜燃えていたのですから、窓の外は、火車で、ガラスを等して障子を焦がしていたということでした。本堂の畳廊下の天井も黒く焼けこげ。柱や梁も黒く燻った痕を、今も残しています。

戦後は、辺り一帯焼け野原で、高い建物は崩れ、本堂だけがポツンと建っていたと言います。仏教界は、この本堂を拠点として、葬儀や戦災殉難者や戦没者の慰霊、法事に、被災者の住まいとして使われていました。語り継がなければ忘れられてしまう記憶を、この障子が憶えていてくれるからこそ、残していこうと考えます。

本堂で執り行われる結婚式を控えての法事、あらゆる法事も、ちっぽけで大きな些細な刻んでいる歴史が支えているとも言えないでしょうか。

日月（にちげつ）

人が亡くなって、亡くなった後の名前をつけることに、違和感を持ち始めて、もう随分と時間がたちます。そう思い言いながらも、その間に、何人もの名前をつけたことでしょう。初めは多くのことを考えながらつけたものです。でも、いつしか必ずと言ってよいほどに、亡くなった人の生前の名前はどうかっただろうかと思いはせるようになりました。うかがい知れない名前を前にして、生まれた名前を浮かべることで、亡くなった後の名前が次の世代に引き継がれるという作業の連続の中に、人は命を繋いでいることを意識し始めたのです。

この花の下に、この木の下に、この石の下に、この海の何処かにと、埋もれて記憶の中に収まることと、位牌の中に死後の名が刻まれ手を合わせることは、偲ぶ中に、残された私たちの永続性を発見するものです。亡くなった者の写真や遺品を、残された家族の家に飾ることも、残された者の、今を生きるあかしです。

平成15年6月15日（日）朝、M氏から訃報を聞かされたとき、M氏に弟さんがいたことなど何も知らず、まったくに突然のことでした。月に一、二回と一人暮らしの明（これは実名です。文章の関係上掲載することをお許し下さい）氏を通して様子を見る姉とM氏の動揺が伝わって来ました。しかも亡くなって、15日間も経っていたからでもあります。誰も攻めることはできないことに、心が悔やまれますが、これは、結果として、哀しく寂しいものですが、明氏が旅立つことによって、あとを守っている兄弟姉妹の心の潤いと豊かさを、明氏自身が与えようとする試みなのかもしれません。寂しいし、哀しいし、齒がゆいし、だけれども、どうすることもできない明氏の重みです。

受話器に耳をあて、亡くなった状況に不憫さがわくものの、それでも思いを馳せて明氏の死を、どう考えればよいものかと、そして、法号にどう表現するかを考えます。もちろん、この法号を目にして気に入ってもらわなければとも思いますし、将来にわたって、仏壇に安置して合掌し接するとき、拝む人の心の成長に合わせて変化しながらも変わらぬ名が付けられればと考えます。

長いこと墓守りをしていると、ごく普通の言葉に、思いがけないことの意味をかぎつけ驚くことがあります。そして、こうした言葉の意味を味わっていると、何故か楽しくなります。人々は生活の中に区切りとして、いろいろな意味を含んで言葉を使っているものの、そのうかがい知れない時代を超えて共通した言葉に、『日月（にちげつ）』があります。

日居月諸 胡迭而微 ～ 日や月や なんぞ迭（たが）ひにして微（か）くる 居と諸は、日よ月よと強調する助詞であり、欠けることのない太陽と月の日食月食の現象に、日月さえもつねに安定したしたものではないと。日が月がと欠けることに、詩経では、男性や女性の心の変わり様

を歌います。そこに見るものの心が加われば、日月という同じ刻む歩みに、過ぎ去った日々あるいはその日々の出来事や事物が、また来ようとする日々やその日々の理想や願望が表現されます。日よ月よと歌って、父よ母よ、恋人よ、若かった頃の自分よと意味を持つ言葉になる、それが日月です。

また、日月は、昼と夜に、明と暗に、日が主なのか、月が主なのか、明が主なのか、暗が主なのか、明があるから暗があるのか、本来は暗なのに、闇が明に照らされて明るくなるのか、日を灯すことにより暗がなくなるのか、明が暗闇に閉ざされて漆黒の世界になるのか、暗と明を心の状態にたとえて、変わることはないものでさえ変わる現象に、心が翻弄されさまよい憂いが見えてきます。

不日不月 曷其有括 ～ 日ならず月ならず 曷（いつ）かそれ括（あ＝会）ふことあらむ

日ならず月ならずの言葉は、幾日とも幾月とも知られないことです。人の別れや出会いであれば、またいつの日か会うことがあるだろうとなるのでしょうか。会うだろうことを主とし、もう絶対に会わないだろうことを主として、それは『いつか』会うこともあるかもしれないと……。そして、日ならず月ならずは、遙か彼方の自分が生まれる以前の、人類誕生の以前かもしれません、そんな悠久な時を刻む意味でもあるのでしょうか。

如月之恒 如日之升 月の恒（ゆみは）るが如く 日の升（のぼ）るが如く 月の満ち欠けは、時間的に言って約一ヶ月、日の出日没は一日の時間ですが、月の満ちるがごとく、月の昇るが如くは、ごく自然の摂理をいいます。当たり前の出来事、ごく普通の自然の有り様です。そのことを人間の所業に当てはめて見ますと、自然なことが『自然』と語ると非難されるような、そんな時代となりました。

そこに人や社会が入り込めば、ブランドという借り物で武装することを繰り返さなければ生きて行くなくなり、売買を通す内に、自分もレンタルの商品となっても、身体は売るものの心は売らない分裂人は、やがて身も心も筋肉や臓器、マスコミの意見で「自分の何処が自分なの」と、透明人間となることでしょう。一生懸命に老いや美にと戦っている老いて美しい改造人間、身体によいもの健康であるためにとひたすら渡り歩く飽食漢、非常識と常識の混乱にいる常識人、わからないと言えないどちらとも言えないノーと言うことを渴望する半分人。変遷する時代に、反故となるべき記したマニフェストのみが確かなものと信じるフェミニストたち、この人たちの未来では、やがてスイカからカボチャが誕生し、そのカボチャから人間の子ども達が、少子高齢社会を救うのかもしれませんが。“自然に？” ちょっと言葉が走りすぎたようです。

明氏の名前ですが、分解すれば、日と月です。中国の詩経に『日居月諸（にっきよげっしょ）』という言葉があります。居と諸は助字で、強調する字です。

詩経によれば、月日の過ぎ去ることが第一義となりますが、日よ月よと、呼びかける己自身の心も第一義の感嘆です。そして、この日と月は、父よ母よと呼びかける言葉でもあります。明というたった一字の、呼びかける意味と同時に、父や母、兄弟に照らされての“明”でもあったと言えます。

お父さんが、明氏に、お店をすすめたのも、お母さんと一緒に暮らしたことも、お母さんが具合が悪くなったことも、明氏も具合を悪くして、お店をたたんだことも、照らされて明るく輝く月のようです。照らされてこそ輝く月は、日を慕ったという意味で、今も、年をさらに加えて一人過ごすお父さんの哀しみは表現できるものではありませんが、ひょっとして過ぎ去るものの内の、先に旅立ったお母さんへの贈りもののような気がいたします。

日月が過ぎ去る月日なら、日が出ると活動し、日が沈み月が出ると休息するその繰り返しが、過ぎ去ることですが、この繰り返しは“変わらぬもの”の“日”であり、“過ぎ去り変わるもの”は、“月”で表されてもいるのだと思います。変わらぬものと、変わるものは、裏表ですし、お互いになければならぬものとなり、互いの存在を裏付けるものとなって単独では語れないものなのでしょう。

臨濟宗の栄西禅師の言葉です。

大なる哉（かな）、心や。天の高きは極（きわ）むべからず、しかるに心は天の上に出づ。地の厚きは測るべからず、しかるに心は地の下に出づ。

日月の光はこゆべからず、しかるに心は、日月光明の表に出づ。

大千沙界は窮むべからず、しかるに心は大千沙界の外に出づ。

それ太虚か、それ元氣か、心はすなはち太虚を包んで、元氣を孕（はら）むものなり。

天地は我れを待って覆載（ふさい）し、日月は我れを待って運行し、四時は我れを待って変化し、万物は我れを待って発生（ほっしょう）す。大なる哉、心や。」

繰り返しますが、日と月とは、別々のものであっても、一体のものであります。父と子と、母と子と、弟と姉、弟と兄とは、別々のものではあっても、そこに関係・導いている糸があるかぎり、父の父たる所以は、子にあり、子の子たる所以は、父にあります。母と子も、弟と姉も、弟と兄も、この結びつきのあり方をいいます。人が亡くなって、私たちの心を覆う気持ちや思いは、この関係そのものの喪失や、揺らぎをさすのですが、日月で現されるものは、奥が深いと思います。その奥が深い部分を法号の、『肯』で表現いたしました。誕生も、生も、いきかたも、死も、日月の歩み何もかもを肯（うけが）うということ、明氏の死が、物語って言えるのではないかと……。

こう綴ってきて、日月は、私たち一人一人の心と言ってもいいのではないかとも言えることに気がつきます。日肯月諸（にっこうげっしょ）と命名したことに、多くの人に共通する言葉なのだとも思いました。

日ならず月ならず、いつしか私たちも旅立ちの時を迎えます。その時、月の満ち欠けが止まり、日が昇らず、日が沈まない時を迎えるのですが、生きて、今を一途に生きれば、月の満ち欠けを止め、日の出と共に、日没と共に過ごす自然を取り戻すことができるのでしょうか。

年寄りの出番より

いつも突然の電話で始まります。平成十六年一月二十四日、午後十時三十分、息子のT氏より「父が、先ほど亡くなりました」と秀雄氏の訃報を告げられました。ここ何年か、部屋中にチューブを引っ張って、鼻に酸素を吸入していた秀雄氏のを思い浮かべながら、「どうしたのですか？」と。T氏からは、去年の十月末日、秀雄氏も三週間ぐらいのつもりで、いつものように入院したことから始まる、この顛末を聞きました。

突然に居なくなる貴方の無念もさることながら、家族にとって、貴方と言う存在が、突然に無くなることの、傷つき悲しみ悼む姿は、どんな言葉も、癒し、励ますことの難しいことです。人の力の無力さを、覚えることでもあります。

いたたまれない思いが伝わってくるものの、亡くなったということの事実を、現実のものにするために、そして遺族と共に歩くために、貴方と対面したのが、仮通夜の二十五日です。やっとチューブから解放された貴方が、ひたすら休らぐ姿を確かめて、経文をあげるためにです。

あらためて気がつくことは、人の死にようは、誰一人同じではないことです。でも、よく考えてみると、秀雄氏の老衰で眠るような死に様は、何故か合わないような、この結末が、悲運とか、不幸とかいうのではなく、最後まで、自分を信じて、結果を託すという平川さんらしい最後のよう気がいたしました。

十二月十五日の大量の喀血に、自分に起きた出来事として、冷静に、手を自身の血で濡らしながら、ナースコールをし、処置をまかしたことに、これは、最後まで、平川さんらしさを通すことで、平川さんの尊厳は、最後まで自分で守り通した心意気なんだろうと、すごい人だなと、改めて思います。

ふと、平川さん自身は、自分の死をどう考えていたのだろうかと思います。二十年間に、五人の肉親に旅立たれて、すべて平川さん自身の手で送ったことの意味は、今の平川さんにどう影響しているのだろうかと思いはかりもいたします。T氏は、「葬儀の手配・段取りをくまなくすること」って、冷静さを取り戻すことでもあるのでは」と、言いますが、それだけではないような気がいたします。

奥さんのR子さんの旅立ちには、立ち会わないで、じっと家で終わるのを待機してた記憶があります。

その時の告別式の言葉です。それは平成十一年四月早々、満開の桜にたくして、七十四歳で散ったR子さんへの私の追悼の言葉の一部です。

「春、桜の花は満開の小さな花を一斉に競って咲き乱れます。そして、わずかの間に一斉に散って行く姿は、桜の根の旺盛な生命力ゆえに、枝葉は荒荒しく、幹の肌の気品は気高さを織り交ぜて、人の人生に儚くも悲しい影を投げかけます。人と違うところは老齡を重ねた桜ほど、目に

過去の経過の結晶をさらして、それが人の感覚や思いを研ぎ澄ます。老いさらばえて咲く一斉の開花の情景は今年限りの姿であり、ただ咲くばかりの狂おしさを思います。若木に比して人を圧倒する姿は、本来、人も年をとればとるほど老齡の桜に似ている姿なのですが、異なって見えるのは、人の思いのなせることなのでしょう。人が年を重ねた末の、悲哀や年輪を偲ばせた変形した姿・形のたくましさを、もっと見つめてもらいたい。『人は年を重ねるほど、若くなる』と言う言葉の意味を人はもっと考えなければいけません。若い人も年を重ねた人も、あつという間の過去は目に見えずとすると、同じなのですが、十年二十年と較べて四十年あるいは五十年は確実に違う重みを、老齡の桜のくるおしい姿を見て、なおさらに持つのです。

思い起こせば、貴方が倒れた十七年前の五十七年間という、華々しく、勝気で、意気揚揚と突っ走っていた時間は、春には一斉に咲き誇り、花の散ったあとの一斉若葉の繁るさま、雨に打たれて生き生きとして、陽光に踊り輝き、秋には葉の色を変えて散る姿、四季のそれぞれの姿は、同時に次の季節の予感でもあり、誰も止められぬ勢いをていしていました。

そして、その後の十七年間の軌跡の中の、昨年四月三十日、貴方は、次男のAさんを病弱だったとはいえ、三十六歳という年齢で突然に亡くされました。家族全員にとって、それは痛ましくも悲しい出来事だった。貴方は気丈にも不幸にして早く旅立った息子を送るのは忍びなくと、「絶対に会わない」と病院に居座るかに聞きました。貴方の中で、何かが変わろうとしていたことは事実です。硬い意志をひるがえして、病院から自宅に戻ったと聞き、貴方の生き方も十七年間の闘病生活で受容に変わってきたのかとおもいました。それが、息子を一人で送るという決意であったと気が付いた時、桜は、まだ散っていなかったのです。

確かに不自由な身体を、早朝、全身に汗をかいてリハビリする貴方の姿の内面は、以前と変わらない姿です。目に見えぬものに頼まぬことを頼りに生きてきた貴方は、家族に尽すことによって、自分を支えていました。貴方の十七年間の軌跡を知るにつけ、関東一円の病院を回っても、真っ直ぐに生きざまを貫いた様は、後を思い出すことはなく、あつという間の過去を振り返ることなく、だからこそ、行きついた所で、最後の最後は、天に任すという、いさぎよい貴方の姿でした。人として生まれた限りは、不確かな時を迎えることは、確かな事実であり、その時、自分の力の何の頼りにならぬことを知りぬいた、桜の花びらのいさぎよさに似て、散り去る貴方の姿と重ね合わさります」と。

十七年間に渡る妻の闘病生活を支えていたのは、平川さんです。その間に、次男の死、妹の死、母の死と、失ったものの大きさは、計りがたく、その分、平川さんを強くして、世界を、人を見抜く力を形づくってゆきました。それだけが強くしたことではありません、それより以前、戦後すぐの昭和二十三年に、二十四歳という若さで、働き盛りの父の死を看取り、それ以降五十六年間に渡って、昭和十九年に亡くした兄に代わって、一家を平和に支えてきたこの事実です。今の幸せな家族の礎となり託して、今、散ってゆく平川さんの姿が眼蓋に浮かびます。

人と接しては、目を開いて、一途に見つめる眼は、人の動揺を見抜く鷹の目のような、その眼は、自分にも厳しいものだったと思います。それも、自分自身の困難な患う環境の中で、家族の過去・現在・未来を見つめていたことにもなります。

私に忘れられない姿は、多くありますが、今から10年以上前の正月、股引に半天という姿で、

八幡宮の参詣する姿があります。あの姿に、深川に生まれ、深川によって育まれ、深川に息を引き取る、誰よりも深川を愛した、筋が通った深川の粋を、意気地を、勇みを、豪気さを、そして深川の情けを、見せて頂いた気がいたします。

人生とは、闇を照らす一瞬の蛍の光

平成十八年七月三十一日、小説家の吉村昭氏が舌ガンから膵臓ガンに犯され絶命いたしました。自ら点滴の管を引きちぎり、カテーテルポートを引き抜くという行為に、妻であり芥川賞作家である、津村節子氏は、八月二十六日のお別れの会でこのことを話しております。

「吉村が覚悟し、自分で自分の死を決めることができたということは、彼にとっては良かったことではないかと、今になって思っております。」

妻として、一年と六ヶ月吉村氏を支えた、家族として、裏切られた思いは、結婚生活を含めると、何だったのだろうと苦しみ、煩悶する姿があります。そして、彼女は、

「ただ、私は彼のそういう死に方を目の前で見てしまったから、今、幾多郎のテープを聞きながら書斎にいるだろうか、宇和島や長崎や北海道に取材に行っているんじゃないか、というふうに思えないんです。まだ生きているとは思えないんです。あんまりひどい、勝手な人だと思います。私は目の前で、彼が自決するのを見てしまったのですから……。もう本当に死んでしまいました。どこにもいません。書斎にもいません。取材にも行ってません。吉村は本当に死んでしまったのです。」

この津村節子氏の吉村氏への強い決意に驚きました。他人の私が推しはかることはできませんが、これは、偲ぶ会ではなく、友人や作家仲間の集うお別れの会での、津村夫人の決別として考えなのだろうと思いました。

その頃、T氏は、危篤と安静のはざまに生死の時間を過ごしていました。T氏は、昨年五月に不調を訴え、八月半ばに検査の結果、九月の一日に緊急の手術ときまったのです。私がそのことを知ったのは、T氏の息子さんから電話をいただきですから、八月二十四日でした。

T氏の症状は、舌の付け根にガンができて、舌と咽頭部を切除するという大手術です。

八月二十二日に移転した有明の癌研に入院し、手術は成功いたしました。しかし、突然に、食べ物や飲み物を呑み込むことが難しく、その上、言葉が発せられなくなった事実、どう受け入れていったのか、受け入れまでに時間がどれ程かかったのかはわかりません。持病として喘息を持つ人でしたので、いかに身体が頑健だったとしても、肺は鍛えようもなく、肺に菌が入ったのでしょうか予断を許さない状態がつづいたとお聞きいたしました。

T氏は、普段も寡黙な人であり、何事も独りで、会社や家庭で、決断してきた人でした。入院前も入院後も、症状を自身にかかえこみ、ベッドに過ごしていたのが、ちょうど一年前のこと

です。

もともと強い人でしたものの、退院し、自宅で療養しながらも、病気や症状が自らを更に強くしてゆくことを知ります。何のためにと言えば、自分のため、それは、家族への思いではなかったかと察します。

舌ガンについては、私の別の知人も、時期を同じくして、手術していました。進行が早く、一刻も早く切除しないと広がり、手遅れになることを聞いておりました。その知人は、舌の前部がガンでした。その部分を切除したあと、右腕の上腕部の筋肉を舌に移植し、その上腕部にお尻の肉を移植しました。彼は思ったほど経過が良く、退院後、始めは何ヶ月も、家に籠もっていたものです。次第に、電話でも話しが聞き取れるようになったことで自信を取り戻し、外に出られるようになりました。舌ガンは、手術しましても、その後のじぶん自身の精神に重くのしかかることを知りますし、良くも悪くも、病気は人を変えながらも造ると、つくづく思います。

そして今年の8月、この吉村昭氏の舌ガンから膵臓ガンへの転移の顛末を新聞や、文藝春秋誌で知るにつけ、私は氏を思いだし、どうしているだろうかと、この夏を過ごしていました。

いつも突然の電話で始まります。平成十八年九月になり、T氏の息子さんより、T氏の危篤の電話を、豊島区の病院からいただきました。電話でしたが、七月の始めに緊急に入院し、今日に至る危篤の二ヶ月の経緯をお聞きしている最中、電話の向こうで、誰かに喚ばれたのか、電話が切れました。そして一時間も経たないうちに、再び息子より、その後T氏が息を引き取ったことを知らされたのでした。七月始め、T氏の容態が悪化し、病院に緊急入院したところろ、「ここ何日か、長くて一週間だろう」と医師から言われたにもかかわらず、強い意思か、身体は傷ついてやつれていたものの、二ヶ月近く死のほとりで、ぎりぎりの生の時間を過ごしていたことを知ります。もう何度も危篤と言われて、病院に駆けつけ、T氏の姿を間近に見て、本当に危なくなつて……、病院の看護師さんから、綺麗に清拭されたT氏をお寺に迎えたのは、T氏が亡くなって、二時間弱でした。娘さんから生前好きだったクラシックのCDが持ちこまれ、本堂のなかで、荘厳に響いていたのが印象的でした。

妻や子どもから見送られたT氏は、死に対して生に対して、受動的に医療の行為を受けるなか、最後まで主体的な行為を繰り返しての、この一年と六ヶ月だと思いました。そして、その間も、沈黙のT氏からほとぼしる多くの言葉を、遺族は身体にしみ込ませたとおもいます。

吉村昭氏の妻、津村節子氏のお別れ会での言葉が九月始め“文藝春秋誌”に掲載されました。同じ舌ガンという言葉のなかに、「もう本当に死んでしまいました。どこにもいません。書斎にもいません。取材にも行ってません。吉村は本当に死んでしまったのです。」の言葉を思いだし比べてみました。「お父さん、あなた、兄貴、おいT」と問いかける言葉に、T氏は、祭壇でも何処でも、力強く「なんだ、どうした」と、すぐそばに居るように、これからの家族の行く末を守ってくれることを念じました。

平成十七年一月に出版された「津村節子自選作品集」（岩波書店、全6巻）の最終巻に収録された書き下ろし「私の文学的歩み―遙かな光」に、《一九六一年、津村さんの書く少女小説で、なんとか生活できるようになった時、吉村さんが勤めをやめ、作家専業になった。未熟児で生まれた娘を抱え、不安はあったが、津村さんは〈かれの焦慮は私のものでもあり、反対はできなかった〉と書いている。

しかし、それでも芽が出ぬ夫は二年後、「おれはきみの厄介になるのに疲れたと、再び働くと言い出す。これに対し津村さんは、疲れたのはこちらのほうだ、と私は言いたかった。／女房に稼がせて悠々と自分の書きたい物を書いているおれを、腹立たしく思っているのだろう／かれは私の心の中を見通して、反論できなかつた。軀の中を、野分が吹き抜けて行く様な気がしたと書いている。津村さんは、いまま無名時代のように書くことへの不安があるのだ。〈私はよく夜中にうなされてうめき声を出すらしく、吉村に起される。遙か海面に光が見えている深い海の中にいるような気持は、いまでも続いている〉と八月十九日読売新聞で、鵜飼哲夫記者は記していた。

夫婦の心の中に野分け（台風）が吹く想いとは、想像が付きません。芥川賞作家と直木賞作家、「夫婦で小説を書くななんて、地獄だなあ」と痛ましそうな表情で作家の八木義徳が言ったそうですが、「もうどこにもいません」の伏線は、こんなところにあつたのでしょうか。

アメリカインディアンのクロウフットは、一九八〇年の春、死の床にありました。呼吸が乱れ、苦痛に襲われていたのです。家族は彼に寄り添っていた。クロウフットの意識は保たれて、彼を心配する人々の愛に囲まれていた。

クロウフットがこちら側での命を終え、アーチをくぐって向こう側へ渡ろうとしているまさにそのとき、家の外では木々が芽吹き、花が咲きはじめて、春の息吹が満ちあふれていた。まるで死が、地上に再生をもたらすかのように。クロウフットの死を目の前にして、それまでずっと看病してきた長女がこう尋ねた。「人生って、なんなんでしょうね？」

クロウフットはしばらく考えていたが、やがて老いた目を思い出に輝かせ、かすかに微笑みながら、娘のほうを向いて言った。『《風のささやきを聞け》より、めるくまーる出版』

人生とは、闇を照らす一瞬の蛍の光
冬の寒さに浮かぶバファローの白い意気
草原を横切り、夕日の中に消えていく小さな影

自死でなく、突然にしろ、病気にしろ、人生を振り返って死を受け入れることは、一瞬の光となり、一筋の線となって親しいものに夥しいほどの思い出が贈られるものです。それは、時間と存在の絆のなかに、死として迎えられることなのだろう思うのです。

時計（平成12年1月3日）

人が誕生したとき、私たちは何者にも染まらない、無垢の精神と肉体で生まれてくると言います。しかしながら、実際は人は決められた時を知って生まれてまいります。空を渡る鳥たちのように、故郷に帰る時を守ると言う時計の番人を、自らの肉体の中に住まわせているのです。

鳥たちも、時間と空間を生まれながらにして、知っています。暗い夜に輝く星たちの乱舞を仰いで、夜間飛行する鳥の群れは、その証拠です。行っては帰る繰り返しのうちに、誕生と消滅を織り込みながら、ひたすら夜間飛行する鳥たちの軌跡は、大空を背景に、時間と空間の交差する連続とした情景を、おぎなうて果てしない創造の旅に誘います。

鳥たちの視線は、翼を広げれば、時間と空間が動くかのように、遙か下界に極小の望むものの姿も、しりえに遠ざかるのでしょうか。まるでテレビゲームの迷路の中を進むように、壁や風景が動くかのように。空間だけが動く世界は、奇妙な世界であり、やはり時は刻まれてこそ時なのでしょうが、動くということが、時を刻むのではないかと思います。

子どもの頃、あるいは若かりし頃、幾度となく通った駅や商店街、学校に20年ぶり、30年ぶり訪れたときの驚嘆は、空間と時間の変化の途切れた裂け目に溺れるかのような、戸惑いを感じるものです。この場所は紛れもなく、過去に自分がいた場所であり、今いる場所との隔たりは、人の時間旅行がいかにか遠いところに来てしまったか、もう戻ることの出来ない時間旅行の位置を計測することから、現在の位置を浮き立たせます。時間と空間の動いた後は、動くものの世界の真っ只中に取り残されたかのようなようです。

さらに、そこに居たはずの人もいないとすれば、白々とした違和感に包まれて、見てはいけないものを見てしまったかのように、後悔と懐かしさが湧き上がります。それは、動くものと、動かないもの間に起こる、揺らぎのようです。厳密に言うと、動くものは同時に動かないものに支えられ、動かないものも同時に動くものに支えられてこそ、時間も空間も成り立っていると言えるかのようなようです。時計の針は動きながら、実は一步も動いていない。

地球が自転し、太陽の周りを回転する事が、鳥達の羽を広げさせるとしたら、繰り返す環境の変化が羽を広げさせることであり、環境の変化という動くものが、動かない鳥達を動かし、同時に鳥達が動くことによって、動かない環境が変化してゆくという図式は、仏教の因果律として、最も具体的に世界の成り立ちをよく表現している。

今から20年30年後には、心や意識の一般的な性質やあり方は、ほぼ解明できると言う。自我についても、解明できることになるという。日本文化の精神性を支えてきた禅も、一つの時代を

終わることになるとおもう。

しかしながら、人が生きつづける限り、禅は、足元にあるといえるだろう。

時間と空間の交差したところ、それは現在です。今・こことは、真に具体的ということであり、抽象的なものを一切排除した禅の境涯であり、絶対の現在です。私達各々の時計が刻む文字盤は、絶対現在を指すといえるのでしょうか。何ものも入る余地のない”今・ここ”が世界であり、総てが内包されている世界を、誰もが認識する世界は、禅が世界に行き渡ったことであると思うのです。

星（平成11年10月15日）

仏教の縁起を注意深く、考えてまいりますと、実に奥が深く、仏陀の手のひらの上を、這いまわる赤ちゃんという思いです。私が、ここにいることを、説明するためには、どうしても避けて通れな問題があり、それは、私と時間と場所との関係です。縁起は関係でもあるのです。

私が幼かった頃、時はゆっくり流れていた。早く大きくなって、お兄ちゃんのように、お姉ちゃんのようになりたいと、両親に束縛されずに、自分で判断し、物事を決断することが羨ましく思ったものです。には、時の経過が待ちきれない、幼い心があったように思うのです。

そして、知らず、年を重ねて気がつくのは、時の早さです。時計の時間の速度は、変わらぬものの、受け取る時間のスピードは違う。

年を重ねての懐かしい記憶は、本来、今に直近の記憶こそ、まぎれもなく忘れようもない記憶のはずが、子どもの頃の思い出がより鮮明に思い出すのは、私達に問題があるのだろうか。

遠く暮らす年寄りの便りを、私に告げた娘さんは、「故郷の深川が懐かしくて」と言う言葉でした。仏陀も自分の死期が迫った時、目指したのは故郷でした。たどり着くことが出来ずに、北方を目指して亡くなったことに気がつけば、何千年前から自然な感情なのでしょう。

そして、それが記憶のメカニズムですと言われれば、そんなものかと思うのです。

年を経て、鮮明に蘇る過去の記憶は、より近い記憶を退けての記憶であることは確かだと思うのですが。

そして、その退けられた記憶は、消去せられた記憶か、または意識を何かに集中した時に、同時にその周りで起こっているだろう、事象の変化を集中しているからこそ、記憶に留めることが出来ない記憶ではないかと、思ったりします。私達が何かに没頭している時、それが地下鉄で家に帰るとき、案外、景色を知らずに家にたどり着いているものです。また、ボーッとしている時にも、同様なことがおこることに似て。

年老いて、他人を認識できなくなってしまった年寄りに、「私は息子です。わかりますか？」と問い掛けて、解らなければ私の母ではないかといえば、私にとっては、正真正銘の母に違いない。でも母にとっては、もはや私は息子でもなく、自分以外の人なのであろうと考えてみると、人間とはいかに自己中心的なメカニズムの中に生きていることがわかる。しかしながら、すべての人が、そのメカニズムの世界で生きていて、互いに交信しなければ、自己の存在を意義あるものに出来ないとするれば、真実なものとは、このメカニズムそのもの、ということになるのではないかと思う。

無二の親友と思っていた友人が、その友人から私を見ると、人生のとある通過点に出会った人物であり、通りがかりの人と変わらぬと思っていたということも、よくある話かもしれない。

人に裏切られ、騙されて知る悔しさ、自分のふがいなさは、そのことを知ったがゆえの思いであり、知らなければ、自分は騙されていなかったということになるのだろうか。騙されていたのは、ずっと過去の時間なのに、それを知った時点で、時間差分こそ、ふがいなさや悔しさの中身ともいえます。人は騙されまいと強く思うのですが、騙されているかどうかは、知らなければわからないのです。もしその時間差が、その人にとって、決定的に人生の大半を占めてでもいたら、その反動も大きなものに違いない。

今宵見る、星の輝きは、何億光年の過去の瞬間だ。その何億光年の時間に思いを馳せると、未だ降りそそがない、その後の星の輝きは、私達の未来にかかわるでしょう。

時間を距離に置き換えると、今も輝いているかもしれないし、もはや生滅してないかも知れないのです。何億光年も過去のものだからです。今見ているものと考え、見られているものとは、常に時間差がつきまといます。厳密には同時間の瞬間に見えているものは、じつは総て過去の時間のもので、光が物質なら、いくら瞬時に空間を走るといっても、時間はかかります。では私達は、過去の星の輝きを見ているのでしょうか。

その意味で、確かなことは、今見ている星の輝きは、何億光年前にさかのぼって、見る星の輝きでもあり、さらに確かなことは、今の私は、星と時間を共有して、今現在の星の輝きでもあるという気がするのです。何億光年かかって、星の輝きが、私達を照らしているとしたら、見つめられているとしたら、照らされている私は、今、照らされているという、不思議な感慨があります。

私達が、現実に見たものすべてが真実であるかは、確かなことではありません。そして比較する物差しは、逆に私達を規定しようとするかのように煩わせます。何か現状を、我々は錯覚していないか？と考えた時、そもそも時の速さの、規則性はそれぞれの人にとっては、あまり意味のないことのような気がするのです。現に輝いている星を見て、我々は何億光年前の、「これは過去の星の輝きだ」とは、いいません。それは輝いている星の輝きが、美しく神秘的であるからです。『星に願いを』という曲がありましたが、何億光年前の星に、祈りはしませんでしょう。今輝いている星に、祈るのです。

そして、その星は、現実を飛躍して、未だ来たらぬ想像の時間を含んだ、今の星の輝きなのです。

溝（平成11年8月2日）

人は本当のもの、真実のもの、正しいものを見極めようと、あらゆる手段を模索する。未来や将来が現実の問題として拘わってくる場合は、何が正当なこととあり、何が間違っていることは、重要なこととあり、判断如何によってはそのことにかかわる人間の実人生を大きく変えてしまうことになるからです。

仏教では「今を生きる」と言い、「今日ただ今の命」と言う。過去や未来を差別する、今って何だろう。今ってどうしたら捕まえることができるのだろうか。「永遠の今」と言う言葉の美しさに惹かれるが、永遠の今には、過去や未来はないのだろうか。

時間や距離の数字の1と2の間には、いったいどんな数字が隠されているのか、考えてみると途方もなく限りがない数字になってしまう。そして1から2に渡ることができないことを知りつつも、何の疑問もなく1, 2, 3, ……と数えることが私達はできるのです。コンピューターのクロック数の増加は、スピードという限りなく1秒間の振幅を追いかけての結果です。行き着く先は見えないわけだし、円周率も限りなく数字を追い行き着く先は見えないが、別に追わなくても円は書けるし、時間はおかまいなく、過ぎてゆきます。

距離や時間の1と2の間には、途方に暮れる玉ねぎがひそんでいるように思える。測ることのできる数字には、測ることのできない数字を含んで成り立っているように見えるが、私たちの普段の生活では、何ら問題にならないことなのです。渡ることのできない出来ない溝を、実生活では簡単に渡ってしまうのです。

1と2の間には、“と”があることが問題で、1、2、3、……と言えば問題はないなどと言ったら笑い話ですが、案外こんな所に実生活の知恵があるように思えます。もっとも気がついてうへの知恵ですが。

つまりは、1と2の間の溝を、考え創造するとしたら、10進法で10を作り出し、その1を更に10創って、これを繰り返す。繰り返すことは、飽きるまで続けられるということになるのではないかと、思ってしまう。

ここで今度は、私の家と、隣の家との地境はと考えると、境界線は切断面になり、ここには距離も無く、もはや10進法も存在しなくなることが考えられる。私の家を1、隣の家を2と数えたら、1と2の間には、隙間はないのだ。

私は小さな禅寺の和尚にすぎませんし、哲学や数学は何のことかさっぱり解らない者ですが、解らないなりに疑問を持ちながら、岩波の哲学思想辞典を探したら、ゼノンのパラドクスがある。

「アキレスと亀：足の速いアキレスが後方から出発して、亀と競争すると、亀に追いつけない。アキレスが亀の出発点に到達したとき、亀はその間に多少は前進している」

「2分割：ある場所に到達するためには、その半分の地点に到達しなければならない。そこに到達しても無限の点を通り過ぎてはならないため、有限の時間で到達することは不可能」

「飛ぶ矢：あるものが自分の大きさと同じ空間を占めているとき、そのものは静止している。飛んでいる矢は、この今においてはそれ自身と同じ空間を占めているから、静止している。どの今についても同じことが言えるから、静止している」

ゼノンがかく人を惑わそうが、実生活の上では何の障害もなく遂行できる。このゼノンのパラドクスの共通するものは、すべて点に有るように思えます。飛ぶ矢の今も点として捉える限り、存在として有ると言う錯覚が無限の迷宮に足を踏み入れさせるように思えるのです。

ロシアでは宇宙にロケットが発射された場合、常にグリニッジ天文台の時間を使用すると言う。アメリカでは、スペースシャトルが地上を飛び立ったその時を起点に時が新たに始まるという。仏紀、皇紀、西暦、イスラム紀と時を刻む始まりは沢山ある、この意味では世紀末は何の意味もないが、起源（起点）から数え始めれば節目の意味を持つことになり、独立、創立、樹立、建立と独立して歩き始めることもあります。そしてこの独立して歩き始めることが、更なる迷宮を生むことになると思うのです。ここでも点が絡むことを考えれば、いっそ点は無いほうが良い。

地境の線はあくまで切断面であり、線が存在すれば、線自体は誰の所有物かになり、その線を更に半分に切らなければならことを思えば、無限の迷宮に陥ってしまうからです。

人が生きて与えられている時間は瞬間と言ひ、今と言う。「今日ただ今の命」と言う時、時間の帯の上にもどうしても、今を点としてとらえます。そして点として捉えることは、そこに自分が存在すると言う証が必要であるからです。私達が考える現実あるいは、事実ということとそぐわないからです。更には、その前後の過去と未来を考えると、どうしても3点セットの時間は実生活の上に必要な時間だからです。切断面では切断した切り口を数えること、存在として確認することが出来ないからです。

今が消滅することにもなりかねませんからです。今日ただ今に徹することとは、その切断面という存在しない今に、自己の存在を捨てると言ったら良いのでしょうか。

禅で言う『無』とは、こう解釈できるような気がいたします。

過去心…念の起こる処（平成11年6月19日）

母とは、その子供から見れば、厳しく優しく、いつまでもその姿を脳裏に止めていたいと思うものです。また、父とは、その子供から見れば、威厳があり、超えることのできない存在でありえたらと思うのです。かく言う私の父はもういなく、母は病に入院する立場にして、言うこの言葉なのです。

幾度となく人の死に接して、多くのお年寄りが病院のベッドで死を迎える様を見て、残された家族の姿を見て思うことは、病人の過去の颯爽と生きて生活する姿と、ベッドに横たわる姿の落差です。同じ人間の時を違えた姿の不思議は、端にいる人も同じ姿を見ているのですが、それぞれにその姿より、何を今見ているのだろうかと思うことが数多くあります。「あの姿を見るのが辛い」と言った知人がいたが、彼もベッドで横たわる母を3年半以上持つ身の立場で、母の何を見て、自分の何を大事にしようとしているのか、人はさまざまです。

人の父や母への記憶とはいつもそう言うものだと思うことに、今、こう言える私は幸せに、父や母の目に見えぬ影響を素直に受け取り考えることができることに感謝している今の私でもあります。

しかしながら、子供にとって、病院のベッドの上にいる現実の母を受け入れることのできない自己が存在するのも事実です。過去のさまざまな母と現実のさまざまな母の織り成す綾の葛藤は、どちらも真実な姿だったが故に、受け入れなければならない私という自己の変化を待たなければ、今の在るがままの母を直視することはできないのも事実です。

そんな母の姿は、より強く、元気に生きるの、強烈なメッセージであり、現実の姿を厳しく受け止めることこそ大切にして必要なことであることを知らせる悲しい知らせでもあるのです。厳しく受け止めることによって、新たな変化が始まります。その変化こそ母への子供からのメッセージになるからです。しかしながらこの受け止めるべき、疑いようのない自己が、過去を創造し作り上げてきた虚飾の自己であった場合もあるのです。

過去とは過去物語であり、私たちの記憶の想起によって、今あり得るものとするなら、過去の実在性はたった一つの過去ではなく、その時その場所で私が選択した一つの過去の実在ということになるのではないかと思います。そのたった一つの過去の実在も、その時の私の心の変化で見たものにすぎなく、何が真実であり、一貫として過去から現在を貫く私達の実在は揺れます。やがて時がすぎ、他人に指摘されて、初めて別の父や母そして友人の姿を知ると言うことはよくあることなのです。

私の知り合いの男性で、交通事故で奥さんを亡くした方は、法事のたびに、参列者一人一人に亡き妻の思い出を指名して語ってもらう人がいますが、亡くした妻の知らなかった過去を、自分の過去に加え偲ぶことが法事の目的でもあるようでした。過去は人に不思議に語り掛け、今の私達を猛火焰裡に投げ込み、あるいは潤いのある私にしたりと翻弄するのです。

過去の思い出に、記録された子供の成長の一つ一つのシーンは、実は親の都合で作りに上げた過去であり、それが過去の実在する真実と思いこんだ親は、そこから悲劇が始まることもあります。何もなければ幸せなことであるのですが。

汝が一念の疑い、大地の如くに、汝が心を閉じ込める。

汝が一念の愛、荒れ狂う流れとなって、汝が心を溺れさせる。

汝が一念の瞋り（いかり）、炎の如く、汝が心を焼き尽くす。

汝が一念の喜び、吹き荒れる風の如く、汝が心を翻弄す。

正確に物事を見とおす目は、疑いといい、愛といい、瞋り（いかり）といい、喜びといい、不確かな自己の精神の有り様で、正確さそのものさえ、曖昧なものに変化してしまうことになります。まして過去の実在そのものが、歪んだものだったら、現在に無意識に引きずる過去の出来事は、更に身を焦がすことにもなるのでしょ。う。

そう、私達の過去は、現実に関何か事件が起きたとき、過去を想起し、検証し、正しかったのか、違った見方があったのではないかと変化いたします。変化する過去の真実や実在は、絶対たり得るものなのか。裁判は何十年費やして真実を追究することがあるのですが、無罪を獲得した時の加害者側の苦渋と被害者側の過ぎ去った時間への悔恨は、はかることができないに違いありません。

待ち合わせのすれ違った時間、予定時間への遅刻、時間オーバー、思い違いの時間は確実に今を変化させています。その原因には時がからみます。過去のさまざまな出来事であり蓄積が、揺れる今を演出し、混迷の彼方に私達を運ぶことは確かなことでもあります。

在るがままとは、至難なことであり、またそのことがあるゆえ、ゆれる心の遍歴も限りなく尊く美しいものです。その揺れる心にはいつも過ぎ去り、そして未だ来ない時間が作用します。

揺れる過去心こそ、現在において実在する過去に違いがないのですが、絶対であり得ない過去に構築した自己を、取り繕うとする自己は、更に靄の中に自己を運ぶとするなら、錯綜としたその自己を認めて、神仏に今を懺悔することは必要なことです。

懺悔とは、

『過去の心、未来の心、現在の心が自己が、本来の自己で有り続けることを知ることが真の告白であり、懺とは死ぬまでそのことを守りぬくこと。悔とはこれまでの過ちを知ることである』

与える時間（平成11年5月24日）

日ごろ法事や葬儀のお経をよんでいてつくづく思うことは、船頭の役と同じだということなのです。昔、大きな川の渡し守は、毎日毎日こちらの岸からあちらの岸へ、あちらの岸からこちらの岸へ季節や天候の具合や乗る人の場合によって、ゆっくりと、そして急いで船を漕ぐからです。現代で言うなら、ジャンボジェットや新幹線、バスや電車の運転士だが、乗る客と面識を持たぬので、渡し守とは言わぬかもしれない。

唐の時代有名な巖頭和尚・投子和尚や夾山善会の師匠・船子和尚も渡し守をしていたという。そう言えば、ヘルマンヘッセのシッダルタも船頭をしていた。とかく私達は、岸ばかり見ているが、川を問題にしたのは、シッダルタだった。川幅を計ることによって、時間がみえてくるのだが、私達は、三途の川も川幅がどれくらいだったかの知らない。

川に渡し舟があるとするとするなら、船の軌跡は道になるはずであり、一人では渡って通れぬ道が川にはあることになる。そういえば、日本の幽霊には足がないので歩けないから、そこらに漂うことになるのではないかと思う。とり付くことをしなければ、自ら歩くことができないとすれば、これにも渡し守が必要となるのだろう。しかし一般人の背中に背負うとなると、厄介なことに違いない。よくお寺に古い位牌や人形、お札を、『お炊きあげ』と称して持って来るが、すべて寺の和尚が背負うことになる。そのことを持参した人々は自覚しているのだろうか。しかしながら、目に見えないものは、心の意識で対処することが出来るが、目に見えるものは、なかなかそうはいかないのが現実であり、だから面白い。

亡くなった人を偲んで、多くの時間をかけ、式に参列して食事をして、また来た時間をかけて帰る行為を考えると、かけがえのない貴重な時間を、偲ばれる人に捧げているということだ。人間の行為を時間で測った場合、多くが時間に換算できる。友人を病院に見舞いに行く場合、見舞う人間の貴重な時間を、病人に捧げることになる。商売も、文筆業も、人の行為にかかわるものは、すべて時間に換算することができる。もちろん人によって時間の中身は違う。船頭はこちら岸からあちら岸までの時間を船上人に捧げる。

先日、三遊亭圓橘の奥さんと話をしている、こんな話を聞いた。結婚した当時、落語家の芸の話で、『間（マ）』に悩んで、ビルの窓から飛び降り自殺をしたという落語家がいたという。芸とは生き死に狭間で、あっちへ揺れこっちへ揺れることでもある。船頭がいる場合もあり、船頭なしで一人で渡らなければならないこともあるだろう。一流になれば、やはり一人で渡らなければならない、なぜならば、一流とは自らがその道の船頭に違いないからだ。最近、上方落語の桂子雀の自殺が報道されたが、芸の厳しさを追及しなければおさまらない、芸人の凄みを感じた。芸を見るお客は、そこまで自らを高めるだろうか、真剣勝負をうかがうことが出来るお客はいる

のだろうか。文化の担い手を考えた場合、ぞっとするものがある。高座の子雀を思い出して、悼む。

人は産まれてすぐに、お腹が減ったミルクを飲みたい。おしっこをした、この不快な気持ちをすっきりさせろ。つまらないから、遊んでくれと、私に貴方の時間をくれと要求する。満足したいと自己主張をすることになる。数年から青年期までこの事は、繰り返し要求される。つまらなく耐えられない時間を、楽しい時間に変換する為ゲームや賭け事に明け暮れることもある。やがて人は成長し、自分の時間を他人に捧げることを覚える。

江東橋のMさんのお宅の前の家で、不幸があった時の話である。日ごろ親しく接していて、「お線香をあげたいから」と、尋ねたが母娘が「有難うございます」と、自宅の玄関のドア一前に頑張り、どうしても家に上げさせない。Mさんの家には、しょっちゅう上がりこんでお茶を飲んで世間話をしているのに、どうしても入らせてくれない。「不思議な婆さんと奥さんだ！そのくせ内に不幸が合ったときは、死んだ婆さんが好きだったからと、椿の花をわざわざ持ってきてくれたが、枕もとの仏さんに椿の花はなんだか縁起が悪くてしょうがない。火葬場では、遺族がビールや酒の接待をするもんだとか、やかましくて、変な婆さんと奥さんだよ！」と話していた。他人には与えるが、自分達は受け取れないという事情がある場合もあるのかなと、ひょっとして良くある話かもしれない。家に上げると言う行為は、複雑なものがある。

Kさんの話だ。

「アメリカのシアトルに留学をしていた時のことです。四十年ぐらい前のことだが、お金がなくて、毎日安いからとりんごばかり食べていたら、勉強しても頭がボーっとしてしまって、フラフラで街を歩いていたことがあった。郊外の一軒家で白人の婆さんが窓をふいていたんです。私はボーっとしていたのですが、婆さんに声を掛け、私は窓拭きが得意ですから、窓をふかせてくださいと、婆さんからタオルを借りて窓を拭かせてもらったのです。たくさん窓がありましたが、丁寧に拭いたんです。

しばらくすると、婆さんが家の中に入ってしまった。私はそれでも窓ガラスを拭いていました。ようやく終わろうとした時、婆さんが家の中に入れという。タオルとバケツを片付けると、家の中の台所に案内されました。私はそこで、ご馳走を食べさせていただいたのですが、嬉しかったです。今でも忘れられなく、懐かしく思い出します。婆さんは、お前は丁寧に何時間も掃除を手伝ってくれた、1時間幾らのアルバイト代を上げようと言って、お金までくれ、帰るときには、苦労しているみたいだからと、食べ物まで頂いたのです。知らない土地に一人で、この親切は本当に有難かった。今思い出してみると、この土壤は何処から来るものだろうか」

奉仕・ボランティアは、その典型であると共に、大掛かりなボランティアも大切だが、街中に転がっているふとしたことに捧げる時間は、世の中に潤いを与える。私達の日常の時間を考えた時、私達はどのくらい他人に時間を捧げているのだろうか。このことは、自分の一つ一つの行為を点検し、チェックすることでもあるのだろう。

船頭も働くという行為は、人に自分の時間を捧げるということに気付く。あちらの岸からの帰りは、船上人がいないが、空ではない。何故なら、与えた時間は、与えられた時間だからです。赤ちゃんにミルクを与え、満足して眠る姿は、私達に与えられた時間ととるか、与えた時間ととるかでは意味が違ってくるから不思議です。

与えられる時間は、やがて与える時間に、与えた時間は、そのまま与えられた時間だからです。

桜（平成12年3月2日）

やっと、なつかしく過去を振り返って見ることができる年齢に達してみても思うことは、自分にとっての過去って、いったい何処にあり、何の意味があり、今の私をどう支えてくれているのだろうかということです。何十年という時間の蓄積を持つことは、生きてきた証であるはずなのに、その価値観がなおざりにされる時代を、満開の桜の下で少し考えてみる。

また思い出そうとする作業で、思い出される記憶は、何処から紡いでくるのだろうか、忘れかけていた古い写真を手にしたとき、懐かしい感慨と共に、自分の姿形がいかに変わってしまったものかと思うことがある。記憶は自分の内部に在るはずなのに、自分の外部と接触したとき、鮮明な容姿が湧き上がることに、新鮮な驚きを感じる。そして、その記憶から、姿形だけではなく、感動の仕方、表現の方法、対処の仕方までもがおおきく違っていることに気づく。そして、再び廻り来ることのない過去から述懐が芽生える。今の自分と相違して、嘆くこともあるでしょう。多分、大方の人は懐かしさが身にしみることでしょう。自分にとって何十年という年輪の風格は、目に見えず、過去を秘めてのたたずまいこそ、桜の下を歩く自己の、年輪を窺わせるものなのです。そして、今生きていることの裏付けなのでしょう。

私はそう思いながらも、頭の中の無数の神経細胞の結合姿を描きながら、その中を走る電気信号を想像してしまうことがあります。確かに、私にとっての過去って、スイッチを押せば、頭の中でたちどころに走り回る神経伝達物質の動作であるようだ。走り回る物質は、いつも誕生と消滅を繰り返して、どこかに蓄積されるという物ではないらしく、どちらかという消費されることに似る。新しく生成される神経回路が、記憶の扉とすれば、その道順を記憶する扉もあるのだろう。すると、私の心とは、迷路の中を猛烈なスピードで走り回ることに近いものなのだろうか。スイッチを入れなければ、過去も心も、存在しないことになるのか。

誰も鏡の中の自分に向って、答えてくれるだろうと、『私は、だれ？』と問いかける人はいないだろうし、もし問いかける人がいたとしたら、『おい、主人公！』と、自己を洞察した人の、確認の意味を持つ言葉としてです。誰でも、自分の人生を振り返ってみる時、どんなに波乱万丈に長く生涯を送って来たとしても、短く惜しまれて去ろうとする時も、実人生を振り返ってみる時、自分の歩いてきた人生の客観的な長さは、実感にそぐわないものがあります。それは過ぎ去った時間の、アッ！と言うまの過去の長さからです。いくら思い出して豊かな時間が続くのが、なつかしい経験を思い出しても、苦しく辛かった人格を形成する時も、愉快で楽しかった若い頃も、過去は夢のまた夢であり、もはや手にすることのできない時間だからです。

人が生きれば生きるほど、過去には二度と手に入らない時間が増えることになります。たとえ人が百年、二百年生きようと、一炊の夢の若者のように、揺り動かされて覚めた時の実感は、生

き様が激しければ激しすぎるほど、人生の糧が大きいほど、現在において、アッという間の過去の時間に思えてしまうのです。

春、桜の花は満開の小さな花を一斉に競って、咲き乱れます。新緑に先がけて一斉に咲くという行為に、人が意味を投影することができるなら、わずかの間に一斉に散って行く姿から、人は感慨を彷彿させられるでしょう。桜の根の旺盛な生命力ゆえに、枝葉は荒荒しく、幹の肌の気品は気高さを織り交ぜて、人の人生に儂くも悲しい影を投げかけもします。人と違うところは老齢を重ねた桜ほど、目に過去の経過の結晶をさらして、それが人の感覚や思いを研ぎ澄まさせることです。老いさらばえて咲く一斉の開花の情景は今年限りの姿であり、ただ咲くばかりの狂おしさを思います。咲く行為に老いも若さも無い筈なのに、若木に比して人を圧倒する姿は、本来、人も年をとればとるほど老齢の桜に似て、見事な姿なのですが、異なって見えるのは、人の思いや価値観、二度と帰ってこない時間の、取り戻せない過去を振り返る心のなせることなのでしょう。

人が年を重ねた末の、悲哀や年輪を偲ばせた変形した姿・形のたくましさを、もっと見つめてもらいたい。『人は年を重ねるほど、若くなる』という言葉の意味を、人はもっと深く考えなければいけないと思うのです。アッという間の過去は目に見えず、若い人と年を重ねた人も、同じなのですが、十年二十年と較べて四十年あるいは五十年は確実に違う重みを、老齢の桜のくるおしい姿を見て、なおさらに持ちます。

思い起こせば、後を振り返ることもせず闇雲に、意気揚揚と突っ走っていた過去の時間は、春には一斉に咲き誇る姿であり、幼子の無邪気さは、花の散ったあとの一斉若葉の繁るさまでもあり、ふり返る行為は、雨に打たれて生き生きとする姿に似て、若者の澆刺とした姿は、陽光に踊り輝き、その若者もいつしか年を重ねた時間は、秋には葉の色を変えて散る姿であり、年老いた時間は、冬の寒さの中に枯木として耐える姿の記憶でもあるのです。

人が許容や受容と言う意味を解りかけて来たとき、桜の四季それぞれの姿は、同時に次の季節の予感を到来する姿でもあり、誰も止められぬ勢いは、やがては終わって、桜の花びらの散る風景に、緑葉の色づく風景に、枯葉の舞う景色から、冬の枯木の生命力をみなぎらせた姿になります。どれもが真実な姿でありながら、立つ位置、立場によって、まったく変化してしまいます。

その老齢な桜の満開の花を見て、冬の落葉のその桜樹を思うことは、満開の桜の花ゆえに、冬の裸木の過去の姿が、物悲しく映ります。そしてそれは次の季節に、今だ来ない季節の確実に移るものの予感であり、そのことを私達は『春うらら』と、陽気に重ね合わせるのでしょう。

また、冬の桜の裸木を思う時、去年の桜の姿を思う時、いくつかの若かった頃の自分の切り絵を思い描く時、故郷の友人を、両親を思う時、幼い頃の教室の机や壁を思い描く時、私達は知らずに満開の桜並木の下を歩きながら、着実な今を、去っていった過去によって表わします。

春うらの陽気は、人の過去の積み重ねた経験や知識によって、人のそれぞれの複雑の気持ちを包んで、春うららです。 去っていった時間は、桜の散る花びらに似て、老齡な桜ほどに枝を広げての花吹雪に似て、あつというまの過去の時間です。

無常（平成11年4月16日）

通常、無常というと、絶え間なく変化する世の移ろいの儚さ、悲しさ、寂しさを言うことが多い。おそらく日本人のもつ無常感は、美しく変化する季節の移ろいと、人の命の移ろいを重ね合わせて、しみじみとシットリとした情感を持つことになったのだろう。

友人が言っていたことだが、この無常感を歌う演歌のマイナー響きは、大東亜戦争をはさんでからのことで、下町に伝わる「さのさ」「深川」「木遣り」の江戸伝来の歌舞音曲は、もっとからっとしている。

これらの歌は、下町の人々の陽気で、しかも活気あふれる姿を表わしていた。この時代は現在のような演歌はなかったのではないだろうか。そして、その歌がごく一部の人達に残って、庶民である我々の中で、すたれていくということは、江戸の文化のたくましく雑多な意気軒昂な情感がなくなってしまうということで、残念なことであると、歎いていたことを思い出す。

今、この無常感の原点である中国の古い話を、下記に引用してみた。

『中国の寓話』

チュンラン、つまり「岩山の親分」という名のひとりの老人が、山の中にひとつの小さな農場をもっていた。ある日のこと、彼の飼っている馬が一頭いなくなってしまった。そこで隣人たちがこの不運に対して老人に慰めの言葉を言うためにやって来た。

老人はしかし質問した。「お前たちはこれが不運なことだとわかるのか？」と。すると見よ、その数日のちに、その馬が戻って来た。しかも一群の野生の馬をそっくり連れて来たのである。またもや隣人たちがやって来て、この幸運な出来事にお祝を言おうとした。

山の老人はしかしこう言った。「これが幸運な出来事だと、どうしてわかるのか？」

さて、こんなにたくさんの馬が自由に使えるようになって以来、老人の息子は乗馬が好きになりはじめた。そしてある日のこと、息子は脚を折ってしまった。するとまた隣人たちがやって来て、慰めの意を表した。するとまた老人は彼らに言った。「これが不幸な出来事であるとしてどうしてわかるのか？」

それから1年経って、「背高ノッポ」の代表団が、皇帝の軍隊のための強壮な男子と駕籠かきを招集するためにこの山岳地帯にやって来た。今なお脚に損傷をもつ老人の息子を、彼らは選ばなかった。

チュンランは、にっこり微笑まずにはいられなかった。

＜人は成熟するにつれて若くなる（塞翁が馬）＞草思社刊

この「岩山の親分」という一人の老人を、今の世に放てば、とてもいやな素直でない老人になってしまうこと、間違いない。隣人の祝の言葉や同情の言葉を、つねにひっくり返して、悪く言

えば「人の言葉を素直に受けられない、嫌味なことを言う孤独な年寄り」と言えるだろう。そう
は言っても我々一人一人の生涯は、実にこの言葉のとおりだし、一人一人どころではなく我々の
次の世代にも引き継がれることでもあるとおもうのです。チュンランが、最後ににっこり微笑ん
だことは、この作者の勇み足であると同時に、私達への問題の投げかけでもあると受け取りたい
。

さて、先日、寺に子供達がたくさん来た時、私はこの話をした。常時このような現実の中で、「
あなた達はどうか対処したら良いでしょうか？どうあなたは心がけたら良いでしょうか？」と、問
い掛けたことがありました。

「答えは、あなた達一人一人の問題ですから、現実のあなた方の行為や出会いには、つねにこの
問題が隠されていることとなります……あなた方一人一人の行為や出会いは、つねにその後が結
果として現れ、その結果は次の行為や出会いの問題を引き起こし、果てしなく続いています」と
。

「私達は、過去から未来へと続く時間の連鎖の中を、常に結果を問題とされながら、時の流れに
ただよっているともいえるわです」と。

子供たちは不思議な顔をしていた。

このような状況の中で、わたし達の生きる決断はただ一つです。時間の連鎖の中で、一つ一つ断
って、結果に左右されずに生きること、そのことに心がけて、対処できたらどんなに、結果に左
右されずのわずらわしさから開放されることでしょう。

幼くして日本脳炎を患い、知恵遅れと言われ逆境を生きてきた女性がいました。その後、彼女は
右半身麻痺となり、杖を片手に歩こうとするのですが、長い時間立っていることも事もできず、
言葉も不自由に、考えもうまく言えずに、悲惨な状況にいることは確かなのですが、幸い妹が、
息子達が、息子の嫁達が懸命に彼女を支えていました。

明るく子供以上の童心は、見る者を微笑まします。残念なことです、今年、彼女の老母が亡
くなってしまいました。母親にとってその子の不憫なことは言うまでもありません。彼女も子供
のように、母親は恐い存在で、母親の知らぬところで転んでも、母に心配かけたくないためか、
怒られるのが嫌なのか、話すことができないのです。2、3日たって痛んで腫れてきて、「痛い
！痛い！」と、言う彼女に「どうしたの？」と、問いかけてはじめて、彼女は転んだことを話す
のです。転ぶだけならまだしも、車にぶつけられた、自転車に接触区された、道がわからなかつ
たと、数限りなくありました。そんな彼女も、今、58歳です。

彼女は、何事にも一途しか生きられず、純粹に物事を見つめ、考えます。その彼女の母の死に、
彼女は見事に悲しく涙を見せてくれました。彼女の母に対する気持ちは、58歳になっても、老
いた母ではなく、子供の頃の母そのもののような気がしてなりません。普段の彼女は、今日のこ
とを、悩みや楽しみを明日に残すことはしませんでした。葬儀が終わって、翌日から、彼女は母
の遺品の整理に没頭しています。片付けるという行為をひたすら遂行する彼女のひたむきさに、

まわりの家族はほっとします。彼女を心配していた私は、彼女に、本当の禅を見る重いです。目前のことを、ひたすら行ずる姿は晴れやかに、後を残さない。

凡人の我々は、現実の在りようを、厳しく見つめ、結果を結果として受け入れて行く。今を生きるということは、時に辛く苦しく、悲しく寂しく、不安や恐怖にいらいらすることも、今の私なのだと思うことが、今を生きている姿なのです。

川（平成10年9月17日）

深川はかつて無数の運河が交差し、地方の都市と結ばれていた。神戸や横浜は外に海をもち開け、内に山を持つことにより都市の景観が落ち着く。深川は海の中に都市を作ったように、運河が街の景観を青く際立たせていた。その運河も道路のために埋め立てられ、海が沖へと遠ざかってしまった。もちろん運河はいまだ数多く顕在であるが、市民生活でかつて頻繁に足代わりに利用されていた時とは様変わり、護岸を高くあるいわ防護ネットを張り巡らされては、再利用して良いのかわからずに、取りあえず散策道路を作って水と親しむ運河をアピールしているかのように思えてしょうがない。

『隅田川は、源流を埼玉県奥秩父・大滝村にある甲武信岳の真ノ沢に発し、秩父市・熊谷市・浦和市などを経て、東京の北部から東部の下町一帯の沖積平野を流れている。都市の中の代表的な川で、長さ23.5km、流域面積673.4km²の一級河川で、新河川法によって荒川放水路の派川となった。東京都北区と埼玉県川口市を結ぶ新荒川大橋の下流に岩淵水門がある。この地点で荒川は隅田川を分流し東京湾に注ぐ。上流より、北区・足立区・荒川区・墨田区・台東区・江東区・中央区の川の手を流れる感湖河川である』（すみだ川No.3 島正之氏著《新しい隅田川の創造に向けて》より）

川と言えば水源地があって、上流、中流、下流、海へと流れているはずである。永代橋の上に立っていつも思うのだが、この川は水が流れているのだろうかと思いに思ふ。もちろん波頭のようなものが立っているかのようなのだが、これが流れなのか、航行する舟の波なのか、海の波によるものなのかしらない。川辺に降りられず、水を触れられない川は人が拒否されているようで、可哀想だ。上流を感じられない川は寂しい。川の声を聞きたいが、それは無数の騒音にかき消されてしまって紺碧の水面を光らせているだけだ。だいたい舟の行き交いが少ない。夜、色々な色の提灯をつけた屋形船が行き交うさまは、川がゆったりと舟を浮かべて遊んでいるようだ。たまに舂や遊覧船が通るがその数は少ない。だいたい舟の止まる場所が無い。人に聞くと川の流れはけっこう速いそうで、水質もだいぶ良くなったと言う。

『亀久橋の南詰から、わざと遠まわりに、先日の滝久蔵が通ったとおもわれる道すじをたどり、秋山小兵衛は、佐賀町代地の掘割沿いの道へでた。

細い運河に架けられた小さな橋の向うに、陽岳寺の土塀が見える。左へ視線を転ずると、黒江橋の南詰に、又六から聞いていた三好屋という居酒屋がある。

陽岳寺の門前には橋が三つ。掘割には、ぎっしりと舟がもやっていた。その中の一つから顔をのぞかせ、陽岳寺のほうをながめていた男が、小兵衛の姿を見るや、立ちあがって陸へあがり、二つの橋をわたって声をかけてきた。……』

池波正太郎氏著《剣客商売・浮沈》の陽岳寺界隈の文章であるが、人の気配が川そのものと密接にかかわっていて、風情と活気がある。

深川の隅田川を、永代橋や墨田大橋の上からながめて思うことは、ゆったりとしていて、時間が

止まって見えることだ。まして夜の青い永代橋の眺めは絶品である。橋の青さに映る川の波のゆらめきは、いつ眺めてもあきない。

私達現代人の日常は、常にこの時間と言うものに追われて、追い詰められ、正確に時をどう克服していくかが、いつでも非常に大きなテーマを持つ。赤ちゃんが何時にミルクを飲むのか、幼稚園の登園時間、降園時間、塾や習い事の時間、現代人は生まれるや、すぐに時間と格闘し始め、それは死ぬまで続く。時のスピードは時にゆっくりと、速くを繰り返しながら、私達の体内に時間が巣くってしまう。人が誕生し、成長し、老いる、そして病気、これら総てにいつも時間がかかわっているように思える。願いや希望、祈りの中にも時間はかかわっている。考えてみると、私達が充実している時を過ごすとき、つかの間の安らぎを得るとき、幸福なとき、ほっとするとき、時間は影のように表を見せない。もし時間という概念が無かったら、私達は私達そのものをより実感できるのかもしれない。時間が私達を束縛し、苦しめ、悩ますといってもいいだろう。

我々臨済宗の修行道場では、総ての時を鳴り物によって知らせる。修行僧は基本的に時計を持たない。雲板が鳴れば食事の用意が出来た。そして鳴り方によって食事に来い。時を知らせる音は材質や鳴らし方によって修行僧を一斉に動かす。つまりは、時は音に置きかえられて、音は修行僧を次なる行動に走らすということになる。

さて仏教の時間論は過去いくつかの部派や学部を経て、鎌倉時代より現代の間は、“永遠の今”を主張としている。現在を中心に過去と未来を持つ現代人に、絶対現在を認識することはとても難しいことです。過去や未来は存在せず、ただ今が在るのみと、自分を離れて時間や存在はあり得ない。存在するものはすべて時間としてあると、そしてその時間は“ただ今”があるのみであり、その今のまっただ中には、時間は存在しないことになる。瞬間とは存在しない時間であると同時に、総ての時が含まれるという時間でもあると思うのです。

隅田川の橋の上に立つ私を今の私とすれば、上流の川は小さい頃の私であり、これより下流の川と海はその後の私であり、川は私の総てであると言え、上流の川は眼には見えないけれど、今も流れて存在し、下流の川は東京湾に今流れ込んで同時に存在いたします。自分が今存在すると言うことは、総てが存在して、私を表現してくれていると思うのです。

有時（時の構造）（平成12年2月5日）

《星雲》

宇宙に散らばる星たちの中に、無数の星をちりばめた星雲がある。その姿を望遠鏡が捉えた写真を見てみると、拡散しているのか、収縮しているのか解らないが、渦を巻いている。風呂の湯を抜くときの渦巻きが、地球の自転と関係していることを思えば、星雲たちの渦も、回転していることそのことが、時が渦を巻いている姿と思える。風呂の湯の回転する姿と、星雲の回転する姿は、回転していること事態は同じなのだが、そして今見ているということも同じなのだが、何億光年かに遡っての過去の姿の回転と知る時、過ぎ去った時間の経過をふまえて、時を考えさせる。

今、正に見るという、過去と現在の交じり合う場所が、望遠鏡であり、写真であり、肉眼であることを知れば、現在がなければ、過去を窺い知ることはできない。とにかく、現在より時を遙かに遡ること、その時の過去の姿を、現在に、過ぎ去っていったものとしての姿を、私達は見ていることになる。

今、回転している姿を見つめている私には、同時間にも存在するだろう姿は見えず、あくまでも過ぎ去った時間の姿であることは間違いがない。この意味で、過去が現在に於て在ることは、この実在を問題にする。

今、実在するものは不可知なものとして、今、何うことが出来ず、かつて実在していたものを、今、存在するものとして、目に見ることの不可解なる事実は、面白い。星達にとってみれば、そんな過去来歴を含んで、私達を、今、ここに、照らしているということになる。しかし光の旅を考慮しなければ、風呂の渦巻く姿と同じに、距離を問わずに、同じ渦を巻く姿であることに変わりはない。

遠く渦を巻く星雲を見て、その光景は、何億光年にわたって漆黒の闇を照らして旅を続ける輝きに違いないのですが、私達に見えることは、時間としてではなく、空間を通して、遙かなる生命体として見えているということです。時はいつも、空間に於いて捕まえることが出来て、それは見ることができる姿を伴っていると思います。空間に於て時はあり、時間と空間のクロスすること、そのことは、今、この表現であると思います。この意味からは、遠く渦を巻く星雲も、風呂の渦巻く姿も、共に私達の今、ここを表現していると言えるでしょう。

私がいるということは、その周囲にはたくさんの物質に囲まれているということです。時計があり、茶碗や机椅子、テレビにパソコンとその場所に静止しているもの、水道ガス電気電話は、チューブの中や線そのものの中を流れて行く物があります。空中には、見えないけれども電波が行き交い、風が小さな物質を運びます。それらはすべて時を含んで在ります。茶碗は、家庭のガラス棚に置かれるまで、数奇な軌跡を描いて在るべき場所に、今在るといえます。客の訪問が

あり、私とその茶碗に手を伸ばそうとする時、茶碗は未来に茶が注がれ、客に呈されるという、未だ来ぬ時を内在して、今、置かれて在るといえます。空間も時なり、時は空間なりといえます。

《椿》

椿は、今年の冬は暖冬だったせいか、なかなか花を咲かせませんでした。今冬は、庭や鉢植えの椿にとって、いかに寒さが必要かよく理解できたことでもありました。寒くなるということが、椿を咲かせるからです。この冬一番の寒さが訪れたときの朝、椿の花が咲いたのです。この時、桜の枝を見上げると、桜は、この寒さをじっと堪えています。桜にとっては、寒さが必要なことであり、これを咲くための条件ともいいます。寒さの後の、暖かさに花を咲かせるからです。

椿にしても、桜にしても、木があるということは、木それ自身が存在することであり、大地や、虚空も存在しているという事実を含んでもいます。木々が、大地に根を張ることは、大地が木々を支えることでもあります。虚空は、木々の枝を開く空間を提供し、太陽は、芽を伸ばし伸びる方向を誘導します。照らすことと、照らされることは、同時に進行し、誘導し、目的を遂行するという行為を含んで、椿は花を咲かせます。誘導するは、芽は天を目指し、根は地中に潜みます。目的を遂行するとは、生きるということであり、このことは死を含んでということでもあります。そして大地と虚空と太陽は木々と一体になって、空間を構成します。これを世界と言い、全体と言います。

世界を、全体を構成する仕組みは、矛盾を含んで、同時に、成り立っているということです。仏教の指摘する立場とはこのことです。

暖かさや寒さも時を含んでいると言えます。花が咲くことは、植物の表現ですが、また、生という意味を持ち、その時々々の表現こそ、生きていることの意味だとも思います。花が咲かないときも、表現に変わりはないのですが、結実ということを考えてみれば、次の世代に向かって、表現していることは、時の開花でもあると思います。

もちろん花が散って、枝が伸びるとき、その枝には、次の開花のための行為があります。そのことを時間でいえば、植物も未来に開花するという時間を含んで、今を生きているといえます。そして、何のための開花かと言うと、植物単体は、いずれは枯れて、死滅するということを含んで、開花するといえます。植物に死という時があるということは、死という時には誕生という時を含んでいるということも事実です。新たに生まれた、その植物の若芽には、過去という時間を含んで、若芽を成長させるといえます。すべてに時が関わります。

古人の言葉に「この一番の寒さが骨に徹するのでなければ、どうして梅花が全世界に香ることができようか」と、寒さを修行に譬えるのもよいのですが、梅が香ることが、この一番の寒さの表現でもあるのです。

《同時性》

仏教の同時性とは、一枚の紙を例にとると、紙は表と裏と合わせて、一枚の紙を構成するという

ことです。表は、裏が在って、始めて表であり、裏は表が在ってこそ、裏といえます。表は、裏を自らの存在の根源とすることによって、表として自立することができます。ここに、表は裏を含んで、表と言う立場を、否定を媒介として肯定するという、仏教の立場があります。兄弟、夫婦、親子、生徒と先生、上司との関係、顧客との関係、友達との関係、縁起的関係は、単独に於て独立していると言うことはないのです。独立も他を根拠にして、独立すると言うし、最近よく使われる言葉で、勝手にしても、他を根拠にして、勝手であるのであって、その勝手は、あくまで他があることを前提としている。他を忘れた勝手はあり得ないことになり、勝手に意味すら分かっていないといえます。他を根拠に持つということは、自己を独立の根拠にしないという意味であり、自己を否定する意味を持ちます。肯定と否定は、肯定は否定を含んで、肯定され、否定は肯定を含んで否定が成り立っています。

存在するものと時間とは、やはり否定的関係において、成立しているといえます。縁起的、因果的關係に於いて、総てのものは独立してあることはあり得ない。時も、在るということも、単に独立してあることはなく、時は在るに含まれ、在ることは時を含んでと言うことでしょう。

過去、現在、未来という直線的な、人の時間グラフを作った場合、過去の経緯が今を表現し、未来の出来事や約束、目標が、今を表現して、今を彩り、今の行為が、過去の履歴を評価し、未来の出来事や約束、目標を変化させるとしたら、今こそが、過去や未来の溶融された今は大きな意味を持つと同時に、過去も未来も大きな影響で今を支え、導いていると言うことを、以前に書きました。

仏教の立場は、今、ここが絶対の現在ですが、その絶対は、過去を根拠にして、未来を根拠にしてと考えたとき、現在は絶対を否定するということを含んで成り立っています。このことを知って、過去や未来を変化する力を持つといえるのではないかと思うのです。

時間軸に、人の生死を乗せて考えてみた場合。先ず、過去は、生まれる前の私です。禅では、父母未生以前本来の面目といいます。現在は、人が生きている生涯の時間帯ですから、何十年かの人生です。そして未来は、私の肉体が無くなる、死です。死と死後は微妙に違う内容を、私達に投げかけて来ます。死とは、存在そのものに関して、私達の意識を揺るがせます。死後は、どちらかと言うと、私の居なくなった後の、時間的経過後の問題を指すように思えるかもしれません。いずれにしても、死や死後も、時間そのものとして在ると言えます。

生まれる前も死んだ後も、共に私の肉体を持たないということは、共通のことです。このことは、現実的に、肉体を持って、手にすることの出来ないことでもあります。しかし、生まれる前の時間や死んだ後の時間は、決して掴むことは出来ないけれども、今を生きるということの中に、その時間を含んで、我々は、今を生きていることにもなります。

人の生涯の時間は、決められませんが同時に、ついさっきまでの自分すら、もはや手にすることの出来ない自分です。過去としての自分としてあったと言えます。今とは時間軸を真っ二つに切断した鉞（なた）と考えると、前後があるだけで、生まれる前も、死んだ後も、共に前後の中の一時点ということも言えます。生まれる前も、誕生してより今以前も、見えないものものとして

、時として在るともいえます。

今とは、行為であり、恋愛であり、創造にふけるということであり、生きていることに結びつくあらゆる行為の真っ只中の今です。時間軸とは、もともと人の生死の軸でもあるのです。

時の旅人（平成12年2月1日）

諸行無常。諸法無我。涅槃寂靜。

仏教はここから出発いたしました。

諸行無常は、時間です。

諸法無我は、空間・存在です。

時を語るには、空間・存在を語らなければなりません。空間・存在を語るには、時間を語ることにあります。

諸行無常を”今”とし、諸法無我を”ここ”としてみれば、そこに、”わたし”が在ります。その私は、時間と空間・存在により成り立つといえます。そこに、世界や宇宙があります。

ヨハネによる福音書14章は、世に言うところの最後の晩餐である。

「わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている。」というイエスに、トマスがさらに尋ねる。

「主よ、どこにおいでになるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道がわかるでしょう」。

イエスは、「私は道であり、真理あり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。

もしもあなたが私を知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。」と語る。

そしてピリポに、イエスは言う。「わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。」

時の旅人（平成12年2月1日）

東洋、特に中国、韓国、台湾は道教・儒教・仏教の影響を多く受けていることは、誰も否定しないことでありましょう。そして、知らず私達の日常に根を下ろしているといってもよいでしょう。その中で特に、道への思いは格別であると思います。そして、道があるからには、その道を歩く旅人の思想があって不思議ではない。西行、芭蕉、一遍は旅自身を、義経伝説、平家物語はその旅をする人物達を物語りにすることが出来るでしょう。道は極まって、茶道や武士道に、旅人は道に生きることから、それぞれの人生へと繋がっているかのようです。

遠くイスラエルに始まる、キリスト教、またイスラム教自身にも、巡礼の思想があるかぎり、道はあるのでしょう。イエスのトマスにこたえた言葉こそ、道の思想であり、巡礼の思想でもあります。

では、どう違うのだろうか。同じ旅人でも東洋と西洋の大きな違いは、時にあると思う。

禪に行雲流水がある。行雲流水は諸行無常であり、ここに時が潜む。

仏教ではと、言った時、世界は仏教的なもの、そうでないものと二分していることに気づく。

何故か言っている自分の中に、仏教でないものが巣くっているのだろうと、きづく。しかしながら、仏教は世界の有りようを語り、仏教そのものが真理であることから言えば、言い出しは、「世界の真実は」となり、このことが仏教であるのです。

《法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸仏あり、衆生あり。

万法ともに我にあらざる時節、まどいなく、さとりなく、諸仏なく、衆生なく、生なく滅なし。

》

道元は現成公案の冒頭において、世の中の総ては、そして、世界の成り立ちの法は、縁起なるが故に、仏法なる時節と言い、時節は時間として、総ての存在するものは、時間を持たないものはなく、したがって時として在るものにおいて、迷いあり、悟りあり、修行あり、生あり、死あり、諸仏あり、衆生あると解く。

在るものは、時として在るといふ、壮大なテーマで、我々の眼を開かす。存在するものは、意識であり、物質であり、生であり、死であり、そのものが仏法なる時節と断言するのです。また、因果生滅の法も、時によって成り立つことを思えば、時は因果生滅の法を含んで、成り立っていることにもなる。

次に、「自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。」という、空・無の立場、諸法無我の立場から、世の中の総ては、そして、世界の成り立ちの法自身も、決まりはなく、実体もない時節と、縁起の故に空無という。ここにも時節は時間として、万法ともに我にあらざる世界を表現しています。我にあらざる時節とは、無であり、否定であり、その時節もなく、時節そのものが否定された時こそ絶対の現在として、仏法そのものであり、そこには迷いなく、悟りなく、修行なし、生なし、死なし、諸仏なし、衆生なしと解きます。さらに、迷いなく、悟りなく、修行なし、生なし、死なし、諸仏なし、衆生なしは、時の表現にもなると思うのです。

仏教が鋭く示すことは、時に違いないのです。そしてそれは常に具体的な事実です。その故に、脚下照顧と言い、一期一会であり、前後裁断であり、前三三後三三であり、此れ何者ぞと問われた自己の今・ここ、すなわち、現在を指し示すのです。その自己の現在の連続は、現在が絶対の現在として独立して、非連続に連続して、しかも断にして不断の矛盾的相即です。時は流れるものばかりではなく、流れないものとしてもあるとは、このことを言い、このことを知ってこそ、趙州は十二時を使うと宣言いたしました。

時は、すべての存在するものであり、すべて存在するものは、また時である。そのことは、真理であり、法であり、不変のしるしでもあります。

東洋の英知は、時は、道である。そして、道は、時であると言います。

私達は、『時の旅人』であるのです。

揺れる木々の葉

夏風邪をひいたらしい。

何となく熱っぽい、一日中うだうだと、家の中にいる。本を読もうとしても、すぐ眠くなってしまふ。

市販の薬を飲んだせいだろうが、体がだるく、少し寝っ転がって窓越しに木々の葉が揺れているのが見えた。

少し眺めている中に、刹那を生きている私が、何で、葉っぱが揺れているのが見えるのか、ちょっと不思議に思えた。

これってどういう意味があるのだろうか。

私の目は、葉が風に揺れているのが見えるのだが、これって時間か？

確かに、生きるって言うことは、揺れる木々の葉の時間の蓄積と言うことが考えることができる。

冬には、葉が落ち、春一斉に新緑の緑を輝かせ、夏は、緑陰の緑に暑さをしのぎ、秋にはその葉も色づいてやがて、季節は移っていく、

刹那とは、1秒の75分の1だそうだ。

この人生の速さはなんだ（平成14年12月26日）

子ども達の様子を見ていると、否、それどころではない、12月が始まったと思ったら、もうすでに年末です。畳替えをすることを決めたのが、11月16日ご祈祷の日、総代さん達の言葉です。半分以上は終わり、28日には終わっています。庫裡の壁の塗装をするのも、14年ぶりで、すでに終わっています。

まるで駆け足のように過ぎ去り迎える季節の、時計の針の進み方は同じ筈なのに、どうして、こう過ぎ去り迎える季節の時間が速いのか。今日を何とか充実して明日を迎えようとしながらもいつも昨日を引きずりながらの生活に、禅僧たるものの心構えがいつしか消えている事に気付く。それにしても、世のニュースのどうしてこう毎日毎日切りがないくらい話題はつかないことに何の疑問もわかなく、昨日のニュース、一昨日のニュースの続きにと、聞きたくなくとも耳にし、読みたくないのに読んでしまう。気がついてみると北朝鮮の拉致問題の衝撃的なニュースもすでに、核開発という新たな衝撃にかすむかのようです。ただ目の前の事件に目や耳を貼り付けて、この結果、何と夏が過ぎ去って冬の気配が濃厚な季節を迎えているではないか。この感覚、これがよく言う『年を取った』ということなのだろうか。

しかし、年を取ったと言うだけで片づけてよいものか、この速く感じることは、あくまで感じることであって、時計の針の回転は同じままであり、速くなったり、遅くなったりしたら、その時計は壊れていることを指します。止まってしまえば、電池がないか、ゼンマイが切れたかです。何を基準として、速く或いは遅く感じるのだろうか。この速さを感じる時間の基準は、様々あるのでしょうか。昨日と比して、年初と比して、昨年と比して、十年前に比して、二十年前に比して、漠然と子供の頃に比してと基準は数多くあります。ただ漠然と、「速くなった」と感じるだけなのですが、他に、自分の年齢によっても差違は大きくあるのだと思います。

しかし、絶対に言えることは、時間自体には速さはないはずで、時間に速さはないものの、人の生活とかには、速さがつきまといまいます。特に社会人になってからは、なおさらスピードが増すこの感覚、はっきり対照として比較していないのに、何かの挨拶でもつい「速いもので、この子は、この間までまだ子供だったのに、もう二十歳をとっくに過ぎて……」とか、「団塊の世代が社会に出て、いろいろなブームや現象を起こしてきたのですが、本当に速いもので後数年で、彼らも60歳を越えます。これまた大きな問題を含んで、いろんな意味で彼らの社会的意味は大変世の中にインパクトが強い、まるで駆け足のようにこの世代は社会を変えたと言っても良いでしょう」とこの“速いもので”という言葉は頻繁に使われます。この夏も暑い暑いといいながらも、涼しげな風を身にうけた瞬間、秋の到来を告げる風に、「もう秋が来ている」と気付いた途端、速さが誕生していると言えます。

春夏秋冬、これも一年という規則正しい時計の文字盤と違いはない。春夏秋冬の各行事を含めると、文字盤は更に楽しいかも知れない。逆に季節の文字盤があればあるほど時は速く流れると感ずることもあるでしょう。ワールドカップを見ていて、ヨーロッパの古老が「何年のワールドカップの時、娘が結婚し、その前のワールドカップの後、誰某が亡くなった」と言ったとき、それも自分の過去に過ぎ去った懐かしい思い出時計の針が、文字盤を刺した時間と思いました。人は、こうして文字盤を知らぬ間に生活の中で創作しているのでしょう。

ふと四季のない国、一年が雨季と乾季の国、北欧のような国を考えを馳せようと試みましたが、思い当たるものはないけれど、巡ってくる行事の数が、少ないとどうなるのだろうかとも思います。多分、日本でも行事の数は減少しているのだろうと思うのですが、やはり、基準となる最小の文字盤は、季節なのだと思います。

我々は、やはり季節によって動かされていることが多いと思うのです。子供が夏休みの林間学校から帰ってきたり、大学受験に夏休みを返上している姿に、身体を真っ赤に日焼けして海での出来事を語る子供の姿は、季節そのものとしての時計の文字盤です。そしてその文字盤は、私が体験した季節の出来事であり、それはいつもその時であり、今なのです。不思議なことに知覚それ自身が現在であり、今には記憶や思い、想像や思案はなく、今が過去になって登場すると言えます。今はいつでも体験において今であり、私から見える範囲の、聞こえる範囲の狭い空間のことなのです。その私の口から出る言葉の「速いもので……」は、今の知覚の過去を振り返っての速いと感じる言葉です。

「もし心あるいは心の中の理性以外には、数える本性をもつものが何もないとするならば、心が存在しない限り時間は存在しないだろう（自然学）」と言ったアリストテレスの言葉は、私という自己がなければ、そして“今”という主観的な判断がなければ、時間は存在しなくなることを指さないだろうか。「今何時？」と聞く今は、私自身が今を問うことによって、今しか指さない時計でもあると言えますが、時間は後からついてくるような気もする。また今はくせ者です。実は、今と知覚した瞬間、過去と未来が出現してしまうからです。その過去は生まれてより今に至るものですし、私にとっても、息子にとっても人生の全部を指してしまいます。このことは今の経過が過去であり、だいたい『今』を正しく捉えることは、主観では無理なような気がする。主観で捉えない今、それが、私たちがよく言う、絶対の今なのでしょう。でも、絶対の過去や未来という言葉は聞いたことがありません。これは、絶対の今しか知覚できないとも言えるのではないのでしょうか。

人が、言葉を発して話すとき、歩くとき、泳ぐとき、モノを造るとき、一本の線を引くとき、行為する、そこに時間があるといえます。早い遅いは、人の自我の流れです。話し始めて止むまで、歩き始めて止むまで、引き始めて止まるまで、その行為こそが、時間です。時間の流れとは、自我の流れであり、体験の流れでもあります。この一連の流れは、知覚であるわけですから、ゆっくり引き、速く引くとき、そのゆっくりと速くを意識させるのは、時間でありながら、実は自我がなければ、時の流れは無いとも言えます。

存在するものは時を含んであり、時そのものは、存在するものに含まれるという釈尊の縁起觀の教えは、時間そのものの根拠は、時そのものになく存在するものにあるという考え方もあります。これは、同時に、存在するものの根拠は存在するものにあるのではなく、時にあると示します。「時計の成立は“今”という自我の意識に依存している」と、哲学者の植村恒一郎先生が『時間の本性（勁草書房）』の中で指摘されていることも、今ここが自我であり、同じことを指すようです。

十年一昔と言うように、十代、二十代、……七十代、八十代というのも速さの基準だと思います。年を取をれば取るほど、四十年より五十年、五十年より七十年、八十年と過ぎ去るほどに、速く過ぎ去る過去を持ちますが、それぞれに想い出は、時間の内容とも言えます。

人生の速さを測るときに、分母に来るべき数字を考えてみたとき、短距離ランナーは100mを何秒で走る、野球の投手は一秒間に150km/hの速度の玉を投げる、この樹木は一年で何m伸びると、距離や時間が基準に来ることを知ります。兎は亀より50m歩くのに何時間か速く走ると言う場合は、50m亀の歩む速さを基準に考えるのでしょうか。人が年齢の重みを量る場合は、10代の少年と八十代のお年寄りを年齢をかまわず比較した場合、それぞれの人生のスピードを測る手段はないだろうか。

生まれてより今に至るまでとすると、この言葉は誰にでも共通する。十歳の子供も五十三歳の私も同じである。しかし、ここに年齢を持ってくると、子供にとっては私の年齢に達するまで、あと四十年と年月がなければ、生まれてより今という私の尺度になれないとするなら、想像を絶する長さになる。生まれてより今を基準とすれば、十四年より五十三年の方が、量が多いことになり、過ぎ去った年数が速いと感じられる。しかし、本当に過ぎ去ったと言えることだろうか。道元は正法眼蔵の中で、「薪（たきぎ）は、灰となるにあらず」と言います。薪は薪で独立していて、前後裁断。灰は灰で独立して、前後裁断。比較するものではなく、十歳の自分は独立していて前後裁断。五十三歳の私も独立していて、前後裁断。比較したとき、そこに量が現れ、時間が誕生してしまうと言うのです。

私の下の子どもに、「時間を忘れているときってどんな時だい」って聞いたところ、「マンガ読んでいるとき。カラオケで歌いまくっているとき。授業の休み時間。」と言った。子どもは更に言います。「午後2時から6時までと、6時から寝るまでの時間では、6時から寝るまでの時間が速く過ぎる。」と言いました。2時から6時を、私が小さかった頃に、6時から寝るまでを私の今の年齢の時とすれば、逆に、小さかった頃のほうが、時はゆっくり流れていました。しかし、今が速いからといって、充実していたかと言えば、少し違うでしょう。

人は、生まれてより今が、体験の流れであり、生涯ですので、20年より、50年80年が、圧倒的に自分自身の体験する量が多くなり、それが速さとなります。そして、何故か、日中の時間も速くなっているように感じます。それが、今の私の速さなのですが、自分が60歳になり、

敬老会のお祝いの該当者であることを名簿で眼にしたとき、まだ早いだらうと、ギャップが生まれます。しかし案外、外から見ている人は、姿形、物腰や言葉使いに、見ているものです。でも気付かない自分が、何かの拍子にそのギャップが埋まったとき、年を取ることを嫌と見るか、受け入れるかでは、その後の何年、何十年が違ってくることでしょう。

年齢を加えるほどに、人生のスピードが速くなるとは、年輪の重みがますことでもあります。人を年輪を重ねた木に譬えて、巨木や古木の歩く姿を見て、若者はその道路を歩む姿を邪魔に見えてしまうでしょう。ゆっくり歩むお年寄りの歩行に、その差違が際立ちます。だって、猛スピードで駆けているはずの、その古木や巨木が幼子に発する言葉、「危ないから駆けるのではないよ！」に、人生の速さをかぶせてみると、違う風景に見えるのではないだろうか。

法句経より一時の旅人（平成15年2月4日）

法句経より、時をテーマに集めてみました。

『神々との対話（サンユタ・ニカーヤ）岩波文庫 中村元訳』より

葦 第四節 時は過ぎ去る

傍らに立って、その神は、尊師のもとで、この詩句をとらえた。

「時は過ぎ去り、[昼]夜は移り行く。青春の美しさは、次第に[われらを]捨てて行く。死についてのこの恐ろしさに注視して、安楽をもたらす善行をなせ。」

尊師いわく。

「時は過ぎ去り、[昼]夜は移り行く。青春の美しさは、次第に[われらを]捨てて行く。死についてのこの恐ろしさに注視して、世間の利欲を捨てて、静けさをめざせ。」

葦 第十節 森に住んで

傍らに立って、かの神は、次の詩句を以て、尊師に呼びかけた。

「森に住み、心静まり、清浄な行者たちは、日に一食を取るだけであるが、その顔色はどうしてあのように明朗なのであろうか？」

尊師いわく。

「かれらは、過ぎ去ったことを思い出して悲しむこともないし、未来のことにあくせくすることもなく、ただ現在のことだけで暮らしている。それだから、顔色が明朗なのである。ところが愚かな人々は、未来のことにあくせくし、過去のころを思い出して悲しみ、そのために、萎れているのである。刈られた緑の葦のように。」

孤独な人々に食を給する長者 第七節 スブラフマン

傍らに立って、〈神の子〉なるスブラフマンは、尊師に対して、詩を以て話しかけた。

「この心は、常にあわてふためいている。この心は、常に怯えている。未だ起こらない未来の事柄についても、またすでに起こった事柄についても。もしもおびえないでおられるのなら、お尋ねいたします。それをわたしに説いてください」と。

尊師いわく。

「さとりに至る実践の修養のほかに、感官を制御することのほかに、一切を捨て去ることのほかに。生ける者どもの平安を、我は認めない。」かれは、その場で姿を消した。

『仏弟子の告白（テーラーガーター）岩波文庫 中村元訳』より

（人間の個体生存という）小さな家は無常である。わたくしは[幾多の生涯にわたって]あちこちに繰り返し家屋の作者（つくりて）をさがし求めて来たが、生涯をくりかえすのは、苦しいことである。

『縁りて起こること（ブツダのことはIV講談社）池田正隆訳』より

縁

2 「比丘たちよ、私はきみたちに、“縁りて起こること“（縁起）と、”縁りて起こることによって生じた法“とを説こう。それを聞きなさい。よく心にとどめて考えなさい。私は語ろう。」

3 「比丘たちよ、縁りて起こることとは何か。比丘たちよ。出生にとって老死がある。如来がこの世に出ても出なくても、この道理は成り立っている。法として成り立ったものであり、法として確定したものである。これが縁りて起こることの真理である。如来はこれを深く悟り、明らかに理解する。深く悟り、明らかに理解して、それを宣言し、説き、知らせ、示し、開顕し、分別し、明白にする。そして『見なさい』と言う。

4 比丘たちよ、縁りて起こることとは何か。

比丘たちよ、出生によって老死がある。比丘たちよ、生存によって出生がある。比丘たちよ、執着によって生存がある。比丘たちよ、飽くことなく欲望によって執着がある。比丘たちよ、心による対象の感受によって飽くことなき欲望がある。比丘たちよ、心と対象との接触によって心による対象の感受がある。比丘たちよ、心と対象とを通ずる六つの知覚の領域によって心と対象との接触がある。比丘たちよ、精神的・物質的現象によって心と対象とを通ずる六つの知覚の領域がある。比丘たちよ、対象に向かって動く心によって精神的・物質的現象がある。比丘たちよ、迷える凡人の諸行為によって対象に向かって動く心がある。比丘たちよ、おろかさによって迷える凡人の諸行為がある。如来がこの世に出ても出なくても、この道理は成り立っている、法として成り立ったものであり、法として確定したものである。これが縁りて起こることの道理である。

6 比丘たちよ、それでは縁りて起こることによって生じた法とは何か。

比丘たちよ、老死は無常なもの、集め作られたもの、縁によって生じたもの、滅して尽きる性質のもの、衰える性質のもの、壊れ離散する性質のもの、消滅する性質のものである。

7 比丘たちよ、出生も、生存も、執着も、飽くことなき欲望も、心による対象の感受も、心と対象との接触も、心と対象とを通ずる知覚の領域も、精神的・物質的現象も、対象に向かって動く心も、迷える凡人の諸行為も、おろかさも同じである。

17 比丘たちよ、これらが縁りて起こることによって生じた法といわれるのである。

18 比丘たちよ、貴い弟子は、これが縁りて起こることであり、これらが縁りて起こることによって生じた法であると、あるがままに正しい智慧をもってよく見るのである。じつに貴い弟子は、『いったい、私は、過去時に存在したのか。それとも存在しなかったのか。なぜ私は過去時に存在し、またどのように存在したのか。私は過去時に何であって、何になったのか』と、過去を追うことはない。

19 あるいは貴い弟子は、『いったい、私は未来時に存在するのか、それとも存在しないのか。なぜ私は未来時に存在し、またどのように存在するのか。私は未来時に何であって、何になるのか』と、未来を追いかけることはない。

20 あるいは貴い弟子は、『いったい、私は存在するのか、それとも存在しないのか。なぜ私は存在し、どのように存在するのか。いったい私という衆生は、どこから来て、どこへ行くのか』と、ただいま現在時における自己のうちに、迷いが起こってくることはない。

21 それはなぜであろうか。比丘たちよ、貴い弟子は、そこにおいてこの縁りて起こることと、これら縁りて起こることによって生じた法とを、あるがままに正しい智慧をもってよく見るからである」

きみのものではない。

2 「比丘たちよ、この身体はきみのものではなく、また他人のものでもない。

3 比丘たちよ、この身体は以前の行為によって作り出されたもの、思念されたもの、知覚されたものと見るべきである。」

4 比丘たちよ、そこで法を聞いている貴い弟子は、縁りて起こることにこそ、じゅうぶんに真理にしたがって心を向けるのである。

5 つまり、『これがあるときに、かれがある。これが生じることにより、かれが生じる。これがないときに、かれはなく、これが滅することから、かれが滅する』と。

始めのない輪廻

世尊は次のように説かれた。

「比丘たちよ、この輪廻には始めがない。無明に覆われ、愛欲にしばられて、流転しつづけている衆生の始源は知られない。

4 たとえば、比丘たちよ、人がこのジャンプ州にある薪や草・枝・小枝を伐（き）って、一つのところに集めて、指四本の長さの方形をつくり、『これは私の母である。これは私の母の母である』と言って一本ずつ積み重ねるとしよう。比丘たちよ、この者は、母の母を数え終わらないうちに、ジャンプ州にある薪や草・枝・小枝を伐りつくしてしまうであろう。5それは何ゆえか、比丘たちよ、この輪廻には始めがなく、無明に覆われ、愛欲にしばられて、流転しつづけて、輪廻しつづけている衆生の始源が知られないからである。

7 それゆえ、比丘たちよ、すべての事物を嫌悪することこそふさわしく、厭離することがふさわしく、離脱することがふさわしい」

神々との対話 歓喜の園 第一〇節 サミッディ

1 このように、わたしは聞いた。或るとき尊師は、王舎城の〈温泉の園〉に住んでおられた。そのときサミッディさんは、夜の明け方に、立ち上がって、身体を洗い入浴するために温泉におもむいた。温泉で身体を洗い浴したのちに、上がって、一つの衣をまとい、身体を乾かしながら立っていた。そのとき、夜も更けてから、或る一人の神が、容色うるわしく、温泉を遍く照らしたあとで、サミッディさんに近づいてから、空中に立って、詩句を以てサミッディさんに話しかけた。

「修行僧よ。そなたは、欲するがままに食べないで托鉢している。そなたは、欲するがままに食べてから托鉢することがない。欲するがままに食べてから、托鉢せよ。そなたは〔青春の〕時を空しく過ごすな。」

サミッディいわく

「わたしは、あなたの言う〈時〉なるものを知っていません。〔わたしの考える〕時は、隠れているものであって、見ることはできません。それ故に、わたしは、欲するがままに食べないで、托鉢をするのです。わたしにとって、時が空しく過ぎることがありませんように。」

そこで、かの神は地上に立って、サミッディさんに次のように言った。

「修行僧よ。あなたは若くて、初々しく、髪が黒く、すばらしい青春をそなえていて、人生の第一時期に欲楽を享受することなしに、出家した。修行僧よ。人間的な欲望を享樂しなさい。現に目のあたり経験されることを捨てて、時を要するものを追求するようなことをなさるな」と。

「友よ。わたしは、現に目のあたり経験されることを捨てて、時を要するものを追及するということをしない。わたしは、時を要するものを捨てて、現に目のあたり経験されることを追及する。友よ。愛欲は、実に時を要するものであり、苦しみ多く、悩み多く、禍がここに甚だしい、と尊師が説きたもうた。この理法は、現に目のあたり体験されるものであり、時を要せず、〈来たり、見よ〉と言われたものであり、導くものであり、叡智ある人々が各自みずから体得すべきものである。」

『修行僧よ。では、尊師はどのようにして、『愛欲は、実に時を要するものであり、苦しみ多く、悩み多く、禍がここに甚だしい』と説かれたのであるか？『この理法は、現に目のあたりに体験されるものであり、時を要せず、〈来たり、見よ〉と言われたものであり、導くものであり、叡智ある人々が各自みずから体得すべきものである』と、どのようにして説かれたるものであるか？』

「友よ。わたしは出家してまだ間がない、今到来した新参者です。わたしは、この教えと戒律とを詳細に説明することはできません。今、かの尊師、拝まるべき人、正しく覚った人が、王舎城の〈温泉の園〉に住しておられます。その尊師のもとにおもむいて、この意義をたずねなさい。

尊師があなたに説明なさったとおりに、教えと戒律とを受けたもちなさい。」

「修行僧よ。かの尊師は、他の大威力ある神々に囲まれておられるから、わたしが近づくことは、容易にはできません。もしもあなたがかの尊師に近づいてこの意義をたずねてくださるならば、われらもまた教えを聴くために参ることができるでありますよう。」

「友よ。承知しました」とサミッディさんはその神に答えて、尊師のおられるところにおもむいた。近づいて、尊師に挨拶して、傍らに坐った。傍らに坐して、サミッディさんは、尊師にいきさつを話しました。

「尊いお方さま。もしもその神のことばが真実であるならば、その神はまさにここに、遠く隔たらないところにいるでありますよう。」

このように言われたときに、その神は、サミッディさんに、次のように申しました。

「修行僧よ。たずねよ。わたしはここに来ているのだ。」

そのとき、尊師は詩句を以て神に呼びかけられた。

「名称で表現されるもののみを心の中に考えている人々は、名称で表現されるものの上にのみ立脚している。名称で表現されるものを完全に理解しないならば、彼らは死の支配束縛に陥る。しかし名称で表現されるものを完全に理解して、名称で表現をなす主体が〔有ると〕考えないならば、その人には死の支配束縛は存在しない。その人を汚して瑕瑾となるもの（煩悩）は、もはやその人には存在しない。ヤッカよ。もしもあなたが、そのような人を知っているならば、告げてください」と。

「尊いお方さま。尊師が簡略に説かれたこの事柄の意義を、わたしは詳しくは知りません。よろしい。尊師が簡略に説かれたこの事柄の意義を、わたしが詳しく知り得るように、お説きくださいませ。」

尊師いわく。

「『わたしは勝れている』『わたしは等しい』また『わたしは劣っている』と考えている人は、それによって争うであろう。これら三つのありかたに心の動揺しない人には、〈勝れている〉とか、〈等しい〉とかいうことは存在しない。もしもあなたがそのような人を知っているならば、それを告げよ。神霊よ」

神いわく。

「尊師が簡略に説かれたこの事柄の意義を、わたしは詳しくは知りません。尊いお方さま。さあ、どうか、尊師が簡略に説かれたこの事柄の意義を、わたしが詳しく知り得るように、お説きくださいませ。」

尊師いわく。

「思慮雑念を捨て、迷いの住居におもむくことなく、この世における名称と形態とに対する妄執を断じ、結び目（束縛）を断ち、[煩悩の]煙りの消えた、欲求のないかの人を、この世とかの世とにおいて、神々と人々とが探し求めても、ついに見出し得なかった。天界においても、すべての住所においても。神霊よ。もしもあなたが、そのような人を知っているならば、教えてください。」

神いわく。

「尊いお方さま。尊師が簡略に説かれたこの事柄の意義を、わたしはこのように詳しく知ることができました。いかなる世界においても、ことばによっても、いかなる悪をもしてはならない。諸々の欲楽を捨てて、よく気をつけて、しっかりと念い、ためにならぬ苦しみに身を委ねるな。」

寂然不動 如春在花（寂然不動、春の花に在るが如し）

（平成16年9月19日）

秋彼岸、まだまだ蒸し暑く、それでも彼岸という季節が巡ってきてはいるものの、季節感のずれは、何とも致し方ない。暑さ寒さも彼岸までという言葉が、少しずつずれてきていることに、何故か、昔の言葉の魔力が、消えてしまいそうな予感に囚われる。それでも、夕刻の日の傾きは、彼岸という季節を物語っています。

今年の一月になくなったHさんの息子さんと、孫二人が連れ立って、彼岸の墓参に来たときだった。孫といっても、一人は来年大学を卒業、もう一人は、母親が問題児という高校3年生男の子です。その上の孫が、丈の長い甚平を着ている姿を見て、息子さんが、「これは、お祖父ちゃんの形見です」と。

その妙に似合う姿を見て、「これ、お父さんが着たら、親父スタイルに見えるのに、君が着ると今風のファッションになるから不思議だね。」

季節も、9月19日、いくら、これも残暑なのか、蒸し暑いとはいえ、最早、秋。

甚平のスタイルは、季節感として似合わないと思うのだが、今、旬の若者が着ると、妙に映えるから、面白い。そう言えば、あの夏場の雑踏で、8月の池袋の地下通路、ブーツ姿の若い女性を拝見した。見ていて、足が臭くなるのでは、靴の中が汗でグシャグシャになるのではないかと思ったものだった。それこそ、この季節にふさわしくないという思いが、グシャグシャのイメージを作る。この季節感という語感、その人の生き立ちの姿なのだろう。

そんな若者の着衣を見て、人間にとって着るものとは、人の季節を表現するものであると、つくづく思った。奔放に季節を表現するものが若者としたら、おじさんにとっての季節を忠実に現す着衣の甚平も、若者が着ると、その存在感が妙にまぶしく感じられて、嬉しい。

そして、この嬉しいと思う気持ちも、年を取ったことの証拠なのだろうと苦笑する。今の自分にはない、何事も自分のものとしてしまう勢いをみて、きっと、自分もおじさんという花を咲かせているのだろうと……。

「実は、昨年11月、母と別居しているんです」と、よく知る二人が墓参に訪れて話す。

「お母さんから聞いて知っていますよ。お母さんは気力も充実しているし、遠慮しながら、したいことをできない環境に、お互いのことを考えての、決心に、すごいひとですね」と。

息子さんは、「こないだなんて、男の人がお茶を飲んでるのにでくわして、すごすごと帰っ

てきてしまいましたよ」と。神奈川県S市から息子が住む、茨城県U市に引っ越してから、4年目、それでも、3年間は一緒に暮らしたものの、天性の人との交わりのうまさは、ウィンドゴルフに、地域の人とすっかり交わり、今では、リードするまでの変貌に、ただ感嘆するのみです。

私の長男と同じ大学に通うことを知ってから、親しく感じて、話をしていたのですが、お嫁さんが、「母が別居していたことを知り、ホッといたしました」話す。

まてよ、もしかして、子どもや孫達と同居していたときにも、同じ男性が来ていたと聞き、これは、もしかして、恋愛か。う～ん、そうだとしたら、すごい。いいとか、悪いとかということを超えて、想像できない。

蒸し暑くても、どうなっているんだろうと思っても、草花は、秋の草花が、ススキはすでに白い穂を出しているし、稲刈りは進んでいるしと、時間は、人の遅い早いの作るものとして、草花は、じぶん自身で時を作り出している。

人間も、それぞれに、老いも若きも、模様という時間を創りだしている。

自立

日本には、美しい季節があると、誰もが言う。

その美しい四季折々の季節とは、木々と水との光の輝き、花々の競う姿であり、山間の化粧の姿だろう。

季節の変化する、そのものを美しいと思う人もいる。

季節の私達になすことは、たくさんある。

季節の中で、冬の寒さは、私達に厚く防寒具を着させ、夏の暑さは、私達の衣類を剥ぐ。

夏休み、冬休みは、子ども達を成長させ、たくさんの思い出を残す。

春は気持ちを和らぎ、秋は物憂くさせる。

季節の旬の食べ物は、私達の味覚を保ち、育む。

自然は、時に、私達を脅かす。台風、地震、旱魃、洪水、火山、津波……………。

雨は、傘を差させ長靴を履かせる、強い日差しは、帽子を被らせる。

夜は、私達を眠らせ、朝は私達を目覚めさせる。

海や川やプールで、泳ぐ。

素敵な人に出会ったから、恋をする。

友達と話す。食べる。喧嘩する。仲良くなる。

仕事があるから、働く。会社に面接に行く。仕事がたくさんあって、残業する。

雨降って、友達と会えないから、つまらない。

誰も厚着をしたから冬が来るとは思わない。薄着をするから、夏が来るわけではない。

気持ちが和らぐから、春が来たのではない。物憂くなったから、秋が来たのではない。

季節の旬の味覚を味わったから、季節が来るのではない。

私達は怖くて脅かされたから、台風、地震、旱魃、洪水、火山、津波……………が来るのではない。

傘を差したから長靴を履くから、雨が降ったのではない。帽子を被ったから、日差しが強烈になったのではない。

眠るから夜が来たのではない。目覚めるから朝になったのではない。

泳ぐから、海や川やプールがあるのではない。

恋をしたから、素敵な人に出会うのではない。

話すから食べるから喧嘩するから仲良くなるから、友達がいるのではない。

働くから、仕事があるのではない。面接に行くから、会社があるのではない。残業するから、仕事がたくさんあるのではない。

友達と会えなくつまらないから、雨が降るのではない。

人橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず

（平成10年9月18日）

小さいときの思い出で、忘れられない風景があります。それは東京の郊外、八王子に住んでいた頃のことです。今のような凄まじい住宅都市とはかけ離れて、あちこちに畑があり、はらっぱは広く、川の水はきれいで、何よりも懐かしいことは、近所の人々家々をほとんど知っていたということです。

つまり、町が小さく、よその人があまりいなかったということでしょうか。道路も、とても広かったように思いました。同じ道路も、今たずねてみると、とても狭く感じられ、実に不思議に思うのですが。

八王子の中央高速のインターチェンジを降りて、国道十六号を入間市の方向に進みますと、拝島橋があり、ゆったりと流れる多摩川があります。支流に五日市町を流れる秋川と八王子市内を流れる浅川等、多くの支流を集めて川崎から東京湾へとそそぐ、第一級河川です。

子供のときの思い出のひとつに、これらの川でよく遊んだことがあります。拝島橋の多摩川へは、夕方、親戚の叔父に連れられて、よく釣りに出掛けたものでした。

叔父の家はつむぎの染めと織りの織家（はたや）で、染め場では、染料の入った釜からいつも鼻にツンとくる匂いの湯気がもうもうと立ち込め、織りの工場では、織はたを織る規則正しい織機が金属の騒音をまくし立てていました。

染め場のそばに、大きなコンクリート製の水槽があり、冬は冷たく、夏暖かな井戸水を、モーターでくみあげていた。今もモーターの唸る音や黒く光ったいくつもの釜がとても懐かしく、その光景が忘れられません。その水槽は深くて、回りが薄暗いせいにもより、底が真っ暗で、中にはうなぎとか鮠（はや）が黒い影を見せていた。

そのころ、叔父は午後3時頃になると、あとの仕事は人に任せて釣りに出掛けるのです。

もちろん、国道と云っても名ばかりの国道十六号を走って行くのですが、八王子インターチェンジもなく、切りどうしの舗装道路と砂利道で、しゃれたドライブインもなく、人家もまばらで、おぼえているのは拝島橋の手前の緑の奥に灰色の長い煙突が無気味だったことです。焼き場の煙突に煙が上がっていたことはおぼえてないのですが、往復に車の窓からいつもその煙突を見ました。

拝島橋川岸に立ち、叔父がしつらえた釣りざおを、繰り返し繰り返し川上に向かって糸を流す。瀬釣りといって、糸の先端と端に玉浮きをつけ、あいだに疑似針をつけた仕掛けの釣りでした。

川面に浮かんだ玉浮きとその間の波をジット見つめて、にぶく光る一瞬に糸を上げる釣りに、子供の私には容易でなかった。叔父は、淡々と糸を垂れて場所を移り、時に私のそばに来てびくの中を覗き、中が空だと私の釣り棹をとり、自分で川上に糸を放り、当たりがなければ場所を移したほうが良いと、少し移動させるのでした。

やがて、いつものとおり夕闇が訪れて拝島橋の街灯がつき、あちこちに釣り人の影はあるものの、それは回りの景色と同じに動かなく、川の音だけが次第に大きくなり、いつまでも耳に残るのです。

川岸に立っている私は、川面を見つめているうちに、自分が玉浮きと一緒にあってどんどんと押し流されてゆき、吐き気をもよおし、頭を振ってはもとの自分に帰るべくするのですが、川の瀬の流れは早く、川石に足を取られてよろけるのでした。暗くなると心細く、とくに帰りの支度の釣り糸をしまう作業がとても嫌だったことを思い出します。

禅語で『ひと橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず』の語に接したとき、最初に思い出した情景は、子供の頃を過ごしたこの光景でした。水の流れに自己が没入した、無心の境地を指すのですが、子供心の私は、その流れから必死にこうべを振っていたのです。

もし、そこが日当たりのよい溪流のほとりで、まどろみながら空を見つめていて、雲と一緒にただよい、あるいは、せせらぎを聞きながら、そのせせらぎのうえに乗って流されていたら、その流れを拒否しようとは思わなかったでしょう。それこそ、目に写る自然を愛で一体となった姿。迷いも悟りもない無心の境涯というのでしょうか。

哲学者であり禅者である京都大学教授故久松真一師は、自分の弟子に『火焰裏（かえんり）に身を横たう』と短冊にしたため、進呈したという。

黄檗宗の二世木庵が、隠元に参じたとき発した句であるといいますが、私の好きな言葉のひとつです。火焰を自己の煩惱と置き換えてみますと、実はわれわれの日常世界が、選ぶと選ばないにかかわらず火焰裏の世界に違いありません。われわれはの日常は、火焰裏の世界です。その中で、我々は生きていると言いましても誤りではありません。

日常の生活を振り返って見ますと、おそらくいろんな事に執着し、後悔したことがあるでしょう。もちろん後悔しないで成功したことも数限りなくあると思うのですが、だいたいにおいて失敗が人を築きあげて行くごとく、みずから火焰裏に飛び込んで切り抜けたときの爽快さはたまらなく嬉しいものです。

われわれの現実生活では、われわれの自身の迷いや不安や欲望が、その火焰や水の流れに没入させることを躊躇させます。それこそ子供のころの多摩川での釣りのように。

ですが肝心なことは、没入する前から実はわれわれは炎の中、水の流れの中にいるということの自覚が必要だと思うのです。そのなかで、自身の立場・行為を観察し、恐れずに大いなる者へ身

をゆだねて、後悔しない。自分がどこにいても、大いなる者が見守っていてくれるという確信が、自由無礙なる自己を創造してくれるに違いありません。それこそ、こうべを振ってはいけないのです。

無事

禅の書物の中に、臨濟録があります。その中に《求心やむところ、すなわち無事》という言葉があります。

この世の中で自分で希望して生まれてきた人は誰もいません。そして誰もが願うのは苦しまずに死ぬことでしょう。できたらポックリとです。

私達は誕生と死の間の生を与えられただけに過ぎないのです。そしてもっとはっきりした事は、誕生と死の間の生きているこの瞬間だけなのです。これを真の意味での存在というのでしょうか。私達に与えられているのは、この瞬間に、この場所に、私が存在するという事実だけです。この一点に集中したとき、何の悩みも、希望も無い、ただ有るがままの私が存在します。宇宙そのものの全存在に溶け込み、生も死も超えることができるでしょう。《求心やむところ、すなわち無事》とは、このことを言います。

この世で誰一人として、無事を願わない人は居ないと思うのですが、無事に気がついている人はごくまれです。どんな境遇においてもそのことに気がつけば、感謝が生おじるものです。そして大きな流れの中に自由を見出せると思うのです。一年無事で大過無く過ごせたり、また無かったりと、つくづく人の世とは慌ただしいものだと感慨ぶかいものがあり、後年振り返って見ますと、それがよりいっそう人生をおもしろいものにするのだと思います。だからこそ、精一杯に生きよと言うことなのでしょう

過去（平成10年5月23日）

過去（平成10年5月23日）

平成5年の正月、父の本を整理していましたが、昭和一七年一月号の短歌研究という雑誌が目にとまりました。なにげなくページをめくりましたところ、つい夢中になって読んでしまったのですが、「宣戦の詔勅を拝して」という題でした。北原白秋、相馬御風、窪田空穂、土屋文明、佐々木信綱、斎藤茂吉、土岐善麿等文壇のそうそうたる人達が寄稿していました。

与謝野晶子

水軍の大尉となりて我が四郎 み軍にゆくたけく戦へ 土屋文明

永遠の平和のために戦への 勅の前に世界聴くべし 北原白秋

口を緊め思ひ沁みいる群童の 直立の姿いま見つまさに

花田比露思

この戦ひ長くつゞくぞ幸先の よきに心を緩めざらなむ

前田夕暮の『大詔渙発の日』の文には「昭和一六年一二月八日、畏くも、米英両国に対して宣戦の大詔が渙発せられた。ラジオの放送を聴いた時、熱いものがじいんとこみあげて来た。私は直ぐに庭に出て謹んで宮城遥拝した。到頭来るべき日が来た。……ラジオを聴き、更に感激して、二階の書斎から富士の方を見たら、素晴しく朱い太陽が、十二月八日の光輝ある歴史を象徴していた。

えんえん燃ゆる巨大な日の、一二月八日のこのひと時を今を

戦後五〇年の月日がたち、私達の生活には過去の戦争のことなど夢のような昔のことですが、アジアの国々にはいまだに傷跡を背負って生きている人がたくさんいます。過去が現在を、未来が現在を形作るとするなら、これは私達の過去の、有りのままのひとつの姿に違い有りません。

たまごっち（平成10年5月23日）

たまごっちをそだてるっち！（平成10年5月23日）

「お父さん、お母さん、育児は順調ですか？順調な人も、そうでない人も、ここで一息しましょう。あなたのウラ技自慢、育児テクニック、その他子育てに関する情報などお待ちしてます。どんどん送るっち！」
インターネット上の《たまごっち倶楽部》のネットタマゴッチに「やっぱりお別れは悲しいです。ここで思いを残しましょう。ペットは捨てちゃだめなんです」とメモリアルに墓碑が掲げられます。

《うどっち、三十四才、九十九才、クラス皆で育てていたのに何故死んでしまったの、きっと友達がお菓子あげすぎたのね。それにウンコ八個もためた私がいけなかったの？あなたがいないと寂しいわ。私も一緒にたまごっち天国へ連れて行って》《おやじっち、享年二十三才、四十三才、せっかくおやじっちになったのに！寝ぼけてる、死に際になって間に合ってよかったけど、もしかして病気をほっときすぎて死んだとしたら大後悔ごめんね！》

ペットの名前は、「のびたっち、うさぎっち、だんごっち、おやぢっち、つちっち、まるっち、うどっち、すもうっち、くらげっち、ぱくっち、あねごっちetc」

子供達のポケットにバーチャルリアリティーの空間が広がり、リセットを繰り返し、バッテリーを取り外しながら、成長させ飼育しているペット達は、人の形をしているたまごっち。親を演じてのこの仮想ゲームに、空間はいつしか現実の空間にはやがわりして、子供達は子供を演じながらいつしか父親、母親に。

父親はおやじっちに、母親はばばっちに、演者が逆転して現実の家族ゲームは子供達のポケットのバーチャルリアリティーの世界に飲み込まれてしまいそう。おやじっち、ばばっちはリセットひとつで、ネット上のメモリアルボードに掲載されるとしたら、現実のおやじっちの逆襲は、家族ゲームの主導権の確立こそ、たまごっちは子供達へと回帰して行くことなのか。

一衆觸礼 (いっしゅうそくれい)

この熟語を見て、すぐに意味がわかる人はいません。多分、臨濟宗のお坊さん以外はわかる人はいないだろうと思いますが、貴方は、初めこの言葉に接した時、頭をかしげたのではないのでしょうか。そう、いつでも最初は、何のこっちゃなのです。

言葉とは不思議なもので、その場所で大きな意味を持つ熟語があるのです。

この言葉の使用される場所は、晋山式（しんざんしき）に於て使われることが、我が臨濟宗では専らです。さらに、晋山式という言葉が理解できない時代になってしまったのではないのでしょうか。

平成12年10月3日、私の寺の親戚であるお寺に、新しい住職が入山いたしました。その入山の儀式が、晋山式です。

晋の字は、易の、六十四卦の一つ。坤下離上（☷上☲下）というそうです。『地上にあかるみの出るかたち』であり、すすむ、さしはさむ、おさえるという意味を持つそうです。天地創造を、私は思いました。何故なら、前日から雨でとても心配いたしました。朝、その寺に行く途中も、雨がパラパラと降っているのです。稚児行列をいたしますので、そのことも気になりますが、来られる檀信徒や和尚様方も、足もとが悪く不便をかけます。

どんな時でも、進むには、進む道理があり、それは、時に進まなければならないことでもあります。また、自分で進んでいると思っていても、そうではなくて、進まされているということもあります。そして、進むためには、進む方向に空間、場所がなければ進めません。もちろん、進んで思っていることも下がっていることも多いことに違いありませんが、それも進むことなのです。何故なら、進むことは明るさを持つことだからです。

何の仕事、伝統、文化でもそうです。後事を託すことは、託す人と託される人、もちろん託す人も、元は託される人だったのですが、託す人と託される人のお互いの資質が、その時試されるのではないかと思います。そして、世代を形成する。

世代の世の字が、30年という年月を表現するものであるなら、次の世代もまた30年という年月を維持し、次の世代に託すという努めがあります。200年300年経てみれば、いつかの寺の一世代の住職は、名も知れない住職に過ぎませんが、名も知れないゆえに、私は返ってその重みを考えてしまいます。その世代に名を連ねる意味は、多くのことを含んで連ねるのです。今という時代は、共生、連環、リサイクルと叫んではいるものの、叫ぶものの覚悟が見えません。一つの時代に、自分の生を掛け、死を賭してこそ、進むという意味があるのではないのでしょうか。晋＝進むとは、時代を巻き込んで、地上に明るみの出ることなのです。私の一步も貴方の一步も、共に明るさを含んで、進むのです。

さて、この行事の最大の特徴は、法要の式次第の中に、総茶礼（そうざれい）といいまして、その晋山式に出席した全員が、お茶を飲むことです。

法要は本堂で行われますから、その場でお茶を頂きます。そして、お茶を頂いた後に、全員が『一衆觸礼』の発声にて、頭を深く垂れるのです。もちろん、今日の出会いの全員、100名、200名が一斉に頭を垂れる姿は、見事です。

礼の基本は、尊し、貴しです。私はこう思います。

「何百人、何千人いようと、たった一人の礼が尊いと思います。私一人が頭を下げるのです。するとどうでしょうか、そこに会った全員が、頭を下げてくれるではありませんか。たった一人の礼が、全員を動かし、私一人を尊しとしてくれるのです。何百人いようと、たった一人の礼なのです。そしてたった一人の私の礼は、全員を構成する、貴方を尊しとする一つの礼でもあるのです。」

晋山式で、こう全員が感じてくれたら、全員が主人公となり、大きな山が進む姿を想像できるのではないかと思いました。

六道を輪廻する

三途（さんず）とは、地獄（じごく）・餓鬼（がき）・畜生（ちくしょう）の世界です。三途に阿修羅（あしゅら）・人間（にんげん）・天上（てんじょう）を足したものが六道です。そして、この一つ一つは別々のものではなく、それぞれ私達の心の状態を指しています。現実と心の状態とのギャップを表現したものです。それは、希望、願望、切望、欲求、……と心の渇きから繰り返します。

地獄とは、もがき苦しむ正にそのものの状態をさすと言ってよいでしょう。「……が、たまらなくしたい。……が、どうしても欲しい。」と、いまだ実現しない状態です。そのもがく苦しむ状態から、抜け出そうと必死になって無理をする状態は、餓鬼そのものです。そうするともう他人なんか見えずに、おかまいなしに悪いことまでして、人を蹴落とし、抜け出そうとする状態を畜生と言ったらよいのでしょうか。

阿修羅となると、その欲求を抑えることが出来なくて、暴力をふるって、人に危害を加え、悪知恵を働かして、人を虐げます。そんなことをして目的を達し、やっと、落ち着いたところが人間で、ホッとした所ですが、それはすぐに転落するものを含んでいる世界です。

そうすると、人はうぬぼれて、今度は自分が見えなくなり、つまりは、固定的な観念に陥ってしまいます。それが天上で、しばらくすると、「何で私が受け入れられないのだ」と、地獄に逆戻りです。六道の一つ一つは、それぞれが五つの道を含んでいるから、すべてが繋がっていると言えそうです。この現状にたいして、仏道とは、この連鎖を断ち切る行為なのだと思います。

煩惱即菩提と言うように、煩惱の荒れ狂う海の中では、彷徨える船を操る梶も竿も不要な時がある、かえって任せることも静けさには必要なことではないだろうか。それは、辛く苦しく、悲しく寂しく、不安や恐怖に、いらいらすることも、それを取り除けない今の私なのだと徹することのうちに、豊かに潤いのある姿を見つけることかも知れません。

二人三脚

結婚式のお祝いの言葉に、聞いたのが、私は初めてでした。それが、『二人同行』という言葉でした。すぐに四国のお遍路さんを思い出し、仏さん、あるいは弘法大師と一緒に旅をする姿を浮かべたものでした。そして、遍路の白装束の、『南無大師金剛返照』の言葉の返照に、仏に照らされて旅をする巡礼の姿が、何とはなしに浮かびはしたものの、これを、夫婦にたとえての祝福の言葉に、上手いことを言うものだと、人ごとのように聞いていたのは、二十年か前のことだったのです。それは、そうです。未だ連れ添ってもいない長い夫婦の旅路の、二人の共に歩く姿など、明日は何処に行こうかと思案する二人には、想像だにできるものではありませんでした。

共に白髪の生えるまでは、今の若者も、その当時の私達も、ほとんど使わない言葉だったのです。それが、二人同行の言葉が、今は妙に美しい風景だな感心したりするのは、その裏にある意味に気がついたからです。

肯定的に言えば、二人してゆくということですが、私は、一人では歩いて行けないと、否定的に捉えた時、この言葉の意味が、鮮明に意識できるようになったからです。二人同行は、なぜか明るい四国の遍路を歩く姿が浮かびますが、同じ姿は、実は、一人では耐えられなく、生きてゆけないという姿に、実は、同じ姿なのだと見えてきたからなのです。

そうすると、四国のお遍路から、実は、毎日が遍路であり、その道は、毎日が旅立ちの、旅の途中の、辿り着いたり道でもありました。夫婦にとっては、二十年来の旅路の途中です。その二十年の旅路の中の、十五年は、上の男の子との旅路に、十二年は、下の男の子との旅路です。病氣した母とは、二年半の旅路ですが、今の病院に入院してからは、二年近くの旅路です。手厚い看護に、安らぐ時を刻んでいた母も、ここ一ヶ月は、タンが絡み、食べ物も、喉に上手く入らず、辛い咳をする時、思わず目を背けてしまいます。呼吸が止まるのではないかと、不安に覚えます。

つい一年ほど前に、口から入った、空気と食べ物を見事に交通整理できることをあらためて見つけ、これこそ人間の高度な技の一つだと、感心していた私でした。それは、いずれは来るであろう、この交通整理が出来なくなる時の、今は、生きているということ証のようなものだったのです。

父が具合悪かった時、母が懸命に看病し、毎日病院に行くのを、車で送ったり、週に一度は母と交代はしたものの、あくまで私は母を支えていたのだと思いました。母が支えられていたかは聞きようがなく、今は知りようもない。これも母と私の二人同行。

父が逝ってからの、母にとっての父との二人同行の姿は、やはり寂しかったに違いない。どうし

ても、今の母の姿を見て、父の姿が重なり、ここから、私ら夫婦の二人同行が、またはじまる。母とは、具合の悪くなった時、無理して生かすのではなく、自然な処置をすることで、尊厳を大切にすることを、話し、納得したものでした。

母の病人としての症状と変化に、その母と話し合った言葉を、担当医師に伝え、医師も同意見と話し合ったのでした。無理して生かすのではなく、あくまで自然な処置を施すことをすることで、母の尊厳を保つことの意味を、形にすることができるのだと思ったからです。しかし、それは私と母とが乖離して歩き始めたことだと、後で気がつきました。

二人同行は、二人三脚であり、大切なことは、同時に進むことです。かつてに描いて、決め付けるのではなく、母本人の様態の変化や病気の進行と、見守る家族の看護、知識とが、同時進行することこそ、病人と家族の二人三脚です。それも、あの時、この時、今、明日と二人三脚の状態にいます。今生きていることが、あらゆるもの、できごとと二人三脚であり、二人三脚こそ、私の、貴方の姿です。改めて、人が生きるということは、あらゆるものと二人三脚だということが解かってきました。

そして、そのことは、共に歩むきりない選択肢において、人は別の選択肢を選ぶことによって、選んで、厄介なことに直面するようなのです。

さて、仏教で、深信因果（じんしんいんが）という言葉があります。因みに、因果を信ずる人を、仏教徒と言い、因果を信じない人を、外道と言いますが、その因果を深く信ずることを、深信因果と言うのです。因果は、因縁果であり、果は起に通じ、ここより縁起と同じ意味を持つことは、あまり意識しないというより、ほとんど現代では、問題にしていらないように思える。

それで、その因果を深く信ずると言うことは、どういうことかと言いますと、因果をくرامさない、因果をあきらかにするということなのです。禅の問答に、因果に落ちずと言って、五百年間輪廻転生した狐の話がありますが、因果に落ちずとは、この法則に背き、無視することに違いありません。この世の中が因果の道理によってなりつつあることを深く知れば、因果をどう生きるのかが、問題になります。

そこに、随順因果（ずいじゅんいんが）という、次の言葉があります。因果の法則に、随うということなのです。自ら随うことの意味は、随う以外に選択肢がないという、絶対随順の意を含んでいます。因果をあきらかにし、くرامさずとは、随うということなのです。因果を古人は、影は形に随い、音は響きを伴うと言いつわっていますが、このことは千年経っても変らぬ事実です。

また、因果の道理を示すために、釈迦や仏が出現したとするなら、因果に落ちずは、釈迦や仏を、更には、神までも否定することになってしまうではないか。善を行ずれば天国に行き、悪を行ずれば地獄に行くことも、因果の道理に含まれると喝破したのは、道元禅師だったのです。

因を母とし、果を私として、因を私として、果を母として、因を過去として、果を今として、今を因として、未来を果として置き換えた時、因と果、縁と起こそ、二人同行、二人三脚の根拠でもあるのです。

生老病死

ある人、

「和尚さん。ご相談なのですが。独り者の知人が、とある寺の合葬墓の永代埋葬権利を120万円で、購入したのです。

檀家縁者だったので、2割引で購入したと言う。自分が亡くなった後、お骨は一部を除いてみんな撒いてしまうのですが、翡翠の小さな骨壺を10万円で売ってしまっていて、それに小さなかけらのお骨を入れて、13回忌まで本堂に安置してくれて、永代供養してくれるというのです。」

私、「そうですか。それはさぞ安心して良かったですね。」

ある人Kさん、「そこで、和尚さん13回忌が終了したら、私のお墓に引き取って埋葬してよろしいでしょうか。あちらのお坊さんは、どうぞお好きなようにと言ってくれているのですが。」

私、「ちょっと待ってください。本人の意思は、何処にあるのですか。」

Kさん、「それが！本人は身体を悪くして、入院しているのです。多少痴呆が入っていて……。」

私、「貴方のお気持ちはわかりますが。少し変ですよ。知人が自分の安住の地として、その寺と合葬墓を選択したのですから。13回忌が過ぎて、お骨が撒かれてしまうからといって、寂しいからといって、こちらに移すのは、本人の意思に背くものです。もし移すことを承知しているのなら、最初からKさんのお墓に入ることを考えるべきです。そうすれば、Kさんの安堵と無駄な出費を抑えられたはずです。」

私、「いいですか、これから多くの独り者が年老いて、同じような徹を踏まないように願うことですが、安住の地を決めることも大切ですが、本当に大切なことは、その人が終末を迎えるに当たって、家族・友人・仲間と堅い絆を結んでいることが大事なのです。だって、自分の死は、自分が確認できないからです。あたりまえの事なのですが、自分の死を確認するのは、自分以外なのです。」

お釈迦様が出家する原因になった、『四つの門』のお話があります。誕生門、老門、病門、死門のことです。出家する前ですから、お城に四つの門から外に出ました。誕生、老い、病、死に対するそれぞれの悲哀をつぶさに観察し、出家にいたります。生は誕生、老は成長を含んでいます。それに病と死で、人の一生を表現するものですが、はたして本当に、自分自身もそう言えるものでしょうか。自分以外の他人の一生を考えてみた場合、確かに生老病死は現実を表現しているものです。しかし、私と言う自己を考えてみた場合は、本当にそうだろうかと思えます。

それは、現実の私にとって、誰でも、自分自身の誕生と死を確認することは絶対に出来ないからです。喩え数分後に亡くなることを知っても、それは最後まで生きていることの証でありつづけ

ることから、最後まで自分自身の死を見届けることは絶対にはないのです。つまりは、人は生き続けることをもって、終末を迎えるのですが、真の終末を迎えるときには、自身は存在しないということが現実の事実なのです。誕生の確信も持たず、死の確信も持たない私に、死は存在しない。ずっと生きつづける以外、私にとっての選択肢はないといってもよいことです。つまり、自分自身にとって、生老病死の生と死は、存在しないと言ってもよいかもしれません。問題は、成長と老いに病です。これが現実遭遇する事件なのです。

禅は、”生きる”ということに重点をおいていますが、考えてみると、老と病は、生きるという事実そのものです。すべての私にとって、世の中すべては、自分が生きていることの証なのだと思います。そして、その私は、最後の最後まで、生き続けるということで、死なないという意味を持つこともできますでしょう。

そう悟ってみると、Kさんのお話のように、死なない人が、お墓の心配をするのも妙な話ですね。お墓は、死を確認する手段を持つ人がいて、意味があるのだと考えることが必要なのです。人間、最後の最後まで生きているということは、それが死の証しということでもあります。人は諦めてはいけないという言葉に説得力をもつ響きがあります。そしてそう信じて、最後の最後まで生き続けられることこそ、人の使命といえないでしょうか。そして、また、感謝して生きるということも、意味のあることです。感謝しないわけにはいかない、老と病を人は授かるからです。感謝することは、老と病の証でもあります。老と病は又、命ということでもあります。

それにしても、Kさんのお話で、妙なお寺があったものです。靈感商法を真似したことにも気がついてないのでは、困ったものです。

筋肉番付

スポーツを究めた人は、賞賛に値する。

子供達の将来の夢を聞いた時、坊さんになりたいという子供はかつて聞いたことはない。考えてみれば、お坊さんも健康管理に気をつけて、お金がかからない健康管理、お金がかかる健康管理と、自分の体を厭うこと一般人と何ら変わるものではないが、肉体を鍛錬することとなると話は別です。

野球選手、サッカー選手、プロゴルファーと圧倒的にスポーツ選手が、子供達の夢を独占することでしょう。過去の時代は、プロレスラー、ボクシング、相撲力士と、スポーツ人気の変遷は、大勢の知るところです。

今年、アメリカのオーガスタで、マスターズにアメリカで自分の力で参加した、日本人のゴルファーがいました。彼は10歳で、父からゴルフを教わったそうです。

「今、夢にまで見たマスターズに参加し、このゴルフ場に居るということが、幸せなことなのです。」

「子供の頃、自分の将来の夢を抱きながらも、大人になって達成することの出来る人は、何人も居る者ではありません。そう思うと、自分の幸せを思わずにはられません。」

私達ファンは、彼が少しでも上位に入ることを、求めます。勢いのあるスポーツマンこそ、子供たちにとっては、人気があります。子供達の憧れは、晴れやかに、スポットライトを浴びるテレビの画面の中の彼に、自分を重ね合わせるからです。大人も子供も、テレビの画面に釘付けになって見るものは、美しいスイング、ピンに絡むボール、カップに吸い込まれるボールの軌跡です。

同じマスターズに、十何年も通いながらも、日本の試合と違って一向に優勝できない、肩を落として弁明する姿のゴルファーは、プロ野球から転向した人物です。彼には辛く屈辱のマスターズかも知れません。

子供達の憧れの姿である、若く勢いのあるスポーツ選手だからこそ、マスコミのスポットライトは、汗をかき辛い姿も、格好が良く映ります。さわやかさを伴って、大勢の人を引き付けることが出来ます。

しかし、何故にこのスター選手に憧れますかの問いには、格好良いからと同じように、夢イコール、金銭感覚が現われます。頂点に到る過程は見え、栄光のゆえに勝ち取る報酬に、自己の金銭感覚との隔たりを埋めるものに、気が付きません。

速さと力、速さは時間を競うことです、力は空間を作用することと言えばよいのでしょうか。その為にも、あちこちの筋肉をつけ、贅肉を削ぎ落とし、瞬発力、判断力、持続力を身に付けます。

美しく価値ある肉体を作り上げることは、その精神をも、美しく己が肉体に宿ることと考えたのか、ギリシャ彫刻に見る思想は、東洋の思想とはっきりと違います。

精神性こそ東洋の要だと思うのですが、その精神の捉え方が、安易で、即物的、刹那的です。さて日本の文化を代表する一つに、茶道があります。今の日本を見て、かつて歴史の中に、禅の

侘び・寂びの文化が芽生えたことに、逆に驚きを感じる時代になってしまったようです。

《ものがたりの余白（ミヒャエル・エンデ）岩波書店》に、「茶道の茶碗には、まるで子どもが粘土をひねったかに見えるものもありますね。路傍の石のように、釉薬が、こう、外側を流れている。そして、まさにこの粗野なところが、まさにこれこそが、その茶碗の美なのです。なによりも、それが、自ずからそうなったのであって、意図されていないこと。意図したけれど、しかし、（同時に）意図しないことなのです。これが、あの、まるで原理なんですね。なにかする意思があり、同時にその意思がない。ちょうど弓術のように、弓と矢は使うけれど、しかし、的は忘れ去る。思うに、これが世界中の芸術全般における決定的な原理なのですが、ただ、わたしたちヨーロッパでは、はっきりと意識されたことがありませんでした。」

茶器の偶然に出来た上薬の柄や、土の肌は、けっして偶然に出来たものではなく、作ろうとして、作れない美を、作るどころが、自然と表現されたものです。限られた空間の茶室に、限りない空間を表現し、静寂が松風の音を引き立て、松風の音が静寂を研ぎ澄ます、主人は客をもてなし、客は主人を引き立てる。一期一会の現出、在るがままとはこのことをいいます。

ミヒャエル・エンデの言葉です。「このことが日本で理解される前に、全部壊れてしまわないように、それだけをわたしは願っているんです。日本でも、日ごとに消えてゆきますから。……若者達の大多数は、ますますアメリカ化され、よくみかける悪趣味にどんどん無感覚になってきているようです。」《ものがたりの余白（岩波書店）》

ポケモン

このゲームは、主人公がポケットモンスターを収集しながら、各地を旅をして、ゲームを進めてゆくのです。ポケモンを戦力として育てていくことはもちろん、パワーアップした「ポケモン図鑑」の作成も、楽しみの一つです。シナリオの目的は、ジムリーダーに勝ってバッジを集めること、そして、セキエイ高原にあるポケモンリーグでチャンピオンをめざすのだ！ポケモンは250種類以上、ノーマル系、炎系、水系、電気系、草系、氷系、格闘系、毒系、地面系、飛行系、エスパー系、虫系、岩系、ゴースト系、ドラゴン系、悪系、鋼系、幻のポケモンとあり、これらが絡み合っ、更に種類を増やしている。

小学生、中学生を中心として、世界にブームを巻き起こした、天に任ずる堂のゲームである。その株式の値段は、破格の値がついて株式相場をリードする一つになっている。つまりは、世界中の大人を巻き込んでの、ポケモンゲームなのである。

更に、世界の有力企業であり、日本を代表する企業の基幹商品の一つである戦略商品は、PLステーションであり、その後継機PLステ2である。この株式の値段も、超破格の値がついて、相場をリードし、大人たちを興奮させる。

ほかにも日本発のゲーム機は、通信と結びついて、世界の子ども達を席卷し、まるで意識改革を試みているようだ。

先週のことである、とある家庭の話である。小学校高学年の子供が学校に行かなくなってから、数ヶ月が過ぎるといふ。

不登校の原因と思われることに、クラス替えによって、仲の良い友達と別れてしまったこと、担任の先生と合わないことが原因にあるようだと言いました。親達は、無理やり強くではなく、受容しなさいと言われ、辛抱強く、子供に対峙して、決断を下せない。

先生は、子供に、無理に学校に来なくても良いといい、自分の判断で決めろと言う。宿題も、絶対提出しなければではなく、できる範囲で良いという。言われた時、子供が変わったという。児童相談所に行ったが、週一度の相談所通いは、相談員との交流を深めて、親しめるようにと、インターネットでゲームの裏技探しに、ノンビリした対応に、これもマニュアル通りの対応と言う。

それを好いことに、子供は、朝早く起きず、起きたら早速ゲーム、日中はゲーム、夜は遅くまでゲーム。子供は、ポケモンワールド、RPGワールドの中で、自らをパワーアップするかのよう、敵に育まれてゆく。いかに自らを強くするかは、レベルを上げるか、強力な魔法を使えるか、頑強で強い武器と防具を揃える。そのために、敵を倒してお金を奪い、宝箱を漁ります、そして近道の裏技を探します。さらに、ゲームの進行は、そのステージ適し、進行の助けとなる仲間を選ぶことを強いられるのです。

また、敵を倒すことを目的としたアクションゲーム、ほとんどのゲームは、クリアすること、

達成することで終わるのですが、子供たちのゲームは終わることがないのです。つまり、一つのゲームは一つなのですが、次から次に送り出されるゲームによって、クリアーすること、達成し終わることがないことに、気がつきません。

室内で、年齢を超えた多くの人との接触を避けて、何十時間かけて、釘付けにされて育つ子供たちの心は、どう育まれてゆくのだろうか。子供は、こうした時も成長しているのです。そして、無理をしてでも社会に放たれるのですが、その世界も、ゲームの世界と同じだとしたら、また、違ったとしたら。どちらにしても、悲劇だろう。

もちろん多くの子供たちは、自我が発達し、調整し、自己コントロールし、発散し、杞憂とすることはないのだけれども。

それにしても、ゲームの機械とアプリケーションを、日本の世界を代表する企業群が、作って、売る、この目的と理念は、何処にあるのだろうか？世界をどう変えたいというのか？

俺は、親馬鹿か！

俺は、親馬鹿か！

平成12年の夏のエプソンのプリンターコマーシャルが、妙に頭にこびりついていた。結婚した夫婦の設定は、どういうコンセプト（この言葉の使い方は、知らないが、多分こんな感じで使うのだろうと思って、使ってみた）なのだろうか？

きっと、男と女の素敵な出会いがあって、いや最初は困難な出会いであったかもしれない。何故なら、3枚目タッチの髪が薄くなりつつある夫となる俳優と、新妻を思わせる女優、優花の若さと可愛さの不釣り合いは、今が幸せな時を感じさせるほど、ここまでに来る過程を想像させるといったら、私の考えすぎなのでしょう。

それにしても、このコマーシャルのワンシーンを切り取り、肉をつけて、想像を巡らし、裏づけを取ろうとする人がいるとは、製作者はきっと考えていないでしょう。しかも、考えている人が、僧侶であることを知ったら、きっと恐れ入りましたと、白砂の上に土下座して平身低頭するかも！ちょっと言いすぎか！オーバー過ぎるか！

彼と彼女の道行は、その後、愛が芽生え、やがてお定まりの結婚へとゴールインします。新婚を過ごしてきたカップルにとっての居間は、その辿ってきた軌跡の表現をしていなければなりません。その居間は温もりを表わしてこそ、次のステップが相応しいと思います。その居間の壁や、床、天上までも、埋め尽くす愛児の写真は、二人にとっての今を語るものでした。

「俺は、親馬鹿か？」

妻に問い掛ける、この言葉こそ、愛の巢がいつしか家庭へと変化し、その変化に嬉しさを含んで戸惑いつつ、発した言葉です。自分が変わって行くことを受容しながら、妻に問いたただす男親の立っている場所を示すものです。

そんな夫を、優しく包み込んで、さとすかのように赤ちゃんを抱きながら、妻が発した言葉。

「それが、幸せってことよ！」

プリンターから打ち出された、愛児の写真の氾濫は、幸せな家庭へと移行した事実のワンショット。

私が、作家だったとしたら、《妻がしゃべる、「それが、幸せってことよ！」こそ、魔女が操る呪文に聞こえるのです。》と、付け足すかもしれない。

塵も積もれば山となる

「和尚さん！このお塔婆を並べ替えてもよろしいでしょうか？」

法事のお経が始まる前、お施主さんに聞かれます。もっとも、最近は聞かれない方が多く、聞かれるときは少ないのですが。あらかじめ、こちらで適当に並べて置いたままで、大方は終わります。

先日、久しぶりに、並べ替えをしていたお檀家さんを見かけたものですから、「順番が気になりますか？」と聞くと、「こういうのは、どういうふうに順番があるんでしょうか？」と、逆に聞かれました。

そういえば、私の母の法事の時でした。法事が終わって、30名の参列者を、食事に誘うのですが、中華料理のお店に移動して、3つのテーブルに誰と誰を座っていただくか、その人選に家内が考え込んでいたのを思い出しました。

さらに、法事の時の本堂での、序列も、誰も言わないものの、暗黙の位置みたいなものが支配しているのを見るにつけ、世界は、総てが表現であり、発言なんだと、改めて感心し、得心し、仏教の単純な道理の、奥が深いことを楽しみました。

私は、法事に参列していただいた方々に、この法事をどう味わって、帰っていただくか腐心いたします。

そのために、「今日、あなた方は、亡くなられた方の追悼の為に来られて、中心はあくまでも亡くなられた方なんです、同時に、中心は、あなた方一人一人が中心なんですよ！」と、告げます。

貴方が、今、ここに居るということは、貴方自身の存在の表現なんです、同時に、ここに居る貴方以外の方々も、存在の表現をしています。つまり、貴方自信の表現とは、同時に、貴方以外の方々の表現によっても、成り立っているからでもあるのです。つまり、表現されているということです。

貴方が、本家の弟だとしたら、その場所にいる貴方以外の兄や姉、妹、従兄弟、親は、今の貴方を表現してくれるという立場にあります。

追悼される方も、姿は見えないけれど、この世界の関係から外に出ることは有り得ませんから、表現され、表現する存在です。

中華料理のテーブルに、それぞれが座ることが、世界を造るといったら、大袈裟かも知れませんが、表現と言うことなのです。表現を、発言と言ったり、跳出（ちょうしゅつ）と言ったりすることも、同じことだと思います。自分がそこに居るということ自体が、実は、世界を表現していることだし、亡くなられた方を支えていることにもなります。当然、亡くなった方からみれば、亡くなった方も支える存在であり、そこを、私はお護りされるのではなく、お護りする存在なんだと、強調したいのです。

塔婆の並び方も、それぞれの塔婆が発言して、順番を決めてゆきます。ただ、順番だけに目を付けると、一本の塔婆が発言しているものを、見えません。

「和尚さん！このお塔婆を並べ替えてもよろしいでしょうか？」と聞かれた方が、私の説明を聞

いて、「いっそ、円を描いて飾れば良いですね！」言いました。

いまだ、順番に引っかかります。思うように並べても、並べなくとも、一本の塔婆は発言しているのです。

本堂での法事が終わって、墓地にてお経を読んだとき、墓前に供えた花束に、赤いストックが鮮やかで、きれいに映っていました。そう見たとき、白い菊と空色のスイトピーが、赤のストックを支えていたのです。ここでも花たちが、表現していました。

さて、表題の《塵も積もれば山となる》ですが、塵を表現し、発言するものと考えてみれば、山は、全体、或いは世界に該当するのですが、問題は《積もれば》です。積もることは時間的な経過を表しているのですが、仏教的には、積もるに引っかけらずに、塵そのものが、山なのだと、気づくことが大切なことです。塵そのものが、山であると気づいたとき、山が動き出します。世界も動き出します。

生と死と永遠

生老病死において、生と死はないのだと、以前、書いた。確かに生きている人にとって、自分の生と死を確認するすべを持たないことは、事実です。しかし、自分が生まれて死ぬことも、また、厳然たる事実ですし、それを確認するのは自分以外の人であることも確かなことです。ですから、人は最期の最後まで生き続け、最後の瞬間も、そのことが生きている証となります。人は、自分の生から死に立ち会う時間を、持っていない。それは、死して時を刻むことが出来ないうことです。生きているということは、自分が時を刻んでいるということなのだ、時を刻むということが生きているということなのだ、無常とは、そのことを指すのだと思います。

人が、生きて、生まれもなく、死もない状態で生きているとしたら、それは、長年の人類の夢である、不死を手にしたと言えるのではないかと。ただ私達が気づいていないのではないだろうかと思った。

永遠を手にするとは、それは、生も死もないということと同じことだからです。人それぞれ、生まれもしない、死にもしないことと、永遠の内容と、同一のももだと言えるのです。

さて、永遠というテーマは大きなテーマです。命あるものが、永遠を願うことは、未だ永遠を手にしていながら、願うのであって、すでに手にしていると実感していたら、命あるものの願いは、違ってくるはずです。

かつて、T・Sエリオットは、

『老齢や老衰も恐れることはない。消滅も運命の変遷も私を怯えさせない。

もはや、死でさえがわたしを狼狽させたり驚嘆させたりはしなくなったとき。このわたしは愛の中に居るのだから。』と、記しています。

それを、仏教で言うと、

『老齢や老衰も恐れることはない。消滅も運命の変遷も私を怯えさせない。

もはや、死でさえがわたしを狼狽させたり驚嘆させたりはしなくなったとき。このわたしは不変の命の確かさの中に居るのだから。』と、なるのかなと思って、今は、気に入っている言葉の一つでもあるのです。

一章

エンディング、それは帰ると言えばよいのか、旅立ちなのか、始まりなのか、……どうするべを立てるか、最終章へのいざない……

一章

親しかったものを亡くし、振り返ったとき、それは、振り返るたびにといったほうがよいかもしれませんが、「これは、故人が望んでいたことだろうか?」と、考えることがあります。しかし、あらためて考えてみると、故人への思いは茫漠（ぼうばく）として、具体的に浮かぶわけではないことに気がつきます。その思いも問いも、やがては、日常の中に埋没してゆくかのように、時の流れは速い。

それなら意志を伝えられるうちに、じぶん自身のエンディングノートを書いておこうと思うのでしょうか。

自分がたどった足跡を通して、父母や兄弟への思い、出会いや別れ、得たものや失ったもの、大切に育んだもの、見守ることでやすらいだこと、充たされた思いや深く傷ついたこと、やり残したものの、畏敬や感謝、しかし、書き記すうちに、時間の経過は、家族や人を変えてゆくものです。

それでも、記そうと、まず、じぶん自身の足跡から、光を当てる部分を撰ばなければならないでしょう。そして、撰んで光を当てた足跡が、残されたものにとって、客観的に評価できるだろうかと考えたとき、記し続けることこそ、じぶん自身の中の変化を語るものと気がつきます。

もともとじぶん自身の足跡とは、他者とのかかわりの中にあるものです。愛する家族や愛しくごく親しい人は、ほんの一部の私への片面を知るのみです。そのことが、後になって、波紋を広げることは、世間にはよくあります。

自分がいなくなることは、他者が持つ私の片面が解放され、解釈されることは思い描くことはできます。しかし、その内容の訂正は、できないのです。

こんなことを思ったりすると、私が光を当てた足跡も、考えてみれば、元気なうちに伝えられればよいことで、エンディングノートとしての意味は、もっと他にあるはずで。しかし、記さなければならない。そこで、特定の人に向かって記すことを考えるのですが、これも、元気なうちにみずから語ればよいことです。特定の人に向かって語った内容を、それ以外の人にも語る意味は、ノートとしての意味はあります。とにかく記し続けることのうちに、自分がなくなった後、人の思いが花を咲かせるのでしょうか。

二章

まずは、最終章として、葬送の儀を葬儀と送ることに分けて考えてみることにいたしました。

こと葬送の儀に関してみずからのエンディングノートをしるすことはできるものの、葬送の儀の内容に関しては、宗派・宗教という枠がはめられ、例えば菩提寺の意向は無視することができないでしょう。

案外と、わたし達は葬送の儀の内容を知らないものです。葬送の儀の内容を知る必要があると言えますが、知ることは、その宗派のものの考え方を確かめることになります。しかし、知れば知れるほど矛盾が生じ葛藤が生じてしまう場合もあります。

じぶん自身の最終章にじぶん自身で書き込めることができるのでしょうか？じぶん自身として生前に、書き込みたいし、遺族としては、書き込めさせたい！と。

また告別式に関しては、様々なことが考えられます。偲ぶ会やお別れ会もそうだとするなら、49日忌や1周忌などの法要のお食事も、時間の経過は別として、この部類に入るでしょう。

こうして書いてきて、これらの問題には、まだ越えなければならぬ問題が含まれていることを知るべきでしょう。その一番の問題は、魂のことです。

たとえば、神の子として、シモベとして、私を神は、こころよく受け入れてくれるだろうか？神と言っても、世界には数多くの神々がいると言ってよいでしょう。カトリックやプロテスタントも、その分類の中に多くの宗派があり、神がいます。イスラムにも、スンニ派やシーア派があると言え、神は同じなのでしょうか、考えてみれば、人間の数ほどに神は在るといってよいのでしょうか。

さて、家族葬と称して、火葬場で近親者を家族だけで茶毘にふすことが執行されことを見ました。

それは葬送の儀でしょうか。茶毘にふされた人の父母や祖父祖母が、さらにその先の血縁の人たちが、えんえんと営まれてきた葬送の儀式は、ここで途絶えることになる意味って、考えたことがあったのでしょうか。

葬送の儀とは、告別の葬儀と野辺送りの儀式を一体とするものです。告別の葬儀の式が終わって、柩の蓋が閉められ、柩は近親者に担がれ霊柩車に収まり、火葬場で茶毘にふされる。これを送る儀式といえます。葬儀がなければ、死体として焼かれ、壺に収められて、意味が付されないことになります。

まして菩提寺を持っていたとしたら、その菩提寺にお墓があったとしたら、過去に祀られた祖霊たちの意味をどう考えればよいのでしょうか。

菩提寺を持つ家族の基本は、葬送の儀式をして、そこから、故人は墓地に納骨され、新に戒名として家族の仏壇にまつられ、自分たちの祖先として、私たちの命を受け継いできた証となり

ます。そのことは同時に、自分たちもまつる側からまつられる側になることのいとなみを現していることを含んでいます。

植物に喩えれば、祖先は根、私たちは幹であり、枝は子孫となり、根も大事、幹も大事、子孫も大事、根が枯れれば、幹も枝も枯れることを意味していることだと思います。

菩提寺とは、根と幹と子孫に関わっている聖域と考えられないでしょうか。

このことを無視することは、菩提寺からの断絶を意味することなのです。せめて、家族が決める前に、お寺の和尚に連絡して相談していただきたいと思います。

家族が決めたからと、その通りにすれば、お寺は必要もなく、その寺の和尚も、本堂もいりません。

さらにつけ加えれば、火葬をするため家族が窯の前にた立って見送る作業は、家族にとってどう考えればよいのでしょうか。お別れと言うことは解りますが、お別れした後、故人は何処に見送られるのでしょうか。また、故人の死後の居場所として、その人格は何を持つのでしょうか、お寺とは、その作業に方向付けをすることに関してあるといえ、その延長線上に49日があり、以降の年回があります。

菩提寺を持っていると言うことは、葬儀の執行を菩提寺に委託し、以降の年回法要をも委託することを含んでいるわけです。故人を偲ぶ方法はいくらでもありますが、この儀式だけは、一人でもよいから、少しの近親者だけでもよいから、葬送の儀式をしていただきたいと思います。

このことは、日本の文化や伝統という意味からも、とても大切なことと思うのです。私たちはこの時代生きて、次の時代に生きることは有りません。私たちの勝手や都合から、人としての最期をそれだけにしてよいのでしょうか。

三章

こうして、葬送の儀式のうち、告別式あるいは葬儀の内容にかんして後で述べるとして、葬儀だけは欠かさないでいただきたいことを、陽岳寺としてはひたすらお願いしておきます。だからといって、従前の通りとまでは言いません。

式の場所にかんしては、広さは問いません。弔問客の人数も問いません。場所も問いません。荘厳も問いません。まして家族だけで式をする場合には、それこそ、ホテルだろうと、貸席だろうと、自宅だろうと、お寺だろうと、どこでも式場となります。柩の安置する場所も、正面でなければならないという理由はありません。

まん中でも、端でも、入口でも決まっています。別れの儀式に最適な場所、それを遺族が決めればよいですし、飾り方も決まっているものではありませんので、予算に合わせて、花の量を決めたらよいのです。

式の時間にかんしても、1時間と決まっているわけではありません。まして、ホテルなどでする場合は、スケジュールを作り、そのスケジュールに合わせて時間を決めの方がよいでしょう。

ただし、僧侶が占める式の時間だけは、お寺さんと相談することがよいと思います。

それでは式の内容のことです。わたしは仏式の場合しか知りませんが、構成されるものは、お経、回向、引導または表白文といわれるものです。

その前に、剃髪の偈、懺悔文、三帰依戒、鳴らしものなどもあるでしょうが、限られた時間の中ですので、いくつかは省かなければならないこともあるでしょうが、できたら、内容を吟味できれば、なお素晴らしいかも知れません。ここまではできないにしても、肝心なのは、進行している式の内容が理解できることです。

理解できれば、今度は、その内容にかんして、故人を偲びながら考えることができるでしょう。できたら、エンディングのための人生ノートがあればなおよいことですし、その内容をお寺さんに見せておくことも必要なことだと思います。そうすれば、お寺さんは、進行する式の中に、故人の言葉を入れてくれるでしょう。

考えることは、故人のエンディングに対して、大きさではなくて、内容で、いかに最上の式ができたかです。

故人の旅立ちから、残された者として、伴侶へ、子ども達へ、兄弟に、友人たちへ、人が生きるとは、故人の生き様を視点を換えて表し、故人の人生は何の意味があったか、残したものは何かと、そこから故人のメッセージをとりだし、残されたものへの指針が生じます。

残されたもの祈りも大切なのですが、故人の祈りもなお大切なものです。多くの言葉が願いや祈りとなって交差します。畏敬や感謝の気持ちが同時に発信できれば、最良な式となるでしょう

時間旅行

大いなる普遍の命が、
限りあるしるしに降り注いでいることを知るとき、今、ここにおいて、安らぐ。
さあ、旅立とう。

お経、回向を時間飛行と言う私。いつしか、命を時間と読み替えている私がいま
した。命とは過去・現在・未来の人間の営みとしてです。

たとえば、父にとって母にとっての未来は、私の今にあるから。私の過去は、父
や母に宿っているということもできます。命ってそんな時間の関係の中に描けるので
はないかと思うのです。

亡くなった親しき者を、追憶し、お経を読み、回向を手向ける。

過去への扉が開くと、未来が渦をなして飛び込んでくる。彩なす時の美しさよ。

命の歌-母の短歌

昭和60年の7月、ショートステイに入居したその日、父は熱を出し、入院してしまった。母は懸命に父が入院する病院に通い、看病した。また、その年は、内孫の長男誕生の年でもあった。

翌年の8月12日父は、母に看取られ、旅立っていった。

父の一周忌の頃を境に、母は父を偲びながらも、夫の属した沃野社に、歌を送りはじめる。

平成12年12月13日母が没し、その遺品を整理していると、無造作に散らかった書類や手紙の中から、

母の筆跡のノートがでてきた。読んでみると、それは亡くなった父への、思慕に近い想いだったのです。

そして、日記より、歌に託すことで、少しずつ癒されました。これも、母は母の今を表現していることの記録です。

今まで振り向きもしなかった短歌。父も同人だった『沃野』に投稿することで、母は父と一緒にいたのです。

下記は、短歌雑誌『沃野』に掲載された母の歌と批評の全文です。そして、記すことで、私も母を父を、偲びます。

命の歌ー母の短歌

平成2年7月号

温き秋しばし続くを祈れるに蕾を垂れて睡蓮咲かず
舞ひ舞ひて散りゆく落葉舗装路に只積りゐて土に還らず
父知らぬ幼いだきて南方の空を恋ひたる昭和去りゆく
空襲に焼けし雛夫も娘もしらずわがまなうらの幼き姫達
夜の更けてもどる人待つ苛立ちのもう無き吾に待つ人もなし

10月号に載った田井中みづほ氏の批評ー『今帰るか帰って来たのかと、帰宅の遅い夫を、或る時は案じ、また或る時は苛ち待った日々を、今は感慨もひとしお、作者の夫恋の心情が具体的な描写に依りよく解り、また五句の「なし」と言い切った詞の裏面より泛（うか）ぶ慕情を一層深く感受出来る』ー母は十月号表紙に、批評ありと記している

平成2年9月号

聞きてより見（まみ）ゆるこの日待ち侘びし二千年経るといふ彼岸桜
日本武尊手入れなせしといふ桜今日寺庭に青葉輝く
二千年の世を生き濯ぐ桜鉄棒のささへは枕当てがふ如し
花どきを彩る姿想ひつつ江戸彼岸桜又尋ねたし

平成2年10月号

吾が姓の変わりて五十年去りゆきし時を語りたき夫のいまさず
五月夜のおぼろに見ゆる細き月二人にて見ぬ湯河原の宿
藤つつじ牡丹咲きゐて南方（みんなみ）に夫征でゆきぬ身籠る吾は
目の前に魚雷命中僚船は沈めりと夫の手紙黄ばめる
祈りつつ五年を待ちて帰る夫娘と迎へしは夏逝く夕べ

平成2年11月号

アムール川に魂安かれと花火上がり映像に見る戦むなしき
幾十年「沃野」紐で綴ぢ保存せし亡夫の手つき今日目に浮ぶ
2月号に載った田井中みづほ氏の批評—『沃野も創刊号よりとなれば随分の嵩になる、丹念に紐で綴ぢ、大切に保存された夫君を偲ばれての作で、一読、亡夫とは委員長であった向井宗直先生の事、作品として亡夫の姿を具体的に簡潔に描写され、読者にも亡き向井先生のありし日の姿が泛んで来る。唯、結句の「今日」が忌の日であったか、或は特別の何かの日か解りかねるのと、初句の終わりに” の ” と二句の「沃野」の下に” を ” との助詞が欲しいのと「紐」は略せる。助詞の使用に依って調べも滑らかになる。』—母は沃野の背に、” 批評の ” と書いている。
ことさらに乾く夏なり台風の予報ひそかに恃（たの）みて待ちぬ
使ひ水バケツに溜めて土にまく渴水の夏のならひとなりぬ
休む間も惜しと編みゆけば易々と手の動き孫娘（まご）のセーター仕上る

平成2年12月号

若き日の歌溢れつつはらからと幼にかへり車の旅す
高原を登るにつれて花々の色濃く咲けりしじまの中に
稜線に影うつしゆく白雲の湧きつ流れつ行方はてなし
愛らしき幼孫（まご）の顔吾に似るといふ嬉しく聞きぬお世辞と知れど
庭のバラ紅きを切りて母の日の吾に贈ると娘は訪ねくる

平成3年1月号

籠いつぱいに桑の実つめる指先の紅に染まるを小川にひたす
夏焼けの葉はそのままだやまぼうし緑の萌えて秋の陽に照る
野分過ぎ朝の道路に貼りつける落葉を一人掃きなやみをり
「午後の紅茶」と甘き名の缶捨てられてごみとなり果て道に散らばる
朝あさを旅立つ如く振り返り手を振りてゆく二人の孫は

平成3年2月号

七福神初参りの朝雪晴れて車少き箱根路を行く
雪の道登りて行きぬ枯枝に積もりたる雪花と見紛ふ
バスの窓より眺むる富士は裾長くひきをり三島の町羨しかり

うかびたる短歌（うた）しるさむと座るわが膝にのりくる幼の笑顔
無心に笑む幼をいだく古希過ぎたる吾にこの日のありし不思議さ

平成3年3月号

春さくら夏はあぢさゐ秋はもみぢ尼君おはせし柿生のみ寺
雪被たる富士の姿ぞ吾が前に夕日背に負ひ裾長く引く
輝ける夕日背に落ち大き富士わが前にあり忍野八海
バスにつき左右に富士の姿あり何処までも見えて旅ゆく楽し
伏せ字多きモーパッサン読みし少女の日老いて開きぬときめきもなく

平成3年4月号

詠み人の名よりよみ上ぐる父の声はらから集ひし遠き初春
人の世の別れを重ね年暮れて明くれば常のごと又日は昇る
亡夫の姿うすれつつゆくこの家に男（お）の子二人の声弾みをり
永代橋の橋際の椿に赤き色見え初め今年の春もま近し
福耳ゆゑ後半生は幸せと吾に告げゆく媼（おうな）のありき

平成3年5月号

時々はゆつたり朝寝楽しまむ願へど老は早々と覚む
若きらと住むは戸惑ひ時にありて老いゆく吾をしみじみと意識す
娘の選びくれしブレザーさ些かの気後れあれど春なれば着る
風やみて春の日ざしのやさしければ金魚緋目高水面を泳ぐ
汝を生みしは大寒なりと母の言葉今日七十二歳一人迎ふる

平成3年6月号

手伝ふと椅子引き寄せて流し水に小さき手ぬらし悩ます二歳
指二本丸めし程の小さき花酷暑の名残りか紅椿愛し
行き過ぎて振返り道掃く吾に目を合せほほえめるブロンドの少女
日当りよき部屋にうつりて朝毎の鏡はむごし小皺大皺
折々の家内の争ひを嘆く日あり夫逝きてより知る一人の友に

平成3年7月号

椿散り五月の光さす庭におだまきの白、紫、えんじ
いつしかにおだまきの咲く庭となり今年の春も陽ざしやさしき
話さむと思へど言葉出て来ず物忘れも多くなりしこの頃
聞かれても答えずに時過ぎてはたと思ひいづぎぼうし紅紫檀
寺庭に仰ぐ不思議なるナンジャモンジャ白き十字の花の咲ける木

平成3年8月号

ユリの木といふ名にひかれ幾年月今日仰ぎ見る黄みどりの花
ユリに木の並木を見むと一人来ぬ迎賓館の道花は真盛り
しばし見上ぐるユリの花愛らしく不思議の苑に遊べる如し
白檀の薫りほのかに古りし扇逝きし義兄若き日の中国みやげ
物言へず吾を見てゐし病める夫思ひ出重ね人は悲しき

平成3年9月号

戯れ心秘めて楽しも星柄のシャツ着て夕べ空見つつ行く
テレビ見て一芯二葉に新芽つめば梅雨のさ中に勢ふ茶の木は
レンゲ田がテレビに見えて思ひ出す花にねころび仰ぎし碧空
幾千か昼顔淡きくれなゐの基地にそひゐて朝光そそぐ
花子といふペルシャ猫ゐて瓶にさすトルコキキョウを好みて食べる

平成3年10月号

その背より大きランドセル負ふ孫を門に見送る春の光に
鱗根は重り合ひてゆるるなるその姿百合と名づけたりとぞ
吾亦紅、あざみ、女郎花野の花を瓶にさすなり今日の幸せ
石に沿ひ又かき分けて流れゆく釜無川の瀬音涼しき
高架線の車窓より見る桜花街の屋根屋根彩りて行く

平成4年1月号

今は娘の住む家に柘榴実りたり亡夫の手植ゑしこの木に多（さは）に
石路の日当たりよきは花咲きて木陰はあはれ蕾も見えず
スモッグに星かげうすき下町の空雨に拭はれ明星光る
久方の澄める星空しばし仰ぎ心ほのぼの今朝の明けゆく
老母のさみしき心計られず吾も老いて知る同じ思ひぞ

平成4年 2月号

碧空は穏やかに日ざし温かく姿見えず富士、筑波、日光連山
「林道湖」紫の花想ひたり開拓地なれば「林道」なりと
老い初めて幾年続けし旅も終わりなるや逝きしはらからよ面影浮ぶ
老医師の家も壊されたちまちにビル建ちにけり吾が住める街

平成4年3月号

駅の段やうやく上る目の前をさっそうとゆく長き脚羨し
やまぼうしの紅す枯れたる葉も散りて師走残るはもう幾日か
春迎へ年齢（とし）重ねるはなけれどもこの年逝くはさみしきものよ

自我芽生え思ひ適はぬと泣き続けやがて「直つた」と笑ひぬ孫は
ガラスのビル青空に染み残月は丸くかかりて今朝の目に入る

平成4年4月号

狭庭なれど春を告ぐる沈丁花の開き初めしよ暖冬二月
小雨ふりて温く明けしに夕つ方北風吹きて月青く冴ゆ
幼子の顔うかびきて苺買ふ荷の重けれど足軽く行く
落着かず暮らす日多くばたばたと今日も過ぎゆく年越えたれど
夕つ方一瞬のとこめきに似たるなり皺多き指にリングを飾る

平成4年5月号

あちこちとスイッチ押しビデオ電気器具わが知らぬもの遊ぶ三歳

8月号に載った松下宣子氏の批評—『全くこの頃の電気器具は小型化し扱いはより簡単となりスイッチの一つで点ったり消えたり、動いたり止まったり幼い者の玩具ともなり得るものが沢山ある。玩具として作られたものよりも子供は大人の使うものを自分が扱えることでより満足感が湧くようである。「わが知らぬもの」に自身の老いを嘆き、孫の順調な生育を喜ぶ作者の感慨がこめられている。』孫歌は作るな』とよくいわれるがこの一首はそれを越えたよい歌と思う。』

引きてゐるわが手振りほどこかけ出す孫老の力はもう及ばざり
車多き街なかなれば危なしと追ひかけゆきて孫と競争
隅田川長閑かにながれ遊覧船貨物船ゆく春の大川
隅田川大橋渡りゆきビルの並ぶ街浜町辺り煮豆（まめ）買ひに行く

平成4年6月号

階のぼる足音小さくきこえる姿は待ちをり「お休みなさい」を
一人住まふは淋しきものと息は言へり密かに思ふ気儘も欲しと
夜嵐に吹きよせられて桜花はなびらあはれ色褪せて塵
春は優し土たまりゐて一株のたんぽぽ咲かす橋の一隅
首輪なき黒ぶちの犬吾が傍に信号待ちて渡りてゆきぬ

九月号に載った柳田馨氏の批評—『街頭に出合った犬に目を凝らし、さりげない風情で親しみを匂わせる作者の姿がよく出ている。「首輪なき犬」多分飼い主のいない野犬だけに作者の心が動いたものと思われる。下句の「信号待ちて渡りゆきぬ」は、一句に接続助詞が二つ続くことになるので再考願いたい。一例としては「信号待ち」と述べることも考えられる。』

平成4年7月号

梅、椿、辛夷に桃の桜咲き春の行方の見ゆるこの道
孫の通ふ幼稚園そして小学校と続く道吾も花仰ぎゆく
ケーキ食ぶる真人の笑顔なかなか愛らしく今日七歳となる

脳に埋める記憶装置のあらばよしと埒なき事を夜明けに思ふ
華やかなりし銀幕うかぶデートリッヒ九十歳の死を早朝報ず

平成4年8月号

六十余年遙かに越えて師の君も友も健やかに老い今日を集ふ
戦の海を渡りし文の束に命伝へ合ひし日は遠く去る
白き花は空に向かひて山ぼうし静かに初夏の訪れを告ぐ
白き花葉かげにはつか見えながら蕾の見えぬ今朝散り初めし

平成4年9月号

防火水槽の隅に群れゐる緋の色の鯉かと紛ふ金魚育ちて
「雪の下道」通りきて八幡宮に出でたればふと口ずさむ鎌倉の歌
次々と唱歌の言葉あふれ出で幼にかへるなつかしき道
大銀杏世の移ろひを見守りて立ち古りぬ語り合ひてみたしよ

12月号に載った柳田馨氏の批評—『一本の大銀杏をじっくり見据え、単なる描写ではなく自己の心に湧いた思いを、ズバリ詠み込んだ作であろう。「世の移ろひを見守りて」と密度の高い捉え方をしているのに魅かれる。見守る如くと比喩法を使わずに、真正面から見守りてと掴み取った作者の姿勢も立派、何か悠久の時の流れを感じさせて呉れるような歌である。』

帰宅せし吾に抱けよと手をのべくる幼にみやげのお守り付ける

平成4年10月号

枝陰に姿は見えねど鶯の声さはやかに山の家朝
咲き初めししもつけの花も下草とて笹の葉と共に刈られてしまひぬ
刈られたるしもつけの花拾ひ集め濡布に包み家苞（ほう）とせり
叢を分け入り山を下りつつ蕨を折りぬ古希とうに過ぎ
亡夫の忌の又巡り来ぬ病み初めし齢もいつしか同じになりて

平成4年11月号

厳しかりし暑さ逝くかと思ふ日にみんな蝉をやうやく聞きぬ
九月三日の花言葉はダリヤなりときく吾が住む街に見たることもなし
枯るるなと山ぼうしの木朝な夕な見上ぐる雨の降らぬ夏逝く
暑さ故葉先の色も枯れゆけば朝な夕なに水撒きてやる
家人らのすけじゅーる書くカレンダー合間にYと吾も書き込む

平成4年12月号

植ゑし苗茎の色違ひそれぞれに咲く花の色想ふは楽し
鉢に植ゑし朝顔十六輪花咲きぬ明日は幾つと蕾数ふる
純白に桃色にまた紫にと咲きたり露に濡るる朝顔

やうやくに涼風立ちて黄ばみたる葉かげに見ゆる小花の幾つ
目ざむれば車の騒音耳に入るこの街に住みて二十余年か

平成5年2月号

五百軒の路ゆき帰るバスの旅終へぬ明日より又平凡な日々
吾を迎ふる孫二人見え息の顔も見えて二日のバス旅終る
小さき孫は「さみしかった」と手をのべくる吾も柔らかきその頬撫づる
道路はプラタナス堀内は山ぼうし枯葉舞ひ散り冬に入りゆく
書も読みたしテレビも見たし編物もと思ひつけれど憧れなるか

平成5年3月号

亡き人の面影今は朧（おぼろ）にて行く先知らぬバスに乗る夢
千両と水仙一輪瓶ににさし写真にかざる吾の正月
筋雲は明けやらぬ空にたなびけど瞬く星の美はしき元朝
ほのぼのと空明け初めて元朝をビルの形くっきりと立つ
古びたる箏篋鏡台位置を変へ新たになり今日より吾が部屋

平成5年4月号

亡き母の継ぎ当て縫直し常のこと豊かな世に在る吾の思ひ出
帽子をとり声かけくるる人ありて朝の道掃くひとときなごむ
夜の明けと暮るるひと時を仰ぐ空今宵上弦の月輝りてをり
父と子がボール投げ合ひ楽しげな公園の午後の平和な景色
歌つくらむと一人し掛くるベンチありて今日如月の青空広し

平成5年5月号

眉月の上に明星輝きて風吹きぬくる如月の空
雨情の歌聞きつつ吾も歌作せむと鉛筆持てど一字も書けず
兄は自転車弟は手を払ひかけ出す散歩に老の歩調合はざり
話し継がむとすれど言葉の浮かび来ずこの頃の吾に吾と驚く
幹細き木なれど歳々に咲く朴半（ぼくはん）椿花華やかに芯ゆたかなる

平成5年6月号

荒るる海を刻かけて渡り来し佐渡ヶ島雪の山脈墨絵の如し
晴れしかと思ふ間もなく小雪舞ひ冬もどりせしや日本海は
朝寒むの空に鳶舞ひ海猫も舞ひ舞ひてショー一見るは楽しも
翼ひろげ一直線に飛び交ひつ海面（うなも）かすめつ魚とる鳶は
駅弁をもとめて乗りし新幹線旅の別れの夕餉となせり

平成5年7月号

テーブル掛けに染めし牡丹の歌胸に染む植松家を訪ひし遠き日のこと
重き鉢購ひて帰る牡丹の花は寿樹先生の御歌心にありて
もったりと牡丹の花は皆ひらき晩春の宵肌やや寒き

10月号に載る荒木富美子氏の批評ー『中国では「花王」と称される牡丹を、これは造語であろうか「もったり」と言う初句の表白が、此の場合は非常に相応しく、春逝かんとする季節感を、結句然りげ無く据えた点お見事。』

白き胡蝶舞ひ初めしごと蘭は咲き光明るき吾が窓辺なり
実生の木に白き小花の咲き初めぬ亡夫の蒔きし名の知れぬこの木

平成5年8月号

咲き満ちし桃畑の道廻りゆく心の足らふ桃源郷ここは
水瓶に次々と咲く睡蓮の花終りては水に沈みゆく
明けやらぬ朝を目覚むるわが癖の幾年なりや今日も覚めたり
スタンドの仄かな灯りに白き花真夜も舞ひゐる胡蝶蘭あり
一廻り年上の義姉なり今直ぐに逢ひに来よとぞ電話かけくる

平成5年9月号

大会に行きましようよと病む夫を励まし励まし看とりし日ありき
今吾もここに居ますと亡き夫に呼びかくる箱根大会は今日
隣寺の竹の落葉は墓地に積り朝毎に掃く吾を困らす
墓石の間に積む落葉掃き難し隣寺よりきりなく舞ひ入る

平成5年10月号

久々に雨上り仰ぐ夜の空星影一つ二つもう一つ
駆けぬけてわが前を走りゆく孫よ遅れてならじ息をはずます
孫二人後姿のもつれつつラジオ体操の朝のさはやか
児を背負ひ空襲の一夜をころげつつ逃げまどひたる8月一日
負ひし児は五十路を過ぎて二人子の母とはなりぬ平和なる世に

平成5年11月号

楽しきことあれこれ持ちて老の道健やかなれと願ひつつ行く
早起きも日課となりぬ今朝も又車少き歩道より掃く
掃き終へて心足らひぬ六時半さあ長年のラジオ体操せむ
小さきラジオ耳につけては山ぼうしを見上げつつ動かす首を手足を見上げたる山ぼうしの一枝に害虫の白き網の如広がるが見ゆ

平成5年12月号

刺す虫の姿見えねどただかゆし竹の虫とぞ医師は宣ふ
竹の毛虫か赤く腫れたる雨の腕の痒さ耐へみつ半月余り
雲をはらふ風強ければ十五夜の月の光の冴えて気高し
吾が背に空を見上ぐる幼孫雲の流れの面白しと云ふ
一鉢の君子蘭求め十年余り鉢の数増し華やぎも増す

平成6年2月号

ゆったりと土色の水流れをり隅田川大橋渡りつつ見ゆ
家をめぐるプラタナスの街路樹風に散り乾けり音のかさこそと舞ふ
モチの枯葉しきりに落ちて山ぼうしの枯葉も交り庭に散り敷く
娘孫のセーターを編む一ときもありて多忙な年暮れむとす
セーターを編み上げむとていそいそと部屋にこもりて一途になりぬ

平成6年3月号

大方の葉を落したるプラタナス朝の道掃き易くはかどる
日当りよき吾が部屋に居れど折々は夫を偲びてただ過しをり
七草の明けやらぬ空に半月と星一つ見えて清き朝なり
七草の皆揃はねど粥を炊き家族一年の健康祈る
贈られしカトレヤの花萎れたり十日余りを手もとにありて

平成6年7月号

桜見たく春をふたたび訪れぬ二千年の命の花溢れ咲く
実相寺の寺庭に生きる桜木の幹に泪あり永き歲月
一鉢の牡丹求めしは去年なりき命短し縁日の花
一本の杖を頼りに歩む友もゐるクラス会七十六歳
ひと月も便りなき老姉（あね）に電話すれば骨折入院中と娘より聞かざる

平成6年8月号

離れ住む娘の苦勞思ふなり一人親なる吾は目覚めて
妻なりし日は遠く去りいま我はおばあちゃんとのみ呼ばれておりぬ
風強き朝を花びら散り敷けり山ぼうしの花多に咲きしか
人通り少き早朝を起き出でて道掃き墓地を掃きをり
セーターを編み上げて目をやる窓の外椿の若葉紫陽花の花

11月号に載った円谷泰秋氏の批評一『大変素直な写実歌で歌調も整っているが歌材が多いため焦点が明瞭でない。「椿若葉紫陽花の花」と名詞の並列でなく一方の印象を強く詠出して感動の焦点化をはかる工夫をしてほしい。』

平成6年9月号

久しく逢はざりし妹を訪れぬ寺町五十八番地わが生れし所
父母も兄弟もありてももろともに此処に暮せし面影なつかし
一人行く老の通る道厳しかり何をなすとも皆忘れゆく
老いいよよ深まりゆくらしわが義姉の同じ電話日に幾度かけくる
水引草の紅の花も白き花も共に咲きたり喜びありて

平成6年10月号

吾が耳にそつと口よせ「玩具買って」五歳も孫と二人の秘密
やんちゃんなる二人孫留守の家の内心は休めど何か淋しき
日々上る気温きりなく三十九度を越すとぞ聞けり八月三日
朝顔も草むらの葉も首垂れて太陽の通り過ぐるを待ちをり
窓明けられぬ暑き都会の昼も夜もクーラーに頼り息つてをり

平成6年11月号—翌号より母は沃野の第三同人に昇格した。

名を知らぬ鉢の草花赤ピンク白に黄色が今朝も開きぬ
朝七時花ひらき初め夕方静かに閉じぬ花の一日
日照り続き枯葉が目立つ庭の木々一日の雨に息つくがみゆ
水不足の声聞こゆれば庭の木々に水やりにつつ心とがめつ
孫たちの夏休み終り静けさのもどれど老一人穴あく如し

平成7年1月号

月下美人今宵咲くらし部屋内に端座してその刻（とき）を待ちある
湯上りの一缶のビール分けて飲み—ときありて嫁と楽しむ
虫の音も小鳥の声も聞かぬ待ち月見ることさへ忘れてをりぬ
水槽の金魚はあはれその上に足場かかりて冬に入りゆく
改築をなすとして狭きわが部屋にテレビを置いて幼と過ごす

平成7年2月号

秒きざむ時計の音のみ高ければ一人起き出で歌思ひをり
夜明け待ちていつもの如く街路樹の掃落掃きする今日の始り
枯葉よとシャンソンくちずさみプラタナスの落葉散りしく歩道掃く
おほかたの葉は散りはてし山法師冬支度成ると朝日あびおり
明けやらぬ空の清さよ星かげのまたたきをりてこの身も清し
共に生くと結ばれたりし遠き日よ思ひ出ばかり一人残りて
自らきめし生命にあらぬ故老深む日日を何か励まぬ

平成7年3月号

新しき年のカレンダー白き壁にかざりて過ぎし年を思ふも
戦時下の三年の月日スマトラに過ごせし夫の歳月重し
戦終りぼろぼろになりて帰りし夫子はとまどひぬこれが父かと

6月号に載る島野達也氏の批評ー『戦争が終わって復員してきた父の顔を初めて見た娘も五十歳を過ぎた。その日の体験は娘にとっても作者にとっても忘れ難いものであり、作者の人生の記録としての歌である。ただ、詠まれた状況は作者の家族だけの問題ではなかった筈である。従って、ここでは向井さんだけの人生体験を詠むのでなければ、読む人に感動を与えられない。「ぼろぼろになりて」「とまどひぬ」が一般的表現にとどまっているということを知ってほしい。』

父の顔をその日初めて見し娘なり時過ぎていま五十路となりぬ
時の流れの早くして夫かたへより消えぬ墓守る媼（おうな）かわれは
風もなく雲さへ見えぬ朝の空見上げつつ深く呼吸するなり

平成7年4月号

得意げに縄跳びをする弟孫七十跳びしと更に続ける

7月号に載る石井祐二氏の批評ー『幼稚園児か、それとも小学校一年生くらいの孫なのだろうか。とにかく縄跳びが出来るようになって嬉しくてしかたない。七十回程跳べるようになったと作者に知らせては、もっと跳べるようになりたいと練習に励んでいるのである。その様子を作者は目を細めて見守っているのである。「跳びしと更に続ける」が実にいい。作者の優しい人柄が伝わってくる一首である。』

紅きバラにリボンをかけて贈りくるる十歳の孫のはにかめる顔
大型のトラック行き交ふこの街に赤きトンボの群れて嬉しき
人の影も声も聞こえぬ島のホテル磯打つ波の音のみ高し
富士の山ま白く清かに仰がるる神々しかり秘本の山

平成7年5月号

夜は更けラジオより聞こゆる「荒城の月」藤原義江なり思ひみざりき
次々と流れくる唄なつかしき「ほこを収めて」「乾杯の唄」
「恋はやさし」「カラタチの花」「この道」等一とき楽し今日は良き日ぞ
時を忘れ唄声に酔ふ一ときの吾等がテナー藤原義江

平成7年6月号

花みづき咲く季となり道を行く人が楽しとわれに告げゆく
やまぼうし、花みづき門冠りの木緑かかげてわが歌となる
夫の木の今年は房の花をつけ咲き満つる日の切に待たるる
洋蘭を分けたる五鉢花咲きて友にも贈り喜びとなす

平成7年6月号をもって投稿はない。多分、これ以降、母は歌の投稿を躊躇することがあったのだろう。

礎-いしずえ-

昭和60年の7月、ショートステイに入居したその日、父は熱を出し、併設する病院に、入院してしまっ。母は懸命に父が入院する病院に通い、看病した。その入居する前の3月には、待望の内孫が誕生していた。

父が具合悪くなり始めてより、母は父との全てを忘れまいと、日記を記し始めた。そして昭和61年8月12日、父が亡くなった。日記はしばらく続くが、それは、母の父への思慕と、母の生き苦しきだ。

そして平成12年12月13日母が没した。この項は、そんな母の記録である。

遺品を整理していると、無造作に散らかった書類や手紙の中から、母の筆跡のノートがでてきた。読んでみると、記された内容に母の気持ちが込められて、当時それを理解できなかった不甲斐なさ、すまなさもあるが、この記録があったが故、今、母を父を、改めて考える事が出来た。この記録がなければ、時はただ過ぎ去り、今の私に至る私の過去の一部は、埋没していたと思う。

読み、そして整理していくうちに、公開してみたくなった。父と母の二人を、慕い追慕して、称えて祝福することが、追悼の意味になり、ひいては残された私達の礎になるからと思ったからです。

そして、親しい人を亡くした同じ思いをしている人たちに捧げたいと思ったのです。さらに、この美しい思いを、いまだ大切な者を亡くしていない貴方に贈る。

礎-いしずえ-

昭和61年8月11日(月) 晴れ暑い

いつものごとく朝が明ける。私は自分の仕事をすませ、家に入り、皆で朝食、テレビを見、片づけものをしてしていると電話がはいる。NTの声。箱根に一家できているとのこと、Yとも話す。次の電話がかかる。病院からである。

「ご主人さんの様子がいつもとチョット異なっていて、食事もとらないし、タンが絡まり苦しそう、奥さん、直ぐ来てください。息子さんも一緒に。」

びっくりしてしまう。いそいで病院に行く。主人は、いつもと違う。食事どころか、口から物が入らない。でも、この時は、こんな夜が来るとは、思っていなかった。

午後から苦しそうで、顔が何となく変わってきた。今夜は病院に泊まらせてもらおう。久しぶりに主人の側で一緒に過ごせる。

一度家に帰り、支度をして病院に行く。暑い夜である。タンをとってもらおうと少し楽になったので、MM、FY、FSさんには帰ってもらおう。側のいすをベッドにして、横になる。静かになったと思ったのに、苦しそうな息、のどの奥でゼイゼイと音がする。顔を仰向けにしているが、その目は異う。胸をさすっていながら、何故こんなに苦しまねばならないのかしらと思ひ、たまらない気持ちになる。

看護婦さんが、「奥さん、お家へ電話して、早く、早く」

もうお終い。夢を見ているような、時間が流れる。

「ご免なさい。お父さん。」12時6分。このまま止まって家に帰る。今夜は家で、この部屋で、二人で寝ましょう。

8月12日の真夜中、12時6分、とうとうこの日が来てしまった。

8月20日（水）くもり晴れ

とうとう一週間の上も時が過ぎてしまった。毎日毎日が何となく過ぎる。主人はもういない。NTが可愛そう。どうぞどうにかして気持ちよく暮らせる日がくるよう。もう私には何とかしてあげようと思っても、手の伸べようがない。

8月21日（木）

目がさめる。0時30分、こんなに早くさめては困る。灯りを消した。布団の中で目をつむり、頭の中であれこれと思う。下手の考え休むに似たりとか。いつもいつもおろかなことを知らない間に浮かべている。主人は永遠にいつてしまった。私は一人となってしまう。よく判っていたけれど、どうにもならないこの現実、早く自分の活かし方を考えねば……。いやいやそんなに急がず、ゆっくり、そのうちに何かをみつけるでしょう。

8月22日（金）くもり晴れ暑し

鈴木医院へ行く。すがすがしい葬儀でしたと、何度もおっしゃって下さる。皆様よくおやりになりましたねともおっしゃって下さる。血液検査をして下さる。安定剤を頂き、帰りに郵便局で古い通帳の全払いをする。これは私が最初に主人から賜ったものである。もう主人の名前の物は終わりである。息子が掃除をしている。私は孫とこちらにいる。なかなか大変なことである。いろいろあって私は疲れる。頭の中がボーッとして、何とか自分の生き方を考えねば……。

8月24日（日）晴れ暑し

主人を本堂から金曜日に客間に移したので、客間の掃除をする。孫がずっとそばについて、遊びながらの仕事。新聞見ても眠くなるし、どうしてこんなに眠いのでしょうか。ただ、毎日が過ぎてゆく。朝夕は大部涼しさを感じず、日中はまだまだ暑い。

8月30日（土）

連日の暑さ、早く涼しくならなければ。私はどうしてよいか判らない。三年有余、病人の主人一筋に暮らして、今、私はどうしてよいか判らない。家のことも、もう私の時代ではない。でも長い間のくせで体が働いてしまう。私自身の生活を持ちたい。

9月5日（金）晴れ

昨日は35度以上。くらべるといくらか涼しい。主人の死亡通知の手紙を沢山出したので、7人も訪ねて来てくれた。私は一人である。何をどうしてよいやら。夕方、孫娘が刺繍で、学校帰

りに来てくれる。

9月10日（水）くもり

箱根出発。くもりでも丁度さしつかえない。天気、楽しい旅の始まり。久々の箱根旅行。嬉しい。家具健保の保養所は、大変に立派なごうかな御影色の良い場所で快適である。

9月11日（木）くもり

タクシーにて午後2時過ぎまで箱根各地を廻る。すべて具合良好。夕5時半頃帰宅する。この旅行をさそって下さった方に感謝をする。

9月13日くもり雨

朝目をさますと、タオルケット一枚では、やや寒く、初めて毛布を使う。でも日中はまだ暑い。

9月14日

今朝も毛布を掛ける。日中はやや小寒く、袖のある物がほしくなる。夜、床につく時も毛布をかける。

9月20日

今日から秋の彼岸が始まる。目がさめると朝の2時、困ってしまう。これから6時近くまでの時を過ごすことが苦しい。お父さん、助けて。何故こうなったのかしら。

これから先こんなにして生きていかなければならないのかしら。現実の状態が判り過ぎていて、口から出すことが出来ない。

9月22日（月）

彼岸の三日目、久しぶりで暑い。主人との別れる日も近くなる。孫が日毎に活発となりだんだんと私には、重荷となってくる。でも愛らしい。

9月23日（火）

彼岸の中日、昼近くT子、Y子が来くれる。船橋の姉と娘たち4人、お参りにみえる。一日中気持ちよく晴れた。初秋の一日でした。皆さんが主人の死を悔やんで下さる。

9月28日（日）晴れ

明日の納骨の支度を、息子達がしてくれる。私も手伝う。すっかり座敷の支度を終え、分骨を皆でする。本当は私にはどうしてよいのやら判らない。白い主人のお骨を見て、涙がこみ上げてくる。じっとこらえなければならぬ。お父さん、さようなら。今までも私があなたに何をしてあげられたのでしょうか。又これからさきがある。後の月日、年月をどの様に過ごしたらよいのでしょうか。

10月2日(水) 晴れ

日毎に秋らしくなりました。主人もとうとうつめたいお墓の中に入ってしまった。もうお終いです。昨日は冷たい雨が降り、目地をしていないお墓が気になりました。今日、石屋さんに、電話しましたところ、直ぐに来て目地をとめてくれました。……。

船橋の姉、上の姉から電話がありました。

10月7日(火)

昨日MさんIさんとご一緒に高島屋に中村先生他の展示会を見に行って、いろいろと見て、又その上食事を「ざくろ」です。その折りにお二人の手作りのポップリのハンガー、お人形ポケットチーフを頂いて嬉しくなり、気持ちが明るくなった。

Iさんへお礼の電話を入れる。Wさんよりお返しのお礼の電話あり。S先生へ行っている間のこととて直ぐ折り返して、私から電話を入れる。私のことを心配して、短歌をしつこく進めて下さる。

10月12日(日)

君逝きて今日ニヶ月目の日をむかふいざ友だちと旅に遊ばむ

10月14日(火)

宮古国民休暇村で、朝6時目をさます。快晴。この寒さが心地よし。朝食もおいしい。食前に散歩に出る。気持ちよし。

宮古から特急バスで盛岡に向かう。山を見ながら青い美しい空に浮かぶ雲をながめ、やや紅葉の始まっている木を眺め、楽しいはずなのに、気分が悪くなり、大失敗をしてしまう。皆さん、大変ご心配をかけて申わけなし。タクシーにて小岩井牧場、他に行き、7時30分家に着く。

駅のホームで息子に会う。ビックリしたり感謝したり、感激、皆さんにお礼を申し上げて、家に帰る。

10月18日(土) 晴れ北風強し

急に季節が早くなり、冬型となる。午後Wさんのお宅におじゃまをする。旅の話等いろいろとして4時頃家にもどる。相変わらず短歌の話が出るが、私にはどうにもならない。

なかなか夜は寝付かれず、今0時を過ぎる。

11月12日(水) 晴れ 室内やや寒し

11月もなかばとなってしまう。昨日は船橋のF家へ行く。姉は家の中に居る姿のせいか、やっぱり年を取ったと思う。夕方、北風の中を家に着いたのは5時頃。寒さはだんだん近づいてくる。

スカートで外を歩いていると膝が寒い。今日夕方3時にY整形外科ににけん引に行く。午前中にHYが来る。歌はあいかわらず出来ない。編み物も思うようには出来ない。

1 1月18日(火) 晴れ 予報より暖かい

お手紙を書くことにしました。

今日はG婦人会で、浅草のビューホテルに、F Yと二人ででかける。ここは国際劇場であった場所にできたホテルです。清澄町まで歩いて行き、その後はタクシーで行く。

全部で6名の顔ぶれ。フランス料理です。28階建て、食事は27階。お父さんの知っている浅草とは随分変わりました。仕方がありません。でもお父さんも連れてきてあげたいと思ひました。

1 1月19日(水) くもり晴れ

お金を使いすぎました。先週にコート、今日はスカート、スカーフ等。ごめんなさい。お父さんのお金をこんなに使ってしまって、でも必要な服だったのです。心は満たされないわ、いつまでこれが続くのでしょうか。このおろかなる者。

1 1月21日

百箇日も過ぎました。私の心の中では未だ思ひが切れません。どうして貴男だけが居ないのかしら、私の住む世界とは異なった土地へ行ってしまいました。今日は指の注射です。とても痛いんです。自分の為にこの手をなおします。

1 1月23日

朝4時前に目がさめてしまいました。丈夫で居た日のことのみ思ひ出します。どうぞ帰ってきて。

何ともなく暮らしていた日が輝いて居たとは知りませんでした。三原山の爆発のニュースで、昨日から大変です。今日も一日、どうにか過ごしてゆかねばなりません。みんな夢です。夢の中の出来事です。流れでゆきます。流されてゆきます。

1 1月26日雨くもり

少々もどったり進んだりしながら、寒くなってゆきます。じっとしていると目の中から自然に涙が出てきて困ります。今、芦谷先生とHKさんに年賀欠礼の手紙を書きました。

1 2月1日

29日夕方三越劇場へF Yの長唄を聞きにゆく。その足で八王子へ行く。やっぱり八王子は寒い。一晩のつもりが二晩となり、大変御馳走になる。6時近く帰る。

1 2月2日(火)

初めての編み物の日。F Yに連れて行ってもらう。手を痛くしないようがんばりましょう。

12月4日（木）

三人が湯河原へ昼過ぎ出かけました。家の中で一人になりました。どうしても思ひだしてしまいます。それ思わず涙があふれ出てきます。夜になって、今日夕方石屋さんが亡くなったと電話が入りました。気の毒なことです。又さみしくなっていました。

12月5日（金）

一人で表から庭の掃除、家の中の掃除、一人の食事を作るのは楽しい仕事でした。湯河原へ出かけて三人は、午後早く1時30分頃帰ってきましたので、Y整形外科へ治療に行き、三回目の指の注射をしてもらいました。今は、夜の11時です。おやすみなさい。

12月9日（火）

昨日も、一日中温かくよいお天気でした。やっぱりあなたのお姿が見えなくてさみしいわ。一人でお洗濯をして又布団の中に入りました。7日の日に、高橋さんとお電話でお話をしました。あなたのかわりに、孫の歌を詠んだのだそうです。色紙に書いていただきたいと思ひました。元気でいてほしかった。お布団の中にもよいのに。明日の朝は、小林、峰尾の姉と三人で温泉に行きます。

12月14日（日）

朝4時。早く目さめてしまいました。11日から13日にかけて、小林の姉たちと積翠寺温泉に行ってきましたので、昨晚は少々早く床に着きましたので、今朝は3時前にさめたのです。今、お洗濯中です。温泉に9回入ってきました。腰の痛みがとれると嬉しいのですが、中央線の沿線の景色は私にはなつかしいものでした。でも峰尾の姉のおしゃべりは、私にはチョットさみしく思われました。甲府の駅で少々の買い物をしました。帰ると高橋さんより葉書がきていました。誌代受取りやら、私への思ひやりでした。やっぱりお父さんの貴男は遠くへゆき過ぎます。私は一人で困ってしまいます。

12月19日（木）くもり雨

寒い一日でした。孫は驚く程の成長ぶりです。単語も随分おぼえ、私達の話すことをきいて、まねをします。あなたに見ていただき度いと思ひます。又、夕方に大島に噴火があり、テレビはそのニュースで大変です。

12月25日（木）くもり

さむくなりました。昨日、森下Sさんよりあなた的大好物のメロンを送って下さいました。早速お供え致しましたが、あんなに好きだったのに、実際にはお口に入らないなんて悲しい。テレビのシルバーシートを見ていました。早くこういふ事を知っていたら、もっともっと上手にお父さんのお世話が出来たのに、くやまれます。

12月31日（水）晴れくもり温かし

とうとう最後の日がきてしまった。明日から新年。私の心の中はあまり感激は無い。お父さんが居てくれたら。去年の今日は、どの様にしていたのか全然思ひだせない。

この記念すべき年よ、さようなら。だんだんお父さんと離れて行く。

毎朝お線香を二本つつ着けてあげているのが判りますか？早くおそばに行き度いから。

金ぴらごぼう、筑前たき、紅白なます、これだけのものを作りました。今、紅白歌合戦を見えています。どんな来年がくるのでしょうか。

今日、八王子の戸井田さんから贈り物を頂きました。本当にすまないこととと思って居ります。

ぼうぼうとただぼうぼうと君の居ない道は五里霧中

昭和62年1月20日（水）晴れ暖かし

一月もとうとうこんなにたってしまいました。二十日の晩はよく眠ることが出来ずに居りましたので、安定剤を飲みましたら、明け方とうとうとしまして夢の中に居りました。お父さんに自転車に乗せてもらっているのです。前にのっているのでしょうか？

あなたのお顔を見ることは出来ません。どうしてなのでしょう。お別れしてから初めての夢の出会いですのに。

帰る家が見つからないで、二人であっちこっちと自転車でさがしましたが、とうとう見つかりませんでした。六時頃目がさめてしまいました。また、お目にかかりたいのです。

今日、私は六十八歳の誕生日を迎えました。一人ではあまりにもさみしい。忘れないうちに夢のことを書いておきたかったのです。ノートを買いたくても、何となく買えなかったのです。このノートを二三日前に、眞幸にもらいました。

2月3日（火）節分、雪くもり時々晴れ

早いものでとうとう二月になってしまいました。一月三十日にNTの家に泊まりに行き、一日に（日）に帰ってきました。NYはとても大人らしく、落ちついて良い娘となりました。あなたに見てもらい度いものです。真人ももう直ぐ二才になります。男の子らしく体をよく動かし、とてもオイタで楽しいやら、たのもしいやら困るやら……。

子供というものは、すばらしいものです。

今日、古田さんから、お志を送って下さいました。パレンバンの時代がなつかしく、終戦直後に八王子の家にお見えになった日のことが思い出されます。随分と長い月日、いやいや年月がたったものです。お父さんのこと、驚いていらっしやいました。

沃野の二月号が送られてきました。私も歌を作り度いのですが、何と云うことでしょうか、一寸もうかんでまいりません。よほど才能が無いのですね。字が書けるようになり歌が作れる様になりましたら最高です。どうぞ力をかして下さい。お願いします。

編み物は楽しくて、これだけは有りがたいと思っています。もう少し自由がほしいと思います。

2月8日（日） 午前1時10分

なかなか寝付かれません。推理小説も読み上げてしまったし、沃野二月号もぱらぱらと見たし

、本当に困ったことです。お手紙をかきます。

四日の午前中から左の腰が痛くて、体がまがりません。前にこごむことも、トイレで紙を使うことも不自由。何をしても面白くなく、それより明日の築地の本願寺の法要に行かれなくなりそうと思って居りましたら、五日の日は、朝起きることも着る物も出来ず、大変な日になりました。朝の中におとなりのハリ医に行きましたが痛みはとれません。葉子にかわって行ってもらいました。本当に残念でなりませんでした。

今日はいくらか楽になり、よかったと思っています。ハリ医に当分通うようになるでしょう。家の者の迷惑になりたくないと思ってもどうにもなりません。娘達も心配して電話をかけてきたりしてくれます。

早くお父さんと一緒になり度く思っている、なかなか大変なことです。これだけの痛さでどうにもならなくなってしまうのですもの、おそばに行くには並大抵ではなさそうです。何の楽しみがあるのでしょうかね。

今、一時二十五分です、もうお休みなさい。

午前一時 なき夫につげむと手紙書き 今静かなる寝につかむとす

何も彼も 運命と思ひみとりたる夫がまなざし 今も我が目にうち

君送り 別れより早や一年の廻りきぬ あの炎暑の日は 遠くかなしき

2月26日(木)北風強く寒し

今年の冬は、私にとっては殊のほか、寒くてなりません。その上、腰は痛いし真っ赤な下血があります。騒ぐほどのことではないと思いますが一寸心配です。編み物の川奈先生のお宅に午前に行きました。スカートをはいてゆきましたら、厚いタイツをはいて居るのに何てお寒いのでしょうか。午後久しぶりで福島義姉より電話をもらい一寸長くお話をしました。つくづく年をとることがいやになりました。

眞幸が面白い本を買ってきたので、それをずっと読んで居ましたが、五冊とも終わってしまいさみしくなりました。今、十一時を少し過ぎました。

三月一日晴れていても寒い

お父さん。今日は腰の調子が大変良くなりました。でも午前ハリ、午後けん引にゆきました。

この頃いつも迷っています。あなたの居ないこの家は、私はさみしい。でも何処へ行ったっておなじことでしょうかね。八王子へいっそ行ってしまおうかしなどと、でもこの先私がどんな老後がくるのか？

それを謙がえらうっかり口に出すことも出来ないし、心の中で今こんなことばかり思っています。

今日、息子が別府へ出かけました。南禅寺の同窓会です。明日の夕方はもどります。

3月30日くもり晴れ

大部暖かくなってきました。季のうつり変わりというのは、お寒い日が来たり、今日は暖かいなどといふ日が来たりしながら、いつのまにかすこしずつ暖かくなるものです。ジャケットさえ

暑いのがうっとうしくなりました。でも夕方は北風がけっこう強いのです。

東京駅へ京都行きの切符を二枚に買い換えに行ってきました。一人で切符を買うことが出来るようになりました。その足で吉祥寺まで行きスカートの直しを頼み伊勢丹をぶらぶらしてきました。ほしいものばかりなのはどうしたことでしょう。この年になるのに……、パジャマとパンティーを二枚買ってきました。電車で家へ帰るのにも、あなたの待っていらっしやらないことを思うと、どこへも帰ることが出来ません。涙が出てしまいます。東京駅でいつかコーヒーと一緒に飲んだ店を見ました。一人で行って飲むのもさみしく思ひ、又九段下で電車を降りて千鳥が淵の桜見に行きたいと思ひました。一人といふことは何処へ行ってもさみしいことばかりです。

今、十一時二十分過ぎです。おやすみなさい。

4月11日(土) 晴れくもり

今日はお寒い一日でした。私は昨日(十日)に京都妙心寺へあなたの法要にNTと来ました。高いお佛だんの上で陽岳寺宗直和尚と読み上げたのをはつきり聞いてきました。

本当に遠い処に行ってしまったのですね。でもその後、NTと二人で京都見物をする事が出来、夜は大そう立派なプリンスホテルで宿り幸せに過ごしました。一夜明け、今日もその続きです。本当にお父さん、有り難うございました。

NTとの二人旅も初めてで嬉しくございました。

二日とも雨も降らず花盛りの京都を楽しむことが出来、その上京都御所も拝観でき、帰りの新幹線の中から折りよく富士山の姿がよく見えてずっと以前の事を思い出し、なつかしく禎子と話しました。家に着いたのは五時四十五分頃でした。

4月23日(木)

十九日～二十一日と、第四のクラス会で総勢十人で、伊勢神宮から紀伊勝浦へ行ってきました。三日間心配としていた雨も降らず暖かくむしろ暑ささえ感じるくらいでした。貴男の行きたいと云っていらっしやった海岸渡寺へも参詣することが出来ました。ご一緒ならどんなに嬉しかったことでしょう。でもこの段々ではとてもむずかしいと思ひ乍ら一歩一歩のぼりました。有賀さんにお願ひをして写真をとってもらいました。初めての紀州路は、それは美しく嬉しくございました。

二日目から眼のはずれにいつも蚊がとんでいるようで、気になりましたので、今日野口眼科へ行ってきました。先生に「網膜剥離」で殊によると手術をしなくてはならないと云われ、ああと思ひましたが、早く体が終わればおそばに行かれると思ひました。でも結果は老いの為に「網膜」にたるみが出来て、その影が蚊の様に、見えるといふことです。

つくづく老いはせまるつつあると思ひました。遊んで歩いたのでつかれが出たのでしょう。血圧は百六でした。

4月30日(木) 晴れ暖かくよい日和り

今日で五日間風邪の引きっぱなし。お風呂もずっと入りません。いえ入れません。本当にゆう

うつ。

NTいわく「お母さんどうしてこんなに弱くなったの」ですって。鈴木先生と野口眼科とにお薬をもらってくる。内孫も私のがうつったのかしら、この方のお薬ももらってくる。眼の方はまだ暗闇のなかに金色の稲妻が見える。今夜久しぶりでお風呂に入る。もう風邪とは縁切りとしたい。

5月5日――

八王子へ行ってきます。NY・NMと三人で五晩一緒にくらしてきます。何となく楽しくなってきました。二人ともとても良い子供です。夕食にハンバーグと南瓜の煮物を作りましたら、大喜びでした。買い物もNYと二人で行き、楽しうございました。久しぶりでくらす八王子の家は、この家とは異なり静かで、つくづくこの家で活していたらと思いました。

5月10日

朝食の支度も嬉しく今日でこの娘たちとの生活も終わりです。洗濯をすませるとNMがミルクコーヒー、自分製の蒸しパンで、お十時のお茶をしてくれました。何と幸せでしょう。

5月11日

雨が少なくお水が足りそうもないとニュースで申して居りました。困ったことにならねばよいと思ひます。朝七時頃若い人三人は蓼科高原へ出かけてゆきました。一人で掃除をしたり、井上さん等三人にお茶を出したり、お参りのお客さんの対応をしたり、なかなかいそがしいございます。久しぶりで夕方、指圧をしてもらいました。もうこれからは無理をしないでくらしましょう。夜の一人はくらしは、一寸だけさみしいと思ひます。

5月14日 朝

昨夜は、おなかの中がきれいになることが出来て、これは幸せです。いつもこんなだと嬉しいのに――。

それにしても、何もしないでいると直ぐに居眠りが出て、どうしようも無いほどみっともなくて困ります。今朝は久しぶりに雨が降って居ります。心の中もしっとりとする思ひです。

おじいちゃん。貴男の居ないことは、私はさみしい。私達の建てた家なのに、この家すらこんなに、私にとっては変わってしまったのです。

風邪の後遺症もようやくおさまった様です。体の調子を良く保ってゆくことはなかなかむずかしいことです。おじいちゃん、何故逝ってしまったの。

5月16日 四十七回目の結婚記念日

去年は、あなたは病院のベットの中で迎えましたね。今年は初めて私一人さみしく、くらししました。

その日のことを語る人もなく、心の中で思い出をたどりました。私は黒地に菊の花を染めた、お気に入りの着物を着ていました。夢の様に月日は過ぎてゆきます。この先まだまだ一人で、こ

の日を迎えなくてはならないなんて、いやです。

今毎日をどの様に自分に納得がいく様にして過ごしてゆく方法がほしいのです。ただ毎朝、目さめて、食事をして、何となく心にもなく一日が過ぎてゆくのです。私一人の為に考えましょう。

我が胸の内なるくさはなちたし 夫逝きし後の一人旅ゆえ

6月16日 晴れ涼しい

おぢいちゃん、今テレビを見ていました。隅田川をバスで川上より相生橋までの旅でした。

いつか二人で歩きました待乳山やら人形町、川のふちを見たり、又行ってみたいと思って居りました。江東区の水上バスで見物をしている処を見ました。又一緒に行きたいですね。この頃右の足と膝が痛みます。歩けるでしょうか。今夜十一時です。一人で居ります。皆寝てしまいました。私もやすみます。

7月18日 朝五時

毎日毎日、くる日もくる日も、思っ居ります。あなたの居ないこの日々のむなしさを。

お盆を迎えて灯をたきました。いそがしい時はまぎれますが、あなたは家に帰ってきて下さったのですか。待つ居りましたのに。

お盆にお檀家のSKさん、KKさんからお金を、MGさんから又FY・NYからお盆提灯をもらいました。提灯はきれいにくるくと廻りました。

8月7日 くもり むし暑い

沃野八月号、特別企画の主人の追悼号を五冊送ってきました。うれしいやら、やっぱり悲しい。ちょっぴり変な気持ちになりました。

皆さんは私の知らないあなたのことを沢山書いてくださいました。もっともっと、いろいろのことをお聞きしておけばよかったと思ひで、さみしくなりました。

生きているのが何の力も無い様な気持ちで、体の中から力がぬけてゆきそう。もう涙も出ない様になりました。どうぞ夢の中でも、お会い出来ないものでしょうか。

高橋さんへ早速下手な手紙を書き、一万円を現金書留で送るようにしました。

十二時も過ぎました。

8月30日 日

おぢいちゃん、昨日も暑かった。私はこの暑いのがとってもいやです。早く少しでも涼しくなってほしいわ。昨日は鈴木先生のご主人の告別式でした。やっぱりあなたと同じ暑い八月です。先生は一人になってしまわれました。いくら立派なお仕事をお持ちでも、どんなにおさみしいことでしょうか。こうして女ばかり残ってしまいます。私もまだまださみしいです。

この気持ちは私が生きている間は、どうにもならないでしょうね。

夫逝きし又八月は廻りきぬ ころあせれどしのびよる老い

夫の君を送りて先生一人となり給う 同じ八月同じ暑き日

9月1日

今朝四時、目がさめました。トイレに行き、又お布団の中に入りますと、うとうととして眠ってしまったのかしら。どこの病院なのでしょう。何で四中（父の努めていた中学校）の話になったのでしょうか？新しく出来た四中をおじいちゃんに見せてあげましょといふ事になりました。

誰かが自動車にのせてくれました。

「お父さん、よかったわね」

手を取り身体をささえて、四中の家庭科の実習のようでした。それを見て帰ろうとして、二人で身体を寄せ合い乍ら歩きました。出る時に私の不注意で、上に着る物を充分に持ってこなかったので、寒くはないかしらと心配をしながら歩きました。でもお父さんはよく歩ってくれました。

誰か知らないが、たしか知っている人の様な気がしました。声をかけて下さるんです。嬉しうございました。どうも車をさがしたのに、どこに居るのか判りません。愛子さんと野矢さんと、も一人誰かです。

「八重子さんじゃない」と、声をかけてくれました。それまでで、目がさめてしまいました。

「嬉しかったわ」、おじいちゃんに会うことが出来て。

「又、お会いしましょうね」、あのまま醒めなければよかったのに。

又、今日も遠のいた台風上がりの暑さの日が続きます。とうとう暑い暑い、八月ともお別れです。

9月23日 朝

おじいちゃん、十九日（土）にUH先生の奥様が、お墓参りをして下さいました。八十六歳の奥様にお参りをして頂くなんて嬉しいのですが、さみしく思います。おみ足も元気で本当にすばらしいことです。内孫もよく見て頂きました。

重いブドーを沢山頂きましたが、あなたには召し上がって頂けなくて本当に残念です。ご親戚のお墓参りも一緒にさせて頂きました。三好町の円通寺さんです。

駅までの道を歩き乍ら、お話を致しました。

「時々はこうして、お話をしなくては」と、おっしゃって下さいました。東亜でコーヒーを御馳走になってしまいました。

昨日、可愛らしい箸袋やら紙人形を送って下さいました。

あなたのおかげで、この様なおつき合いが出来ましたこと嬉しうございました。（この箸袋他は、多田さんの作られた品だそうです）

九月十二日にも東京歌会にも初めて行くことが出来ました。歌会といふのも初めての経験です。皆さん次々と指名されて、熱心に意見をのべていらっしやいました。

今日は入りの日ように次いで大勢のお参りがありました。その中に坂入さま、Uよし子様もお参りをして下さいました。あなたのお墓の前は、お線香とお花でいっぱいになりました。嬉しうございました。

9月26日 雨晴れ

時々強い雨と風が吹き付けます。部屋で机を出して、新聞をゆっくり読みました。このような形で落ち着いて何かをしようかしら。どうにかして自分のくらしを持ち度いのです。

嫁が内孫を寝かせる為に布団をしいて一緒に横になりました。寝ないで立ち上がってしまいましたので、「二かいで寝かせなさい」と申しますと、「どうも失礼致しました」と、二階に行っていました。そのうち又内孫をだいて「ここがいいんですって」と云います。「二階で寝るようにしつけてね」と、云いました。私の出発です。

10月18日 晴れ気温高し

おじいちゃん、今日、秋の台風が、日本中を吹き荒らして北海道に去ってゆき、その余波で随分と暑うございます。

小林の父の五十回忌、母の二十三回忌でした。二十四、五名ぐらいの人の集ひです。大そうにぎやかでございました。父のことを会ったこともない人々（孫・ひこ）が多く、遠い昔のことになりました。その頃のことなど語り合い、涙を流してしまいました。皆といろいろのことを話すということは、本当に楽しいことです。極楽寺さんの和尚様も九十歳の上と聞き、その唱えるお経に又涙を流してしまいました。帰らぬ昔がなつかしく娘時代のもどってきたさっかくにとられました。

NYの家のザクロが、今年は大豊作です。甘い実が、それは沢山に成り、小林の家に帰りましてからのお茶席で、皆さんに喜ばれました。皆それぞれに持って帰られました。

私が、家に帰りましたのは夕方六時でした。KYちゃんの車で、家まで送って頂きました。これで父の忌も最後となるのでしょうか。良平さんの家がお家賃一万八千円で空いているのだそうです。そこで一人で住んでみたいと思ひます。そんな事を話したら、禎子に怒られてしまいました。思ふ様にはならないものですね。

11月22日 書く

九月十二日、十月十日、沃野の東京歌会に行きました。UH夫人。三輪さんからの誘いのお電話でした。皆さんとても喜んで下さいました。

大へん恥ずかしいですが、とても面白くて嬉しくなりました。十一月の会は十四日ですが、三輪さんか歌を出すとよいと又お電話です。思ひ切って恥をしのんで書いて葉書を送りました。当日は胸がどきどき致し、落ち着きません。

花見せぬ金木犀と語り居り 翌朝に咲く花のマジック

あなたがいらっしゃたらどんなにねげくでしょう。ご免なさい。これからは自分の道と思ひ、出来るかぎり、つくってゆきたいと思ひます。

12月18日

大きな地震です。十七日の編み物の先生のお宅で十一時八分、まあ本当におどろきました。大

へんに揺れました。そしてもう治まるかしらと思っているのになかなか鎮まりません。どんなことになるのかしらと思って居りました。すぐラジオをかけて下さいましたので、大へんなことです。震度四といふことですが実際には、五ぐらいではないでしょうか。小さいときに体験した大震災の時以来です。でも何事も無くてよろしくございました。

その間、頭の中がずっとゆれていて目まひの様な状態でした。千葉県の一部が強かったようです。

歌ってなかなか出来ません。朝、外の掃除の時は、考えるよい時間なのです。ポケットに手帳を入れておくことにしました。直ぐに書き付けないと忘れてしまいます。小林周子さんもおっしゃっていらっしゃいましたが、十二日の東京歌会で、山本かね子さんが、主人は「私の家内は、センスがよいのだ」と、云っていたとか、困ってしまいます。何故どうしてそんな事を云ったのか、恥ずかしい。

歌のセンスなき妻の悲あいはきわまれり 亡夫（つま）と会ふ日の語り草となさん
煩落ちず目見澄みてゐる宗直よ 語らひ酌む日を疑はず待つ
白沢を解って呉れよと衝き上ぐる思を耐へて咫尺（しせき）に対す
妻やさしく息夫婦やさしく脇へ侍る ふとよぎる妬み心すまなし
由緒ある寺の住職息に継がせ 満ち足らへるを病が冒す
妻持たぬ頃よりぞいさかひし無く六十年 この仲合（なから）を絶たれてなるか
直る直ると呟き帰る深川の巷は 寒き春初め風

喪

母が亡くなったのは、平成12年12月14日です。今思うと、12日だったら、トリプル12だなんて、思ったりするが、31日でも、1月1日でも、数字自身には、はじめから意味はない。意味が付くのは、いつも後からです。赤穂浪士の討ち入りの日と同じだけれど、旧暦と新暦では違うのだろう。

私は、檀家に不幸があると、陽岳寺仏事心得なるものを、渡すことにしています。世代間の仏事の伝承を少しでも手助けするためでもあります。実際は、寺にとってもそのことが経済基盤を成り立たせることでもあるからです。実際は、寺が無くなってしまえば、困るのはそこを利用する契約者（檀家）だからです。その意味では、各自が最小限の負担によって寺を維持することが、より最良の方法なのですが、誰かが怠れば、誰かに負担が掛かっていることでもあるのですが、怠った人は、眼中にないことでもあります。

前述の陽岳寺仏事心得の『喪』を、抜粋してみました。

《『喪』とは、亡くなった方を想い、世の中のつきあい（特に祝い事）を避けて、身を慎むことです。

『喪』には、二つの意味があります。自分の心構えとしての『追悼』と、外へ『忌を及ぼさない』という他人への配慮です。

では、『喪』の期間はいつまでなのでしょう。

理論的には一生の期間です。これは『追悼』という家の中のこととしてはよいのですが、家の外に対しては実際的ではありません。実生活ではきまりがないと困ります。しかし、実のところ喪中の基準・定説はありません。もっぱら、その土地の風習、その家の習慣にならうばかりです。時代によって変化もしました。

対外的な『喪中の期間』について考えてみます。現代では四十九日、あるいは納骨までを『厳守すべき喪の期間』とし、後ははじめてのお盆過ぎ迄か、初めてのお正月過ぎ迄のどちらか長い方、あるいは、一周忌までを『穏やかな喪の期間』と考え、実生活に対処されているのが大方のようです。これが一般的ではないでしょうか。ですから、祝い事は内々ですませ、翌年の年賀は欠礼（年末早めに欠礼の通知を出す）するのが通例です。

祝い事は内々ですませ、ということは内々ならば祝い事をしていても良いということです。年賀は欠礼、ということは、他に対してであって、家内の正月の祝い事まで止めることはありません。このように、内なる喪中と外なる喪中とを分ける必要もあります。

年賀欠礼の通知を出したのに賀状が来た、と怒る人がいますが、これは怒る方が間違いです。喪中の欠礼通知とは、自らの忌を他へ及ぼさないようにと、自分の行動を律することであって他

人の行動を制限するものではありません。

あるいは、他人の祝い事へ顔を出すことで祝い事に気まずい雰囲気をつくるような事態を避けようという気配りなのです。実際の話、昨日お葬式を出した人が婚礼に見えたとき、婚礼の主宰者はどう挨拶をしたらいいのか困惑します。

では、その結婚式や披露宴のように前々から予定が決まっているような祝い事はどうするのかです。

まず自分の家の場合ですが、喪の期間中のいつに当たるかにもよりますが、言い訳をしながら実行してしまう『生活の智慧』とでも云うべき対処方もあります。しかし、これは一方法であって、全てに当てはまる普遍性は持ち得ません。その時に遭遇したら、当事者が関係者と熟考を重ね、一番良い対処方を模索する以外に答えはありません。

他家の場合は、前もって主宰者へ欠席すべきかを聞くのが丁寧でしょう。》

自分で、上記のように綴ったくせに、私は、今年、結婚式に呼ばれて、2回祝辞を述べ、4回結婚式で乾杯をいたしました。「おめでとうございます」の言葉に、母や父は笑っていたことでしょうし、祝辞の中で、母のことを話して涙を誘ったり、8月には、町会子供御輿の先導を引き受けたり、考えてみれば、まったく喪にひたることなく、過ごしてきたと言えるのです。ですが、それも私にとっては、喪なのでした。お祝いの言葉に、乾杯の発声に、母のことを忘れていたということではなく、実は反対に、いつも母の姿や顔、思い出が脳裏に出入りして、ひょっとして、逆に、脳裏から母を追い出そうとしているかのように、「独りぼっちになってしまった」という意識が強く覆うのでした。

父を亡くしたときの時とは、大きく違っていた。父の時は、それは私も哀しみを持ったが、長く連れ添った母の哀しみを軽くすることで、癒すことで、私の喪失体験は希薄になっていたと思う。だが、その母をも亡くす意味は、二人ともいなくなってしまった実感が、ほっそり出されたような、そこに父の思いも新に加わって、やりきれない思いに、未だに打ちひしがれて、早く普通に戻らなければと思うのですが、その時、新しい普通を作らなければと思うものの、出来ない私の普通であったのです。

子供は、「お父さん少し飲み過ぎじゃないの！」と心配し、声を掛けてくれるのですが、止まらないことに「悪い、一年間、時間をくれ！」と、それは、やがて依存症のように、外に出なければいけないように、彷徨っていることに気が付きました。親が子を長い間見守る力は、親の存在が無くなった時、大きくその重みを感じたのでした。そして、一周忌まではとっていた一年間は、喪に服していなければならぬ一年だと、気が付いたのです。

喪の大切さに気が付いたのは、その時でした。喪に服するとは、衣服を着るように自ら着なければ、喪家の狗のように、やせ衰えて見るも無惨に身を滅ぼすもとなのだと、喪って怖いものだなと、体験して始めて知ることでした。葬式の葬が、遺体をほうむり去ることなら、喪はなくすことです。人が真剣に生きていれば生きているほど、人を亡くすことによって、多くのものを、また、なくすのです。

法事は、自分の所も含めて、数多く経験しているものの、母の一周忌は格別なものがあります。それは何か母と会えるような、七夕の出会いのような気持ちになるのは不思議です。こんな気持ちを、私は知らなかったし、これからも幾度となく行う法事に対して、新しい視点をくれた、母や父を嬉しく思う。

お寺に親しく接するそれぞれの施主が、同じ思いを懐いていたことを、同じ土俵の上にのれたみたいな気がします。この5月に、私の先輩のご婦人である山本恵子さんの一周忌があった。恵子さんの遺した沢山の絵手紙を拝見したときも、この人の心に触れて、自分が目を開かされた。どうして亡くなった人からこんなにも学ぶのか。私が執り行った葬儀でも、亡くなった者を理解しようとするほど、その生き様が私を生かしてくれるように思える。私が生かされれば、亡くなった多くの人たちもまた生かされると思います。

もうじき、一周年の喪が明ける。亡くしたものは、もう一生帰って来ないことからすれば、これからは喪はずれないことになる。逆に喪を大事することが、縁起をかつぐことになるです。

離魂（りこん）（平成19年8月25日）

これから記す物語は、中国の古いお話です。五祖法演(ごそほうえん)禅師という方が、この話を持ち出して、「張家にいる倩女(せんじょ)と、王宙(おうちゆう)と共に過ごす倩女、さてどちらが本物の倩女だろうか？」という問題を投げかけています。

《昔、中国の清河(せいが)というところに、張(ちよう)という姓の一家が暮らしていました。そのあるじ鑑(かん)には、娘が二人いましたが、その末の娘は、倩(せん)という名前でした。とても気だてがよく、美しい娘でしたので、父は上の娘ともども、いたわり、こよなく愛したのです。

父の遠い親戚に、王宙という若者がいて、倩も幼かった頃より慕っておりましたので、大人になったら倩を王宙に嫁がせることが、張家と王家のあいだで自然に決まっていたのです。もちろん、若者も娘も、お互いに望んでいたことでした。

ところが、倩が成人すると、彼女の美しさや、教養が評判になってきました。すると縁談の申し込みもふえるようになりました。やがて娘の父は、王宙との縁談を惜しむようになったそうです。王宙よりも、もっともっと政府のえらい人で、大事な役目に就いている男に嫁がせたいと思ったのです。

父親の心の変化に、娘が気づくと、とても気が重くなりました。王宙に、父親の変化と、王宙への思いがつのることを告げたのです。告げられた王宙は悩み苦しみ、思い切って二人して、都に行って住もうと誘い、二人は駆け落ちすることを決めたのです。

決行の日時と場所を決めました。ある日の夜のことで、倩は一人村里から離れて山間に隠れました。そこに、同じように王宙も自宅から忍び抜け出て、山間にいたると、倩の名を呼びました。倩も追っ手に見つかりはしなかと潜んでいましたが、王宙の声に、「ここです」と、ささやきました。王宙も、「倩か？」と声をかけたのです。

落ち合った二人は、そこからは舟で身を隠しながらも、ようやく蜀(しよく)の国に着いたのでした。二人は、五年という歳月、幸せに過ごしたと云うことでした。

五年の歳月は、穏やかな暮らしの二人でしたが、自分たち二人の幸せを思うと、故郷の父や母を思い出します。会いたい想いは二人をおおい、故郷を訪ねることを決めました。

出て行った通りに同じ道を、二人は河を舟で故郷、清河に着きました。舟に妻である倩を残して、王宙は、独り倩の家、張家を訪ね、父・張鑑に今までのことをつぶさに話し、今までのことを謝り、許しを請うたのです。

倩の父は、「私の娘は、五年前のあの日より、ずっと家の奥にある娘の寝室に、病んで眠っている。これは何ということだ」と、驚いたのです。そこで、王宙は、舟に倩を待たせているこ

とを告げると、すぐさま、父は人を使いに出して確かめたのでした。やがて使い人が帰ってくると、張鑑(ちようかん)に、娘・倩が舟に待っていることを告げたのでした。

すると驚いたことに、寢室に病で眠り続けていた倩が、ベッドから突然起き上がって喜んだということでした。その時、忽然と舟の中の倩が、姿を消したことは言うまでもないことです。
》

今年の夏は、空梅雨で暑いと聞かされたのが五月・六月、しかしよくもまあ～雨が降った七月でした。これでは冷夏と思っていたところ、今度は暑いこと暑いこと、いつまで続くのだろうか。

そんな暑い日の八月半ばを過ぎて、訃報が伝わってまいりました。亡くなった彼は、高校時代の友人でもあり、一緒に電車で通学した六名の仲間でもありました。奥さんから告げられた、「ずいぶんと姿形が変わってしまいました、向井さんに、会わせかけた」との言葉に、彼と会ったのが、訃報を貰って、二日後でした。

自宅に眠っている彼の姿は、とても五十八歳とは思えない、変わり果てた姿でした。痩せこけ、フサフサだった髪の毛はまばらに白髪になり、はるかに年齢を加えて到った彼でした。読経の後、奥さんに「これが彼の本当の姿だったのでしょうか」と、私の見たこともない彼となってしまうことに、枕元で奥さんが話します。

昨年九月に父親の四十九日忌をし、夫婦二人で検診をしたところ、癌が見つかり、リンパに転移していて、すでに手遅れと診断されたこと。築地の癌研に六月まで通院していたが、六月以降は処置を施すことを断念して自宅療養していたこと。築地まで通っていたので、向井さんがすぐ近くなので、何度も、寄っていかないかと話したのですが、彼はガンとして首を縦に振らなかったこと。二人で最後の温泉旅行に彼が運転して伊豆に行ったこと。父の五年という看護に疲れ果てていたこと。

話を聞いているとき、お母さんが亡くなった原因は自殺だったこと思い出し話すと、「朝五時半に散歩に行くと言って老いた父に声をかけたのが、最後の母の言葉で、自宅物置で首を吊っていた母を発見し、その母を抱きかかえて綱から降ろしたのも彼だったのです」と話す奥さんの言葉に、彼を見つめていた。「あれからです。主人が変わってしまったのは。それでも、主人は家族に心配をかけられないと、本当に、亡くなる直前まで、独りでいろんな整理をしていました。主人がいなくなると、私は、何もわからないことばかりで……。」

気がつくとき、すでに大人となった息子と娘が、二人の会話を聞いていた。私は、高校時代電車通学と一緒にいた友人たちは、6名いたのですが、これで3人が亡くなってしまったことで、共有していたはずの思い出が、私一人のモノとなってしまったことを、何も言わない彼を見て思っていた。

お通夜に弔問するからと、彼の家族に挨拶し、家を後にした私は、私の故郷でもある変わってしまったこの町を後にして、電車に乗った。電車から移り変わる窓の外の流れに、ふと思い出したのは、倩女と王宙の物語に、五祖法演が突きつけてくる、魂の無くなった彼の肉体と、離れ

ていった彼の魂のことでした。

幼かった頃、あの町で、母の親戚の葬儀に連れられて行ったことです。火葬場で「おじちゃんはずいいな、真っ赤になって、燃えている！」と、驚きと恐れに、母の手を強く握りしめていたことを、成人して母によく言われたことを思いだしていました。「人はああして真っ赤になって、どこか遠くに逝くのだな」と。幼心にたたき込んだ記憶は、倩女離魂(せんじよりこん)の話しに、人は死して何かしらの、言葉ではいえないものとなって旅だってゆく光景に重なります。

ものを言わぬ彼を前にして、「魂魄(こんぱく)は肉身を離れることを得ず。肉身は魂魄を離れることを得ず。故に云う、肉身と魂魄と一如不二。何が故に是の如くなる。正法元来不思議無し。倩女と離魂と、等閑(とうかん)に他に随い去る。如今一如に帰す、忘却す来時の路(みち)」が、立ちふさがります。真実を見るためには、目前の事実になりきることだと、古人の言葉が耀きます。

さらに、「情(じょう)を越え見(けん)を離る、縛(ばく)を去り粘(ねん)を解く」と、この公案に関して古人の言葉は厳しく、現実の語る内容に、迫りくる彼の姿が浮かびます。

この物語を突きつける五祖法演禅師の境界は、「鉄製の木が花を咲かせた」と、五祖を褒め称えるのか、その働きは、「真っ黒な崑崙山が大空を走った」と詩(うた)っています。元来、倩女離魂は有り得ない話しです。そのあり得ない話しに、あえて花を咲かせようとする、そんな人間をあざ笑う五祖法演禅師でもあります。没蹤跡(もつしょうせき)(足跡を残さない)となってしまった彼を崑

崙山に見立て、真っ黒な大きな山が、漆黒な夜空を走っている姿は、離魂となっても、肉身と魂魄一如となっても、うかがい知れないものです。昔を語れあえる現身の一人が居なくなった。

電車の椅子に腰掛けながらも、「忘却す来時の路」が、三十年来の映像となって頭の中によぎり、見知らぬ彼となった佇まいに、どちらが本物の彼かと、窓の外をうつろに眺めていたのです。ふと気がつくと、来た道に戻って帰ることに、「忘却す来時の路」が、これでは、没蹤跡とは正反対の、足跡だけが頼りのように思え、現実が心という世界の中に取り込まれて、更にふくらみ続けます。これからも寂しさや懐かしさが訪れる来た路を歩むだろう。

海辺橋

陽岳寺の本堂は、昭和5年頃に建築されたものですが、その頃には、水洗設備が整備されてい
ました。深川に下水道が整備されたのは、そのもっと以前のよう気がいたします。

海辺橋。この深川の小さな地域にとって、ここに暮らす庶民のなくてはならない橋でした。大
川を間に、深川では井戸水は塩分がきつくて洗濯や、打ち水にしか使うことが出来なかつたの
です。

それ以前は、この海辺橋に水船がつき、この地域に天秤棒に樽を担いだ水売りが毎日毎日売り
歩いたといわれております。それだけではなく、この橋を基点にして、芭蕉は奥の細道の旅に出
たのです。

考えてみれば、旅立ちと帰参の橋としての意味があるのが、この水辺橋です

ふるさと（平成18年3月4日）

もう寝ようとして、家族が夜王という番組を見ていたのを、私もつられて、それを見ていた。窓が大きく開いた広い豪華な部屋で、遼介というホストに抱かれながらレミという名のデザイナーが今、死のうとするとき、遼介の優しく放つことば、「元気になったら、生まれ、育った故郷に、一緒に行こう。」その刹那、彼女は目を閉じたのだが、私は、「やはり故郷だよな〜」と。

平成17年11月ごろだったか、お寺に電話がなった。商社に勤めるというその男性は、「アメリカから宅急便を送ったが返ってきてしまった、住所を教えてください」の、電話だった。なんと50年ぐらい前の旧住所で送ったらしく、返送されたらしい。そのとき、今の住所を教えて電話を切った。そして、年内だったが、だいぶ経って、宅急便が届いた。

荷物は遺骨だった。そして翌18年2月の中ごろを過ぎていたと思うが、その遺骨の主の親戚と名乗る二人連れが訪ねてきた。始めて来たような、その人たちは、アメリカの婦人のもとに何度か訪問していたが、「その遺骨の主は、私は日本人だ。私が死んだら日本のお墓に葬って欲しいと言っていたのです」と、聞いた。

その遺骨の主の親戚と名乗る人は、「となりの寺の檀家であり、法事とか墓参で幾度も来ている」と、親しげに言った。それでいて、初めての訪問というのも、狐に摘まれたような、世の中の廻る流れのなかに、この寺だけが、ぽかっと穴が開いていたような、なんだか解らないというままだにことが進んでゆくような、「まっいいか！」。

この婦人の帰還は、多分、50年、もしかすると、60年か70年ぶりなのだろうか、80歳を過ぎて亡くなつたらしい。しばらく本堂に安置していたが、宅急便の包装のまま、納骨をした。送られてきたことが、家族や本人の意志として、名前も不明のまま、亡くなった年齢も年月も不明のまま、もしかすると何か知らせがあるかも知れないが、こちらも知らないままが優しさかと、ただ受け入れた。

現実の届けられた遺骨は、何も語りはしないし、それを待っている遺骨たちも、感情は持たない。意味をもたせるのは、受け入れたのが人間だからだが、届けられた遺骨は、日本を、東京を、深川を故郷として、それを象徴とする墓地として、両親や家族が眠るふるさととして、空を飛び、何千キロを一日でたどり着いたという意味を持つ。きっと行ったときは、風景も違うし、耳に聞こえることばも違う、習慣も何もかも違った世界であり、日本から遙かに遠い国だったのだろうと思う。思えば、50年以上だ、子ども達も成長し、夫は亡くなって、老いの身となって、小荷物となって還ってくる、50年以上前に、誰が想像できたであろうか？

それほどに、遠く旅をした者にとってたどり着いた故郷は、懐かしく、記憶のなかに、みずみずしく消えないものなのだろう。ますます色濃く自身の心によみがえる懐かしさや親しさなのだろうと思う反面、アメリカに人生の大半を置いたモノとして、地域と他者によって培ってじぶん自身をかもち出していた関係とは何だったのだろうと考えてしまう。

そう言えば、釈迦も、晩年、故郷に近づこうと、旅の途中で倒れた。生まれ育った故郷を仰いで亡くなったが、2,500年の時を隔てて、今でも、インドやネパールに、アジア共通な、特別な故郷感があるのだろうかとも思う。

私は、人が亡くなってする北枕とは、人生の旅をした者として、最後の最後に、故郷を望む姿として見えて仕方がない。そう考えるだけで、枕経をする私の読経も、亡くなった者への手助けとして、故郷に旅立とうとする意思に添えるようにと、経を読む気持ちに、力を加えられるのです。

それにしても、何故、故郷は懐かしく、記憶に消えないものだろうか？

血気あふれるキリストは、ゴルゴダの丘に倒れたが、故郷をどう思っていたのだろうか？マホメッドもどう思っていたのだろうか？これは、一人の人間としてです。もっとも、思惟が若ければ、人と人との関係の拡大に注ぐ意志は強く、故郷を思うことは少ないかも知れない。

これは、人は何処から来て、何処に往くのかという問いを含んでいるような気がします。

もっとも、旅路の途中で神や仏に出会い、往くところが換わったと思っていることもあるのですが。

故郷は、天国でもなかったし、まして地獄でもない。コウノトリは居たかも知れないが、死に神はいなかった。

考えてみれば、人間が産まれた育った場所は、トンボや魚たち、動物達にとっても特別な場所でもあるのだろう。産まれた場所を離れずにずっと住み続ける生物は、突然の棲家変えに、生きて行くことは苦勞を強いられると思います。

回遊魚といわれるモノたちにとっても、いつしか巡ることが終われば、それは、次の世代の旅立ちという廻りに代わることであろうが、もしかして、それが現実を生きる者にとっての信仰なのかかも知れないと思ったりもするのです。しかし何故、回帰するのかの疑問は残ります。

日本人が故郷や、幼かった思い出や、懐かしい頃、楽しく充実していた頃を思い描くとき、それは、じぶん自身にとって、何よりもそのとき生きていた関係を、意識に大切なモノとして描いているのではないかと思うのです。

更に、家族が、生き活きとして活発だった頃、それは、関係が緊張してお互いの心を発展させ支え合う関係として息づいていたのだと思います。そして、家族の中心にいた自己の働きが、家族の変化と分離を通して、縮小して行くような、それは、中心が希薄になってゆくような感覚かも知れません。そこに、人にとっての故郷が誕生する。この故郷は、具体的な場所やモノ・人を指すのでは在りません。まして、50年も時間が経っているとすれば、具体的な場所やモノ・人は、記憶のなかにしかないからです。そうだとするなら、真の失った故郷に近づくには、どうしたらよいのか。

故郷を、他者を通して成立する自己の原点として考えてみたとき、それは、過程であることに気がつきます。すると、故郷とは、帰れない旅路に……。老いてタイムカプセルのスイッチに手を伸ばしたとき、その失った故郷が発言する。

釈迦の故郷を望む姿を前にして、すでに言葉が息づいています。言うは釈迦ではなく他者の私ですが。人の心とは、関係の中で生きる過程そのものです。レミも、婦人も、釈迦も、故郷を望む

過程に、旅立って逝くようです。

千の風（平成18年9月16日）

千の風（平成18年9月16日）

A THOUSAND WINDS Author Unknown

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.
I am a thousand winds that blow,
I am the diamond glints on snow.
I am the sunlight on ripened grain;
I am the gentle autumn's rain.
When you awake in the morning hush, I am the swift uplifting rush
Of quiet birds in circled flight.
I am the soft star that shines at night.
Do not stand at my grave and cry, I am not there, I do not die.

『千の風になって』

訳 和尚

どうぞ、私のお墓の前に立って、泣かないでください。

私は、そこにはいません。私は、眠ってもいません。

私は、あなたの歩みのなかに、1000の風となって、吹いています。

私は、こごえる木々の芽に、温もりをはこびます。

春、木々や草が一切となって花の蕾を開くとき、それは、私の喜びです。

夏、黄金色に実らせた糧のうえに、私は、耀く陽光となって、降りそそいでいます。

秋、シトシトと雨が降りそそいでいたら、それは私のあなたへの感謝です

冬、ダイヤモンドのような輝きとなって、私は、大地を覆う雪の上にあります。

あなたが眼をつぶって眠りのなかにいるとき、私は、夜空にきらめく星々の瞬きとなって、あなたを見つめています。

あなたが、朝の静けさのなかで目を醒ましたとき、私は、すばやく駆け上がる風となって、回りながら鳥たち羽を休ませるでしょう。

どうぞ、お墓の前に立って、悲しまないで下さい。

私は、そこにいません。

私は、あなたが気がつけば、すぐ側に、千の風となって、生きています……。

千の風、それは、作者がいません。アン・ランダースが大好きな詩として新聞に掲載したことで、瞬く間に世界中に広がりました。千の風は、一人一人、千の風となって吹いています。日本では、朝日新聞「天声人語」がきっかけで、大きな反響を呼びました。多くのメモリアルで、

この詩が朗読されています。

禅宗が語る現実の有り様は、今でも、地水火風の土と水と炎と風の中に、我々自身が生まれ、生かされ、土と水と炎と風の中に去って行くことです。

この地水火風の中に生き、最も自分らしく生きて表現していくことは、自分らしく死ぬことにかかわってきます。自分らしく生きる対象は、家族であったり、仕事であったり、趣味であったり、知識であったり、地域であったり、ボランティアであったりです。じぶん自身の年齢と他者や社会との関わりの中で変化するものの、その動機は、いかに自分らしく生きることであり、それは、自分らしく死ぬが含まれているでしょう。人間の生が有限に限られていることに気づけば、その目的は無限な道であり、自己主張は、いつも途中にあることをまぬがれないものの、じぶん自身の死は、他者や社会に評価をゆだねることで果たされます。

だからこそ、葬送という儀礼が必要なのだと思います。今は葬儀ということを中心に死者の儀礼が執行されますが、私が考える内容は、あくまで、葬送の儀式です。何故ならば、亡くなったという事実（葬儀）は一瞬のことで、時間は刻々と進んでゆくからです。いつまでも亡くなったという事実のままに止まることはできません。送ることで、残された人たちも、その事実から一歩一歩踏み出さなければならぬからです。問題は、送る先なのです。

かつては、その送る先が明確でありました。死者の世界というべきもので、生者の領域とはハッキリと区別されていたのでしょう。死出の旅路をいそいでいるので、一杯飯を供えたり、死に装束もそうでしょう。棺に置く守り刀は、魂のいない亡骸に悪霊（火車とも）が侵入するのを防ぐためともいわれています。鐘や銅鑼などを鳴らすのもこのためです。団子を供えるのも四十九日の長旅に無事に死者の領域に到着するようにそなえるためです。また、私が葬家の方々と接して、今では、誰も三途の川を渡るという発想も持っている人はいません。今は、その区別が曖昧に、境界がなくなっていることを感じます。それは、今日までの古来のしきたりによる死の文化の衰退といえるものです。だからこそ、葬儀だけが中心になり、送る儀式は、火葬場への道のりだけになってしまった気がいたします。

私の葬送の儀式にのぞんだ方々は、告別式の後半や、安骨・初七日の法要で、下記の言葉を語っていることを聞いているはずです。

《 我々が生きる世界の延長として死後の世界が存在するとしたならば、旅立ちと言えばよいのか、帰ると言えばよいのか。旅立っていったモノの行こうとする世界。

それは、時間で言えば、今だ来ない時間ともなります。我々の過去や現在は、未来の一部としてであると捉えると、独立した未来という時間の中に、人として完成された存在の尊厳が輝きます。

存在から言えば、私たちが覆う大きな命の連鎖の中に旅立って行きます。それは、貴方の生き生きと生きていたことが、家族が活着ていることの証明になり、大きな大きな私たちが覆う命という渦の中で、それぞれの人の、浄土更には天国という、命と時の世界の中で活着ていることになるからです。

その場所では、あなたは、私たちと、同時に生きるとするなら、気ままに季節の飾られた花々に成り、風になり、その風に舞う花びらになり、雲になり、空にな、時間になることができるでしょう。

いつも思うのですが、人の体がなくなると言う意味を考えたとき、火葬場にて炎の中をくぐり抜けていくことは、実人生をも炎とたとえることで、さらに深い意味を持つと考えられます。その時、人は平然と、勇気を持って炎の中をくぐり抜けていかなければなりません。後戻りできない人生を象徴することなのです。いきいきと生きた実人生での年月そのものを炎として、歩んだ現実の世界で遭遇した苦悩、怒り、まよいを炎として、実人生は、実り有る人生に終止符を打ち、生まれ変わらなければなりません。

旅立ちの扉は貴方の肉体が火葬場にて炎の中をくぐり抜けていくことから始まります。そして、形あるものは、最後の別れとして、炎のなかをくぐり抜けます》と。

私たちは、私たち自身の誕生と死を確認するすべを持たないことの自覚がめばえたときから、始まりも終わりもない世界を持つともいえます。確実な誕生や死は、いつも他者にゆだねられ、この身は、自分の生のみを最後まで生きつづけるという自覚こそ大切なことだと思います。

それでも俯瞰して眺めると、「人の一生は、みずから朽ち、消滅して、形なき限りなきものとなることの旅路です。形なき限りなきものとは、永遠の一なるもののあらゆる変容のしるしです」。

1000の風の英文を手に入れて、つたない訳詩の試みをしてみました。死体を遺体ということで、霊魂が分離します。お墓は、亡骸が納められる場所です。そのお墓に沢山のお骨が納められているとすれば、この場所も、旅立った逝ったものの、道の交差点かも知れません。私なら、「その墓の前に立って、泣くなら、どうぞ悲しみが止むまで、そこに止まってください、ここは悲しみによって貴方を癒す場所です」と告げるでしょう。自分にとって悲しみの場所を持つことは、逝ってしまったものにとっては、嬉しくもあり、とても辛いものです。そんなとき、千の風が身体を吹き抜け、思わず「有り難う」という気持ちで、顔を空に上げさせたとき、この詩の持つ力が私たちの身体にみなぎることを念じます。私たちは、家族の中であなたが創られ、貴方が創った家族の中に生き生きと暮らしていた思い出を忘れることはありません。

朝日新聞 [天声人語] より転載

だれがつくったかわからない一編の短い詩が欧米や日本で静かに広がっている。

愛する人を亡くした人が読んで涙し、また慰めを得る。そんな詩である。英国では95年、BBCが放送して大きな反響を呼んだ。アイルランド共和軍（IRA）のテロで亡くなった24歳の青年が「ぼくが死んだときに開封してください」と両親に託していた封筒に、その詩が残されていた。

米国では去年の9月11日、前年の同時多発テロで亡くなった父親をしのんで11歳の少女が朗読した。米紙によるとすでに77年、映画監督ハワード・ホークスの葬儀で俳優のジョン・ウェインが朗読したという。87年、女優マリリン・モンローの25回忌にも朗読されたらしい。

日本では、95年に「あとに残された人へ 千の風」（三五館）として出版された。最近では、作家で作詞・作曲家の新井満さんが曲をつけて、自分で歌うCD「千の風になって」を制作した。

人の道（平成18年9月18日）

人の一生は、巡礼の旅路なり。

日ごと遍路は、遠き道あり、近き道あり。往く道もあり、もどり道あり。

巡礼の旅路は、巡り廻る道。

そして、巡り廻る旅路は、回帰と再生の繰り返し。

回帰は、人の振り返りなら、再生は旅立ちか。

法事において、焼香に行くことは回帰として、席に戻ることは、再生として。

立ち止まることなく巡り廻る旅路に、人生を任せることも巡礼の旅路なり。

振り返りは、じぶん自身を問うことなら、旅成ちは、今の一步を歩むこと。

白装束は、死に装束。生きて着る死に装束こそ、禅の教え。

杖は墓標の今日の旅路なり。

聖地を旅する人たちを巡礼者とするなら、遊行の人たちは、野を越え山を越え川を渡ってひたすらに歩きます。釈迦のように。きっと釈迦もこの言い伝えの中に生きていたのだらうと思います。釈迦の歩く姿は、年齢によっても大きくかわりますが、その最後は、ふる里を望んで横たわったことだ。死に場所として。しかし、そこが最後の地点であるとは思いません。

釈迦の時代、人生を四つの長さに区切っていたと言います。

まずは知識を吸収し、知識をじぶん自身のものとするために第一と考えました。そのためには、この目的に達し退けようとする誘惑を自己のうちに認めることが求められます。

《学生期（がくしょうき）》

次が、仕事に就き、結婚し、産まれた子どもを育みながら家庭を形成しながらも、両親や親しいモノの死を通して、先祖をまつり家族を守ることを憶える。第一番目が独り歩むことを強いられるとすれば、この二つめは、大勢の人物が登場して、自分を豊かにするのでしょうか。

《家住期（かじゅうき）》

三番目は、家族も巣立ちを迎える頃になり、そろそろ人生の完成を目指す時期ともいえ、漂泊の道に足を踏み入れ、独りになるための過程を模索いたします。それは、芸術・宗教・思索の道が見えてくるものの、孤高の世界が見えてはいるものの、元に戻って、家族の側で過ごすともいえます。《林住期（りんじゅうき）》

最後は、じぶん自身を灯明として、法を灯明として生きることが、聖者として生きていくということであり、もはや巡る道もなく、旅をしているという意識もない。これを遊行期というのですが、禅者は更に参ぜよ三十年と云い放ちます。

一生を越えて歩めというのか、一生どころか一〇〇〇年をも越えた禪者がいました。中国は南泉和尚です。彼には、もはや一人という概念も、南泉和尚という名前も越えています。死んで前の家の水田を耕す牛となるといった人です。

確かに、南泉和尚亡きあとでしょう。どこか畑や道ばたに牛となり、馬となって、草をはんでいる姿に接することを意識したとき、南泉が草をはんでいるのか、私が草をはんでいいるのか、私には解らない時があります？

そう言えば、禪のコトバに、「釈迦も弥勒も修行中」というコトバがありますが、釈迦は、過去の人、弥勒は、五十六億七千万年に出現する未来の人ですが、禪は、いつでも今・ここです。どうやら、これは、私が釈迦になり、弥勒になるほかはないのでしょうか……。

家族のなかで、人が生まれ、死んでいく場所こそ家だといわれていた頃、家は年々歳々変わらぬものとして在った。今は、帰宅して休むところとしての拠り所となっている。極端なことをいえば、子供もいないし、年寄りもいない家が、構造として出来上がっているともいえます。それは、子どもから取り残された、お年寄りだけがいる家の増加でもあるのでしょうか。人の命が生産され、人の命が廃棄される場所の役割が、家ではなくなり、人の命が消費される場所が家となったようにみえます。

生まれるようとする場所と死のうとする場所は、顔を持ちませんし、生まれた後と死んだ後の場所は、近づくこともできません。人は誕生と死の間だけ、家という拠り所を必要としているのでしょうか。

それでも、家に、人が住んでさえいれば、今でも、道は必要とされます。道だけは、人がいさえすれば、長く続いています。道はその家から始まります。隣の家に行く道。会社への道。学校への道。友達のうちへの道。仲間と集う場所への道と。

道により生かされている私は、その道に頼ってはいるものの、道は行く先を拒みませんし、その道を行きたどり得たとしても、道自身は何もしゃべりません。

老子は「もの有り、混沌として、天地に先立って生ず。音もなく、無にして、独立して、不変であり、十方に通じている。それは万物の母であり、仮に道という。真の名を付けるなら「大」という。大とは、逝くことであり、逝くとは、遠ざかることであり、遠ざかるとは返ってくることであり」といいます。その道は、あるがままを規範といたします。

道は、むなしいうつわと云えますが、くみ出しても尽きることはなく、自慢することもなく、争うこともなく、間違うこともなく、傷つけることもない。

ある僧が尋ねた。 「道とはどのようなものでしょうか」。

趙州和尚が答えた。 「その垣根の外にある」。

ある僧。 「その道のことではありません」。

趙州和尚。 「ではどの道のことだ」。

ある僧。 「大道のことです」。

趙州和尚。 「大道のことなら、長安の都に通じているよ」。

あまりにも有名な禅問答ですが、臨濟宗のとある老師は、「道というのも、もともとは、こっちの家からあちらの家に行く道なのですね。その道を修祓（しゅうふつ）する、ととのえ祓う、それが道徳ということです。」と言いました。

巡礼と回帰は、最少単位の人と人との出会いや、結びつきを現実的に反省し整える姿なのだと。大道とは、現実的に、反省し整える姿、そのモノ、真っ只中にあるのだと教えてくれています。

『人の道』と言うも、すべては今歩いている足元から始まります。私が歩くから道は存在すると同時に、歩いている私が無ければ、その道も存在しません。

どうも、我々は先を急いで、目的地を目指しますが、実は真の目的地は、目先ではなく歩くそのものなかに、あるがままにあると言えるのでしょうか。

あなたは、いつから、一年が始まりますか？（平成20年8月1日）

あなたは、いつから、一年が始まりますか？

（平成20年8月1日）

日本には一年に二度、大きな、そして人々が大移動する喜びの行事があります。

今はあまり使わない言葉かも知れませんが、「盆と正月が一緒に来たような」という言葉。実は、盆と正月とは、人々、民衆、そして家々の祖霊たちにとっては、盆と正月は里帰りによる喜びの対照の日々でした。

まず、正月の神様の起源は、柳田国男氏によれば、一年を守護する神、農作を守護する田の神、家を守護する祖先の霊、祖霊の三つを一つの神として祭った年神（としがみ）であるとしています。門松も床の間や仏壇に供える鏡餅も、神たちが降臨する依代（よりしろ）であり、降臨した後は、神そのものでもあり祖霊そのものでもあります。どちらの神や祖霊たちも、根本は、稲の豊作を祈願することを象徴として、死と再生の行事でもあり、だからこそ、一年の無事を祈り、生活の稔りを占うこととなります。この正月の神たちも、祖霊たちであることから、祖霊たちにとっては、山や川から家々に戻る喜びの日々であり、里帰りの行事ともいえるのです。

東京のお盆は七月です。毎年毎年繰り返し訪れる盂蘭盆の、お盆の意味は倒懸（とうけん）、逆さまという意味です。

その盂蘭盆の語源は、イランであり、死者の靈魂をウルヴァンと呼ぶことにあるといえます。“逆さまに吊された苦”と“死者の靈魂”の伝説が、遙か彼方の日本で実を結び、お盆の行事が生まれました。

もともとの意味は、逆さまに吊された靈魂を救うべく、僧を家々に招いて食事を提供することが、供養の中身であり、それが法事の原点です。これは、死者に対してお経をあげることが法事ではなかったことを意味いたしました。

その倒懸という逆さまの意味が薄れてきたのが現代のお盆という気がいたします。

家々に子供たちや親戚が一同に集う季節が、日本には二度あると最初に書きましたが、逆さまに吊された靈魂を救う意味が薄れてくれば、実は、逆さまに吊された苦そのものを活きている私達に、死者の靈魂を安らぎに見立てたとすると、逆の意味の内容となって考いることがうかがえます。すると、本来、家という癒し場所であるはずの、今は失おうとしている機能が見えてくるような気がいたします。

各地の盆踊りは、お盆様と共に踊ることや、帰ってきた喜び、仕事からの解放と様々です。するとこのお盆の四日間が喜びの日々であることから、その日以外が逆さまな状態を意識してしまうのです。お盆をわざわざ逆さまという意味にした理由は、そしてこの季節自体にも意味があるような気がいたします。

東京では、お盆が開けることは、あの長く暑い夏の到来を告げることと同じです。しかし、出

会いと別れということで考えたら、正月のように、一年の初めに喩えることも出来るものではないでしょうか。

お盆には、どんなものでもよいのですが、精霊棚（しょうりょうだな）を作ります。同時に、篠竹とか棚を組んでマコモのゴザを敷いて、四隅を竹や篠竹で飾って、縄で結び、鬼灯（ほおずき）や昆布などで飾ります。

お供え物は、まずは器の中に水を張り、みそはぎの花を浮かべたものです。また、水の子あるいは、水の実とも言い、茄子（なす）などを細かく切ったものを皿に供えたものです。なぜ茄子なのかというと、茄子の種は、数多くあり、それが108の煩悩の数にたとえられて、それを取り除くという意味があるからです。そして、そうめんを供えます。

そして、マコモやゴザの上には、茄子（なす）の牛、胡瓜（きゅうり）の馬です。なぜに馬と牛かと言うと、馬に乗って急いで来てもらい、牛の背にお土産をたくさん積んで、ゆっくり帰るという意味だそうです。亡き方々の乗り物ですから、13日は、内に向き、16日には外に向くとされています。

お盆にて迎えた精霊たちに対面して、どんなことを思えばよいのか、すればよいのか？

あの声、あの姿、あの匂い、あの年月は、私たちにとっても、この声、この姿、この匂い、この年月です。せめてこの期間だけでも、だから……………

あの声が聞こえなくとも、話しかけたい

あの姿が見えなくとも、食べものを供えたい

あの匂いの代わりに、香りを届けたい

そして、この年月の寂しさを、お花で飾りたい

生と死があるから、花々は実を結ぼうとし

迎えた朝は必ず夕暮れになろうとする

せめて、今、ここに、一緒にいることを祈り、灯りをともしつづけたい

そこで、祖霊たちに捧げる真の供物とはと考えてみると、その場所に立ち、私たちの確かな追憶によって、懐かしい親しみの人たちを、私たちの心の中に甦らせることだと気づくでしょう。

私たちがこのことを意識するなら、祖霊たちは私たちとともに生き続け、祖霊の心象は救われ、私たちの悲嘆が実り多いものになるように協力してくれるでしょう。

こうして精霊棚には、食べ物を象徴として多くの供物を捧げました。これは、人は、死して魂となっても、旺盛な食欲に支えられているものだとの気づきです。でもよく振り返ってみると、これは私たち活きている人間の貪欲さであり、気がつかないけれど、心の貧しさの原点です。このゆえに、お盆は、みずからじぶん自身を見つめ直す誓いでもあります。

お盆は、私たちの幸せを祈り、願う祖先たちの心痛を安らかにして、迷いの道から遠ざかることを祈り願うものでもあるのでしょうか。

されば、何よりも大切な心構えは、多くの祖先たちと、今を生きる私たちの、ともに幸せを語れる集いの場所がお盆であって欲しいと思います。

あなたは、いつから、一年が始まりますか？

さて、お盆の季節には、どうしても帰るという行為がつきまといまいます。八月の盆は、日本全国に繰り広げられる生きている者の、あちらから、こちらに、こちらから、あちらに移動します。

これは、生きている人たちも帰る、亡くなった者たちも帰る。帰ることは出逢いのためであり、ふたたび大移動が始まることは、一年という別れを意味いたします。

そのためか、盆の入りにはあちらこちらの家々で、迎え火が炊かれます。どこの家々も夕刻に炊かれます。明けの送り火が夕刻に炊かれるのは、一日の終わりとして、16日の夕刻に帰る足元を照らし、ちらちらと燃える火と烟により、また帰って行くという意味です。

送り火は炊かなければいけないものか、そんなことを考えます。でも、炊かなければならない。これは、共に生きる場所が違うということの意味しているのでしょうか。

おそらく、亡くなった者たちから見れば、お盆が終わって帰ろうとするとき、また戻ることが出来るだろうか、また戻っても喜んで迎えてくれるだろうか、迎えられる家族や家があるだろうか、そんなことを思いながら、一年が始まって行くのだろうと、彼らを送りながら思いを馳せます。

これには、待続けるという行為と離れていかなければならない自覚があるのでしょうか。しかし、おおかたの私たちは、そんなことを思いも及ばず、知らずに季節が巡ってきているはずです。待つこともないし、離れる自覚もないのではないかと思います。

私たちが16日に、祖霊たちを送った後に気づいたことがあります。

祖霊たちはどこに暮らしているのだろうと。古来からの言い伝えは山や川や海です。でも、ある人は、すぐ近くにいると言いますし、夢の中によく出てくるとも。ある人は、思ったこともないと、夢などにちっとも出てきたこともないと。

でも遺骸が納められたお墓の前に立ったとき、遺品を手にしたとき、遺影の視線に気がついたとき、そこから、天空や見えない世界に繋がっているような錯覚を覚えます。きっとその時、知らず相見（まみ）えているのではないかと。私の思いが彼方の世界に届けば、その思いを糧に、祖霊たちも季節を数え過ごしているでしょう。

亡くなって祀（まつ）られることは、いずれは一人という偲ぶ対照から、幾度となく繰り返されて、また盆を迎えるうちに、より大きな変容という普遍性を与えられて行くでしょう。

前住職 二十三回忌にて（平成20年9月1日）

トルストイの『人生論』に次の言葉があります。

「お前は、みながお前のために生きることを望んでいるのか、みんなが自分よりお前を愛するようになってもらいたいのか。

お前のその望みがかなえられる状態は、一つだけある。それは、あらゆる存在が自分よりも他を愛するようになる時だけだとしたら、お前も、一個の生ある存在として、自分自身よりも他の存在を愛さなければいけない。

この条件のもとでのみ、人間の幸福と生命は可能となり、この条件のもとでのみ、人間の生命を毒してきたものが消滅する。

存在同士の闘争も、苦痛の切なさも、死の恐怖も消滅するのである。

他の存在の幸福のうちに自分の生命を認めさえすれば、死の恐怖も永久に消え去ってくれる。

」

平成20年8月25日(火)、父の子ども達だけの家族で、夕方、父の二十三回忌法要を、執り行いました。本来の住職にたいする宗派式の法要とは違っていました。望んだことです。

鎌倉の円覚寺僧堂に在錫（ざいしゃく）している息子も呼んでの法要でした。次の世代の陽岳寺跡取りは、僧堂で様々なことを覚えてきたのか、立ち居振る舞い、気づかいと動きがすっかり雲水となっていることを嬉しく思いました。お経の始めや、回向（えこう）の読み上げを息子に託したのですが、回向文は、宗派のものを息子は読み上げました。その読み上げを聞きながら、私は、すっかりと安心した気持ちになっていることに気づきます。

その回向を読み上げる前に、私は、十七回忌に作った回向文も、前机にそろえて準備したのです。

回向という漢文をそのまま音読みにしても、言葉は伝わらないものですし、まして、人の心に考えさせ、波紋を広げさせることはできないものです。和尚の法要は、つねに”慈”という信（まこと）を捧げたかが問われます。それこそ一生を尽くして、”慈”の字を参究することが禅宗の和尚の努めだからです。

そこで、祭壇を前にして深く思うことは、真慈とは、総てを捧げ尽くした信（まこと）であり、これこそが人間の幸福であることと検証することが、和尚の法要となることです。だからこそ、その真慈に対して、三拝を繰り返します。その真慈を貫き通したことに、仏は、明らかにして、それこそがあるがままの姿であると示したまえと……言葉ではなくと……。

そんな法要を行いつつも、前住職である前に、私の父としてという思いもわき起こります。それには息子がその場に参加することは、今何よりも必要なことです。

父子唱和（ふししょうわ）という禅語があります。それは、瀧山（いさん）禅師と仰山（ぎょうざん）禅師が互いに問答を投げかけ合うことで、ことの真実を明らかにした様をあらわす言葉です。これをなぞらえて、瀧山が父ならば、仰山は息子のようでもあります。瀧山は息子のため

、仰山は父のため、真慈に対して応答して練り上げていきます。

父が遷化して22年、その孫が今修行に出かけて雲水として立つ姿に、巡り来たった、今日この時、陽岳寺にとっては真慈を尽くしたともいえることだと気づきました。人は死しても、会話が成り立つものだと、法要とは、回忌とは、彼岸とは、お盆とは、そうしたひとつの節目であって欲しい。

父が亡くなって2年がたったある日のことでした。父が選者をしていた短歌雑誌”沃野”の編集から父の追悼号を出したいからと、追悼文をたのまれました。沃野社は国民文学系と聞き、窪田空穂さんと仲間の植松寿樹先生が創刊した月刊誌で、父は、植松先生の教え子でした。原稿用紙何枚だったか忘れましたが、以下はその抜粋です。

《昭和58年10月6日、朝、父の兄が亡くなる。兄が病床について、私たちは一回の見舞いを除いて、なるべく伝えることを避けていた。父と母を車に乗せて、鎌倉に弔問に出かけた時のことは消えない思い出となり、母と私の脳裏に強く焼き付いている。冷たくなった兄の枕辺に、父が両手をつき、無言にうなだれていた姿を……。先に旅立った兄を前に、父は何を思い、何を伝え、何を願ったのか、今は知るよしもない。ただ、時間の止まったその光景だけが、ハッキリと残った。

父は長い下り坂を、一人転げ落ちているかのように、時折、手を差し伸べた。母はそっと手を取り、いつまでもさすっていた。遠くをじっと見つめている時があった。そんな時、母は一緒に黙って遠くを見つめた。母は父のことを、まるで子供のようだといいた。時は悪く過ぎていった。

昭和60年3月16日、父にとっては内孫の、私にとっては初の男の子が生まれた。それは赤ら顔でシワのある四千^ろを超えた大きな子だった。早く父に見せたかった。そして抱いてもらいたかった。病院から長男が母子共に退院したその日、父に報告し、私の妻が産衣にくるまれた赤子を、そっと父の前に差し出すと、父の顔が穏やかになり、両手を差しのぼす。私の母がするごとく、赤子を抱いた父の肩に手を添え、私は父を抱いた。

7月14日、父が入院した。昨日からの熱でグーグーといびきをかいて眠る。肺炎を起こしたのだ。母が動揺している。この夏は暑かった。

翌年の昭和61年8月12日、零時6分、父が母に見守られて、その腕の中で息を引き取った。父の生涯が終わったのだ。15日に葬儀のすべてが終わったが、夕刻ホッとしていると、前の三角公園から盆踊りの声が続いて聞こえていた。そして翌日は、富岡八幡宮の祭り囃子がこだましていた。父よありがとう。きっと、家族のそれぞれの拠り所として、心のうちに、ずっと生き続けるだろう。》

思い出してみれば、父が亡くなる何年か前に、父の親しい人が何人か亡くなっている。

「大阪の友喪ひし日昏なりわが義兄死にし」と詠んだが、その時、父を病魔がむしばんでいたのだ。義兄の死は、昭和58年6月4日のことだった。父と義兄とは、囲碁相手でもあり、また、話し相手でもあった。よく義兄が遊びに来ると、日長一日、碁をしたりビールを飲んで過ごして帰っていったものだ。父もそれと同じことを、義兄の住んだ船橋でしたことだった。通夜・告別式と無事にお弔いを終えての帰りです。

「義兄の死をいたわり呉るる点滅か黒々と更ける夜のラ・ラポート」と歌った。

それは湾岸道路沿いの広大な船橋ヘルスセンター跡地に、東洋で最大と銘打って出現した、ショッピングセンターのシンボルタワーのきらめきを、目にしたときの歌だった。私が幼いとき、父に連れられ、水が怖くて泣き、父の胸にすがりついたことがある海辺でもあった。と同時に、私の最後のサラリーマン時代も、何故かこの場所に縁があった。

それは、この”ららぽーと”のオープン前の商調協の対策時代から、オープンして一年、運営がスムーズに動くのを見届けるまでが私の仕事だったからだ。建設中の財務諸表や収益モデル、モール店や旗艦店とのPOSシステムのコンピュータシステム、大型店を含めて固定資産の分離作業、それにオープンしてからは、資金の回収と分配作業と休むことができない日々を過ごした場所でもあったからです。

父が、義兄の死であっても、ららぽーとと歌ってくれたことが懐かしく思ったものです。

その病魔に対し、「薬飲めば直る病ひと聞かされて暗に直ると自ら治む」と詠んだが、これ以降の父の残したノートには白紙が続いていた。

冒頭に、トルストイの人生論から掲げた言葉に、父だった住職がどこまで幸福に迫れ切れたか分かりませんが、和尚という立場に立たれた限りは、優れて築き上げた気高さとして、ひとえに、自分のすべてを滅ぼして、ただ人のためだけに、ただ相手の中にだけ生きようとする心に心がけたことを思います。

それは、父に接する人の目や耳や鼻や口や皮膚ですべてを受け止め、父に接する人の胸で呼吸し、人の頭で考え、人の心で感じることを、修めようとする試みです。このことによって初めて人間は、他人の幸福を引き寄せて自分自身のものにすることができます。

だからこそ、法要において、今日、集う殊勲は、この真慈を捧げ、共に、この気品に包まれることをと、祈念するのです。

お施餓鬼会を振り返って（平成21年6月1日）

平成21年5月23日、陽岳寺のお施餓鬼が、今年も無事厳修できましたこと、心よりお礼申し上げます。

たとえ、あの人たちの声が聞こえなくとも、今、話しかけたい。
たとえ、あの人たちが食べなくとも、好きだったものをお供えしたい。

昨年のお施餓鬼の後の役員会のときでした。陽岳寺の次の世代が修行の道場に上がってから一年が経っていたときです。「護善会会員から、袈裟とか衣とか、何か応援したいと思うけれども、どうでしょうか」と聞かされました。平成19年11月末、M子さんから、次の世代のためにと、袈裟や衣料として使って下さいと寄付がありました。そして20年の2月半には、Kさんから同じように寄付がありました。このお二方も、次の世代の帰還を楽しみにしていたのですが、今は、すでに故人となっています。昨年12月半ばには、総代のNさんの奥様が、寄付金を持参して頂きました。

考えてみれば、一人前の和尚として、季節の袈裟や衣をひとそろえ新調しようと思えば、上限はきりがありません。あるもので過ごすのが禅宗らしいと思うのですが、こうしたことを思ってもらえる、考えてくれる、動いてくれること事態が有り難いことです。

その上、今年のお施餓鬼の冒頭、挨拶に立った檀家総代のYさんの口から、陽岳寺の次の世代が、3年以上の修行の末、来年の7月末には帰ってくるだろうと告げられました。そこで、その次の世代のために私たち一人一人も、全員が何かできることをしたいと話されました。「会員一人一人全員が、ほんの少額でも寄進して頂き、新しい袈裟や衣となって身にまどってくれたら嬉しく思う」と。
この言葉は、昨年11月末のご祈祷のときの挨拶にもありました。その祈祷会が終わって一週間が過ぎた頃、総代のYさんが心筋梗塞で入院したと、やはり総代のUさんから連絡が入りました。

驚いて心配していましたが、12月の末に手術が成功したことを、病院からYさんの喜ぶ声で電話がありまして、ホッとしたことは記憶に新しいことです。その後、リハビリを続け、今年の1月末には退院したことを娘さんの口からお聞きしていました。

大腿部の血管を心臓の血管につなげるという大手術の生還でした。「千葉の中央メディカルセンターの医療技術は、日本でも指折りの数に入るほど」という、喜びと褒め言葉を聞いてから、すでに4ヶ月が過ぎていました。お施餓鬼の当日、そのYさんの左足はパンパンにむくんで、そのむくんだふくらはぎから大腿部に向かって傷跡が長く続いていました。杖を使い、足の歩みはおぼつかなくなっていました。それでも、強い意志は健在でした。お施餓鬼が終わって、翌々日には、「本当は、役員が、参加されたお檀家さんのお世話をしなければならないのに、言葉が足らず行き届かなくて」と電話があり、檀信徒と陽岳寺に対する熱意に頭が下がりました。

たとえ、あの人たちの喜ぶ顔が見えなくとも、お花をお供えしたい。
たとえ、あの人たちの姿が見えなくとも、手を合わせたい。

その施餓鬼は、56億7千万年後に出現するであろう弥勒菩薩を待てない、一年に一回の試みです。誰が考えたのか、56億7千万年という数字は、出現しないという数字に思えます。何故5, 6, 7と続く、その出現しない数字を、出現するのだと信じる気持ちがある、こうして2, 600年以上にわたって続けていることを驚きます。

陽岳寺においても、370年にわたって続けていることを思えば、この重みは、何百人、何千人、何万人の願いや祈りがあり、同じ数の不幸や不運が繰り返されて、乗り越えてきた歴史です。

ここから、これは辛抱と忍耐、そして精進という言葉が導きだされるのでしょうか。お施餓鬼の法要の中身を、我々はなかなか知らないものです。形にしてしまうと心が忘れられ、伝わって来なくなるからです。法要に参加している和尚も、中身が薄れてしまうと、ただ、お経を読んでいるだけに見えてきますから不思議です。

「仏は、きびしさや一途さという我が心の鬼を造り、鬼は、優しさや受け容れるという我が心の仏を造る」ともいえるお施餓鬼会に、参加した一人一人に親しくお話しを聞かなければならないのですが、できないことに心苦しく思います。

もう、あの人たちと巡り逢うことができないから、何度でも、お香を献じたい。
もう、あの人たちと巡り逢うことができないけれど、何度でも、感謝を捧げたい。

心臓にペースメーカーを入れ、ガンが何度か発病し、危篤を乗り越えて「四つの病気を抱えて、来年は来ることができるか」、そんなことを思いながらも、参加してくれるお年寄りも、一期一会です。

そうかと思うと、足を悪くして行けなくなってしまったと電話で残念の思いを語る、90歳を優に超えた女性もいます。その方が90歳になったとき、「80代はまだ良かったが、90代半ばになって、辛い」という言葉には、未経験ゾーンというより、生涯わかりえない言葉もあるのだと思ったものです。このことで寝込んでしまうのかと脳裏によぎります。今までも乗り越えてきたではないかと無事を願っています。

いつもは夫婦二人で参加していたのに、「奥様は？」に、「妻がガンでリンパ節を切除したのですが、広がってしまって」と語る顔は、人生の様々なことを二人して乗り越えて歩んできた道の非情さと、それでも現実を受け入れて歩まなければならない道が思い浮かびます。

父を亡くして母に「これからは貴方がお寺のことを尽くすのですよ」と守って、家族を背負ってお寺に来る若い男性の、落ち着いて、穏やかに一生懸命に勤める清々しさは、こちらまでも洗われるようです。

「お寺のすることが好きだから」と父から連絡があり、お施餓鬼に通ってくる若い男性には、「有り難う」と。思いだして見れば、この子の祖父や祖母が鉄砲洲に住んでいた頃、この祖父や祖母、伯父もそうだった。お寺に来ては長話をしていただいていたことを思い出します。これは、変わらない家族のDNAなのか。

連絡も入れずに、当日、突然に訪れる人や、昨日振り込んだからと言って来る人。

「母が寝たきりになり、お寺に行けません。」と、娘さんの必死な声で「お願いしますね」と……。

この法要に参加する一人一人の思いは、一人として同じものではありません。お施餓鬼の法要に、見つめる目、聞き取ろうとする耳は真剣です。法要の言葉に、式場がシーンとして、これは陽岳寺の法要が大きく変わってきたことの証しです。生きている人に誕生日があるように、亡くなったものに年忌があり、その変わった内容を聞き漏らさないようにと、真剣さが伝わってまいります。

私の中に脈々と流れる尊い血という歴史。今・ここに、いっしょに、いるから……。

ここから、尊い私が、生まれた。

ジテンキジンシュー 我ら、汝等に、この食を、施さん。

今年も、親しかった家族から切り離された多くの先に旅立たれた人への思いと、すべてを残して旅立っていた人の思

いを、お施餓鬼の法要は、結びつけたと信じています。

虹の彼方に（旧陽岳寺ホームページ・エッセイ集）

<http://p.booklog.jp/book/16920>

著者：素山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sozan/profile>

発行所：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/16920>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/16920>